高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ

博　多

－ 高速鉄道関係調査(4) －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集

1988

福岡市教育委員会

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ

博　多

－ 高速鉄道関係調査(4) －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第193集

1988

福岡市教育委員会

8150

1.　呉服町Ｂトレンチ出土金銅仏

8150

2. ＳＫ03

8150

3. ＳＫ07出土遺物

363、355
354、357、351

4. 247、414、246 550
89、68

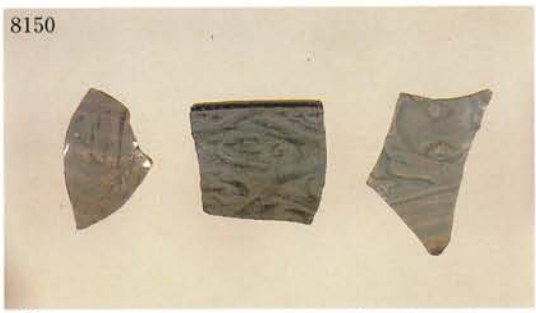
8. 534

5. 539、33

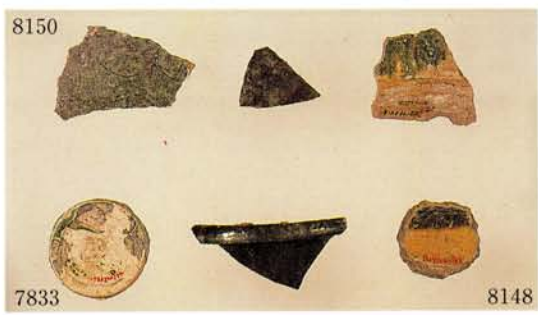
9. 162

6. 499、242
395、238
544

10. 248



7. 543、542、240



11. 161、251、252
2197、1477 98

序

福岡市教育委員会では、交通局の委託を受け、昭和51年以来路線内遺跡の調査と出土遺物の整理作業を行なって参りました。発掘調査は昭和59年度に、整理作業も昭和62年度をもって完了いたしました。

本書は地下鉄１号線関係の博多遺跡群と２号線関係の博多遺跡群、箱崎・馬出遺跡群について報告するものです。

博多および箱崎地区は、中世、対外交渉の窓口として日本の歴史の上で特異な発展をとげてきました。貿易陶磁をはじめとする多量かつ多様な出土遺物がそれを物語っています。

この報告書が埋蔵文化財への認識を深める一助となり、また研究資料としても活用いただければ幸甚に思います。

発掘調査から資料整理に至るまで、指導委員の先生方をはじめ交通局関係者など多くの方々のご協力に対し深甚の敬意を表します。

昭和63年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤　善郎

例　　言

1. 本報告書は、福岡市交通局（旧高速鉄道建設局）が福岡市教育委員会に委託した、高速鉄道（地下鉄）建設地内における埋蔵文化財発掘調査の報告書の第7冊目で、「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告　Ⅶ」とする。1号線関係博多遺跡群の調査と、2号線関係博多遺跡群、箱崎・馬出遺跡群の調査について収録する。
2. 題字は、故筑紫豊先生の揮毫による。
3. 本文中で用いている貿易陶磁の分類は、すべて「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ　博多　1984年　別冊）に拠っている。
4. 本報告書で用いた遺構略号は、SK＝土壙　SD＝溝　SE＝井戸　SP＝柱穴　SS＝集石遺構　SX＝不明遺構である。一部整理後遺構の性格の違いが見られたが、あえて旧遺構略号を用いている。
5. 本文の執筆は浜石哲也、小畑弘己、池崎譲二が行い、編集は折尾学、浜石、小畑の協力を得て池崎が行った。
6. 遺構の実測は、浜石、池崎、信行千尋、日野孝司、大橋隆司、岩切幹嘉、井手透、吉田健一、大野淳一郎、上山千重、山口美矢、樋口一明、柴田喜瑞、坂本真二、香月聡が行った。
7. 遺物の実測とトレースは、森本、仲道美津代、田崎真理、中野純江、入江のり子、撫養久美子、池崎、小畑が行った。
8. 写真撮影は現場関係を折尾、浜石、池崎、白石公高、宮島成昭が、遺物写真は白石彰、井上靖崇の協力を得て白石が担当した。
9. 遺物、図面整理には以下の方々の手を煩した。
   木村厚子、仲道美津代、里村寿子、山田由美子、江藤百合子、有島美江、伊藤裕子、楢崎多佳子、田尻寿麻子、今村淳子、田子森牧子、豆田陽子、下尾美成子、撫養久美子、近藤聡子、的場由利子、能美須賀子、竹下ひろみ、西原年枝、古谷宏子、萩尾朱美、安武智子、森本朝子、田崎真理、入江のり子、西嶋南紗子、日高さゆり、浜砂美津代、佐々野彰子、高原由季、中野純江、森福ひでみ、伊崎マサ子
10. 本報告書作成にかかる遺物整理は、福岡市教育委員会における「埋蔵文化財資料の整理・収蔵要項」に従っており、遺物実測図等に付した番号は遺物個体の登録番号である。これらの資料は福岡市埋蔵文化財センターで一括保管される。実測図，写真図版ページ上部に付した4桁番号は遺跡調査番号である。

本 文 目 次

I　高速鉄道路線内遺跡調査概要 …… 1

II　高速鉄道関係調査　博多（4）

第1章　博多遺跡群における発掘調査の概要 …… 6

第2章　祇園町工区本体部の調査 …… 9

1．　H・I・J区の調査 …… 9

2．　夜間調査区の調査 …… 53

3．　L・M区の調査 …… 61

4．　N・O・P区の調査 …… 78

5．　Q区の調査 …… 89

6．　まとめ …… 95

第3章　祇園町工区4号出入口の調査 …… 97

第4章　祇園町工区5号出入口の調査 …… 107

第5章　祇園町工区P_2出入口の調査 …… 121

第6章　博多駅前工区の調査 …… 129

第7章　呉服町工区本体部の調査 …… 131

第8章　呉服町工区換気塔部の調査 …… 145

第9章　呉服町工区出入口の調査 …… 151

1．　A出入口の調査 …… 151

2．　B出入口の調査 …… 165

3．　C出入口の調査 …… 175

III　高速鉄道関係調査　箱崎・馬出遺跡群 …… 195

挿 図 目 次

Fig. 1 路線内遺跡地図……P 2
Fig. 2 博多遺跡群地形図……折り込み
Fig. 3 1号線関係調査区全体図……折り込み
Fig. 4 H区 SK03・SK14・SK17・18……P 10
Fig. 5 H・I・J区遺構全体図（上部検出遺構）……付図 I
Fig. 6 H・I・J区遺構全体図（下部検出遺構）……付図 I
Fig. 7 H・I区土層断面図……付図II
Fig. 8 H区 SK01・SK02・SK19A・SK19B・SK33……P 11
Fig. 9 H区 SK16・SD01……P 12
Fig. 10 I区 1号墓・2号墓・SK04・SK05……P 13
Fig. 11 I区 SK06・SK12・SK13・SK25……P 14
Fig. 12 I区 SK26・SK27・SK29・SK39……P 15
Fig. 13 H区 SK01・SK03・SK04・SK05 出土遺物……P 16
Fig. 14 H区 SK07 出土遺物（1）……P 17
Fig. 15 H区 SK07 出土遺物（2）、SK08・SK10・SK14 出土遺物……P 18
Fig. 16 H区 SK15 出土遺物、SK17 出土遺物（1）……P 19
Fig. 17 H区 SK17 出土遺物（2）……P 20
Fig. 18 H区 SK23 出土遺物……P 21
Fig. 19 H区 SK24・SK25・SK26・SK28・SK31・SK33・SK34 出土遺物……P 22
Fig. 20 H区 SK37・SK39・SK40・SK41・SK42・SK43・SK44・SK46 出土遺物……P 23
Fig. 21 H区 SK47・SK48・SK49 出土遺物……P 24
Fig. 22 H区 SK51・SK52・SK53・SK54・SD01 出土遺物……P 25
Fig. 23 H区 SD03 出土遺物……P 26
Fig. 24 H区遺構外（包含層）出土遺物（1）……P 27
Fig. 25 H区遺構外（包含層）出土遺物（2）……P 28
Fig. 26 H区遺構外（包含層）出土遺物（3）……P 29
Fig. 27 H区遺構外（包含層）出土遺物（4）……P 30
Fig. 28 H区遺構外（包含層）出地遺物（5）……P 31
Fig. 29 H区遺構外（包含層・表土）出土遺物（6）……P 32
Fig. 30 H区遺構外（表土）出土遺物（7）……P 33

Fig. 31 I区SK01・SK02出土遺物 …… P 34
Fig. 32 I区 SK04出土遺物とSK05出土遺物（1） …… P 35
Fig. 33 I区SK05出土遺物（2）、SK06出土遺物 …… P 36
Fig. 34 SK11・SK12出土遺物 …… P 37
Fig. 35 I区SK13出土遺物 …… P 38
Fig. 36 I区SK14出土遺物とSK15 出土遺物（1） …… P 39
Fig. 37 I区SK15出土遺物（2）とSK16・SK23出土遺物 …… P 40
Fig. 38 I区SK24・SK26・SK29出土遺物 …… P 41
Fig. 39 I区SK29・SK31出土遺物 …… P 42
Fig. 40 I区SK33・SK36出土遺物とSK39出土遺物（1） …… P 43
Fig. 41 I区SK39出土遺物（2）とSK40出土遺物 …… P 44
Fig. 42 I区SK42・SK43出土遺物とSK44出土遺物（1） …… P 45
Fig. 43 I区SK44出土遺物（2）、1号墓出土遺物、遺構外（包含層）出土遺物（1）… P 46
Fig. 44 I区遺構外（包含層）出土遺物（2） …… P 47
Fig. 45 I区遺構外（表土）出土遺物（3） …… P 48
Fig. 46 I区遺構外（表土、攪乱）出土遺物（4） …… P 49
Fig. 47 J区SK02・SK07出土遺物 …… P 50
Fig. 48 J区SK09・SK15・SK16出土遺物 …… P 51
Fig. 49 J区遺構外（表土）出土遺物 …… P 52
Fig. 50 夜間調査区SK03・SK29・SK32・SK54 …… P 54
Fig. 51 J・K・L区夜間調査区 …… 付図III
Fig. 52 夜間調査区SK49・SK65・SK67 …… P 55
Fig. 53 夜間調査区SK02・SK03・SK07・SK08・SK09・SK10・SK13・SK15出土遺物 …… P 56
Fig. 54 夜間調査区SK27・SK28・SK29・SK32・SK45・SK49出土遺物 …… P 57
Fig. 55 夜間調査区SK54・SK58出土遺物 …… P 58
Fig. 56 夜間調査区SK62・SK65・SK67・SK70・SK73・SK74出土遺物と遺構外出土遺物（1） …… P 59
Fig. 57 夜間調査区遺構外出土遺物（2） …… P 60
Fig. 58 L区SK03・SK04・SK06・SK11・SK14 …… P 62
Fig. 59 L・M区遺構全体図 …… 付図III
Fig. 60 L区SD03・SK05・SK09・SK12 …… P 63
Fig. 61 M区SK06・SK08・SK09・SK10 …… P 64

Fig. 62 M 区 SK02・SK04・SK05・SC01 …… P 65
Fig. 63 L 区 SK02・SK03・SK04・SK05 出土遺物 …… P 66
Fig. 64 L 区 SK08・SK11・SK12 出土遺物 …… P 67
Fig. 65 L 区 SK14・SK15 出土遺物 …… P 68
Fig. 66 L 区 SK16・SK18・SK19 出土遺物 …… P 69
Fig. 67 L 区 SD03 出土遺物（1） …… P 70
Fig. 68 L 区 SD03　出土遺物（2）、SC01 出土遺物 …… P 71
Fig. 69 L 区 遺構外（包含層）出土遺物（1） …… P 72
Fig. 70 L 区 遺構外（包含層、表土）出土遺物（2） …… P 73
Fig. 71 M 区 SK04・SK05 出土遺物 …… P 74
Fig. 72 M 区 SK06・SK07・SK08・SK09 出土遺物 …… P 75
Fig. 73 M 区 SK10・SK11・SK12・SK13 出土遺物 …… P 76
Fig. 74 M 区 SK15・SD05 出土遺物と遺構外（包含層）出土遺物 …… P 77
Fig. 75 N・O・P 区遺構全体図 …… 付図Ⅲ
Fig. 76 N 区 SC01・SC02・SC03・SK08 …… P 79
Fig. 77 N 区 SD03・SK02・SK03 …… P 80
Fig. 78 O 区 SK11・SK12・SK13・SK14・SK17 …… P 81
Fig. 79 O 区 SK15・SK20 …… P 82
Fig. 80 N 区 SK01・SK02・SK03・SK05・SK08・SD01 出土遺物 …… P 83
Fig. 81 N 区 SD02・SD03・SC02・SC04 出土遺物 …… P 84
Fig. 82 O 区 SK07・SK08・SK11・SK12・SK13 出土遺物 …… P 85
Fig. 83 O 区 SK13・SK15・SK17・SK18・SK20 出土遺物 …… P 86
Fig. 84 O 区 SK24・SK25・SK29 出土遺物 …… P 87
Fig. 85 O 区 SD01・SD02 出土遺物、遺構外出土遺物 …… P 88
Fig. 86 Q 区 SK01・SK04・SK05・SK07 …… P 90
Fig. 87 Q 区遺構全体図 …… 付図Ⅲ
Fig. 88 Q 区 SK08 …… P 91
Fig. 89 Q 区 SK01・SK03・SK04・SK05・SK08・SK10・SK11 出土遺物 …… P 92
Fig. 90 Q 区 SK12・SK13・SK14・SD01 出土遺物と遺構外（包含層）出土遺物（1） P 93
Fig. 91 Q 区遺構外（包含層）出土遺物（2） …… P 94
Fig. 92 祇園町 4 号出入口遺構全体図 …… P 98
Fig. 93 4 号出入口 SK01・SK02 出土遺物 …… P 99
Fig. 94 4 号出入口 SK03・SK05 出土遺物 …… P 100

Fig. 95　4号出入口 SK06・SK08・SK09 出土遺物 …… P 101
Fig. 96　4号出入口 SK10・SK11 出土遺物と SK12 出土遺物（1） …… P 102
Fig. 97　4号出入口　SK12　出土遺物（2）と SK17　出土遺物、遺構外（包含層）出土遺物（1） …… P 103
Fig. 98　4号出入口遺構外（包含層、攪乱）出土遺物（2） …… P 104
Fig. 99　4号出入口遺構外（攪乱層）出土遺物（3） …… P 105
Fig. 100　5号出入口 SC01 …… P 108
Fig. 101　祇園町5号出入口遺構全体図 …… 付図Ⅳ
Fig. 102　5号出入口1号墓・2号墓・3号墓と3号墓出土遺物 …… P 109
Fig. 103 …… P 110
Fig. 104　5号出入口 SK01・SK02・SK03・SK04・SK06・SK07 出土遺物 …… P 111
Fig. 105　5号出入口 SK08・SK09 出土遺物 …… P 112
Fig. 106　5号出入口 SK10・SK12・SK15 出土遺物 …… P 113
Fig. 107　5号出入口 SK16 出土遺物 …… P 114
Fig. 108　5号出入口 SK18・SK22・SK25・SK26・SK27 出土遺物 …… P 115
Fig. 109　5号出入口 SK28・SK29 出土遺物 …… P 116
Fig. 110　5号出入口遺構外出土遺物（1） …… P 117
Fig. 111　5号出入口遺構外出土遺物（2） …… P 118
Fig. 112　房州堀推定地 …… P 121
Fig. 113　P2 出入口 SK04・SK07 と SK12 出土遺物 …… P 122
Fig. 114　P2 出入口遺構全体図 SD04 土層断面図 …… 付図Ⅳ
Fig. 115　P2 出入口 SK11・SK17 と SK11 出土遺物、SK17 出土遺物（1） …… P 123
Fig. 116　P2 出入口 SK32・SK34 と SK17・SK32・SK33 出土遺物 …… P 124
Fig. 117　P2 出入口 SK36・SK37・SD03・SD04 出土遺物と遺構外（包含層）出土遺物（1） …… P 125
Fig. 118　P2 出入口遺構外（包含層）出土遺物（2） …… P 126
Fig. 119　駅前工区全体図 …… P 130
Fig. 120　駅前工区土層図 …… 付図Ⅴ
Fig. 121　2号線関係調査区配置図 …… P 132
Fig. 122　呉服町トレンチ土層図 …… 付図Ⅵ
Fig. 123　A トレンチ　出土遺物（1） …… P 133
Fig. 124　A トレンチ　出土遺物（2） …… P 134
Fig. 125　A トレンチ　出土遺物（3） …… P 135

Fig. 126　B トレンチ　E-I-a 区　検出遺構（1/40）……P 136
Fig. 127　B トレンチ　出土遺物（1）……P 137
Fig. 128　B トレンチ　出土遺物（2）……P 138
Fig. 129　B トレンチ　出土遺物（3）……P 139
Fig. 130　B トレンチ　出土遺物（4）……P 140
Fig. 131　B トレンチ　出土遺物（5）……P 141
Fig. 132　朝日生命換気塔調査区土層図（1/60）……P 146
Fig. 133　朝日生命換気塔調査区位置……P 146
Fig. 134　大水道位置図……P 146
Fig. 135　B 換気塔調査区土層図（1/60）……P 147
Fig. 136　B 換気塔調査区図……P 147
Fig. 137　B 換気塔出土遺物……P 148
Fig. 138　呉服町工区出入口調査地点……P 154
Fig. 139　呉服町工区 A 出入口遺構全体図……P 155
Fig. 140　A 出入口 SK01・SD01・SD01・SD03……P 156
Fig. 141　A 出入口 SD02……P 157
Fig. 142　A 出入口 SD04・SD05……P 158
Fig. 143　A 出入口 SD01 出土遺物……P 159
Fig. 144　A 出入口 SD02 出土遺物と SD03 出土遺物（1）……P 160
Fig. 145　A 出入口 SD03・SD04・SD05 出土遺物と SD07 出土遺物（1）……P 161
Fig. 146　A 出入口 SD07　出土遺物（2）と SK01 出土遺物……P 162
Fig. 147　A 出入口 遺構外出土遺物（1）……P 163
Fig. 148　A 出入口 遺構外出土遺物（2）……P 164
Fig. 149　B 出入口 土層図……P 165
Fig. 150　B 出入口 遺構全体図……P 165
Fig. 151　B 出入口 SK01・SD01……P 166
Fig. 152　B 出入口 SK01・SK09・SK10・SK11・SD01 出土遺物と遺構外（包含層）出土遺物（1）……P 167
Fig. 153　B 出入口遺構外（包含層）出土遺物（2）……P 168
Fig. 154　B 出入口遺構外（包含層）出土遺物（3）……P 169
Fig. 155　B 出入口遺構外（包含層）出土遺物（4）……P 170
Fig. 156　B 出入口遺構外（包含層）出土遺物（5）……P 171
Fig. 157　B 出入口遺構外（包含層・表土）出土遺物（6）……P 172

Fig. 158　呉服町工区 C 出入口遺構全体図（1/100）……P 173
Fig. 159　C 出入口西壁土層断面図……P 173
Fig. 160　C 出入口 SD03・SK03……P 174
Fig. 161　C 出入口 SE03・SE16・SE13・SE14・SE15・SE17・SE18……P 175
Fig. 162　C 出入口 SK01・SK02 出土遺物と SK02・SK03……P 176
Fig. 163　C 出入口 SK03 出土遺物……P 177
Fig. 164　C 出入口 SK11 と SK11 出土遺物……P 178
Fig. 165　C 出入口 SE01、SE03、SE04、SE05、SE07 出土遺物……P 179
Fig. 166　C 出入口 SE08・SE09・SE14 出土遺物……P 180
Fig. 167　C 出入口 SE15・SE16・SE17・SE18・SD02 出土遺物……P 181
Fig. 168　C 出入口 SD03 出土遺物（1）……P 182
Fig. 169　C 出入口 SD03 出土遺物（2）……P 183
Fig. 170　C 出入口 97 号ピット、石組遺構出土遺物と遺構外（包含層）出土遺物（1）　P 184
Fig. 171　C 出入口遺構外（包含層）出土遺物（2）……P 185
Fig. 172　C 出入口遺構外（包含層・攪乱）出土遺物（3）……P 186
Fig. 173　C 出入口遺構外（攪乱）出土遺物（4）……P 187
Fig. 174　箱崎馬出遺跡群と調査区位置図……P 197
Fig. 175　馬出東工区 1～7 ブロック遺構全体図……付図Ⅶ
Fig. 176　馬出東工区 8，11，12 ブロック遺構全体図……付図Ⅶ
Fig. 177　馬出東・西工区 9、10 ブロック遺構全体図……付図Ⅷ
Fig. 178　SE12・SE13・SE14・SE18・SE19……P 199
Fig. 179　SE12・SE13 出土遺物……P 200
Fig. 180　SE13・SE14・SE18・SE25 出土遺物……P 201
Fig. 181　SE25・SE28・SE33・SE42……P 202
Fig. 182　SE30・SE33・SE35・SE36・SE37・SE38・SE39・SE40・SE41……P 203
Fig. 183　SE18・SE19・SE28・SE35 出土遺物と SE30・SK203・SK303 出土遺物　…P 204
Fig. 184　SK30・SK59・SK203 と 1 号中世墓……P 205
Fig. 185　SD12・SE13 と SX01……P 206
Fig. 186　SD01・SD12・SD13 出土遺物……P 207
Fig. 187　SD13 出土遺物……P 208
Fig. 188　SD13・SX01・SS01・SS02 出土遺物……P 209
Fig. 189　SS01……P 210
Fig. 190　SK121・SK145・SK180・SK196 と SX02・SX07・SX08・SX10……P 211

Fig. 191　SK04・SK07・SK08・SK10・SK16・SK21 出土遺物 …… P 212
Fig. 192　SK21・SK70・SK83・SK85・SK90・SK97・SK112・SK113・SK127・SK143 出土遺物 …… P 213
Fig. 193　SK143・SK164・SK194・SK266・SK273・SK302・SK308・SK315 出土遺物 …… P 214

写真図版目次

巻頭図版　1．呉服町Ｂトレンチ出土金銅仏　2．呉服町Ｃ出入口 SK03　3．SK03 出土遺物　4．象嵌青磁　5．青磁　6．青磁　7．青磁　8．青白磁　9．天目碗　10．天目碗　11．緑釉・三彩

PL.　1　博多遺跡群遠景
2　1．Ｉ区調査風景　2．Ｉ区調査風景　3．夜間調査区表土剝ぎ風景
3　1．Ｎ区調査風景　2．Ｌ区調査風景　3．Ｑ区調査風景
4　1．H-Ｉ区全景　2．H-Ｉ区全景
5　1．H-Ⅲ区全景　2．H-Ⅲ区全景
6　1．Ｈ区 SD01　2．Ｈ区 SD01
7　1．Ｈ区 SK07　2．Ｈ区 SK07　3．Ｈ区　SK07
8　1．I-Ｉ区下面　2．I-Ｉ区上面
9　1．I-Ⅱ区下面全景　2．Ｉ区 SD01
10　1．Ｉ区 1 号墓　2．Ｉ区 2 号墓
11　1．Ｉ区 SK25　2．Ｉ区 SK28、29、30　3．Ｉ区 SK29 遺物出土状況
12　1．Ｌ区 SK14　2．Ｌ区 SK14 遺物出土状況
13　1．M-Ⅱ区全景　2．Ｍ区 SC01
14　1．Ｎ区 SC01　2．Ｎ区 SC03　3．Ｎ区 SC03
15　1．Ｎ区 SD02、03、SK01　2．Ｎ区 SD02、03
16　1．Ｎ区 SD03 遺物出土状況　2．Ｎ区 SK01　3．Ｎ区 SK02　4．Ｎ区 SK05
17　1．Ｏ区 SK11　2．Ｏ区 SK15
18　1．Ｑ区遺構全景　2．Ｑ区 SK01　3．Ｑ区 SK07
19　1．祇園町工区出土遺物 (1)
20　1．祇園町工区出土遺物 (2)
21　1．祇園町工区出土遺物 (3)

22　1．祇園町工区出土遺物（4）
23　1．4号出入口遺構全景　2．4号出入口遺構全景
24　1．4号出入口出土遺物
25　1．5号出入口調査風景　2．5号出入口 SC01
26　1．5号出入口　1号墓　2．5号出入口　2号墓
27　1．5号出入口　3号墓　2．5号出入口　3号墓遺物出土状況
28　1．5号出入口出土遺物（1）
29　1．5号出入口出土遺物（2）
30　1．P_2 出入口　A 区調査風景　2．P_2 出入口全景
31　1．P_2 出入口 SD03　2．P_2 出入口 SD03
32　1．P_2 出入口 C 区全景　2．P_2 出入口 SD03 土層断面　3．P_2 出入口　SK04
33　1．P_2 出入口出土遺物
34　1．呉服町交差点遠景　2．呉服町工区　B トレンチ検出遺構
35　1．呉服町工区　B トレンチ土層合成写真
36　1．呉服町工区　A トレンチ土層合成写真
　　2．呉服町工区　C トレンチ土層合成写真
37　1．呉服町工区トレンチ出土遺物（1）
38　1．呉服町工区トレンチ出土遺物（2）
39　1．B 換気塔調査風景　2．朝日生命換気塔調査区
40　1．朝日生命換気塔土層断面　2．朝日生命換気塔土層断面
41　1．A 出入口調査風景　2．A 出入口調査風景　3．C 出入口調査風景
42　1．A 出入口 SD02　2．A 出入口 SD02　3．A 出入口 SD02 遺物出土状況
43　1．A 出入口 SD02　2．A 出入口 SD02
44　1．A 出入口 SD02　2．A 出人口 SD02 部分
45　1．A 出入口 SD03　2．A 出入口 SD03
46　1．A 出入口 SD03 遺物出土状況　2．A 出入口 SD04、05
47　1．A 出入口 SD04、05　2．A 出入口 SK01
48　1．B 出入口工区全景　2．B 出入口 II 区全景
49　1．B 出入口 SD01　2．B 出入口 SD01 土留状況
50　1．B 出入口 SD02 と杭列　2．B 出入口 SK09
51　1．B 出入口 SK09 遺物出土状況　2．B 出入口 SK09 しゃもじ形木製品出土状況
52　1．C 出入口 SK03 調査風景　2．C 出入口 SK03
53　1．C 出入口 SK03　2．C 出入口 SK03 副葬品出土状況

54　1．C出入口SD02とSK11　2．C出入口SK11遺物出土状況
55　1．C出入口SD03　2．C出入口SD03遺物出土状況
56　1．C出入口SK07　2．C出入口SK02　3．C出入口ピット群
57　1．C出入口SE03　2．C出入口SE07　3．C出入口SE07部分
58　1．C出入口SE04　2．C出入口SE13、14　3．C出入口SE15、18
59　1．C出入口SE15　2．C出入口SE16　3．C出入口SE17
60　1．呉服町出入口出土遺物（1）
61　1．呉服町出入口出土遺物（2）
62　1．呉服町出入口出土遺物（3）
63　1．呉服町出入口出土遺物（4）
64　1．9ブロック調査風景　2．10ブロック調査風景
　　3．11ブロック近世墓調査風景
65　1．2ブロック調査区全景　2．6ブロック調査区全景
　　3．6ブロック調査区全景
66　1．8ブロック調査区全景　2．8ブロック調査区全景
　　3．9ブロック調査区全景
67　1．10ブロック上部遺構全景　2．10ブロック上部遺構　3．10ブロック上部遺構
68　1．10ブロック下部遺構全景　2．10ブロック下部遺構　3．10ブロック下部遺構
69　1．11ブロック全景　2．11ブロック全景
70　1．10ブロック　SX02遺物出土状況　2．10ブロックSX02完掘後
　　3．12ブロック　SX07
71　1．11ブロック　井戸群　2．11ブロックSE30　3.11ブロックSE33
72　1．11ブロックSE35　2．11ブロックSE37　3．11ブロックSE39
73　1．9ブロックSD13　2．9ブロックSD13遺物出土状況
　　3．10ブロックSK203　4．12ブロックSK305
74　1．箱崎馬出遺跡出土遺物（1）
75　1．箱崎馬出遺跡出土遺物（2）
76　1．箱崎馬出遺跡出土遺物（3）

Ⅰ　地下鉄路線内遺跡調査概要

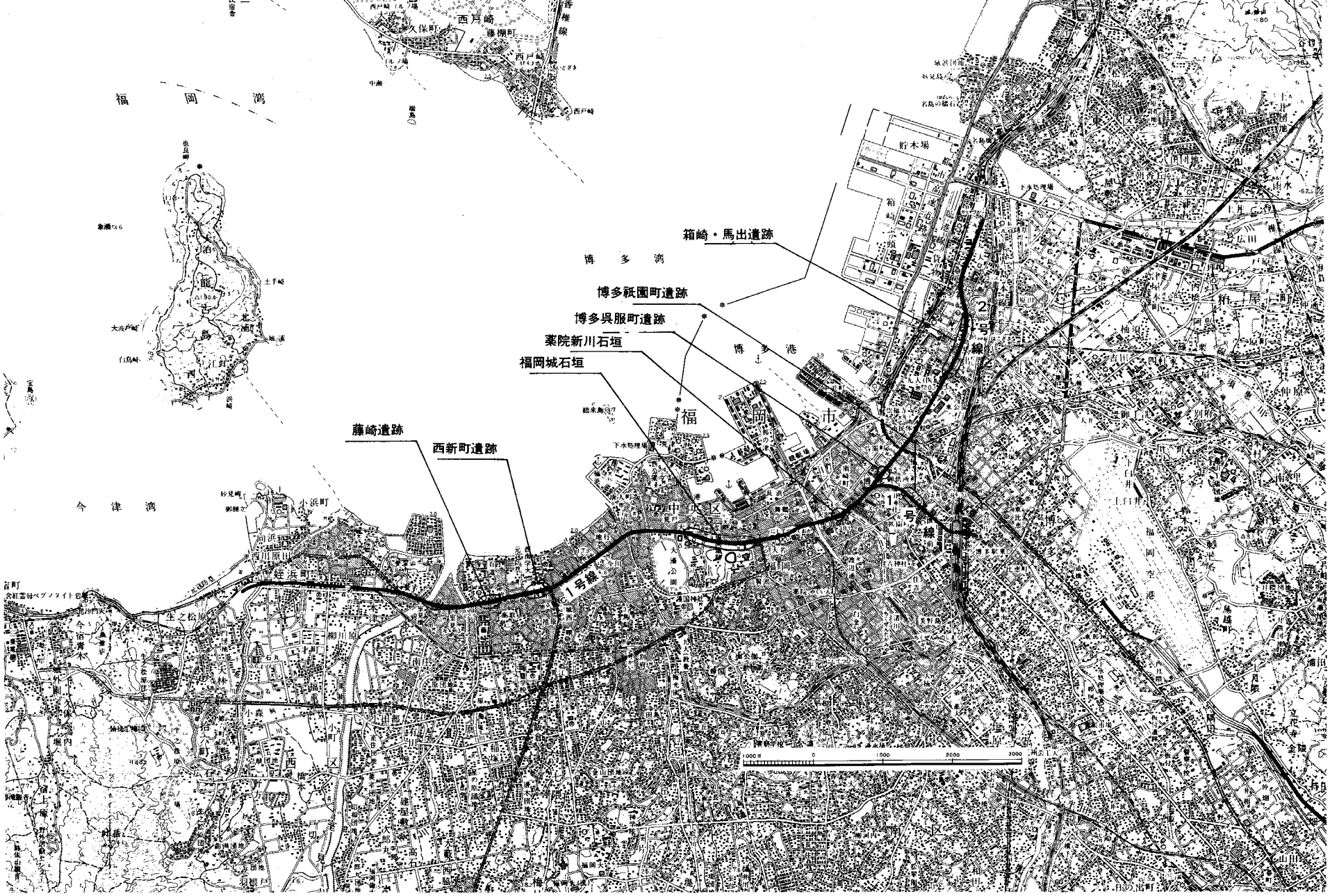


Fig.1 高速鉄道路線内遺跡地図（1/75,000）原図、国土地理院５万分の１地形図「福岡」

高速鉄道路線内遺跡調査の概要

昭和51（1976）年8月に地下鉄路線内遺跡の調査として、西新町遺跡の調査にまず着手した。以後、地下鉄工事各工区の発注とともに、Tab.1 のように各遺跡の発掘調査が進められ、昭和59（1984）年4月の博多遺跡群における祇園駅P-2出入口地点の調査をもって、路線内遺跡の調査は完了した。

この間、地下鉄工事も順調に進行し、昭和58（1973）年3月の1号線の開通に続き、昭和61（1986）年1月には、2号線箱崎九大前駅まで、更に同年11月には貝塚駅までの2号線全線が営業運転を開始し、今やまさに福岡市における交通網の大動脈として、市民にとって不可欠の足としてその機能を発揮している。今後更に福岡空港までの延長も具体化し、都市交通体系の花形として、その存在はますます脚光を浴びることになろう。

この地下鉄開通という具体的な成果とともに、発掘調査で得られた考古学的な成果も、福岡市の歴史的重要性を明らかにする上で極めて価値の高いものであった。これらについては下記の如く順次発掘調査報告書を作成してきたところであり、今回のⅦをもって一応完結する。

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書

Ⅰ	『藤崎遺跡』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集	1981
Ⅱ	『西新町遺跡』	第79集	1982
Ⅲ	『福岡城址　内堀外壁石積の調査』	第101集	1983
Ⅳ	『博多　高速鉄道関係調査（1）』	第105集	1984
Ⅴ	『博多　高速鉄道関係調査（2）』	第126集	1986
Ⅵ	『博多　高速鉄道関係調査（3）』	第156集	1987
Ⅶ	『博多　高速鉄道関係調査（4） 箱崎・馬出遺跡』	第193集	1988

この他、『藤崎遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集　1982　に藤崎駅舎部A・B出入口の調査成果については収録している。

藤崎遺跡、西新町遺跡では弥生時代中期を中心とする甕棺墓地が広い範囲で検出され、また藤崎遺跡では古墳時代初頭の方形周溝墓群が、西新町遺跡ではほぼ同時期の竪穴式生居址群が検出され、早良平野の海岸部砂丘上に、内陸部とは性格の異なる特定集団の存在した可能性が指摘されるなど多大な成果が得られた。

福岡城址、内堀石垣調査では明治未年に埋め立てられた石垣が70年余ぶりのその姿を現わした。福岡城の縄張りの一端が明らかになり、また数度の修復があることも確認された。この石垣裏込には、鴻臚館跡地から築城時に削り出された粘土が用いられており、鴻臚館に由来する多量の瓦と、越州窯青磁等の中国陶磁が含まれていた。福岡城のみならず奈良・平安時代にお

ける鴻臚館の活動内容の一端まで窺い知ることができた。1987年末から翌年1月にかけて、福岡市教育委員会が行った平和台球場外野席の発掘調査で、福岡城および鴻臚館跡の具体的な様相は更に明らかにされつつある。

博多遺跡群、箱崎馬出遺跡群については本書の中で触れているので述べないが、古代末から中世に至る貿易港をひかえた都市遺跡としての性格を如実に示している。

これらの遺跡の調査は、市街地化していた博多湾岸部砂丘地帯にも良好な形で遺跡が残っていることを明らかにし、のちの周辺部調査の嚆矢となっている。

これらの調査にあたっては多くの方々の御指導、御協力があったことは言うまでもない。これらの方々の御氏名を明記し、謝意を表したいが、何分にも多人数のため遺漏を恐れ、敢えて割愛させていただきたい。昭和62年度整理報告に関する組織のみ記しておく。

福岡市交通局―調査委託

交通事業管理者　西津茂美　　理事　日原節夫・平山幸生

総務部長　松木　健　　総務課長　溝川常博

建設部長　松下征雄　　工事課長　川口広恭

設計課長　萩原兼秀

計画課長　土師祥正　　計画第1係長　磯野通雄

福岡市教育委員会―調査主体

教育長　佐藤善郎　　文化部長　川崎賢治

埋蔵文化財課長　柳田純孝　　第1係長　折尾　学

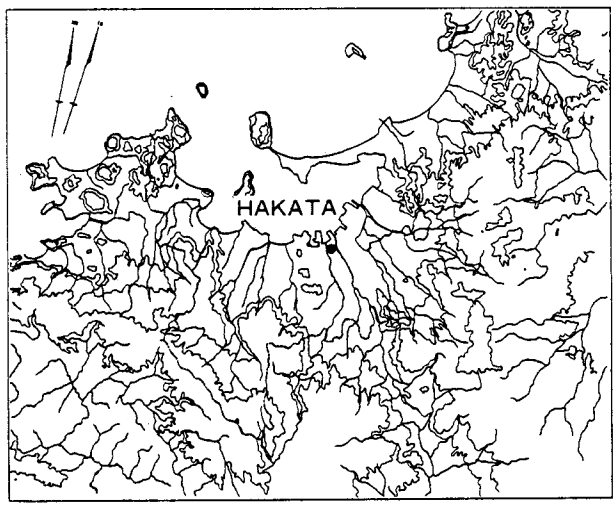
事務担当　松延好文　　整理担当　折尾　学、浜石哲也、池崎譲二、小畑弘己

Tab. 1　地下鉄路線内遺跡調査一覧表

遺跡名 ＼ 項		所在地	時代	性格	調査期間	調査面積	備考
藤崎遺跡		西区藤崎西区役所前	弥生時代	共同墓地	昭和52年4月 ～同53年6月	4,925㎡	
(防墨工区)		西区防墨前	弥生時代 ～古墳時代	生活址群	昭和52年12月 ～同53年4月	920㎡	藤崎と西新町に入る
西新町遺跡		西区修猷館高校前	〃	共同墓地 住居址群	昭和51年8月 ～同53年4月	6,230㎡	
福岡城内堀・石垣		中央区荒戸・大手門・平和台・赤坂	江戸時代	堀石垣	昭和51年12月 ～同52年9月	14,900㎡	
福岡城薬院新川石垣		中央区天神（旧県庁前）	〃	武家の野と博多町人街とを分けた石垣	昭和53年3月 ～同53年6月	500㎡	
博多遺跡群	呉服町工区	博多区・土居町・呉服町・蓮池（旧電車通り）	平安 ～室町時代	中世の港町	昭和53年11月 ～同56年5月	200㎡	
	店屋町工区	博多区御供所町東長寺前	〃	中世の博多の街	昭和52年12月 ～同55年12月	1,832㎡	
	祇園町工区	博多区馬場新町	〃	〃	昭和54年2月 ～同59年4月	4,500㎡	
	博多駅前工区	博多区博多駅前	鎌倉 ～室町時代	〃	昭和54年12月 ～同55年8月	4,500㎡	
箱崎馬出遺跡		東区筥崎宮参道・馬出	鎌倉時代 ～室町時代	筥崎宮前街	昭和57年4月 ～同58年12月	約5,000㎡	

博多遺跡群

― 地下鉄路線内の調査(4) ―



第１章　博多遺跡群における発掘調査概要

博多遺跡群（Fig. 2）は、福岡県博多区に所在し、那珂川と石堂川（御笠川、旧比恵川）の沖積作用によって生じた沖の浜、博多浜（櫛田浜）と呼ばれる二つの砂丘（洲）に立地しており、旧那珂郡に属す。近世城下町としての「福岡」に対する商業都市「博多」指し示す地域とほぼ等しく、これらとりもなおさず中世港湾都市の中心域を占めていたものと思われる。

博多が日本における海外先進文化流入の門戸として果たした役割の重要性については、主に文献史学の立場から多くの先覚が言及されており、他言を要しない。また考古学的立場からも中山平次郎、岡崎敬氏らをはじめとする研究がなされている。しかしながら、昭和40年代までは本格的な調査が行なわれておらず、博多遺跡群の内容、広がり等は具体的に把握することが困難な状況であった。

博多における本格的な発掘調査の嚆矢となったのは地下鉄１号線店屋町工区の調査（章末文献３）であった。その予想を上回る成果をもとに、各種開発に係る発掘調査体制は整備され、現在まで、Tab. 2 に示すように多くの発掘調査が行なわれてきた。その結果、博多における考古学的な視座を点から線へ、更に面から立体にまで広げることが可能になりつつある。しかし各調査の整理作業は充分に進行しておらず、それらのまとめはこれからのことであるが、その概要を記しておきたい。

博多遺跡群は平安時代末から戦国時代までを中心とし、更には江戸時代を経て現在に到るまでの都市遺跡としての性格がまず挙げられる。しかし遺跡としては弥生時代中期まで溯り、甕棺墓地の形成や、集落も見られる。古墳時代には前方後円墳（28次）や方形周溝墓（17、27次）をはじめ、古墳時代初頭の集落址や墓地が見られる。奈良時代～平安時代の律令期については良好な遺構は多くないものの、石帯、帯金具をはじめ須恵器、土師器、越州窯青磁、長沙窯陶器、製塩土器等が地点によっては多く出土しており官衙的施設の存在も推定されている。このように博多遺跡群は弥生時代から現在まで、連綿として人々の生活が営まれてきた複合遺跡である。

博多における歴史地理的な変遷も、文献史学、地理学方面との連繋もあり、徐々に明らかにされつつある。「袖の湊」に関しては「袖の湊平清盛整備説」とともに「袖の湊呉服町交差点説」がほぼ定説となっていたが、地下鉄関係の呉服町交差点の調査では、11～12世紀代の建物、側溝、墓などが検出され、「袖の湊呉服町交差点説」は否定された。しかしその周辺の調査（16、29次）では、交差点の東西に低湿地があり、15～16世紀頃に徐々に埋め立てられていたことが明らかにされ、Fig. 2 の等高線に見られるように、沖の浜側に通じる陸橋のような地形をなしていたことが明らかになった。現在のところ両側の入江状低湿地が「袖の湊」跡と考え易い。また沖の浜の形成時期も碇石の出土したこと（５次）によって、平安時代と推察される。

出土遺物は調査地点によっては諸相に変化があるものの、その種類、量ともに豊富であり、人々の豊かな生活ぶりを彷彿させるに充分である。なかでも中国製品を中心とする貿易陶磁の量と種類の多さは特筆すべきであり、国際貿易都市博多の性格を見事に代弁しているといえる。浙江・福建・広東省を中心にそれらの産地も様々である。これら貿易陶磁の中には墨書をもつ例が少なからず含まれ、中国人姓と認められるものも多い。これらは地点毎に姓の偏りがあり、中国商人の居留地であった「宋人百堂」「大唐街」などの伝承を裏付けるものである。また、白磁を山の如く廃棄した地点（14次）や、同種の青磁碗、皿を大量に一括廃棄した井戸（店屋町工区出入口2・3）など、陶磁器を取り扱っていたと思われる商人の存在をうかがわせる出土状態も見られる。

長期にわたる都市遺跡であり、人々のエネルギッシュな営みによって様々な遺構が刻まれている。井戸および廃棄物処理土壙の密度は凄まじく、複雑に互いに切り合って、遺構、遺物の把握を困難なものにしており、町屋等の建物群は殆ど復元されていないのが実情である。しかしながら、溝および道路等については比較的明瞭に把えられている。35次調査では幅6m程の両側に側溝をもつ室町〜戦国期の道路が出土し、少なくとも6回の道路改修が行なわれていることが明らかになっている。また町割りに関すると思われる溝、道路等も各地点で見られ、現在までのところ、鎌倉時代末までの南北の町割、35次調査の道路に見られる町割、戦国時代末以降の太閤町割と、3回の町割の変遷が推定される。

博多遺跡群関係埋蔵文化財調査報告書（Tab. 2 の報告書番号に一致する）

1	『博多Ⅰ』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集	1981
2	『博多Ⅱ—図版編』	第86集	1982
3	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』	第105集	1984
4	『博多Ⅲ』	第118集	1985
5	『博多Ⅳ』	第119集	1985
6	『博多Ⅴ』	第120集	1985
7	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ』	第126集	1986
8	『博多Ⅵ』	第144集	1986
9	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ』	第156集	1987
10	『博多Ⅶ』	第147集	1987
11	『博多Ⅷ』	第148集	1987
12	『博多Ⅸ』	第149集	1987
13	『博多Ⅹ』	第150集	1987
14	『中部地区埋蔵文化財報告Ⅱ』	第146集	1987
15	『博多Ⅺ』		1988
16	『博多Ⅻ』		1988
17	『博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ　遺構編』		1988
18	『博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ』		1988
19	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅶ』		1988

Table. 2　博多遺跡群調査地点一覧（昭和63年３月現在）

公共事業関係

符号	調査番号	調査原因	所在地（博多区）	調査面積(m²)	調査期間	報告書	備　　考
A	7725	地下鉄建設	御供所町	1,412	77.12～78.11	3.7	店屋町工区
B	7833	〃	御供所町外	4,500	79.3～12	9	祇園町工区
C	7835	〃	店屋町、上呉服町外	200	78.11～79.5	19	呉服町工区
D	7949	〃	博多駅前一丁目外	4,500	79.12～80.8	19	駅前工区
E	8037	〃	上呉服町	100	81.3	19	呉服町換気塔
F	8038	〃	冷泉町、祇園町	435	80.10～12	3	祇園駅2･3号出入口
G	8148	〃	御供所町	70	81.9	19	祇園駅４号出入口
H	8149	〃	祇園町	184	81.10～11 19	19	祇園駅５号出入口
I	8150	〃	上呉服町、中呉服町、綱場町、店屋町	380	81. 4～ 5	19	呉服町出入口
J	8435	〃	博多駅前二丁目	215	84.4	19	祇園駅 P2 出入口
K	8224	道路拡幅	上呉服町	630	82.11～83.3	17	築港線１次
L	8331	〃	〃	564	84. 2～ 9	19	築港線２次
M	8404	〃	〃	417	85. 2～12		築港線３次
N	8527	〃	御供所町	383	85.12～86. 6		築港線４次
O	8653	〃	〃	380	86.10.1～87.2.10		築港線５次

民間事業関係

次	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(m²)	調査期間	報告書	備　　考
1	7810	納骨堂建設	御供所町・東長寺境内	360	78.11～79. 1		本調査
2	7928	ビル建設	店屋町99	約100	79. 4		立会、土層図作成
3	7929	納骨堂建設	祇園町・萬行寺境内	240	79.11		本調査
4	7930	ビル建設	冷泉町7-1	1,100	79.12～80. 3	1.2	本調査
5	7931	ビル建設	下呉服町346	10	79.12		試掘調査、地表下4.5mから碇石出土
6	7932	ビル建設	冷泉町155他	640	80.3～4		本調査
7	8023	ビル建設	祇園町130	210	80.6～8		本調査
8	8024	本堂建設	御供所町・東長寺境内	600	80.8～10		本調査
9	8025	ビル建設	下呉服町75		80.9		試掘調査
10	8026	ビル建設	冷泉町474-9	54	80.12	1	本調査
11	8027	ビル建設	御供所町3-30		80.12		試掘調査
12	8127	ビル建設	中呉服町152、153		81.6		試掘調査
13	8128	ビル建設	駅前１丁目121～127	30	81.7		トレンチ調査
14	8129	ビル建設	店屋町4-15	255	81.7～9		本調査
15	8130	駐車場建設	上呉服町569	100	81.8		試掘調査
16	8131	ビル建設	店屋町246～248	150	81.9		本調査
17	8132	ビル建設	駅前１丁目98	910	81.11～82. 2	4	本調査
18	8156	ビル建設	駅前２丁目8-14	10	82.1		試掘調査
19	8323	社務所建設	櫛田神社境内	200	83.4		本調査
20	8324	ビル建設	駅前１丁目99	980	83.4	4	本調査
21	8325	ビル建設	駅前１丁目18-1	150	83.5	4	本調査
22	8327	ビル建設	冷泉町189他	840	83.9	4	本調査
23	8334	本堂建設	龍宮寺境内	約300	84.2		本調査
24	8433	ビル建設	冷泉町1-1	250	84.4～5	5	本調査
25	8434	ビル建設	祇園町1-1	100	84.5～6	6	本調査
26	8506	ビル建設	上呉服町34	134	85.5～6	8	本調査
27	8507	ビル建設	祇園町1-11	350	85.5～6	14	本調査
28	8508	ビル建設	御供所町70-2	1,800	85.5～8	10	本調査
29	8509	ビル建設	綱場町22-67	330	85.7～9	11	本調査
30	8605	ビル建設	御供所町36、37、38、39	495	86.5～7	12	本調査
31	8606	ビル建設	御供所町65、66	190	86.5～7	13	本調査
32	8608	ビル建設	祇園町21-1	約1,000	86.5～7		本調査
33	8618	ビル建設	祇園町８他	898	86.7～11	15	本調査
34	8645	ビル建設	冷泉町238-2外	40	86.10～11		本調査
35	8648	ビル建設	上呉服町56	655	86.11～	10	本調査
36	8687	ビル建設	祇園町83外	606	87.8～10		本調査
37	8687	ビル建設	博多駅前１丁目129外	1,427	87.12～88.3		本調査

Fig.2 博多遺跡群地形図 (1/600)

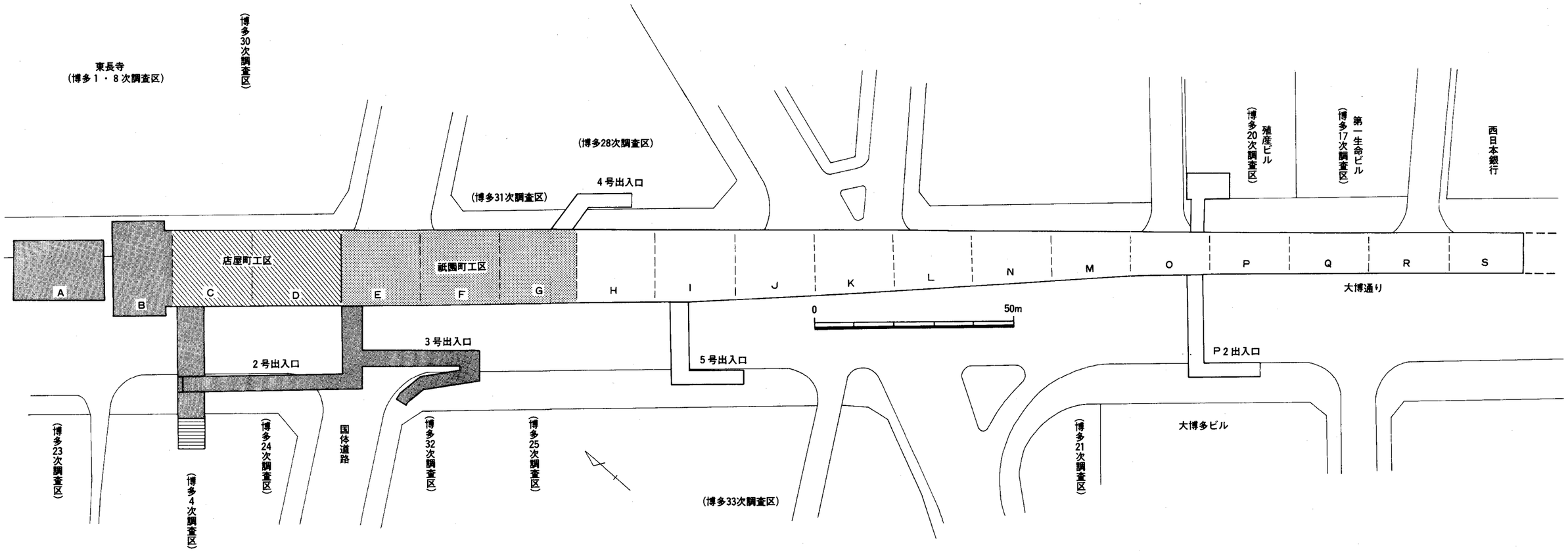


Fig. 3　博多遺跡群地下鉄1号線関係調査区(店屋町・祇園町工区)全体図(1/1000)

第2章　祇園町工区本体部の調査

遺跡略号　HKT S-2
調査番号　7833

1.　H・I・J区の調査（Fig. 4—49　PL. 2—11）

祇園駅舎部の調査で調査区幅は13m、J区付近から博多駅方面に向って徐々に挾くなる。この付近は以前より博多駅前の商家などが建ち並んでいたところで、様々な生活活動が行なわれた。祇園町交差点付近から南側にかけては地山の白色砂層までが浅く井戸、廃棄物処理土壙など大きな掘方をもつ遺構の密度が高いため、切りあいが甚しい。全体的な様相はこれまでに報告したA～G区とほぼ同様で、近世、近代を除けば平安時代末から鎌倉時代にかけての遺構、遺物が多い。弥生時代中期の甕棺墓はほぼ姿を消し、古墳時代初頭の土師器が増え、竪穴式住居址などの遺構も検出される。この傾向は特に南下するに従って顕著である。古墳時代後期の墓も見られ（I区　1・2号墓)、周辺調査区の調査結果でも博多1号墳（28次）など前方後円墳が発見され、一帯が特定集団の墓域であったと思われる。奈良時代から平安時代前半にかけての遺物は多い。須恵器、土師器等に越州窯青磁も多数出土しているが、残念なことに明確な遺構はない。中世の遺構は密度が濃い。円形の桶組井戸、廃棄物処理土壙がほとんどである。柱穴も多いが、組織的な把握は困難で建物の復元はできない。溝はH区，I区でほぼ東西方向をとるものが検出されているH区北端で検出された幅のせまい溝は数条が平行して走り、一部切合いが認められる。数次の造り替えがあったものであろう。I区検出の溝は幅の広いものである。現在の町筋と全く異なるこの東西、南北方向をとる溝は、A区から夜間調査区にかけて検出されており、その廃絶年代は14世紀前半である。この溝は博多の古い町筋を把握する上で重要な遺構である。

出土遺物は多様で、実測図を掲げた遺物は遺構毎にまとまりのあるもの、重要と思われるものを中心にしている。誌面の都合上、遺構と同様に遺物のデータを今回は掲載できなかった。実測図で判断しにくいものについてのみ触れておく。1059～61は近世土師器、1091は青白磁香炉、1144は陶器碗、1148は青磁碗、1147は白磁碗、1149は滑石製品、1155は白磁碗、1161は青白磁碗、1156は青白磁梅瓶、1173は滑石製石鍋、1378は近世土師質壺、1264は瓦玉、1377は土馬、1315は陶器碗、1360、61は龍泉窯系青磁双層碗、1354は越州窯青磁、1355～58は高麗青磁碗、1411は中国製緑釉陶器壺、1415は土師質十能、1468はガラス製環、1474、75は高麗青磁、1499は青磁香炉、1510は高麗青磁碗、1521は陶器碗、1608は高麗青磁碗、1609は越州窯系青磁碗、1610は陶器把手、1620は土師質土鍋、1623は磁灶窯系黒釉陶器軍持、1683は焼台（いて)、1703•04は白磁蓋、1157は高麗または越州窯青磁、1746は陶器こね鉢、1800は土師壺、1764は須恵器杯、1952は越州窯青磁か、1957は李朝白磁碗。

7833

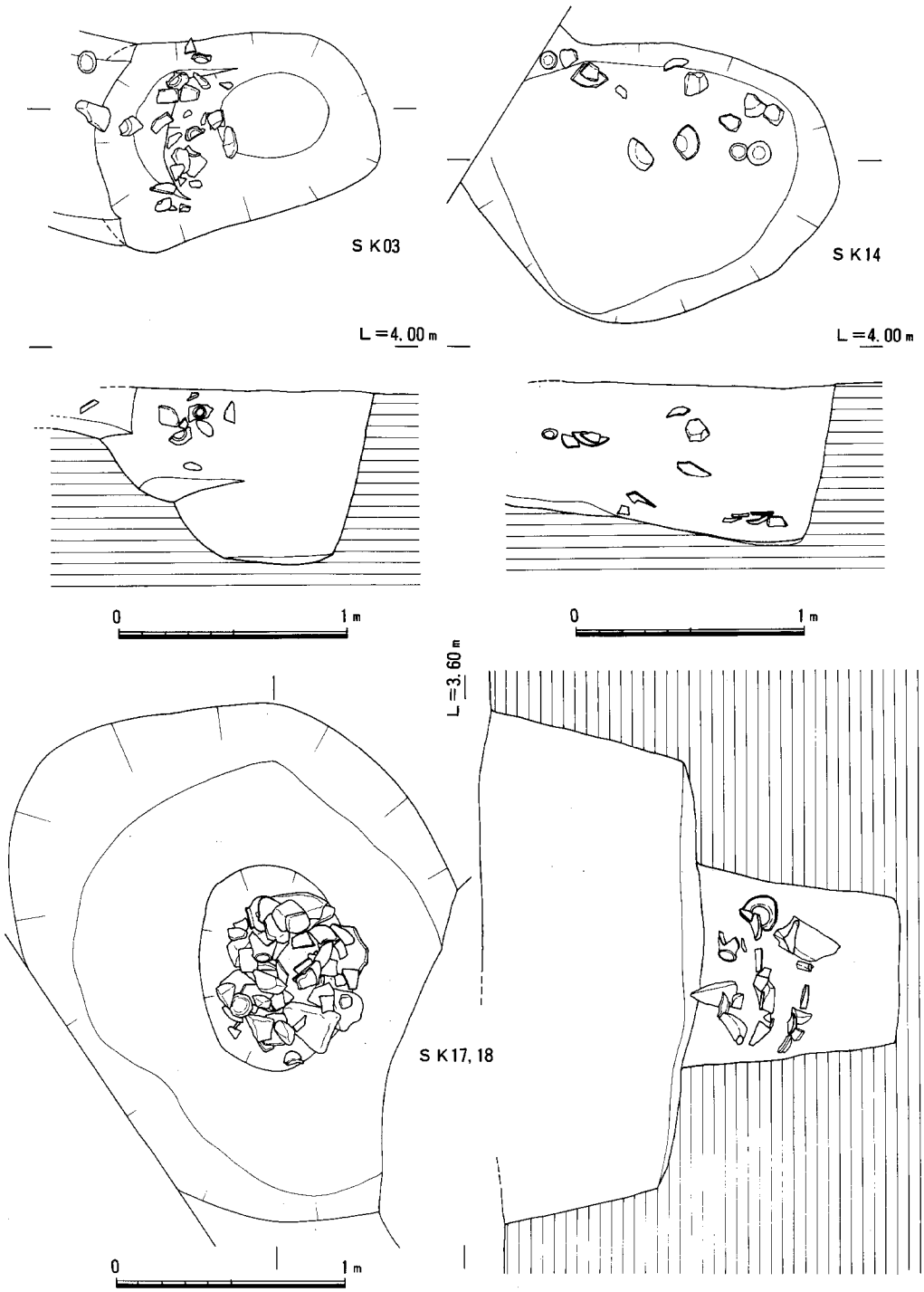


Fig.4. H区 S K03, 14, 17, 18

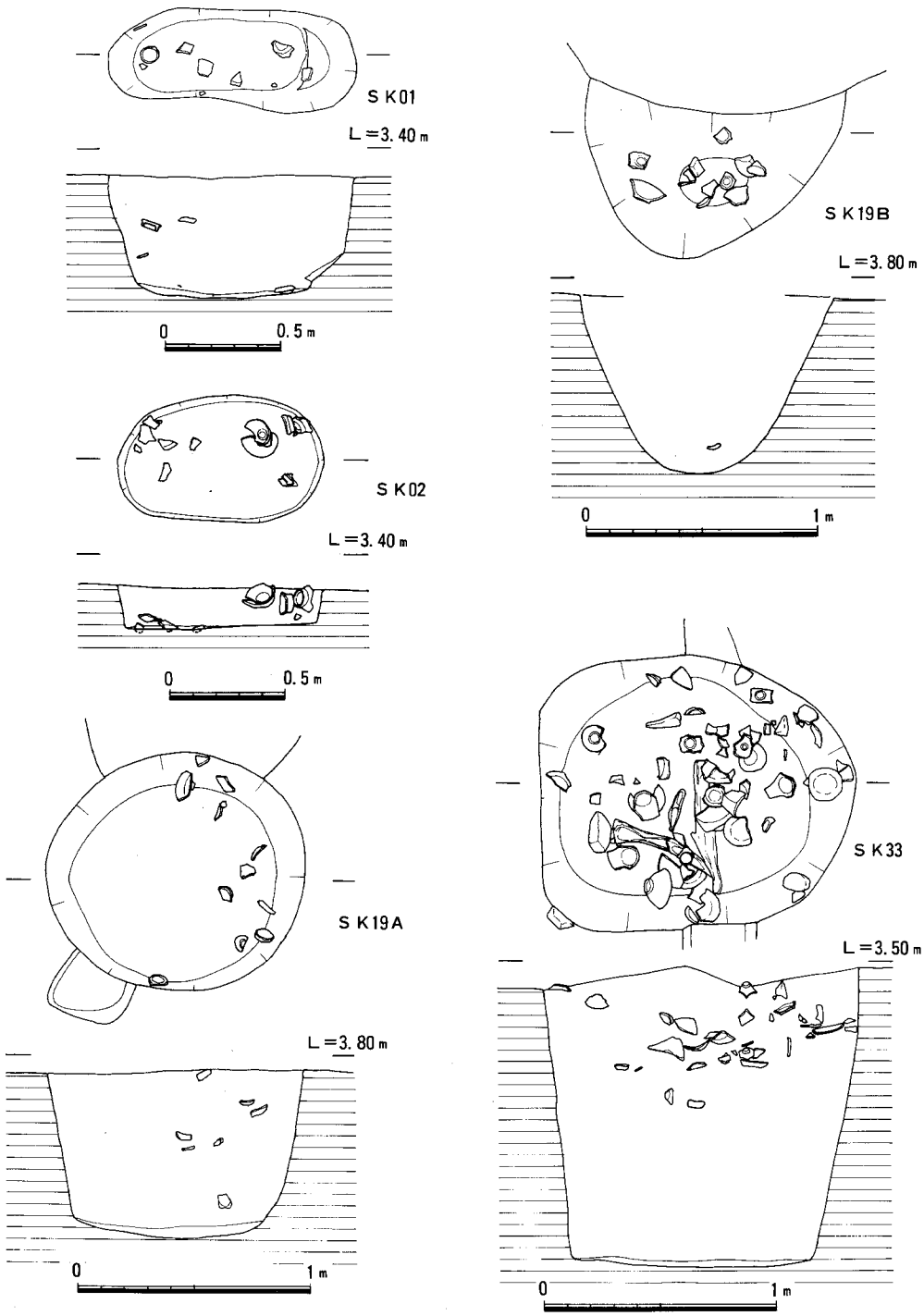


Fig.8　H区 S K01, S K02, S K19A, S K19B, S K33

7833

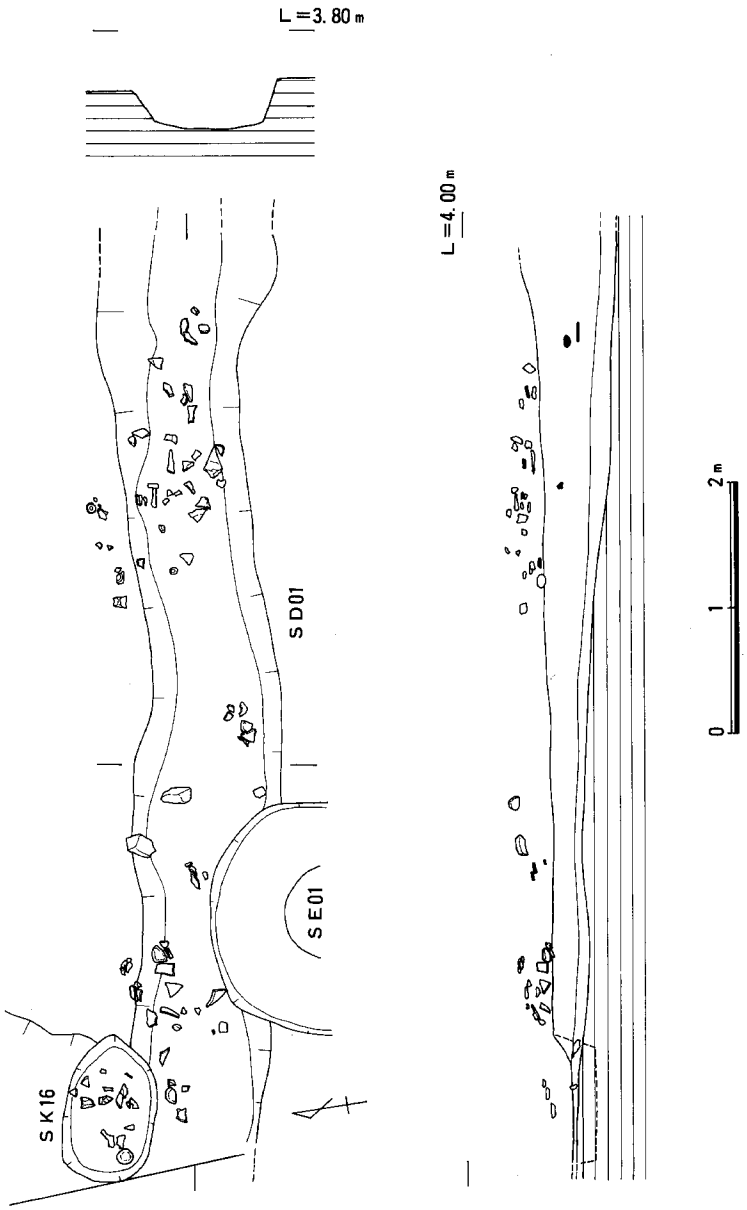


Fig.9 H区 S K16,S D01

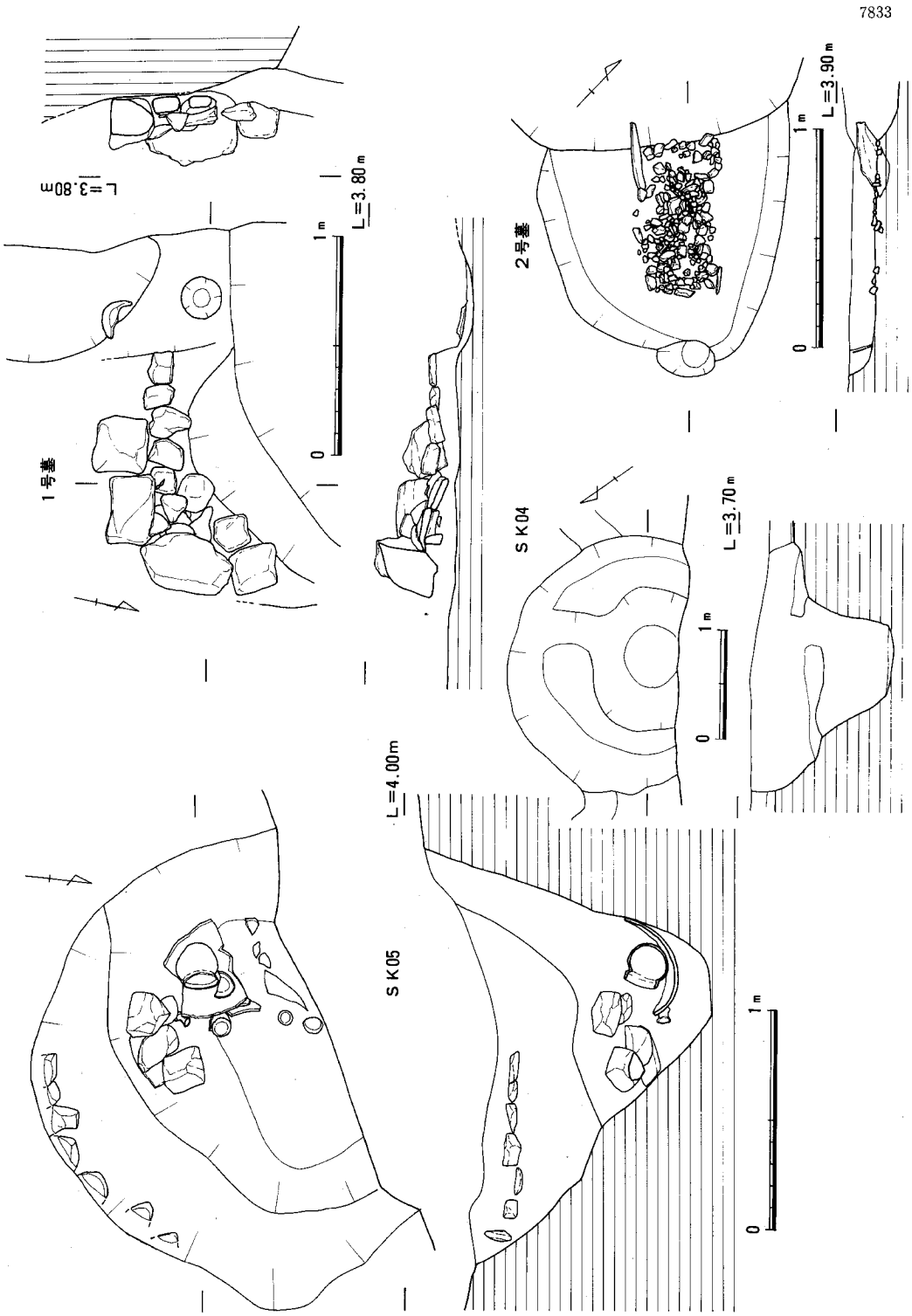


Fig.10 I区 1号墓 2号墓 SK04,SK05

7833

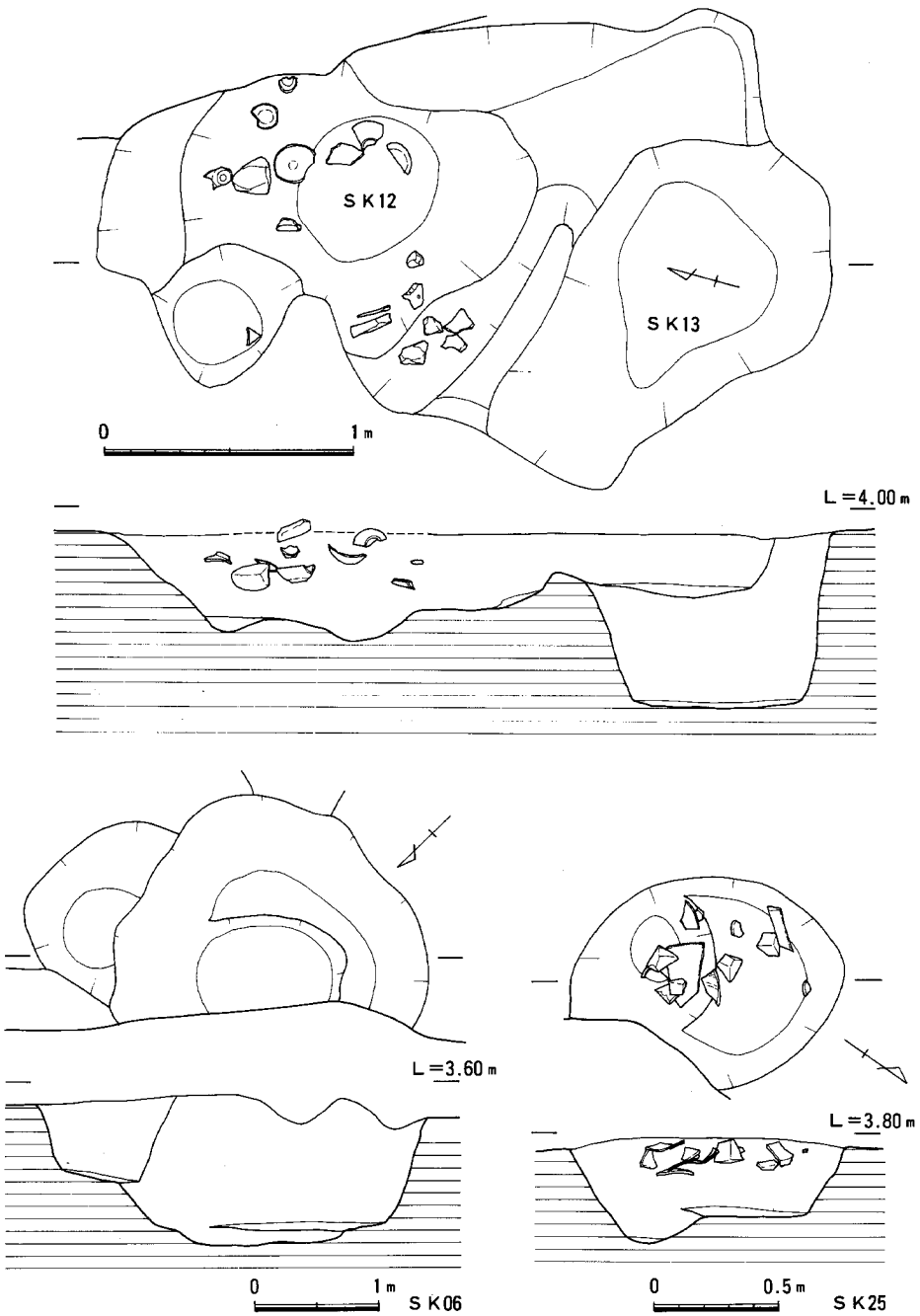


Fig.11 I区 SK06,SK12,SK13,SK25

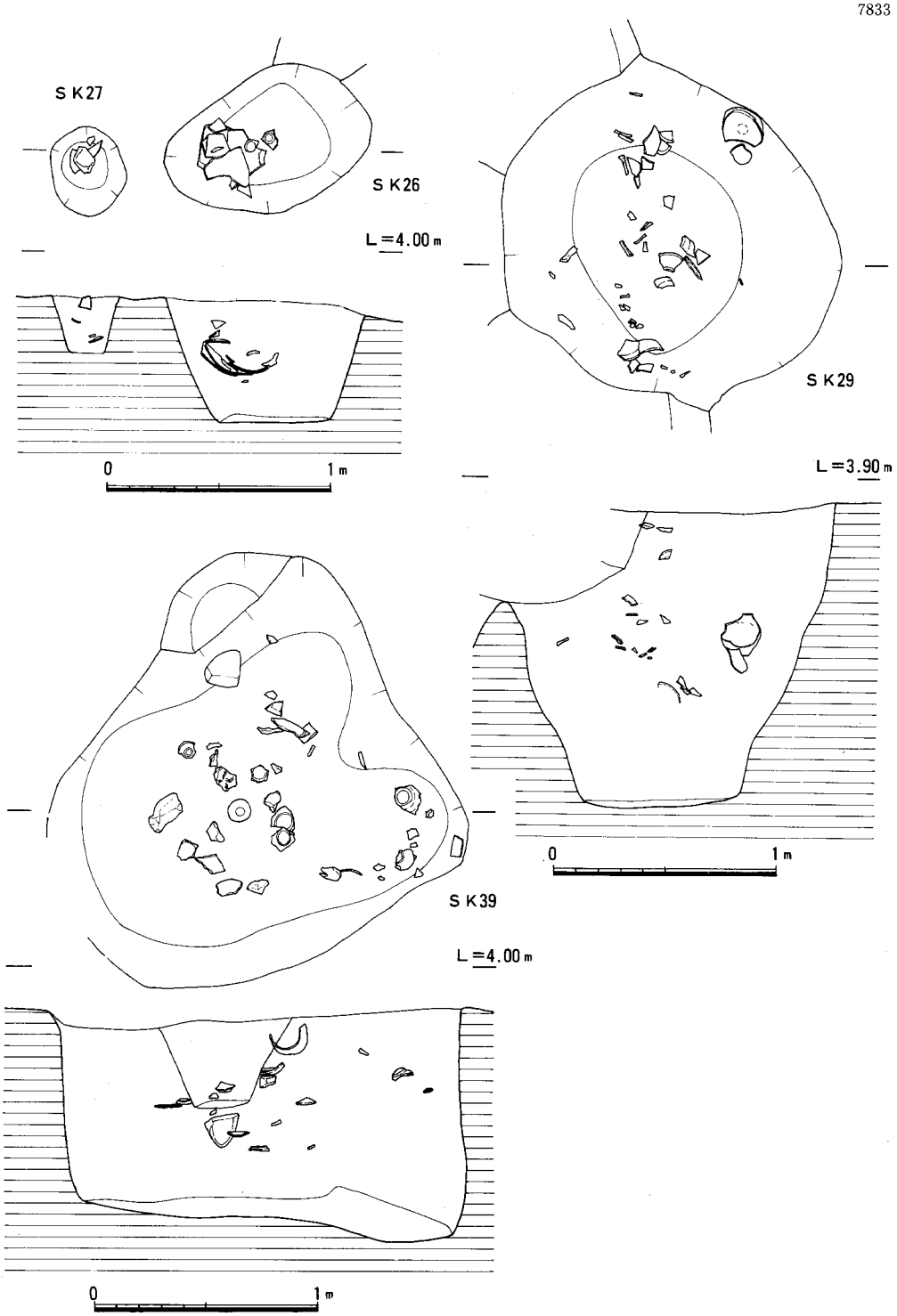


Fig.12 I区 SK26,SK27,SK29,SK39

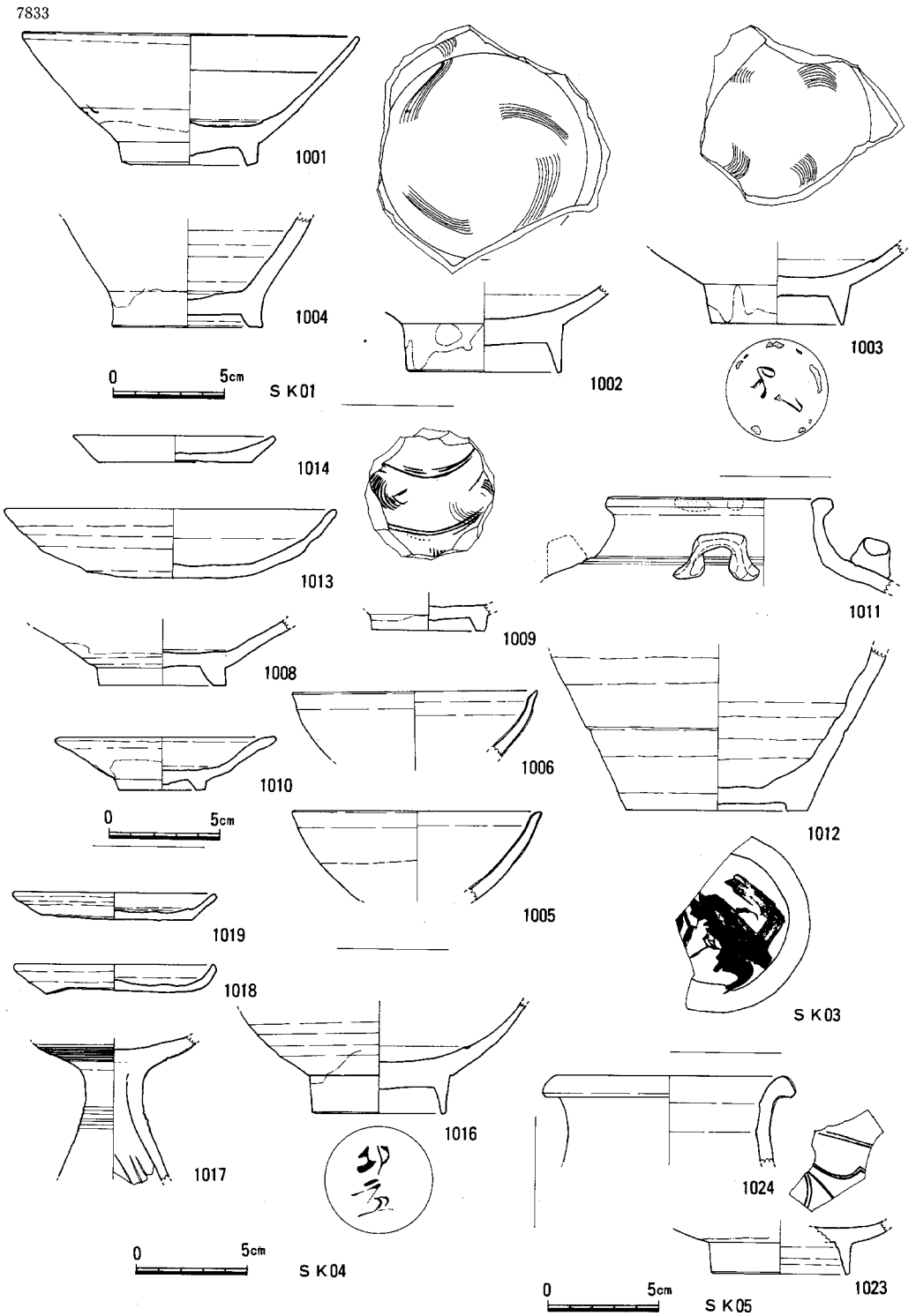


Fig.13 H区 SK01,SK03,SK04,SK05出土遺物 (1/3)

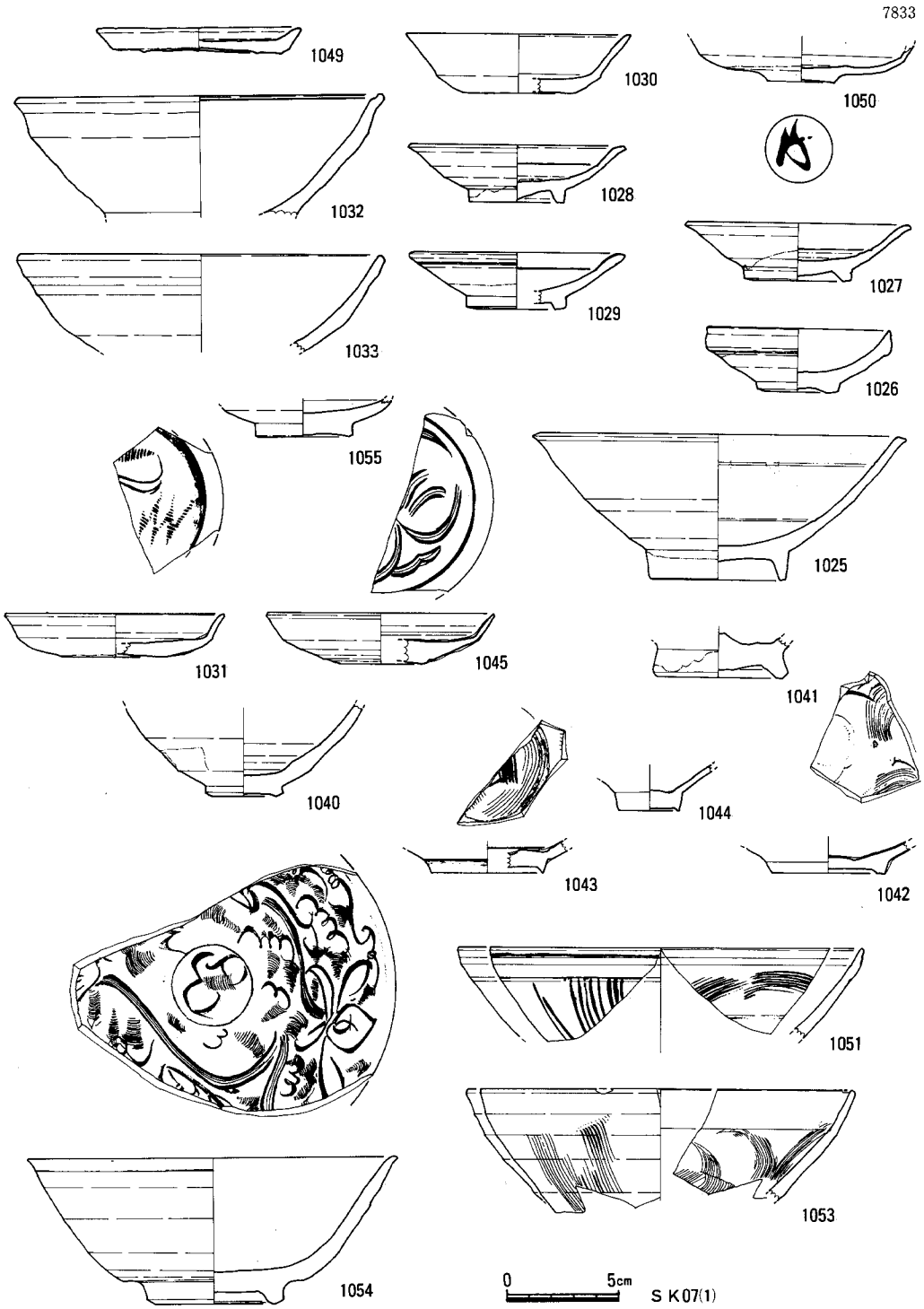


Fig.14 H区　SK07出土遺物(1) (1/3)

7833

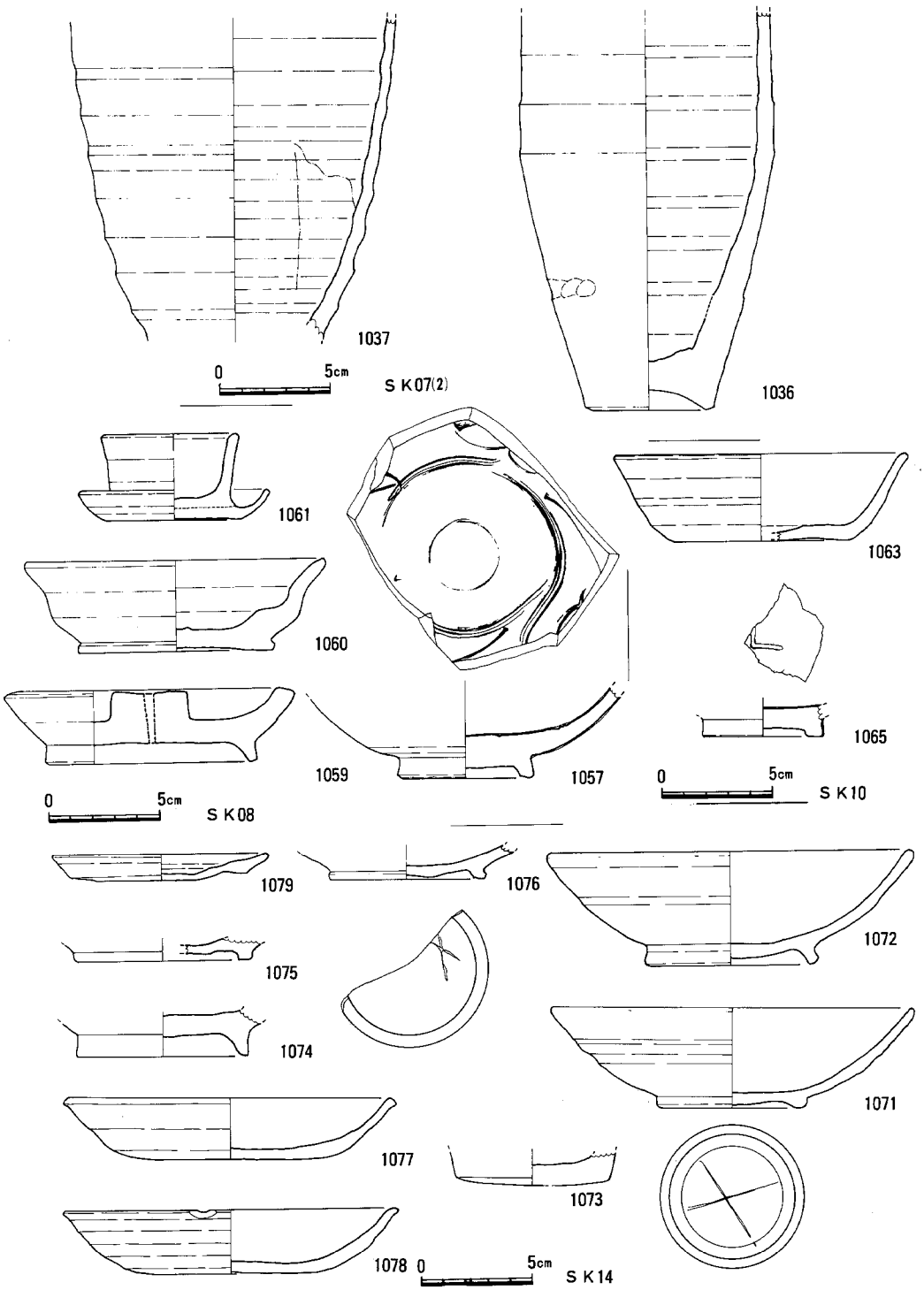


Fig.15 H区 SK07 出土遺物(2) SK08,SK10,SK14 出土遺物 (1/3)

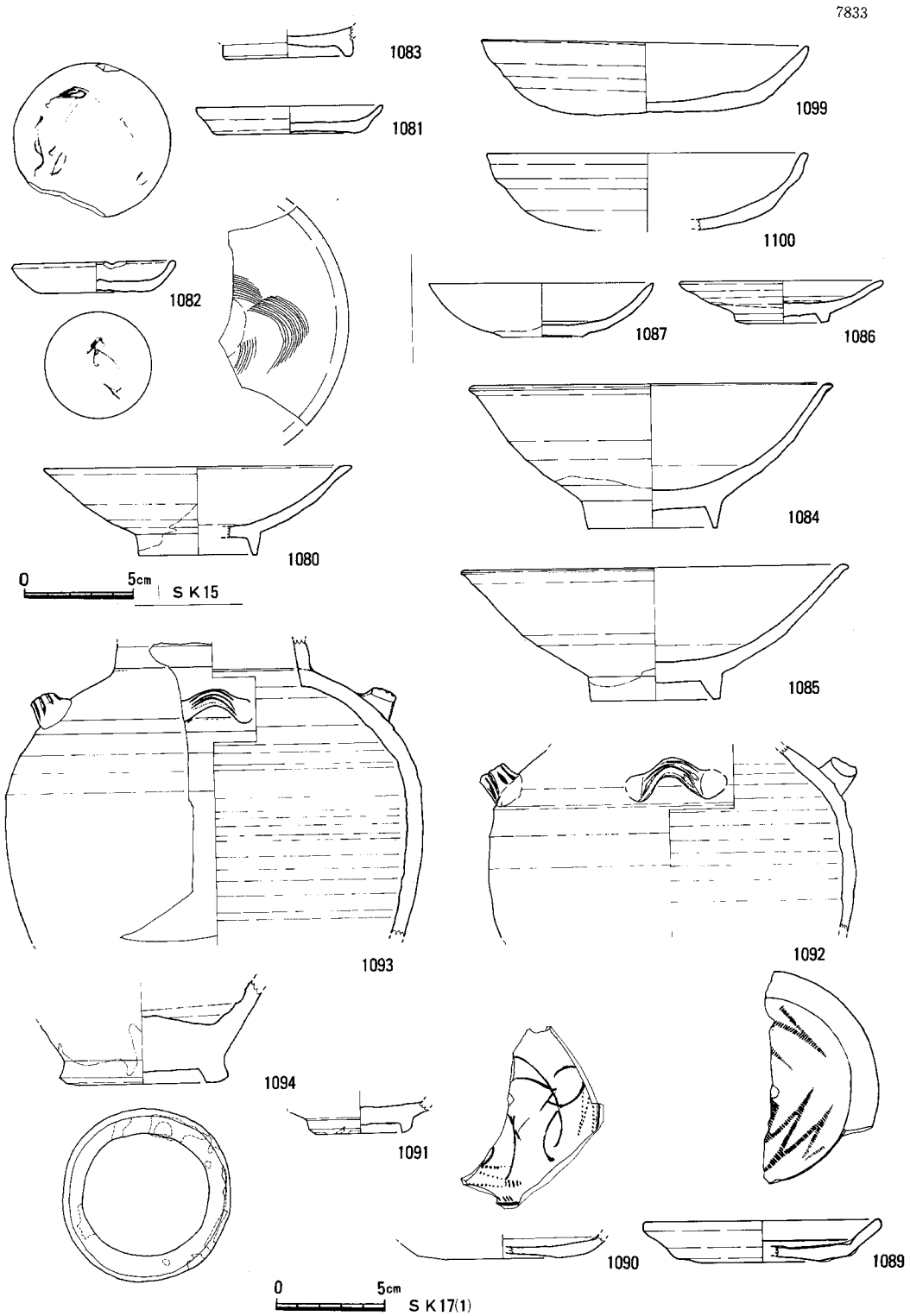


Fig.16 H区 SK15出土遺物、SK17出土遺物(1) (1/3)

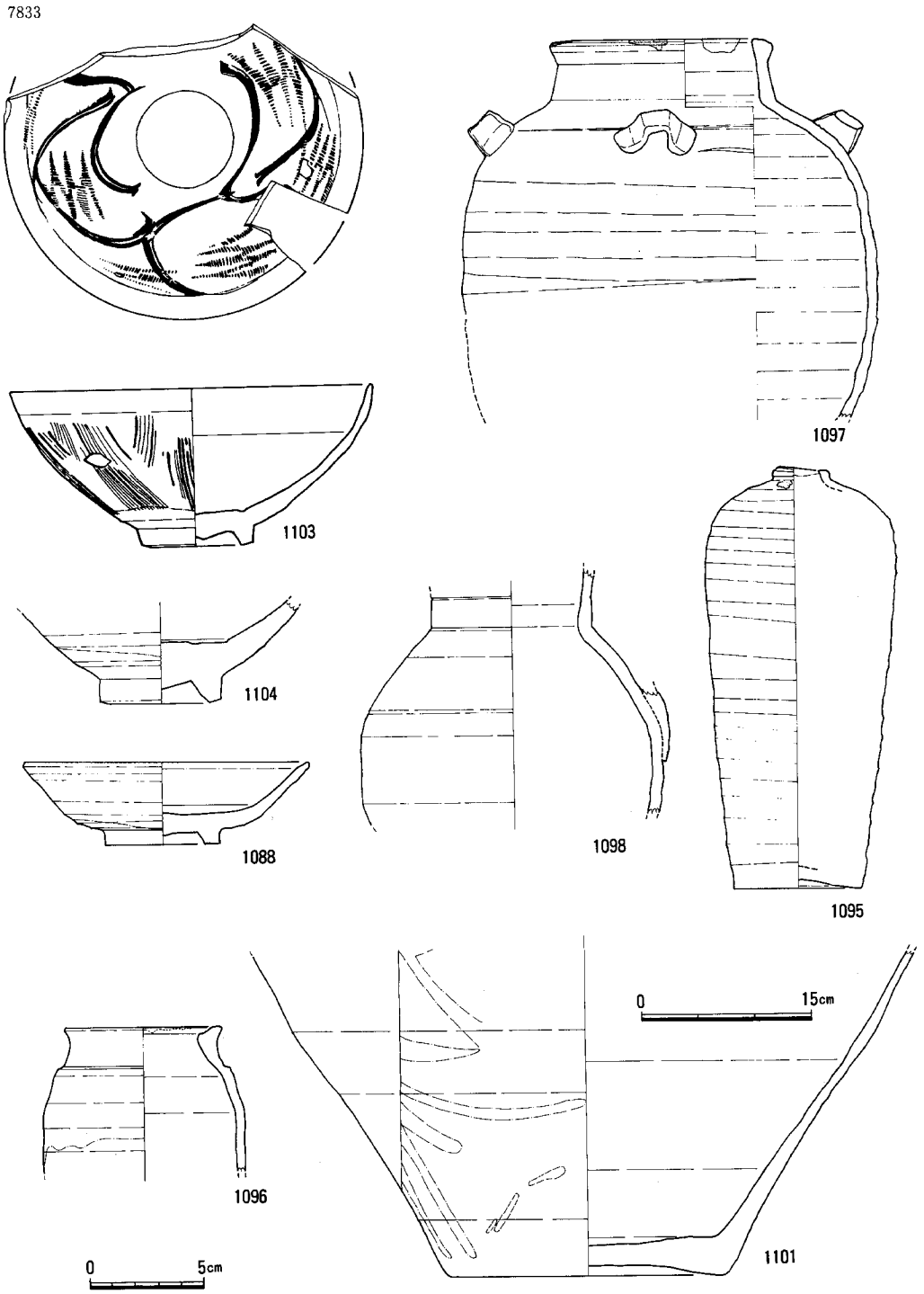


Fig.17 H区 SK17出土遺物(2) (1/3 1101は除く)

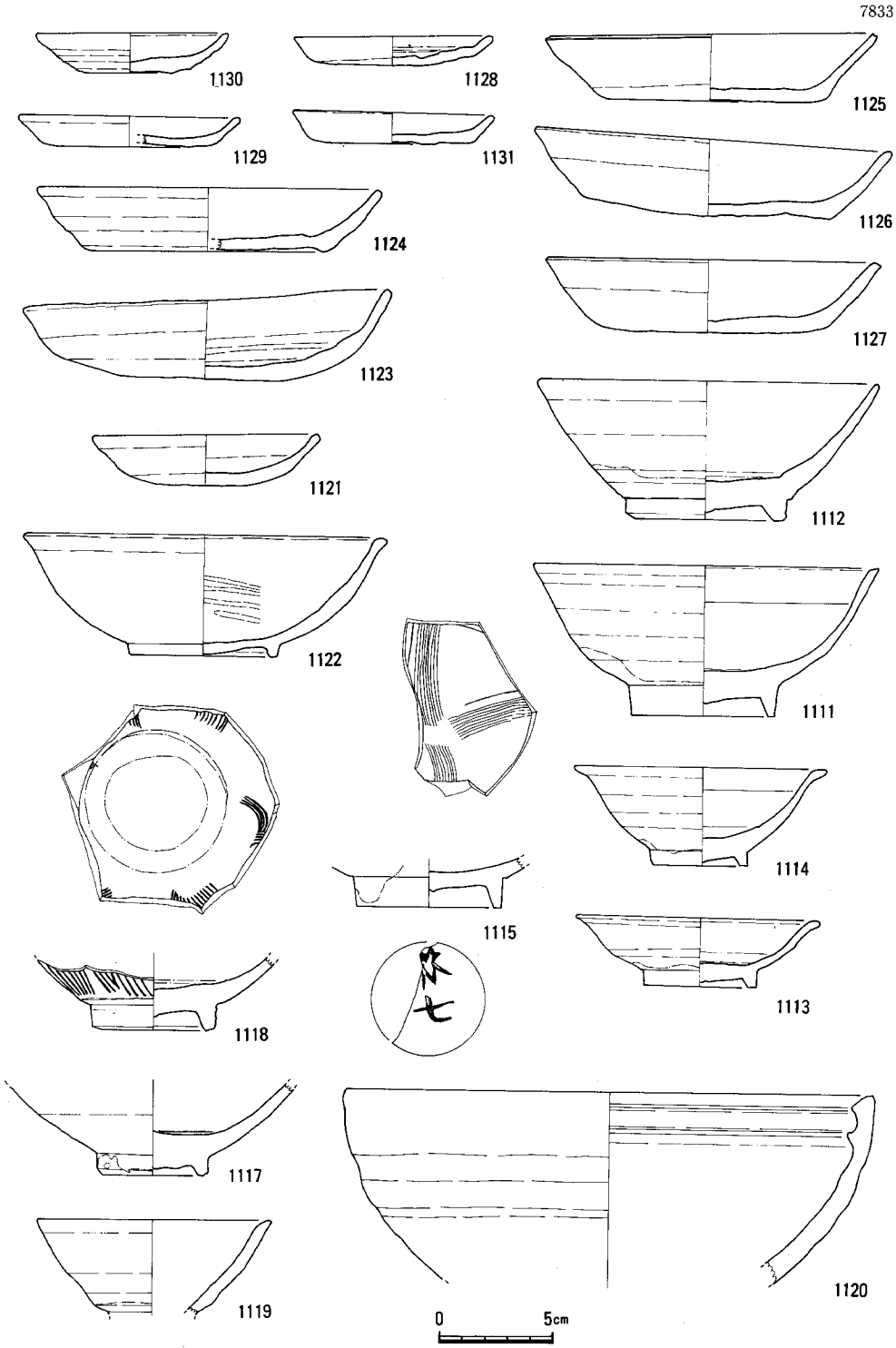


Fig.18 H区 SK23出土遺物 (1/3)

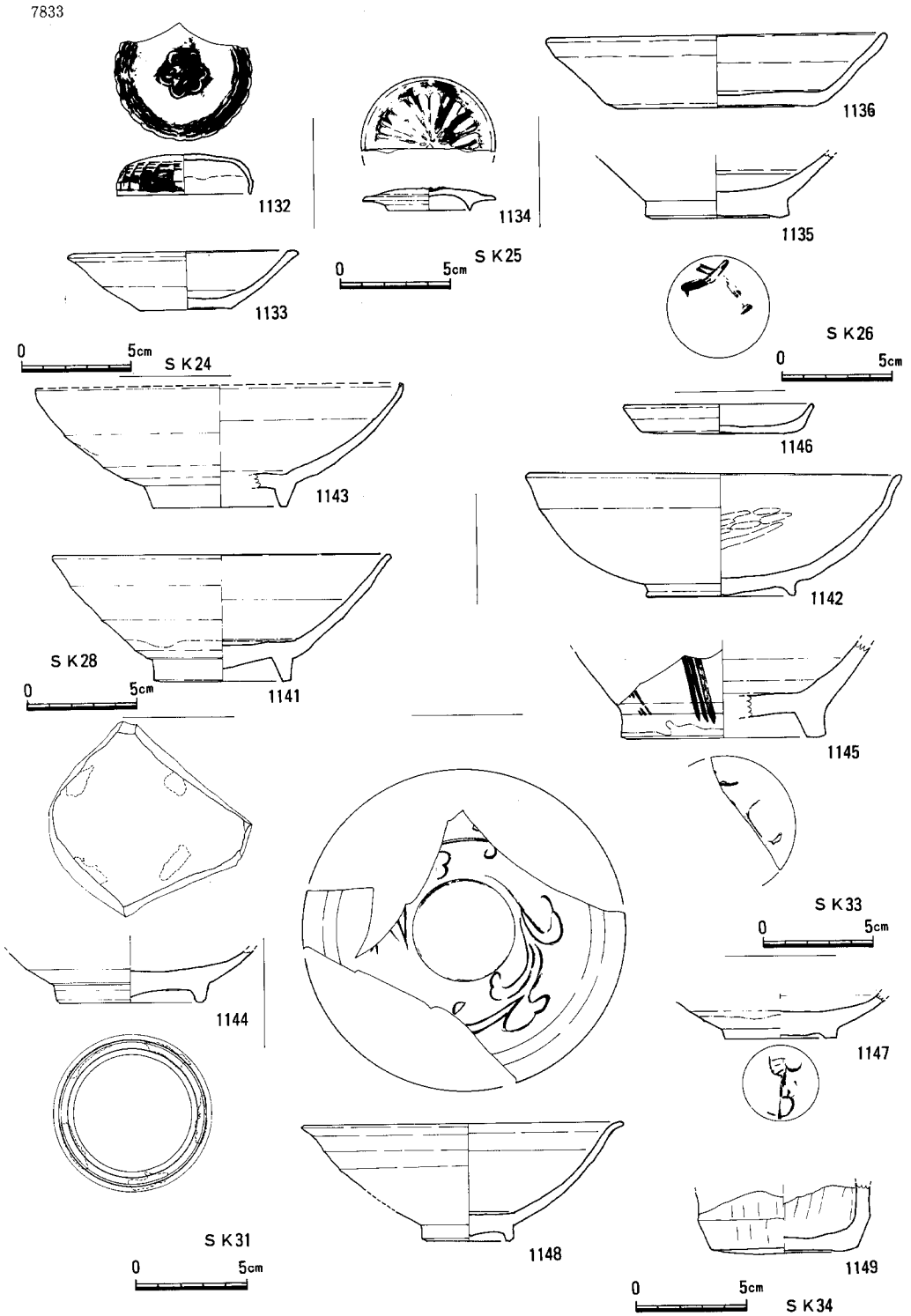


Fig.19 H区 SK24,SK25,SK26,SK28,SK31,SK33,SK34出土遺物 (1/3)

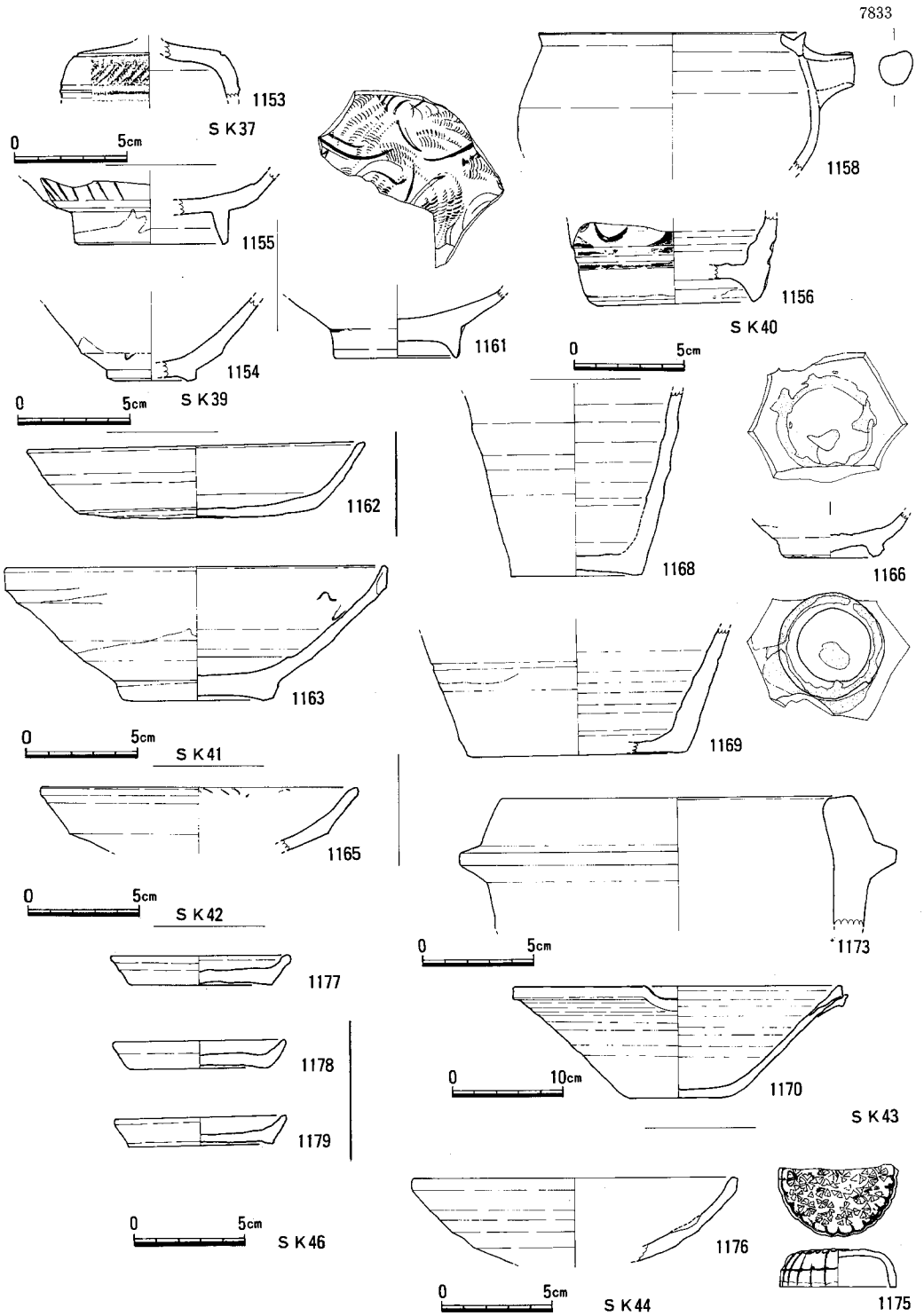


Fig.20 H区 SK37,SK39,SK40,SK41,SK42,SK43,SK44,SK46出土遺物（1/3 1170を除く）

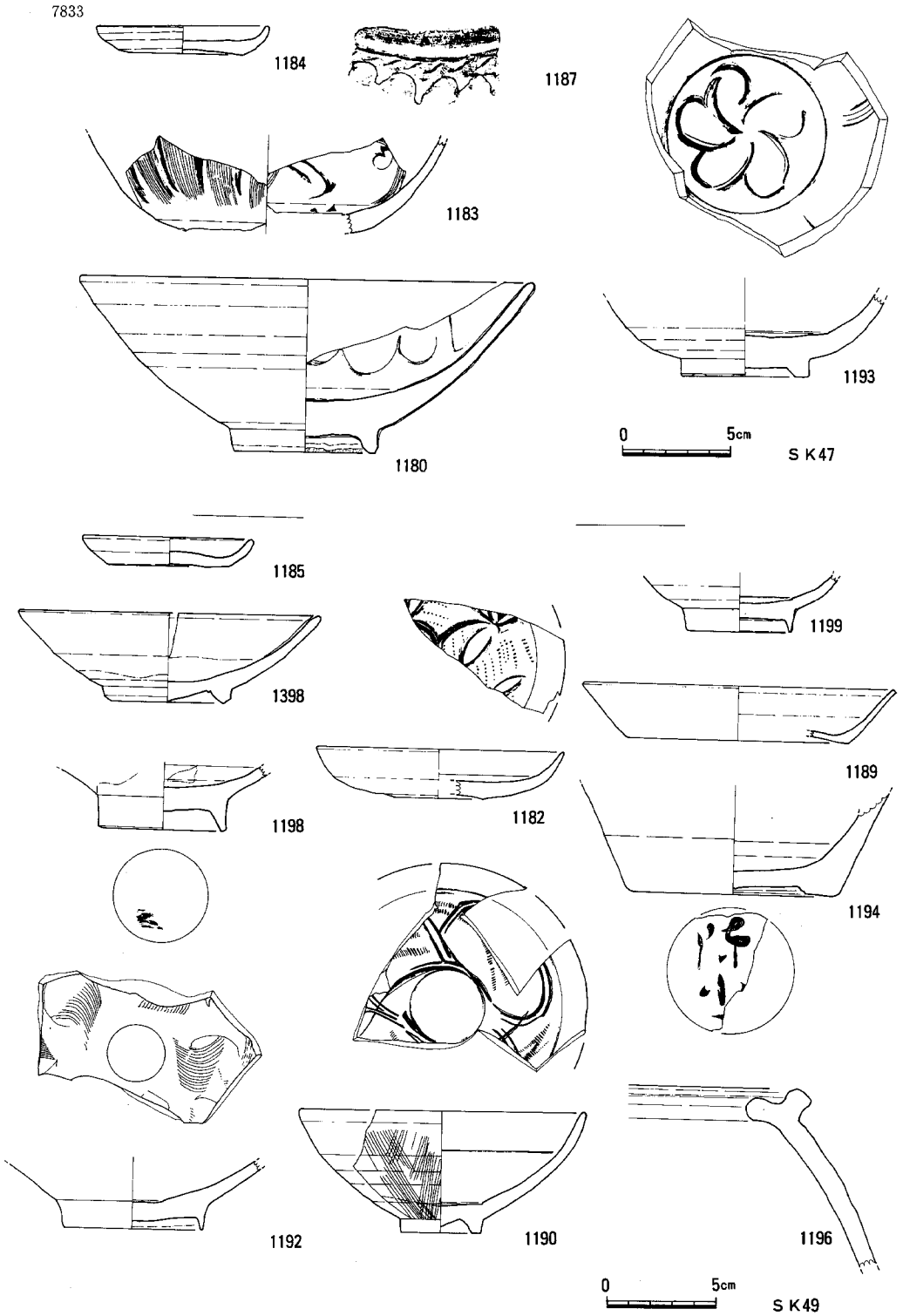


Fig.21 H区 SK47,SK49 出土遺物 (1/3)

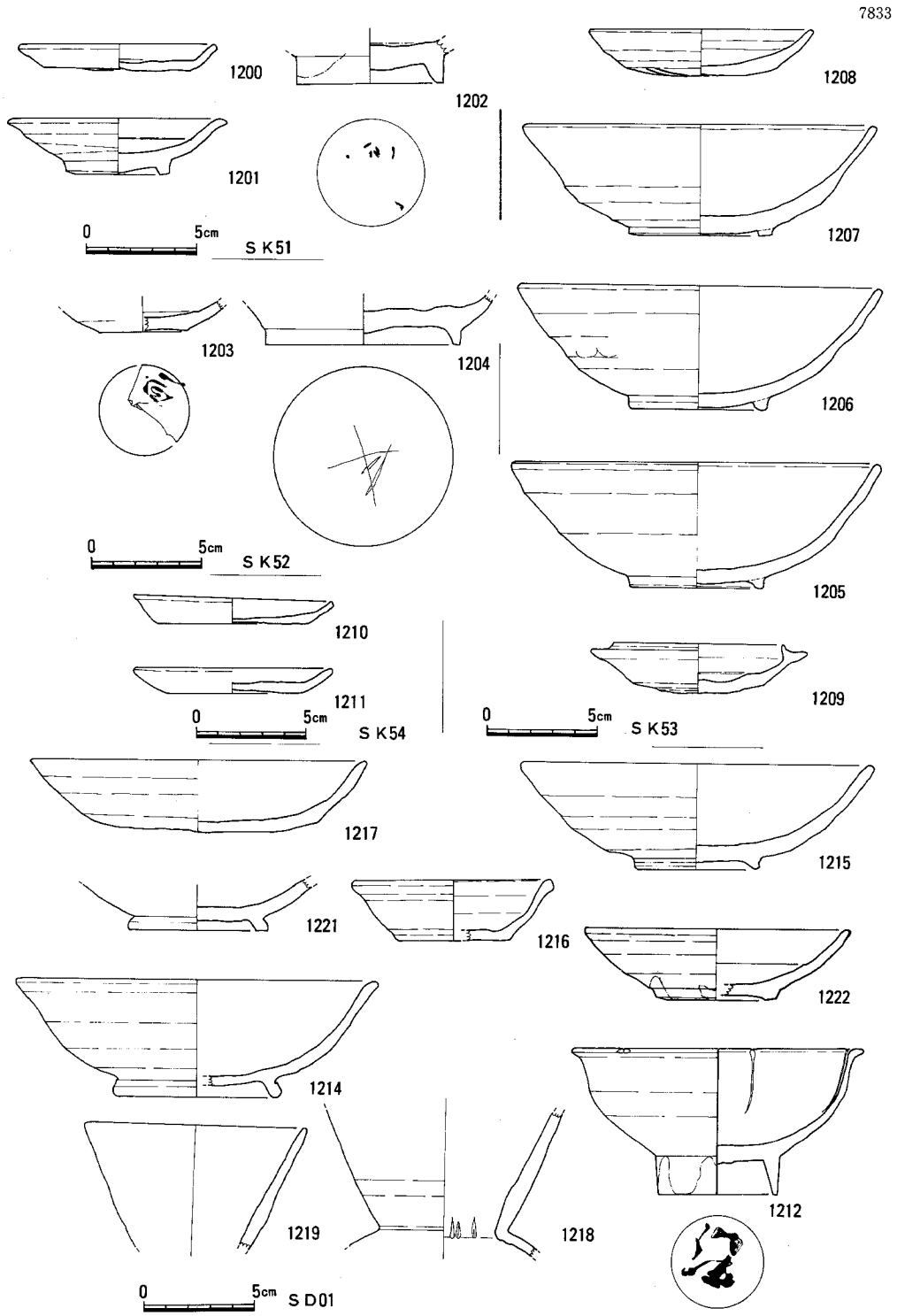


Fig.22 H区 SK51,SK52,SK53,SK54,SD01出土遺物 (1/3)

7833

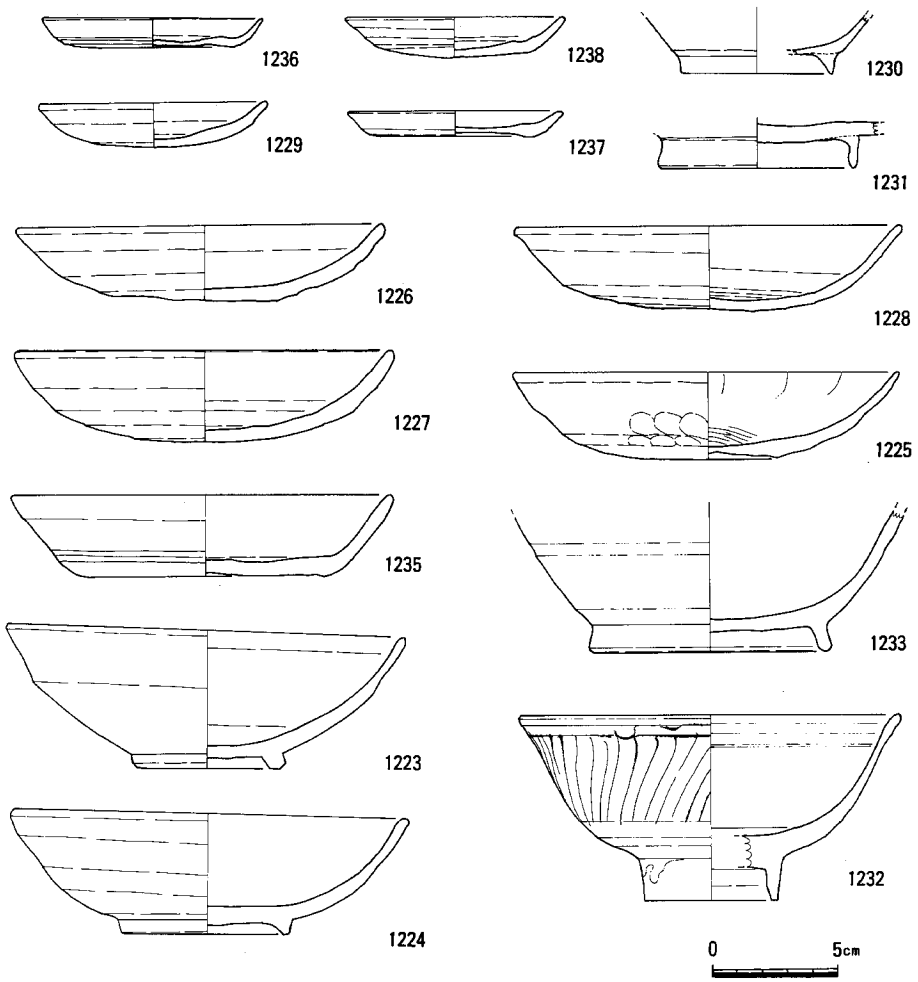


Fig.23 H区 SD03出土遺物 (1/3)

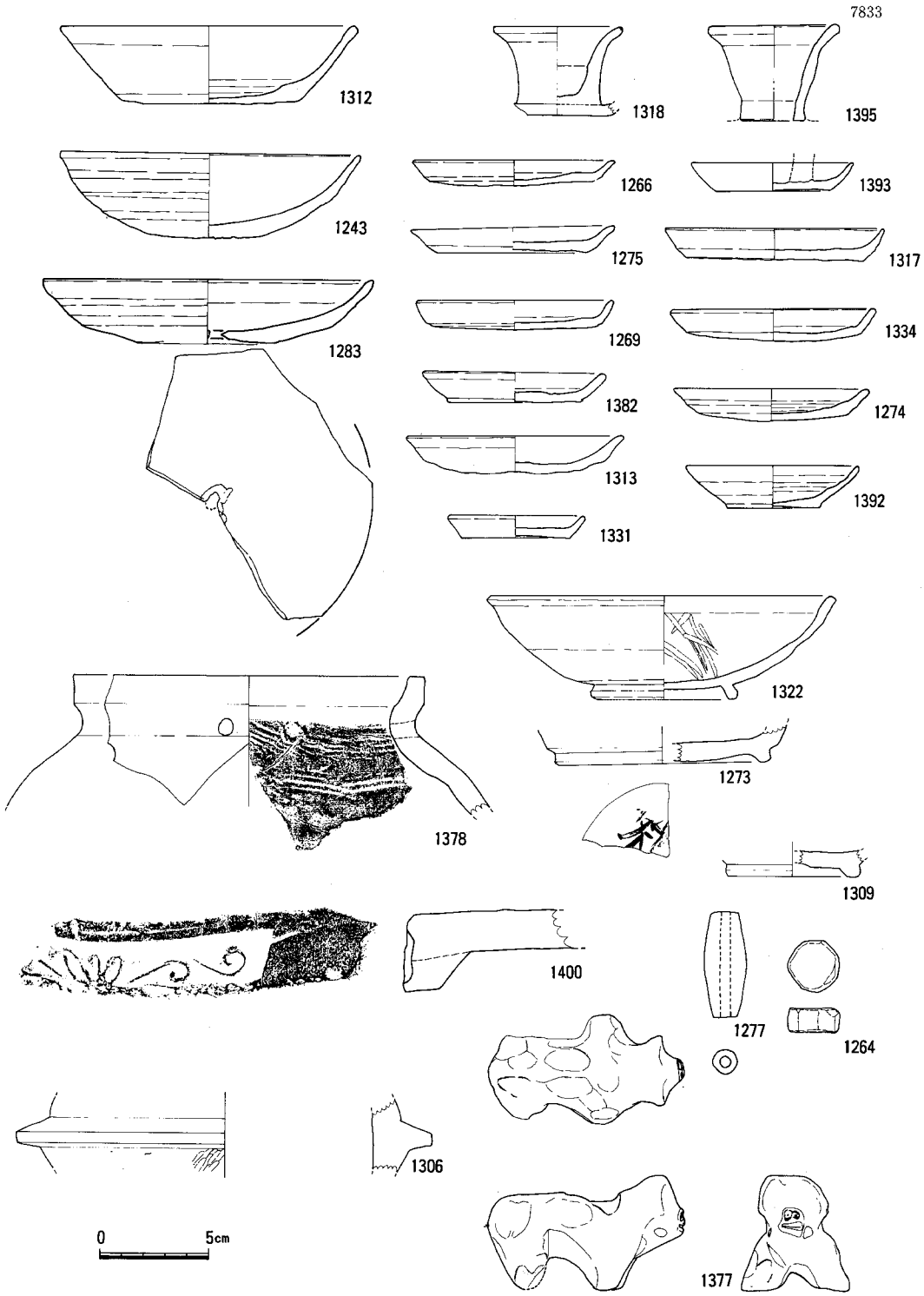


Fig.24 H区 遺構外(包含層)出土遺物(1) (1/3)

7833

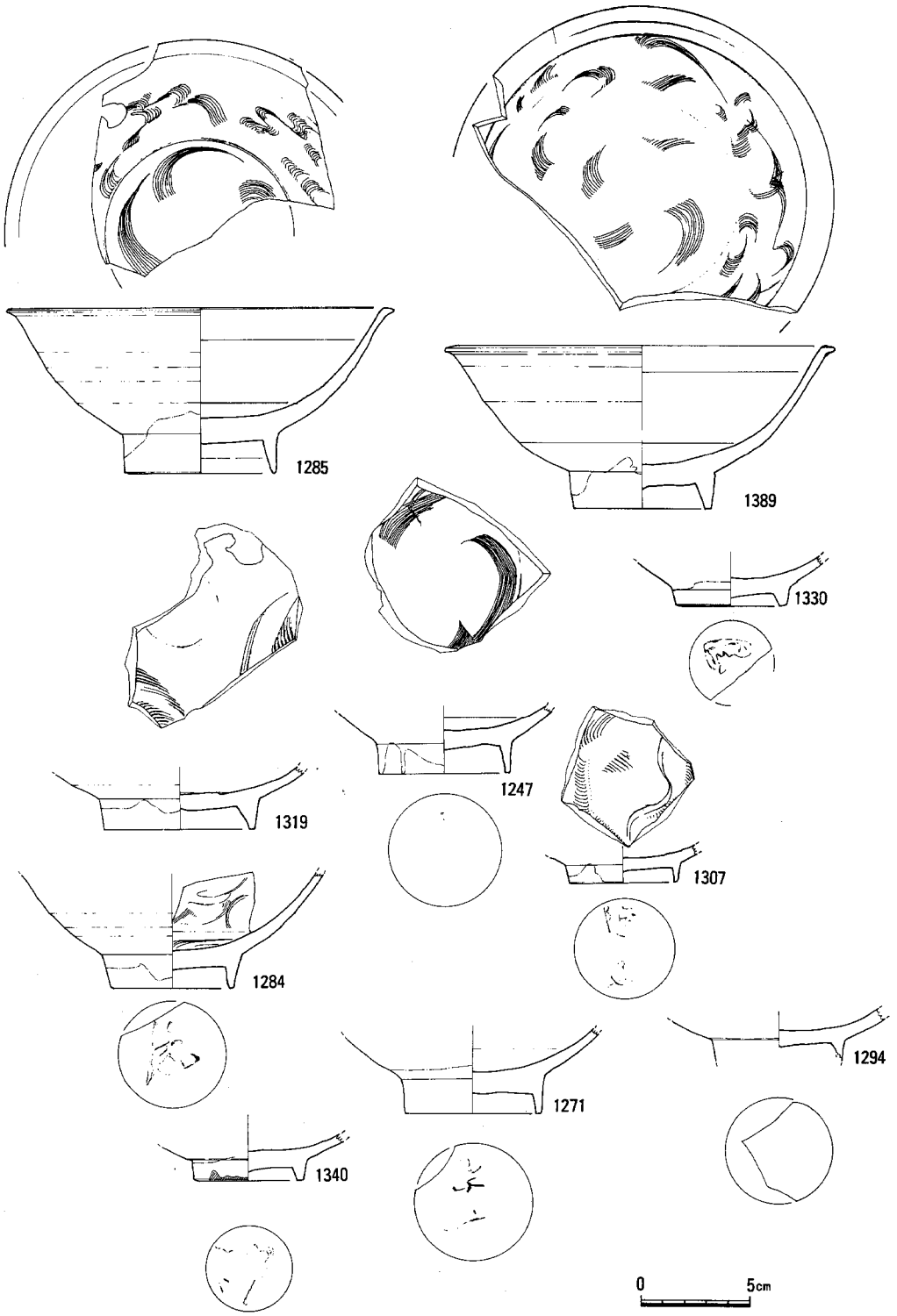


Fig.25 H区 遺構外(包含層)出土遺物(2) (1/3)

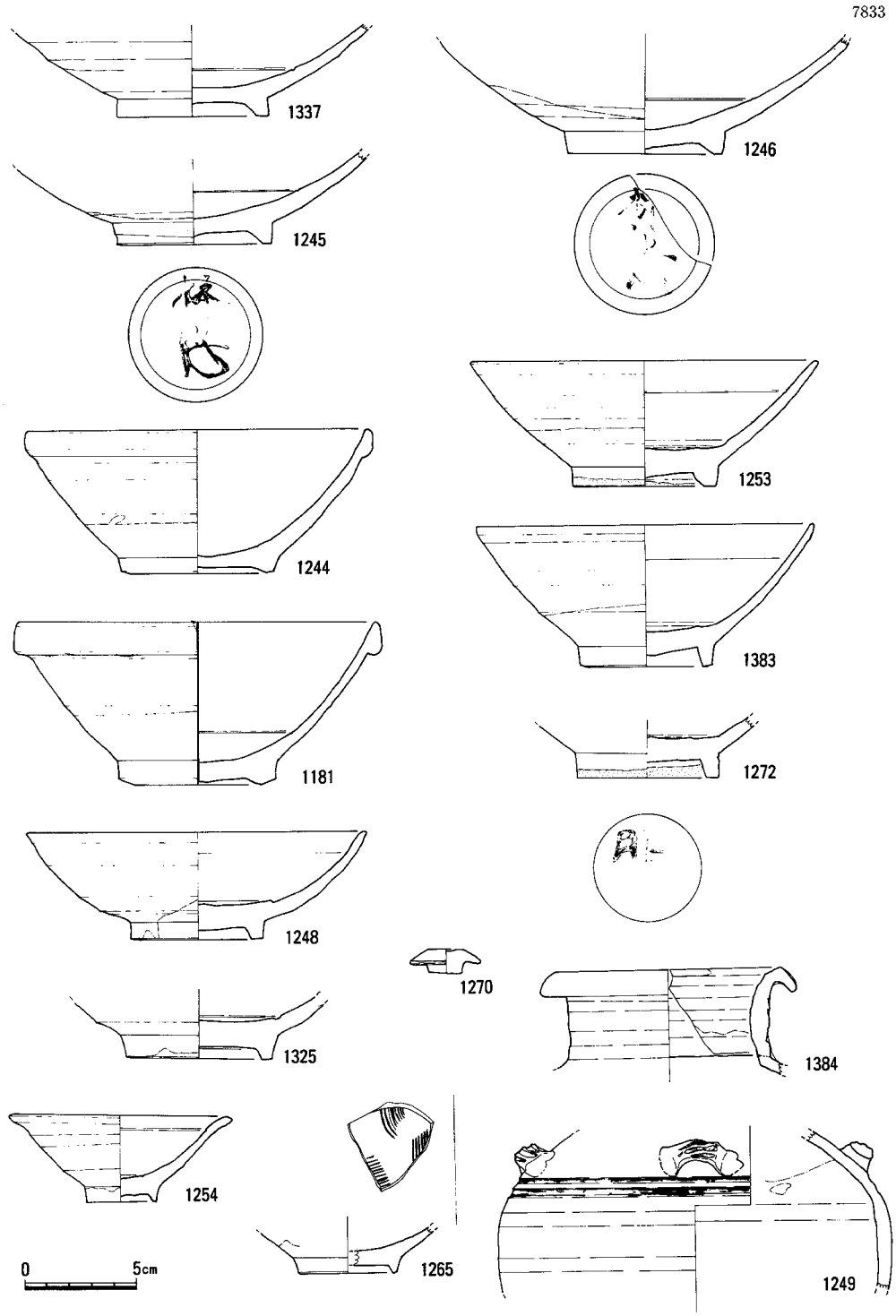


Fig.26 H区 遺構外(包含層)出土遺物(3) (1/3)

7833

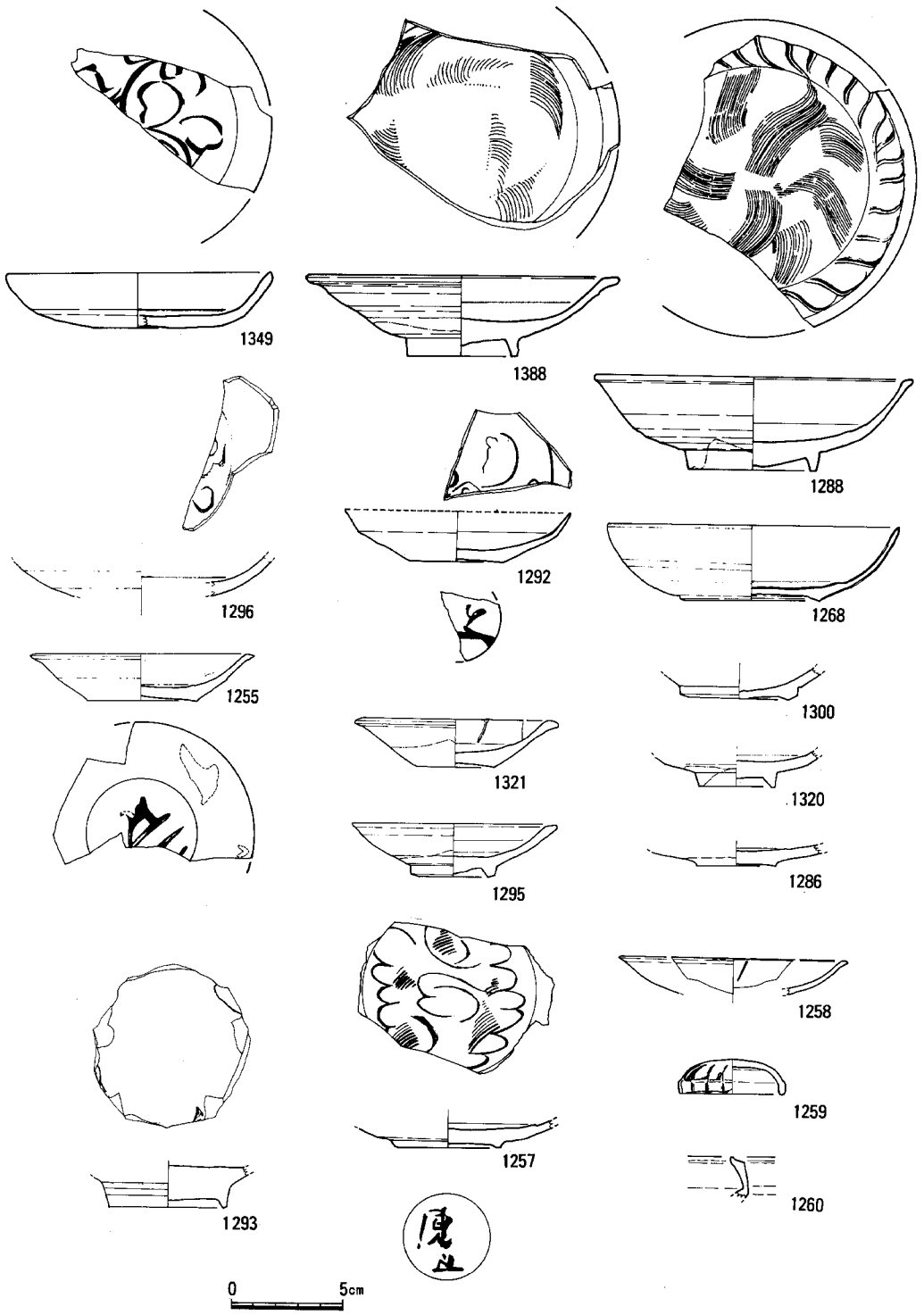


Fig.27 H区 遺構外(包含層)出土遺物(4) (1/3)

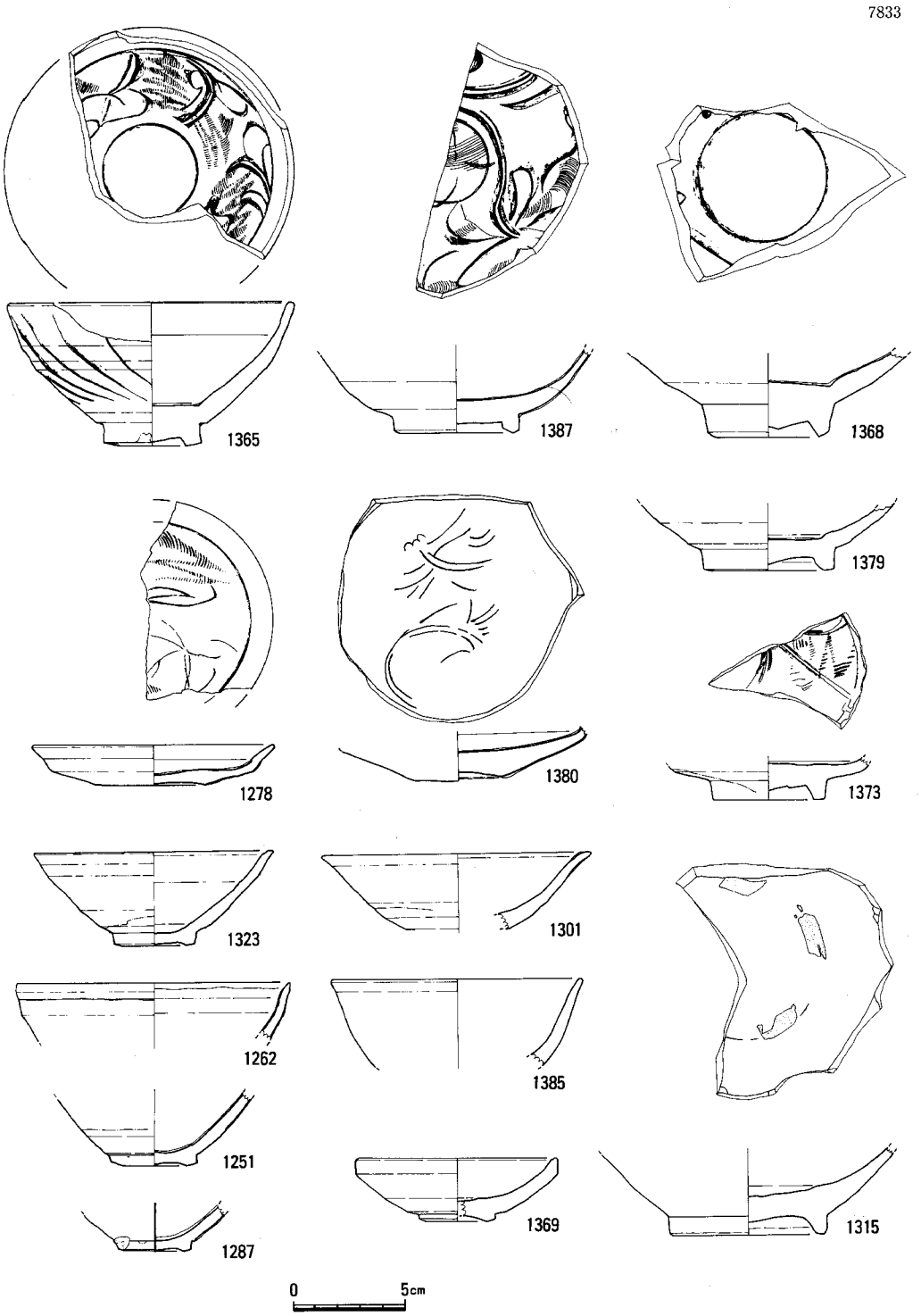


Fig.28 H区 遺構外(包含層)出土遺物(5) (1/3)

7833

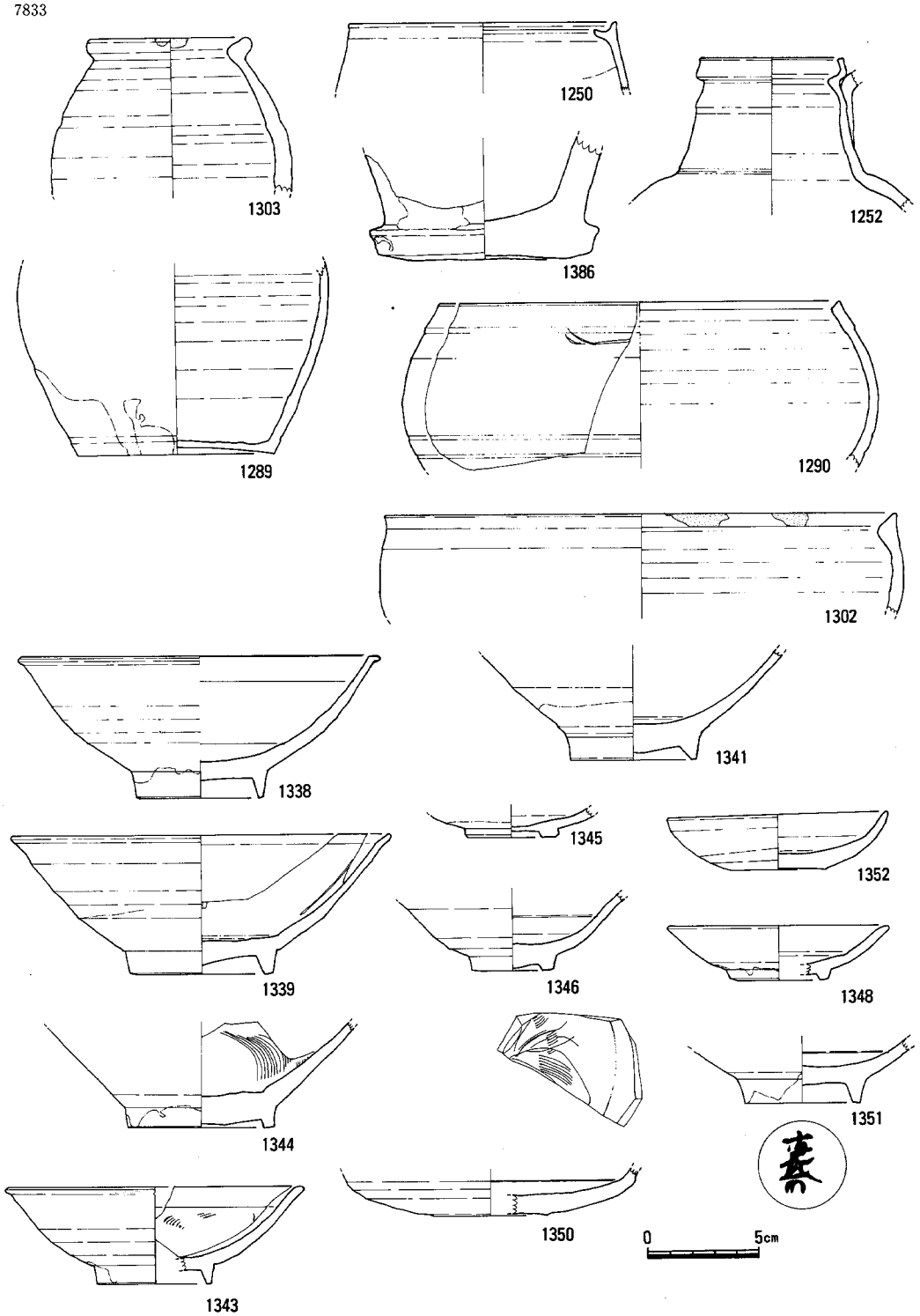


Fig.29 H区 遺構外(包含層、表土)出土遺物 (1/3)

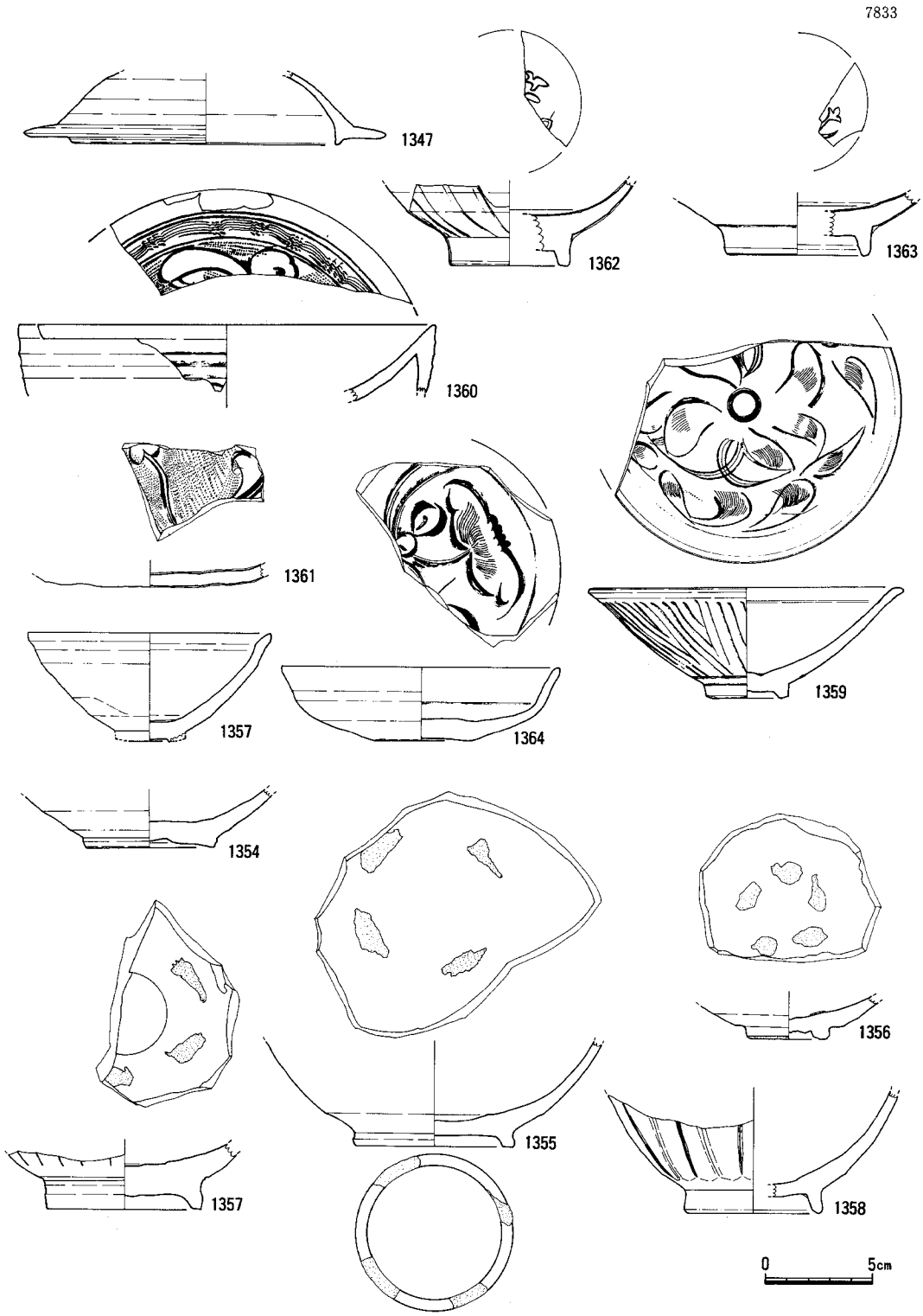


Fig.30 H区 遺構外(表土)出土遺物 (1/3)

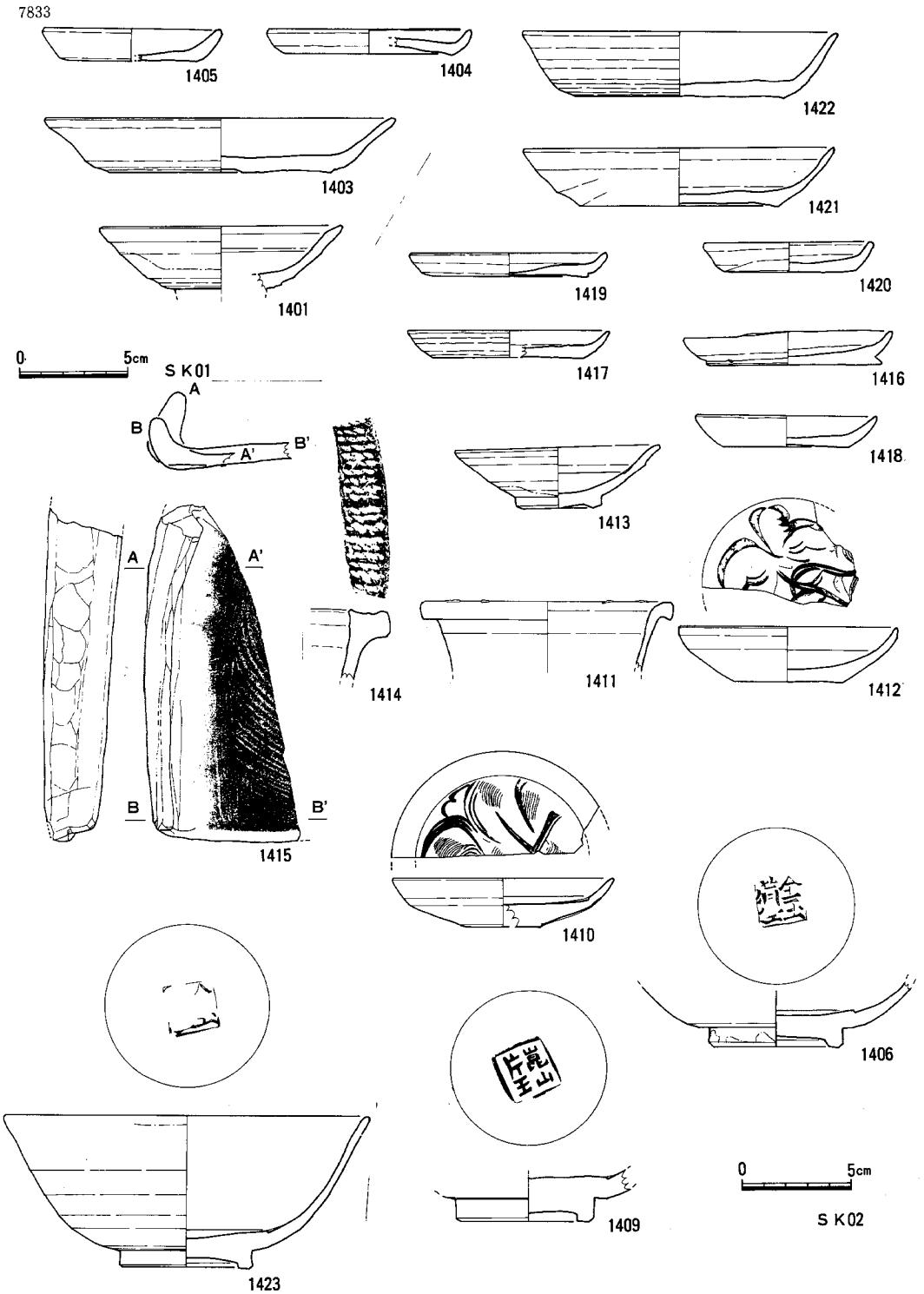


Fig.31 I区 SK01,SK02 出土遺物 (1/3)

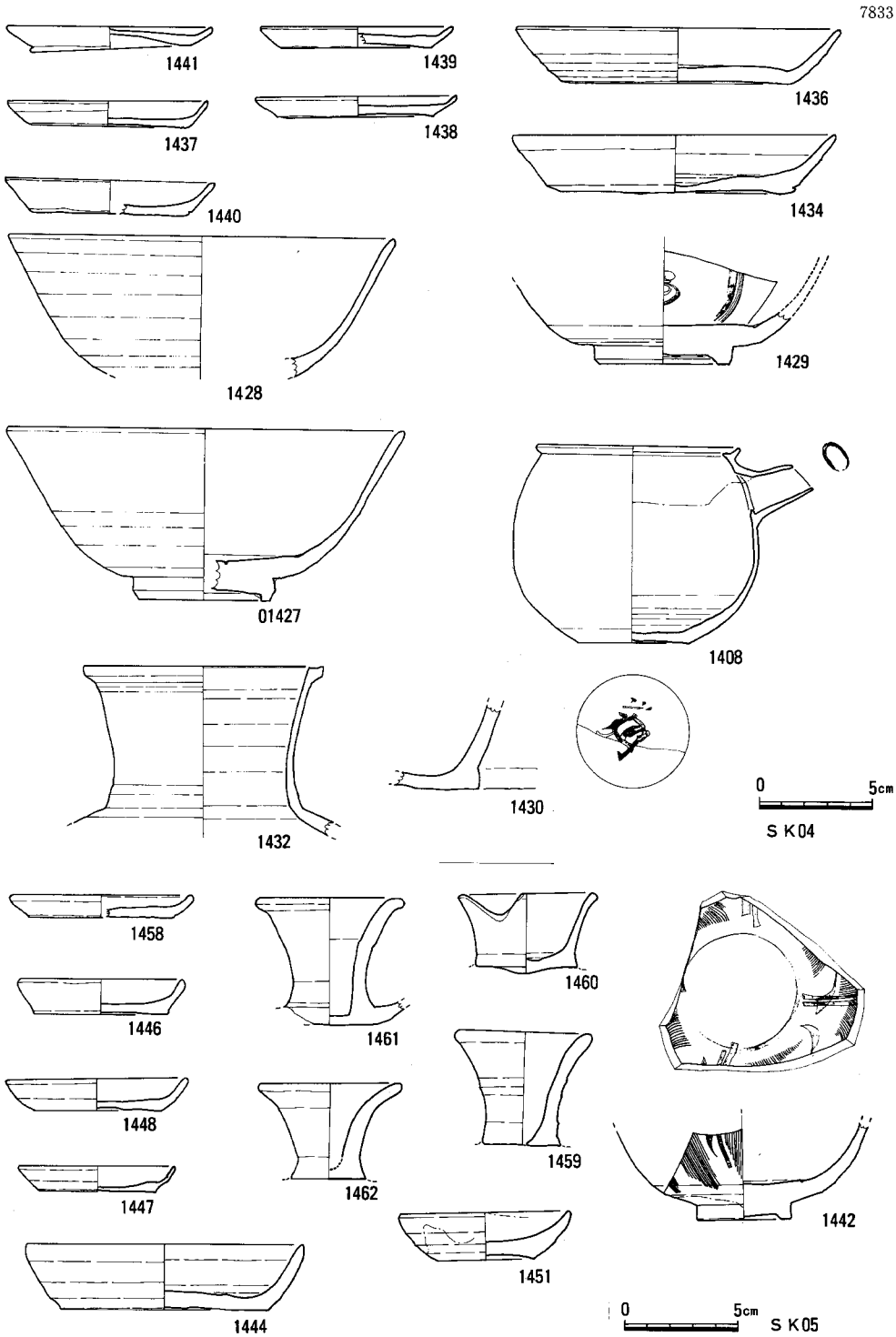


Fig.32 I区 SK04,出土遺物とSK05出土遺物(1) (1/3)

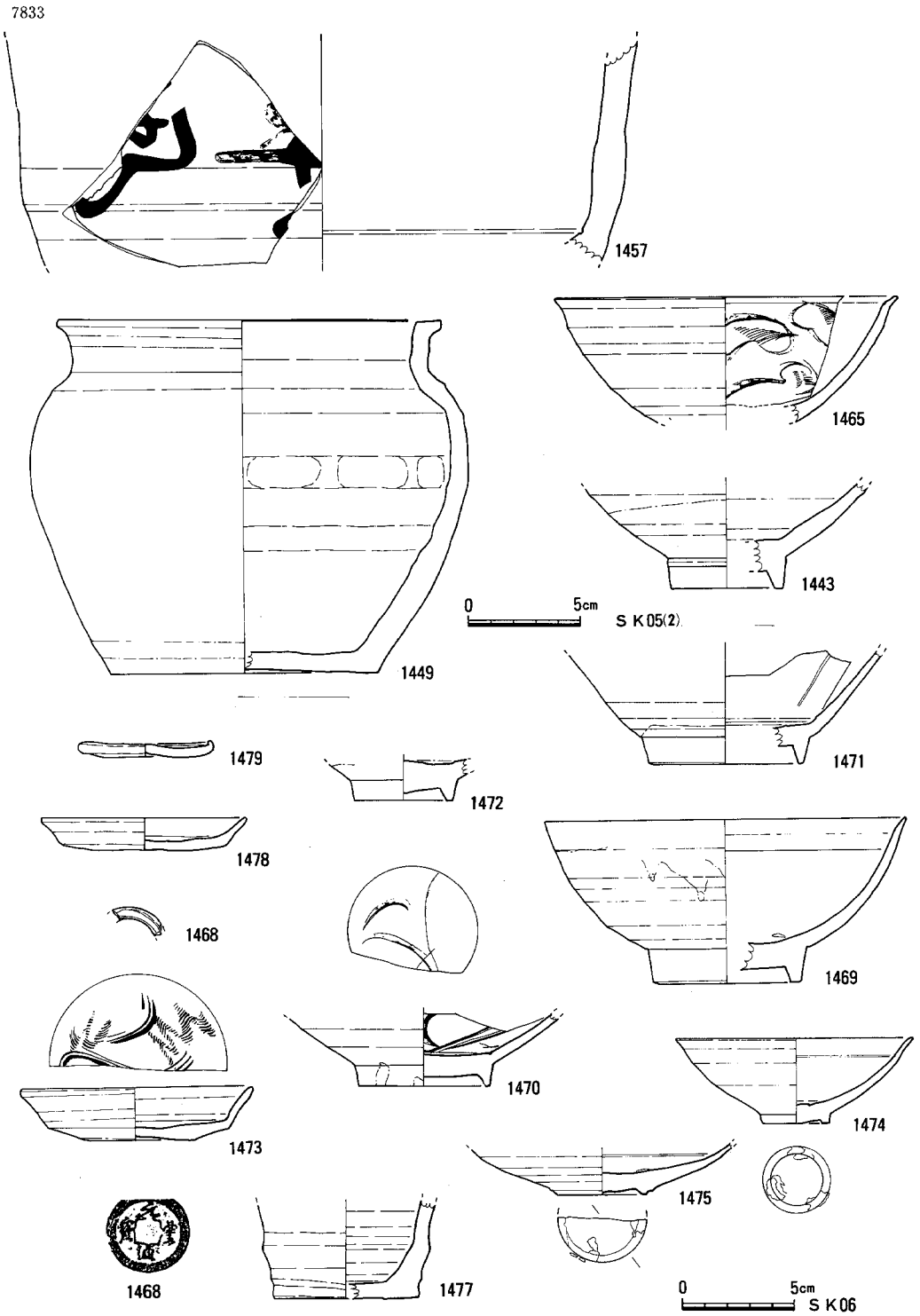


Fig.33 I区 SK05出土遺物(2), SK06出土遺物 (1/3, 1468を除く)

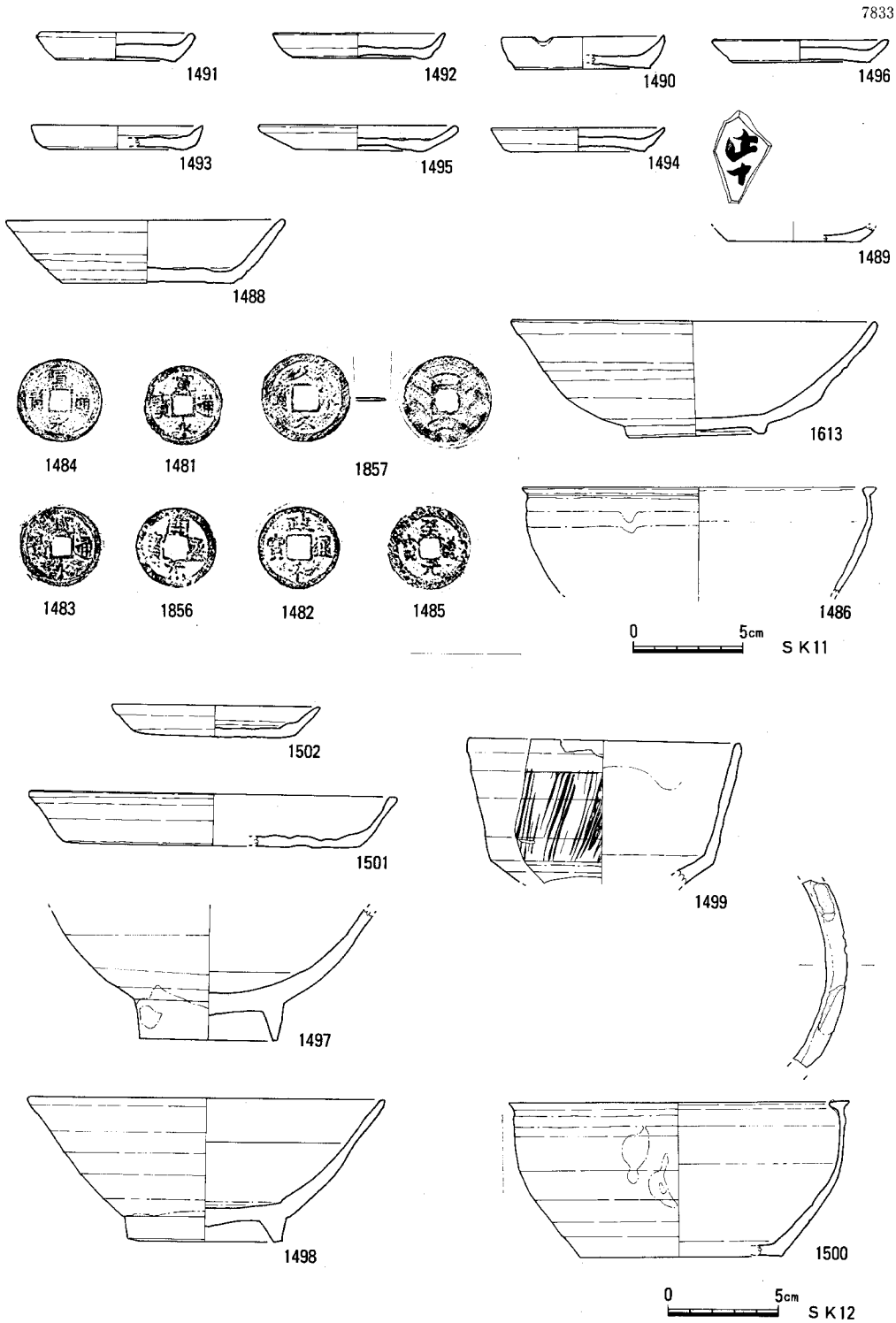


Fig.34 SK11,SK12 出土遺物（1/3,銅銭を除く）

7833

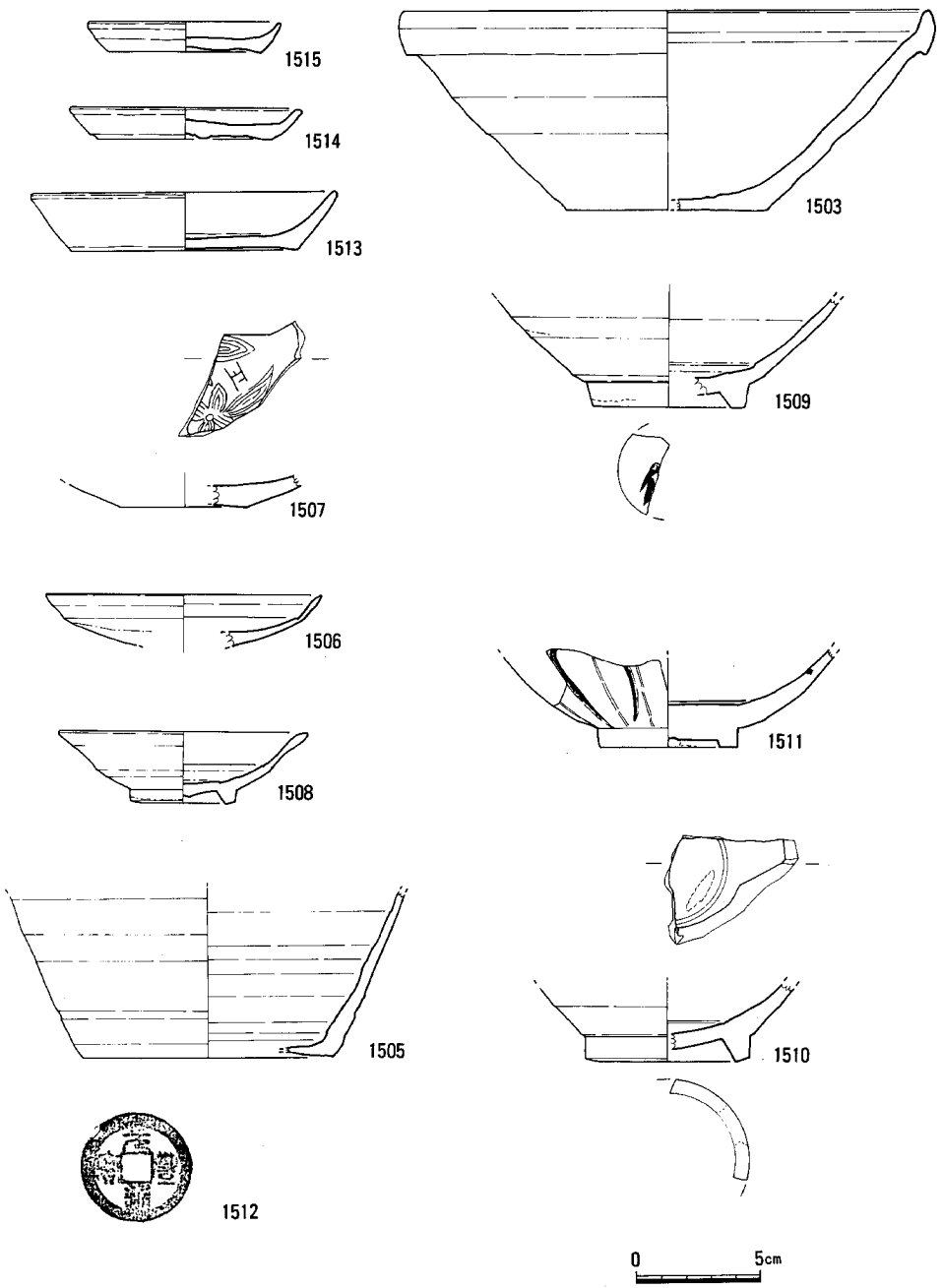


Fig.35 I区 SK13 出土遺物 (1/3,1512を除く)

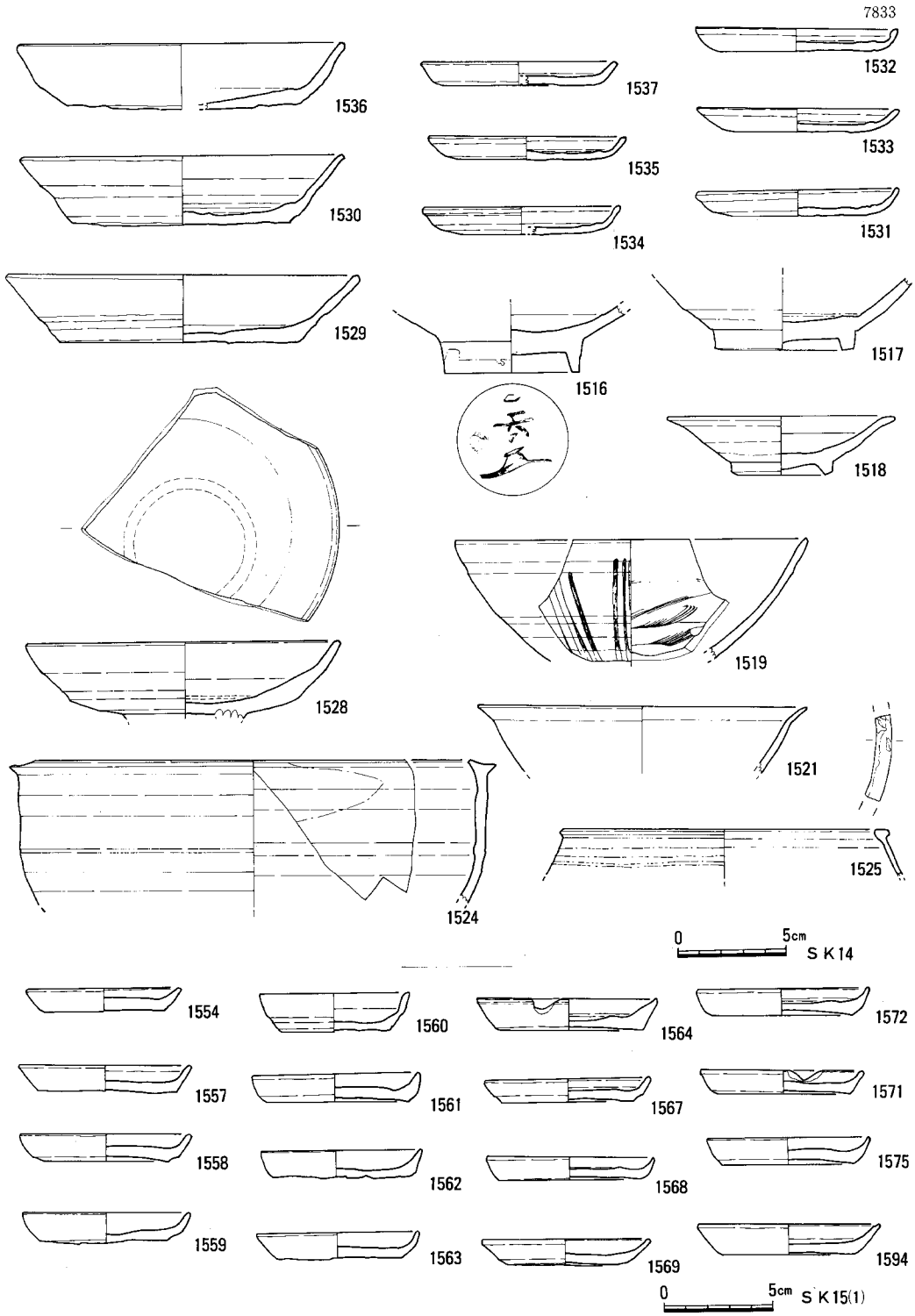


Fig.36 I区 SK14出土遺物とSK15出土遺物(1) (1/3)

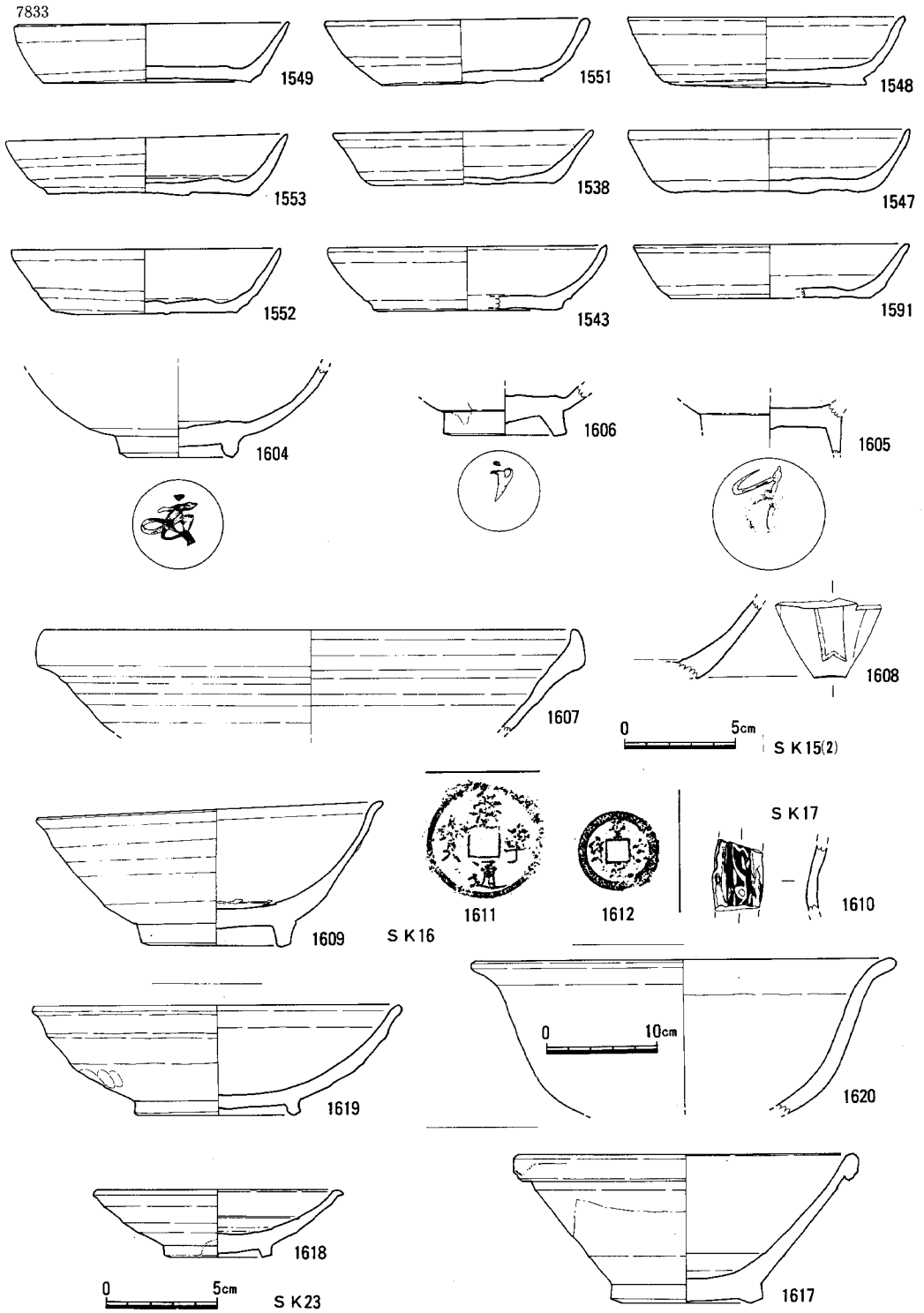


Fig.37 I区 SK15出土遺物(2)とSK16,SK17,SK23出土遺物 (1/3,1611,1612,1620を除く)

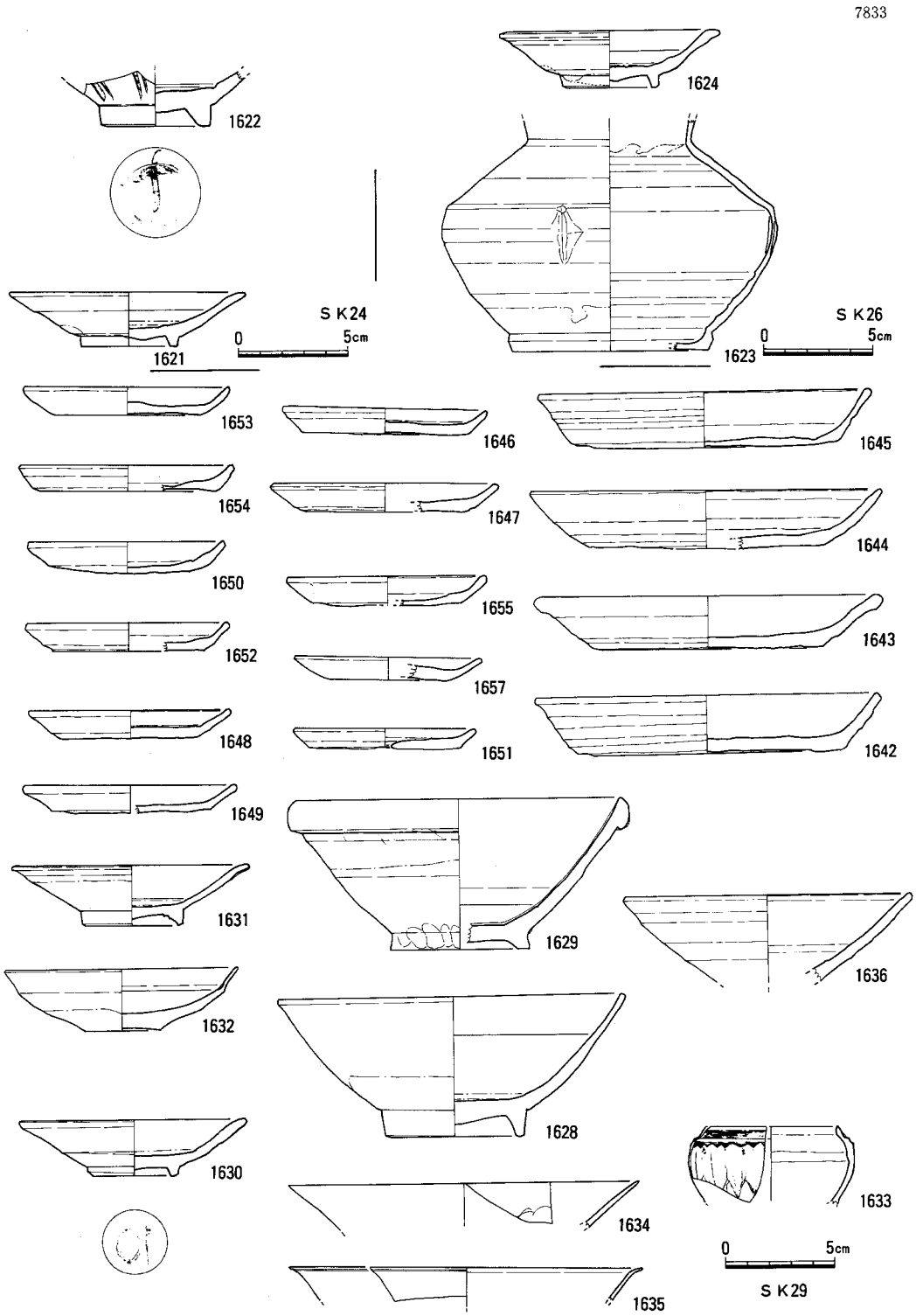


Fig.38 I区 SK24,SK26,SK29 出土遺物 (1/3)

7833

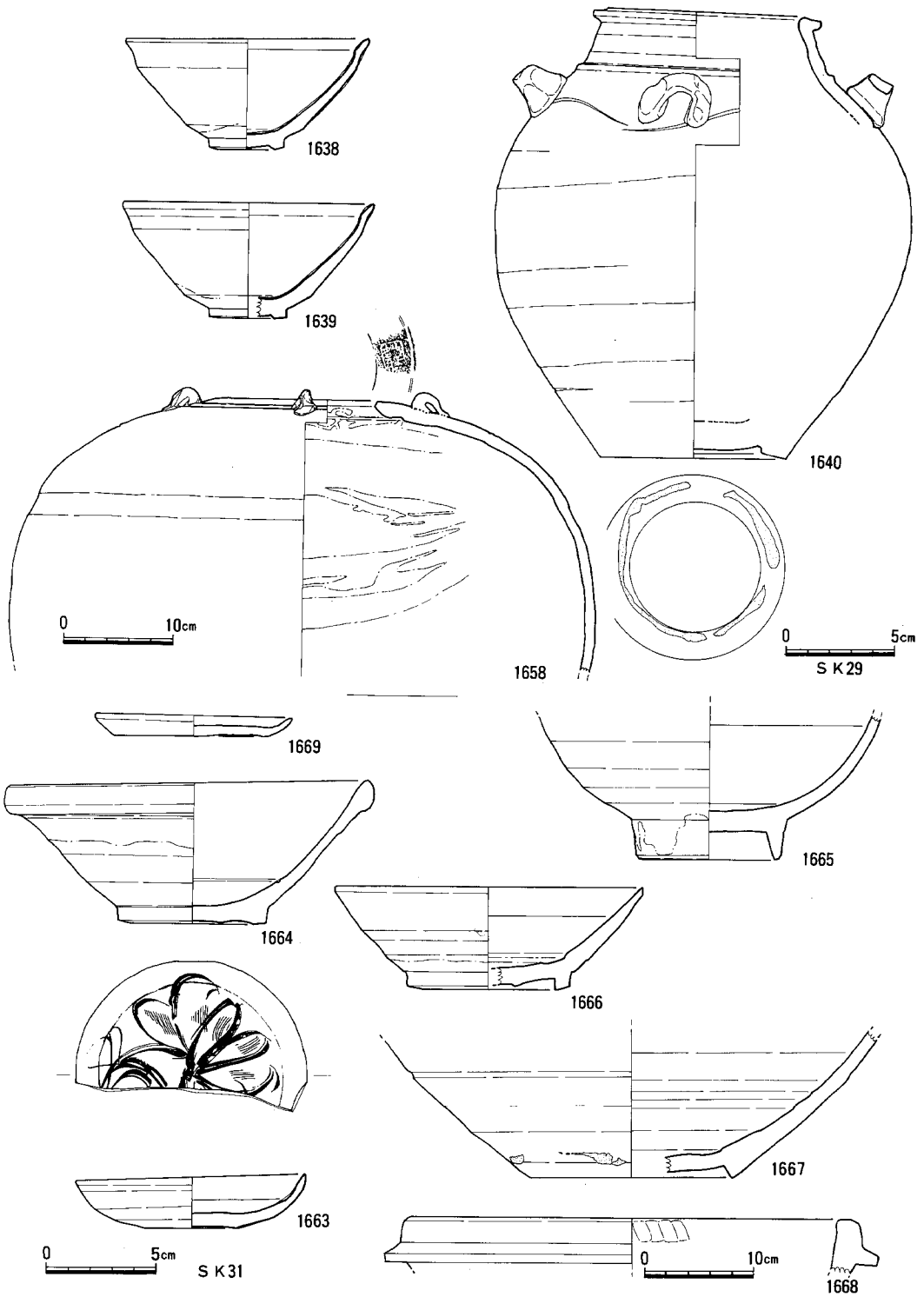


Fig.39 I区 SK29,SK31出土遺物（1/3, 1658,1668を除く）

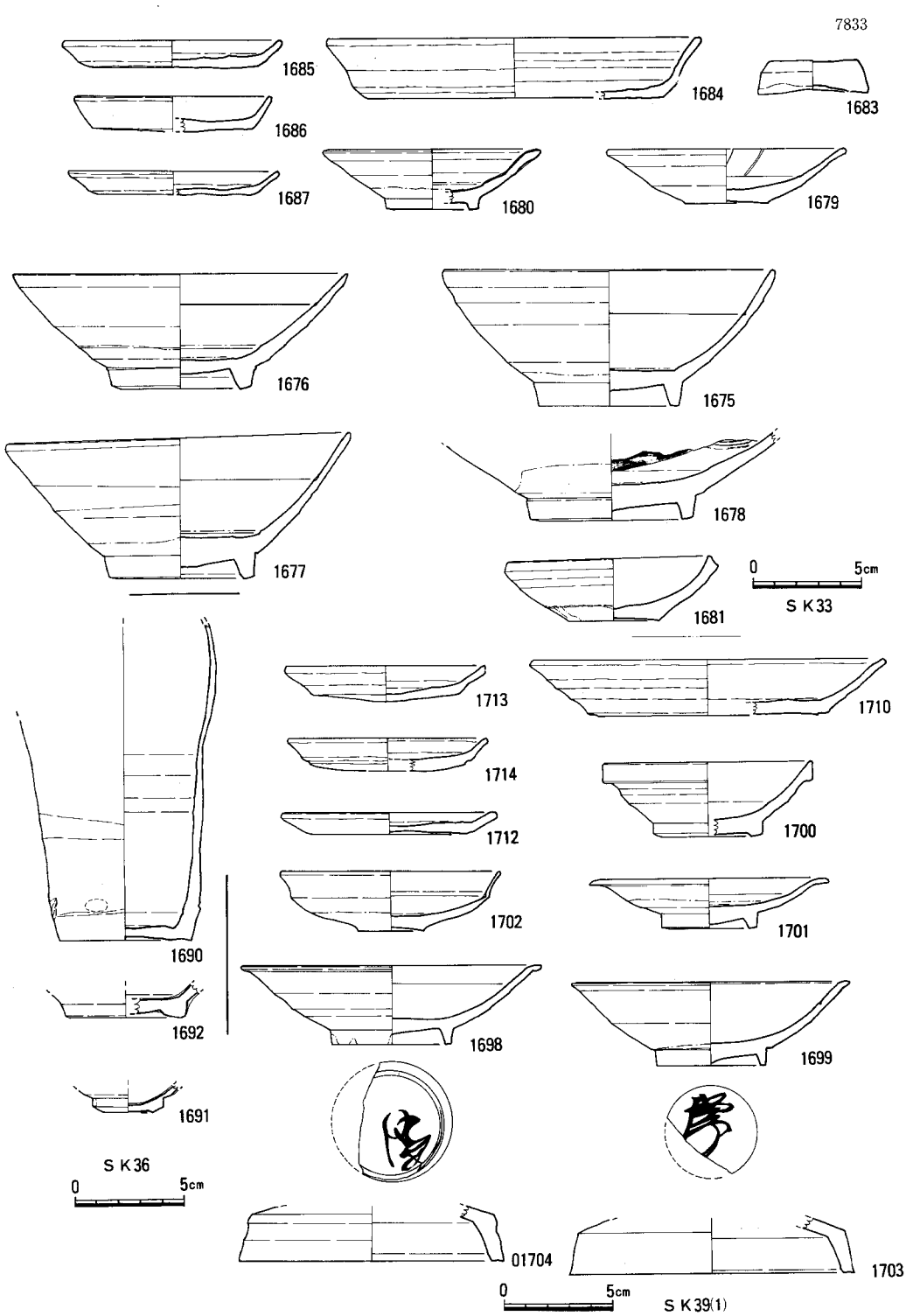


Fig.40 I区 SK33,SK36出土遺物とSK39出土遺物(1) (1/3)

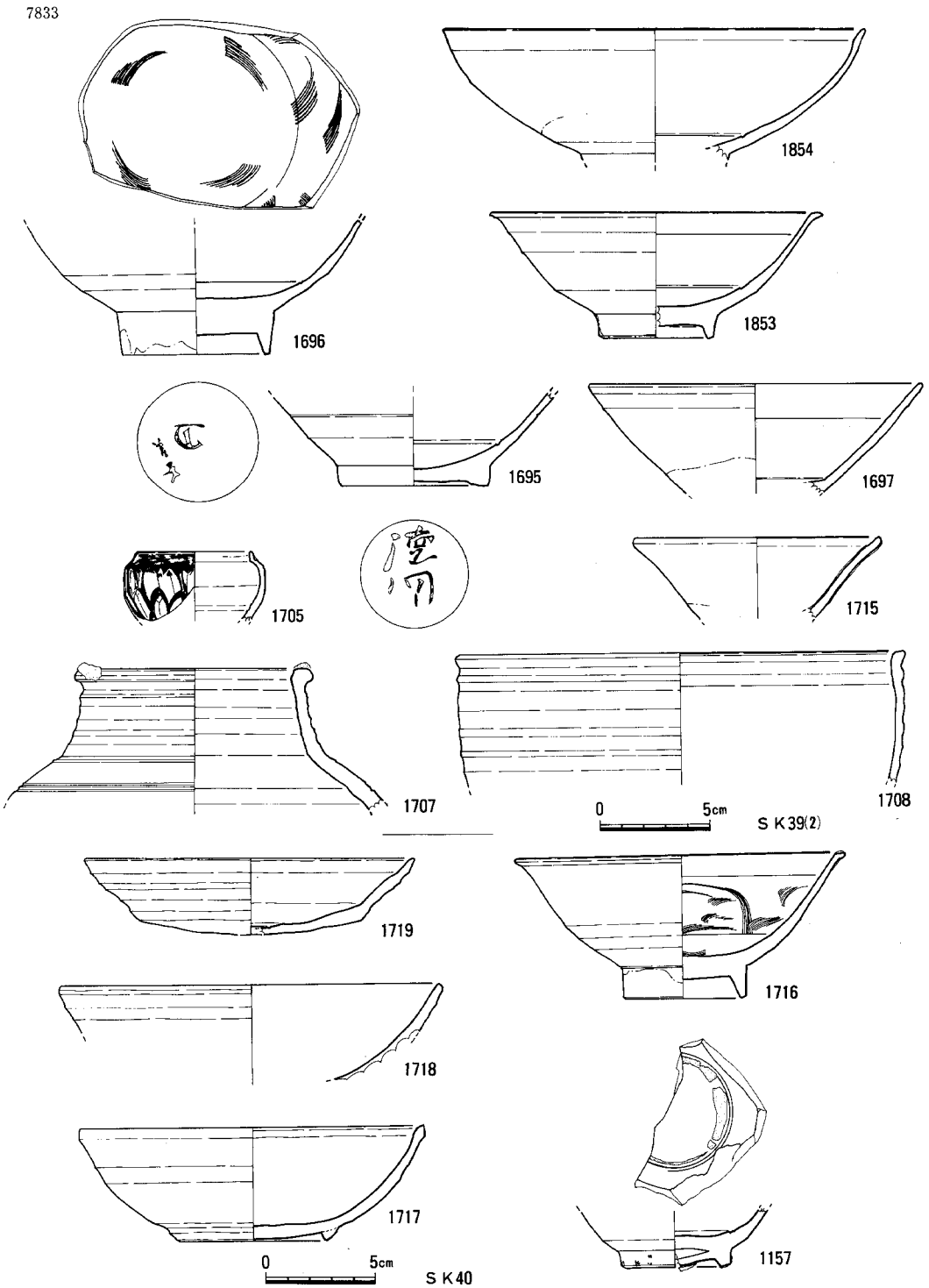


Fig.41 I区 SK39出土遺物(2)とSK40出土遺物 (1/3)

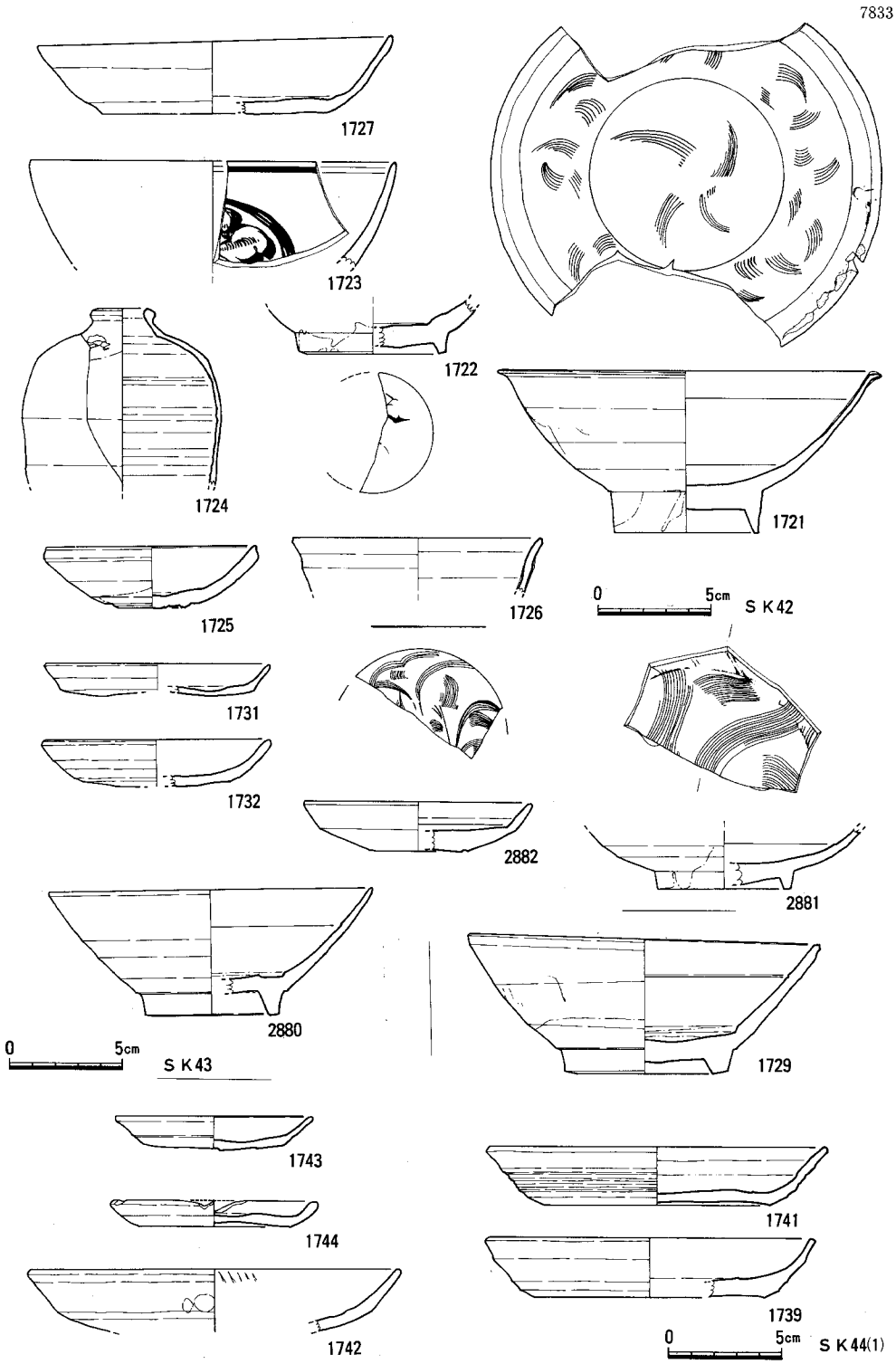


Fig.42 I区 SK42,SK43出土遺物と SK44出土遺物(1) (1/3)

7833

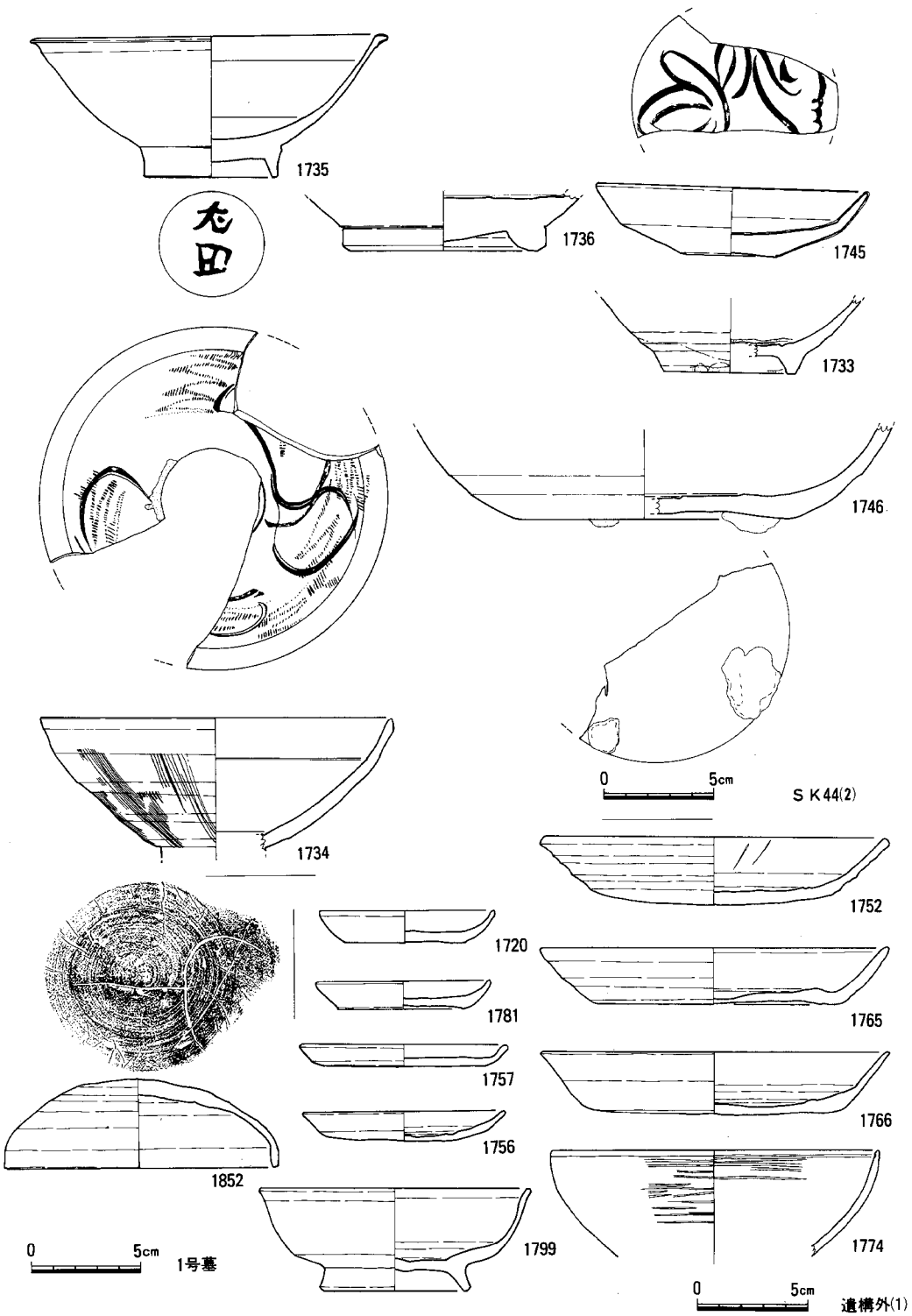


Fig.43 I区 SK44出土遺物(2),1号墓出土遺物,遺構外(包含層)出土遺物(1) (1/3)

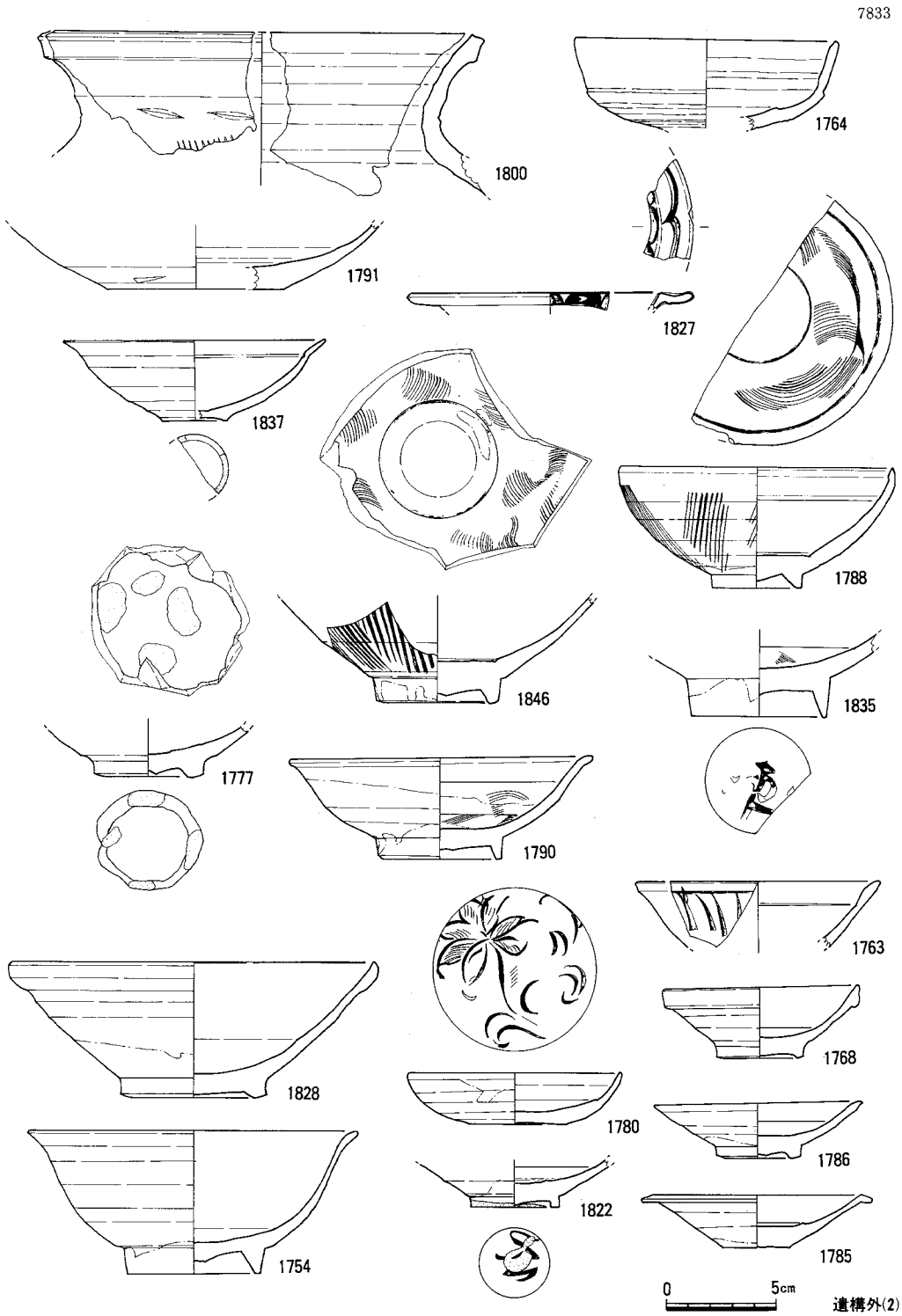


Fig.44 I区 遺構外(包含層)出土遺物(2) (1/3)

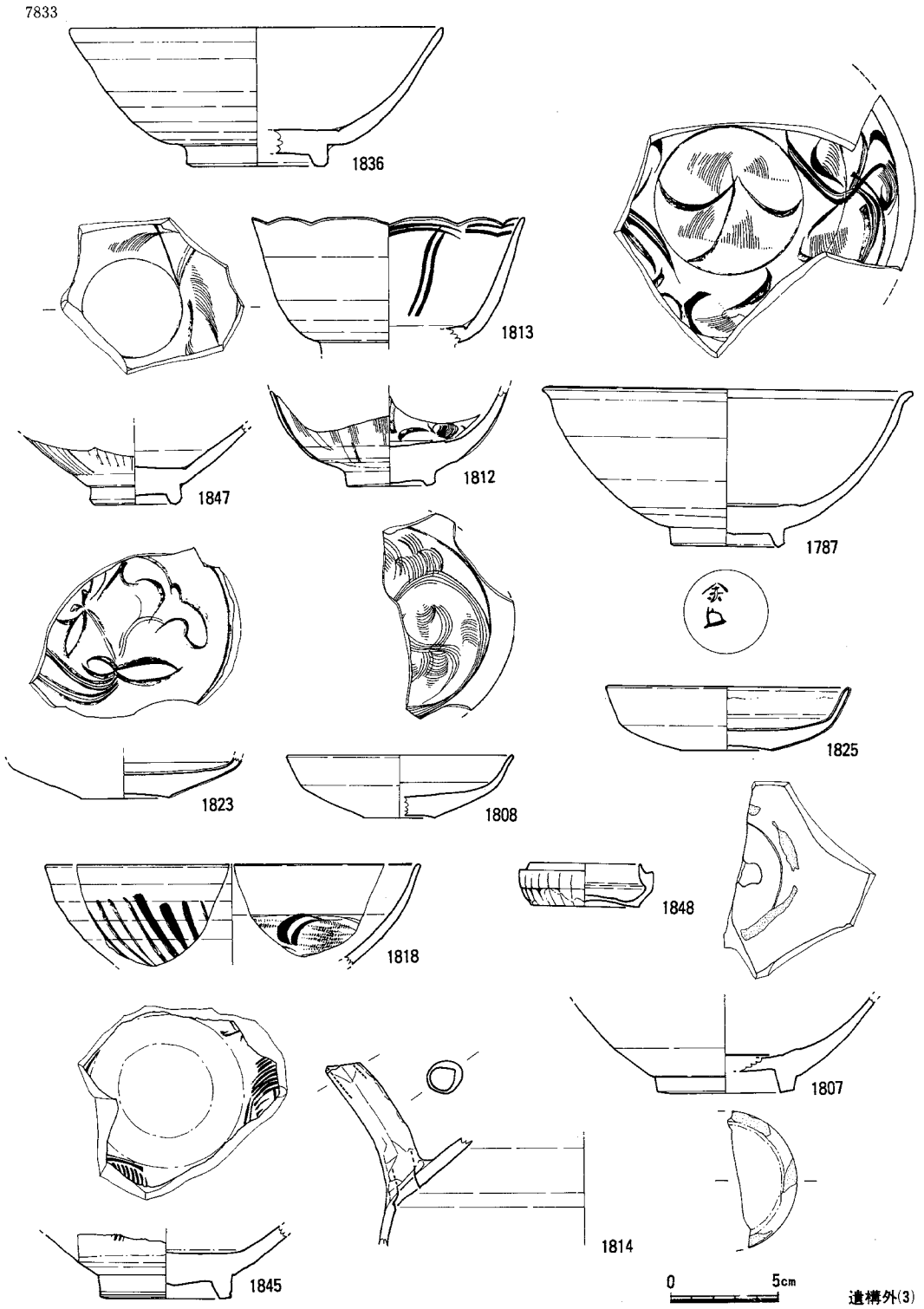


Fig.45 I区 遺構外(表土)出土遺物(3) (1/3)

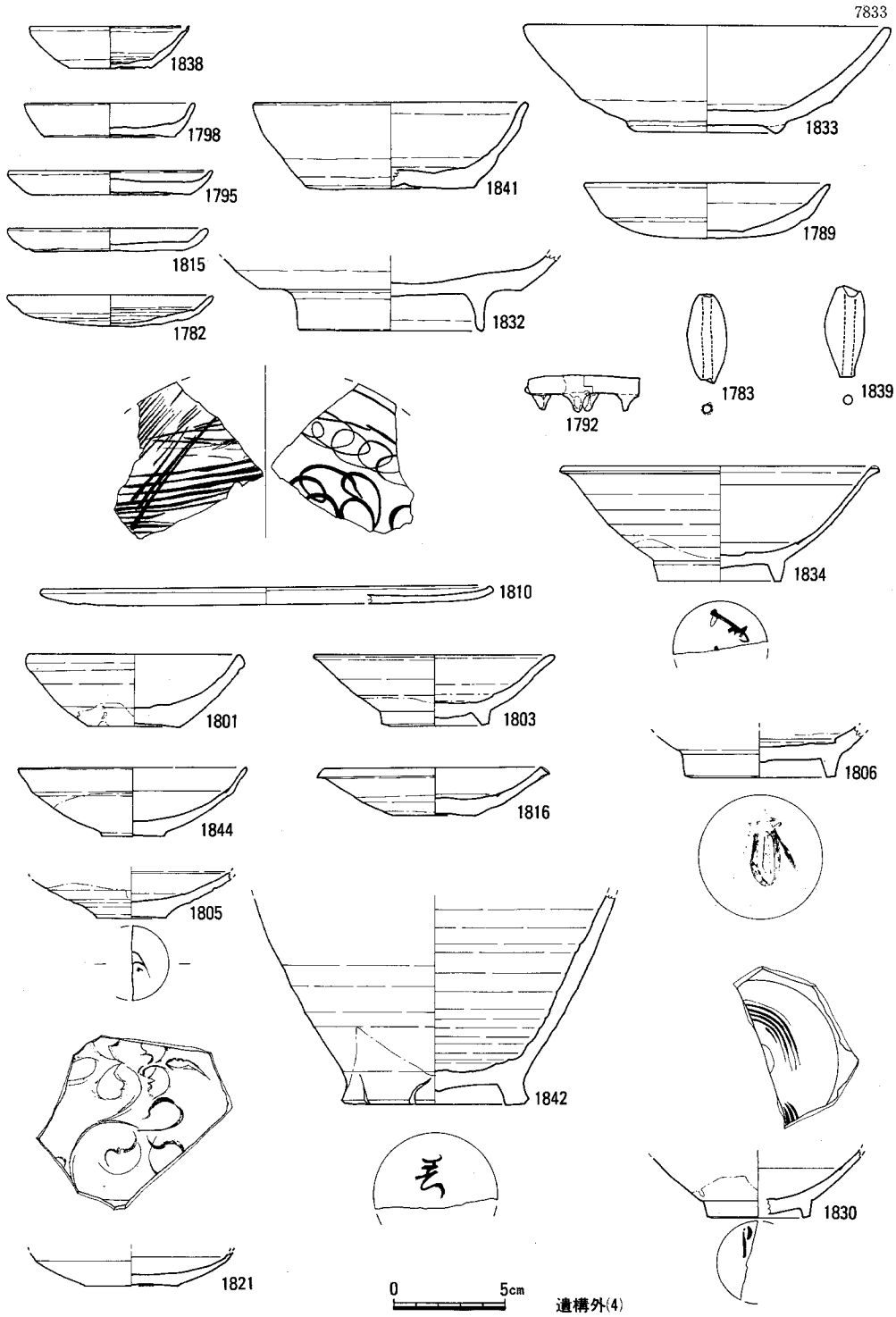


Fig.46 I区 遺構外(表土,撹乱)出土遺物(4) (1/3)

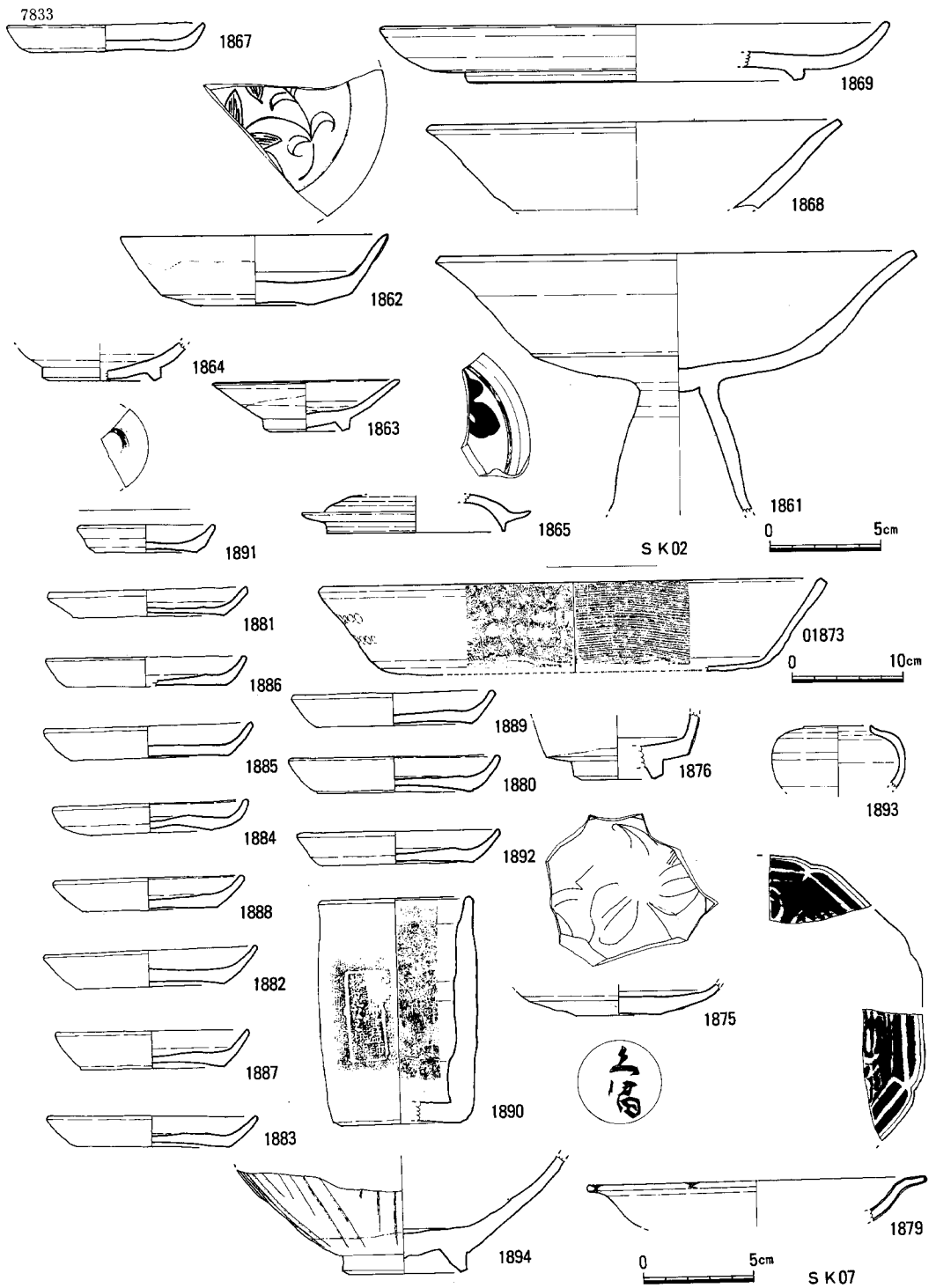


Fig.47 J区 SK02,SK07 出土遺物（1/3, 1873を除く）

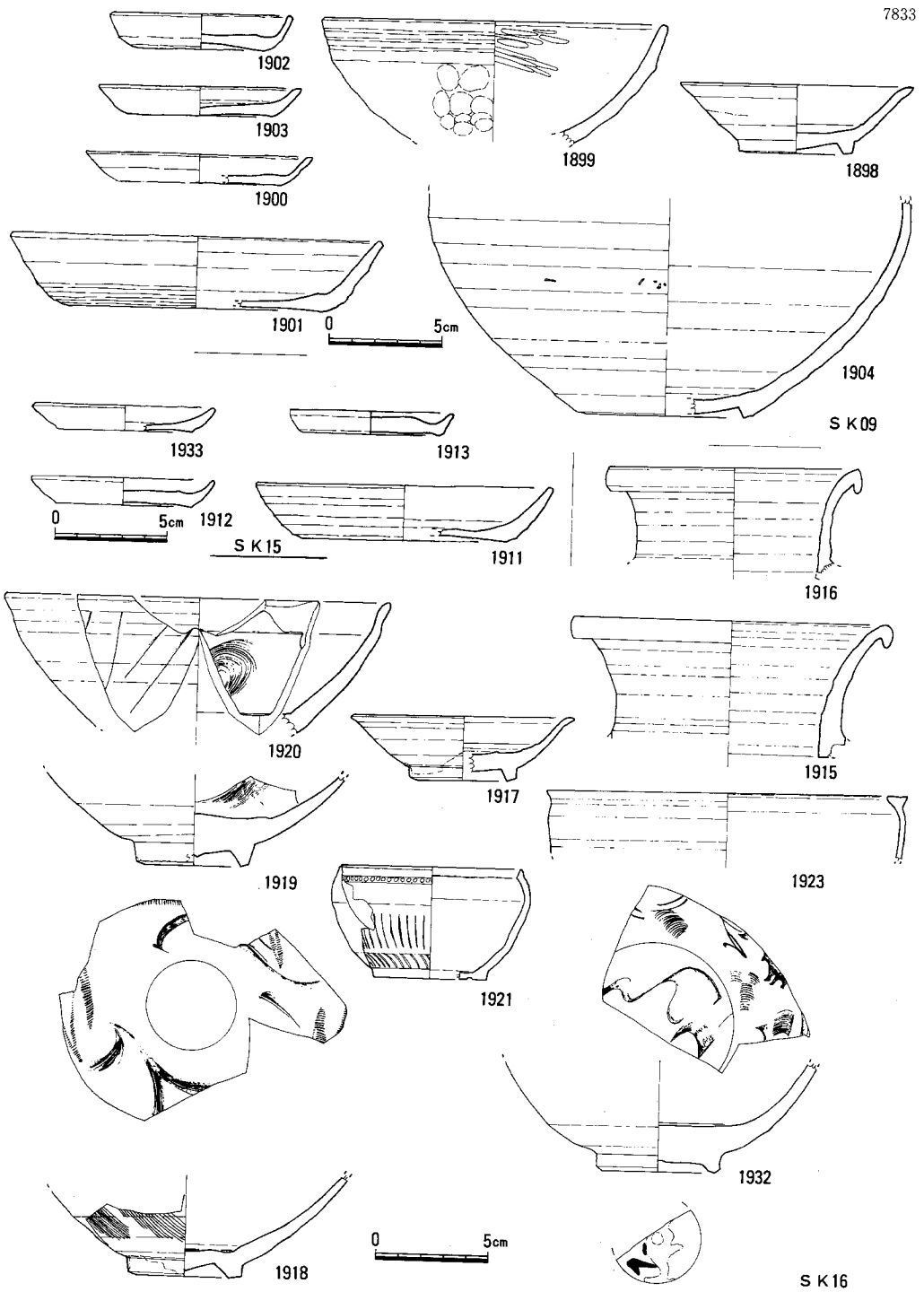


Fig.48 J区 SK09,SK15,SK16出土遺物 (1/3)

7833

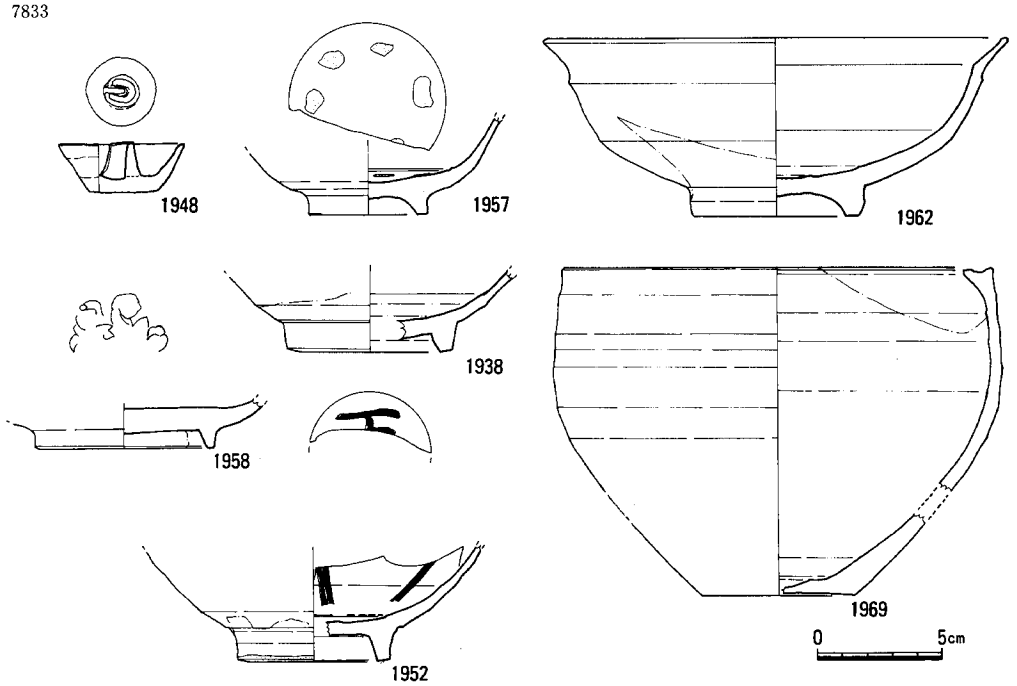


Fig.49 J区 遺構外(表土)出土遺物 (1/3)

2. 夜間調査区の調査（Fig. 50—57, Pl. 2—3）

K区とJ、L区の一部にかかる地点である。都市計画道路博多駅築港線（大博通り）と、県道博多停車場東本町線との交差点（通称馬場新町交差点）にあたる。地下鉄路線内の遺跡調査では、交通量の多い交差点等、昼間の道路占用が不可能な地点については、その遺跡の重要性に鑑み、止むなく夜間調査を行ってきた。この夜間調査区もその例にもれず、交差点という制約から夜間に行ったものである。夜10時から朝6時までの調査のため、職員の労働安全衛生上の問題から複数職員の交替勤務となり、また一回の調査占専用区域が狭く、細切れ調査となるため混乱が予想され、J・K・L区の夜間調査部分については、一括して遺構番号を付し、あえて夜間調査区と呼んだ。調査期間は1978年10月22日から12月15日までであった。

この調査地点は、旧博多駅前広場であり、駅建設以前は町屋の立並ぶ地域であって、また交差点に通例の埋設管の縦横の敷設により多大な攪乱を受けており、一部調査を行えなかったところもある。

確認できた遺構の大半はSK03のように不定形の廃棄物処理土壙であり、近世遺物を含め各時期の遺物が混在する例が多い。SK29、32、54（Fig. 49）などのやや大規模な掘り方で、標高2m前後まで掘り下げている遺構は、木桶等、井筒部分の痕跡は留めていないもののほぼ井戸の掘り方であろうと思われる。SK29出土の2867は糸切底土師器皿で口縁端を内側に折り曲げている。SK54出土遺物は2907、2918など古相の龍泉窯青磁に、2920の内黒土器、2922の高台付土師器、2911の越州窯系青磁が混在する。29には国産灰釉陶器である。SK49は木棺墓である。削平を受け遺存状態は悪いが、床面にほぼ原位置を留めた釘が並び約1m×0.45m程の棺が想定される。土師皿（2892〜7）と白磁碗（2890、91）が副葬されており、12世紀半ばに位置づけられる。SK65は不整長円形の掘り方の土壙墓で、東壁面に頸部を欠いた丸底の須恵器長頸壺（2736）が副葬されている。SK67は底に扁平な礫を敷いたもので、西南隅に脚を欠失した須恵器高杯（2937）を倒置して副葬している。棺の痕跡は認められない。両遺構ともに6世紀代に位置づけられよう。古代末から中世にかけての墓は、粗密はあるものの博多遺跡群全域に分布しているが、古墳時代の墓は、馬場新町交差点を中心とした博多遺跡群南部域に集中する。夜7で検出したSC01は小型の竪穴住居跡である。遺物は出土していないが、N、M区に類例があり、古墳時代と思われる。夜7〜10にかけて4条の溝がみられる。SD01はほぼ東西を向く。SD02、4はややずれている。建物の雨落ち溝であろうか、いずれも浅い。鎌倉時代におさまる。Fig. 52の2840は「許□」銘墨書のある白磁皿。Fig. 55の2938、2943は近世土師器の灯明皿、2942は李朝の碗、2949は近世焼塩壺の蓋である。包含層中に奈良〜平安初期の遺物も多く含まれており、元来当該期の遺構はかなりの密度をもって分布していたものと思われる。

7833

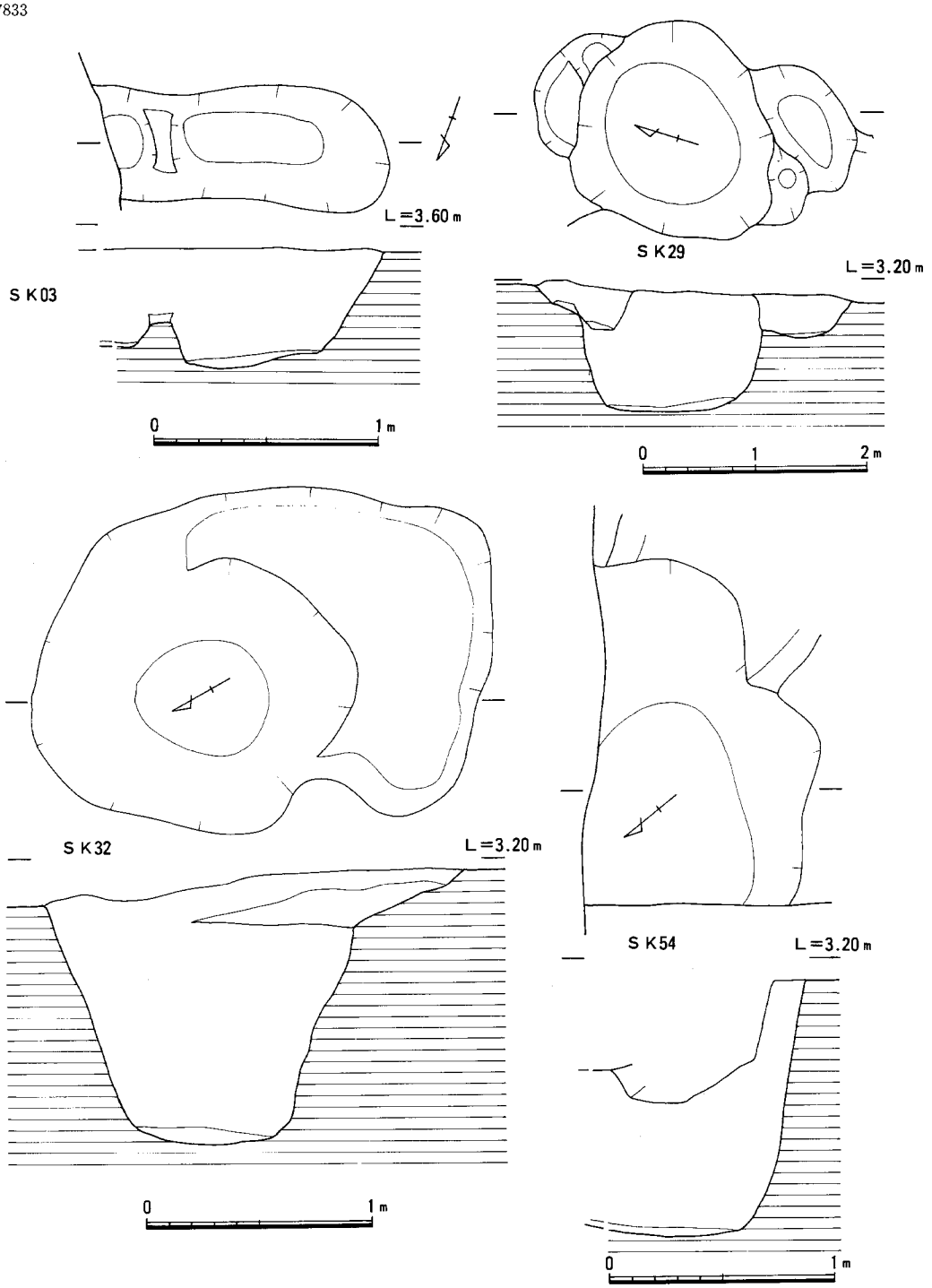


Fig.50 夜間調査区 SK03,SK29,SK32,SK54

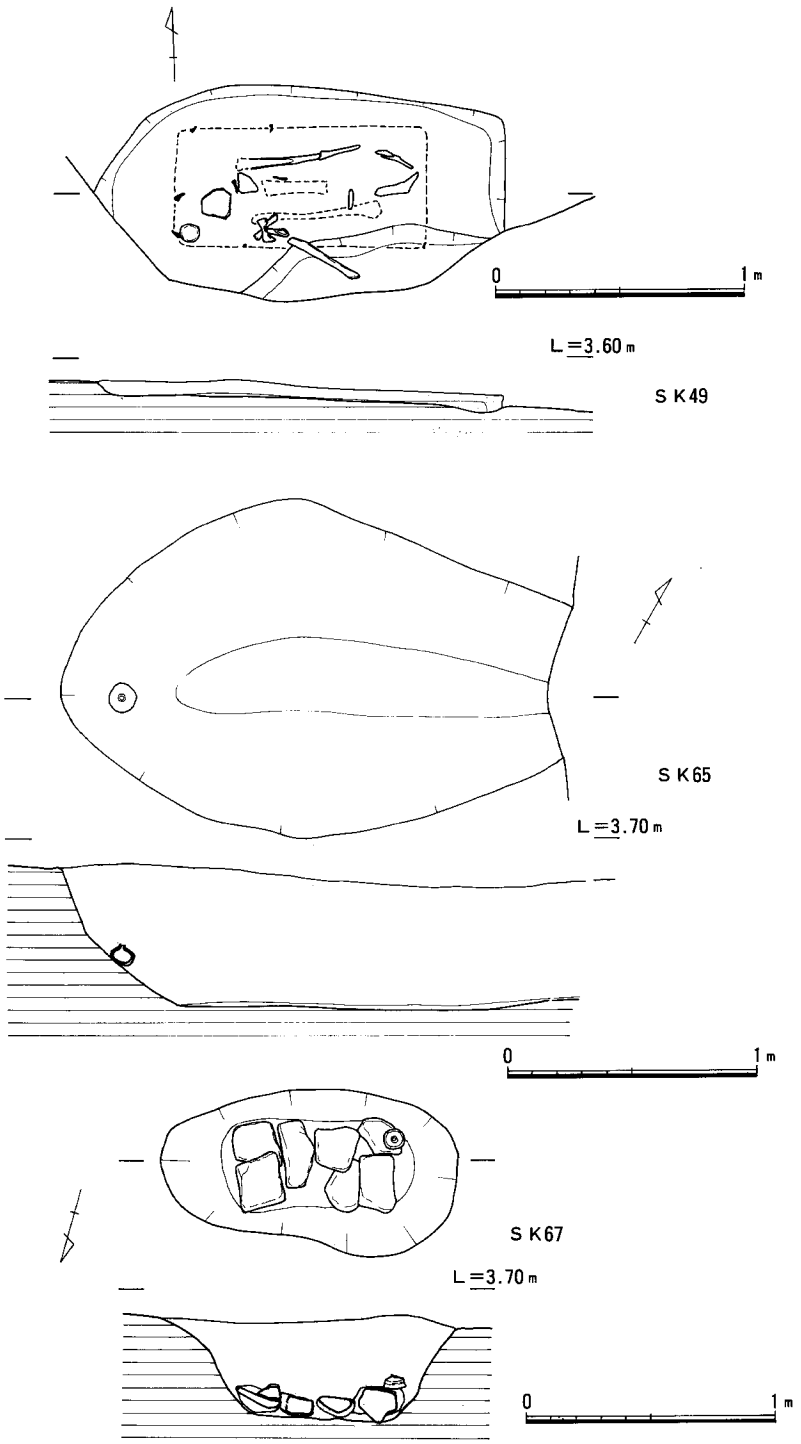


Fig.52 夜間調査区 SK49,SK65,SK67

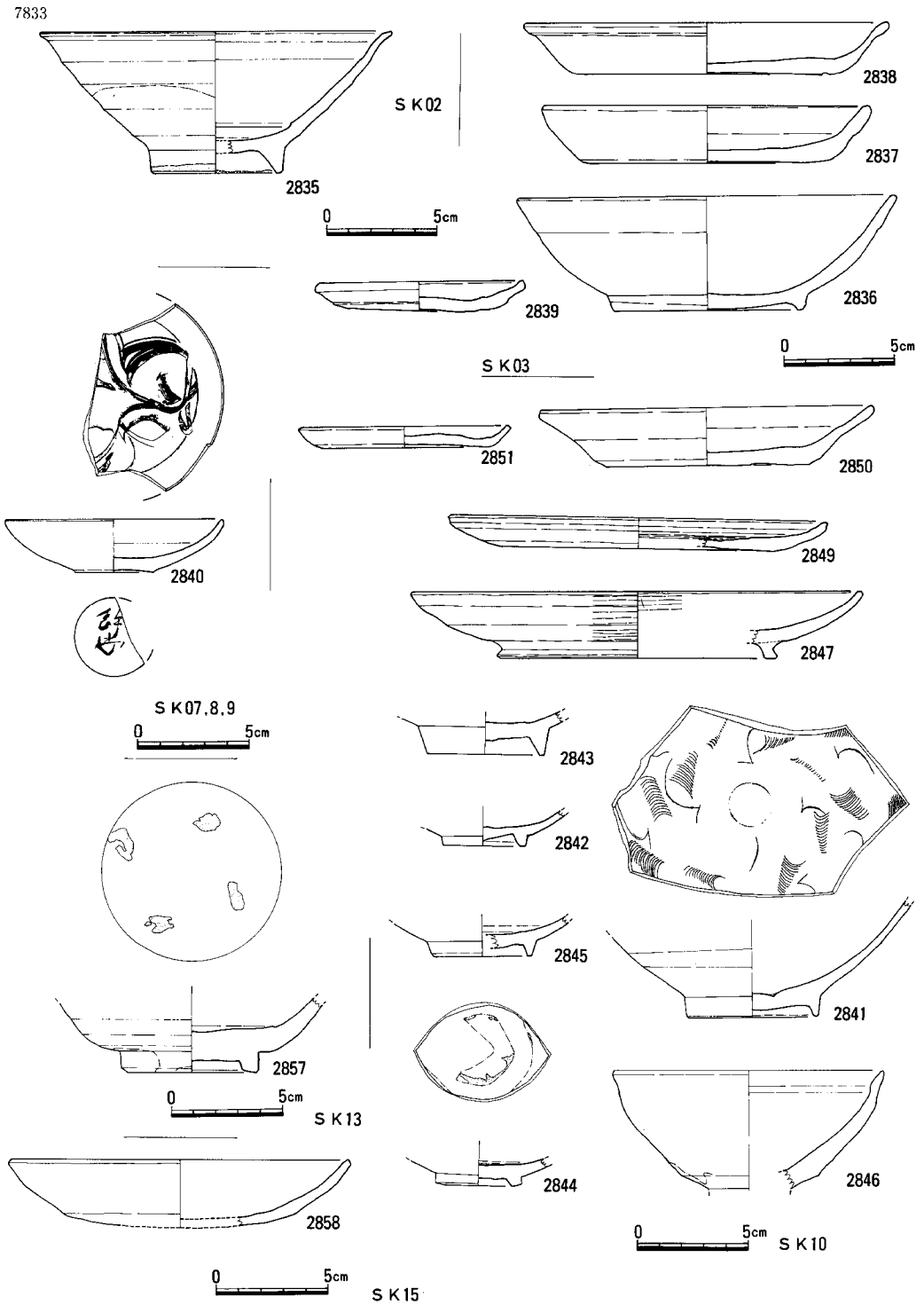


Fig.53 夜間調査区 SK02,SK03,SK07,SK08,SK09,SK10,SK13,SK15出土遺物 (1/3)

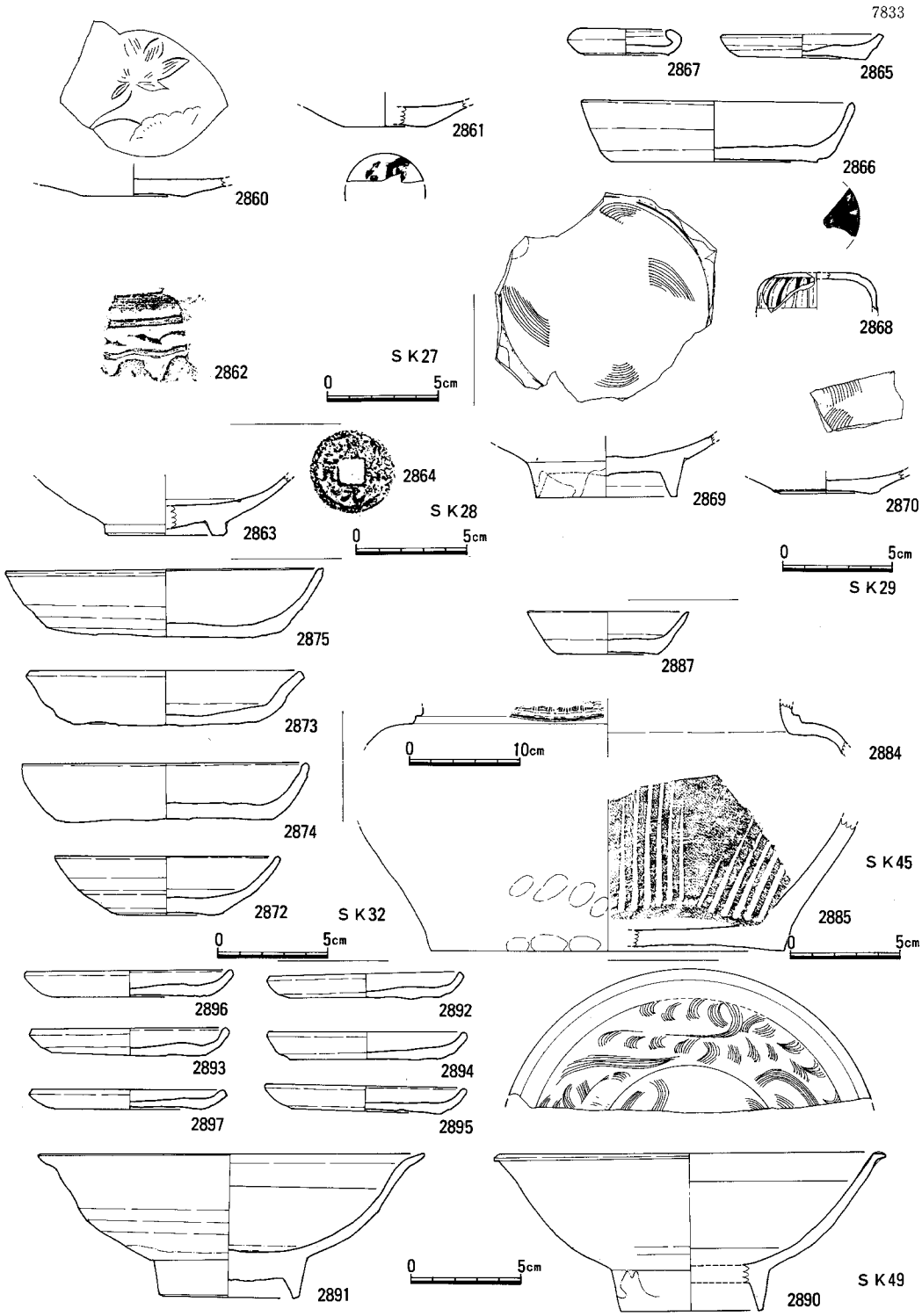


Fig.54 夜間調査区 SK27,SK28,SK29,SK32,SK45,SK49出土遺物 (1/3,2864,2884を除く)

7833

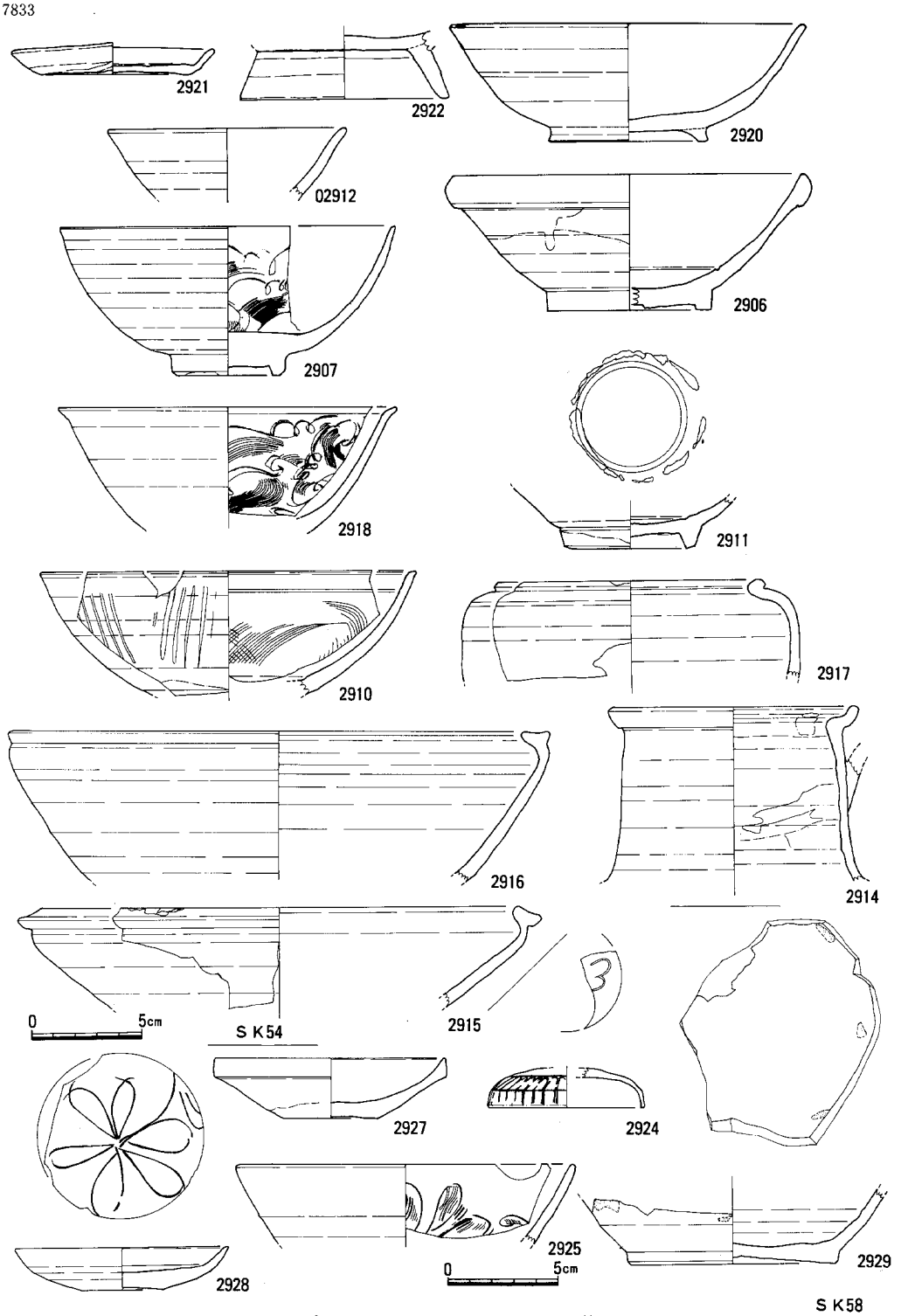


Fig.55 夜間調査区 SK54,SK58出土遺物 (1/3)

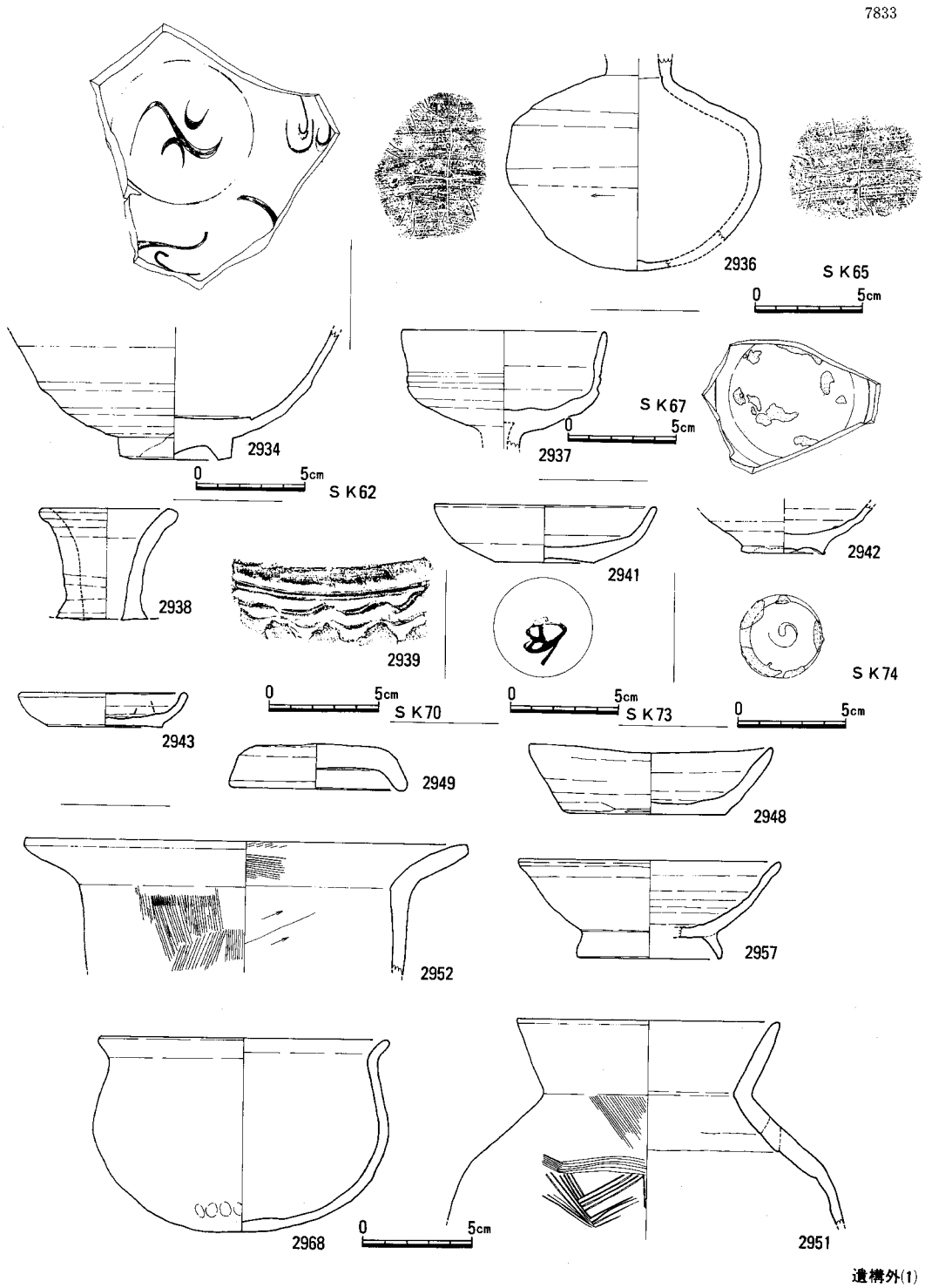


Fig.56 夜間調査区 SK62,SK65,SK67,SK70,SK73,SK74出土遺物と遺構外出土遺物(1) (1/3)

7833

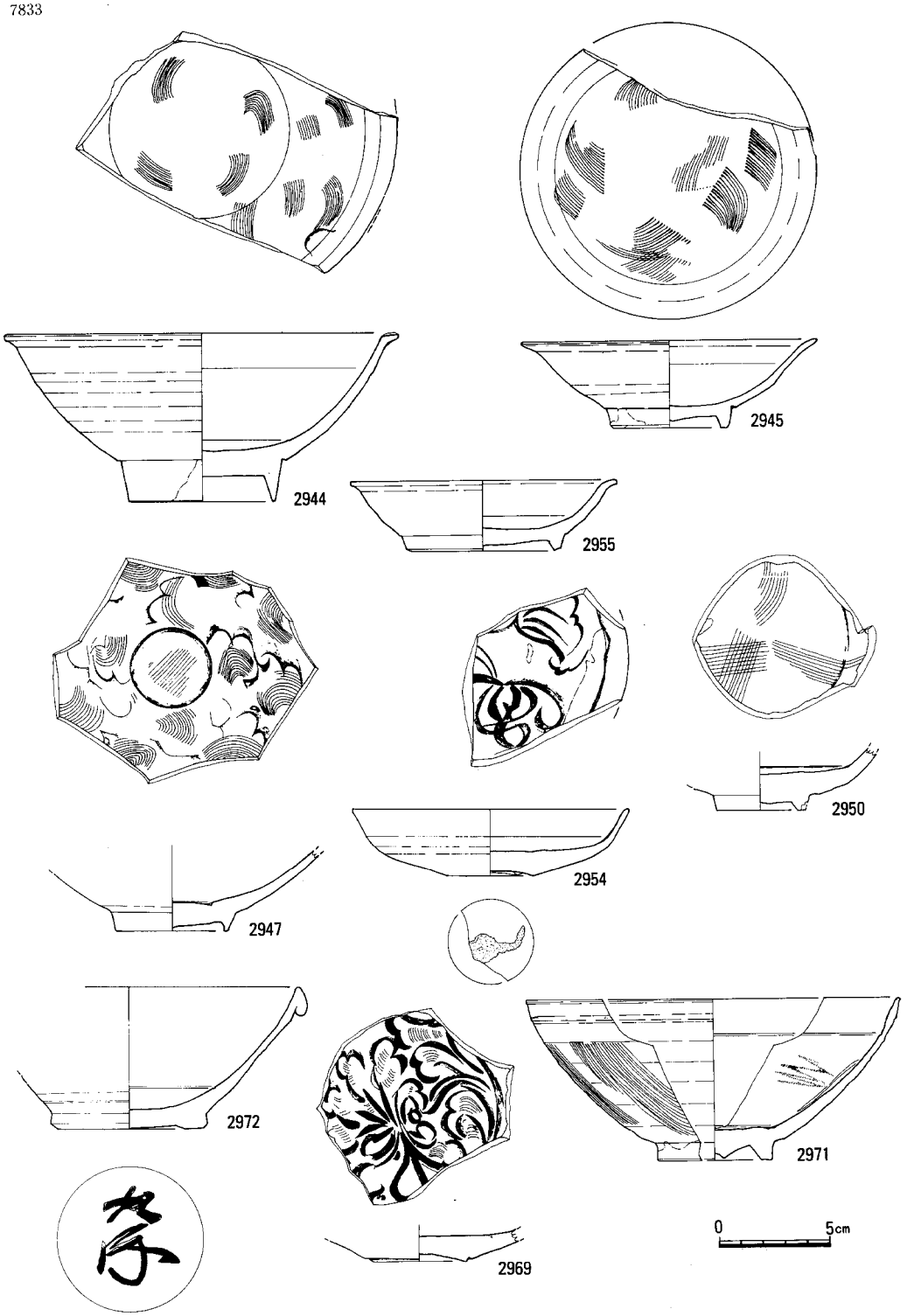


Fig.57 夜間調査区遺構外出土遺物(2) (1/3)

3. L・M 区の調査（Fig. 58—74, PL. 12—13）

L区　1978 年 8 月 22 日～9 月 5 日にかけて発掘調査を行なった。この地区も例にもれず、建物基礎、埋設管などによる現代の攪乱が著しく、それを受けないところに近世以前の遺構がかろうじて残存するといった状態であった。しかも場所によっては遺構の密度が高く、原形を残すものはきわめて稀であった。検出した遺構は竪穴住居跡？1 基、土壙 20 基、溝 3 条で、他にピットがある。時代的に最も古い遺構は SK14 である。遺構の半分以上が調査区外にかかるが、平面長方形の土壙墓で、床面近くに素文鏡、鉄訓、管玉、勾玉（大小あり）を副葬している（PL. 12）。玉類は土壙埋土の上位でも出土しており、木蓋上に置かれたものがあったことを示している。図示した土器類（Fig. 65）はこの遺構の上面から出土したもので、土壙墓そのものは副葬品などから 5 世紀を前後する時期に相当しよう。SC01 とした竪穴住居跡は側壁の一部が残存するだけで、その形態など明確にしえないが、出土遺物（Fig. 68）からみると 8C 前半の遺構と考えられる。この他の遺構は、SK09 が土器類の出土がなく時期不明であるのを除けば、すべて鎌倉～室町時代に属する。土壙としたもののうち、SK17 は井戸跡、SK11 は土壙墓の可能性が強い。他の遺構は廃棄物処理壙と呼べるものであろうか。SK05 には覆土の上部を中心に多数の土師皿が集積している。SK15 も同様な状況である。SK19 は平面円形の土壙で、白磁椀・黄釉鉄彩盤など（Fig. 65）が出土している。溝 3 条もこの時期のものである。SD03 は鈎状に曲った部分に遺物が集中しており、土師器皿、白磁椀・皿、龍泉窯系青磁皿、天目椀、褐釉陶器四耳壺、緑釉陶器片、滑石製品などその種類はきわめて豊富である（Fig. 68）。包含層からの出土遺物も鎌倉・室町時代のものが大多数を占める。Fig. 68 の 02246 は砂岩製の硯である。

M区　1978 年 7 月 20 日～8 月 5 日にかけて発掘調査を行なった。この地区も著しく現代の攪乱を受けており、またそれ以前の遺構の重複もはなはだしい。検出した遺構は竪穴住居跡 1 基、土壙 18 基、ピットなどである（SK01 は欠番）。竪穴住居跡（SC01）は 1 辺で 2 m 弱の方形を呈し、床面の四隅に柱穴をもつ。N 区にこの種の小型住居跡がみられる。古墳時代。土壙は攪乱による近世以降の遺物が一部混じるが、主だった出土遺物からすれば鎌倉～室町時代のものと考えてよい。またその多くが廃棄物処理土壙であろう。その中で SK04 は長方形状の土壙をなし、その上部には石や土器・磁器類が集積している。SK10・11 もまた長方形状の平面をもつもので土壙墓の可能性もある。出土遺物は底部糸切りの土師器皿が圧倒的に多いが、瓦器、白磁、青磁、陶器類の種類も豊富である。Fig. 74 の 2547 は青白磁托、2452 は青白磁水注。Fig. 72 の 2347 は瀬戸焼の瓶子。青磁、白磁のなかには底部に墨書を有するものがみられる（Fig. 71—2314・2325、Fig. 74—2397・2454・2405）。

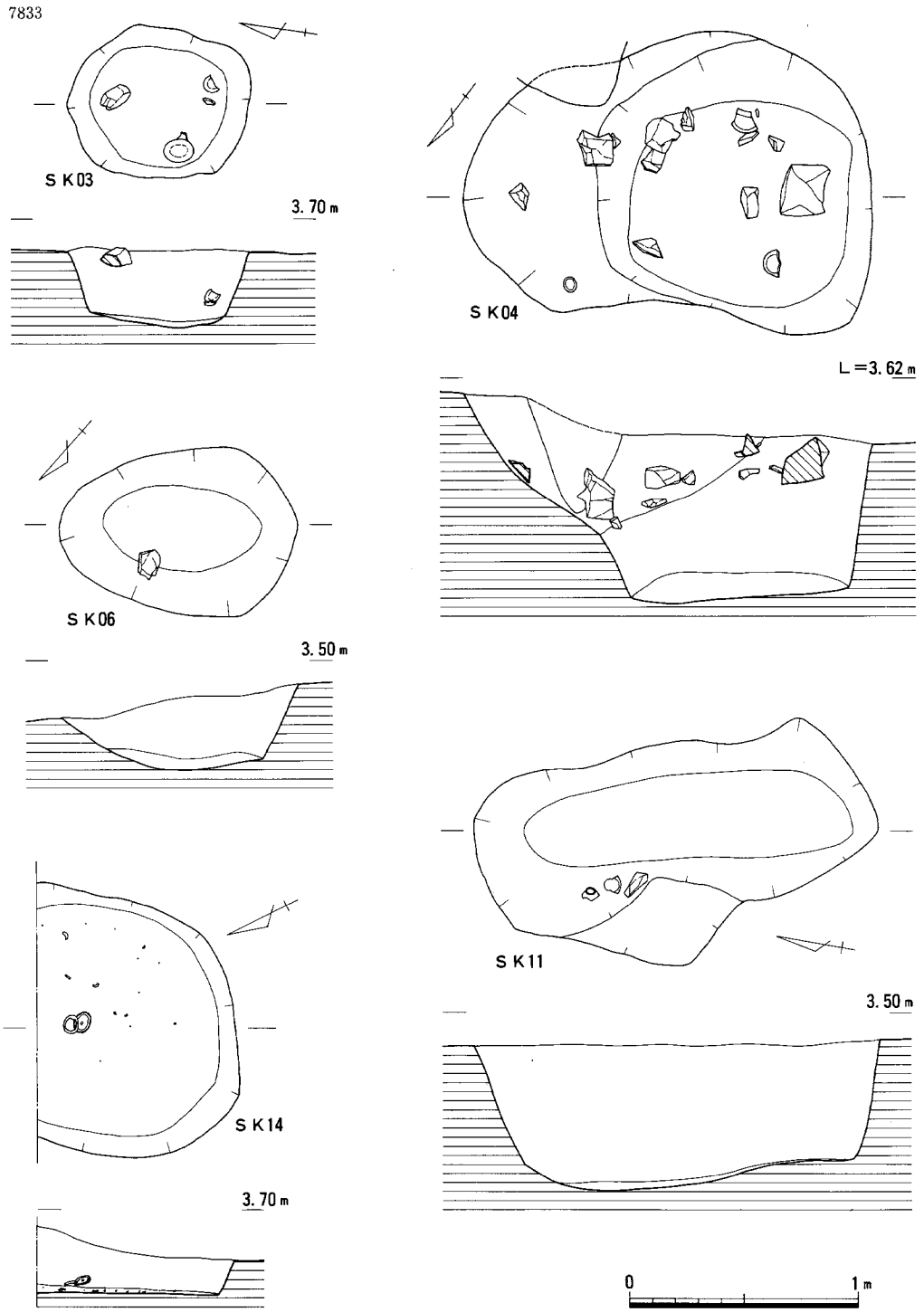


Fig.58 L区 SK03,SK04,SK06,SK11,SK14 (1/3)

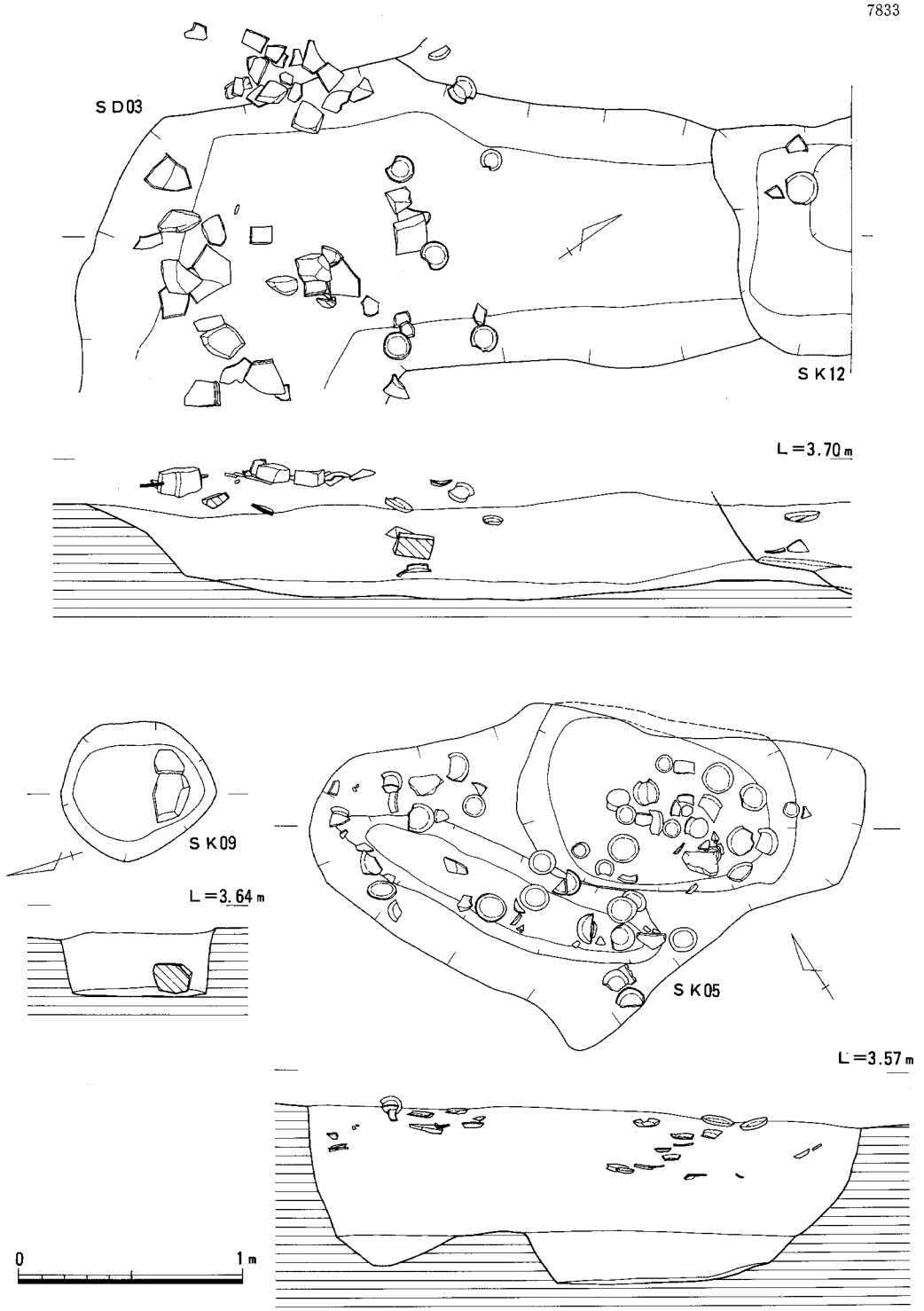


Fig.60 L区 SD03,SK05,SK09,SK12

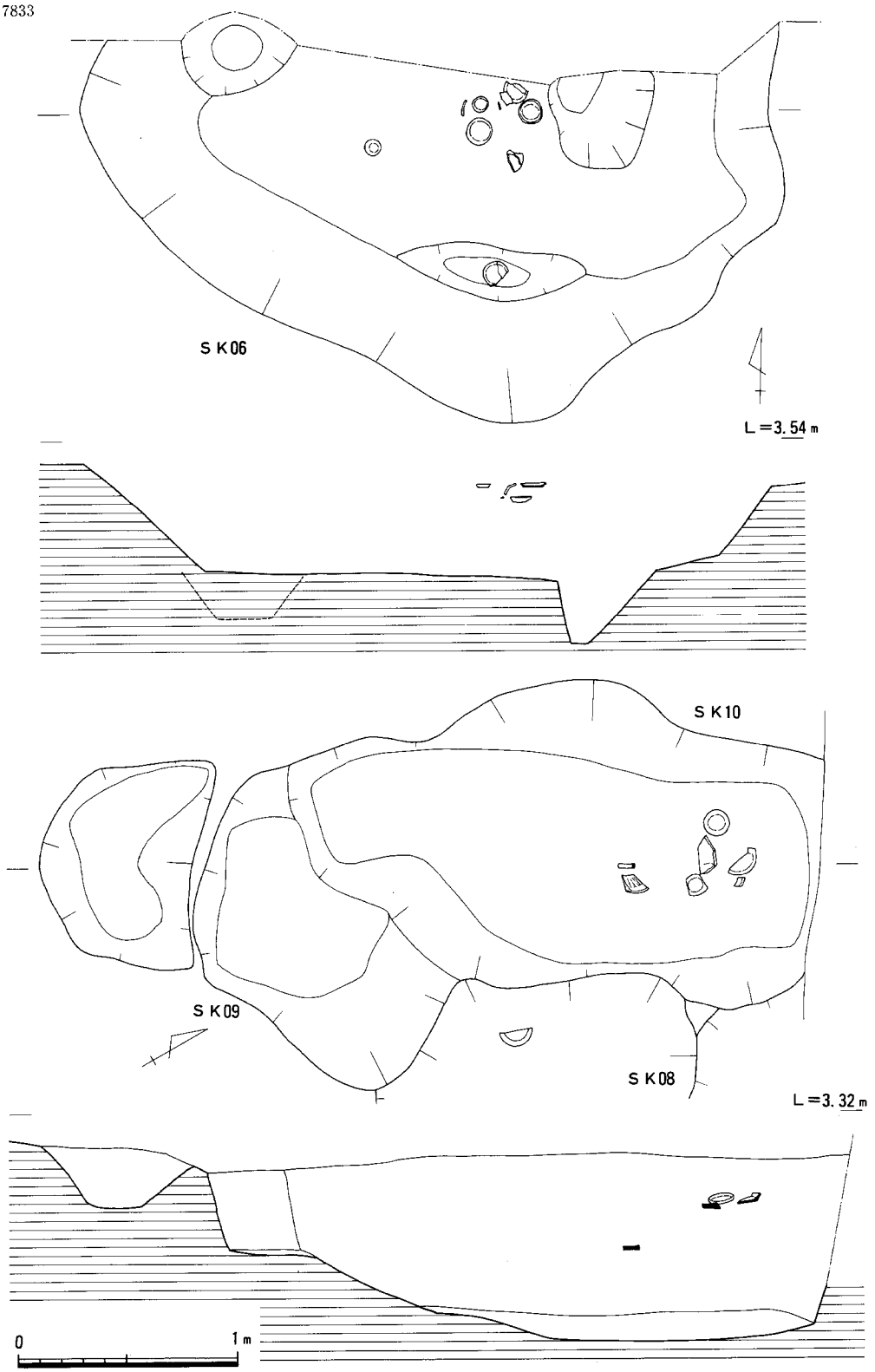


Fig.61 M区 SK06,SK08,SK09,SK10

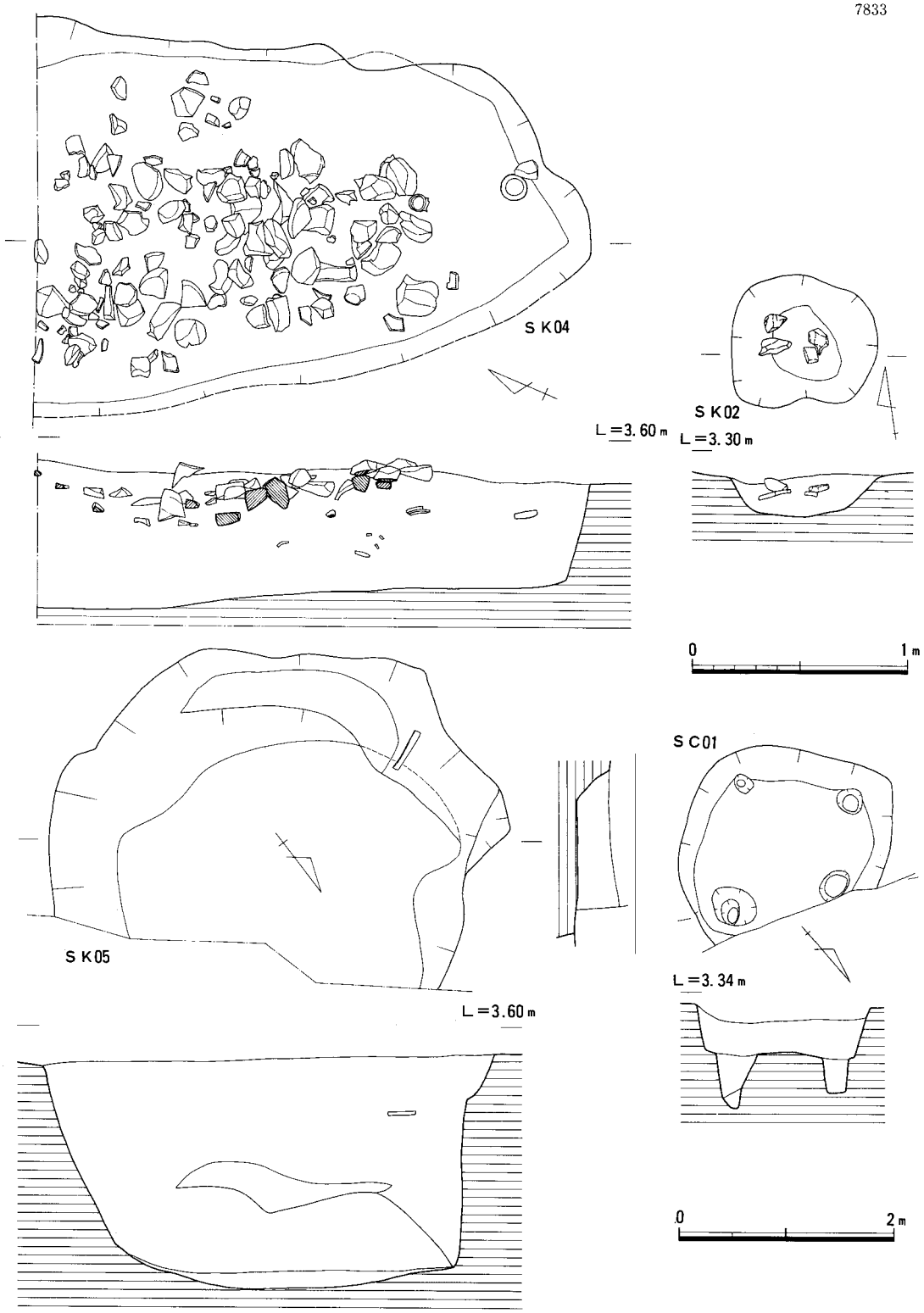


Fig.62 M区 SK02,SK04,SK05,SC01

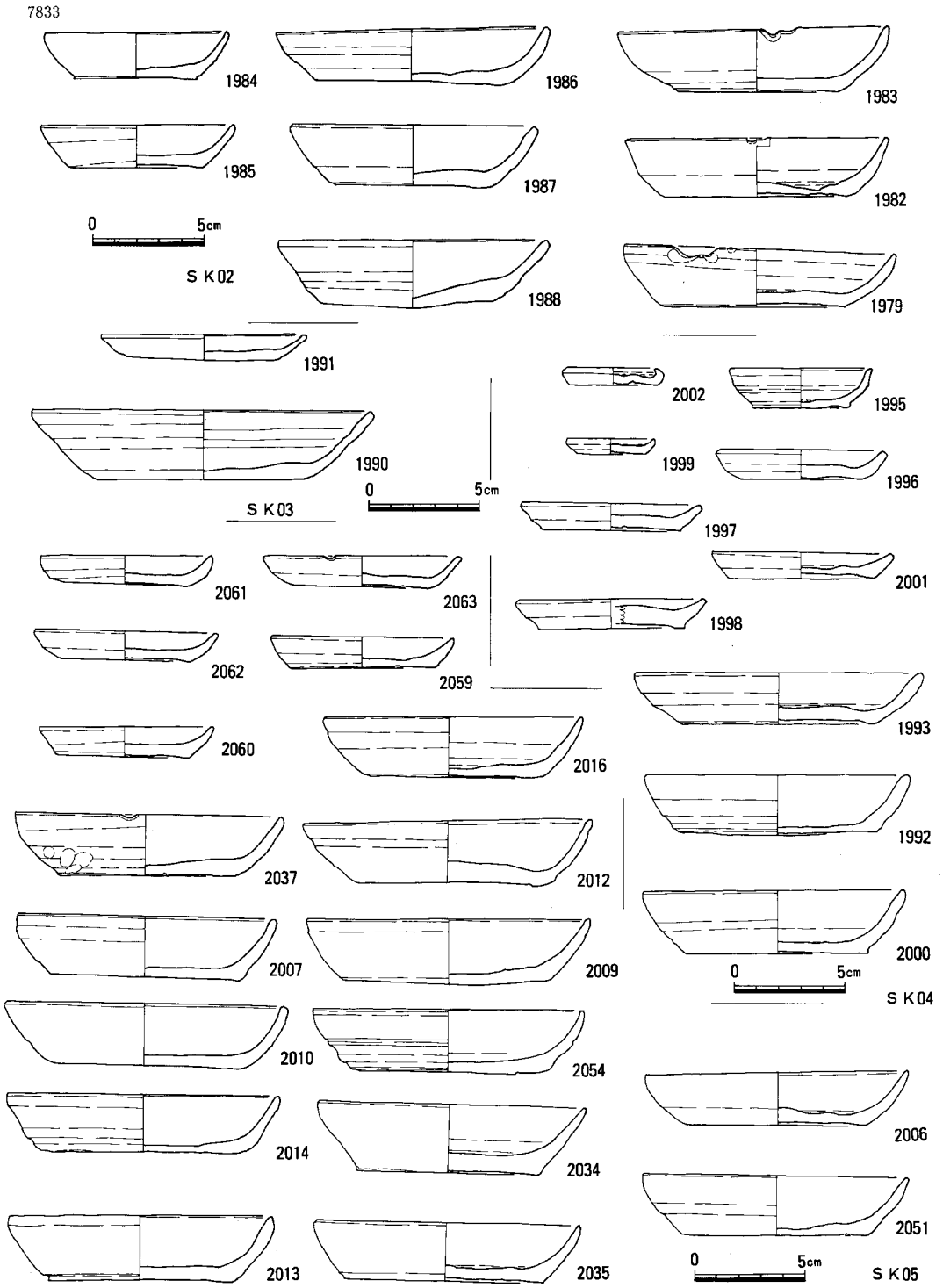


Fig.63 L区 SK02,SK03,SK04,SK05出土遺物 (1/3)

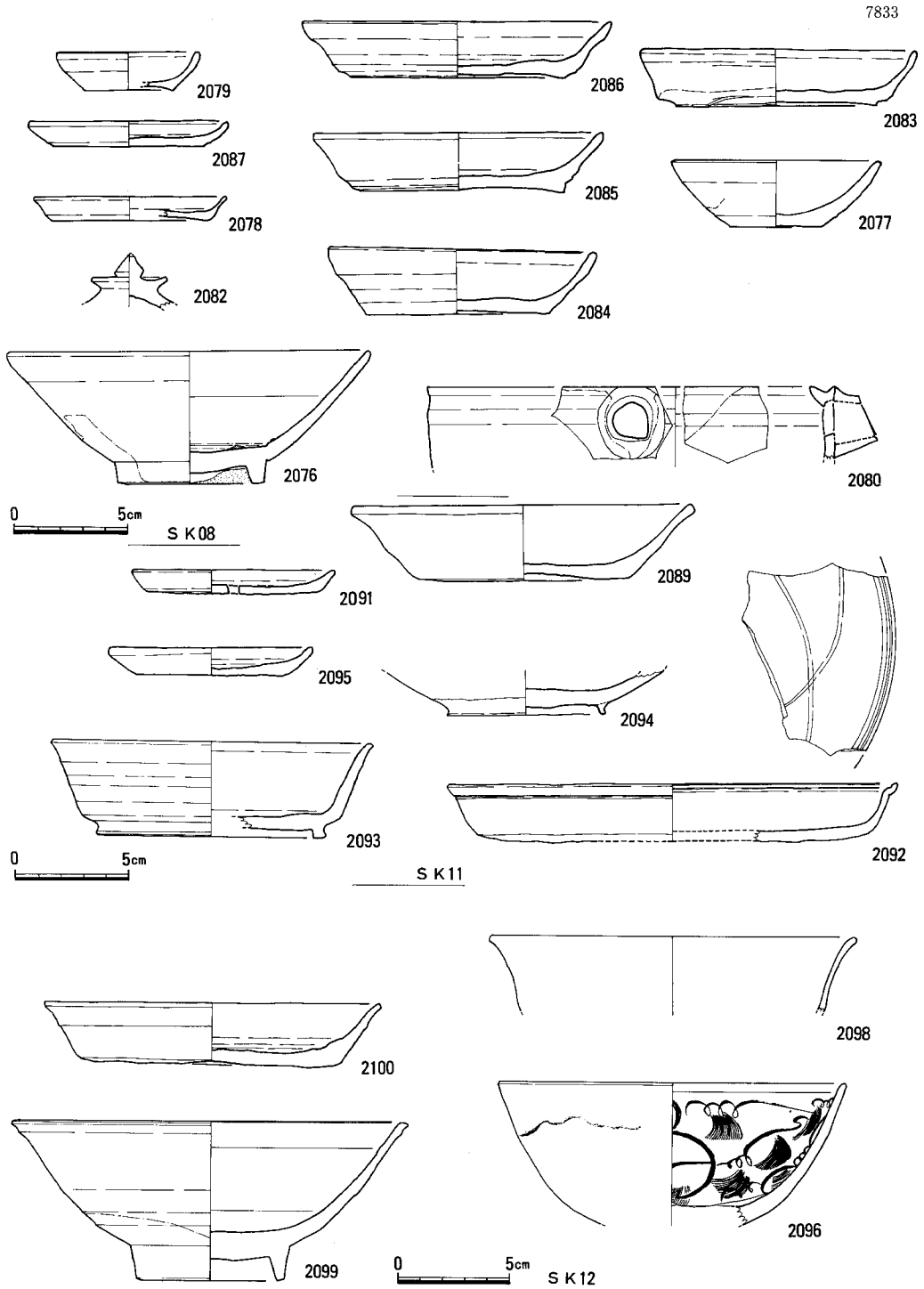


Fig.64 L区 SK08,SK11,SK12出土遺物 (1/3)

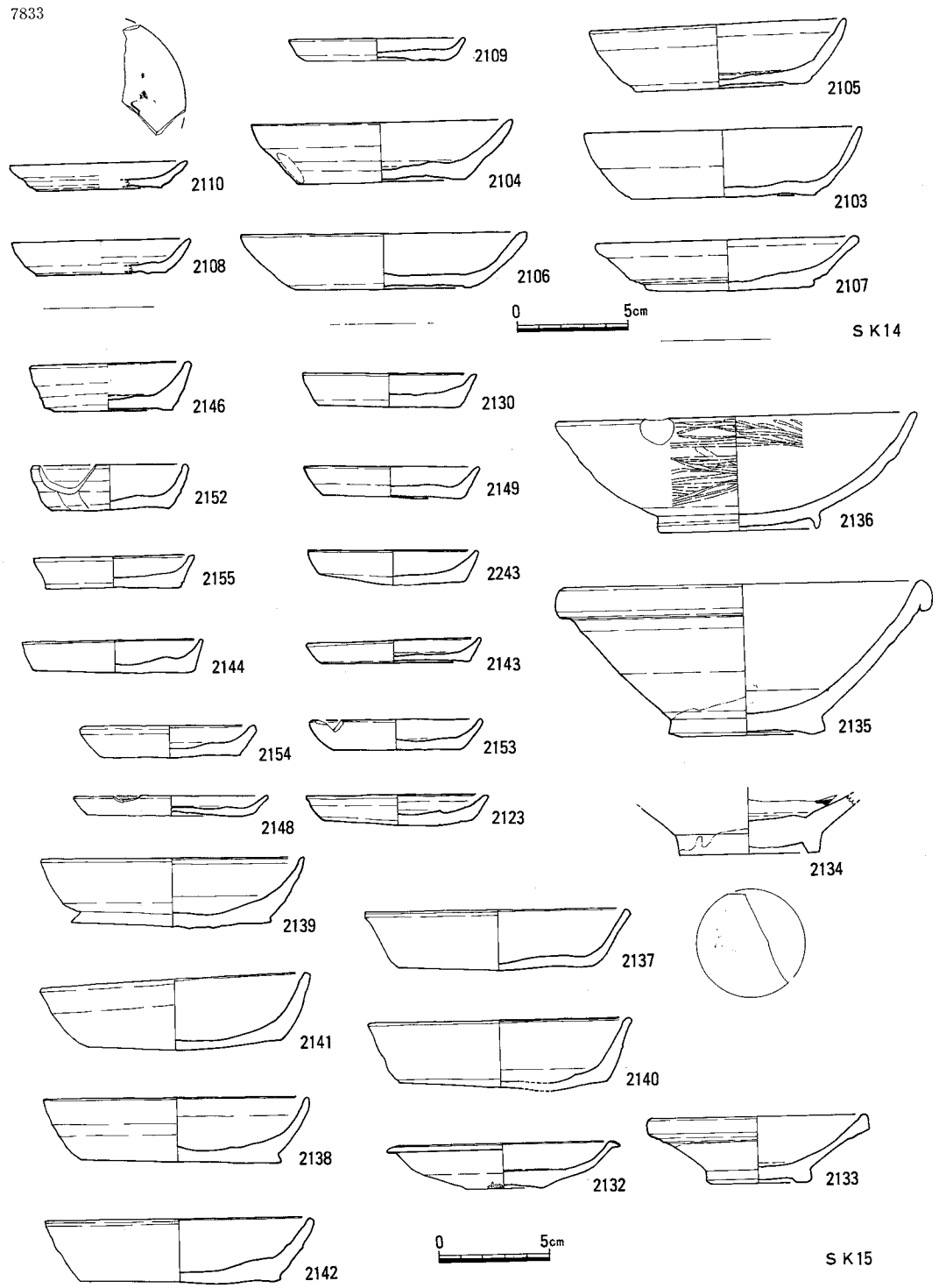


Fig.65 L区 SK14,SK15出土遺物 (1/3)

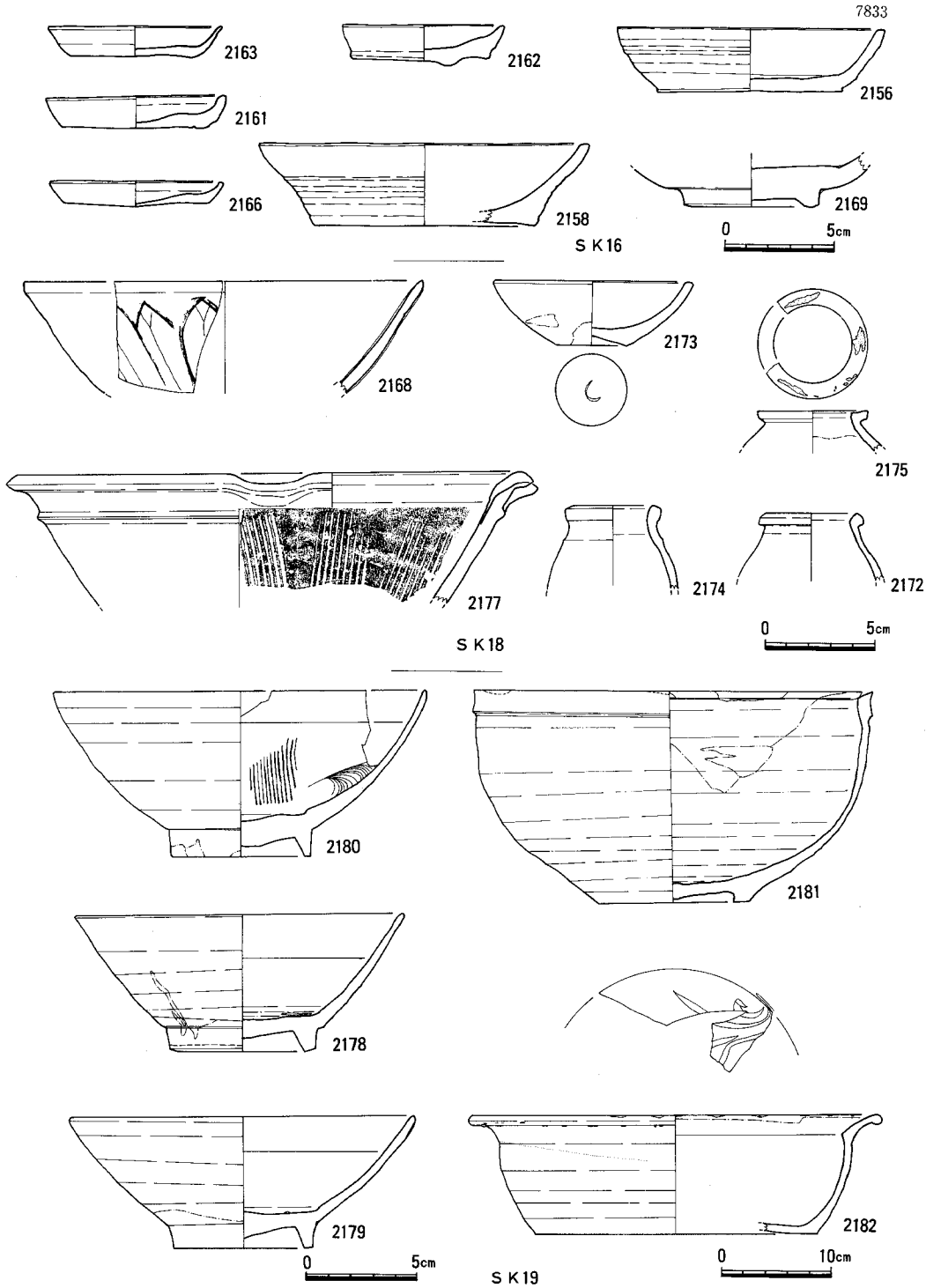


Fig.66 L区 SK16,SK18,SK19出土遺物（1/3，2182を除く）

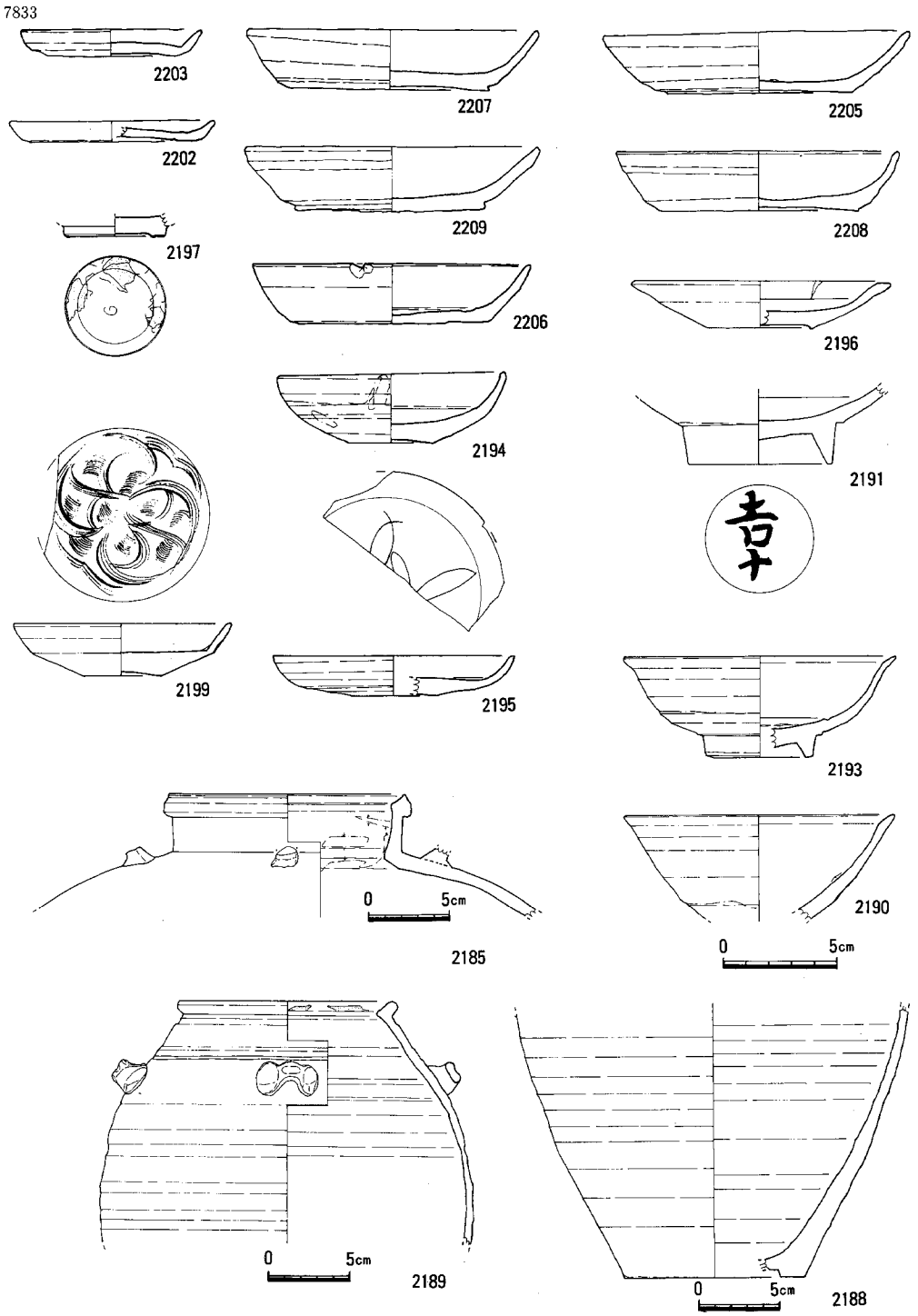


Fig.67 L区 SD03出土遺物(1) (1/3, 2185,2188,2189を除く)

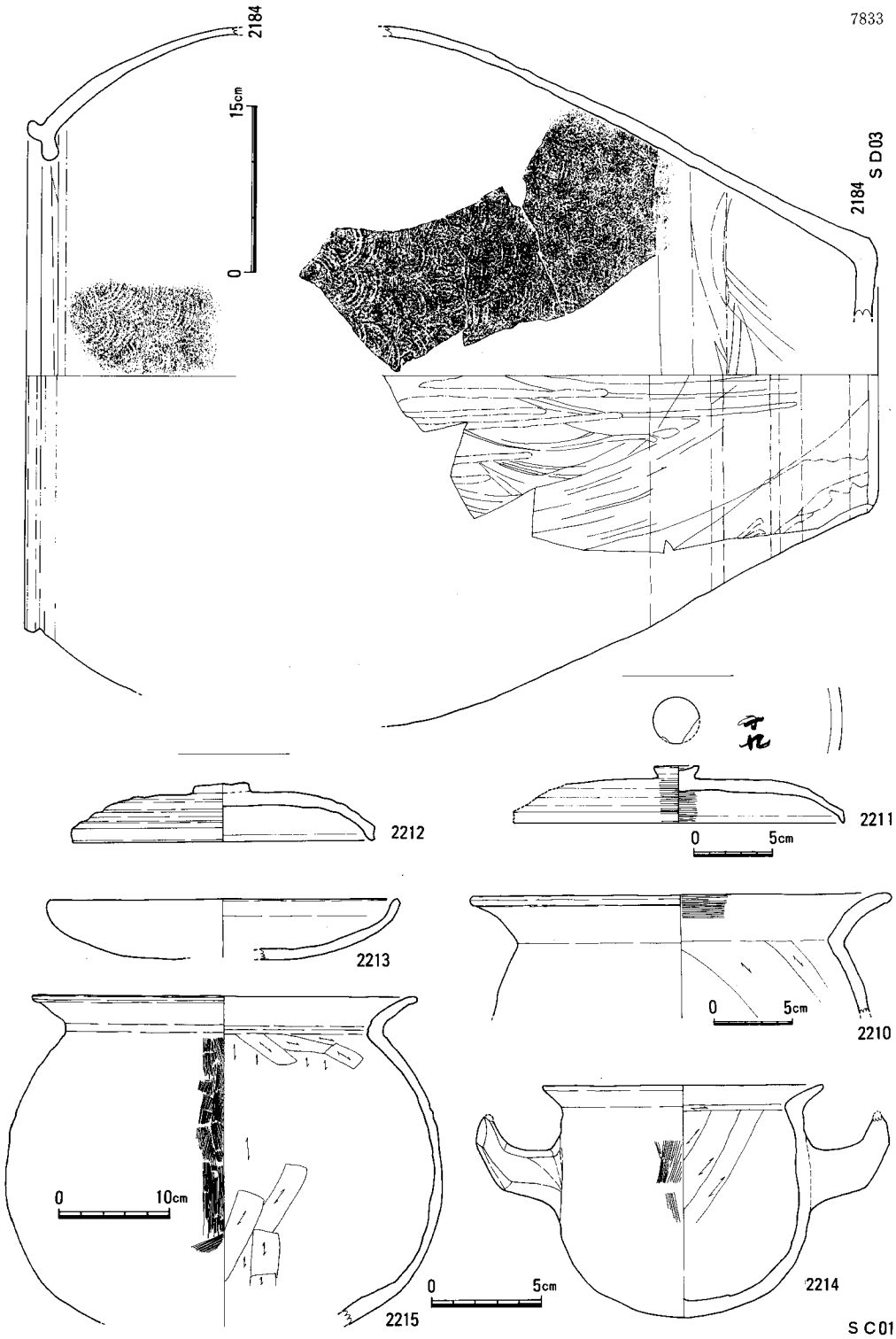


Fig.68 L区 SD03出土遺物(2), SC01出土遺物 (1/3, 2184,2210,2211,2215を除く)

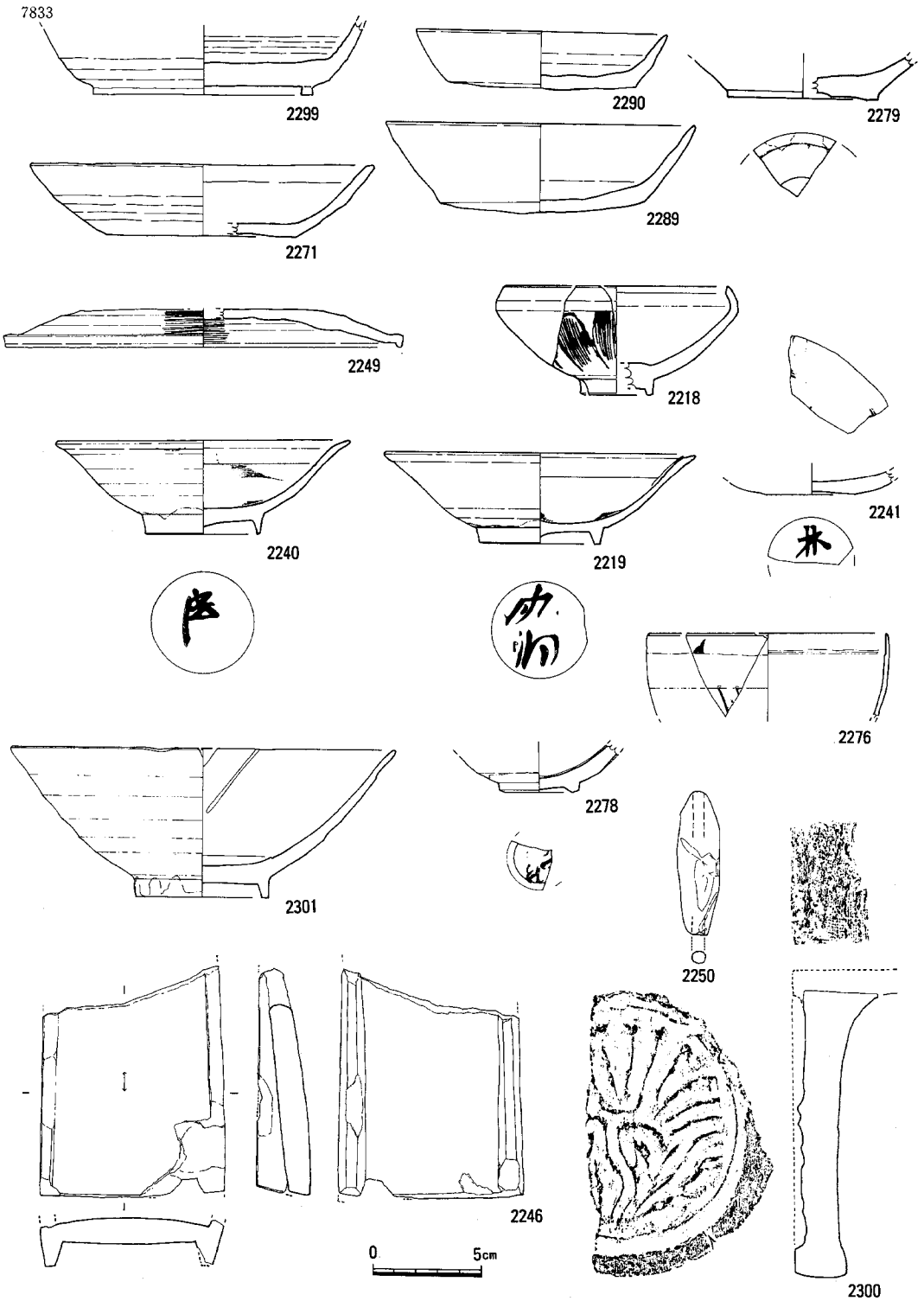


Fig.69 L区 遺構外(包含層)出土遺物(1) (1/3)

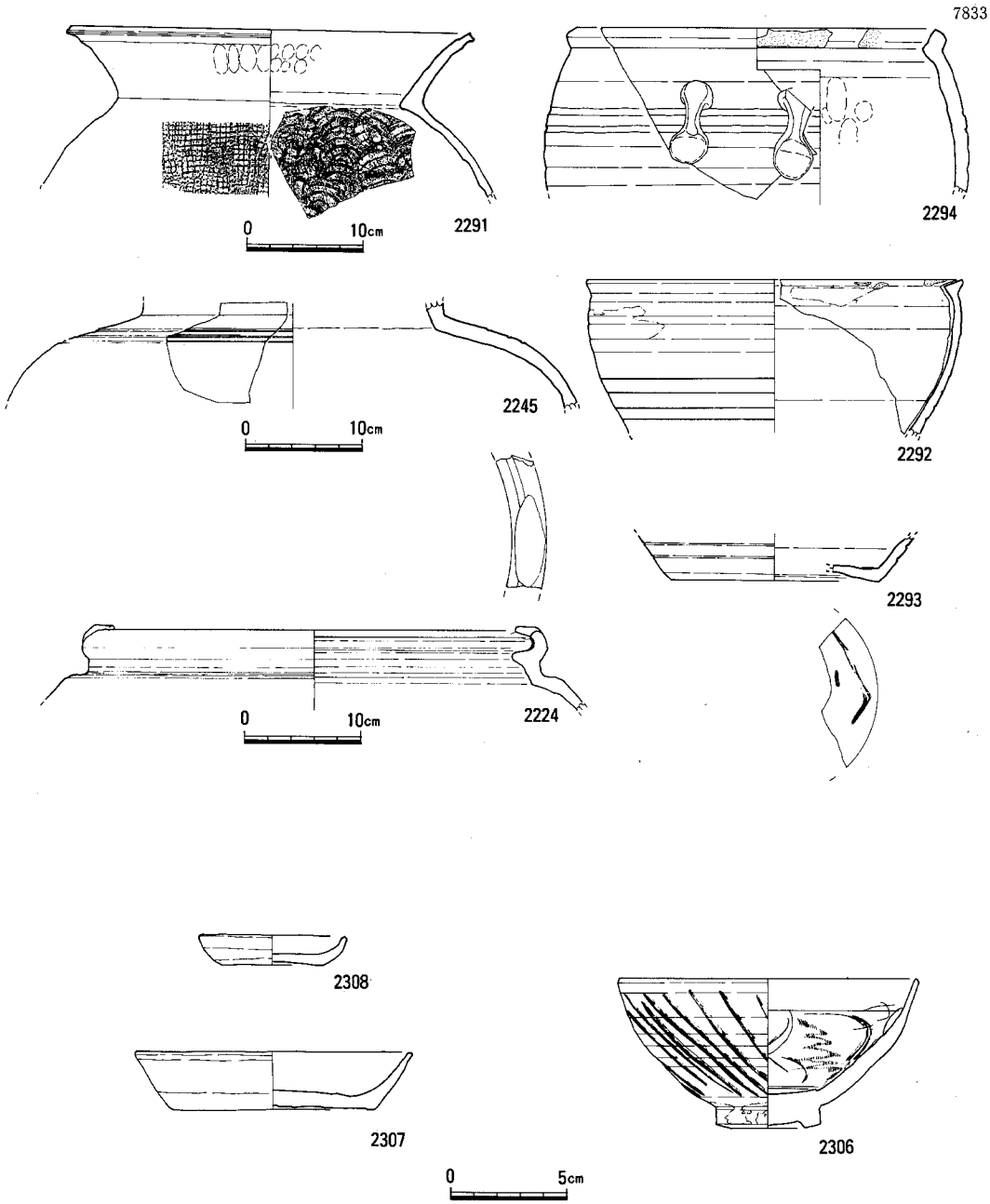


Fig.70 L区 遺構外(包含層、表土)出土遺物(2) (1/3, 2291,2245,2224を除く)

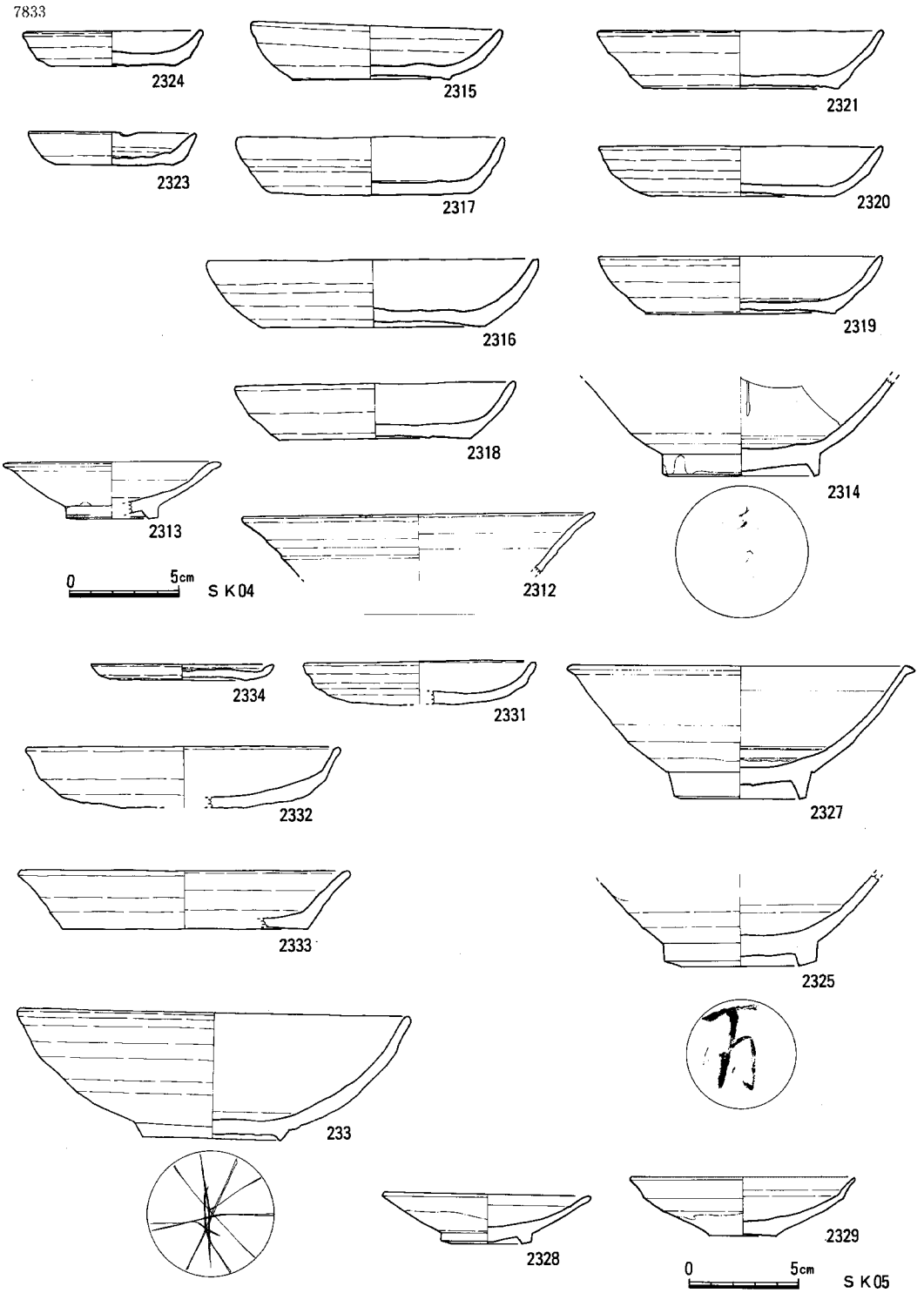


Fig.71 M区 SK04,SK05出土遺物 (1/3)

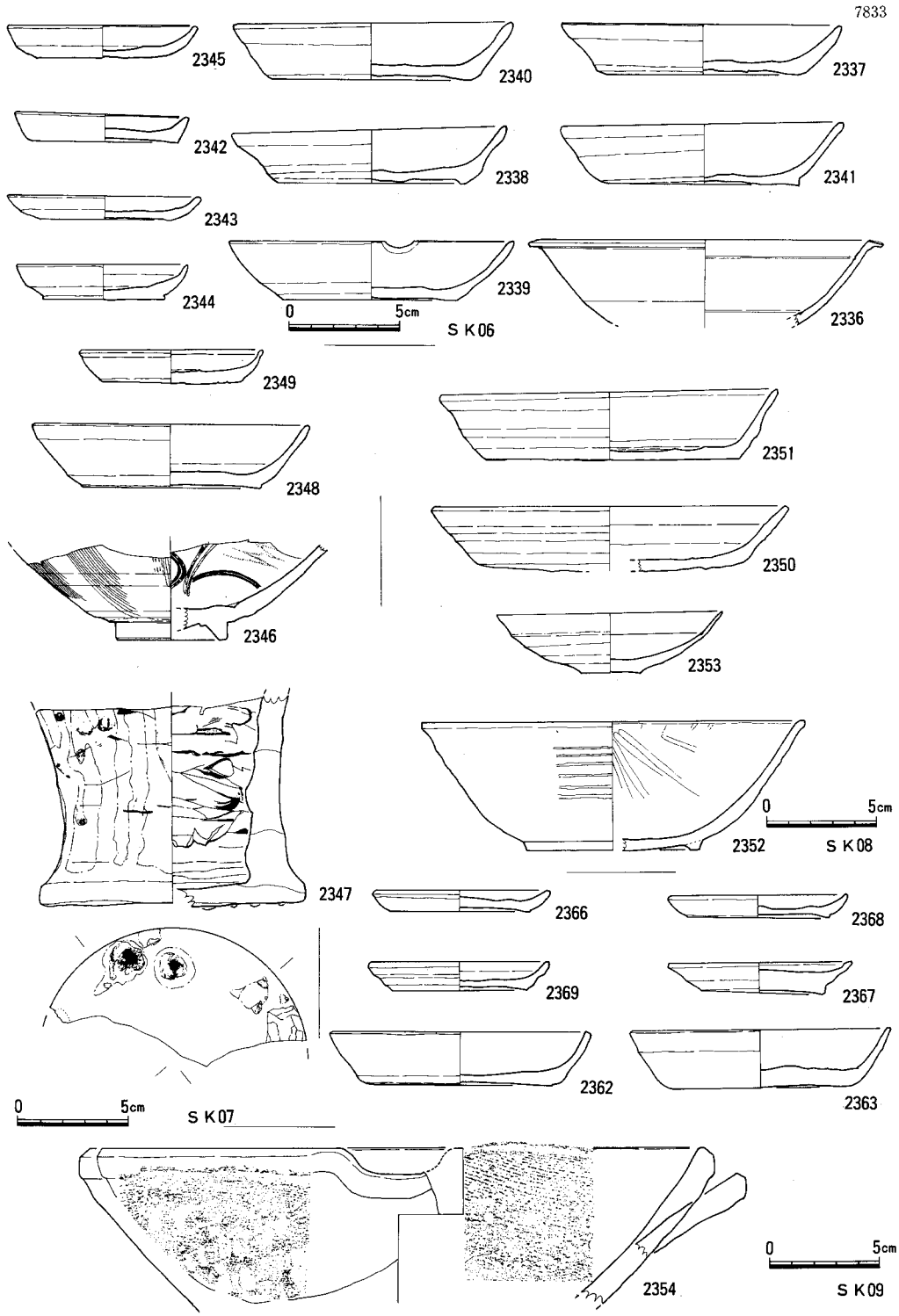


Fig.72 M区 SK06,SK07,SK08,SK09出土遺物 (1/3)

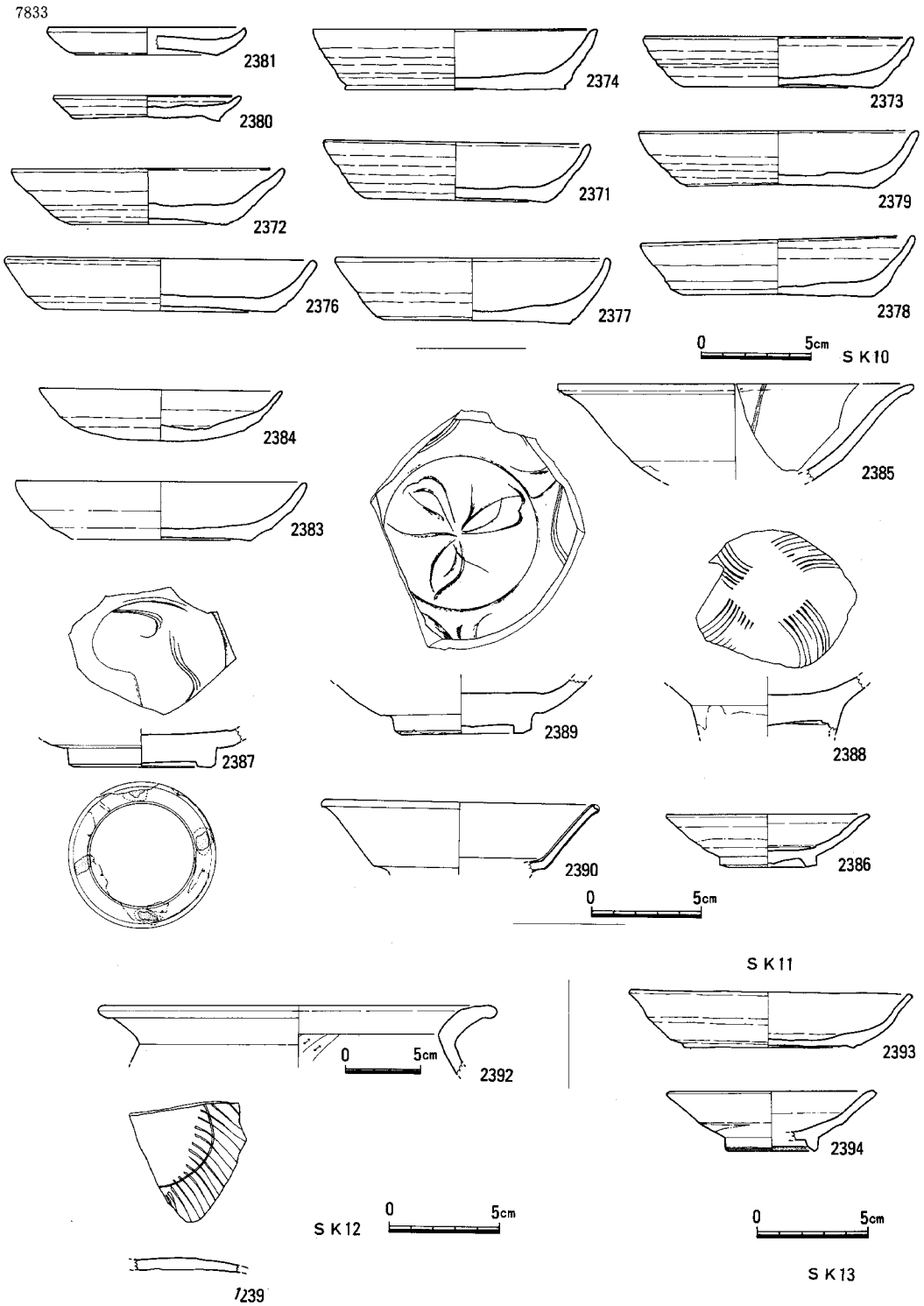


Fig.73 M区 SK10,SK11,SK12,SK13出土遺物（1/3,2392を除く）

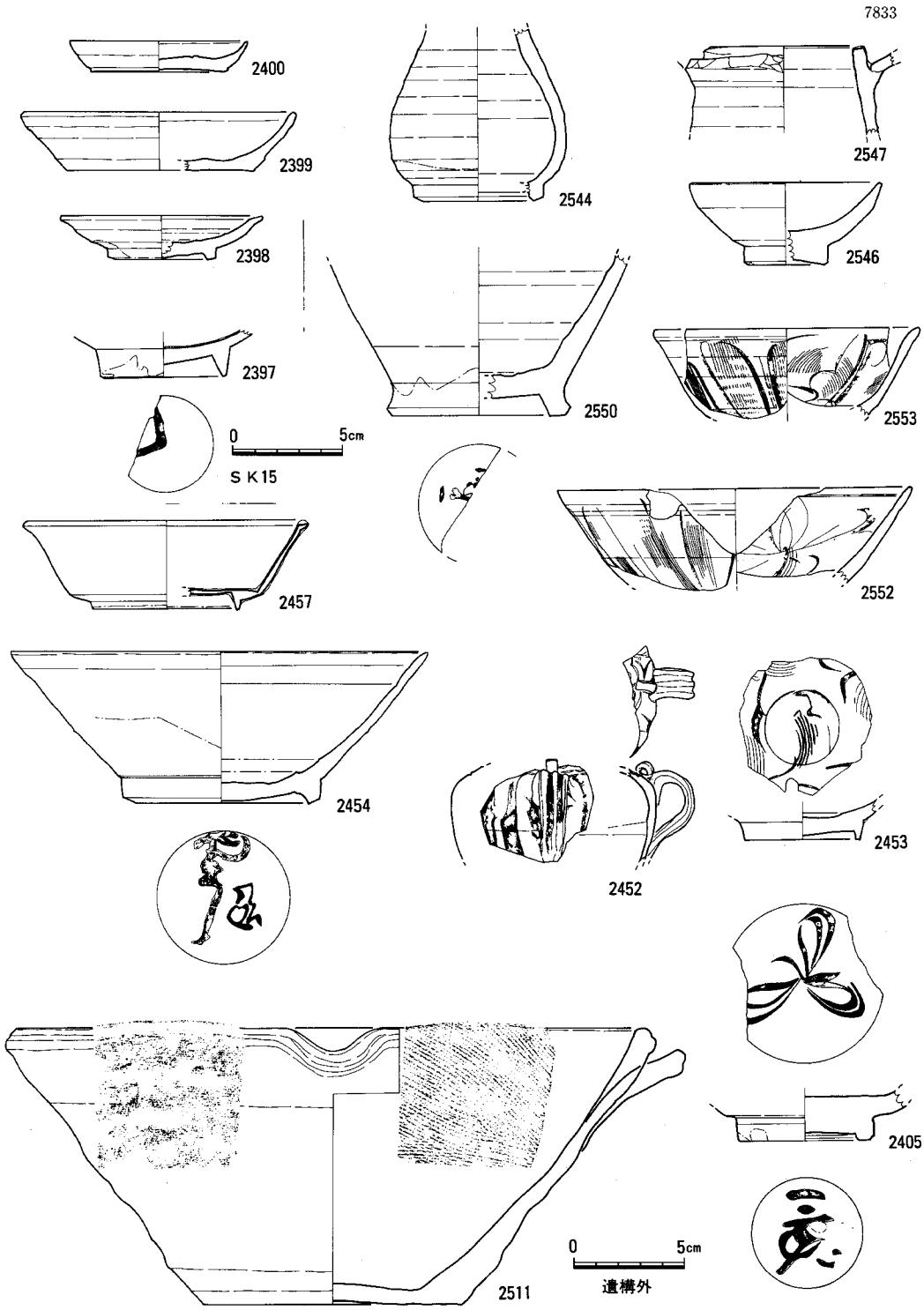


Fig.74 M区 SK15出土遺物と遺構外(包含層)出土遺物 (1/3)

4. N・O・P区の調査（Fig. 76—85、PL. 14—17）

N・O・P区は1978年7月3日N区の表土剝ぎから開始し、8月中旬全区の調査をもって終了した。全地区にわたって埋設管などによる現代の攪乱が著しく、特にP区はそれ以前の遺構がみられないほど破壊を受けていた。N・O区でも、検出した遺構は攪乱を受けない部分にかろうじて残存している状態であった。このような状況のため、調査は攪乱を受けていない部分を中心に行なった。以下N区、O区の遺構・遺物について簡単に触れる。

N区　検出した遺構は近世以降の廃棄物処理土壙を除き、土壙8基、溝3条、竪穴住居跡4基などである。土壙の大半は廃棄物処理土壙であり、その時期もおよそ13世紀～14世紀中頃に集中する。ただSK08はその形態、出土遺物からして11世紀代の土壙墓と考えられる。3条の溝は区北半側を東西に平行して走っている。一番南側のSD01が最も規模が大きい。断面はSD01・02が逆台形、SD03がU字形を呈する。SD02はSD01を切っている。SD01・03の上面近くには、溝埋没後投棄された土器溜りがみられる。これらの溝は道路側溝の可能性が強い。土器溜りの遺物からすれば、14世紀頃に埋没していたものと考えられる。4基の竪穴住居跡のうち、SC01・02は1辺2.5m前後の平面方形をなす小型のもので、四隅に柱穴を設けている。SC01の覆土には多量の炭化物を含んでいた。SC03は長方形状、SC04は側壁の一辺が残存するだけである。SC04から出土した完形の土師器甕（Fig. 81—2662）は、内面全体に赤色顔料が認められる。SC01—03からは鎌倉・室町時代の遺物が出土しているが、一部攪乱を受けており、住居跡そのものは古墳時代のものとしてよいであろう。

O区　検出した遺構は近世以降のものを除けば土壙28基、溝3条などである。これらの多くが攪乱を受け、また遺構相互の重複により、原形をとどめるものは少ない。土壙の形態はまちまちであるが、このうちSK04・05・11が古墳時代に属する。SK11は平面楕円形状をなし、中から土師器長頸壺（2701）1個体だけが横置の状態で出土した。他の土壙のうちSK10は奈良時代の可能性があるが、残りの24基は鎌倉～室町時代に属する。SK07・21・24・28などからは古式土師器が比較的多く出土しており、図示したものもそれらに限られたが、他の遺物などからみても遺構そのものの時代は鎌倉～室町である。この時代の土壙のうち、SK07・08・14・17・20は井戸側の残存こそないものの、その形態からして井戸跡と考えてよい。残りの土壙は廃棄物処理壙であろう。ただSK15は平面楕円形の土壙で、壙内からは完形の土師器皿がまとまって出土しており、別の用途を考える必要がある。遺物としてはSK08から緑釉陶器（2697～2700）、SK17から越州窯系青磁蓋（2731）が出土している。SK12の碧玉製管玉は古式土師器の時期に伴うものであろう。3条の溝（SD01～03）の性格は明らかでないが、時代的には鎌倉～室町におさまる。

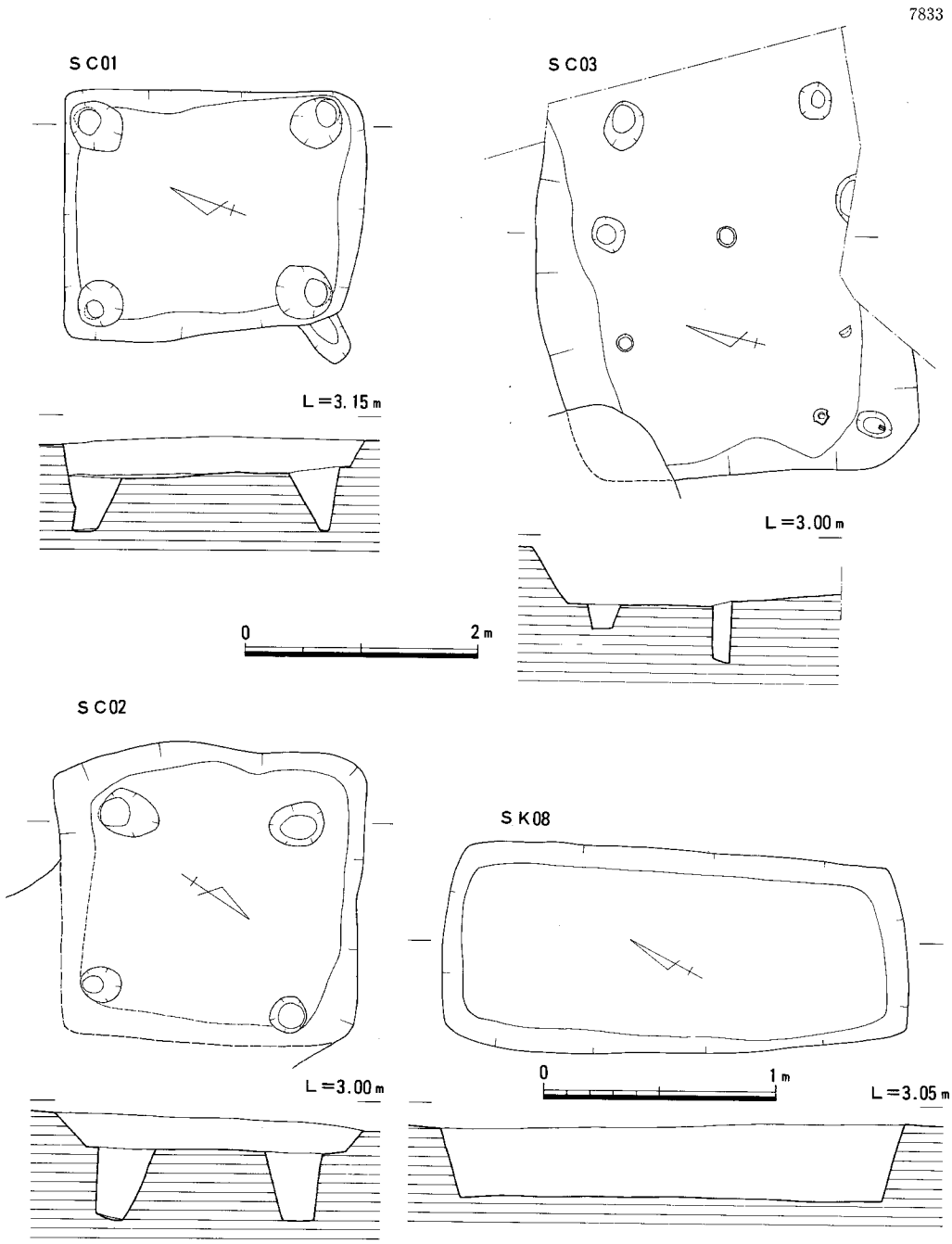


Fig.76 N区 SC01,SC02,SC03,SK08

7833

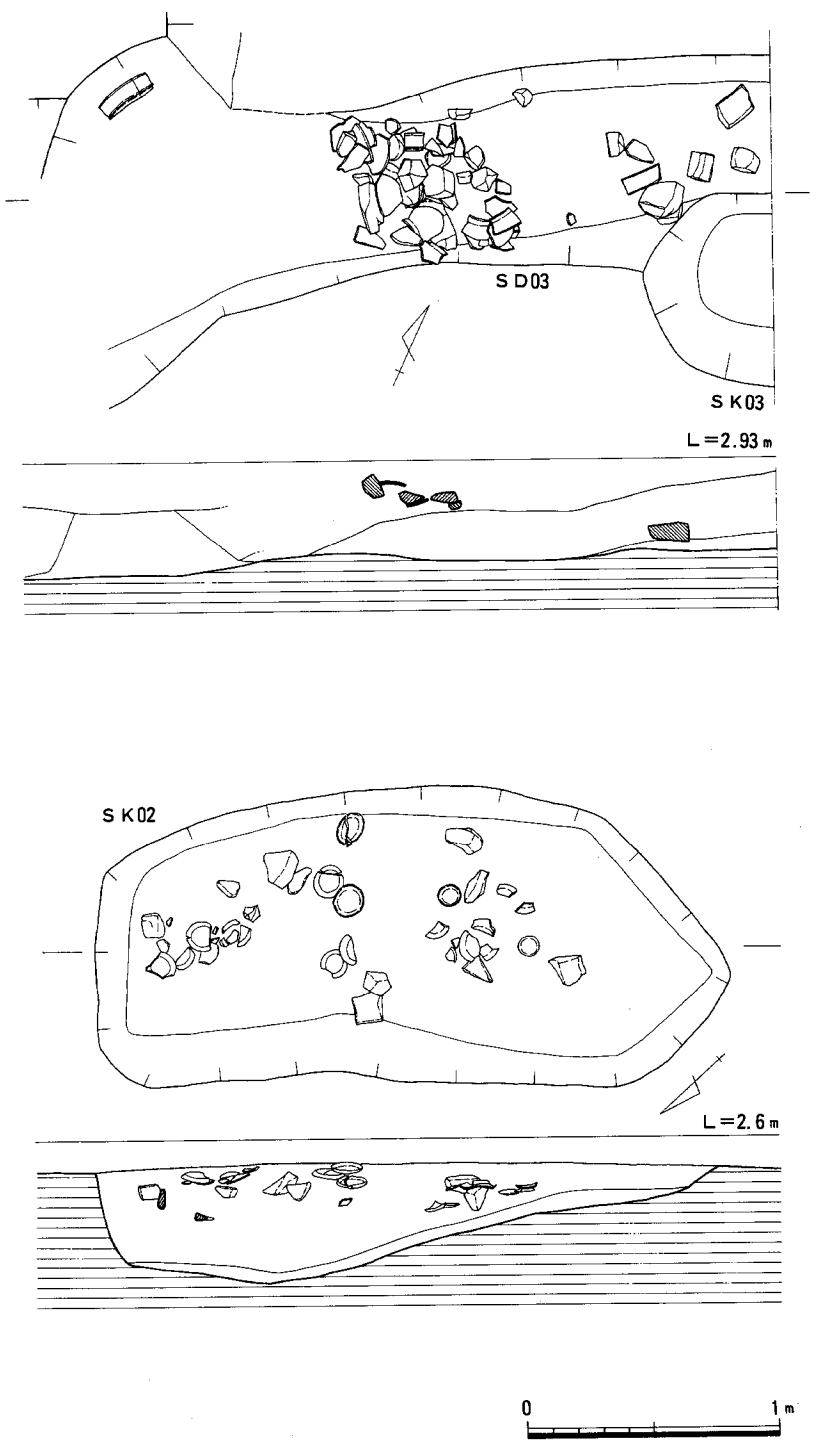


Fig.77 N区 SD03,SK02,SK03

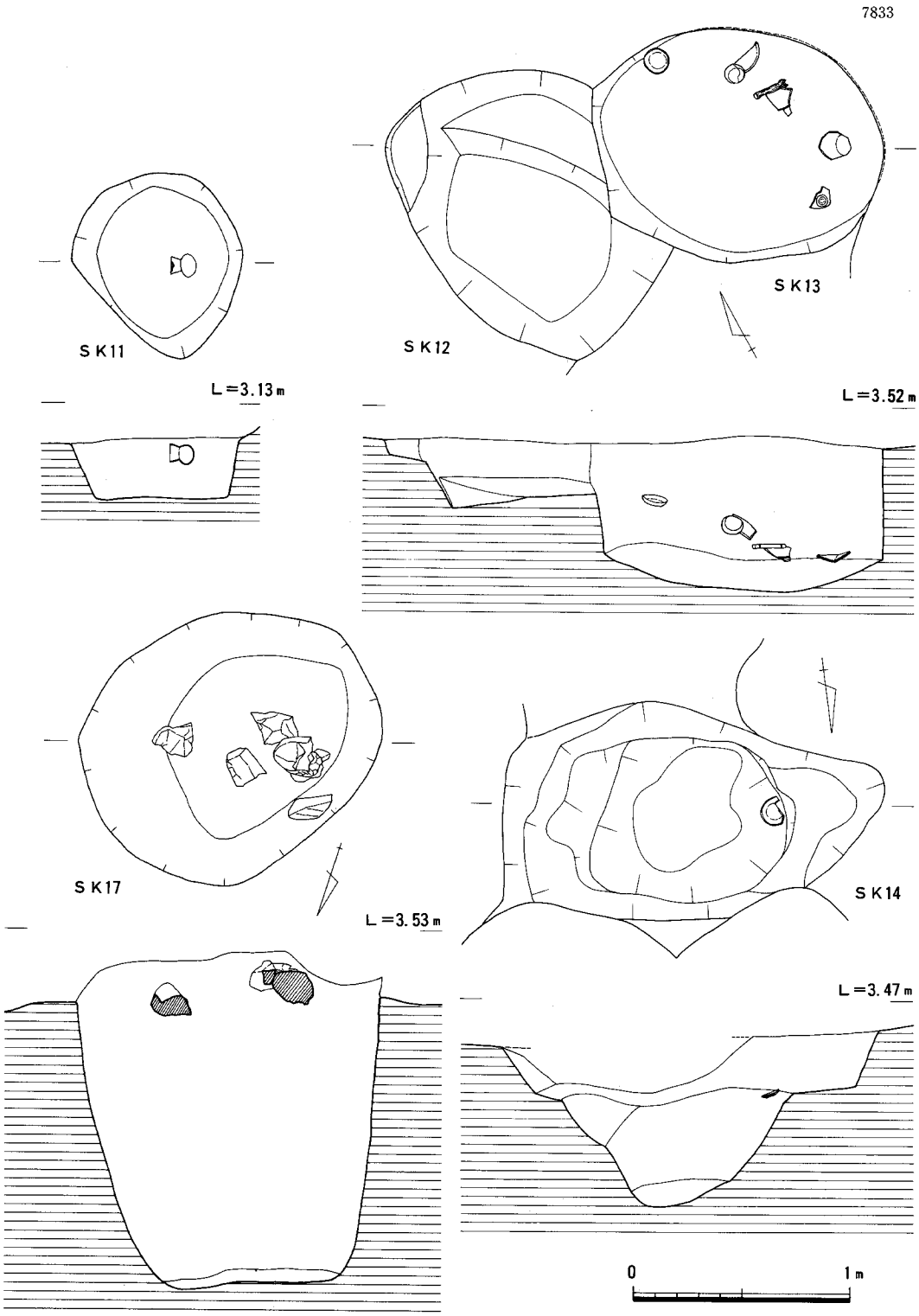


Fig.78 O区 SK11,SK12,SK13,SK14,SK17

7833

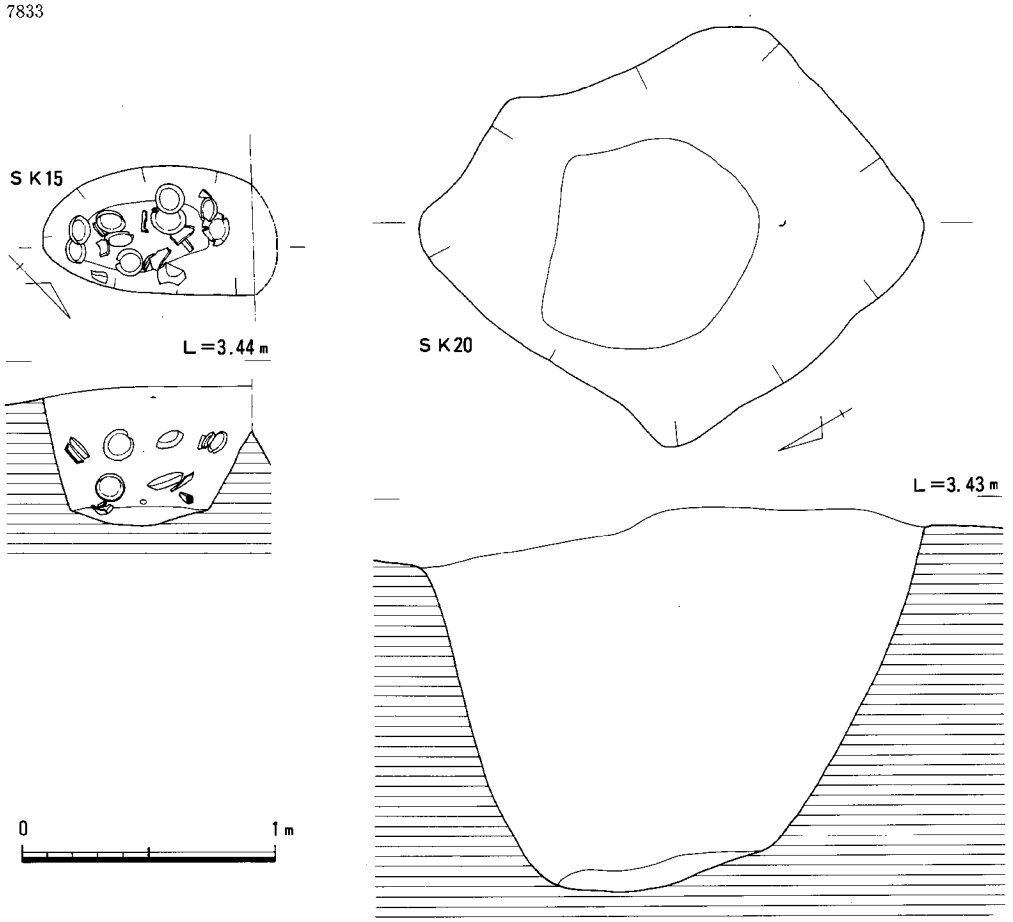


Fig.79 O区 SK15,SK20

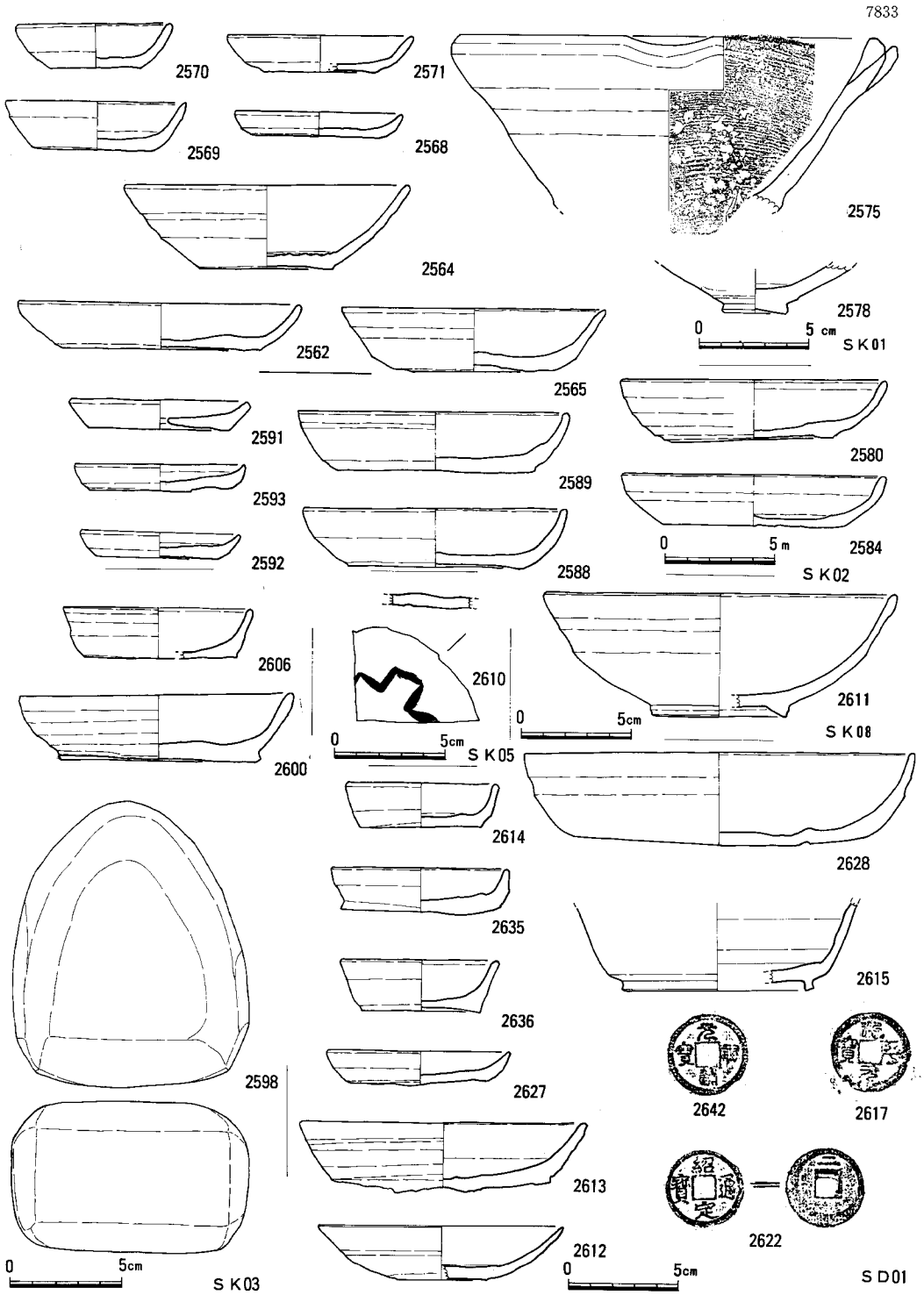


Fig.80 N区 SK01,SK02,SK03,SK05,SK08,SD01出土遺物 (1/3)

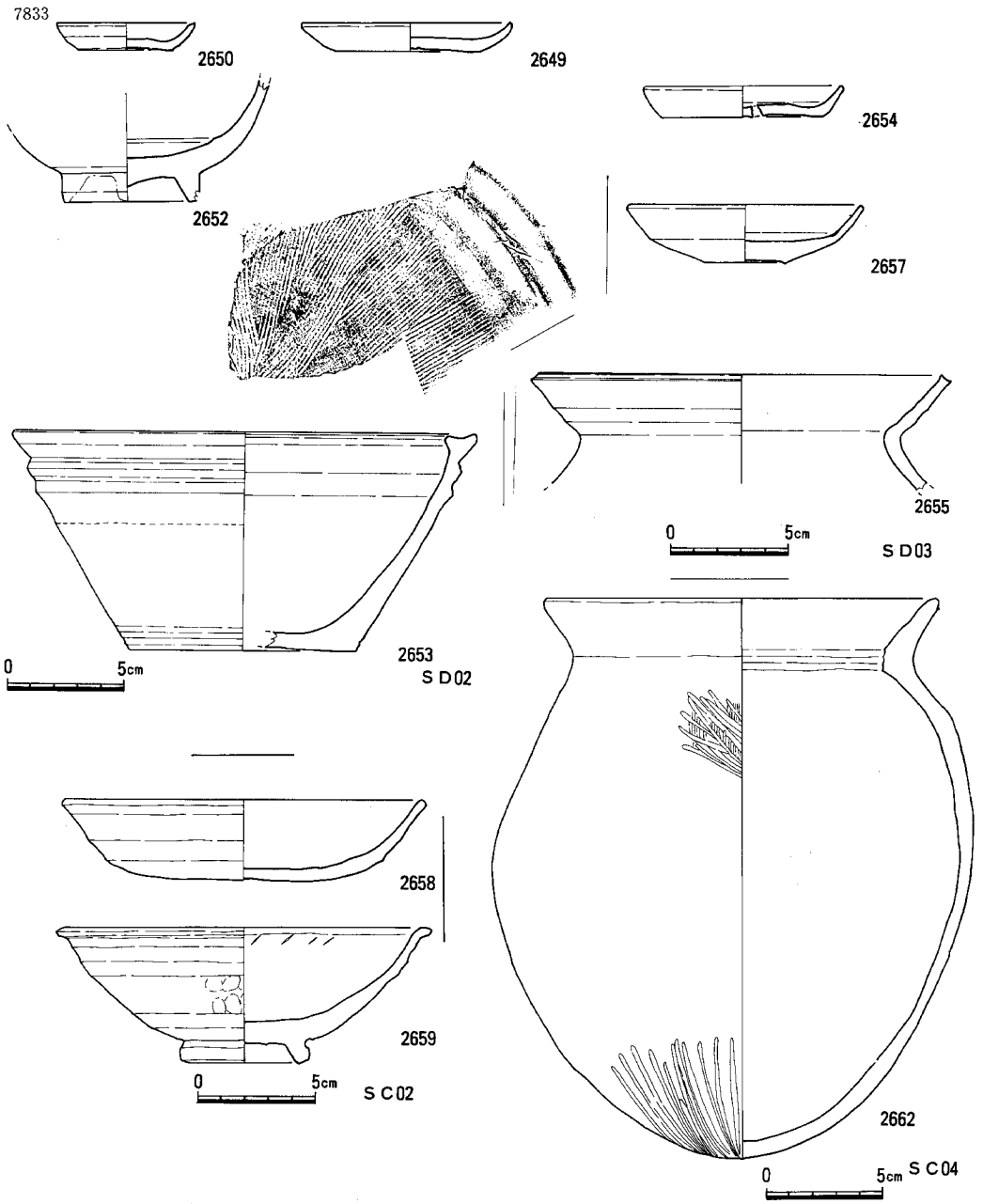


Fig.81 N区 SD02,SD03,SC02,SC04出土遺物 (1/3)

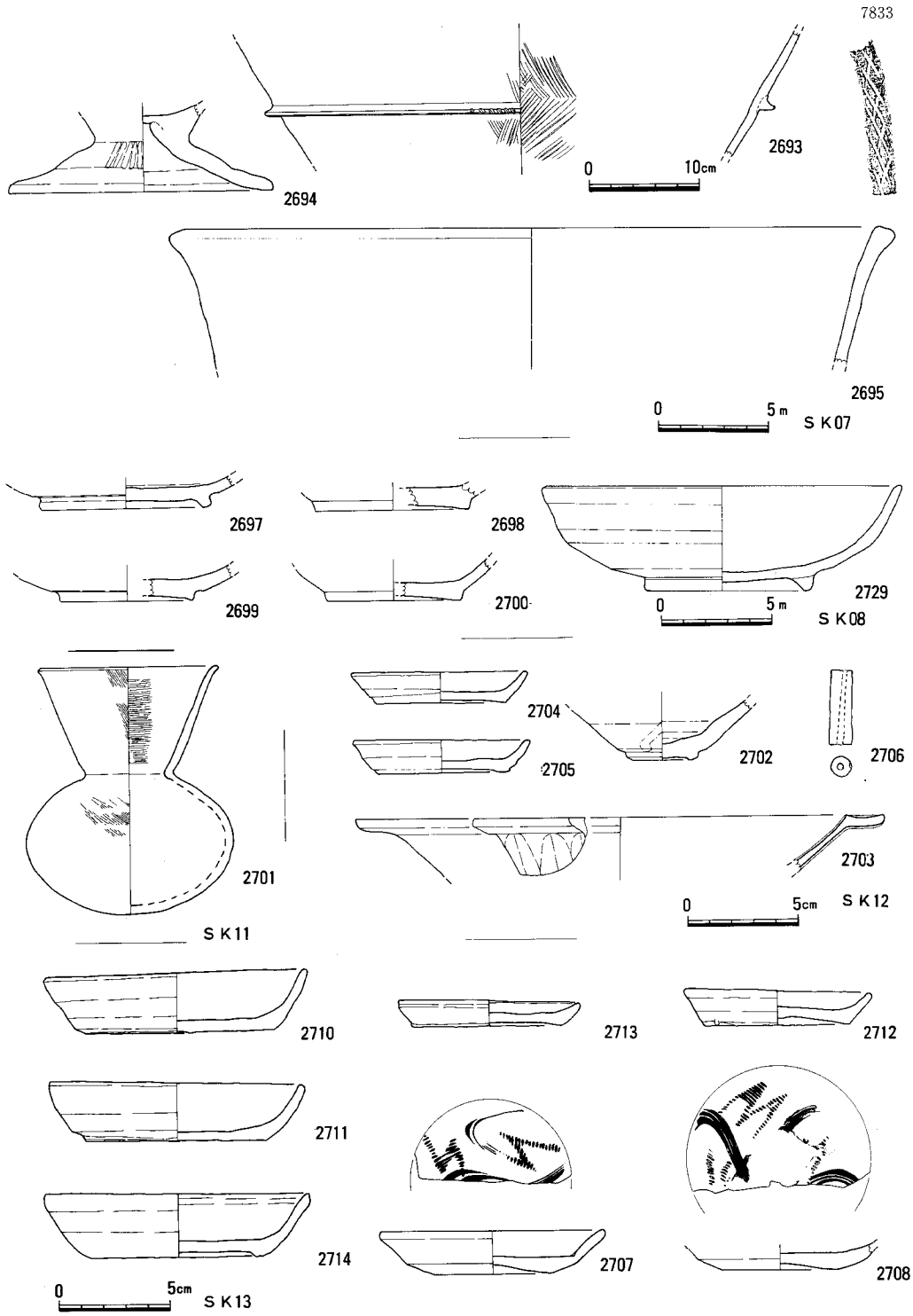


Fig.82 O区 SK07,SK08,SK11,SK12,SK13出土遺物（1/3, 2693を除く）

7833

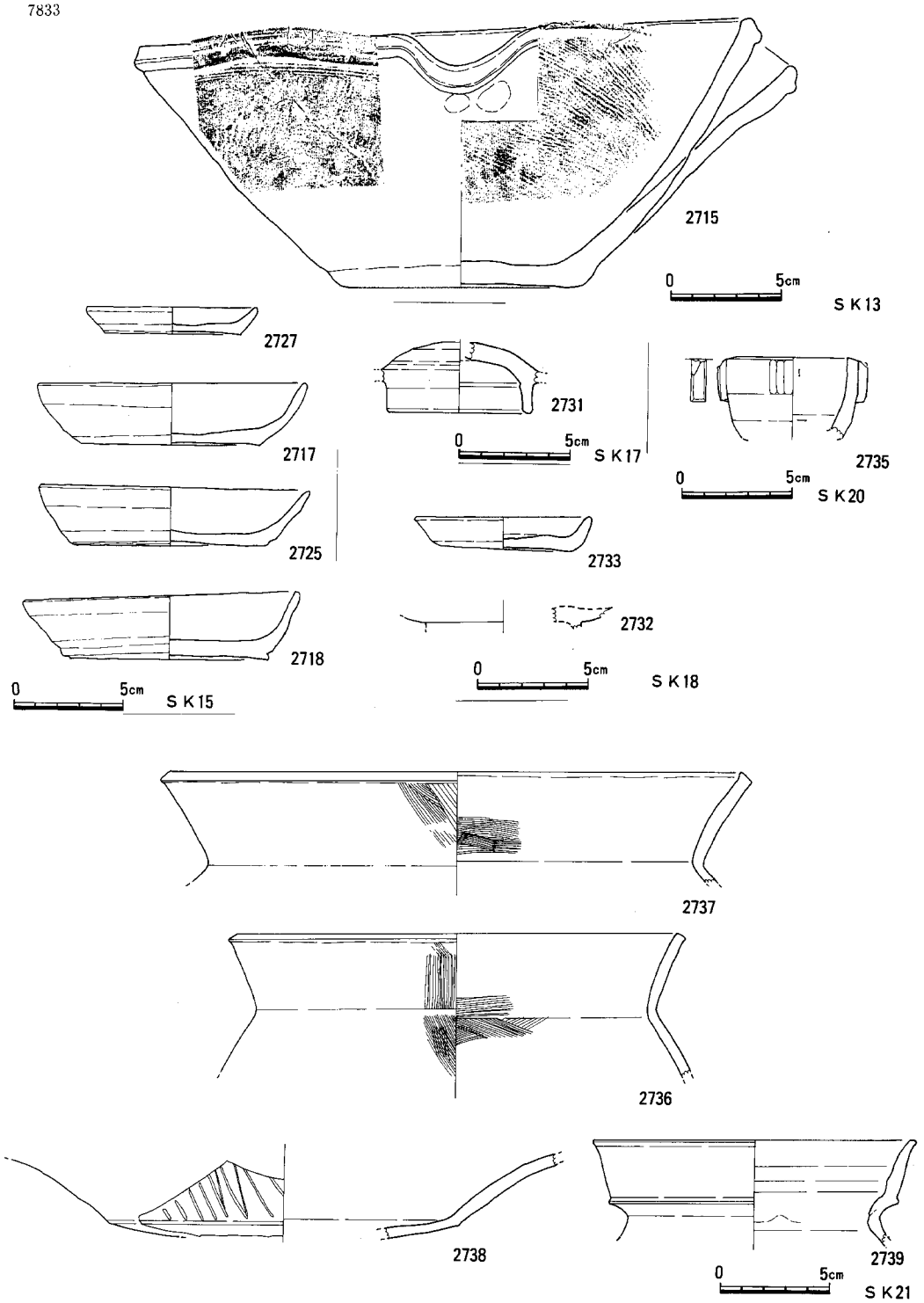


Fig.83 O区 SK13,SK15,SK17,SK18,SK20,SK21出土遺物 (1/3)

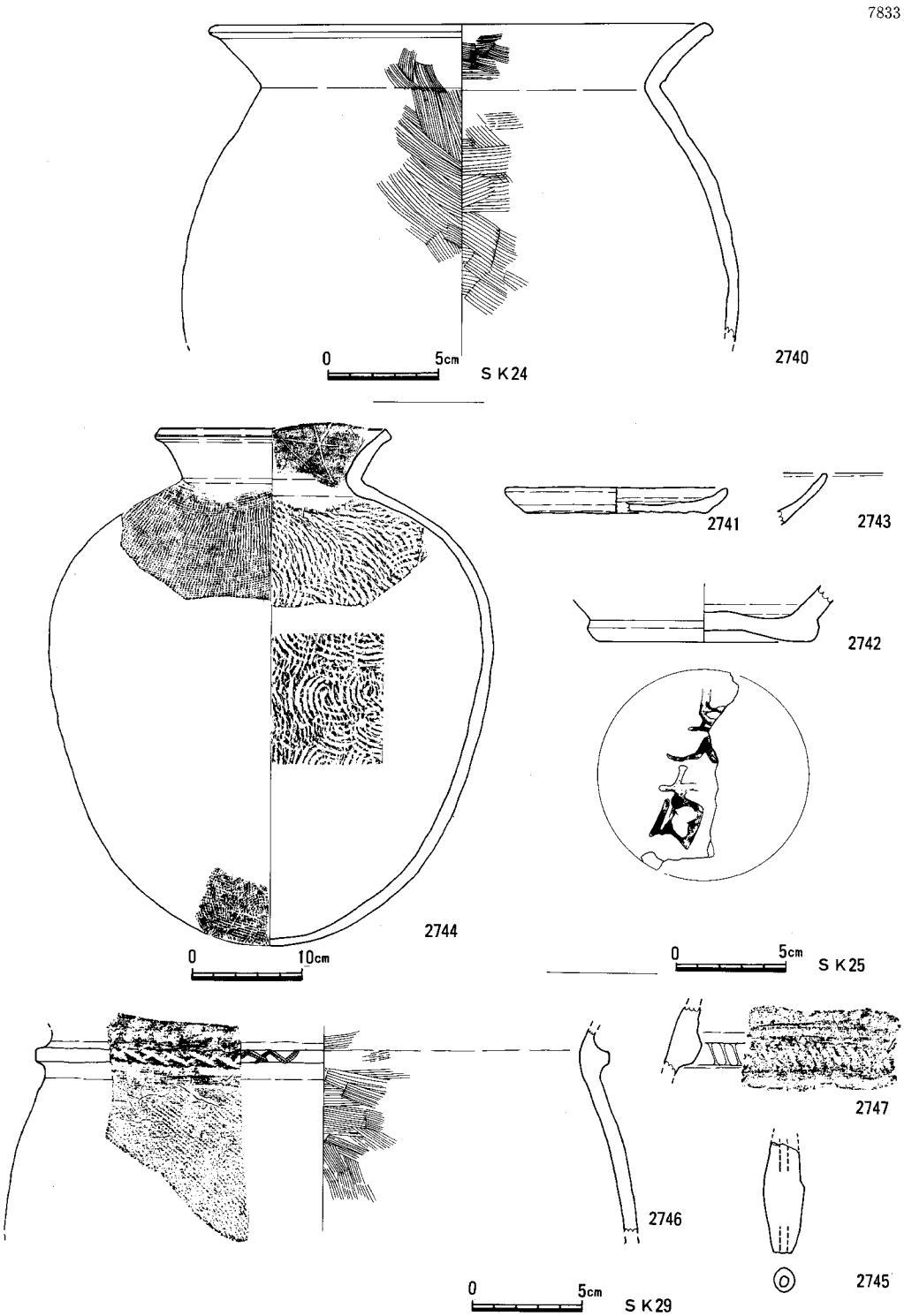


Fig.84 O区 SK24,SK25,SK29出土遺物 (1/3)

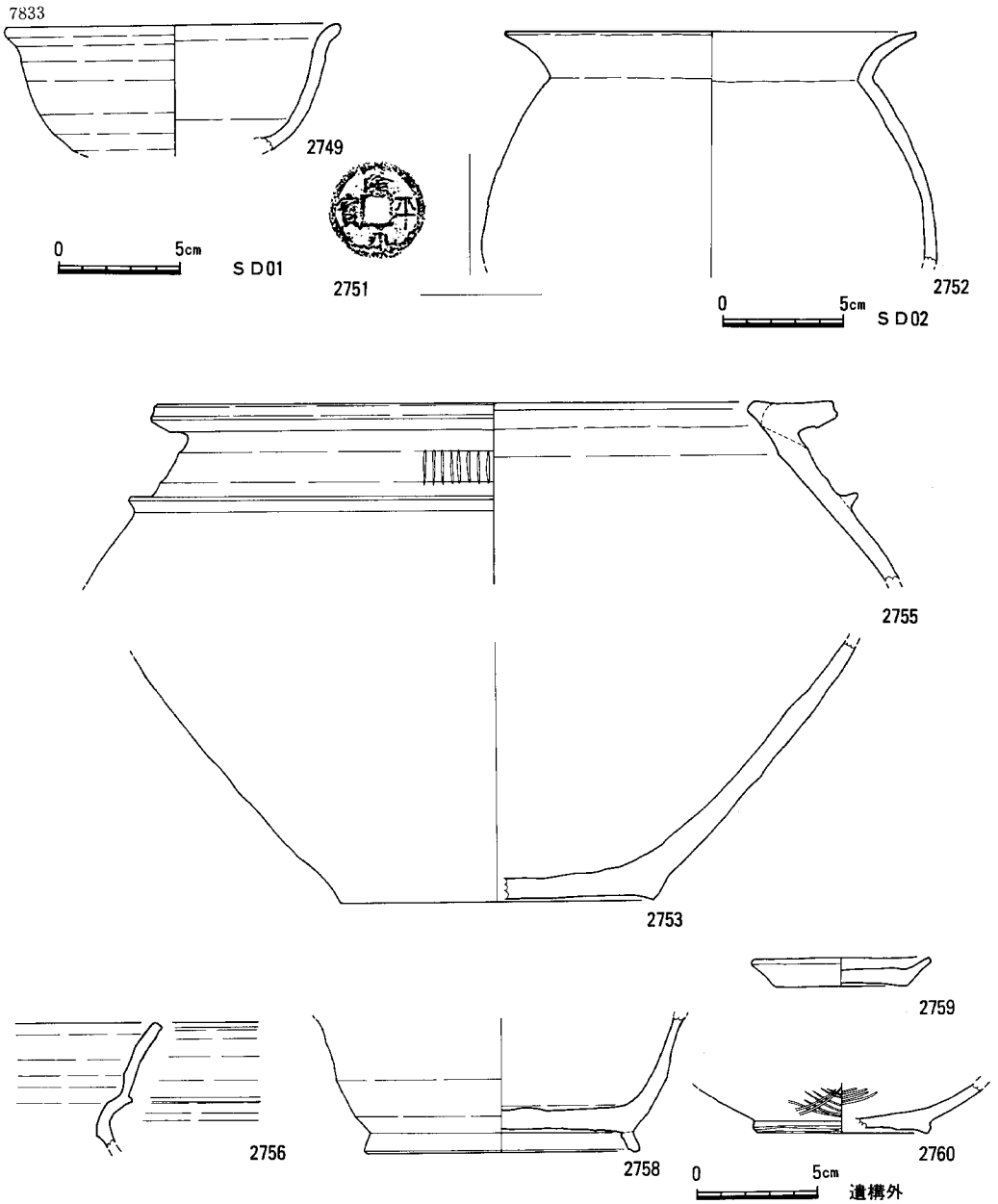


Fig.85 O区 SD01,SD02出土遺物、遺構外出土遺物 (1/3)

5. Q区の概要（Fig. 86—91、PL. 18）

Q区は1978年5月29日から調査を開始し、6月2日に終了した。区内には攪乱部分が多く、調査したのは10.5×14.0mの範囲、調査面積は約150 m^2 にとどまった。その中にも埋設管による攪乱があり、遺構のほとんどが何らかの形で破壊されていた。攪乱のない所は、地表下1.2〜1.3mで地山の白砂に達した。検出した遺構は土壙（井戸・土壙墓・廃棄物処理壙）15基、溝一条で、その時期は古墳時代前半から近・現代にいたる。

古墳時代の遺構はSK04・11・13・14、SD01である。SK11は破壊が著しくほとんど原形をとどめないが、SD01に切られており、またその出土遺物からしても、この地区で最も古い遺構である。SK14は深さ約30cmの擂鉢状の土壙で、古式土師器が出土している。SD01は西南から東北にかけて一直線に走る幅1.8m前後、深さ30〜40cmの断面U字形状の溝である。黒褐色砂の覆土から小型丸底壺（2827）、高杯（2828）などの土師器が出土しており、SK14と近い4世紀中〜後半頃の時期と考えられる。この西に隣接した博多第17次調査においてこの溝の延長がさらに38m検出されている（SD161、『博多Ⅲ』福岡市報118集、1985）。SK04は楕円形、SK13は長方形に復元できる土壙で、その出土遺物からすれば6世紀後半の時期のものであろう。SK13からは肩部に花文を施した新羅焼の壺（2811）が1点出土している。ともに土壙墓の可能性がある。この他SK15もこの時期の須恵器・土師器を出土している。

SK12は調査区北端にかかる円形状の土壙である。出土した杯・皿は墨書のもの（2809）も含めてすべてヘラ切りで、他の遺物も考えあわせると8〜9世紀の遺構である。SK07・08は13〜14世紀の井戸で底には曲物の井戸側が残存する。SK01・02は長軸方向をほぼ同じにして縦列する長方形土壙である。ともに土壙墓で、SK01の遺物出土状況からすれば木蓋の存在が想定される。時期は井戸と同じ。SK05も同時期の円形状土壙で、覆土に多くの炭化物や骨片を含む所から火葬墓の可能性もある。図示した土器（2692・2789）はこの遺構以前のものである。SK09は12〜13世紀の円形状遺構。

SK03・10は近世以降の廃棄物処理土壙である。その覆土には古墳時代以降の遺物を含んでいる。SK03の2780、SK10の2802は奈良時代の遺物。またSK10の2803は脚が欠損しているが、鼎となるものであろうか。

包含層からも多くの遺物が出土している。特に古式土師器の出土が多いのが特徴的である。Fig. 91の2817は外面タタキ、内面刷毛目調整の甕で、庄内式系土器の新しいタイプに属する。他に図示した土師器も柳田康雄氏編年のⅡaの時期段階におさまるものである。Fig. 90の2825は蛇目高台をもつ越州窯系青磁椀片である。

7833

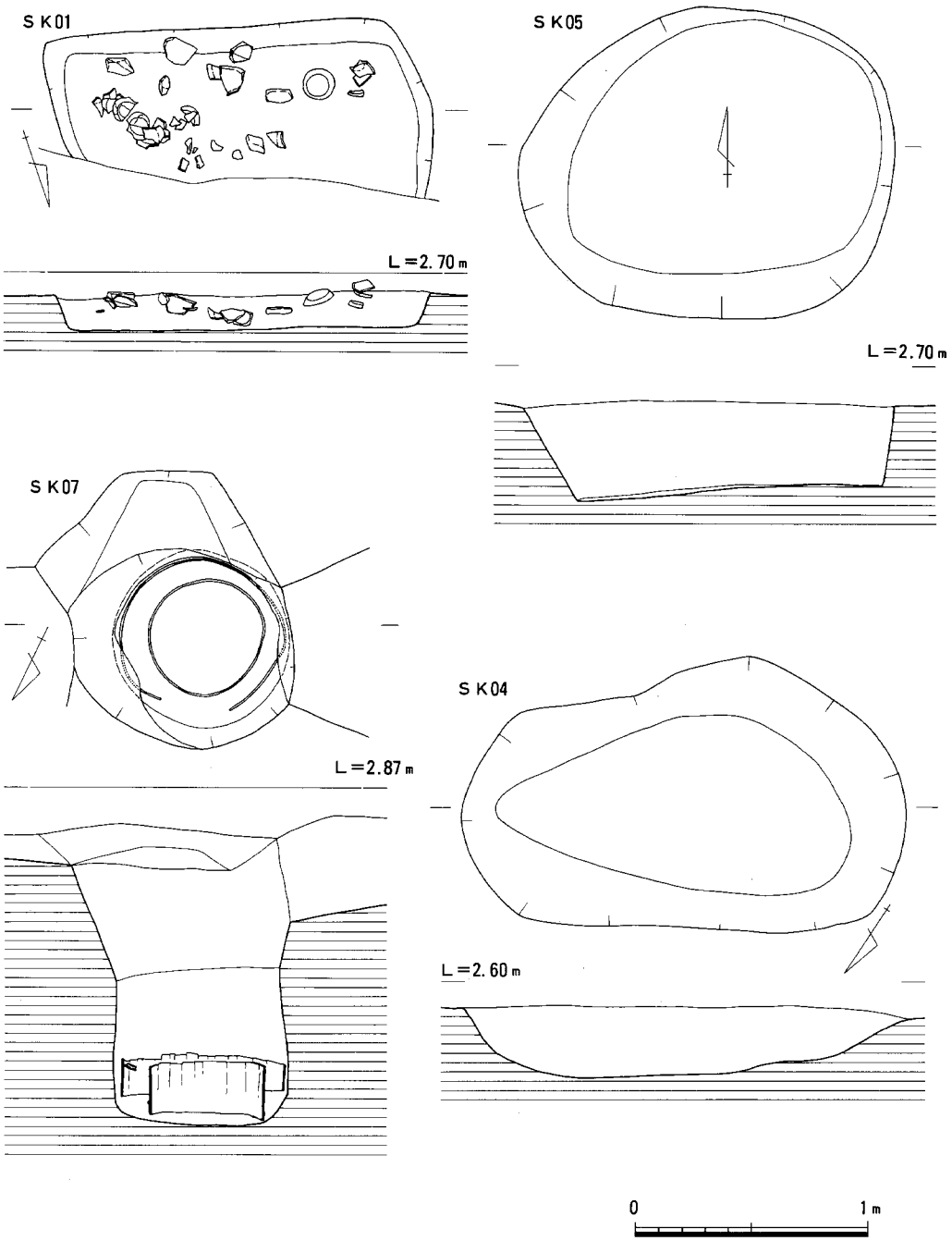


Fig.86 Q区 SK01,SK04,SK05,SK07

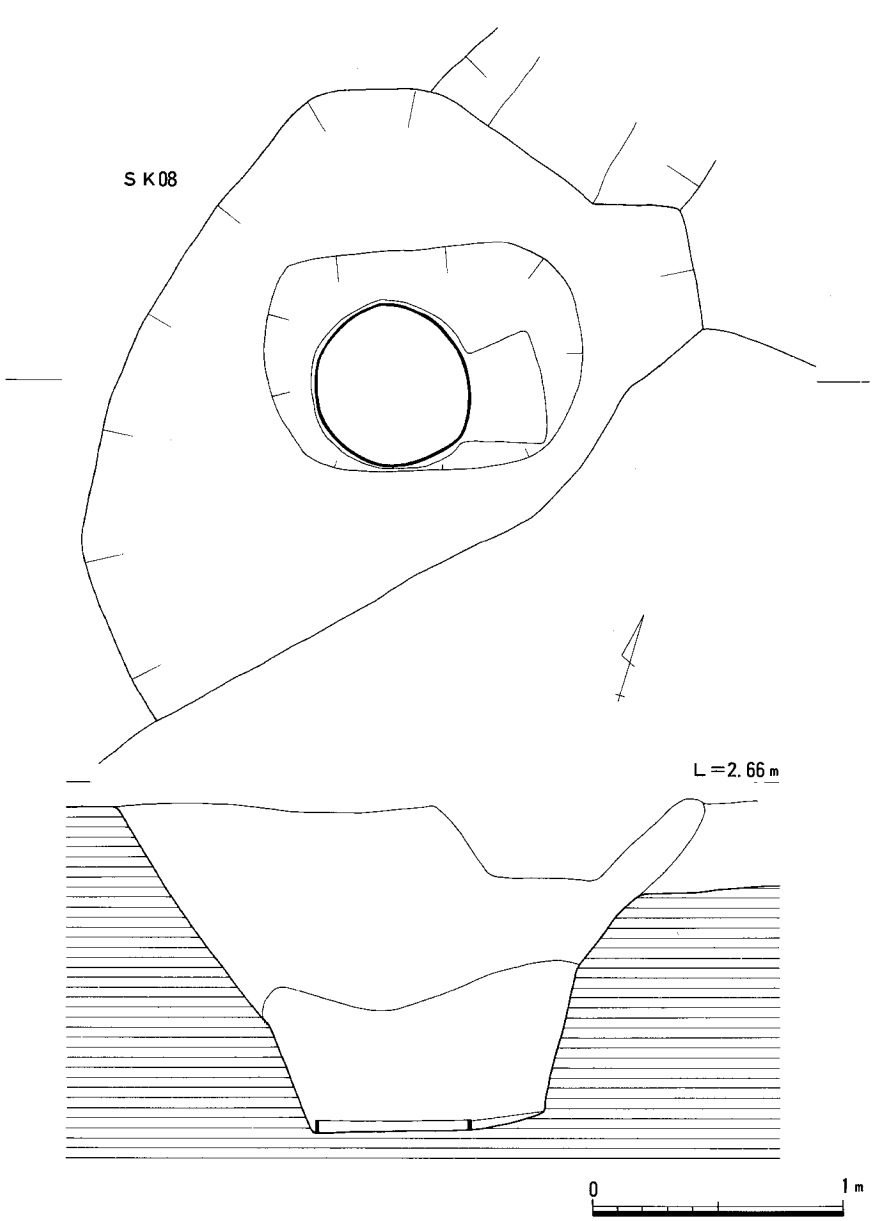


Fig.88 Q区 SK08

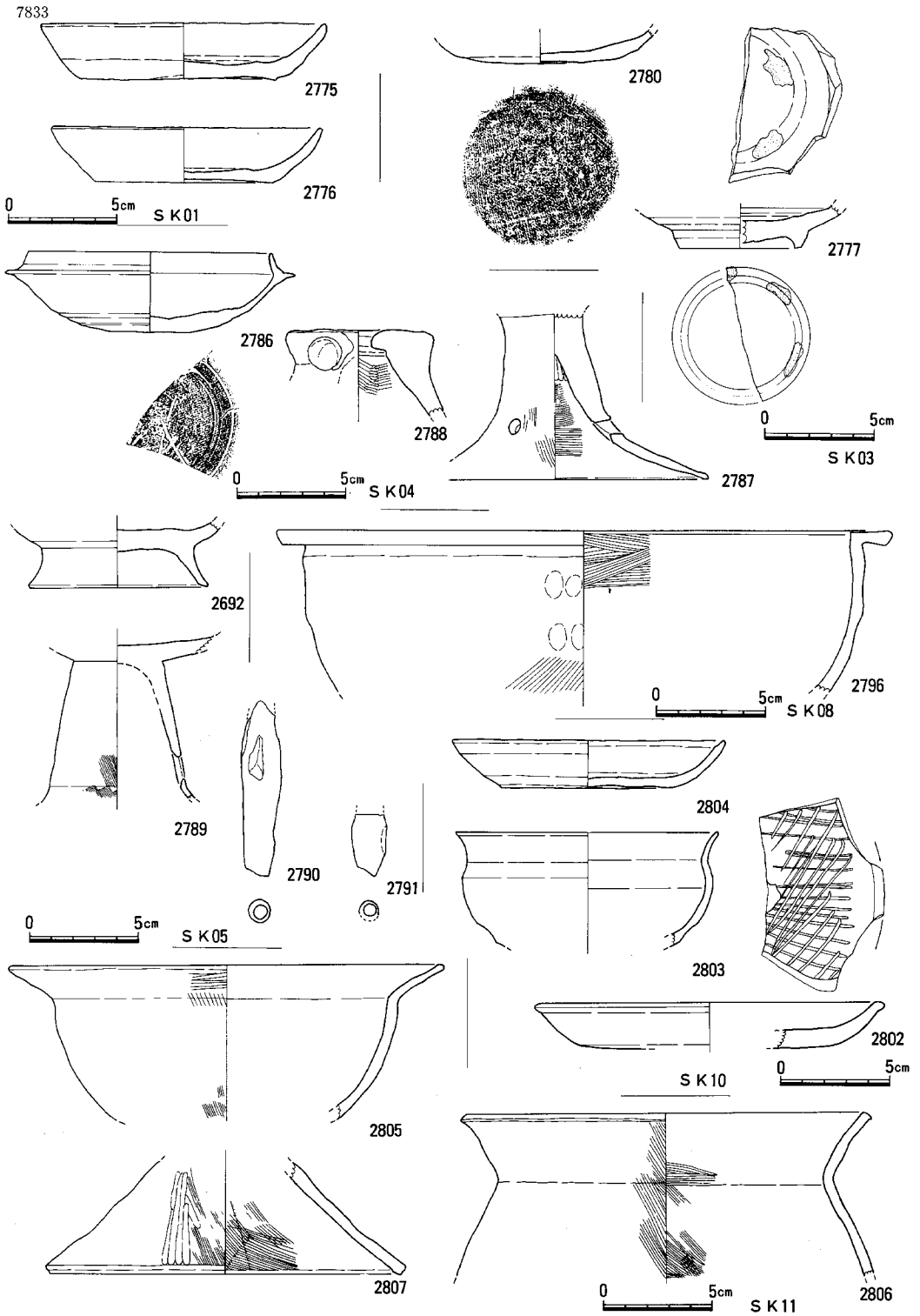


Fig.89 Q区 SK01,SK03, SK04,SK05,SK08,SK10,SK11出土遺物 (1/3)

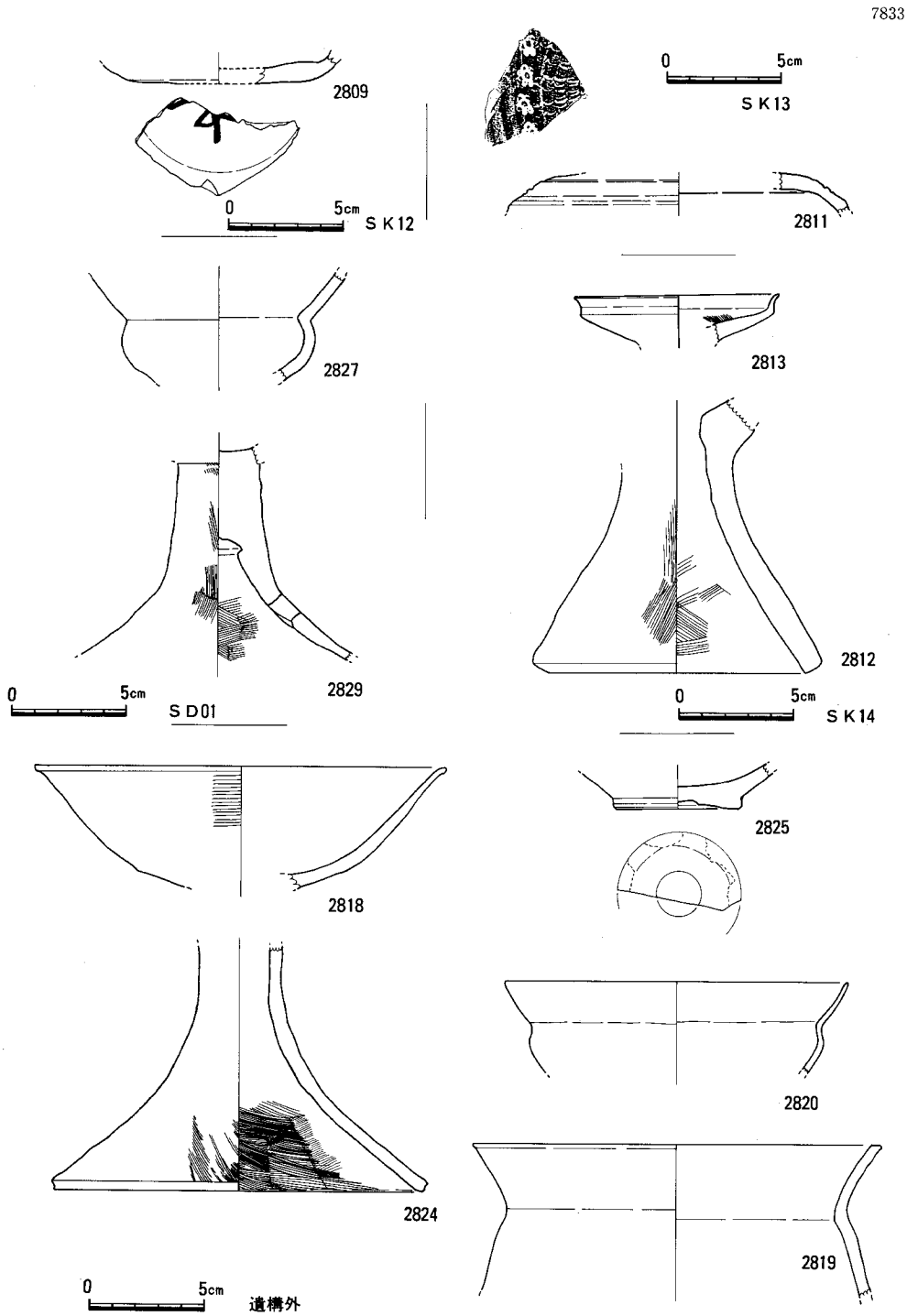


Fig.90 Q区 SK12,SK13,SK14,SD01出土遺物と遺構外(包含層)出土遺物(1)(1/3)

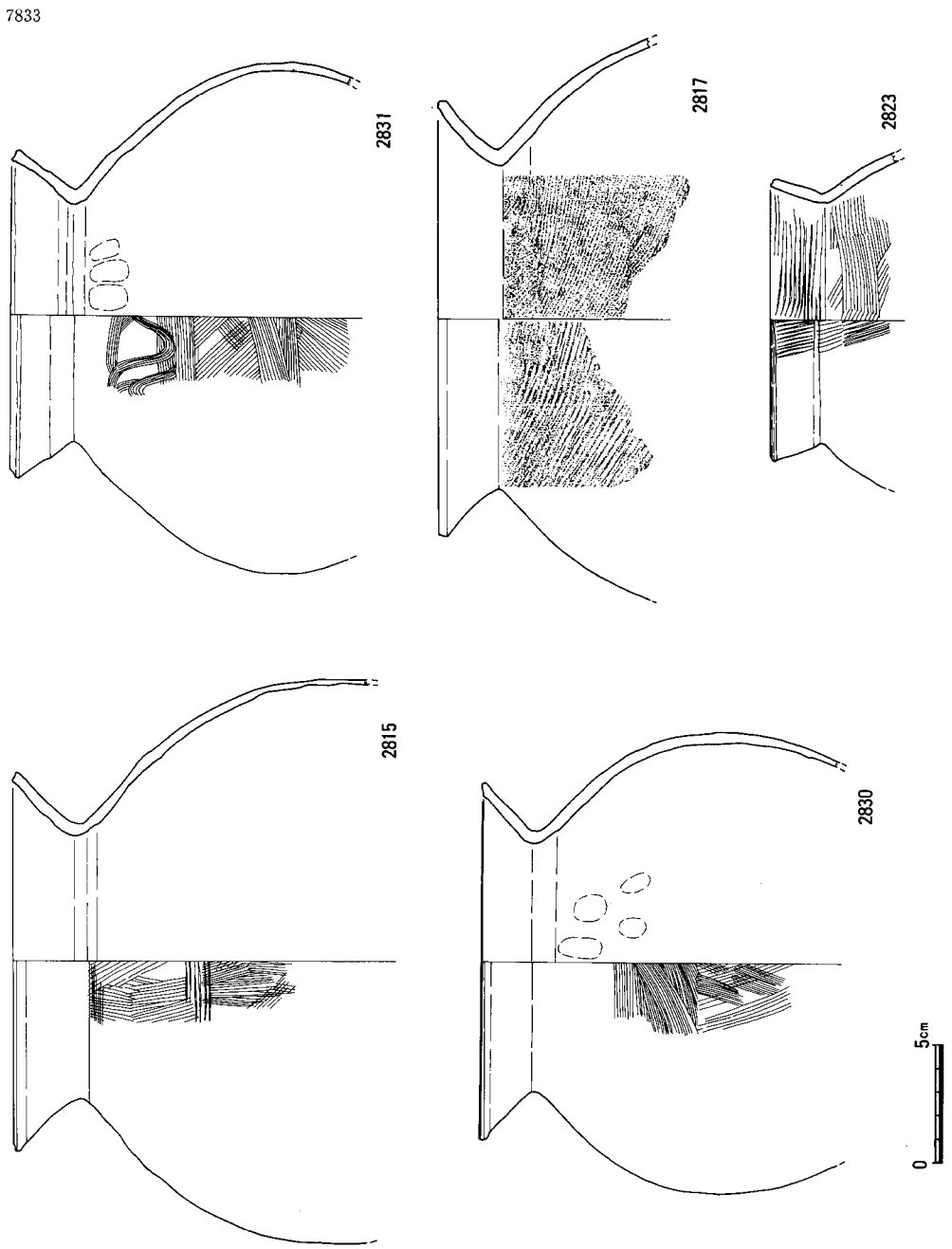


Fig.91 Q区遺構外(包含層)出土遺物(2)(1/3)

6. ま と め

以上、地下鉄1号線祇園町工区本体部調査区のうち、H～Q区についてその遺構の概要と主な出土遺物について紹介をしてきた。1号線関係の調査区は「博多浜」と呼ぶ砂丘の南半部に巨大なトレンチをいれた如きものであり、各調査区によって各時期の様相がやや異なっている。すでに報告している店屋町工区A～D区、祇園町工区E～G区の調査結果をあわせて各時期ごとにまとめておきたい。

弥生時代中期に属する甕棺墓がB区を中心にまとまって出土している。付近では2・3号出入口、東長寺周辺（8、30次）、天福寺（22次）や24、32次調査などで同期の甕棺墓が出土している。このことから甕棺墓は谷頭部をベルト状にめぐる形で分布していることが明確である。またこの時期の住居址が30次調査で出土しており、集落も墓地周辺に営まれている。

弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての遺物はH区付近以南徐々に多くなり、馬場新町交差点を中心にした地域に広く分布し、竪穴式住居、方形周溝墓や、古墳時代初頭の合せ口甕棺墓が検出されている。

古墳時代中・後期では、G・H区の東に近接する28次調査区で、全長60m程と推定される前方後円墳（博多1号墳）が発見されたのをはじめ、I区で2基の石棺又は小石室墓が見られ、夜間調査区（SK65、SK67）、L区（SK14）、M区（SC01）、N区（SC01～03）、O区（SK04、05、11）、Q区（SK04、11、13、14、SD01）など土壙、墓、竪穴住居址、溝の遺構が検出されている。土師器、須恵器をはじめ多くの遺物も出土しているが、後世の攪乱を受けており、中・近世遺構に混在することが多い。後述する5号出入口では、金環、鉄製鋲を副葬し、環座金具をもった木棺墓も検出されており、博多1号墳に象徴される首長の系譜をもつ特定集団が居住していたものと思われ、その性格も大型魚、海獣を捕獲するような、海洋に開かれた民であったろう。

奈良～平安時代（律令期）の遺物はA区からQ区に致るまで出土しており、その量も多い。しかしながら、後世の攪乱等により、良好な遺存状況を示す遺構はそれ程多くない。ところが一方、この時期の遺物は土師器、須恵器が大半を示すが、石帯、鈸具、円面硯、鴻臚館式軒丸瓦、製塩土器、焼塩壺、越州窯青磁、長沙窯水注、イスラム陶器片、皇朝十二銭などの官衙施設の存在を示すような特殊遺物も、博多浜最北端部（築港線第4次調査）から最南端部（17・20次調査）まで広く分布しており、その数量も少なくない。昭和62年12月から翌年1月にかけて平和台球場外野席で鴻臚館跡が発掘調査されたが、『入唐五家伝』、『類聚三代格』に見出せる鴻臚中嶋館については、現在のところ平和台球場東側にある福岡高等裁判所の地をあてる説が強い。『倭名類聚抄』に記される那珂郡の郷名に中島郷がある。貝原益軒は『筑前国続風土記』で中島郷を那珂川と比恵川（現石堂川）の間に比定し、博多遺跡群付近を海部郷に比定してい

る。しかしながら、日野尚志氏は「筑前国那珂・席田・粕屋・御笠四郡における条里について」1976で、海部郷は住吉付近の条里区、中島郷は博多湾の島が一郷を形成していたものとされている。博多遺跡群の立地を見ると、博多湾頭に浮ぶ島状の砂洲と見るに何ら差支えない。先程の出土遺物等も併せ昨今の調査結果からすれば、鴻臚中嶋館を博多遺跡群内に求めることもあながち不可能なことではない。

平安時代末期から博多遺跡群の遺構と遺物は極端に増加する。戦国時代に到るまで博多の港湾都市としての性格は堅持され、江戸時代の鎖国令をもって国際舞台から退くまで、幾多の紆余曲折を経ながらも繁栄した。この時期の遺構、遺物は遺跡群全域で検出されており、以前の遺跡占地状況からすると区域は格段に広がっている。しかし、各時代ごと各地城の様相は少しずつではあるが変化が見られる。今回の1号線本体部の結果からすると、南側に下るにつれ、出土遺物の絶対量はやや少なくなる傾向があり、逆に博多駅築港線のように北側の調査地点では増加している。築港線調査区では遺物包含層が4m近くに及んでおり、その地点での造成事業の盛んだったことを示している。特に1号線関係調査区で出土量の少なかった14世紀以降の遺物の出土量には格段の差があり、14世紀以降博多中心部は遺跡群の北側、海岸寄りに移ってゆくことを示しているのではないか。遺物の数量と比率については各調査地点ごとに比較を試みれば新たな事実も呈示しえると思うが、今回はそこまでの時間的余裕がなく後日を期したい。

A区から夜間調査区まで検出されている東西、南北方向をとる溝状遺構も興味深い遺構である。これまで検出されたこの方向の溝は、祇園町交差点および馬場新町交差点を中心とした地域に分布し、築港線では発見されていない。この方向の溝は14世紀前半代に廃絶されているが、その初源については今ひとつ明確でなかったが、律令時代の官衙が博多にある可能性は極めて高くなりつつあり、都城の条坊と一致するこの南北方向の溝の起源も、博多における官衙の存在と関連づけられる。A・B区5号溝とI区1号溝との間隔が約1町の幅をもつことも象徴的である。

陶磁器の高台内露胎部に墨書銘をもつ、いわゆる墨書陶磁が多いのも博多遺跡群の特色の一つである。中でも中国人姓を記すものは中国商人の博多における経済活動を示す具体的資料として注目されている。博多4次調査地点と近接するC・D区付近では「丁綱」銘の墨書陶磁が50点以上まとまって出土し、丁某がこの地に居留していたものと考えられる。今回報告分では「丁綱」銘も見られるが(2325)、「林」(1115、1245、1246、2241)、「陳」(1194、1307、1271、1257)などが目立っており、これら墨書陶磁の調査地点ごとの銘の分布の偏り等の確認は今後重要な作業として行わなければならない。

最後に今回の報告では紙数の制限から遺構、遺物の細かいデータより出土遺物の実測図を出来るだけ掲載することに努めた。それぞれのデータについては機を見て明らかにしたい。

第2章　祇園町工区4号出入口の調査 (Fig. 92～99、PL. 23・24)

遺跡略号　HKT S-7　　調査番号　8148

博多区御供所町に位置し、祇園町工区G・Hと、28次と31次調査とにはさまれる狭少な調査区がある。昭和56年9月1日から18日まで調査を行なった。調査面積は70 m² である。この調査区では23基の土壙(井戸を含む)が検出されており、SK03、04、09、10の4基の井戸を除けば他はいずれも廃棄物処理土壙である。近現代の攪乱も多い。SK01は戦国末から近世初期の土壙で明代の青磁がある。11は瀬戸のおろし目皿である。SK03、05、06も同様の時期であるが、古い時期の遺物が混在する。SK03は木桶組井戸。SK04も痕跡は残さないが木桶組であろう。近世初頭。SK09は木桶組井戸であるが図示した遺物は掘方からの出土で、近世初頭の時期。SK10も木桶組井戸で、井筒内から明染付皿(65)が出土している。16世紀代。SK12は13世紀代の廃棄物処理土壙である。遺構外からの検出遺物も多く、明、李朝の陶磁や、国産品としても備前擂鉢(146)、焼塩壺(123、138)など戦国期から近世にかけての遺物が目立つ。なお、122は粘板岩製の硯で、外縁を削り出して魚かと思われる装飾を施している。縁帯部に鱗を模した刺突痕をめぐらし、鰭状の突起部も見られる。所属時期は明らかでない。145は滑石製石鍋を再加工した有孔の温石である。28次調査地点では前方後円墳が検出され、本体部I区でも古墳時代の墓が検出されている。31次調査地点でも埴輪が出土しているが、ここでは当該期の遺構は検出さ

祇園町工区4号出入口出土主要遺物一覧 (1)

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
00001	SK01	青磁	龍泉高台付皿
2	↓	↓	龍泉碁笥底皿
3	SK03	↓	V類碗
4	SK01	↓	V類器種不明
5	↓	↓	V類
6	↓	↓	V類
7	↓	↓	V類見込釉カキ取り
8	↓	朝鮮か唐津か？	皿
9	↓	明の赤絵か？	↓
10	↓	土製品	土垂
11	↓	古窯系	おろし皿(瀬戸)
12	↓	瓦	軒平瓦
13	↓	土師皿	糸切大皿
14	↓	↓	↓
15	↓	↓	↓
16	↓	↓	↓
17	↓	土師皿	糸切小皿
18	↓	↓	↓
19	↓	↓	↓
20	↓	↓	↓
21	SK11	土師器	糸切皿
22	↓	土師質土器	すり鉢
23	SK02	土師皿	糸切大皿
24	↓	↓	↓

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
25	↓	↓	↓
26	↓	↓	↓
27	SK03(井戸)	明染付	皿
28	↓	青磁	龍泉V類高台付皿
29	SK04	瓦	軒平瓦(唐草？)
30	SK05	土師皿	糸切小皿
31	↓	↓	↓
00032	↓	↓	↓
33	↓	↓	↓
34	↓	瓦質	火鉢？
35	↓	↓	瓦質片口鉢
36	↓	↓	すり鉢
37	↓	↓	鉢
38	↓	↓	瓦質片口鉢
39	↓	国産陶器	古窯系片(瀬戸)
40	SK06	白磁	碗VI類(墨書)
41	SK06	白磁	高台付皿II類カキ取りなし
42	↓	↓	↓
43	↓	↓	平底皿VI-1類
44	↓	青白磁	↓
45	↓	↓	壺
46	↓	↓	盤口水注の口縁か？
47	↓	白磁	高台付皿II-1類

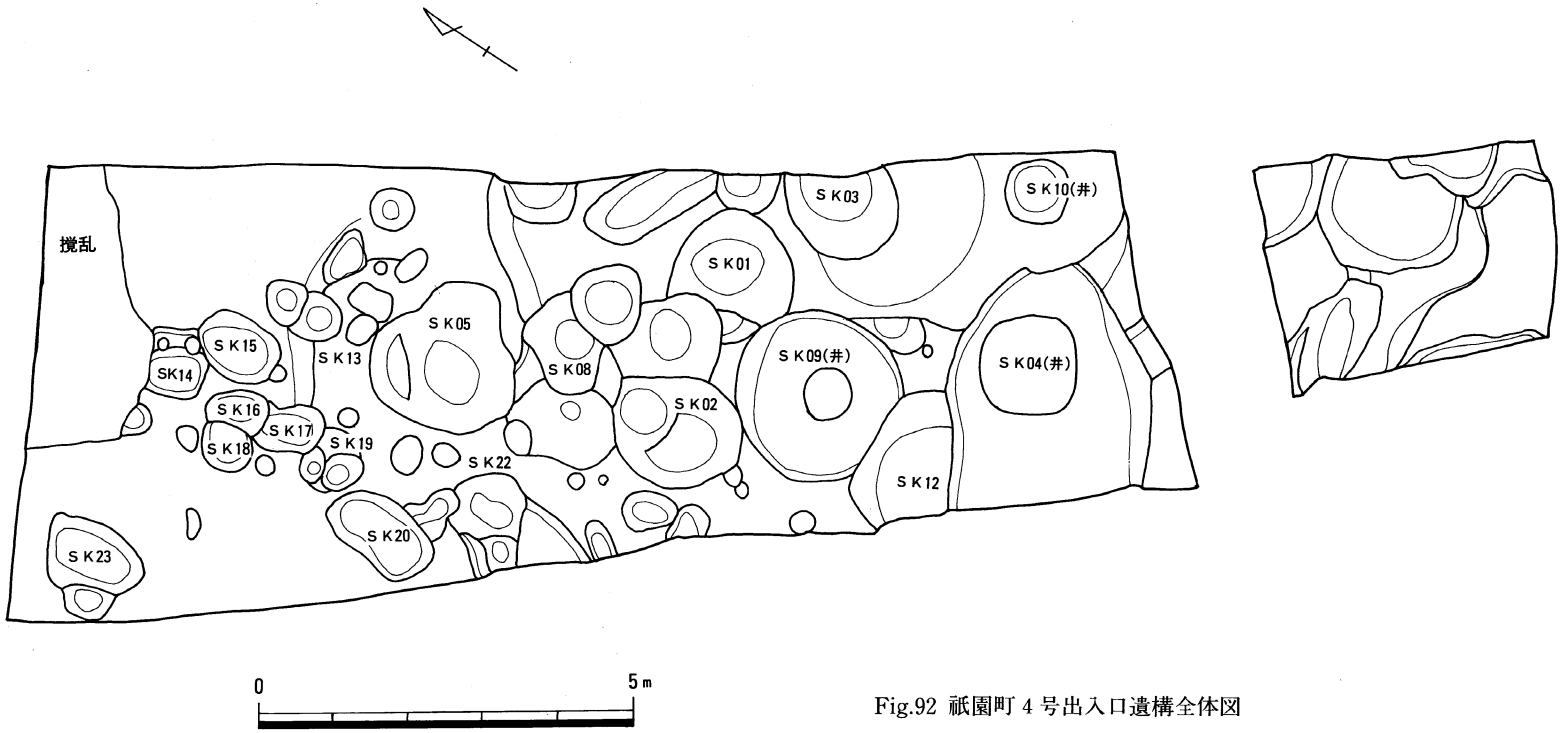


Fig.92 祇園町 4 号出入口遺構全体図

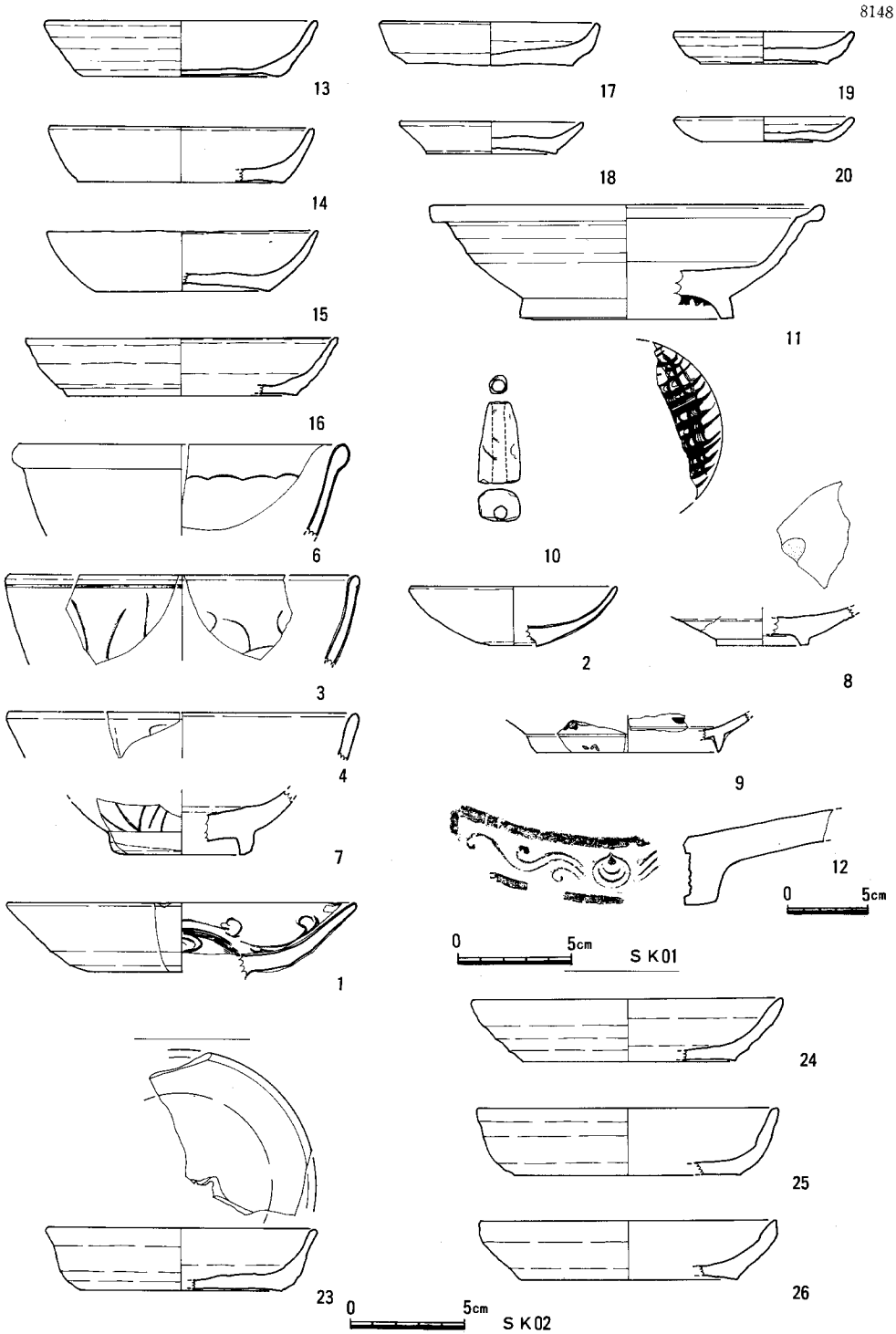


Fig.93 4号出入口 SK01,SK02出土遺物 (1/3,12を除く)

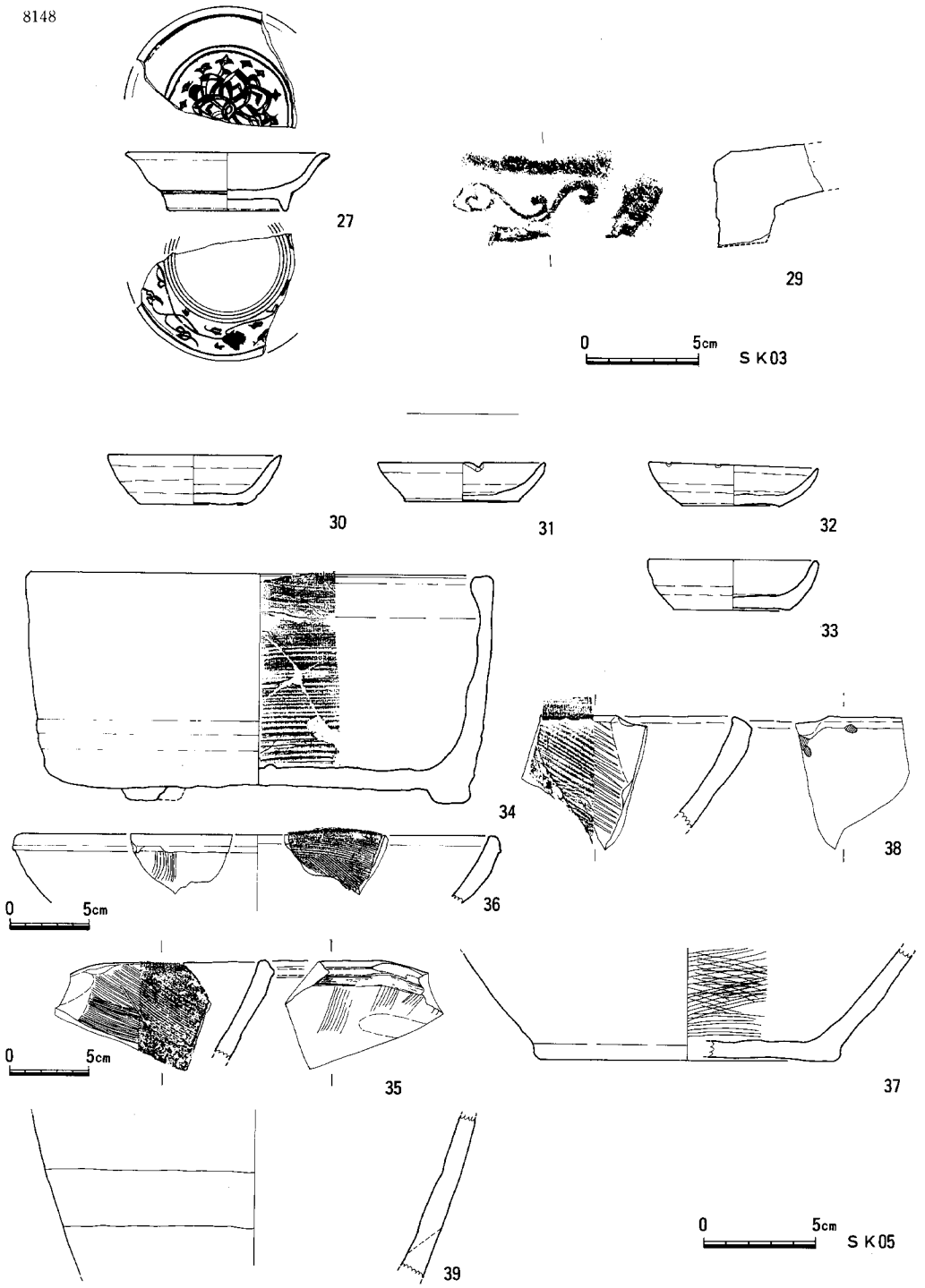


Fig.94　4号出入口 SK03,SK05,出土遺物（1/3, 35,36を除く）

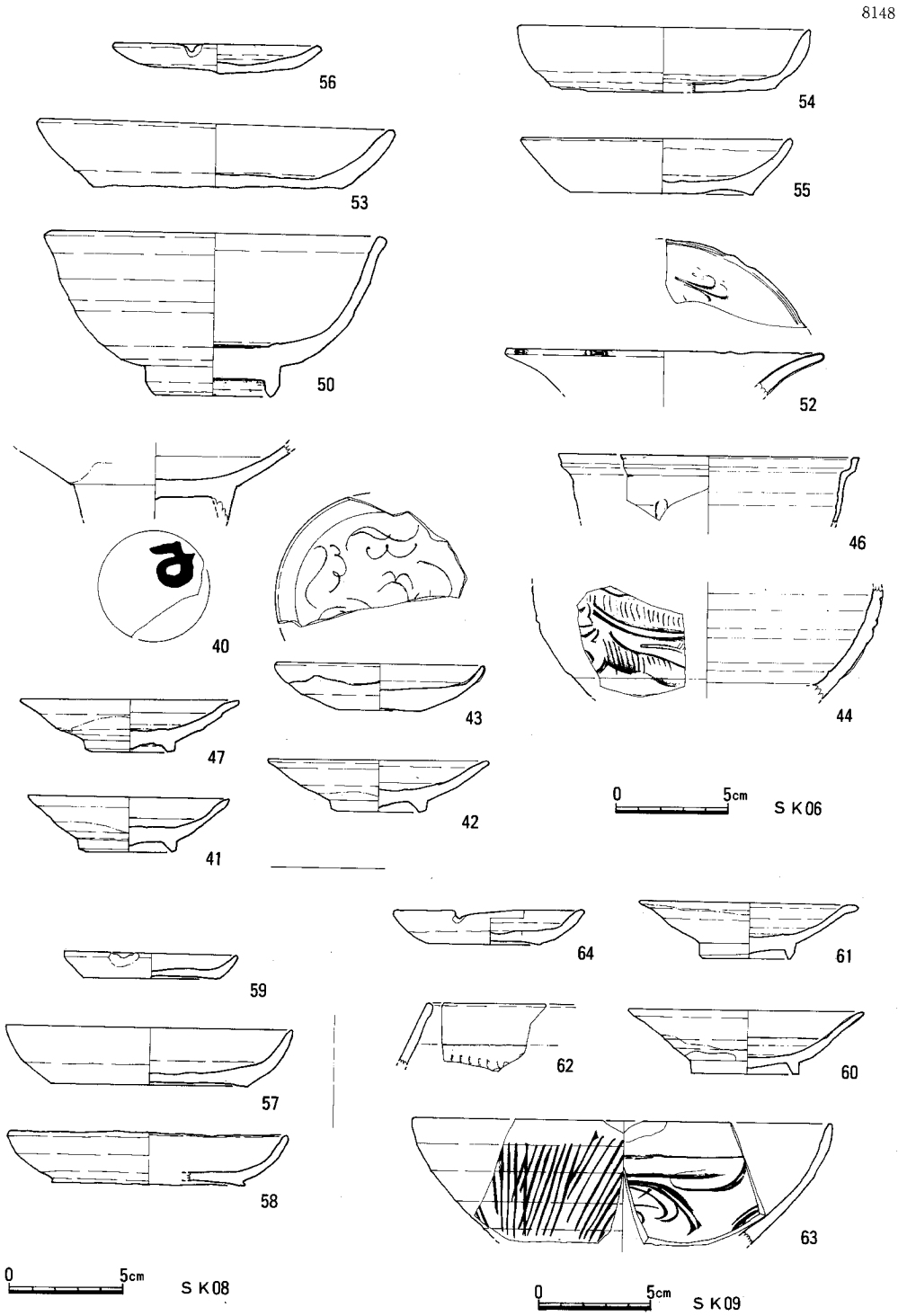


Fig.95 4号出入口 SK06,SK08,SK09出土遺物 (1/3)

8148

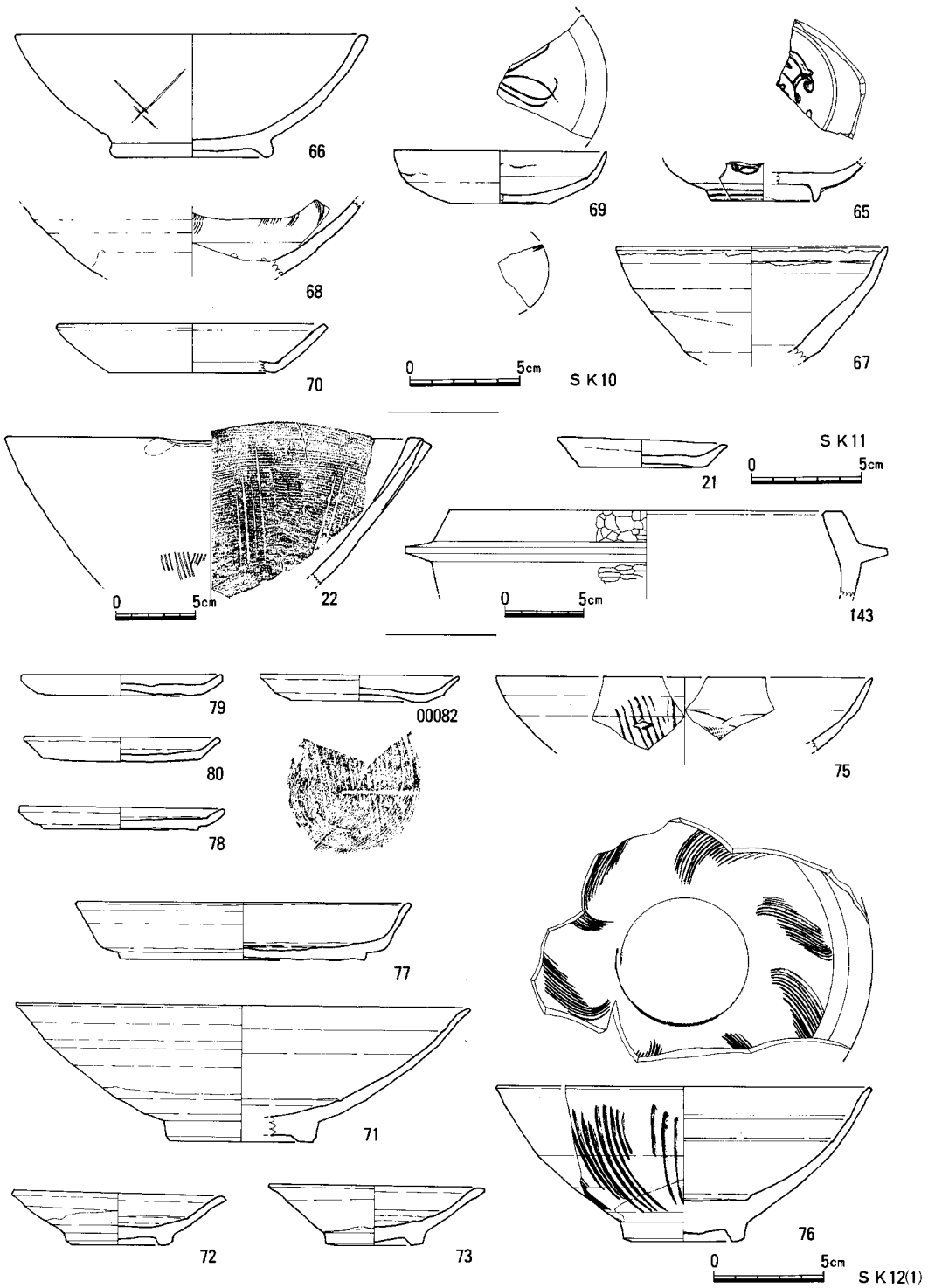


Fig.96 4号出入口 SK10,SK11,出土遺物とSK12出土遺物(1) (1/3,22,143を除く)

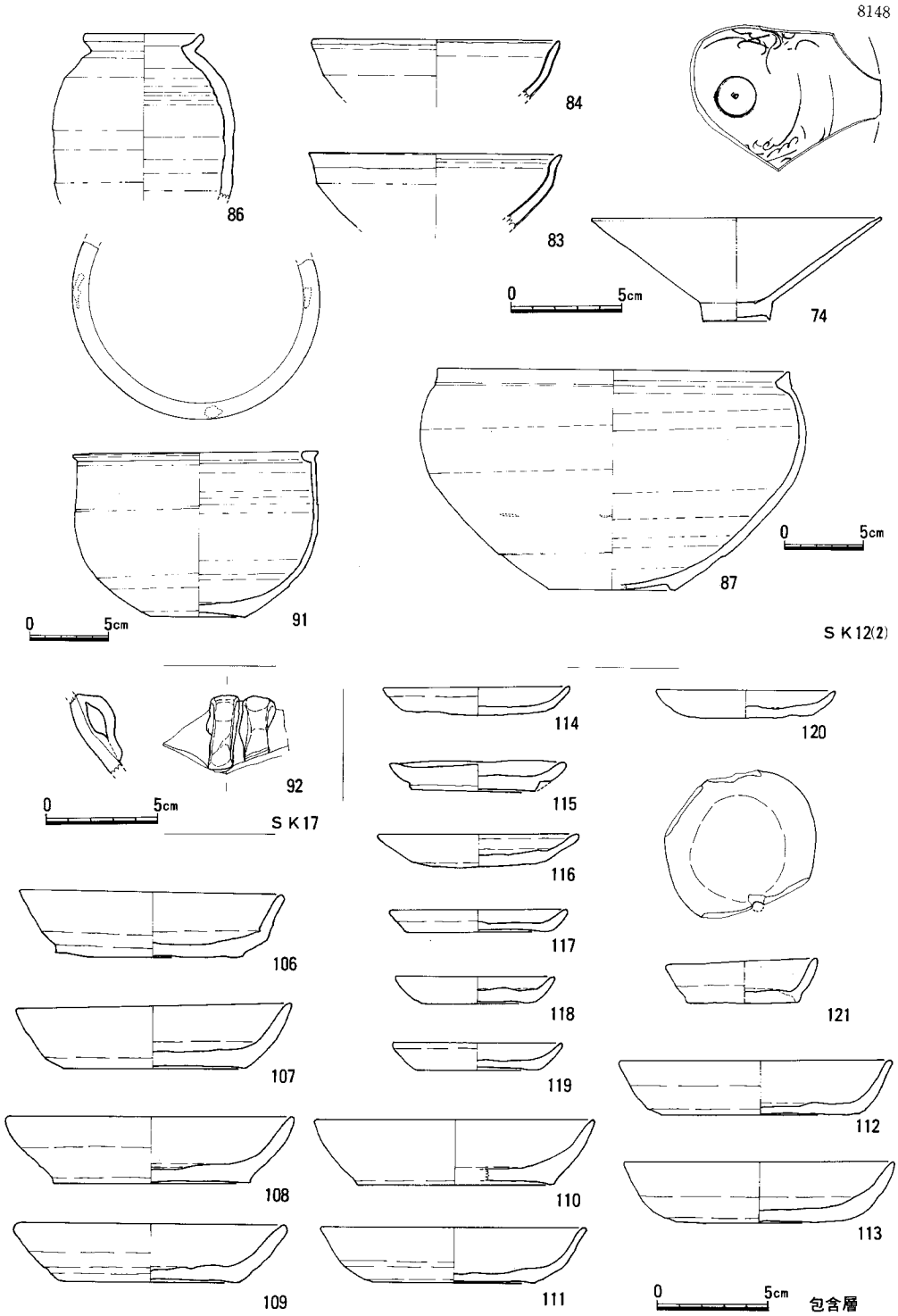


Fig.97 4号出入口 SK12出土遺物(2)とSK17出土遺物、遺構外(包含層)出土遺物(1) (1/3,87,91を除く)

8148

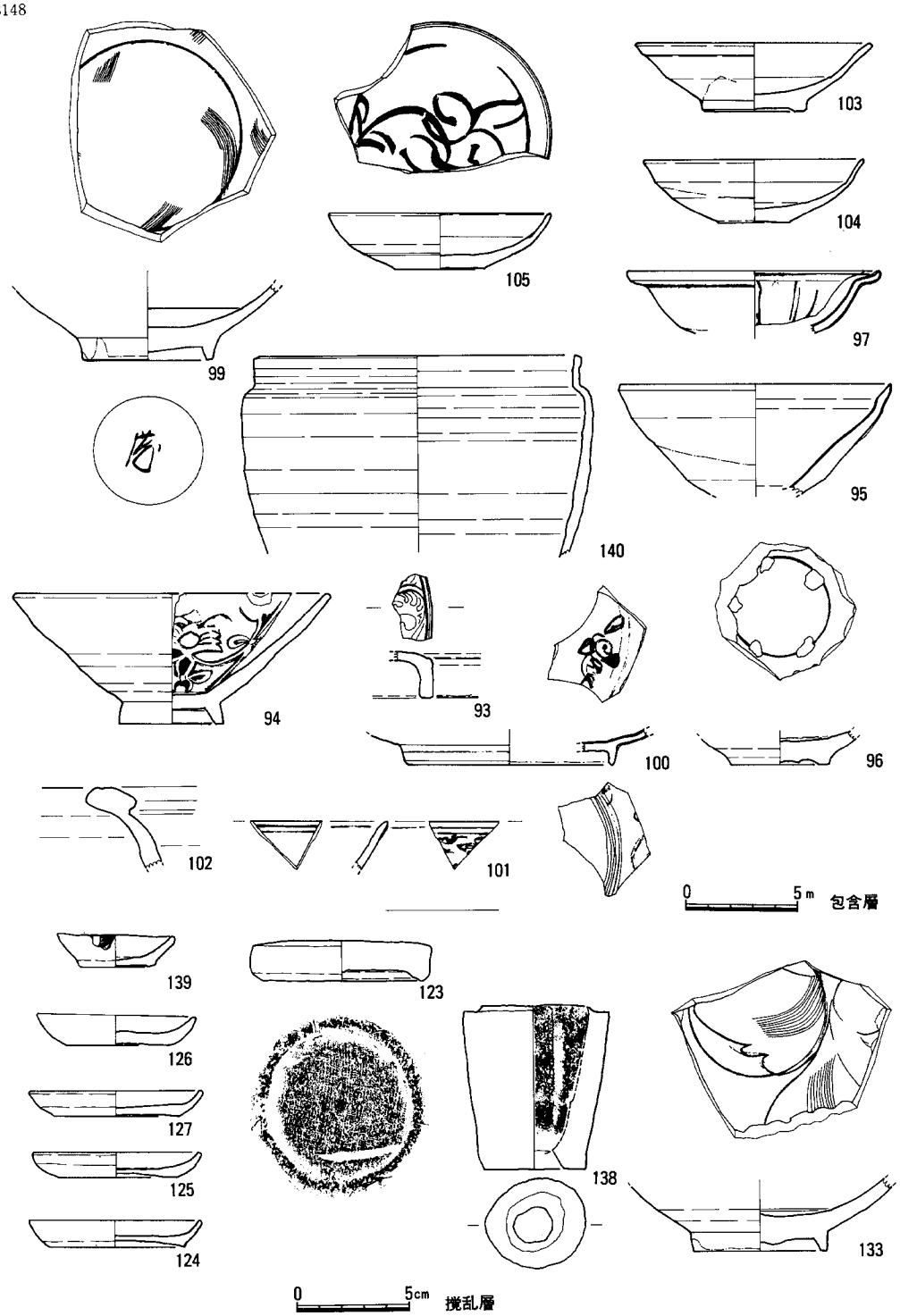


Fig.98 4号出入口 遺構外(包含層・撹乱)出土遺物(2) (1/3)

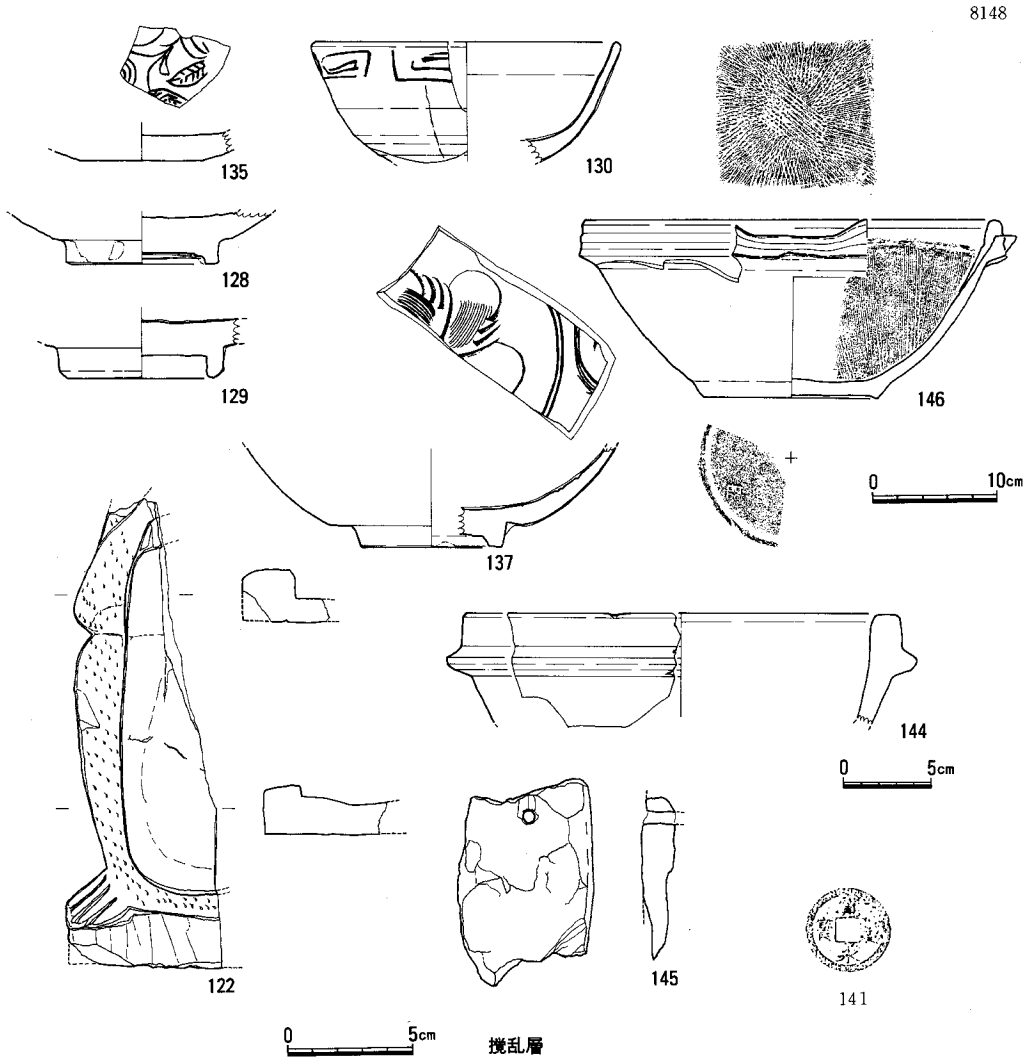


Fig.99 4号出入口遺構外（撹乱層）出土遺物(3)(1/3,141,144,146を除く)

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
48			碗片Ⅶ類のような模様あり
49		↓	↓
50		青磁	龍泉Ⅳ類碗見込釉カキ取る
51			龍泉Ⅳ類口縁部片
52		↓	龍泉Ⅴ類高台付皿
53		土師皿	糸切大皿
54			
55			↓
56	↓		ヘラ切小皿
57	SK08		糸切大皿
58			↓
59	↓	↓	小皿
60	SK09	白磁	高台付皿Ⅱ類
61		白磁	高台付皿Ⅱ類
62		青磁	同安碗口縁部Ⅰ類
63		↓	↓Ⅰ類
64	↓	土師皿	糸切小皿
00065	SK10(井戸)内	明染付	高台付皿
66	↓	瓦器	碗
67	SK10(井戸)外	黒褐釉	碗
68		白磁	碗見込に目跡あり
69			平底皿Ⅵ-1類
70	↓	↓	口ハゲ皿（ガラス質の釉）
71	SK12	白磁	碗Ⅱ類
72			高台付皿Ⅱ類
73		↓	↓
74		青白磁	碗
75		青磁	同安碗Ⅰ類
76		青磁	その他の青磁
77		土師皿	糸切大皿
78			糸切小皿
79			
80			↓
81			糸切大皿 同一個体
82		↓	
83		黒褐釉	碗
84			
85		↓	↓
86		中国陶器B群	越州系（？）
87			片3点
88			鉢口縁部
89			体部
90			体部
91	↓	↓	鉢1個体
92	SK17	中国陶器C群	耳付の壺
93	包含層	青磁	蓋
94		青白磁	

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
95		黒褐釉	碗
96		朝鮮	碗
97		青白磁	小鉢
98		緑釉	盤
99		白磁	Ⅵ-2-ロ
100		明染付	皿
101		明染付	皿
102		中国陶器C群？	大型容器
103		白磁	高台付皿
104			平底皿Ⅲ
105		↓	平底皿Ⅵ
106		土師皿	糸切大皿
107			
108			
109			
110			
111			
112			
113			↓
114			糸切小皿
115			
116			
117			
118			
119			
120			
121	↓	↓	↓
122	B区攪乱	中国か国産か	硯
123		土師質土器	焼塩壺の蓋
124		土師	糸切小皿
125			
126			
127		↓	↓
128		青磁	龍泉碗Ⅰ-9
129			龍泉碗Ⅴ類
130			Ⅴ-3類
131			↓Ⅴ類
132		↓	同安碗Ⅱ類
133	↓	白磁	碗Ⅶ-1類
137	攪乱	青磁	龍泉碗Ⅰ-4類
138		土師質土器	焼塩壺
139	↓	土師皿	糸切小皿
140	包含層	白磁	壺
141	攪乱	銅銭	
142	表採	↓	
143	SK11	滑石製品	石鍋
144	攪乱		↓
145		↓	石鍋の再加工品
146	↓	国産陶器（備前系）	すり鉢
147	包含層	銅銭	

第4章　祇園町工区5号出入口の調査 (Fig. 100～111、PL. 25～29)

遺跡略号　HKT S-8　　調査番号　8149

博多区御供所町、祇園町にかけて位置する。祇園町交差点、馬場新町交差点の間、都市計画道路博多駅築港線を横断し、L字状に南側に延びる幅5.8mの狭い調査区である。土留め用シートパイルと路面覆鋼を先行し、調査は覆鋼桁のかかった中で行った。調査工程上、道路に平行する部分を南からA区、B区とし、横断部分をC区と呼ぶ。調査は昭和56年10月12日から12月6日まで行なった。調査面積は184 m^2 である。

検出した遺構は29基の土壙(井戸を含む)と竪穴式住居跡(SC01)、3基の墓、3条の溝、ピット群である。SC01は後世の遺構により寸断されているものの、一辺約4mの方形竪穴で床面に4個の柱穴が穿たれている。覆土中に遺物が含まれておらず正確な時期は決められないが、包含層中に古式土師器があり、周辺でも当該期の住居跡が見られることから古墳時代初頭に位置づけられよう。1号墓および2号墓は中世の土壙墓である。不定形の掘方をもつ。1号墓は横臥屈葬である。2号墓出土人骨は開脚の状態で出土しているが、上半はシートパイルで切られている。副葬品は認められない。3号墓は7世紀前半代に推定される木棺墓である。1.6m×1.0m前後の掘方に、推定1.1m×0.5mの木棺を埋置したものである。頭位はほぼ真西を向く。この木棺墓は、床面頭位に金環（163)、東端部に骨片、また木棺の中央よりやや頭位寄りに環座金具（165、166）が、棺隅と中央部に棺釘（171～175）がいずれも原位置を留めた状態で出土している。頭位棺外には鉄製銛（176）が副葬されている。環座金具は中央部に穿孔された円形の鉄板に、ヘアピン状の鉄釘を打込み、棺内で外方に折り、さらに棺材に折込んでいる。棺材の厚さは3.5cm強と推定される。通例見られる遊環は見られない。市域内では早良区夫婦塚古墳(注1)に環座金具の例がある。棺釘はいずれも頭を下方にして直立しており、棺底から釘が打たれたことを示している。鉄製銛は中央部にかえしをもち、基部の形状は錆のため不明、先端部は折れ曲っているが先端は平坦でノミ状になり、やや捩れをもつ。被葬者は外洋性漁業に関わりをもっていたと思われる。鉄製漁撈具を出土した古墳時代の遺跡は、これまで古墳28以上、生活址関係11以上、総計39ケ所以上が知られており、福岡近辺では、北九州市貝島古墳群、春日市門田2号墳、玄海町浜宮貝塚、大島村沖ノ島遺跡などがある(注2)。本体部I区の1号墓、2号墓や、28次調査区の博多1号墳などの調査結果から、博多1号墳に象徴される首長からの系譜をひく首長層が古墳後期から終末にかけて、外洋性漁撈に関わる小首長に変化してゆく様子を示していると思われる。SK07、09、16、22は井戸である。SK09のみ江戸期であるが掘方から以前の遺物が出土している。SK16は12世紀後半代に位置づけられる。他はいずれも鎌倉、室町時代におさまるものである。以外の土壙はほとんどが廃棄物処理用の土壙で各期様々な遺物が混在する。SK08は江戸時代の土壙で、多数の近世陶磁があり、中でも28はオランダ東インド

8149

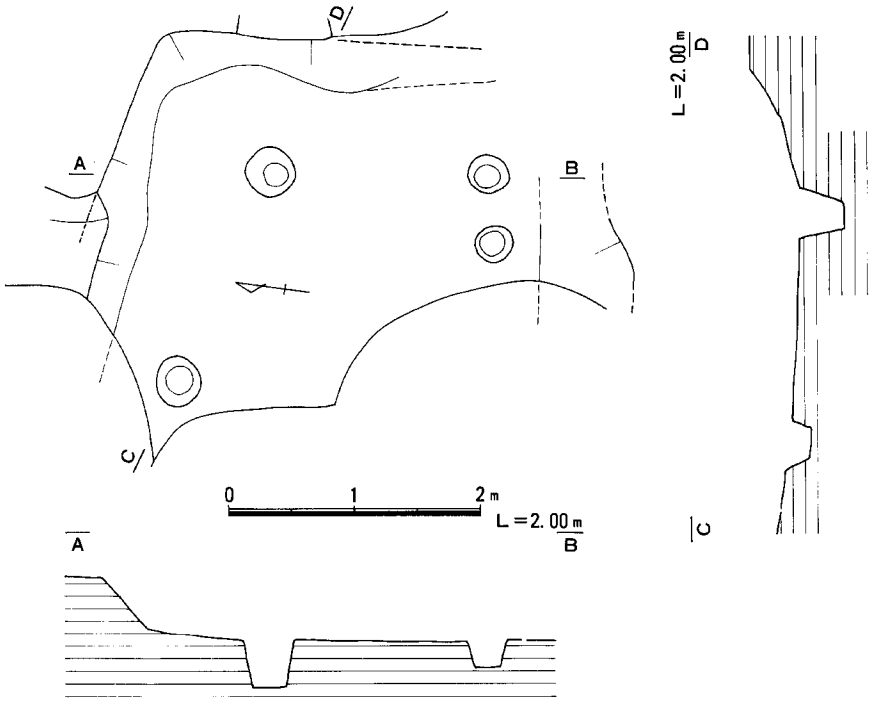


Fig.100 5号出入口 SC01 (1/60)

会社の「VOC」マークを描いた古伊万里で注目される。SK10は土師皿がまとまって出土しておりいずれも糸切底で小皿は口径8.5 cm、器高1 cmに集中する。13世紀後半から14世紀前半にかけての遺構である。SK15は室町期の遺構で土師質土鍋とともに金環が出土しているが古墳時代遺物の混じり込みである。3号墓と同様の遺構が周辺にあるものと思われる。SK21は古墳時代の土壙であるが土師器小破片のみでその性格は不明。SK25は13世紀代の土壙であるが遺物は多くない。白磁碗（127）は底部に花押かと思われる墨書をもつ。SK26は長方形の竪穴状遺構で遺物は少ない。糸切（137）とヘラ切（138）の土師杯のほか須恵器片、土師質土器片少量が見られるのみである。12世紀代の遺構であるが性格不明。SK27は12世紀中頃の遺構。142の白磁には「＋」の墨書がある。3条の溝も見られるがいずれも東西（SD01、02）、南北（SD03）を向くものである。

注1．「夫婦塚古墳」　1979　福岡市埋蔵文化財調査報告第51集

注2．山中英彦　「鉄製漁撈具出土の古墳について」　1980（『古代探叢』早稲田大学出版部）

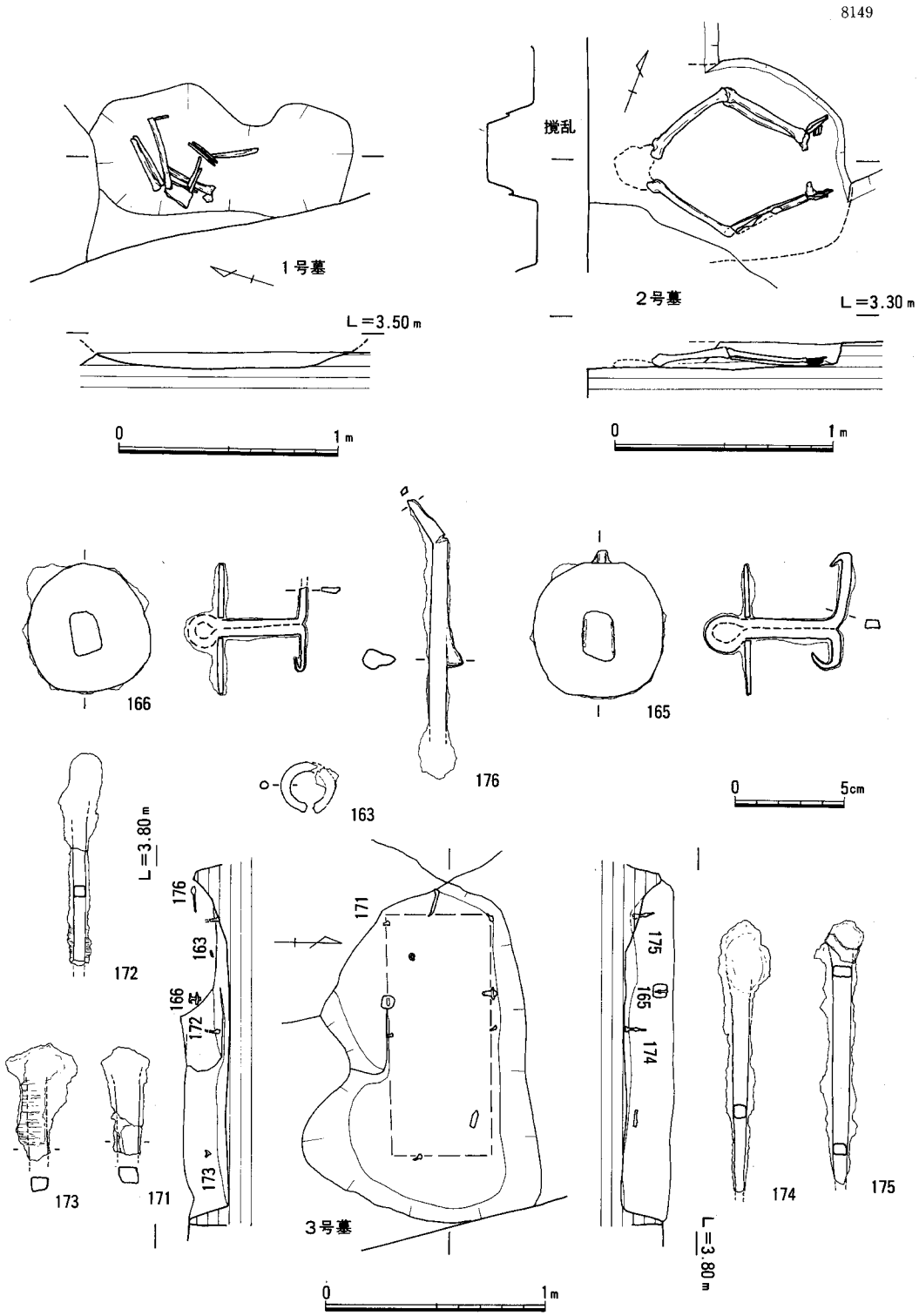


Fig.102 5号出入口1号墓、2号墓、3号墓と3号墓出土遺物

8149

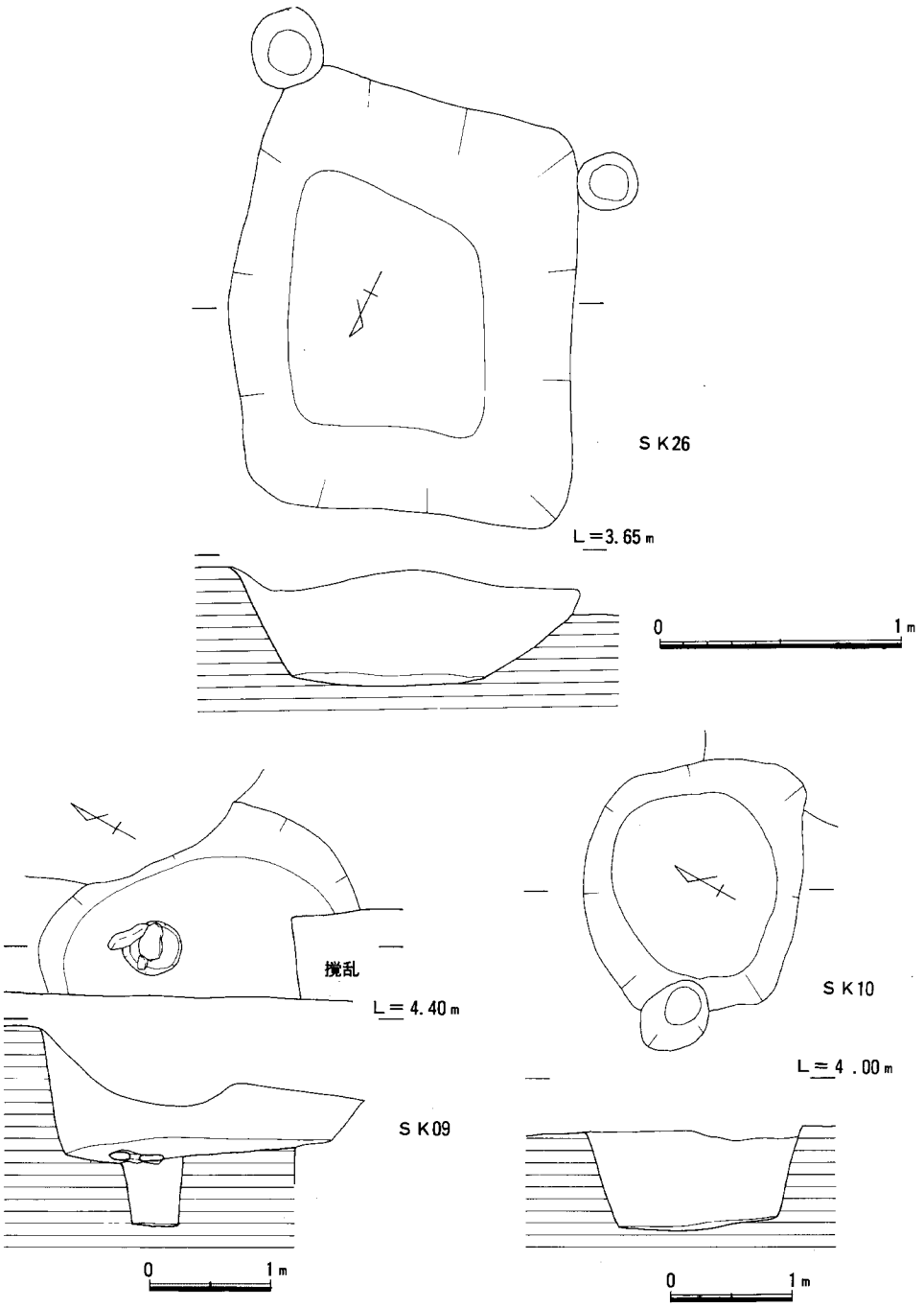


Fig.103 5号出入口 SK09,SK10,SK26

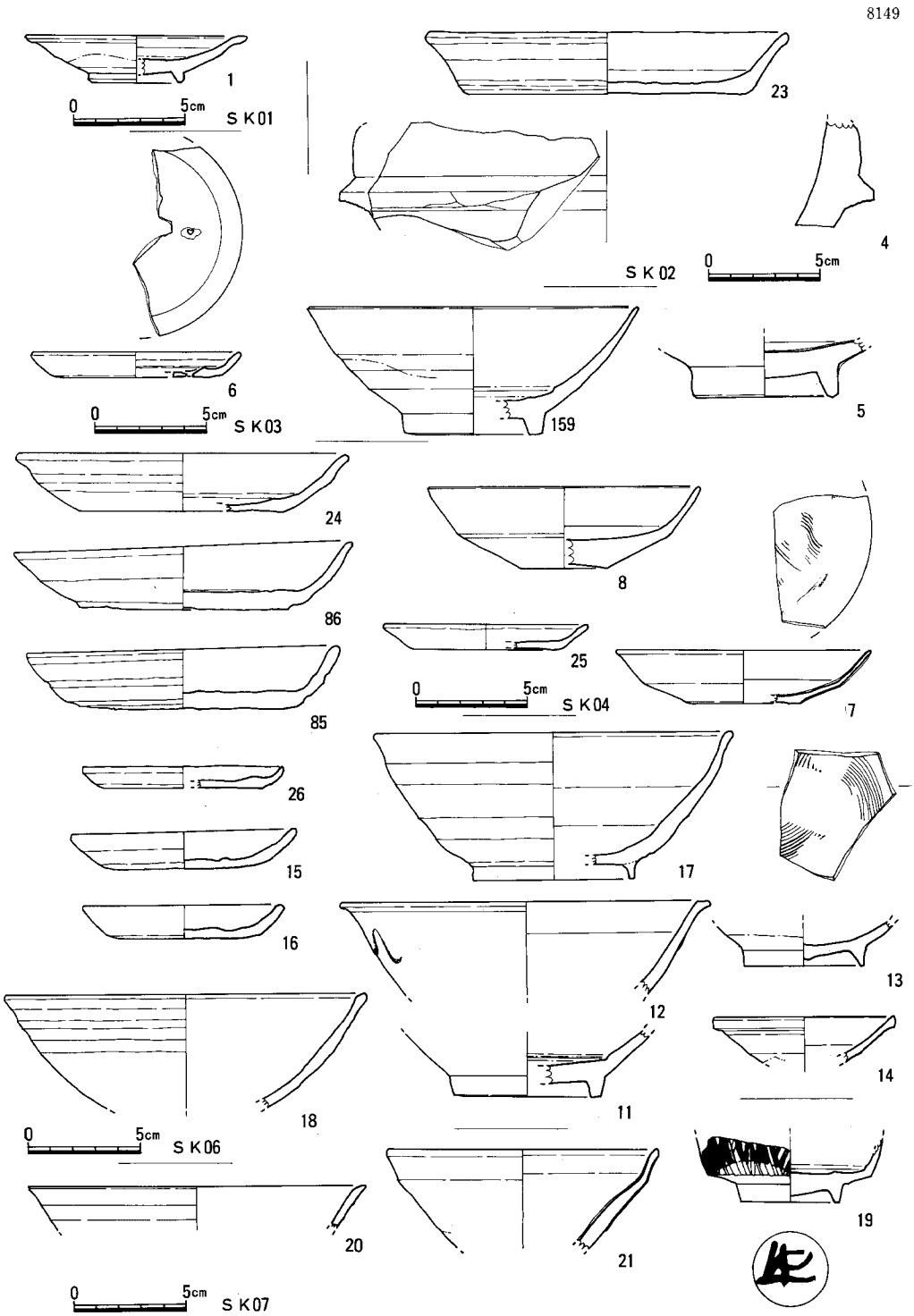


Fig.104 5号出入口 SK01,SK02,SK03,SK04,SK06,SK07出土遺物 (1/3)

8149

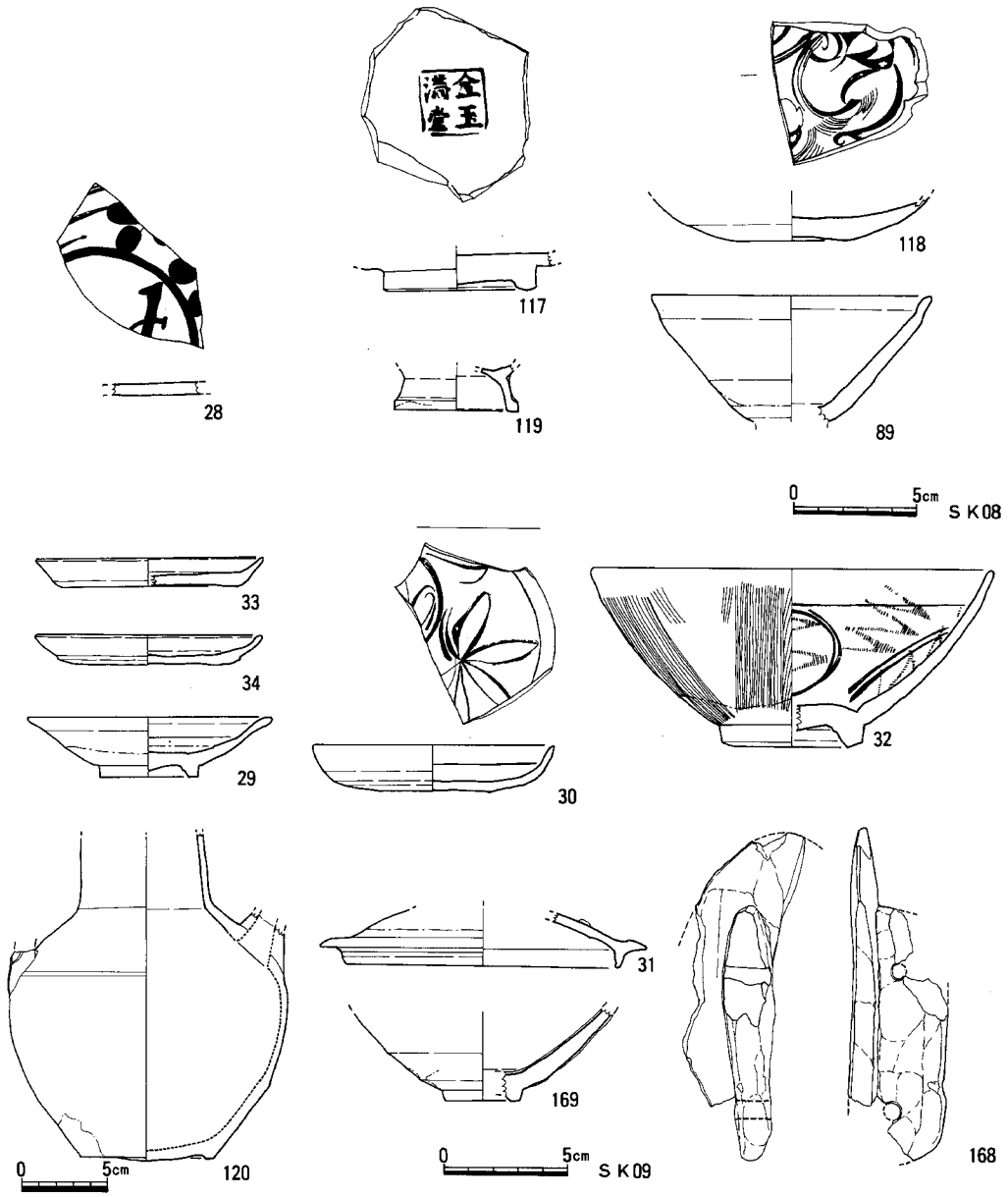


Fig.105 5号出入口 SK08,SK09出土遺物(1/3,120を除く)

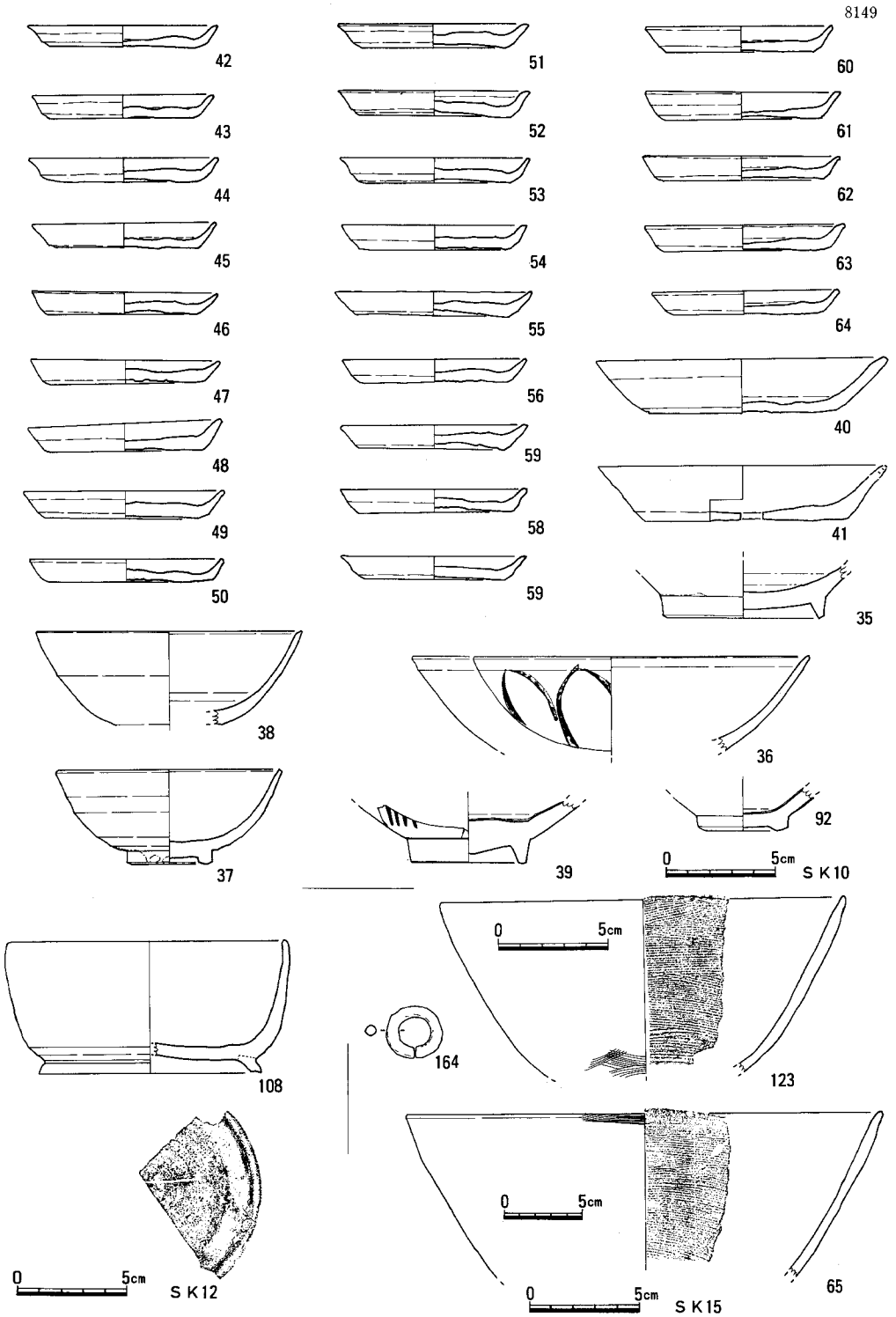


Fig.106 5号出入口 SK10,SK12,SK15出土遺物（1/3, 123, 65を除く）

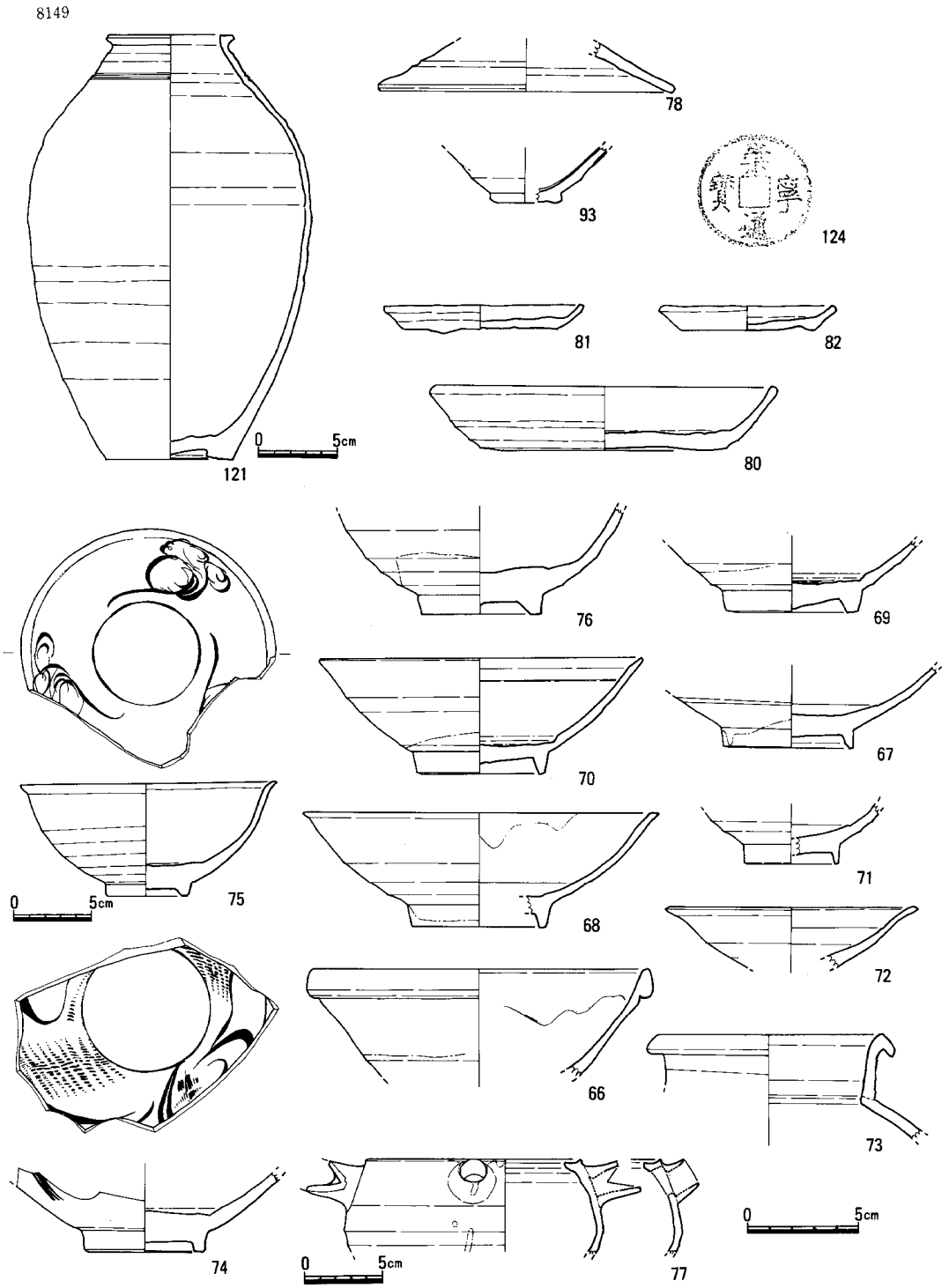


Fig.107　5号出入口SK16出土遺物（1/3,75,77,121,124を除く）

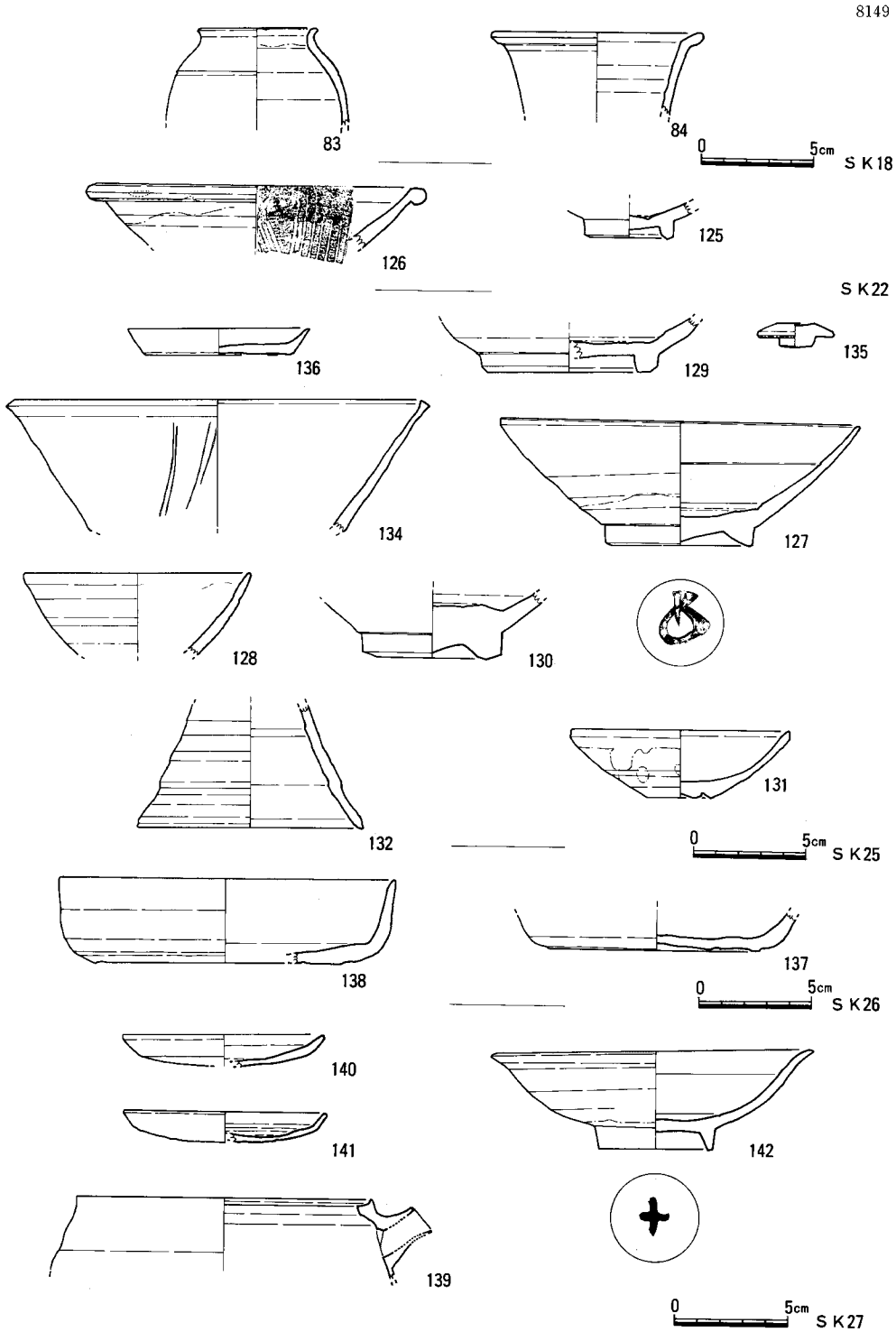


Fig.108 5号出入口 SK18,SK22,SK25,SK26,SK27出土遺物(1/3)

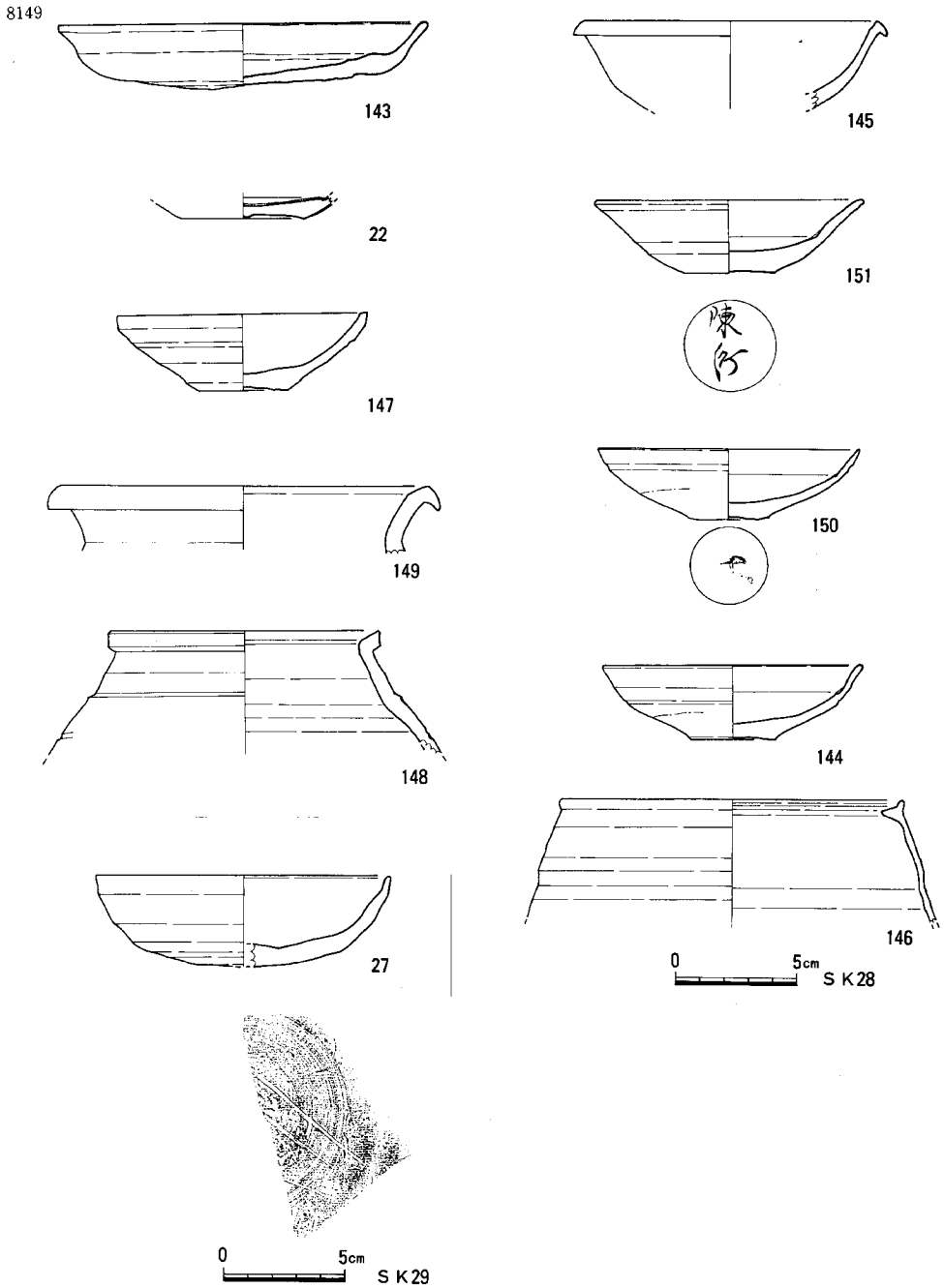


Fig.109 5号出入口 SK28,SK29出土遺物 (1/3)

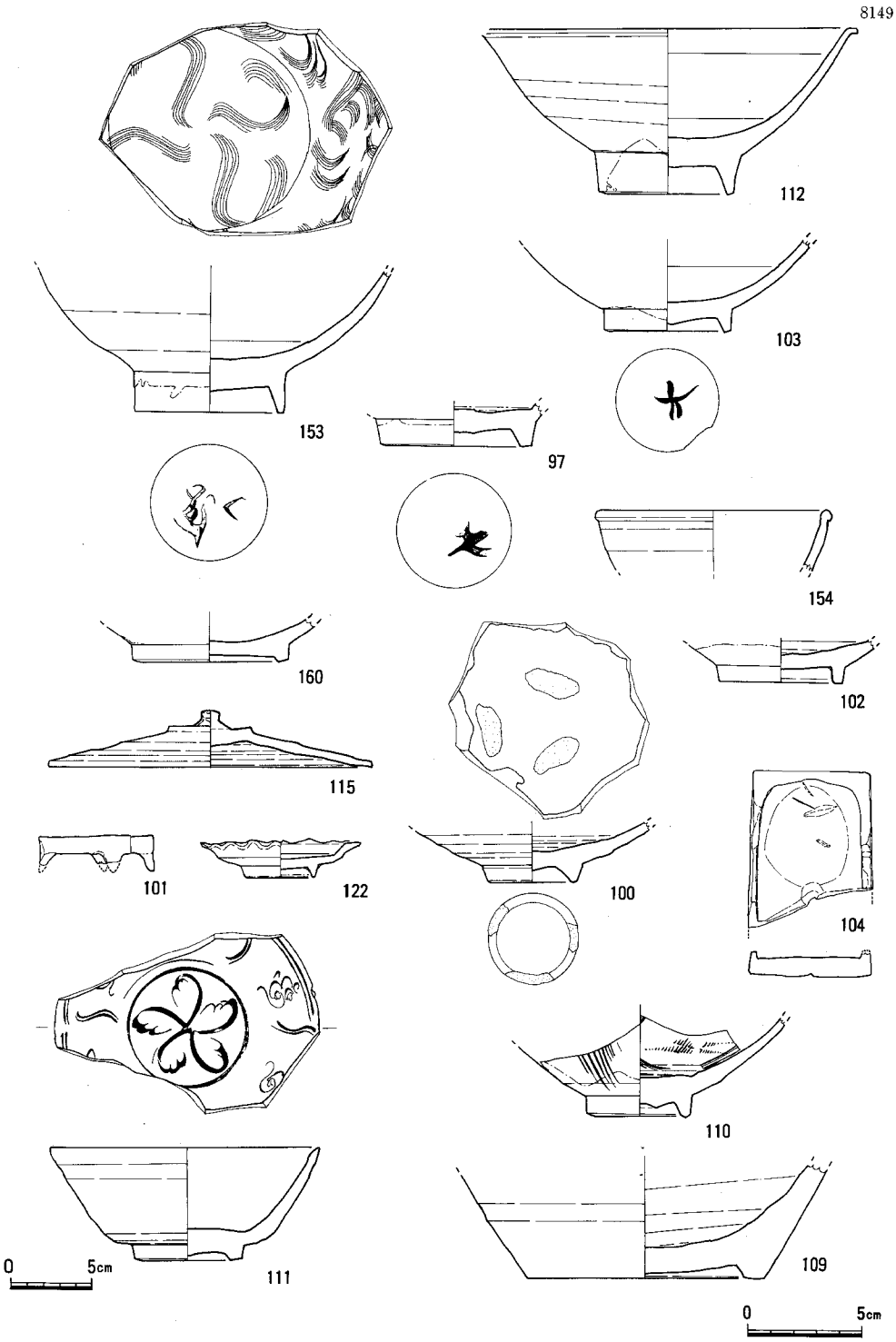


Fig.110 5号出入口遺構外出土遺物(1) (1/3,111を除く)

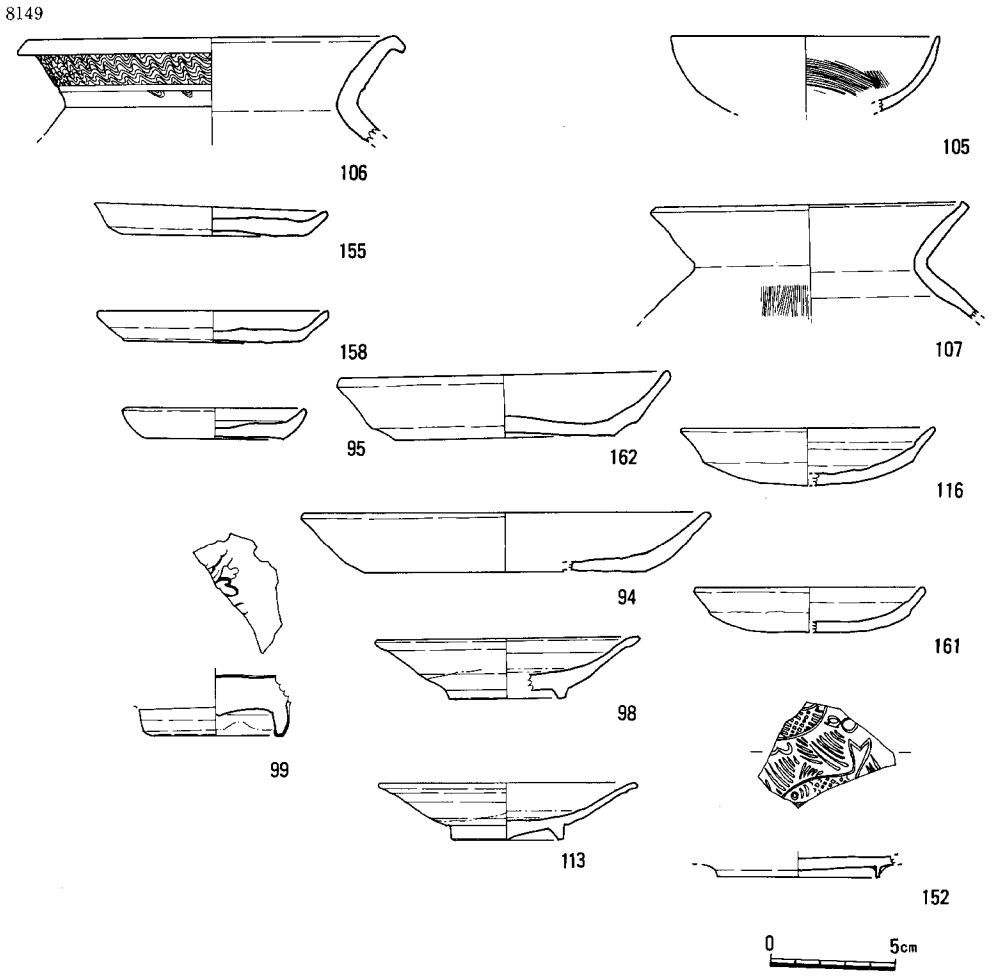


Fig.111　5 号出入口遺構外出土遺物(2)（1/3）

祇園町5号出入口主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
00001	A区SK01	白磁	高台付皿
2	SK02	白磁	碗Ⅶ
3	↓	↓	↓
4	↓	滑石鍋	つば付
5	SK03	青磁	龍泉碗Ⅳ
6	↓	土師小皿	穿孔あり
7	SK04	青白磁	皿
8	↓	青磁	龍泉平皿
9	↓	中国陶器	片
10	↓	国産陶器	常滑片
11	SK06	白磁	碗Ⅸ類
12	↓	↓	↓Ⅵ-1
13	↓	↓	小碗
14	↓	↓	高台付皿Ⅰ-2
15	↓	瓦器	皿
16	↓	↓	皿
17	↓	↓	碗
18	↓	↓	碗
19	B区SK07（井戸）	白磁	菱形格子文模様香炉（墨書あり）
20	↓	越州窯	碗
21	↓	黒褐釉	碗
22	↓	青白磁	平底皿
23	A区SK02	土師皿	糸切大皿
24	SK04	土師皿	糸切小皿
25	↓	↓	↓
26	SK06	土師皿	↓
27	C区SK29	須恵器	坏
28	B区SK08	VOCマーク染付	有田皿
29	SK09	白磁	高台付皿Ⅱ類
30	↓	↓	平底皿Ⅵ類
31	↓	陶器A群	蓋
32	↓	青磁	同安碗Ⅱ類
33	↓	土師皿	糸切小皿
34	↓	↓	ヘラ切小皿
35	SK10	白磁	碗Ⅸ類
36	↓	青磁	龍泉碗Ⅱ-2
37	↓	↓	龍泉小碗2
38	↓	↓	龍泉小碗
39	↓	↓	同安碗Ⅱ類
40	↓	土師皿	糸切大皿
41	↓	土師皿	糸切大皿
42	↓	土師皿	糸切小皿
43	↓	↓	↓
44	↓	↓	↓
45	↓	↓	↓
46	↓	↓	↓
47	↓	↓	↓
48	↓	↓	↓
49	↓	↓	↓
50	↓	↓	↓
51	B区SK10	↓	糸切大皿
52	↓	↓	↓
53	↓	↓	↓

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
54	↓	↓	↓
55	↓	↓	↓
56	↓	↓	↓
57	↓	↓	↓
58	↓	↓	↓
59	↓	↓	↓
60	↓	↓	↓
61	↓	↓	糸切小皿
62	↓	↓	↓
63	↓	↓	↓
64	↓	↓	↓
65	SK15	土師質土器	土鍋
66	SK16（井戸）	白磁	碗Ⅳ類
67	↓	↓	碗Ⅴ or Ⅵ類
68	↓	↓	碗Ⅵ類
69	↓	↓	碗Ⅸ類
70	↓	↓	碗Ⅸ類
71	↓	↓	小碗
72	↓	↓	高台付皿
73	↓	↓	壺
74	↓	青磁	龍泉碗0類
75	↓	↓	↓Ⅰ類
76	↓	↓	同安碗Ⅱ類
77	↓	中国陶器B群	行平
78	↓	↓	行平の蓋
79	A区カクラン	白磁	碗Ⅶ類
80	B区SK16（井戸）	土師	皿
81	↓	土師皿	糸切小皿
82	↓	↓	↓
83	SK18	中国陶器B群	短瓶
84	↓	↓	壺の口部
85	A区SK04	土師皿	糸切大皿
87	↓	黒褐釉	碗片
88	SK07	中国陶器A群	Ⅰ-盤-1
89	B区SK08	黒褐釉	碗
90	↓	↓	↓
91	SK09	↓	↓
92	SK10	↓	↓
93	SK16（井戸）	↓	天目碗
94	A区攪乱	土師皿	糸切大皿
95	↓	↓	小皿
96	↓	↓	↓小皿
97	B区攪乱	白磁	碗Ⅸ類（墨書？）
98	↓	↓	高台付皿Ⅱ類
99	↓	青磁	龍泉碗Ⅴ類
100	↓	朝鮮	碗
101	攪乱		焼台
102	↓	朝鮮	碗
103	↓	白磁	碗Ⅴ or Ⅵ類（墨書あり）
104	↓	石製品	硯
105	包含層下層	土師器	杯
106	↓	須恵器	壺
107	↓	土師器	甕

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
108	包含層	須恵器	高台付杯
109	表採	中国陶器B群	四耳壺
110	↓	青磁	同安碗Ⅱ類
111	↓	↓	龍泉碗Ⅰ-6
112	攪乱	白磁	碗Ⅵ-1
113	↓	↓	高台付皿
114	↓	青磁	龍泉碗Ⅰ-9
115	↓	陶器A群	蓋
116	↓	瓦器	皿
117	SK08 江戸時代（攪乱）	青磁	龍泉碗Ⅰ類（金玉満堂）
118	↓	↓	龍泉平底皿Ⅰ類
119	↓	青白磁	不明
120	SK09	中国陶器B群	水注
121	SK16（井戸）	中国陶器B群	長瓶
122	攪乱	近世（瀬戸）	皿（口縁波状）
123	SK15	土師質土器	土鍋
124	SK16（井戸）	銅銭	崇寧通宝
125	SK22	白磁	小碗
126	↓	国産？	擂鉢
127	SK23	白磁	碗Ⅸ類か？（墨書）
128	SK25	白磁	小碗口縁
129	↓	↓	碗Ⅵ-4
130	↓	青磁	碗底
131	↓	中国陶器	皿
132	↓	須恵器	頸もしくは脚
133	↓	国産陶器	無釉陶こね鉢
134	↓	↓	↓
135	↓	白磁	小壺蓋
136	↓	土師皿	小皿
137	SK26	土師皿	糸切大皿
138	↓	須恵器	杯
139	SK27	中国陶器A群Ⅲ	行平
140	↓	土師皿	小皿
141	↓	土師皿	小皿
142	↓	白磁	浅碗Ⅴ類（墨書）
143	SK28	土師皿	大皿
144	↓	白磁	平底皿Ⅲ類
145	↓	↓	未分類碗（0類か？）
146	↓	中国陶器A群Ⅲ	鉢
147	↓	B群	皿
148	↓	B群	四耳壺か
149	↓	↓C群	壺
150	↓	白磁	平底皿Ⅲ類（墨書）
151	SK28	白磁	平底皿未分類（墨書）
152	攪乱	青白磁	高台付皿

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
153	↓	白磁	碗Ⅵ-2-ロ（墨書）
154	↓	↓	碗片（口縁を丸く外反させるもの）小碗
155	↓	土師皿	糸切小皿
156	↓	↓	↓
157	↓	↓	↓
158	↓	↓	↓
159	SK03	白磁	碗Ⅸ類
160	攪乱	白磁	未分類
161	↓	瓦器	皿
162	↓	土師皿	糸切大皿
163	墓3号	金環（2破片）	↓
164	SK15	↓	↓
165	墓3号	鉄製品	環座金具（No. 1）
166	↓	↓	↓（No. 2）
167	SK9	滑石製品	石鍋
168	↓	↓	石鍋再加工品
169	↓	黒褐釉	碗小片
170	攪乱	滑石製品	石錘
171	墓3号	鉄製品	棺釘
172	↓	↓	↓
173	↓	↓	↓
174	↓	↓	↓
175	↓	↓	↓
176	↓	↓	↓
177	↓	人骨	脛骨と歯
40001	SK07	石製品	滑石製石鍋
40002	SK08	↓	↓
40003	SK09	↓	↓
40004	SK10	↓	石棺の一部
40006	SK15	石製品	滑石製石鍋
40007	SK16	↓	↓
40008	SK18	↓	石棺の一部
40010	包含層	石製品	砥石
40011	攪乱	↓	砥石・硯・雲母片
40013	SK25	石製品	滑石製石鍋
40014	SK28	↓	↓
40016	攪乱	石製品	滑石製石鍋
70001	SK03	鉄片	
70002	SK08	鉄製品	不明
70003	SK09	↓	不明
70004	SK10	↓	釘
70005	SK18	↓	↓
70007	Pit 8	鉄製品	釘
70008	攪乱	↓	↓
70009	SK28	↓	↓
70010	攪乱	↓	↓

第５章　祇園町工区 P_2 出入口の調査（Fig. 112～118, PL. 30～33）

遺跡調査番号　8435　　調査地点略号　HKT S-10

地下鉄祇園駅舎から博多駅地下街へ通じる地下通路の出入口の１つ、殖産ビルから大博多ビル前に通じる P_2 出入口の調査である。調査区は博多区博多駅前一丁目、二丁目にかかる。発掘調査は昭和59年４月２日から４月27日まで行ない、調査面積は約215 m^2 である。今回の調査区は幅５ｍ程のＬ字形をなしており、道路を横断して調査するため、占用の関係上３分割して調査を行ない、道路横断部分を東からＡ・Ｂ区、大博多ビル歩道側をＣ区と呼んだ。このうちＢ区については道路占用の関係上夜間調査（午後10時～午前６時）を余儀なくされた。発掘調査は、力武卓治、大庭康時氏の協力を得て池崎が行った。なお調査にあたっては、担当業者である三井建設株式会社九州支店および高木建設株式会社の方々に協力を得た。

この調査区は博多遺跡群推定範囲のほぼ南端部にあたり、矢倉門の地名が示すように中世末の博多における南の要害として重要な位置にあった。この矢倉門の南側には、元亀、天正の頃大友氏の家臣臼杵安房守が掘ったと伝えられる「房州堀」が設けられ、博多市街とを明確に区画していた（Fig. 112）。明治時代までこの痕跡は残っていたが鉄道の敷設にともない、この地は旧博多駅の構内となり姿は見られなくなってしまった。

遺跡群南端にあたるとはいえ遺構の密度は希薄ではなく、とりわけ中世末から近世にかけての遺構が目立った。37基の土壙、井戸、土壙墓が検出されている。いずれもあえてＳＫの符号をつけている。土壙は大半が廃棄物処理を目的としたもので不定形の掘方をもち規模も様々であ

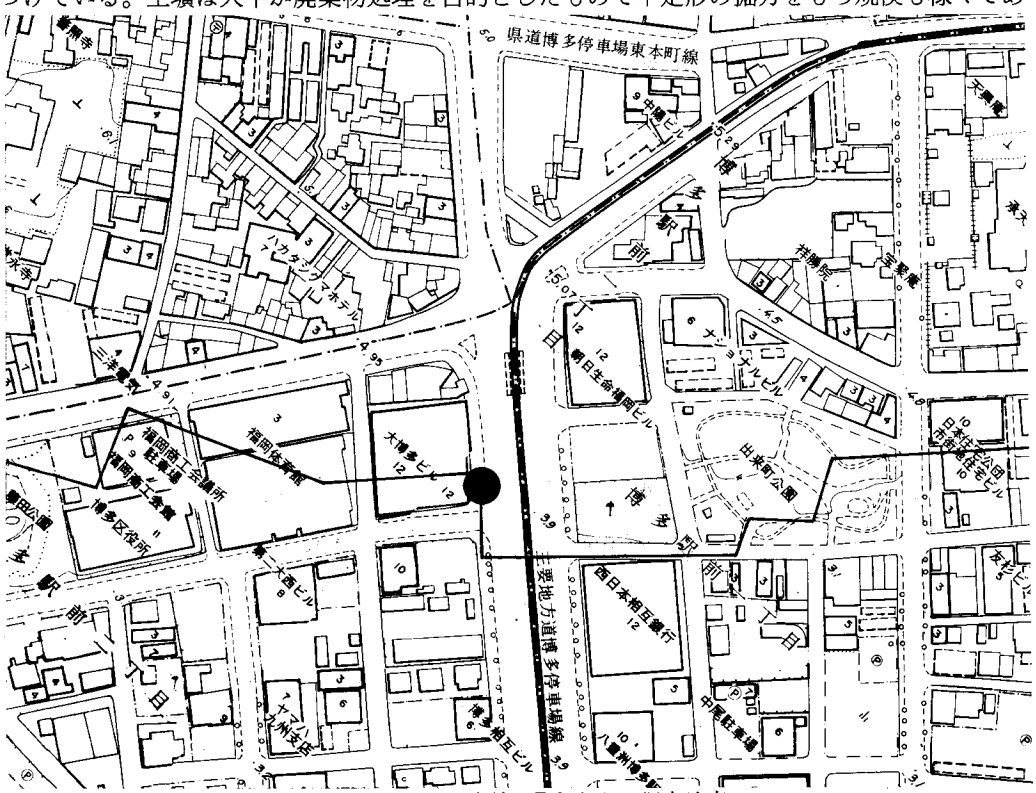


Fig.112　房州堀推定線とＰ２出入口調査地点

8435

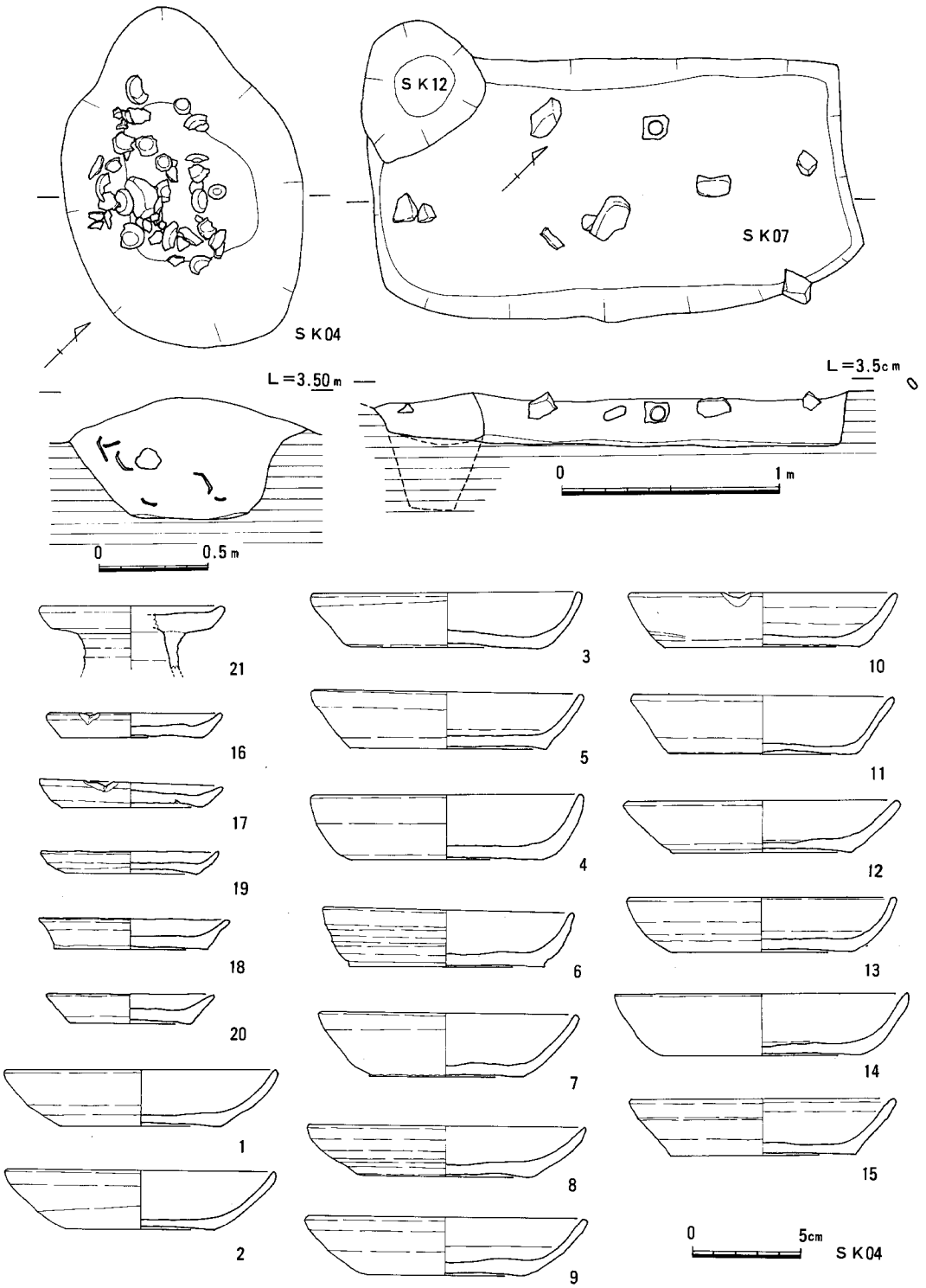


Fig.113 P2出入口,SK04,SK07,SK12とSK04の出土遺物 (1/3)

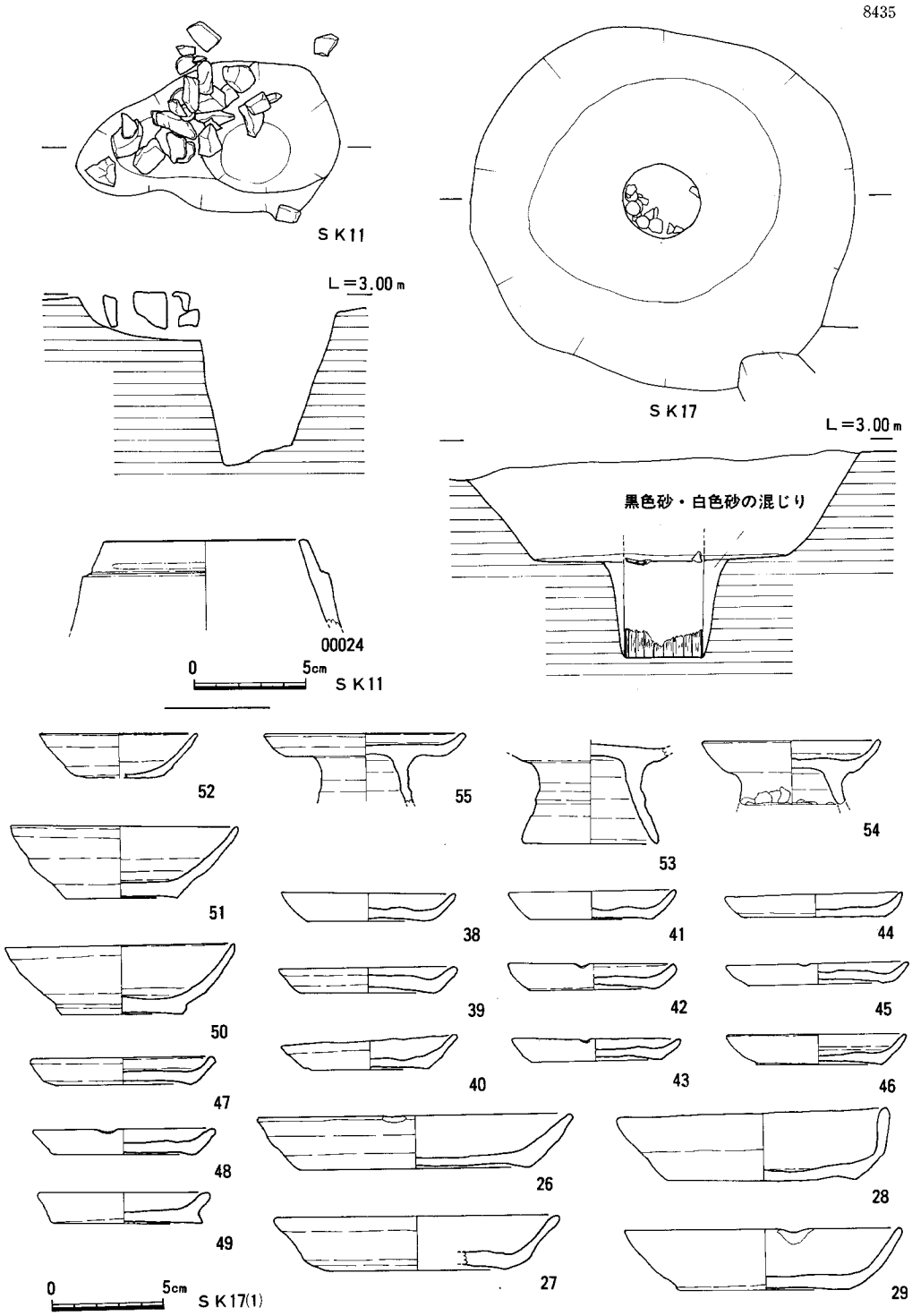


Fig.115 P2出入口　SK11,SK17とSK11,SK17出土遺物(1)

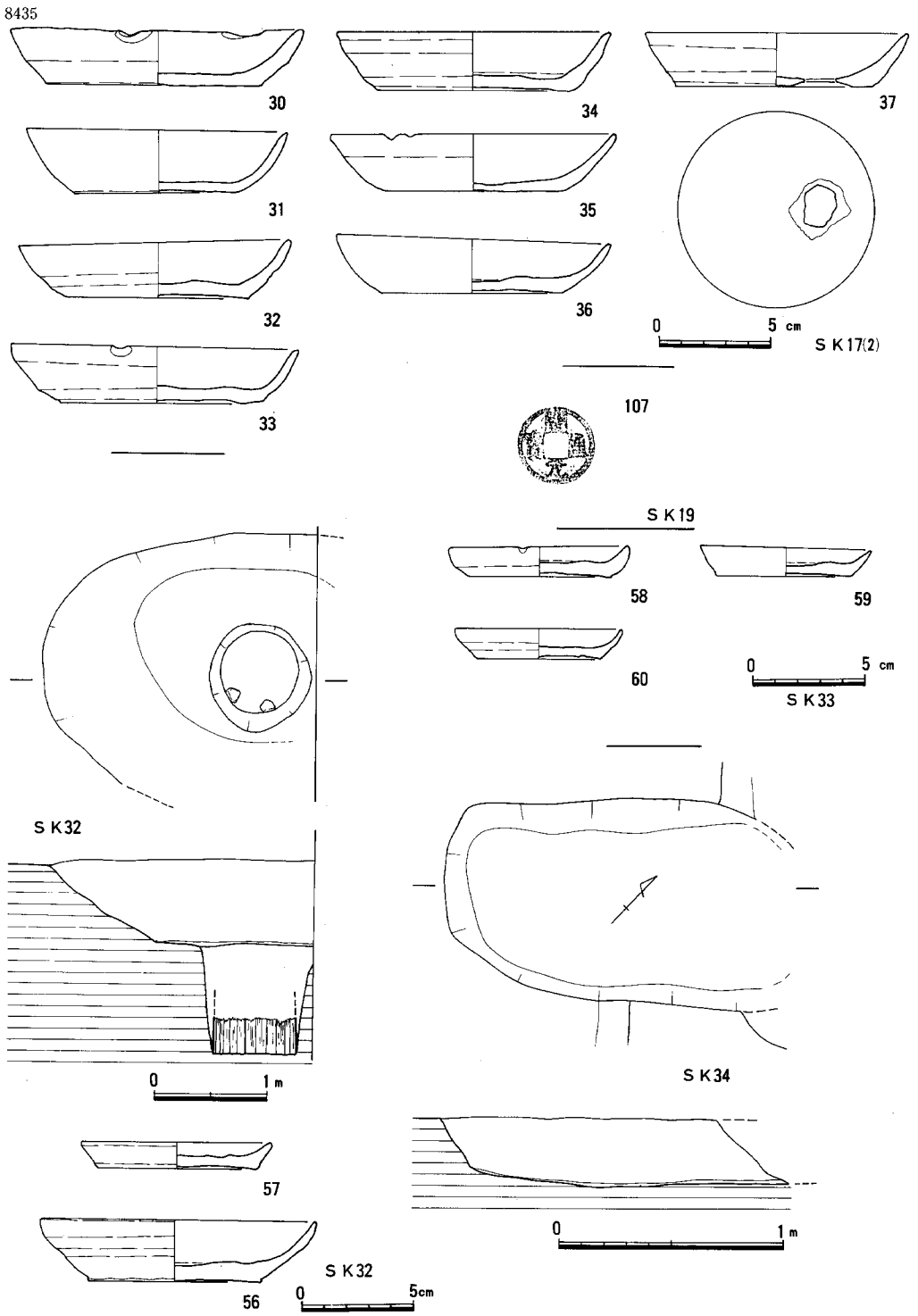
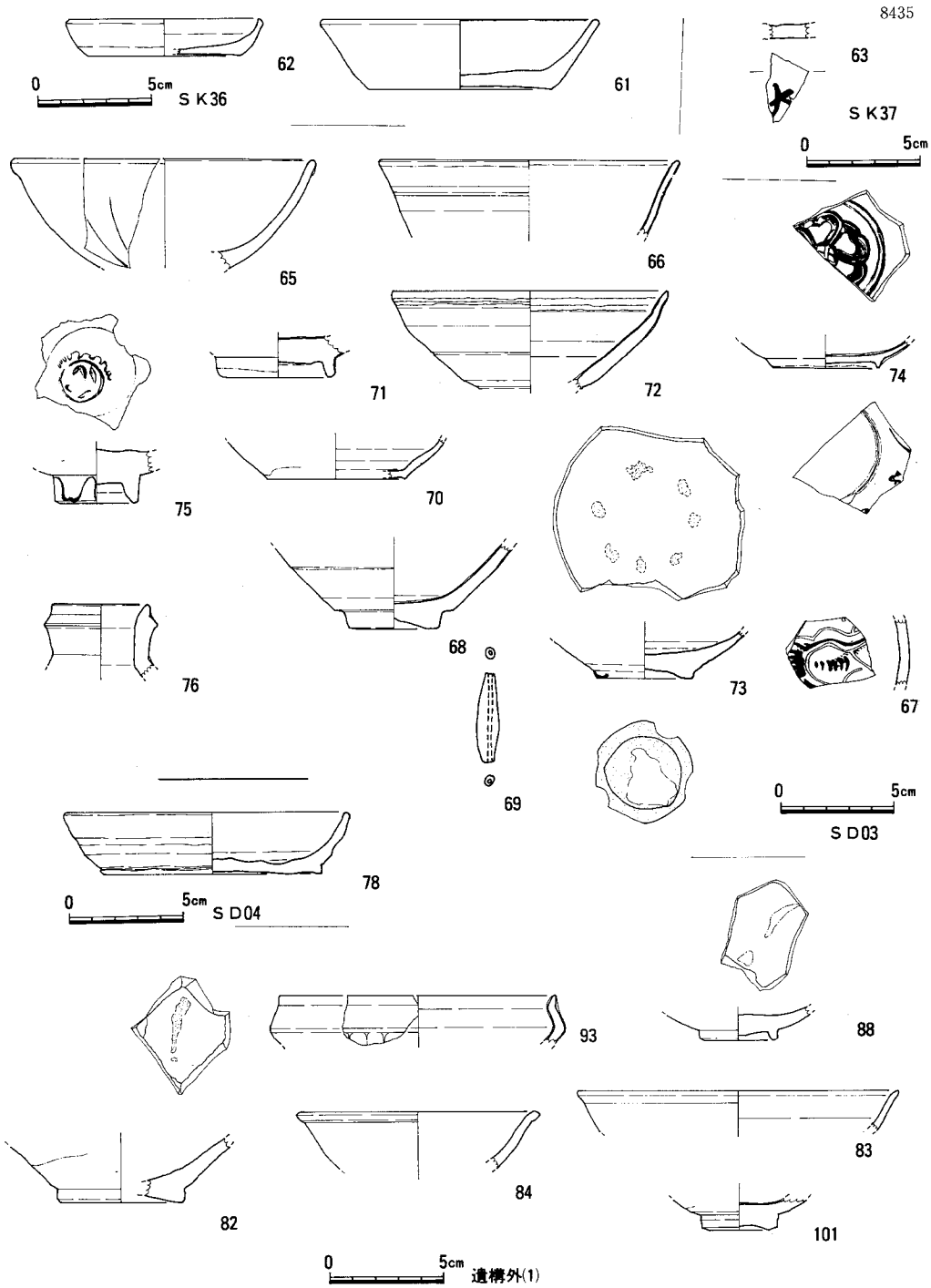


Fig.116 P2出入口 SK32,SK34とSK17,SK19,SK32,SK33出土遺物(1/3,107を除く)



F g.117 P2出入口 SK36,SK37,SD03,SD04出土遺物と遺構外(包含層)出土遺物(1)(1/3)

8435

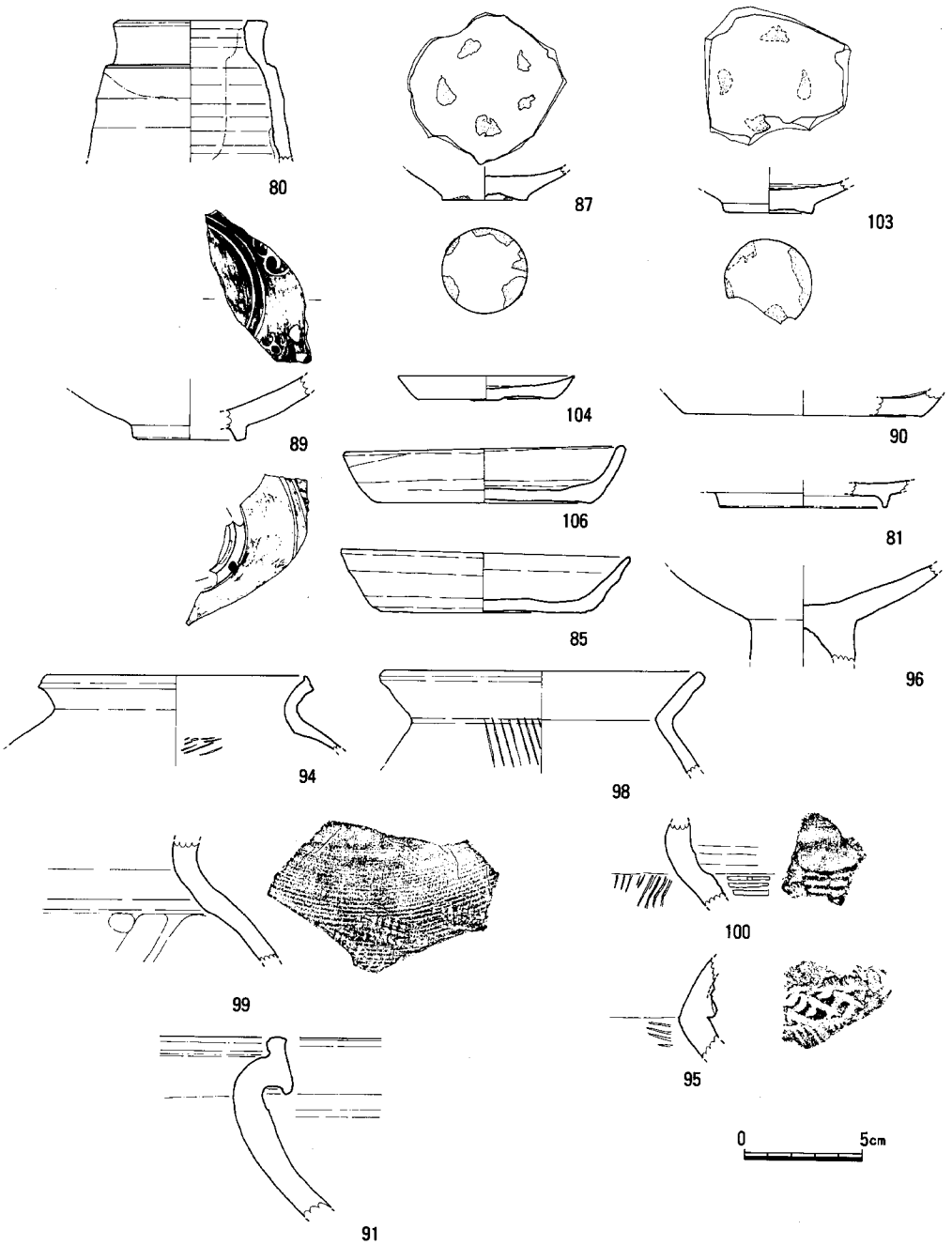


Fig.118 P2出入口 遺構外(包含層)出土遺物(2) (1/3)

る。SK04 は糸切土師皿を多量に廃棄した土器溜で16世紀末頃に位置づけられ、高い高台をもつものが特徴的である。SK07 は長方形の明確な掘方をもち土壙墓かと思われる。遺物は小破片のみで明確な時期は不明。近世か。SK11 は二段の掘方をもつ遺構で上段に多くの礫を配す。13世紀前後の廃棄物処理土壙。SK17 は木桶組井戸で井筒内に多量の糸切土師皿を廃棄する。器高の高い杯と高い高台をもつ皿が特徴的である。16世紀末頃に属す。SK32 も同様の井戸で木桶組井筒を残す。内側に土師皿を廃棄しており、16世紀末頃に属す。図示はしていないが、SK26 は円形の掘方で土壙内より骨と寛永通宝 1 点、鉄釘が出土しており、近世墓である。SK34 は一部を切られているもののほぼ長方形の掘方をもつ近世の木棺墓と思われ、棺釘かと思われる鉄製品がある。SK36 は不定形の掘方をもつ廃棄物処理土壙である。15世紀代か。SK37 も同様の廃棄物処理土壙で、図示した遺物（63）は、須恵器杯底に「大」の墨書をもっている。遺構自体は14世紀代で、須恵器は混入したものである。4 条の溝も検出されたが、特に SD03 は C 区全体に検出された大規模な溝で、幅は 6 m 以上、深さも確認面より 1 m はある。方位は現道路よりわずかに北に振れる。地山黄白色砂層を掘り込んで作ったもので壁面には土留め施設の痕跡は認められず、溝底はほぼ標高 2 m で南側に向いてわずかに傾斜する。土層から見ると、西側の黄白色砂が堆積したのち、東側から汚れた土が崩れこむということを交互に繰り返している。日常的に水が淀んでいたとは考え難い。この溝からは中世末から近世初頭にかけての遺物が出土しており、その位置も房州堀推定線にほぼ一致するといってよく、この SD03 を房州堀と比定したい。房州堀の江戸時代以降の時間的変化がどのようなものであったかわからないが、SD03 は、中世末から近世初期に致る堀埋没の様相を示しているものと思う。他の 3 条の小溝も SD03 に平行しており、またいずれも江戸時代に営まれたもので、SD03 に規制されたものといえよう。柱穴も見られるが組織的には把握できない。

包含層からも様々な遺物があり、高麗・李朝の陶磁、越州窯青磁、国産緑釉陶器皿なども見られる。主要遺物一覧表を参照されたい。

8435　　P_2 出入口出土主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
00001	SK04（土器溜）A-2 区	土師器	糸切大皿
2			
3			
4			
5			
6			
7			
8			
9			
10			
11			
12			
13			
14			
15			↓
16			小皿
17			
18			
19			
20		↓	↓
21	↓	土師器	台付
22	SK08 A-1・2 区	土師器	糸切小皿
23	SK09 A-5 区	土師器	糸切大皿
24	SK11 掘り方 A-5 区	白磁	大型合子か？
25	↓	黒褐釉	壺
26	SK17（井戸）掘り方 A-1・2 区	土師器	糸切大皿
27	↓	↓	↓

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
28	SK17(井戸)井筒内 A-1 区	土師器	糸切大皿
29	↓	↓	↓
30			
31			
32			
33			
34			
35			
36			
37			↓
38			糸切小皿
39			
40			
41			
42			
43			
44			
45			
46			
47			
48			
49			
50	↓	↓	↓
51	SK17(井戸)井筒内 A-1 区	土師器	糸切小皿
52	↓	↓	↓
53		土師器	高台付
54		↓	↓
55	↓	↓	↓
56	SK32 B-7 区	土師器	糸切大皿
57	↓	↓	小皿
58	SK33 B-7 区	土師器	糸切小皿
59	↓	↓	↓
60	↓	↓	↓
61	SK36 B-6 区	土師器	糸切大皿
62	↓	↓	↓小皿
63	SK37 B-6 区	須恵か？	墨書
64	SD03 上部	青磁	龍泉碗Ⅴ-3
65	↓	↓	↓Ⅴ-4
66		口ハゲ	碗 2 片接合
67		朝鮮	象嵌
68		国産黒褐釉	碗
69	↓	土製品	土錘
70	SD03（第 4 層、下層）	中国陶器A群	茶入れ
71	↓	青磁	龍泉碗底部
72	SD03（東肩、西肩）包含層	黒褐釉	碗

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
73	↓	朝鮮	李朝碗
74		明染付	皿
75	↓	青磁	龍泉Ⅴ類碗
76	セクションベルト SD03	国産陶器	瀬戸 2 片頸部
77	↓	↓	↓
78	SD04 B-9 区	土師器	糸切大皿
79	P-3 A 区	瓦器	蓋
80	包含層 A-1 区	中国陶器	短頸壺
81	包含層 A-4 区	緑釉（国産）	皿
82	攪乱 A-1 区	青磁	越州窯碗Ⅱ類
83	包含層 B-8区	白磁	未分類
84	↓	青磁	未分類
85	↓	土師器	糸切大皿
86	包含層 C-10区	青磁	同安？
87	包含層上層 C-11区	朝鮮	碗(目跡あり)
88	↓	白磁	高台が小さい
89	包含層上層 C-12区	朝鮮	象嵌青磁碗
90	↓	陶器（国産）	美濃皿
91	包含層第 3 層 C-12	古窯系	
92	包含層、包含層黒褐色土、包含層上部黒褐色土 C-13	青磁	越州窯片
93	↓	↓	龍泉碗
94		土器	
95		↓	頸部に文様
96		↓	高杯（丹塗）
97		↓	把手
98		土師質土器口縁	
99		↓	↓
100	↓	↓	頸部に圏線文あり
101	包含層上部	黒褐釉	碗
102	↓	白磁	印文
103		朝鮮	碗
104	↓	土師器	糸切小皿
105	包含層	青磁（国産）	↓
106	↓	土師器	糸切大皿
107	SK19	銅銭	↓
108	SK08	碧玉	管玉
109	SK20	紡錘車	紡錘車
110	SK11	石製品	砥石
111	上部包含層	石製品	砥石
112	SD03	石製品	硯
113	↓	石製品	碾臼
114	SD01	なまりか？	
115	SK11	鉄製品	刀子

第6章　博多駅前工区の調査 (Fig. 119, 120)

遺跡略号　HKT-S-4　　調査番号　7949

調査区は地下鉄1号線工事区の博多駅前工区にあたり、福岡市博多区博多駅前1丁目、2丁目に位置する。博多駅から築港方向に伸びる大博通りを斜断する形で地下鉄路線は走り、調査を行ったのは、地下鉄工事里程でいえば9k286mから9k540mの254mの区間であり、博多駅前1丁目西日本銀行のほぼ中央付近から、2丁目朝日ビルの角あたりまでである。この付近は、昭和36年に現博多駅が開業するまでは、旧博多駅の南側に広がる田園地帯であり、中世都市博多の範囲からははずれている区域である。旧那珂郡に属し、「筑前国続風土記」によると宝暦10（1760）年博多の農民25戸をわかち、犬飼の田地を耕作せしめ、其外犬飼の田地を作るもの博多市中に居れり、とある。前章でも触れたように、博多市街の南側には房州堀と呼ばれる堀が戦国時代には掘られ、博多の範囲を明確に区画していた。この房州堀は明治期の旧博多駅開設前までは痕跡を留めていた。博多古図等を見ると博多の南側に比恵川（石堂川の旧河道）が、東より西に流れ、那珂川と合流し、博多湾に注いでいる。現在の博多駅の工事の際、バスターミナル付近から弥生式土器が発見されたこともあり、房州堀と比恵川の関係、遺物の存在する層位、旧比恵川の河道の確認等を目的に調査を行った。調査期間は昭和54年12月から昭和55年8月までで、調査担当は折尾学である。遺構の存在は予想されないため、工事による表土掘削、地中梁架設の際に立会し、土層図を作成した。現地表面のレベルは駅前の都市区画整理事業で埋め立てられ、標高3.5～3.9m程度であるが、埋立前の標高はほぼ2.7～3mである。Fig. 120が作成した土層図である。覆鋼桁をかける際に、地表面から1m強を掘り下げており、旧地表面はほとんど見られないが、それでも水田および畑の耕作土と思われる粘性をもった黒褐色土、黒褐色土が標高2m付近に見られる。以下粘質の強いヘドロ様の土層をはさむがほぼ砂層の堆積である。9k460m調査地点中央部付近で基盤の八女粘土かと思われるシルト質の層が標高0.9m付近で検出できた。しかし他のトレンチでは確認していない。旧比恵川の河道は立上がりの部分が見られず、作成した土層図の砂層部分はほとんどが氾濫源にあたるものと思われる。おそらくこのシルト層の左右に河道が見られるものと思われ、河道の変遷が予想される。遺物はいずれの層からも出土していない。9k420m調査地点で、木桶組の井戸が1基検出されている。新開と呼ばれる集落の中にあったものと思われる。また9k286m調査地点では、房州堀と推定される落ち込みは全く見られず、博多17次調査区、地下鉄祇園町工区Q区と9k286mとの間、おそらく第一生命ビル、西日本銀行ビルにはさまれた道路付近に求められるであろう（前章Fig. 112)。調査にあたっては福岡市高速鉄道建設局（現交通局）と工事担当の竹中土木株式会社九州支店の各位に御配慮いただいた。

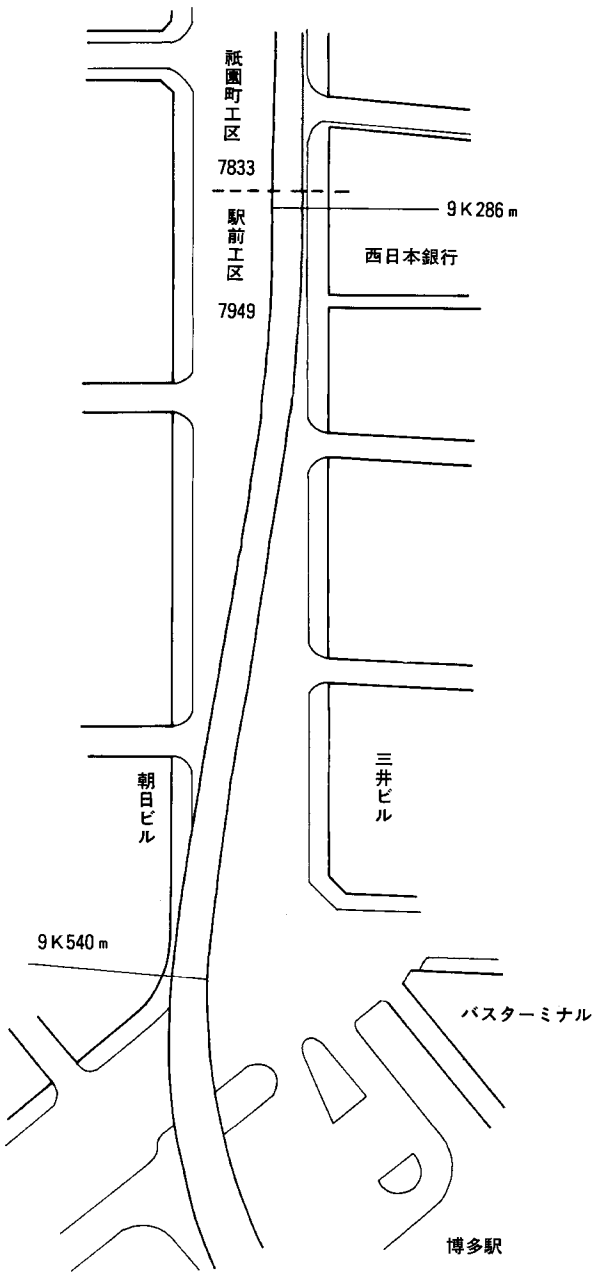


Fig.119 駅前工区調査区全体図

第7章　呉服町工区本体部の調査 (Fig. 121—131, PL. 34—38)

遺跡略号　HKT-S-3　　調査番号　7835

博多遺跡群における地下鉄2号線関係の調査で、呉服町駅舎部にあたる。路線は旧電車通り（貫線）を東西に走り、博多駅築港線（大博通り）と直交する。この交差点を呉服町交差点と呼んでいる。この交差点は Fig. 2 の博多遺跡群地形図に見られるように、沖の浜、博多浜の両砂丘にはさまれた低地で、福岡市博多区店屋町、綱場町、上呉服町、下呉服町にかかる。長い間「袖の湊」の故地であると考えられ、地下鉄路線内遺跡の調査に先がけて、福岡市教育委員会が想定した遺跡にも「袖の湊跡」として摘出されている。また路線がこの推定港跡の中央部を通るため遺構については近世の埋立て以外に見られないものと考え、港湾内の土層図の作成を目標に、2号線 0k 350 m 地点にAトレンチ，0k 520 m 地点にBトレンチ、0k 560 m 地点にCトレンチを設定し、土層の観察につとめることとなった。発掘調査は折尾学が担当し、白石公高、信行千尋、日野孝司らがこれを補助した。調査にあたっては福岡市高速鉄道建設局（現交通局）と呉服町工区担当の大日本土木株式会社の協力を得た。土層図（Fig. 122）の作成にあたっては，工事の地中梁架設の各段階でおこない、これをのち合成するとにした。土層写真についても同様の方法で合成した。調査に要した期間は昭和53年11月27日から昭和54年5月23日までである。

調査概要を述べる前に「袖の湊」について触れておこう。袖の形をした入江がその名の由来であるという。「袖の湊」については、近世の古絵図、地誌類に記されており、江戸時代においてもその伝承と位置の比定は度々おこなわれている。これについては、福島金治、佐伯弘次氏が「博多袖ノ湊関係史料集（1)」1987『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ』付編にまとめられている。位置については沖の浜の砂丘と博多浜にはさまれた低地に大まかに比定されているが、その築造年代と築造者に言及したのは中山平次郎博士であった。沖の浜の土層の観察から、人工的な盛土が入江の浚渫によるものと考え、「袖の湊」の和歌に用いられる年代と一大事業である港築造の指揮権の強大さから、「袖の湊」は応保2（1161）年頃、大宰大弐に任ぜられた平清盛の手によるものであり、その経験がのち大輪田泊の築造に生かされたといわれている。また、「袖の湊」の具体的な遺構として、昭和27年東邦生命ビル（現エレデ寿屋）の建設工事に際し、奥野武氏は多数の遺物とともに出土した杭列を「袖の湊」の桟橋と考えた。これらのことから呉服町交差点は港の中であるとの説が一般的であった。

以下各トレンチの概要を述べる。

Aトレンチ（Fig. 123～125）　2号線里程で 0k 350 m の地点である。現在表面標高は3.1 m で、地表下2.5 m 程度は覆鋼桁架設のため掘削され、以下を調査した。標高＋0.5 m 強から－5 m 程度までの土層図を作成し、それは実測図および写真に示すとおりである。遺構には調査土

7835

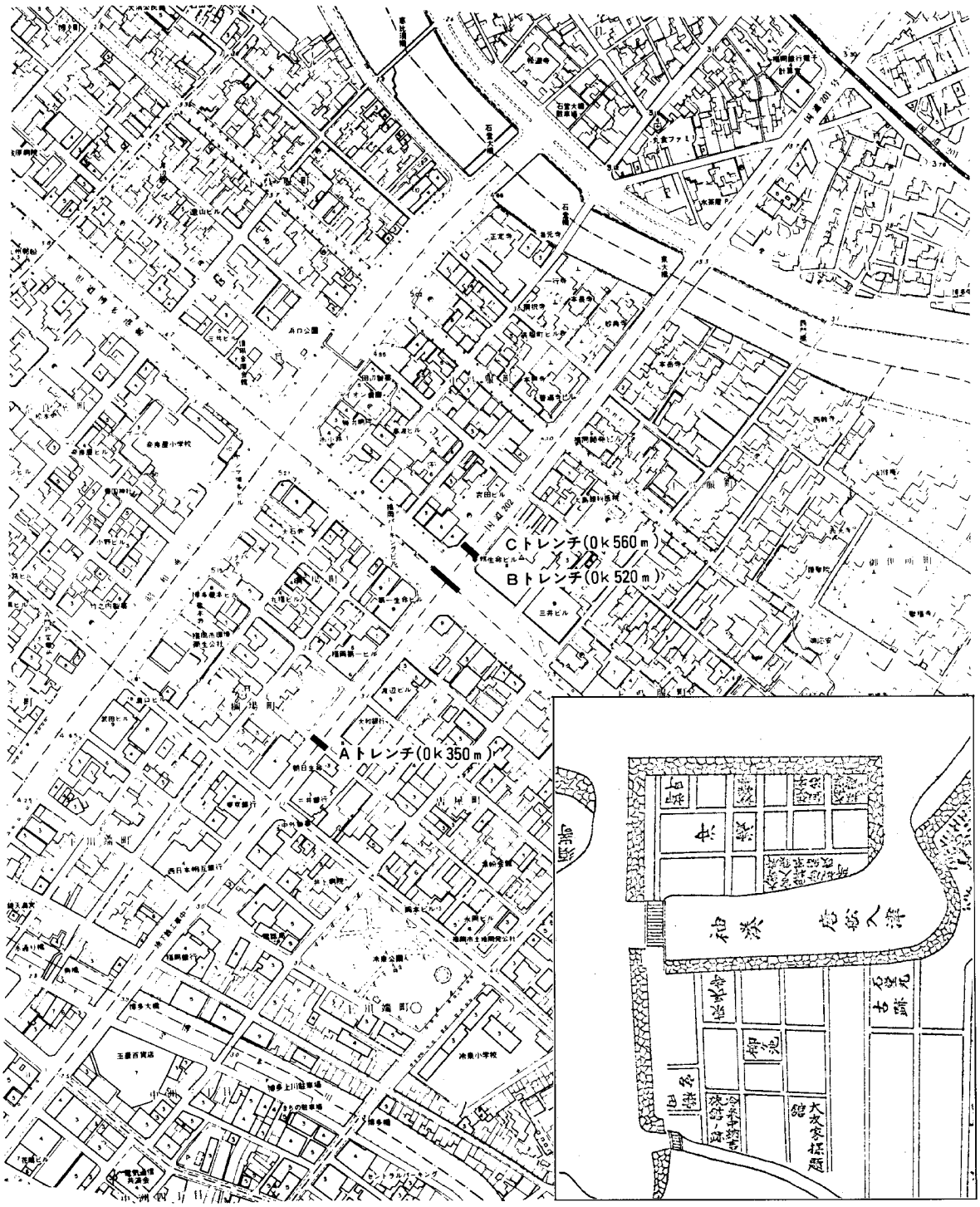


Fig.121 2号線呉服町本体部トレンチ (1/2500) と袖ノ湊(黒田如水伝より)

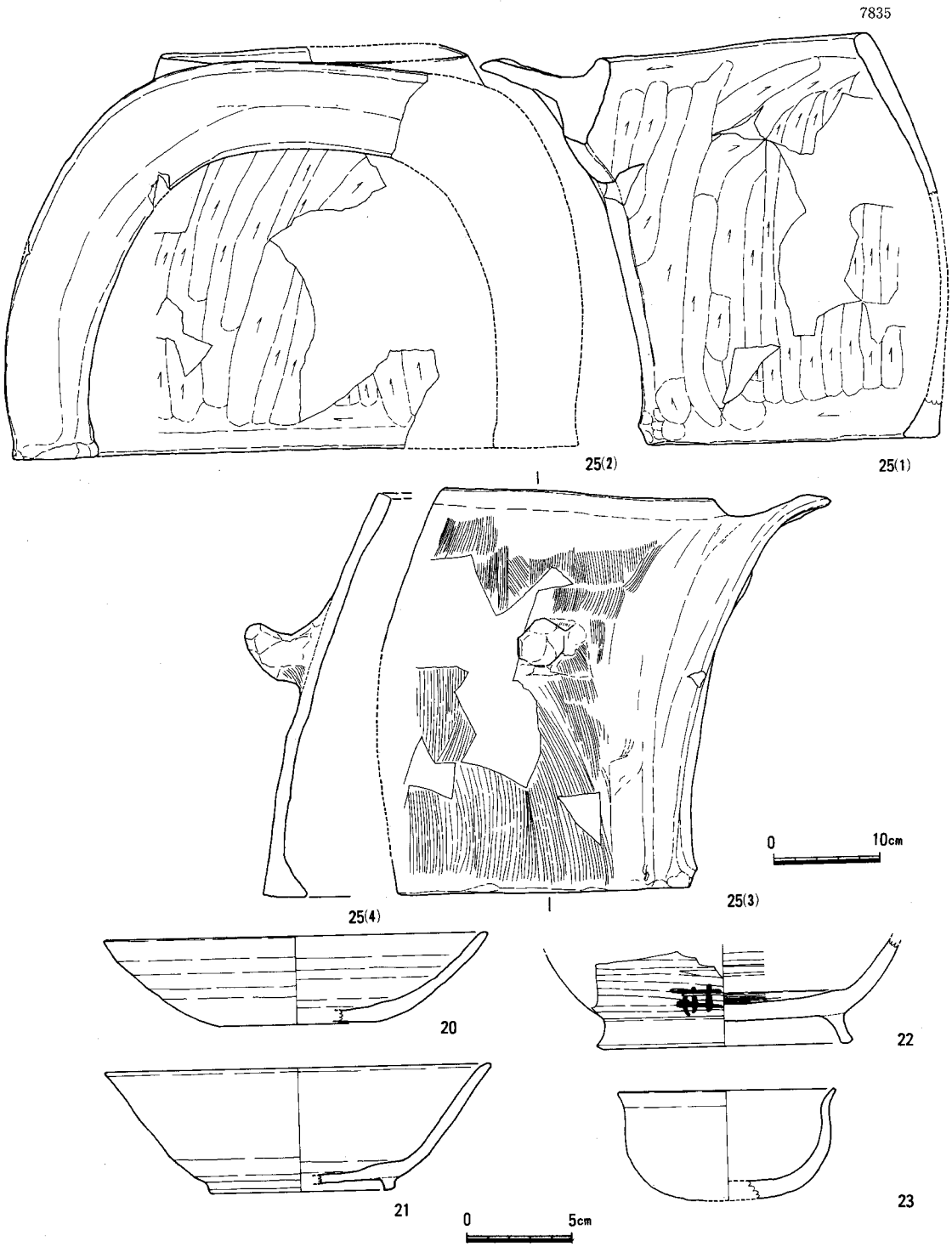


Fig.123 Aトレンチ 出土遺物(1) (1/3,25は1/6)

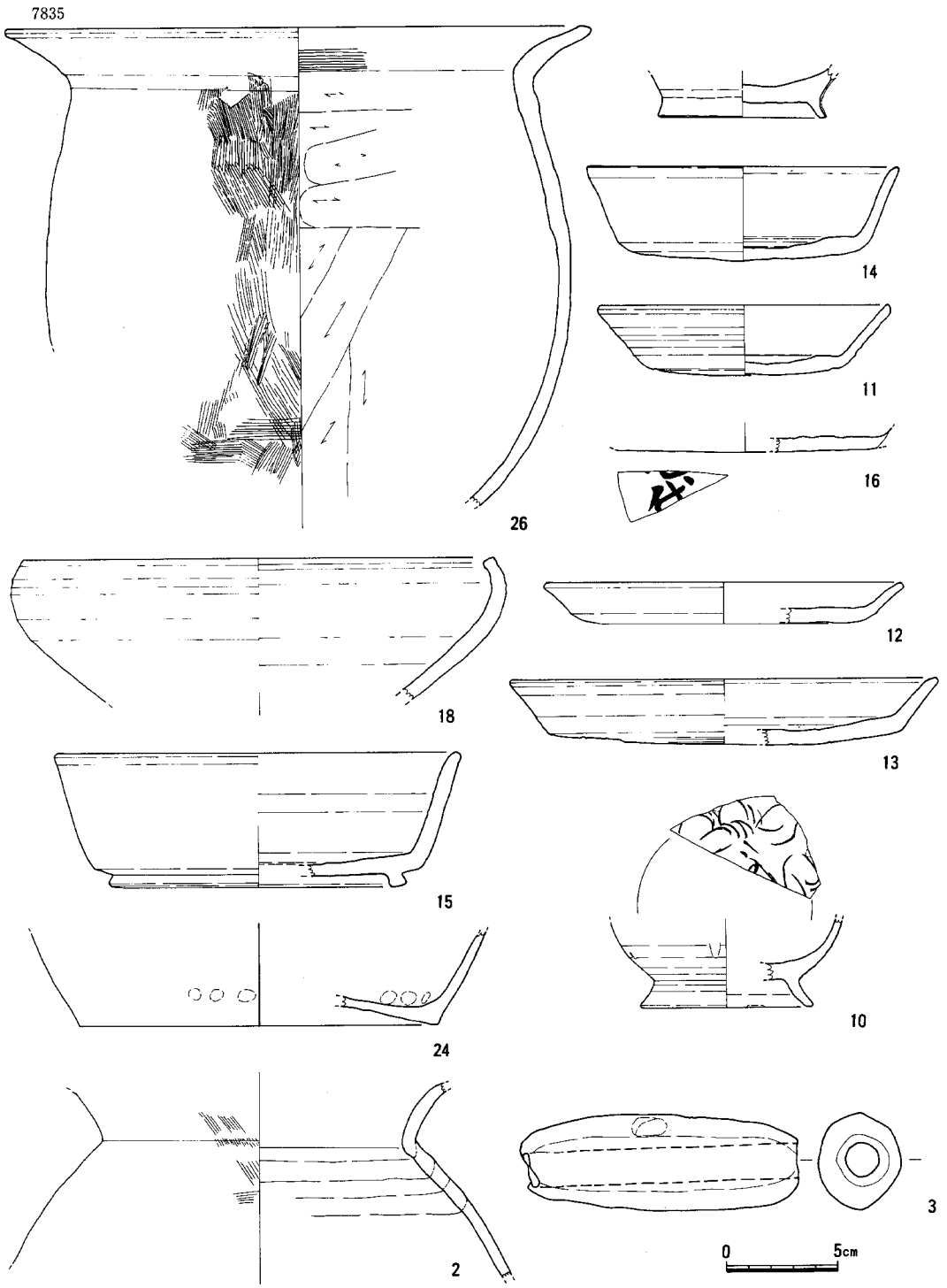


Fig.124 Aトレンチ出土遺物(2) (1/3)

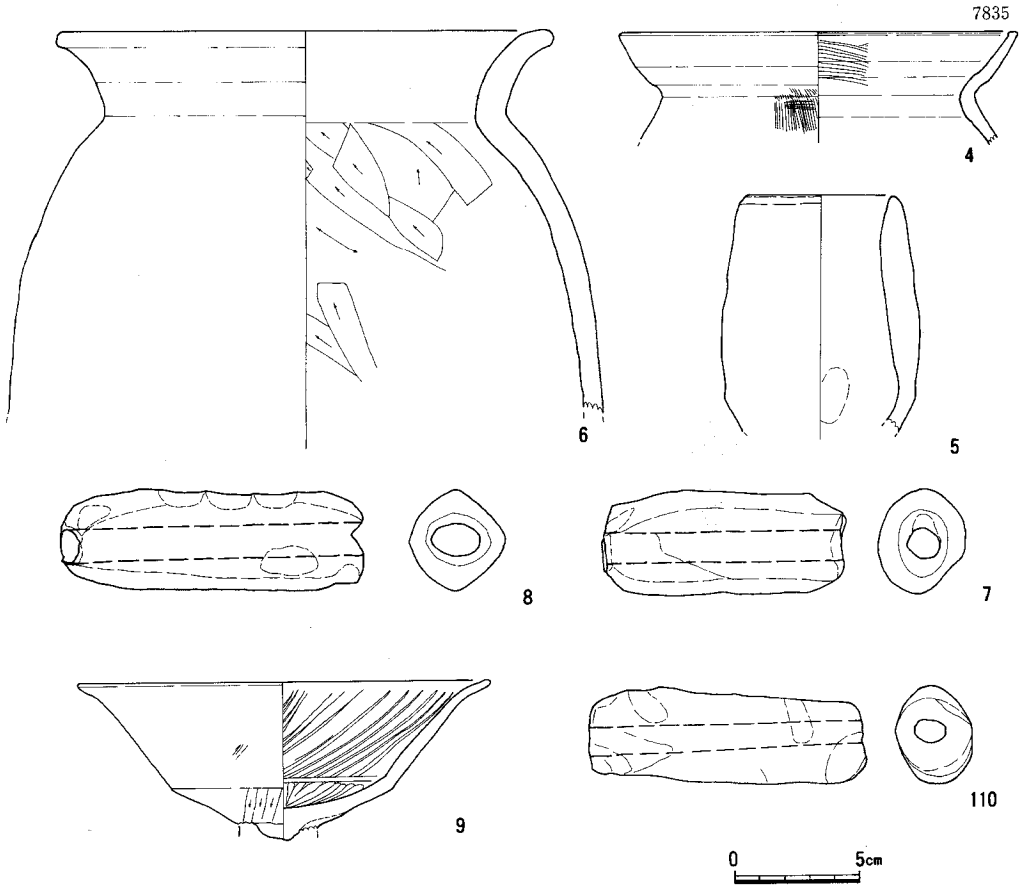


Fig.125 Aトレンチ出土遺物(3)(1/3)

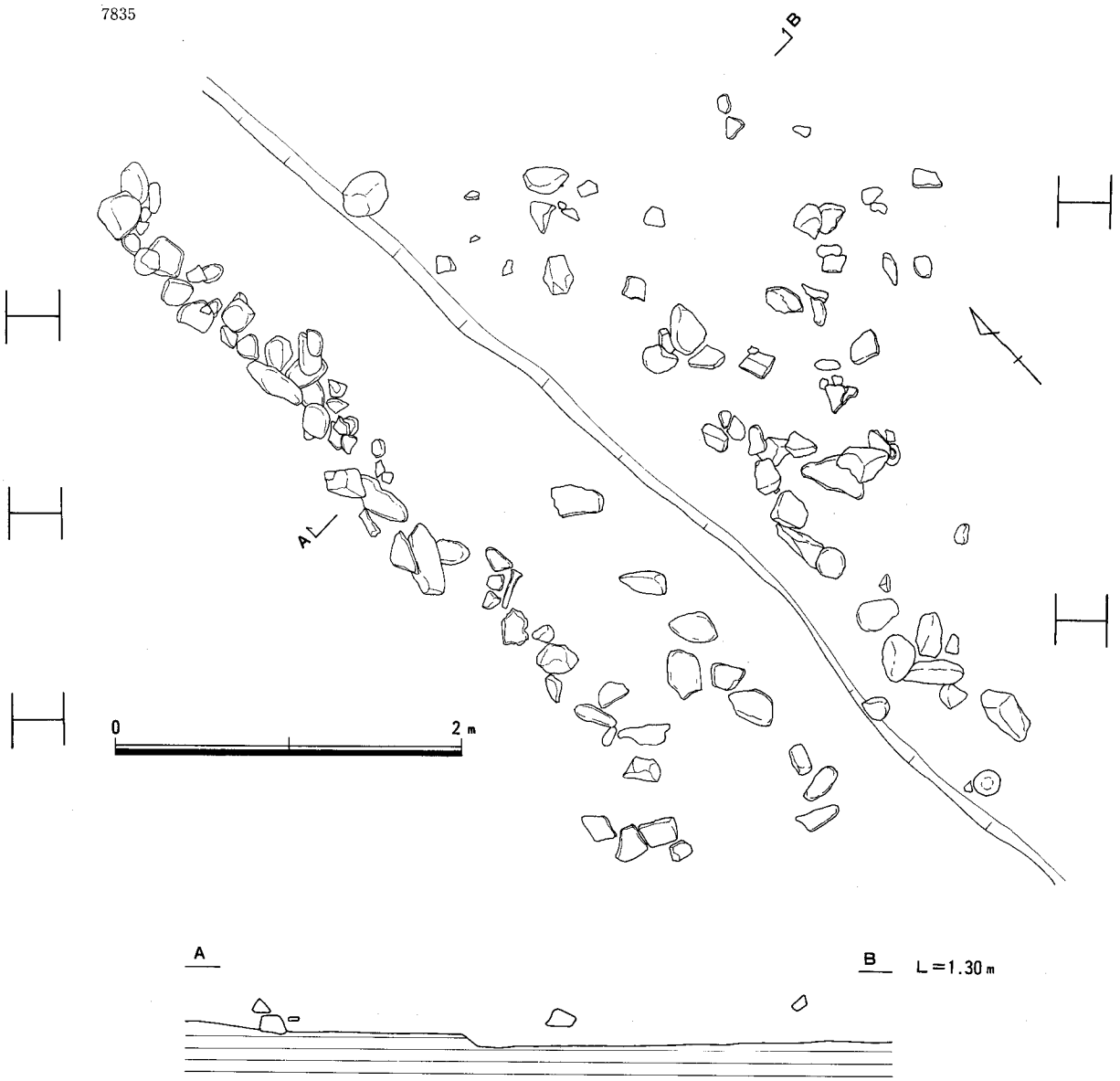


Fig.126 Bトレンチ E- I- a区検出遺構(1/40)

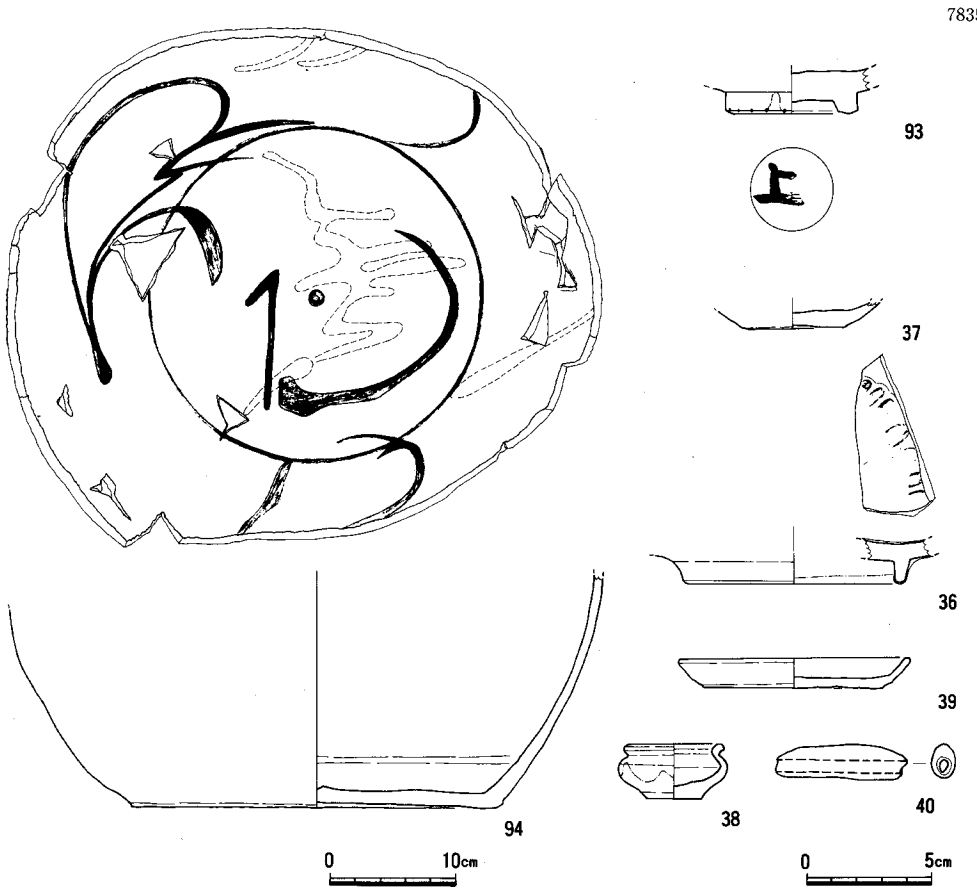


Fig.127　Bトレンチ出土遺物(1)(1/3、94は1/6)

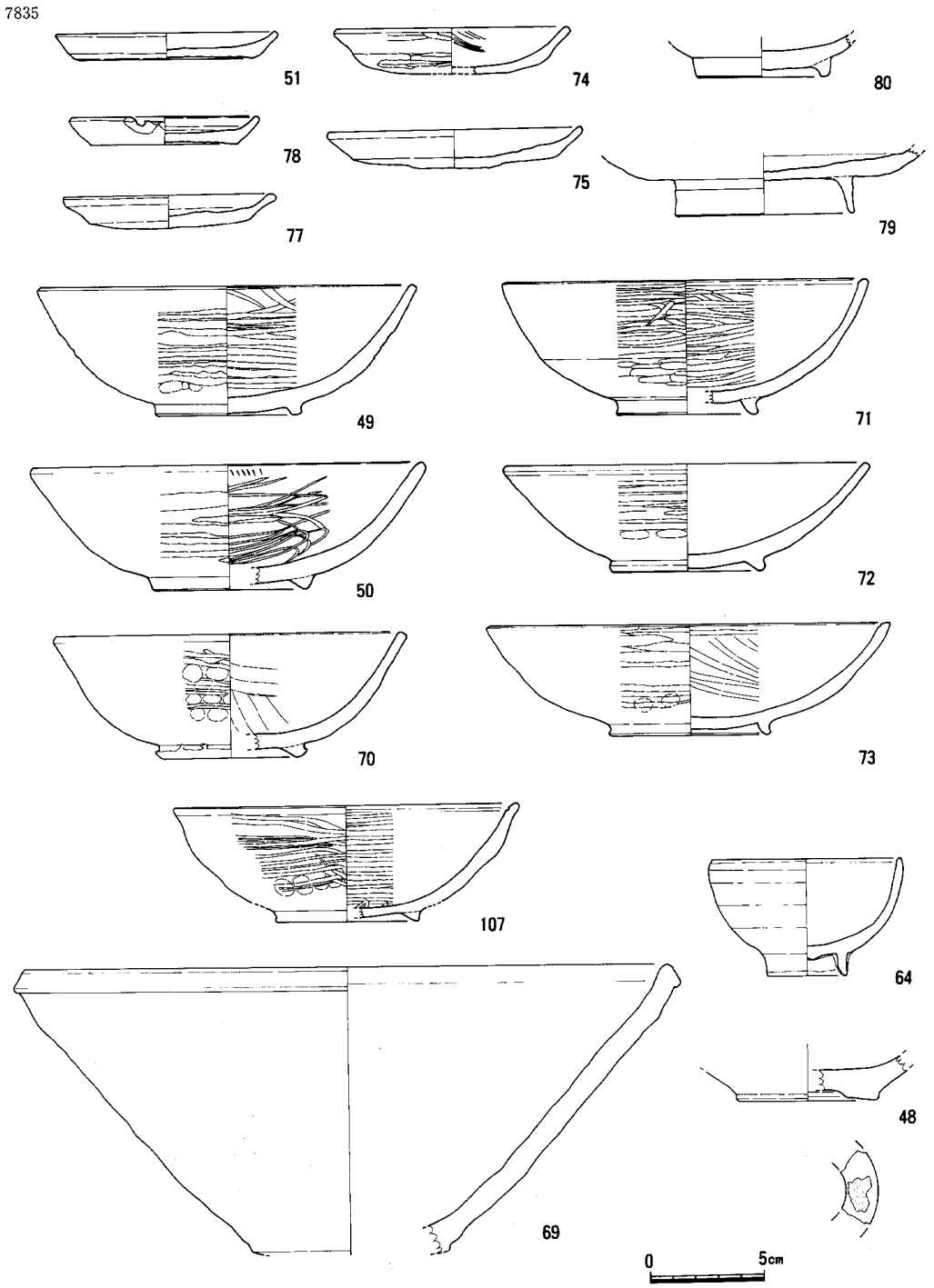


Fig.128 Bトレンチ出土遺物(2)(1/3)

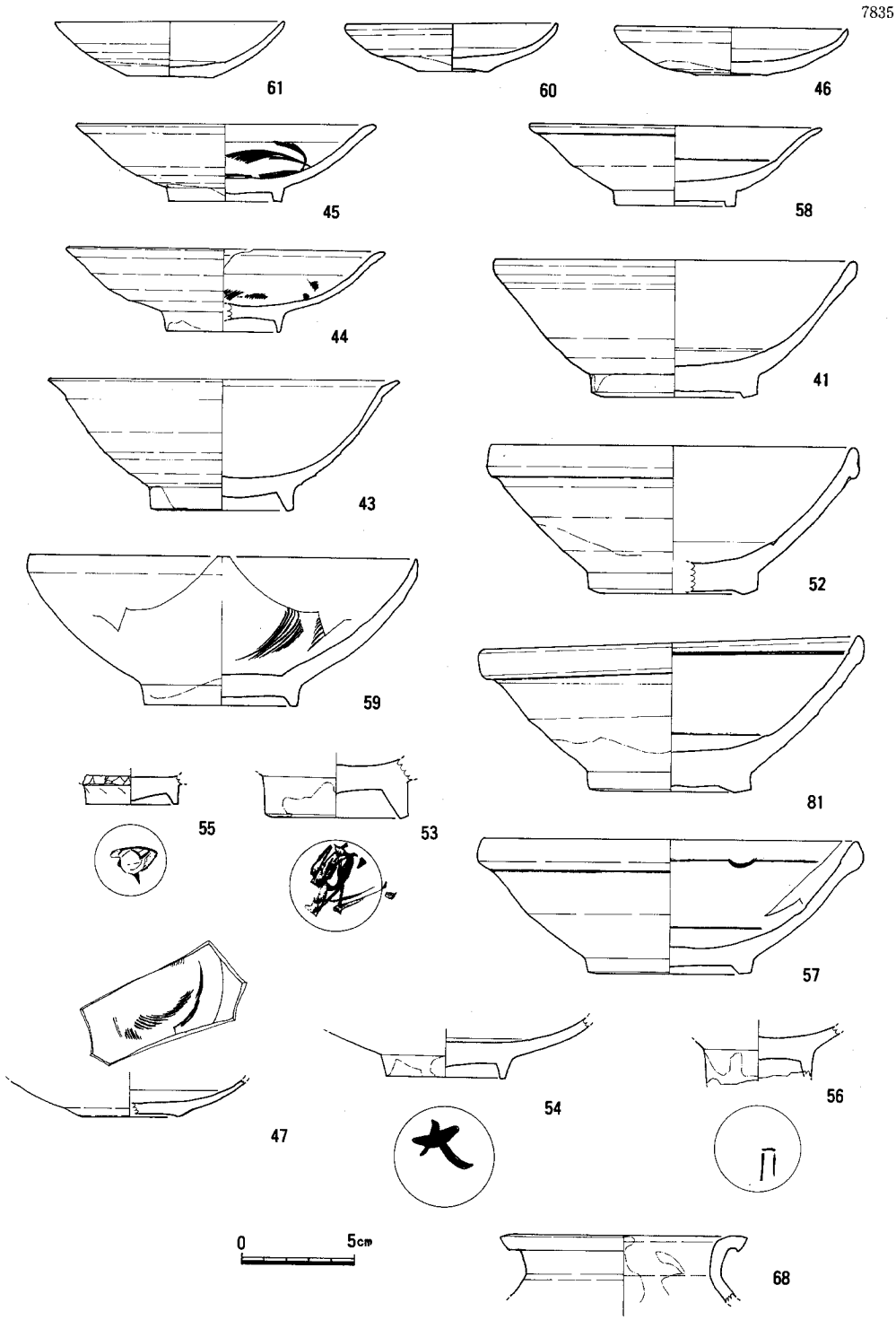


Fig.129 Bトレンチ出土遺物(3)(1/3)

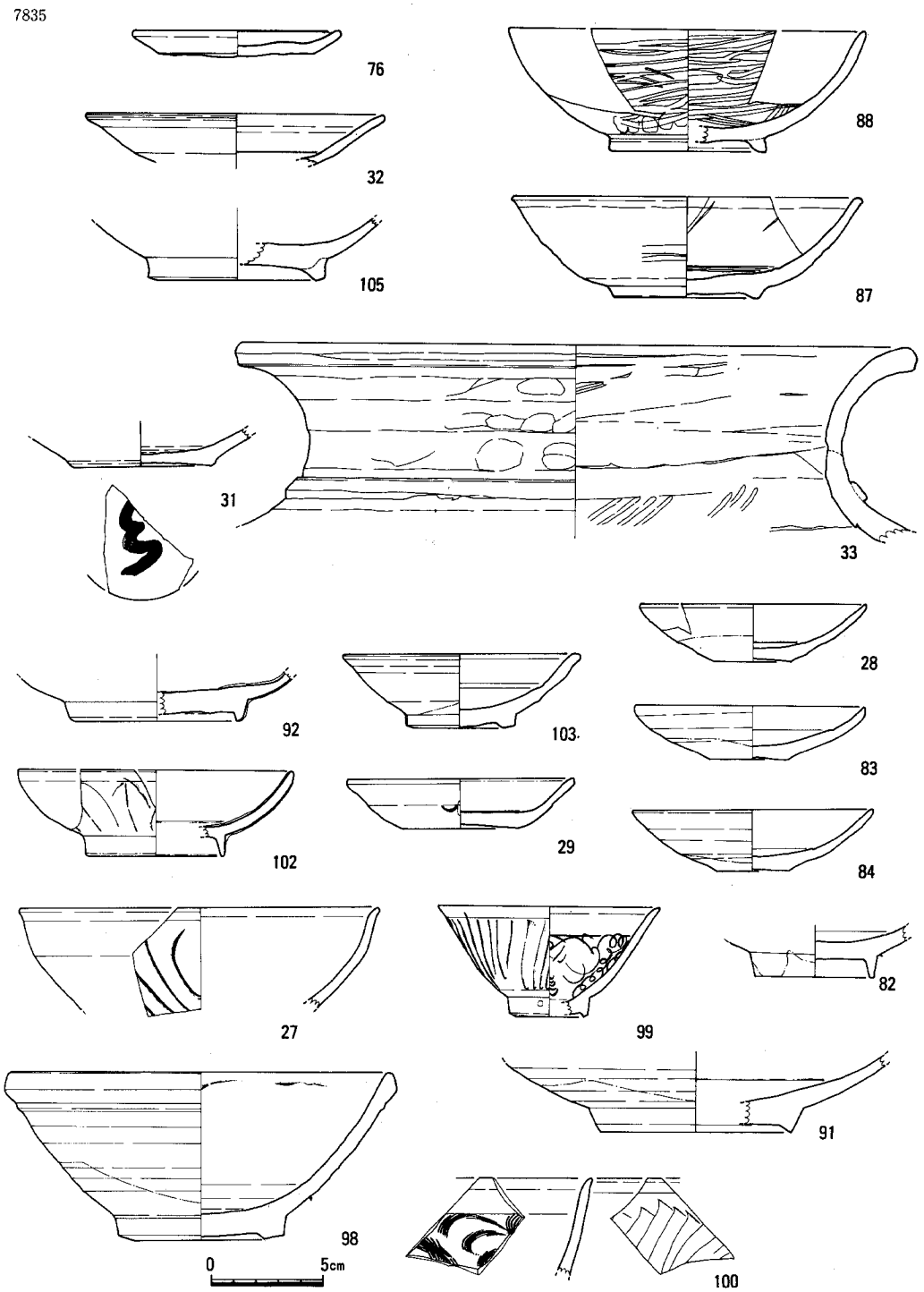


Fig.130 Bトレンチ出土遺物(4)(1/3)

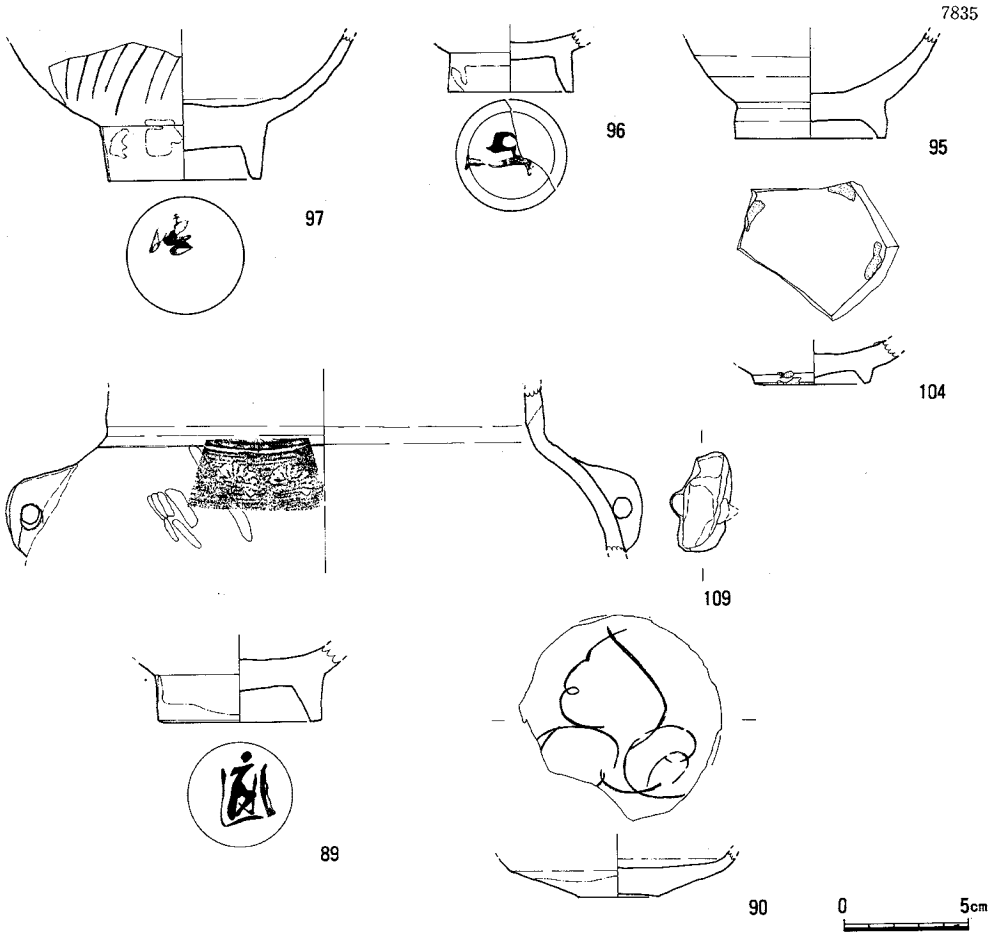


Fig.131 Bトレンチ出土遺物(5)(1/3)

層最上面で確認された杭があり、－1.5 m、12層のあたりまで打ち込まれている。近接する第29次調査区で確認されている16世紀から17世紀初頭にかけての入江埋立工事に見られる杭と同様に土留杭であろう。東から順次埋立てられており、今回の土留杭は29次調査よりあとのものである。攪乱部を除いて、2、3層は後世の掘込みであり、4、5層が近世初期の埋立客土となる。9層、6層以下は自然堆積によるものである。12層ではまとまった量の遺物がある。近世初期の陶磁をはじめ、8世紀代から9世紀前半代の須恵器、土師器や内面に細かいヘラ描き花文をもった越州窯青磁碗（10）なども混じる。16は須恵器杯で「□代」の墨書がある。現在の博多港の平均潮面は標高0.029 m で、大潮満潮面が同じく0.829 m であり、干満の差が最大2.13 m である。これからすると、標高＋0.829 m から－1.301 m までは干潟の状況にあるといってよい。干潟の状態で廃棄あるいは流れ込んだものであろう。12～14層はこのような状況であるが15層はほぼ水面下に没している部分である。古式土師器等の古墳時代初頭の遺物が見られるが流れ込みである。砂の堆積は左下がりに堆積しており遠浅の砂浜の如き様相を呈している。既にこの時期には大型の船舶が着岸するような港湾ではなく、漁船などが出入する程度の港になっていたと思われる。天正末年（1591年頃）の豊臣勝俊の『九州のみちの記』に「袖の湊とことごとしくいはれたるはいづくぞ、尋見ばやと申しければ、あるじ心ある人にて、しるべしけるに、あるじ云く、今こそ汐のさしきて水も少はべれ、常は無下にいふかひなく侍ふ物をとぞ申ける、誠にもろこし舟よせつべき浦とも覚えず」とあり、12～14層はこの時期の様子を示している。15層は天正末年以前で港湾としての機能を果たしていた時期である。16層以下は41層までほぼ水平な堆積をなしており、汀線近くの堆積とは認め難い。遺物は25、27、40層で微量の古墳、奈良時代の土師器が出土している程度である。平安末以降の遺物は認められない。42層では土師器高杯、須恵器、土錘等が出土している。43層以下は遺物を含まない。16層以下に平安時代末の遺物を含まないことは、42層～16層が古墳時代～奈良時代の堆積であることを示している。このことから15層が平安時代以降～中世末までの堆積となる。この地が「袖の湊」の一部であることの蓋然性は高いが、やや喫水の浅い港であったといわねばなるまい。とはいえ、本来ならば砂丘と化して当然と思われるこの地が港として残ったのは、度重なる浚渫の結果であり、15層の堆積も主要な機能を果たし終えてからのものであろう。

Bトレンチ（Fig. 126～131）　2号線里程で 0k 520 m，呉服町交差点の中央部にあたる。先に述べたように、この地点は「袖の湊」の中央部にあたると考えられていた。そのため地中梁の架設を先行し、標高＋1 m～－2 m 程の土層断面図の作成を行った。ところが、土層断面の清掃作業中、標高約1 m のレベルに遺物包含層があり、その面にあわせ精査したところ、Fig. 126に示すような配石列が検出され、雨落ち溝のような段落ちも観察された。かつ、それらの方向はほぼ南北を向き、あまつさえその時期は遅くとも12世紀前半代に比定しうる。この事実は呉

服町交差点が、12世紀後半に築造された「袖の湊」の中央部にあたるというこれまでの定説とは全く矛盾した結果であった。呉服町交差点は、平清盛以前、既に12世紀前半代には陸地化していたのである。この結果をもとに、呉服町工区の換気塔、出入口等も改めて正式に調査することとなり、第8、9章で述べるとおり、呉服町交差点周辺の古地形が徐々に明らかにされて来ている。検出遺構は標高＋1.0 m 付近であり、先に述べたとおり12世紀前半代には比定しうる。以下の砂層では少量の遺物は出土しているが，いずれも以前の時代のもので遺構は検出できない。－2 m までの土層図を作成しているため、A トレンチの土層図との全体的な比較は困難であるが、B トレンチ遺構面以下の粗砂層は、A トレンチの15層と51層との間に比定されるものと考えられる。A トレンチでは長期間に亘る浚渫作業で除去された層が、B トレンチではそのまま堆積したものであろう。なお、土層図に見られる木桶組の井戸は上層から掘り込まれたものである。出土遺物は表および図に示した通りであるが、上層掘削時の新しい遺物も混在しているが、大半は12世紀代に位置づけていいものである。

C トレンチ (Fig. 122)　2 号線里程で 0k 560 m，呉服町交差点東側にあたる。他のトレンチと同様に標高＋1.0 m 付近のレベルから－2 m まで土層図の作成を行った。この結果、上層から掘り込まれた木桶組井戸のほか遺構は検出されず、B トレンチで観察できた黒褐色土等の遺物包含層も見あたらず、－2 m 付近で見られる暗灰色シルト層まで砂層が重なっており、遺物もほとんど見られない。これは調査以前の表土掘削の際に既に遺構面は削平されてしまっているからである。B 換気塔の調査でも同様の結果であった。第 8 章でも触れることになるが、平安時代末期において、A トレンチは海、B トレンチは＋1 m 付近に遺構があり陸地、C トレンチでは＋1 m 以上に遺構があって陸地という、西から東への地形の変化が認められる。

発掘調査にあたっては、当然ある程度の予想は必要であろうが、先入観が大きすぎても事を見失う恐れがある。袖の湊や博多古地形に関するデータが殆んどないという当時の状況から止むを得ないことであったとはいえ反省すべき点の多い調査であった。

呉服町工区本体部主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
00001	Aトレンチ黄白色砂層最下層	須恵器	壺
2	黄褐色砂層14層	土師器	甕
3	↓	土師質	土錘
4	黄白色砂層15層	土師器	甕
5		土師質	たこ壺
6			甕
7			土錘
8	↓	↓	↓
9	42層	土師器	高杯
10	12層	青磁	碗
11		須恵器	皿
12			

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
13			↓
14			碗
15			坏
16			小片
17			蓋
18		↓	鉢
19		土師器	碗
20	↓	↓	大坏
21	12層	土師器	碗
22		↓	鉢
23		土師質土器	不明
24		陶器	壺
25		土師質	かまど
26	↓	↓	甕

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
27	Bトレンチ D-I-a 第1層	白磁	碗
28	↓	↓	平底皿
29	上層	↓	↓
30	↓	陶器	不明
31	中層	須恵器	壺か
32		陶器	皿
33		須恵器	大甕の頸
34		青磁	碗
35	井戸-2裏込中	↓	↓
36	井戸-2内	↓	盤
37	↓	須恵器	皿
38	井戸-3内	陶器	小壺
39	↓	土師器	皿
40	↓	土師質	土錘
41	E-I-a	白磁	碗
42	↓	↓	↓
43	↓	↓	↓
44	↓	↓	↓
45	↓	↓	↓
45	↓	↓	↓
46	↓	↓	平底皿
47	↓	青白磁	皿
48	↓	青磁	碗
49	↓	瓦器	↓
50	↓	↓	↓
51	Bトレンチ E-I-a	土師器	皿
52	↓	白磁	碗
53	E-I-a 包含層(上)	↓	↓
54	↓	↓	高台付皿
55	↓	↓	↓
56	↓	↓	小碗
57	↓	↓	碗
58	↓	↓	高台付皿
59	↓	↓	碗
60	↓	↓	平底皿
61	↓	白磁	平底皿
62	↓	↓	水注
63	↓	青白磁	香炉
64	↓	青磁	小碗
65	↓	↓	不明
66	↓	陶器	甕
67	↓	↓	四耳壺
68	↓	↓	壺
69	↓	須恵質	鉢
70	↓	瓦器	碗
71	↓	↓	↓
72	↓	↓	↓
73	↓	↓	↓
74	↓	↓	皿
75	↓	土師器	↓
76	↓	↓	↓

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
77	↓	↓	↓
78	↓	↓	↓
79	↓	↓	碗
80	E-I-a 包含層	↓	↓
81	E-I-a 包含層(上)	白磁	碗
82	F-I-a 茶褐色土層黄灰色粗砂層	↓	↓
83	↓	↓	平底皿
84	↓	↓	↓
85	↓	染付	碗
86	↓	↓	↓
87	↓	瓦器	↓
88	F-I-a 暗灰色粗砂層	↓	↓
89	F 区表面採集	白磁	↓
90	↓	青磁	平底皿
91	G-I-a 上層	白磁	鉢
92	↓	青磁	高台付皿
93	H-I-a 井戸内	↓	碗
94	↓	陶器	甕
95	H-I-a	↓	碗
96	C-I-a	白磁	小碗
97	↓	↓	碗
98	↓	↓	↓
99	↓	↓	小腕
100	↓	商	碗
101	Bトレンチ C-I-a	青磁	平底皿
102	↓	↓	高台付皿
103	↓	白磁	↓
104	↓	青磁	皿
105	↓	陶器	碗
106	↓	↓	壺
107	↓	瓦器	碗
108	Bトレンチ付近表面採集	白磁	八角杯
109	区不明表採	瓦質	羽釜
110	Aトレンチ	土師質	土錘
111	Bトレンチ E-I-a 包含層(上)	石製品	石錘
112	↓	↓	↓
113	↓	↓	↓
114	↓	↓	↓
115	↓	↓	↓
116	↓	↓	↓
117	↓	↓	↓
118	↓	↓	↓
119	↓	↓	↓
120	↓	↓	石玉
121	↓	↓	石玉
122	↓	↓	扁平礫
123	E-I-a	↓	紡錘車
124	↓	↓	温石
125	C-I-a	↓	石鍋

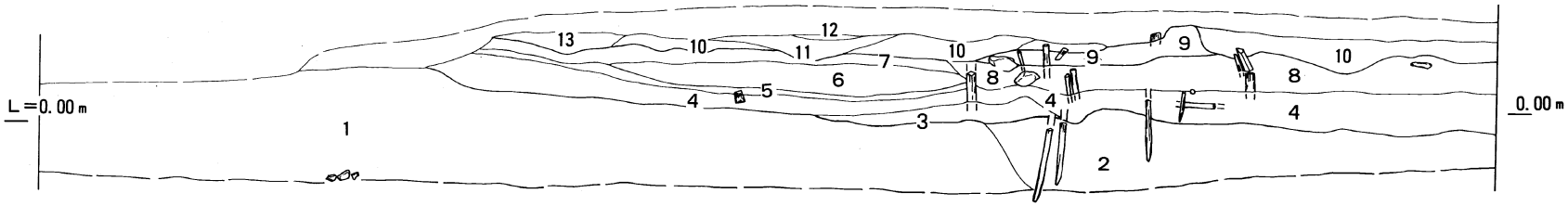
第8章　呉服町工区換気塔部の調査 (Fig. 132—137, PL. 39•40)

遺跡略号　HKT-S-5　調査番号　8037

第7章で述べたように、当初「袖の湊」の中央部を横断するという予想で、呉服町工区本体部の調査は3本のトレンチを設定し、土層の観察を行うこととした。その結果、Aトレンチでは港底と思われる層が確認され、また中世末以降の埋立の一部検出し、さらに港築造以前の層も確認できた。また、Bトレンチでは予想もしなかったことに12世紀代建物等の遺構が検出され、呉服町交差点付近は博多浜、沖の浜とを結ぶ陸橋の如き地形をなしていることが確認できた。これらの結果を踏まえ、換気塔および出入口の工事については以後確実に調査をすることとなった。換気塔の調査区は2ケ所であり、それぞれの概要を述べる。

朝日生命換気塔の調査 (Fig. 132～134)　博多区店屋町に位置し、昭和56年7月4日から7日まで調査を行った。対象地は630 m² であったが、真下を通る1号線シールドとの工法上の問題からトレンチ調査を行なうこととした。トレンチ長は12.5 mである。現地表面の標高は3.4 mで、地表より2.5 mは近世以降の埋立による盛土であり、地中梁の架設等のため先行除去している。Fig. 132 に示したように1, 2層はネズミ色の粗砂層で、須恵器片を少量含んでおり、本体部Aトレンチの12層にほぼ相当する。この層は山側に向ってやや高くなり、上面に堆積したヘドロ層(4～8層)もやや右下りに堆積している。標高0 mを中心としたこれらの層は潮間帯にあたり、干潟状の様相を示している。ヘドロ層は近世初頭の堆積物で、傾斜を見せることから岸辺に近い部分であろう。このヘドロ層の上面から、1、2層まで達する杭が集中して打ち込まれている。これらの杭は、29次調査で確認されたような入江の低湿地部分を埋め立てていった近世の土留遺構とも考えられるが、江戸期の古地図を現在の地図と重ね合せてみると、「大水道」の推定線の一部がこの調査区にかかり (Fig. 134)、この杭列が「大水道」の土留めの一部である可能性もある。残念なことに上層部分が既に削られており断定はできない。今後の周辺部の調査に期待したい。なお「大水道」は、近世地誌、地図などに記されているように、中世期の「袖の湊」の名残りとして認識され、「今は入海 (袖の湊) なくなり、其跡のみわつかに残りて、横一間許なる溝、東西に通せり。今是を大水道と号す。(筑前国続風土記)」などと記されている。また「殊に、西町 (現店屋町)・呉服町辺の地を穿つ事深ければ、漂澪、或は船具の類出る事まゝ多し。(博多古説拾遺)」と考古学的知見を記していることは注目に価する。「袖の湊」、「大水道」については「博多袖ノ湊関係史料(1)　地誌編」福岡市埋蔵文化財調報告第156集　1987　付編として佐伯弘次、福島金治氏がまとめられているので参考にしていただきたい。

B換気塔の調査 (Fig. 135～137)　博多区上呉服町に位置し、昭和56年3月27日から3月31日まで調査を行なった。調査面積は82 m² である。東邦生命ビル (エレデ寿屋) の北角に隣接する。昭和27年3月東邦生命ビルの建設工事の際、奥村武氏らが様々な遺物を採集し、「博多袖之



1. ネズミ色粗砂層
2. 暗灰色 粗砂
3. 4に同じ　粗砂を含む
4. 黒色強粘質土(ヘドロ状の泥炭状)　下材を多量に含む
5. 4に同じ　うすく　木の葉等植物繊維が堆積
6. 4に近いが、やや明るく7より暗い
7. 6に同じ　6より明るい
8. 7と同様であるが粗砂を含む
9. 明灰色　粘質あり若干砂粒を含む土層
10. 濁った黄緑色砂質土(客土)
11. 黒灰色粘質土(上からの掘り込み)
12. 10より暗い
13. ガラ混じりの上からの掘り込み

Fig.132　朝日生命換気塔調査区西壁土層図(1/60)

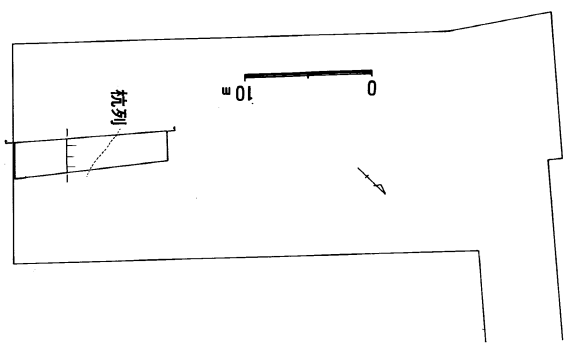


Fig.133　朝日生命換気塔トレンチ位置図

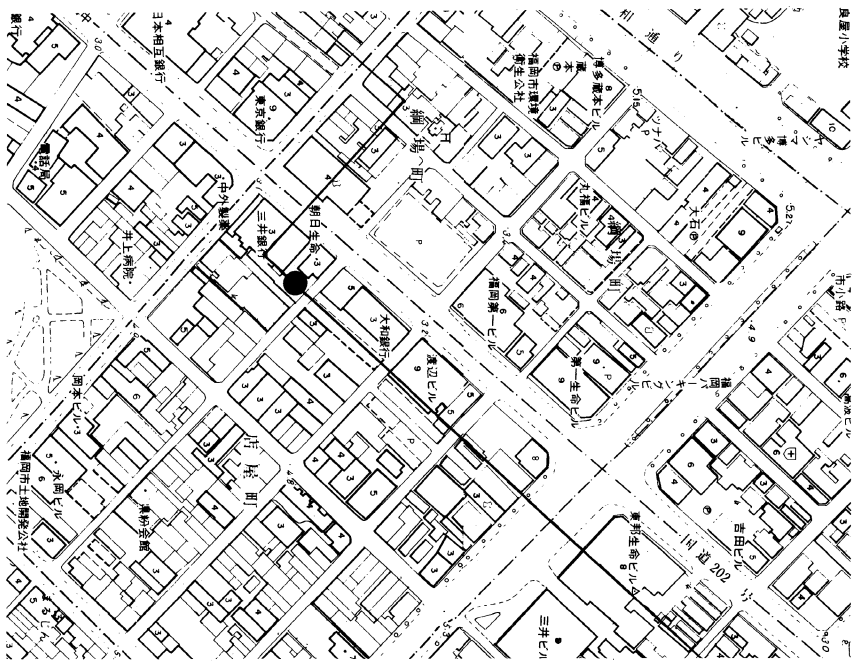
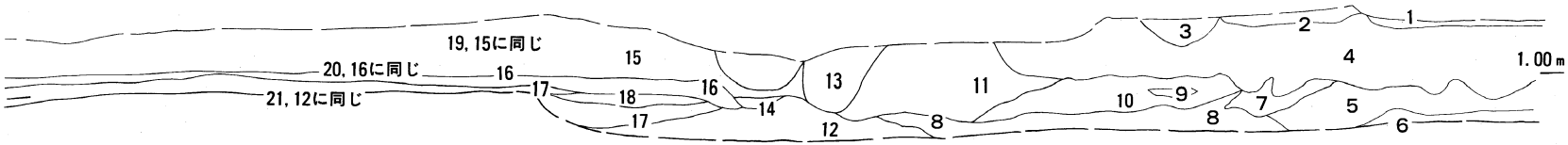


Fig.134　朝日生命換気塔調査地点と大水道推定線



13　茶褐色砂層　粒子細　粘性なし
14　褐色砂層　粒子細　粘性多少有
15　7に同じ
16　淡赤褐色　粒子細　粘性なし
17　淡赤褐色　粒子粗　粘性なし
18　赤褐色　粒子粗　粘性なし
19　褐色砂層　粒子細　粘性なし

7　黄灰白色砂層　粒子粗　粘性なし
8　黄褐色砂層　粒子粗　粘性なし
9　茶褐色砂層　粒子細　粘性なし
10　7に同じ
11　茶褐砂層　粒子細　粘性多少有
12　7に同じ

1　黒色砂層　粒子細　粘性有
2　黒褐色砂層　粒子細　粘性有
3　2に同じ
4　褐色砂層　粒子細　粘性多少有
5　淡黄褐色砂層　粒子細　粘性なし
6　黄灰色砂層　粒子粗　粘性なし

Fig.135　B換気塔調査区土層図(1/60)

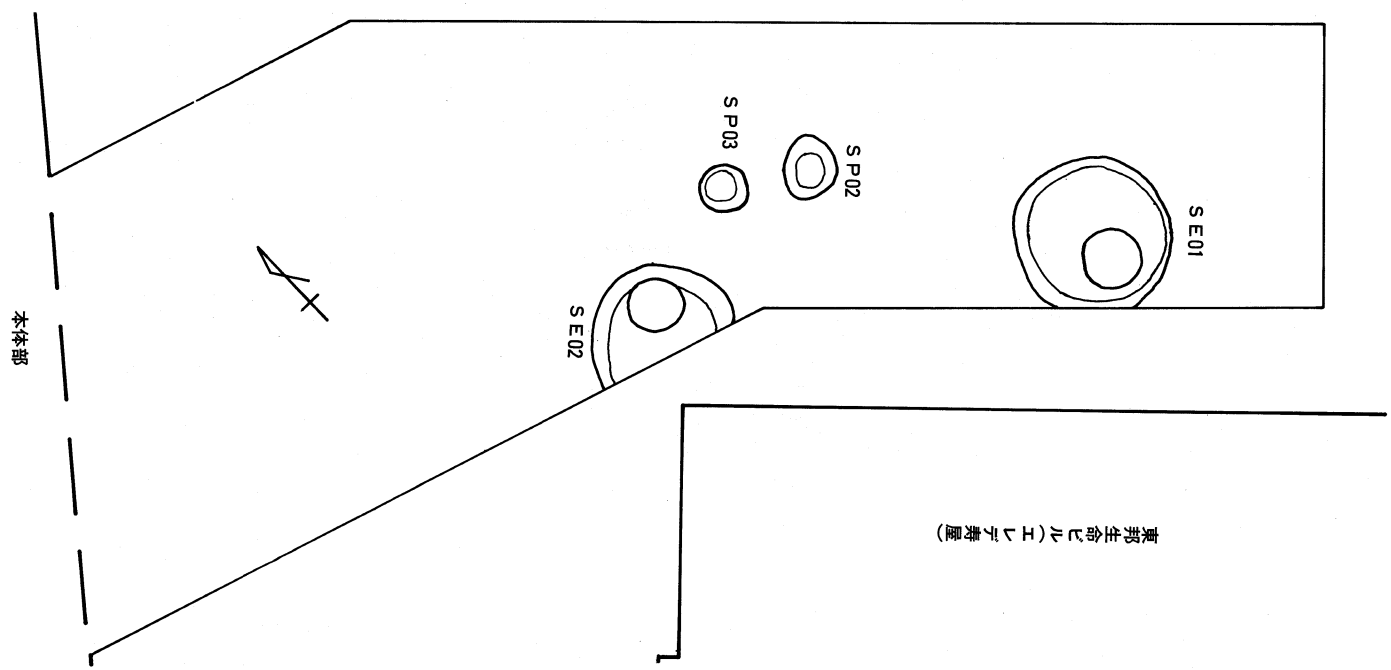


Fig.136　B換気塔調査区全体図

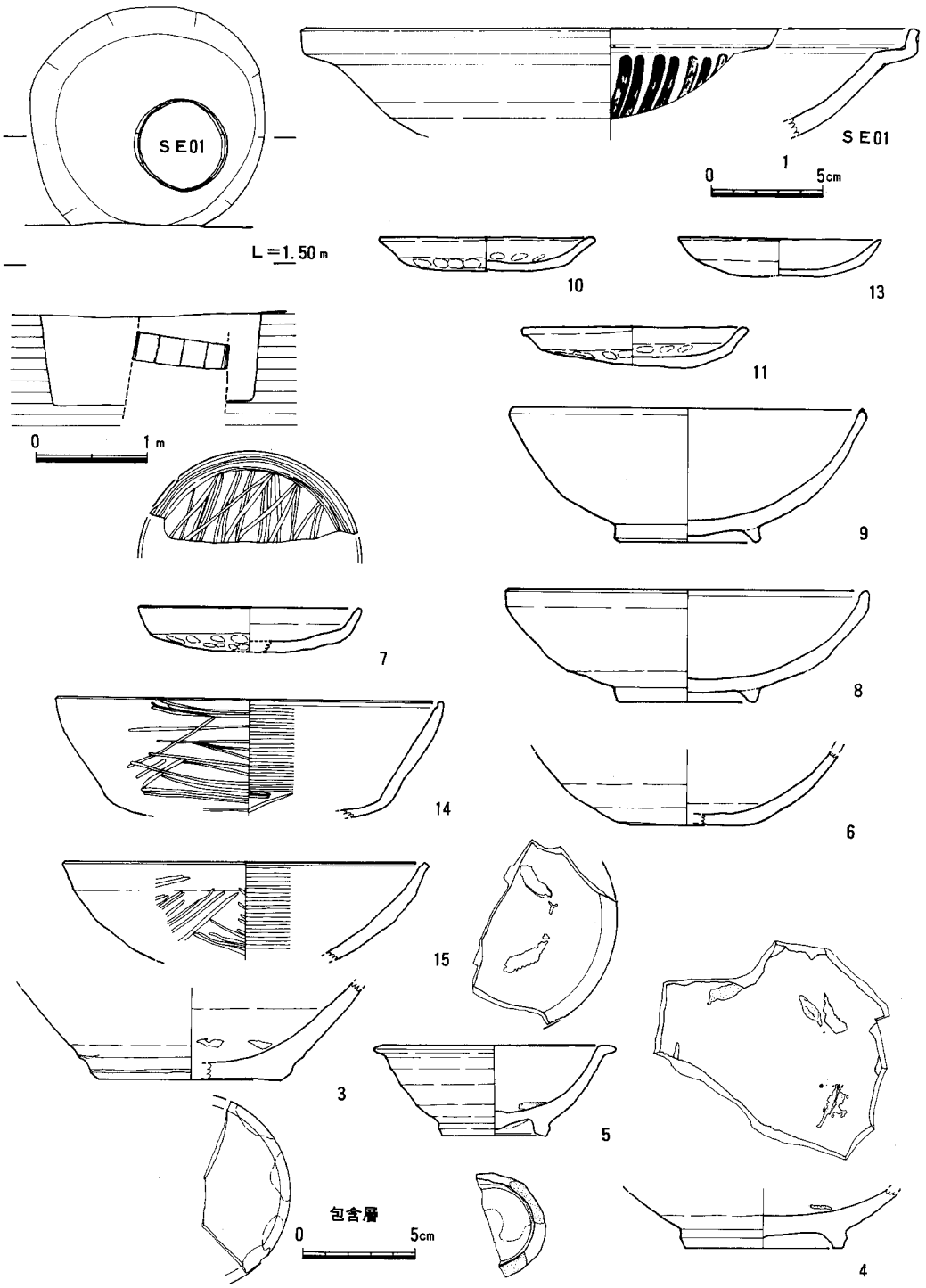


Fig.137　B換気塔出土遺物(1/3)

湊址発掘文化財品名目録(福岡県文化課蔵)」1953。「博多袖の湊遺跡出土文化財について」、『うわさ25-9～12』1953所収にまとめてある。ここでは周辺博多の調査と同様、地表下1.5 m 程は攪乱と見なし、調査に先行して覆鋼桁架け、地中梁の架設までを行い、以下を調査した。地表面の標高は3.2 m 程度である。ここでは、呉服町交差点付近で行なった呉服町駅出入口 A、B、C の各区および本体部Bトレンチの様相が異っている。標高1.5 m～0.6 m の間の調査を行なったにもかかわらず、遺物を多量含む遺構面は確認されず、また遺構も上層から黄灰色粗砂層中に掘り込まれた近世以降の井戸 2 基と平安～鎌倉期のピット 2 個が検出されただけであった。出土した遺物も遺構出土の例をのぞいて、いずれも辛うじて残された包含層である1～3層（黒褐色細砂、黒色細砂層）から出土したものである。このことは、この地点での遺物包含層および遺構は標高1.5 m 以上のところにあったことを示しており、調査以前の表土剝き取りの段階で包含層の殆んどを削平してしまったことが指摘される。地中梁を必要とする工事工法との兼ね合いで、このような結果となってしまったのは残念なことであるが、ここでの事実は呉服町交差点部における陸橋部の旧地形を理解する上で重要である。交差点西端の A・B 出入口では標高＋1.0 m 前後で溝などの生活遺構が検出され、交差点中央部に位置する本体部Bトレンチでは標高＋1.0 m で列石遺構が検出され、交差点東端に位置するC出入口では標高＋1.5 m 付近で溝、土壙などの生活遺構が営まれている。これらの遺構はいずれも12世紀初頭から後半までに位置づけられるものである。交差点を更に東に行った本体部Cトレンチでは、標高＋1 m 以下を調査したため、既に包含層は削りとられ、遺物すら検出できなかった（第7、9章参照)。B 換気塔の場合、標高＋1.5 m で包含層は殆んど削られ、痕跡程度に残すのみであった。また、C トレンチのすぐ海側、中呉服町吉田ビル駐車場の試掘調査では標高＋1.7 m 程で遺構が認められている。B 出入口の西に近接する第16調査地点では急激な落込みが確認され15世紀代以降に埋め立てられている。これらのことから、博多浜部と沖の浜とを結ぶ陸橋部は呉服町交差点西端からはじまり、東に向って高くなり、B 換気塔部との比高差は60 cm 以上を測る。残念ながらB換気塔より東側のデータがないため陸橋部幅は明確に出来ないが、現在確認できる分だけでも100 m を越し、かなり広いものであったようだ。

B 換気塔で検出した遺構と遺物について若干の説明をしておく。

SE01 (Fig. 137)　近世の井戸である。瓦組井側をもつが最下面は木桶組であり、その痕跡を残す。少量の近世陶磁に混じり龍泉窯系青磁大盤（1）が出土している。

SE02　SE01 と同様の近世井戸である。木桶組の井筒が最下位に残る。遺物は少ないが堀方粗砂中から、ローリングを受けた黒曜石製の石鏃が出土している。二次堆積によるものである。

ピット (SP01、2)　上層にあった遺構の一部が辛うじて残ったもので、瓦玉、滑石製石錘がそれぞれに出土している。平安時代末もしくは鎌倉時代初頭の遺構であろう。

遺物は辛うじて残った黒色細砂層から出土したものと、以下の二次堆積粗砂から出土したものとがある。6は粗砂層から出土した古墳時代の須恵器壺で、以外は上層の出土である。3〜5は越州窯系青磁である。10、11、13は土師器小皿でヘラ切、指頭圧痕が残る。6〜9、14、15は瓦器椀および皿である。14、15は細かい研磨が見られ、畿内の楠葉型瓦器椀と共通する。

呉服町換気塔出土主要遺物

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
00001	B区換気塔 1号土壙(井戸)	青磁	大盤
2	ピット1	瓦質	瓦玉
3	包含層	青磁	碗
4		↓	↓
5		↓	高台付皿
6		須恵器	碗
7		瓦器	皿
8		↓	碗
9		↓	↓
10		土師器	皿
11		↓	↓
12		↓	↓
13		↓	↓
14		瓦器	碗
15		↓	↓
16		↓	↓
17		土師質	土錘
18	攪乱	瓦	軒先瓦
19	↓	陶器	壺
20	ピット2	石製品	滑石製錘
21	B区換気塔攪乱	石製品	砥石

第9章　呉服町工区出入口の調査

呉服町工区本体部調査の段階で「袖の湊」の中であると推定されていた呉服町交差点内に、平安時代末期以降の遺構・遺物の存在することが明らかになり、呉服町駅舎に付設する出入口部分の調査が必要となった。交差点の四隅にA～Dの出入口が設けられることになっていたがD出入口については既に本体部および東邦生命ビル建設時に破壊されており、A～Cの調査を行なうこととした（Fig. 138）。実際の調査区は網部分である。調査は昭和56年4月1日から5月16日にかけて行なった。交通瀕繁な交差点にあり、また覆鋼面から2m程の余裕があることから、路面覆鋼、地中梁の架設を先行し、覆鋼板下で人工光に頼って発掘調査を行なった。

遺跡略号　HKT-S-5　　遺跡調査番号　8150である。以下各出入口について調査概要を述べる。

1.　A出入口の調査（Fig. 139～148）

呉服町交差点南側、博多区店屋町側角に位置する。実際の調査面積は70 m² 程度である。ここでは標高＋0.8～1.2mのところで遺構が検出されている。

SK01（Fig. 140、146）　標高0.85mのレベルで検出された礫および陶磁器等の集積遺構である。泥炭状土層が西側に向ってわずかに傾斜しており、この中に投棄されている。満潮時の最高水位にほとんど一致する。同安窯系青磁碗（1）、陶器鉢（2）、東播系の鉢（3）などが出土している。12世紀後半から13世紀前半代である。

SD01（Fig. 140、143）　浅い溝状の落ち込みで、大半は調査区外にかかり規模および性格は明確でない。大小の礫とともに多数の遺物が出土している。12世紀後半代の遺構である。

SD02（Fig. 141、144）　標高1.2～1.3m程で検出された溝である。人頭大の礫と杭、板を用いて土留めを行なっている。土留板は網代編になっている。本来的には更に深かったものであり、板や杭も上半部を欠失している。この溝中の覆土と検出面上面には全体に泥炭状土層がかぶっており、下駄、板草履等の木製品が多数含まれていた。34は古相の龍泉窯系青磁で外底に墨書をもつ。32は高麗青磁、36は花押墨書をもつ白磁碗である。12世紀半ばの遺構である。

SD03（Fig. 140、144）　標高0.9m付近で検出した溝である。人頭大礫を杭、板を用いて土留を行なう。ここではSD02と異なり、横板を土留に用いている。直角に曲る部分も見られる。礫を土留の補強に用いている。泥炭状土が溝内にはあり有機物の遺存状態が良好である。ここでは溝中から同形の同安窯系青磁碗が4個体まとまって出土している（45～48）。42は薄胎の青白磁碗である。12世紀後半代の遺構である。

SD04、05（Fig. 142、145）　標高1.0mのレベルで検出されている。SD05は人頭大礫を杭、板を用いて土留した溝で、SD04はこれに直交する杭列である。SD05の土留板は縦に用いられている。溝の中と上面には泥炭状の土が堆積し、木製品、陶磁器等多量の遺物が出土して

いる。図示した遺物は49が白磁碗Ⅸ類で、50は古相をもつ龍泉窯系青磁碗である。SD04 では滑石製の鍋も出土している。いずれも12世紀後半代の遺構である。

包含層からも多くの遺物が出土しており、表および図に示すとおりである。78は白磁八角杯で内底に 4 ケ所の目跡を残す。77は枢府タイプの白磁碗で内面に陽文があり、「府」の一部かと思われる文字も見える。140は白磁平皿で内底に印花文を施し、「正」の文字が見える。80は土師質の蛸壺。168は中国製天目碗であるが釉は赤褐色を呈す。317は瀬戸のおろし目皿である。墨書のある陶磁も多数あり（Fig. 148)、122は「鄭□」の中国人姓が読める白磁碗、163は「＋」の数字が記された龍泉窯系青磁碗である。

2. B 出入口の調査（Fig. 149～157）

呉服町交差点西側、博多区綱場町側の角に位置する。実際の調査面積は約90 m² である。中間杭を境に 2 回に分けて調査した。標高＋1.0 m 付近で 3 条の溝、5 基の井戸、4 基の土壙、ピット群を検出した。以上主な遺構、遺物の概略を述べる。

SK01（Fig. 151、152）　調査区西隅で検出された廃棄物処理土壙であるが全体のプランは不明。双魚文の印文を施した龍泉窯系青磁Ⅲ類碗（176）や陶器 B 群皿などが出土している。13世紀後半か14世紀初頭にかけての遺構である。

SK09（Fig. 152）　調査区東端で検出された浅い落ち込み状の遺構である。廃棄物処理に用いられたものであろうか。ほぼ12世紀後半代に位置づけられる。182は龍泉窯系青磁碗で、高台内に、SK10 の184と共通する墨書が記されるが判読できない。

SK10（Fig. 152）　浅い不明確な落ち込みで性格は明確でない。12世紀後半代の遺物が多い。墨書のある青磁 4 点があるが、図示したのは184のみで、他は判読できない。

SK11（Fig. 152）　12世紀後半代の土壙である。遺物は少量で性格不明。186の白磁碗には仮名様の文字が墨書されている。

SD01（Fig. 151、152）　標高0.9 m で検出されている。幅40 cm 程のせまい溝で北から西に 20° 程偏る。東側の壁は長い横板と杭とによって土留されている。南端は収束しているように見えるが本来は上半部もあって南に延びていたものと思われる。遺物は少ない。12世紀後半から13世紀にかけてのものか。SD02、03 もほぼ同様の時期である。

泥炭状土を含む包含層から多数の遺物が出土しており、主要なものは表および図に示した通りである。Fig. 153の271・2は瀬戸おろし目皿、蓋。193～202は徳化窯系の白磁で、193には「＋」、194には「上－」の墨書がある。203、204、300は枢府タイプの白磁である。Fig. 155の227は龍泉窯系青磁皿であるが内外底に目跡が見られる。245は高麗末もしくは李朝初期の青磁八角杯である。Fig. 156 の213は仮文字墨書をもつ皿。248～250は中国製天目碗で、248には体部下半の露胎部に墨書が見られる。246、247は李朝粉青沙器で白い象嵌が見られる。252は黄と

緑の二彩を施した陶器で外面に印花文がある。明代のものか。

3．C出入口の調査（Fig. 158～178）

呉服町交差点北側、博多区中呉服町側の出入口である。標高1.5 m 程のところで多くの遺構が検出できた。18基の井戸、3条の溝、11基の土壙、ピット群などである。ここでは第7章、第8章でも触れたように、陸橋部分が東側に向って高まってゆくことが確認でき、A、B出入口より遺構面のレベルは50～60 cm 程度高くなっている。

井戸（Fig. 161、165～167）は平安末期から近代にまで及ぶ。**SE01** は方形板組で16世紀末から17世紀。**SE02** は木桶組で16世紀末。**SE03** は上に瓦と板を用い、下段に木桶を用いた近世初頭。**SE04** は木桶組の近世井戸で、土錘も出土。**SE05** は木桶組で近世初頭か。**SE06** は13世紀代の木桶組で石錘が出土。**SE07** は木桶組で13世紀後半代か、龍泉窯双魚文鉢（391）や磁州窯系白釉片などがある。**SE08** は12世紀代か。本体部は不明。**SE09** は本件部不明である。「て」の字口縁の土師皿がある。12世紀後半代。**SE10～12** は近代井戸。**SE13、14** は近世井戸であるが掘方から多量の中世遺物が出土している。**SE15** は近世井戸で木桶を2段階以上重ねるが、上部には瓦を組んだと思われる。**SE16** は木桶を2段以上組む近世井戸で、掘方から中世遺物が多数出土する。**SE17** は方形板組井戸で13世紀代か。**SE18** は近世木桶組井戸である。

SD03（Fig. 160、168、169）さ幅70～90 cm 程の浅い溝で、ほぼ南北を向く。泥炭状の土が埋り多数の遺物が出土している。ここでは糸切土師皿、青磁は含まれず、12世紀初頭の遺構である。瓦器椀が多く見られる。陸橋部最古の遺構の一つである。**SD01** も直交する方向をもつが時期は不明、**SD02**（Fig. 167）は12世紀後半代の溝で、主軸は北から約20°西に偏る。

SK02（Fig. 162）は土壙墓で12世紀後半代に位置づけられる。主軸はほぼ南北に向く。

SK03（Fig. 162、163）は木棺墓である。棺釘の位置から1.3×0.5 m の木棺が想定でき、主軸は北を向く。頭位西側に副葬遺物がまとまっている。12世紀後半に位置づけられる。

SK07（Fig. 160）は中世末もしくは近世初頭の木棺墓で、SD03 を切る。主軸は北を向く。明代の染付片が出土している。

SK11（Fig. 164）は SD02 のなだらかな壁斜面に龍泉窯青磁碗（8個体）と魚文皿（3個体）がまとまって出土したもので明確なプランは認められず、墓の副葬品ではない。碗は2枚づつ重ね、皿も3枚が重ねて伏せられている。箱詰めにしたものがそのまま埋没したような印象をもつ。青磁碗の文様も429と428の2つのパターンだけである。

この他、多数の遺物が出土しているが、誌面の都合上詳しく紹介することができない。図と表を参照願いたい。

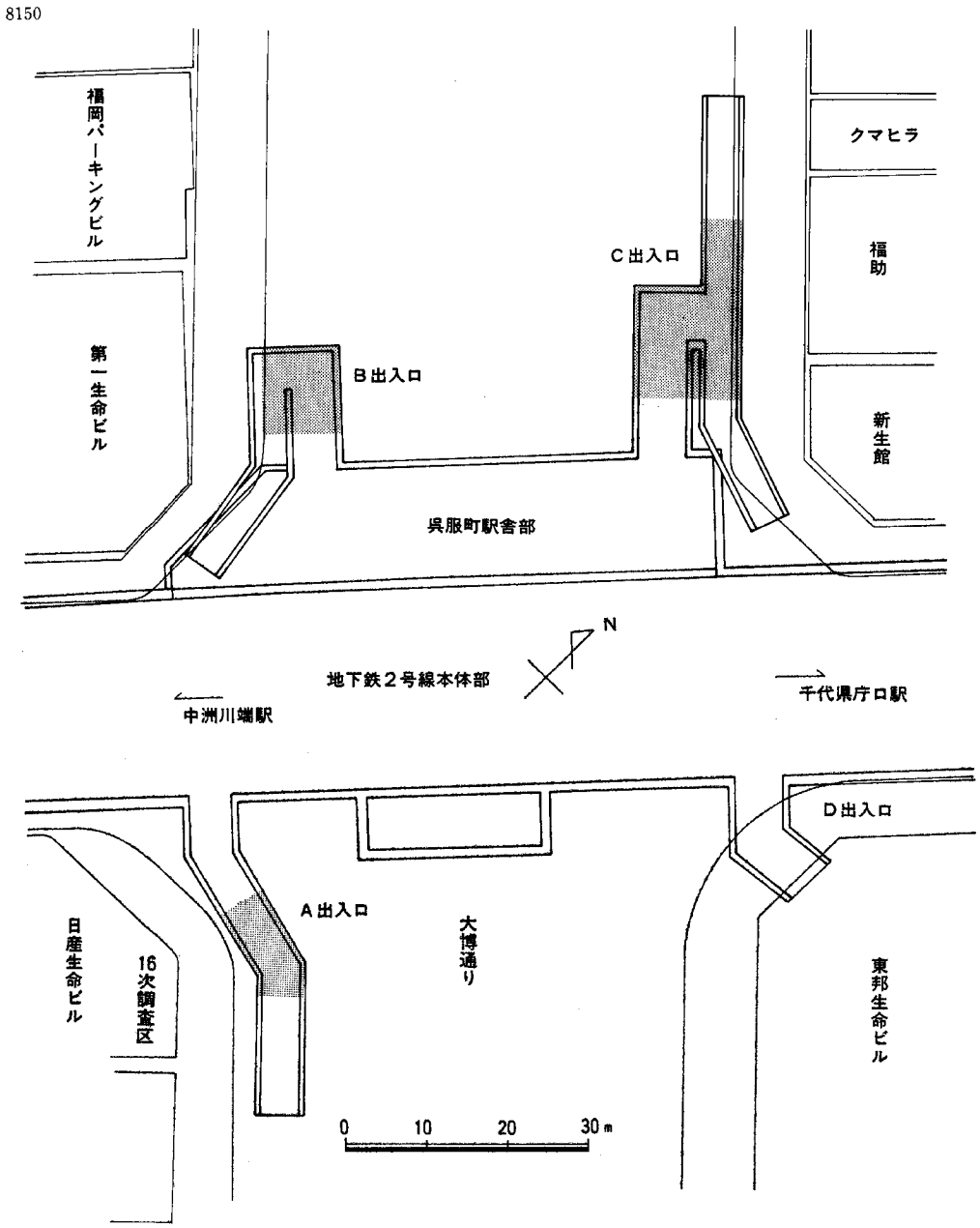


Fig.138 呉服町工区 出入口調査地点

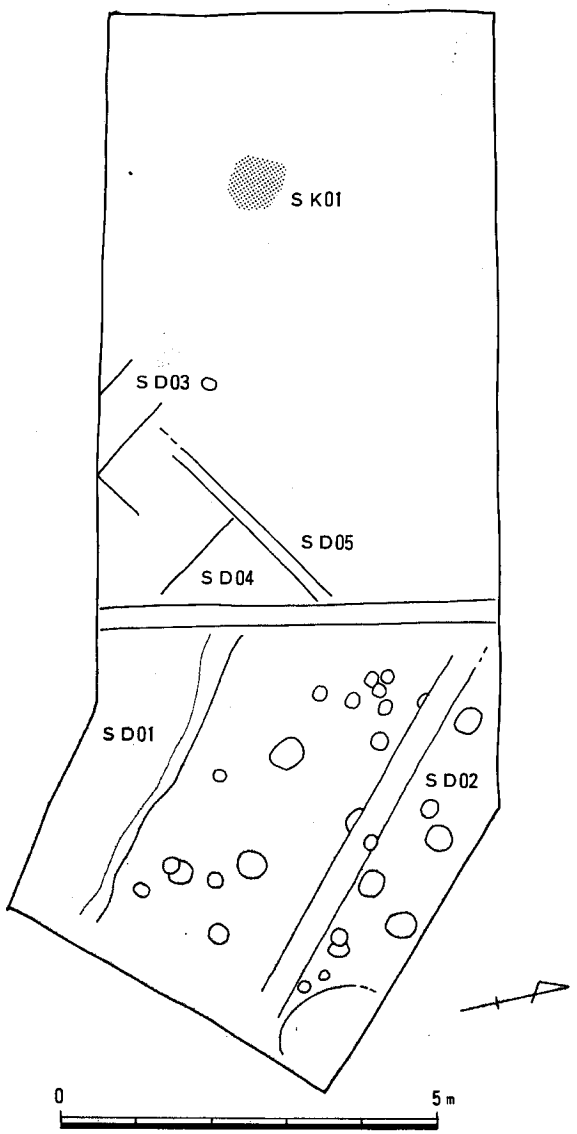


Fig.139　呉服町工区Ａ出入口遺構全体図

8150

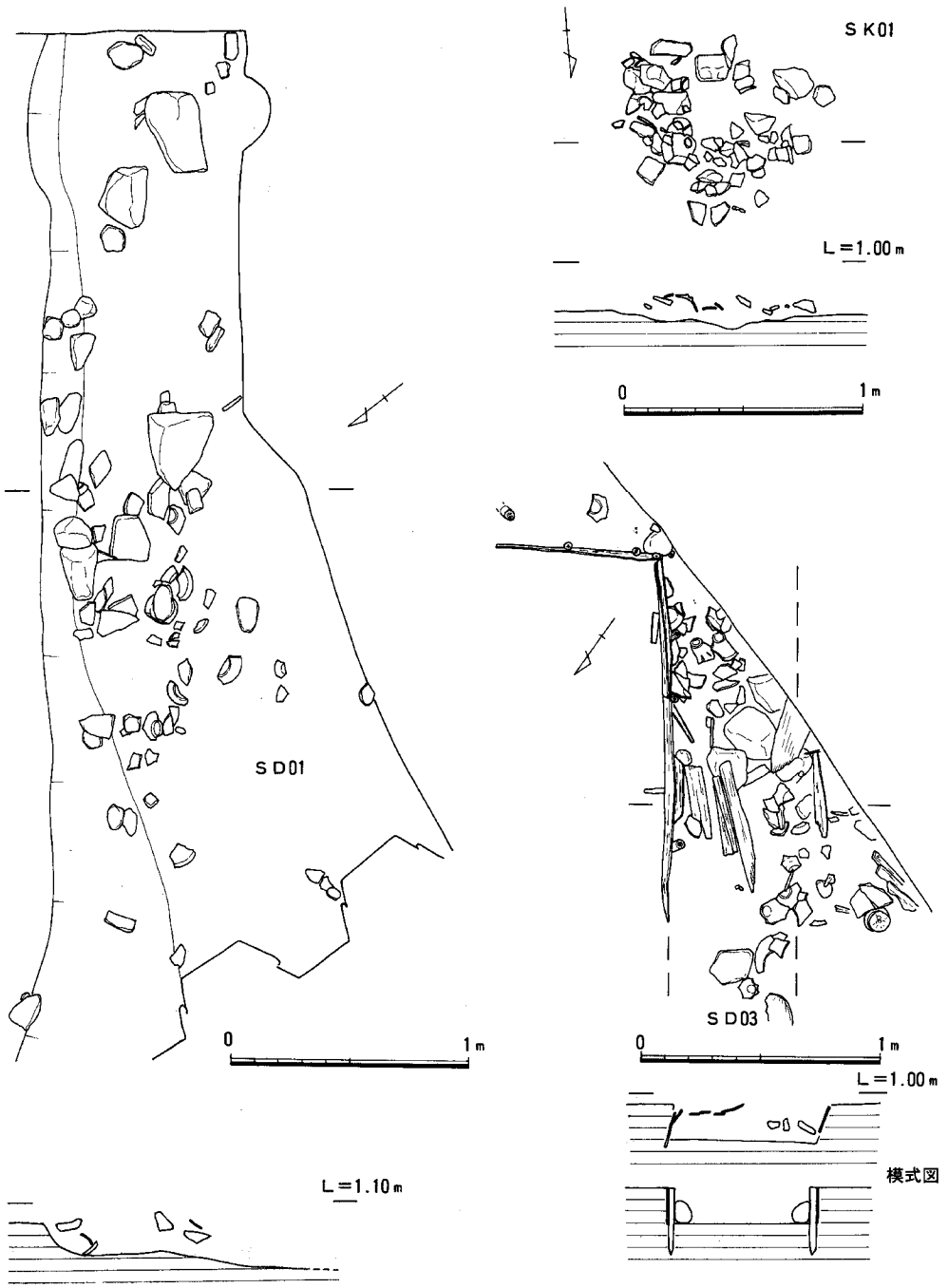


Fig.140 A出入口SK01,SD01,SD03

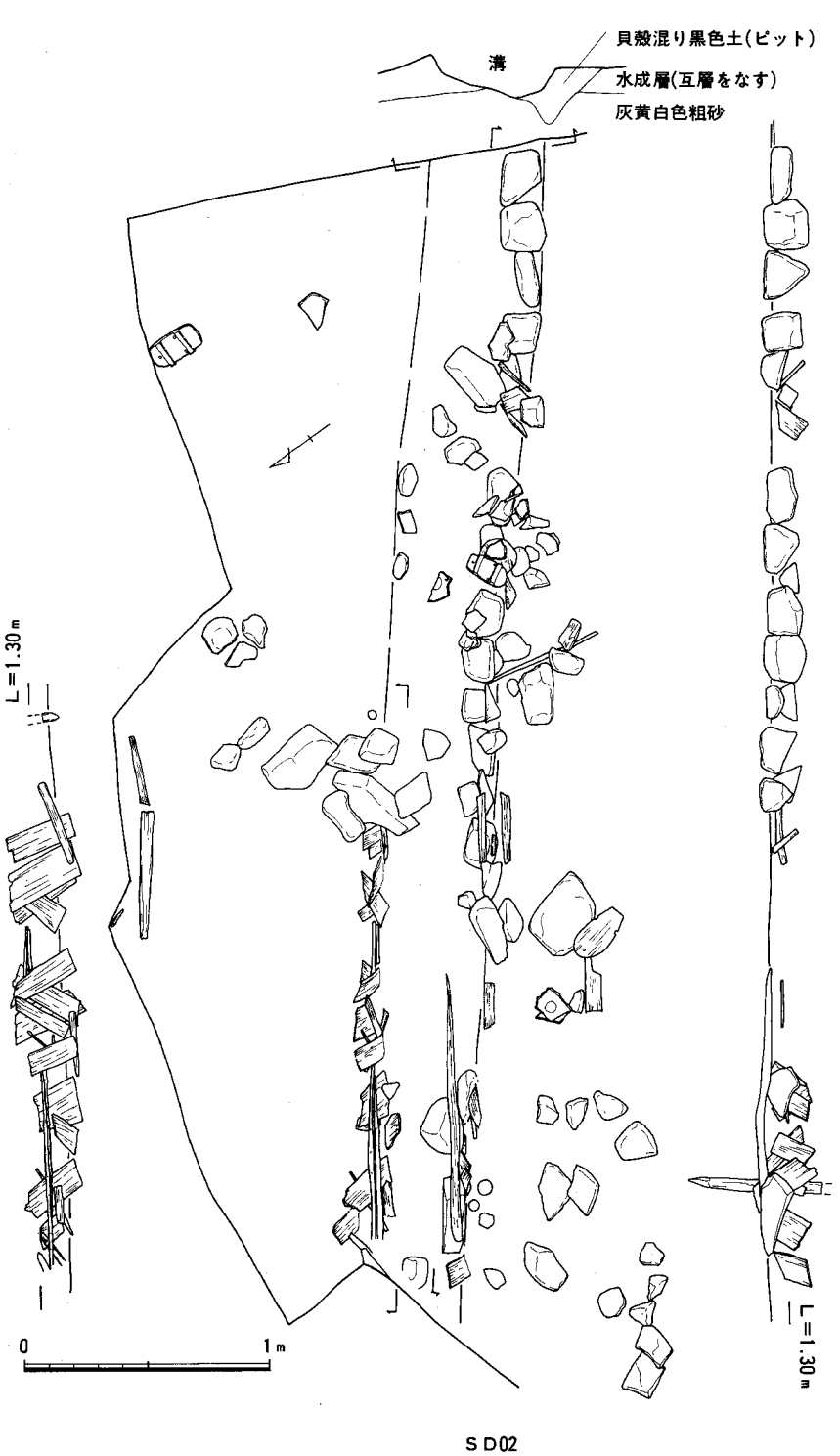


Fig.141 A出入口 SD01

8150

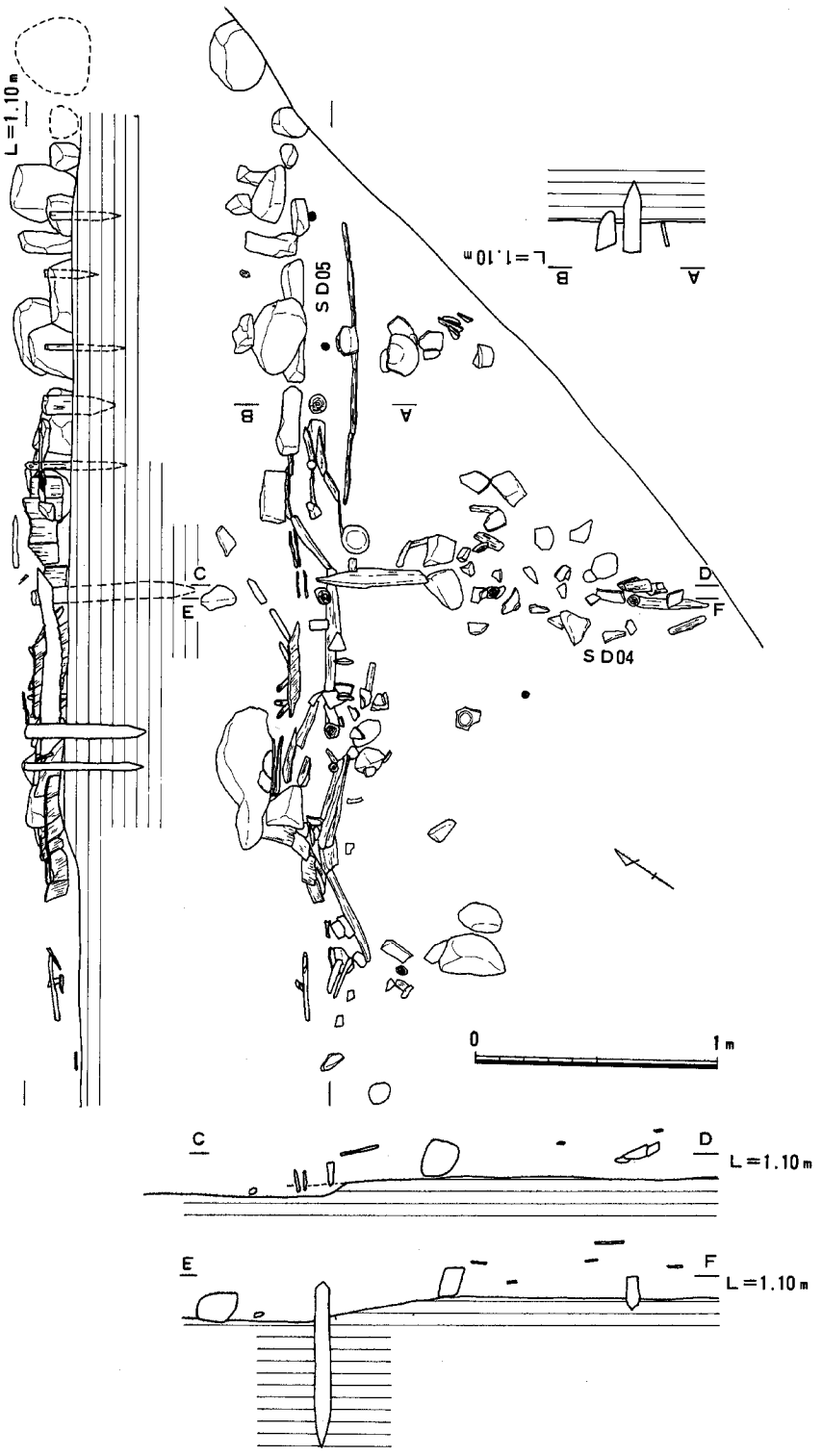


Fig.142 A出入口 SD04,SD05

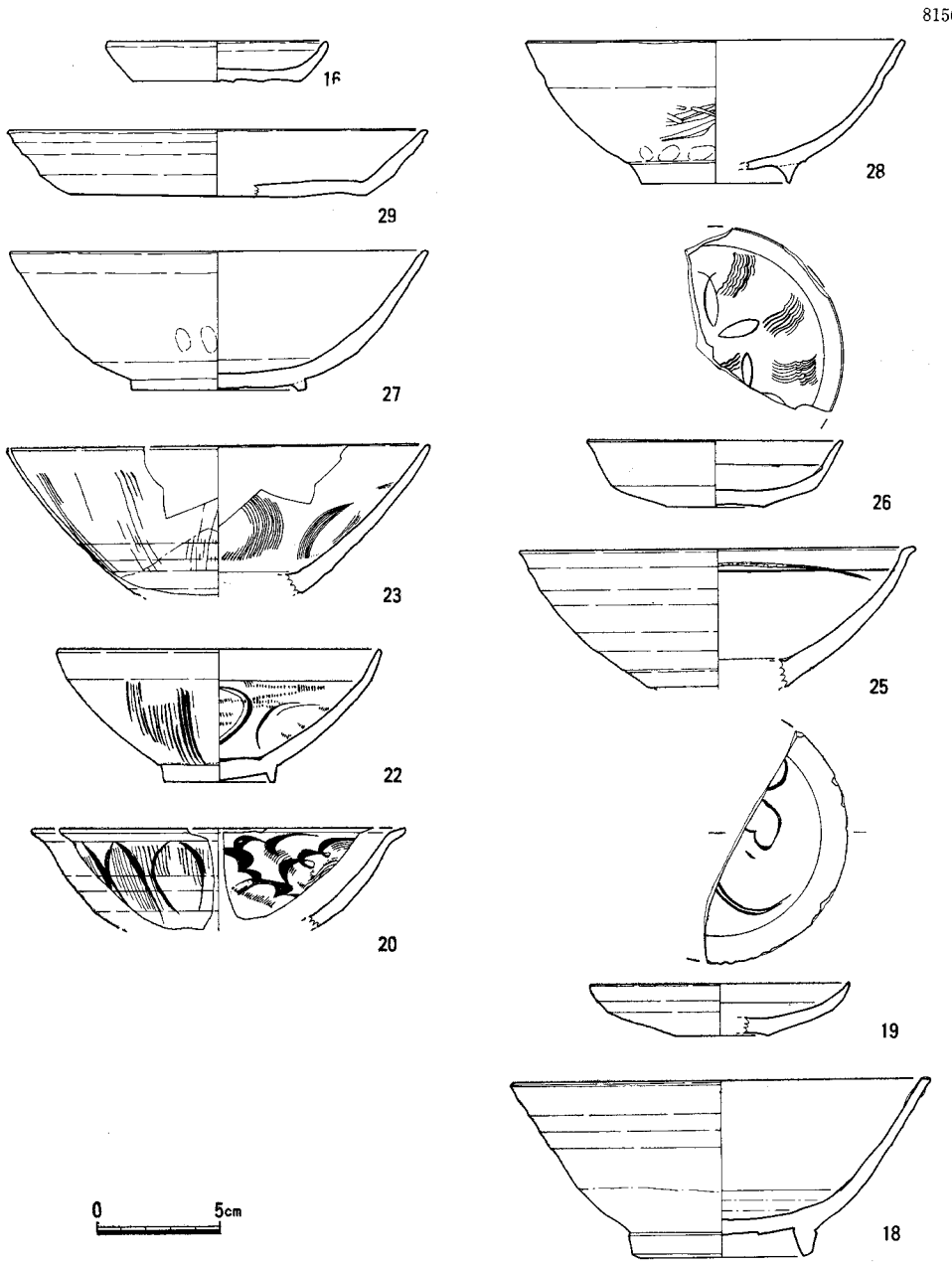


Fig.143 A出入口 SD01出土遺物(1/3)

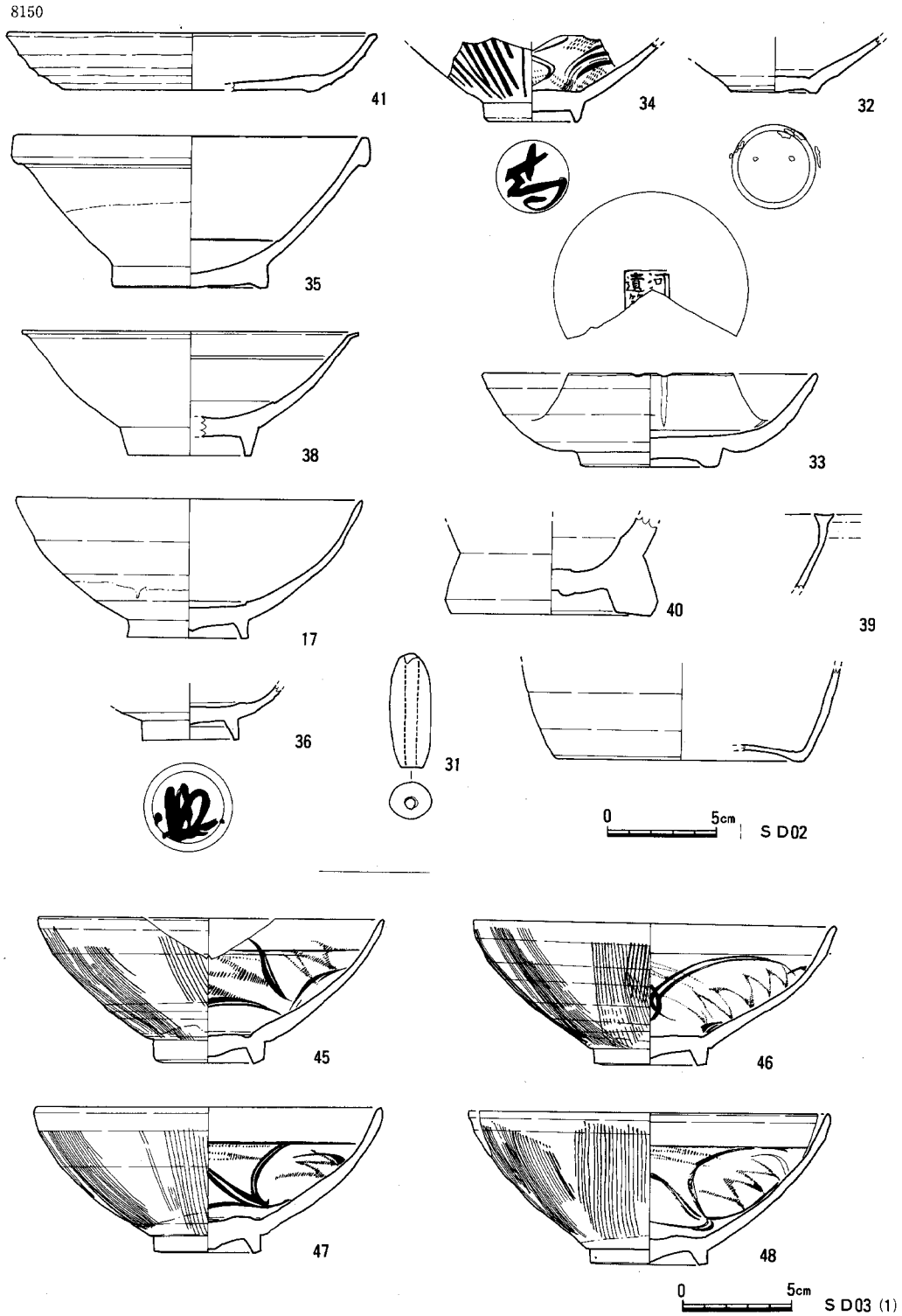


Fig.144 A出入口 SD02出土遺物とSD03出土遺物(1)(1/3)

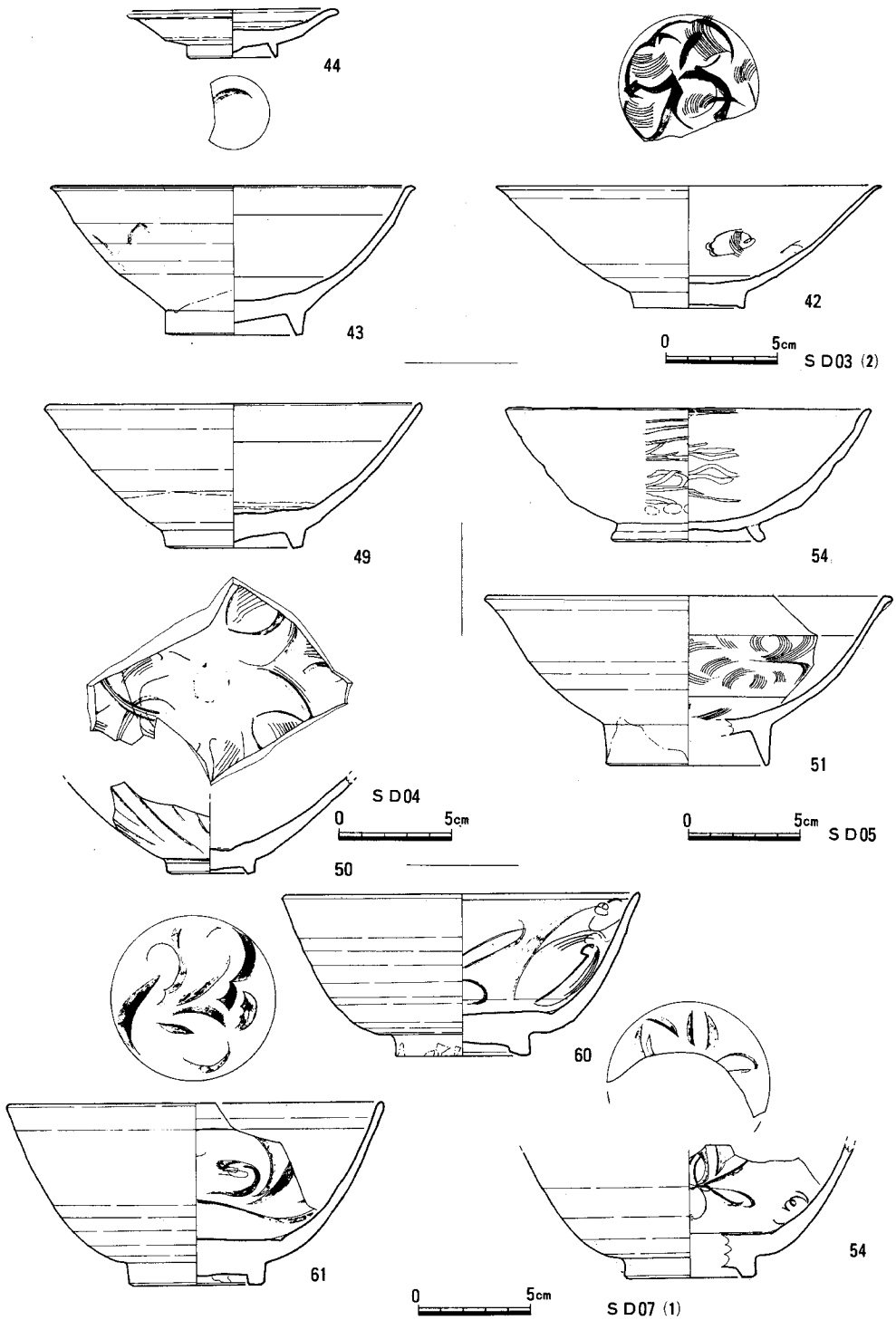
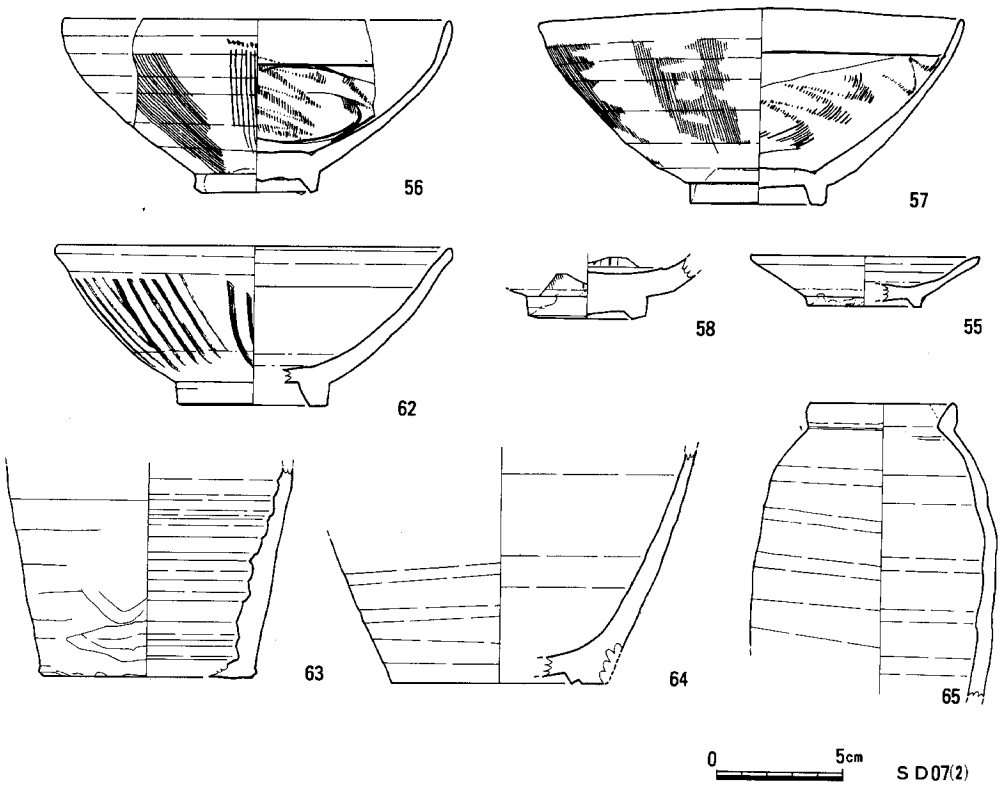


Fig.145 A出入口 SD03,SD04,SD05出土遺物とSD07出土遺物(1)(1/3)

8150



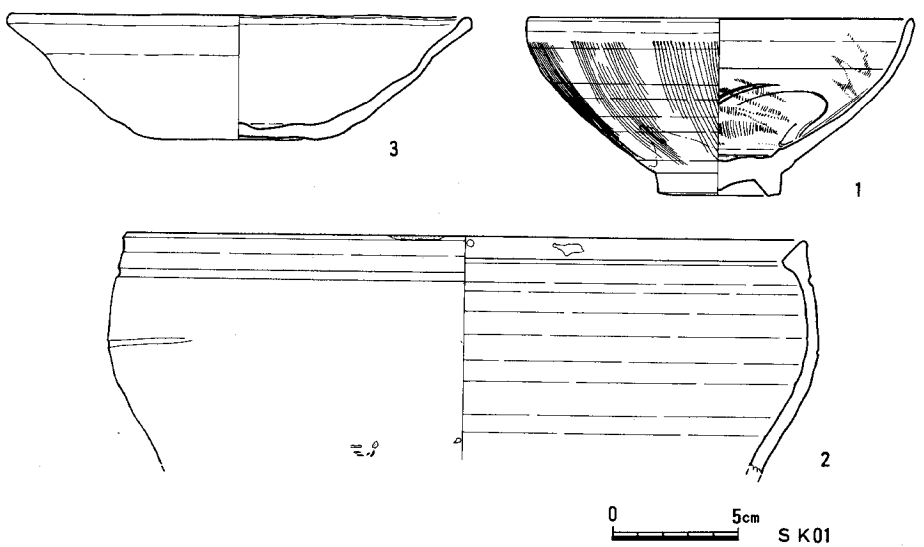


Fig.146 A出入口 SD07出土遺物(2)とSK01出土遺物(1/3)

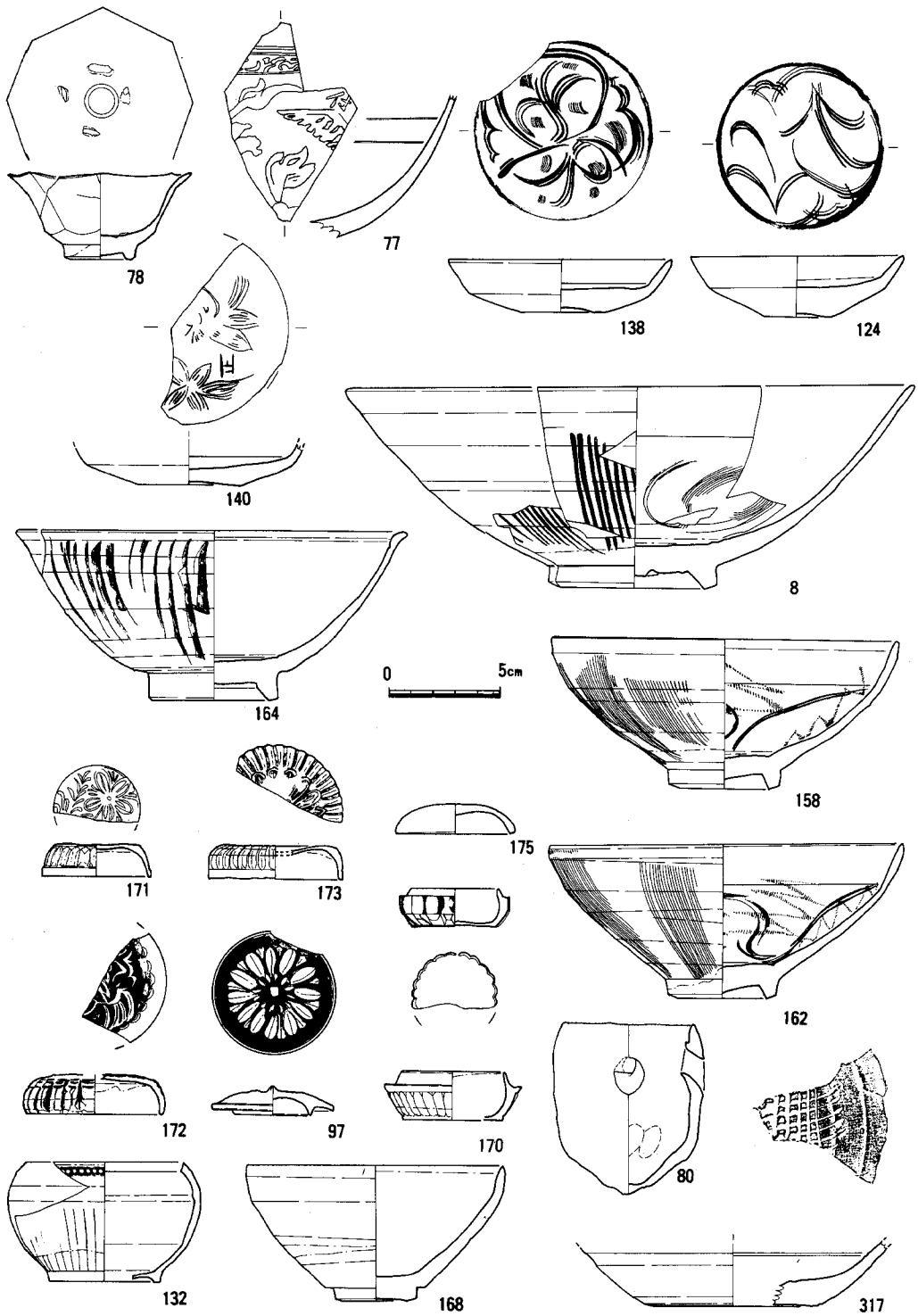


Fig.147 A出入口 遺構外出土遺物(1)(1/3)

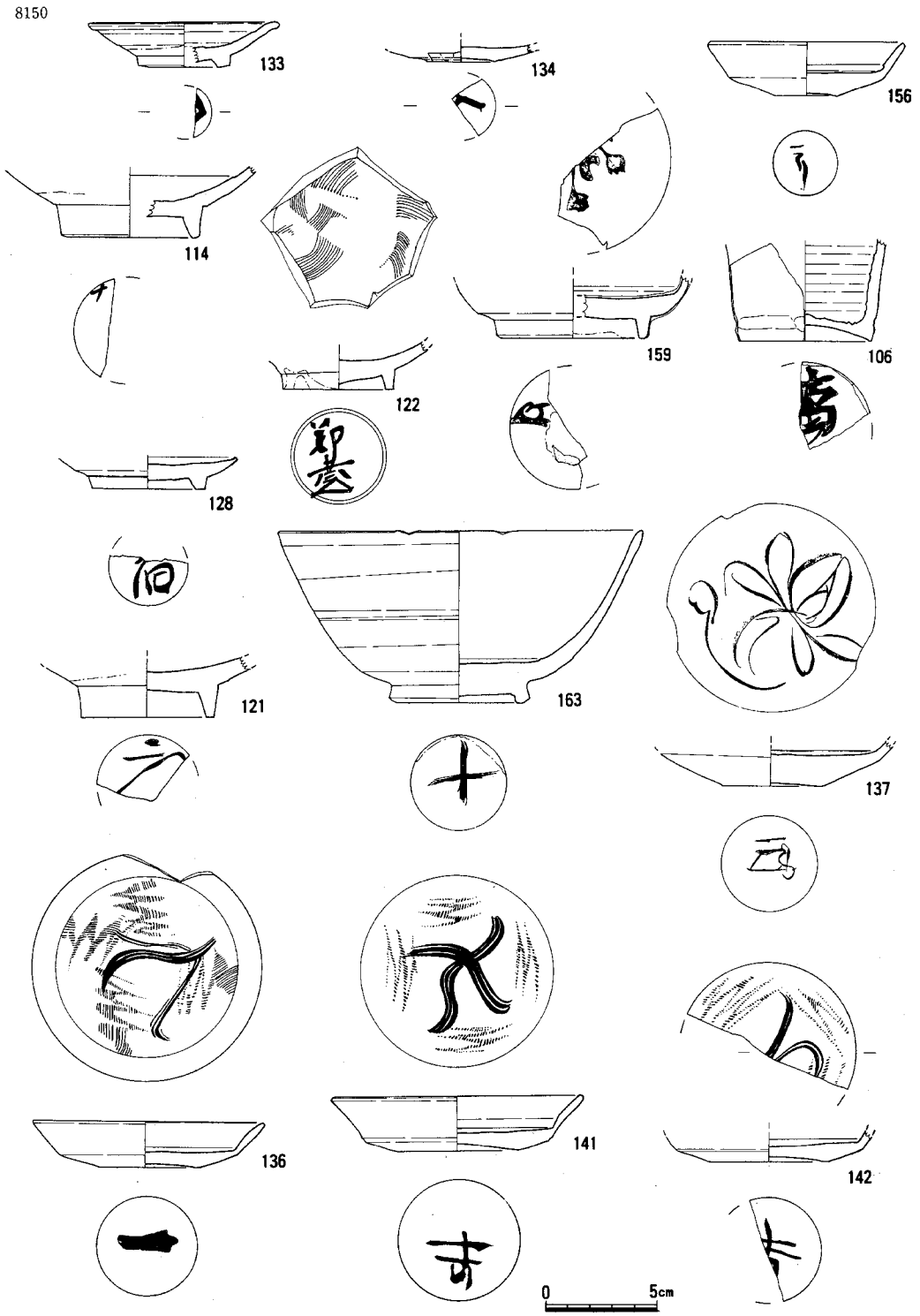


Fig.148 A出入口 遺構外出土遺物(2)(1/3)

1.褐色砂層　粒子細かく粘性多少あり
2.茶褐色砂層　粒子粗く粘性なし
3.黄褐色砂層　粒子粗く粘性なし
4.黄褐色砂層　粒子細かく粘性あり
5.暗褐色砂層　粒子細かく粘性あり
6.黒褐色砂層　粒子細かく粘性あり
7.黒褐色砂層　粒子細かく粘性あり
カーボン片あり
8.茶褐色砂層　粒子細かく粘性なし
9.黄褐色砂層　粒子粗く粘性なし
10.茶褐色砂層　粒子粗く粘性なし
土器片含む
11.茶褐色砂層　粒子細かく粘性あり
カーボン層あり
12.黄褐色砂層　粒子細かく粘性なし
13.明茶褐色砂層　粒子細かく粘性あり
カーボン層あり
14.茶褐色砂層　粒子細かく粘性あり
15.暗褐色砂層　粒子細かく粘性多少あり
カーボン、土器片含む

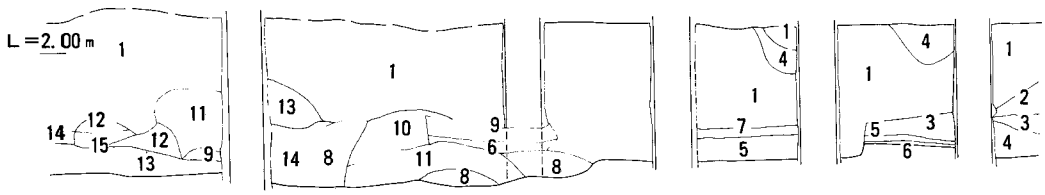


Fig.149 B出入口土層図（1/60）

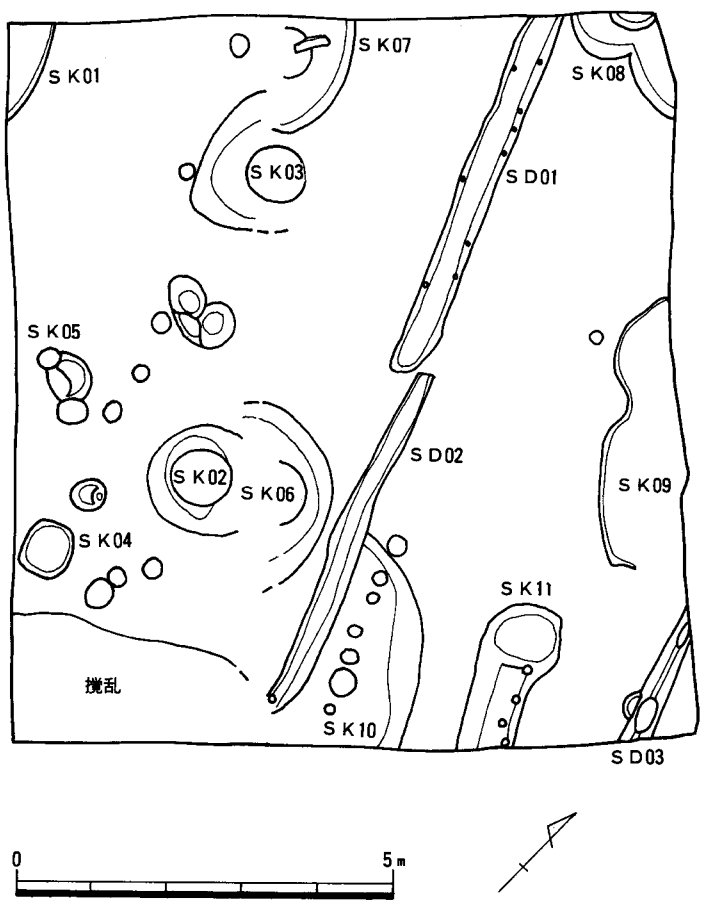


Fig.150 B出入口遺構全体図

8150

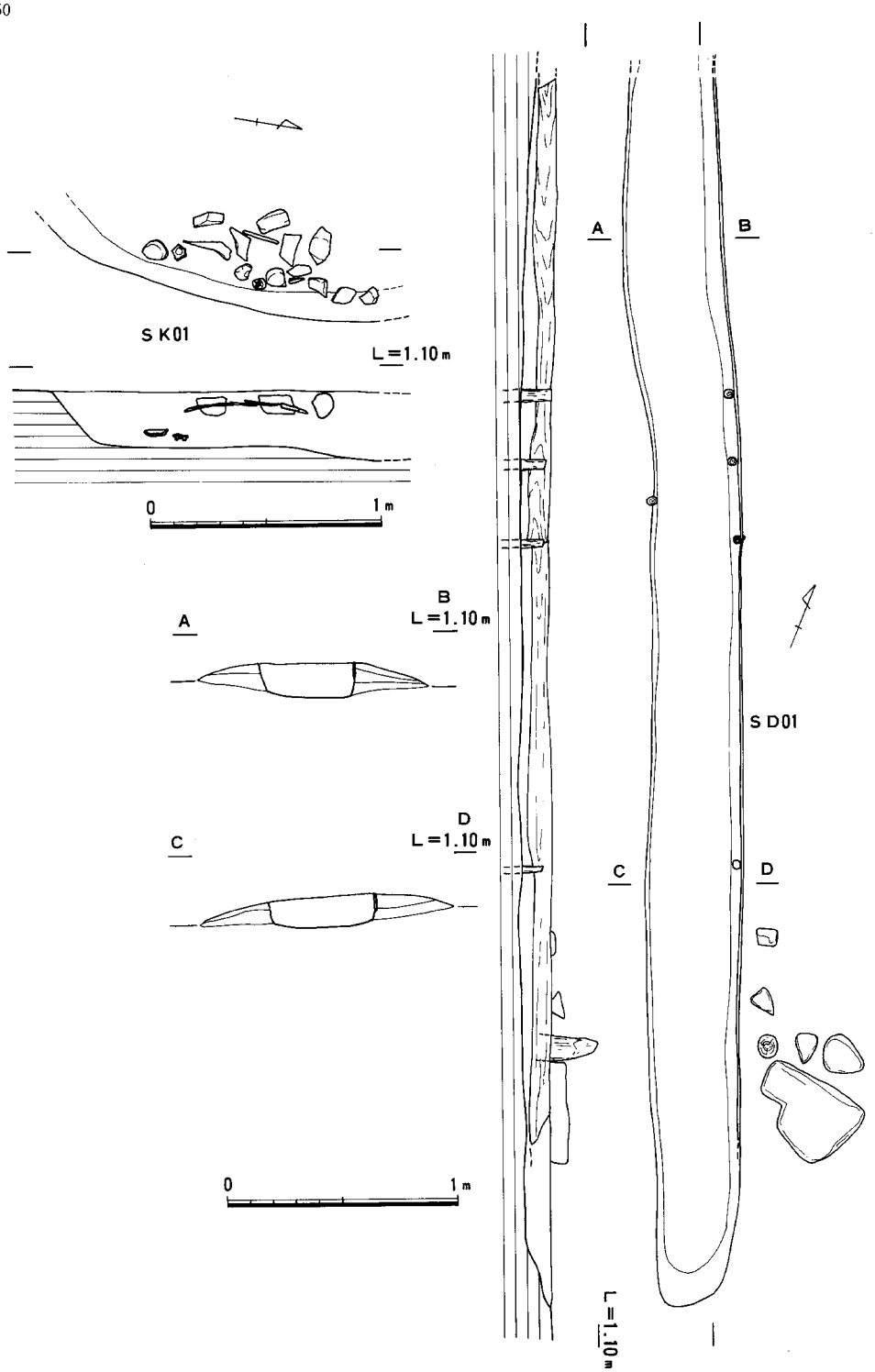


Fig.151 B出入口　SK01,SD01

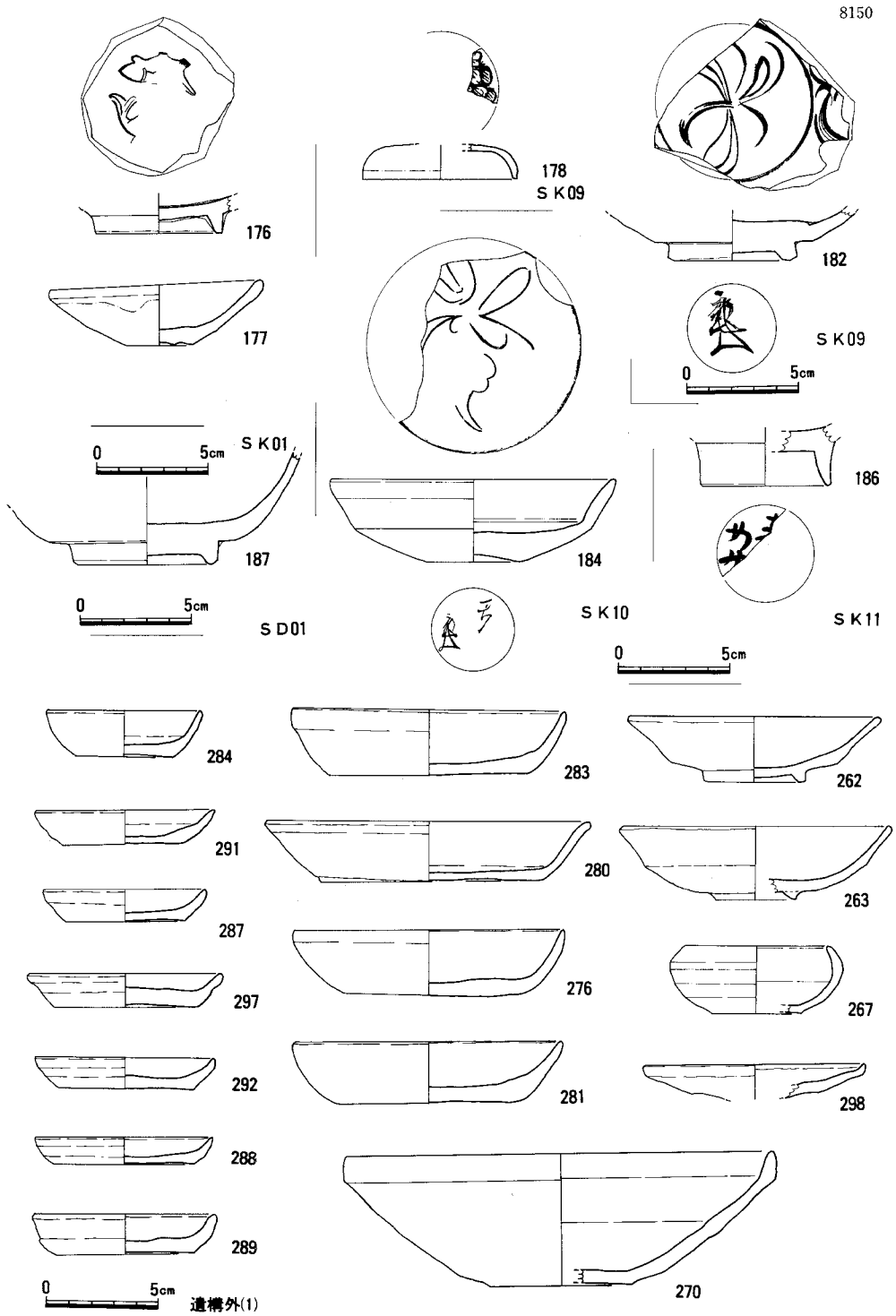


Fig.152 B出入口 SK01,SK09,SK10,SK11,SD01出土遺物と遺構外(包含層)出土遺物(1) (1/3)

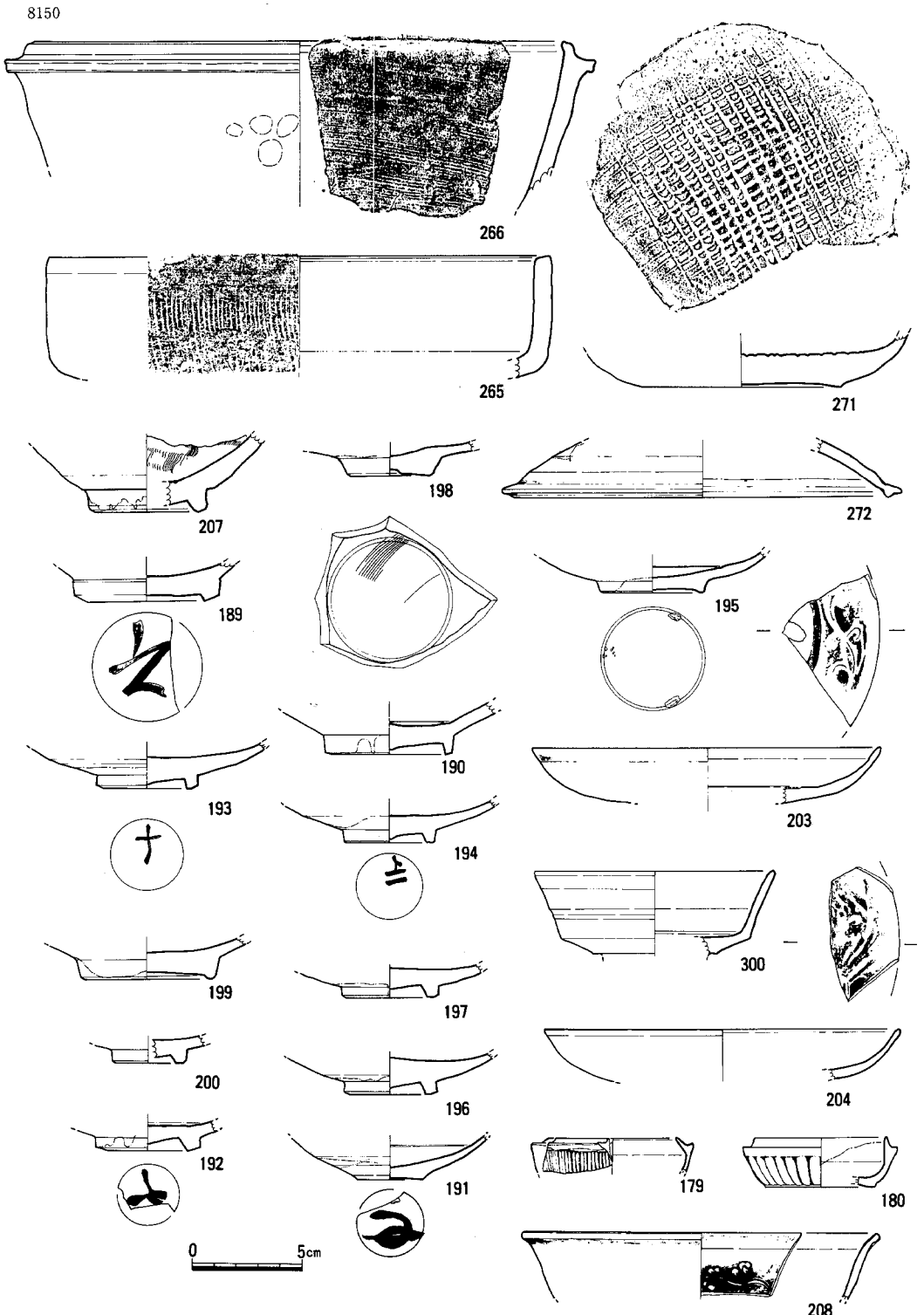


Fig.153 B出入口 遺構外(包含層)出土遺物(2)(1/3)

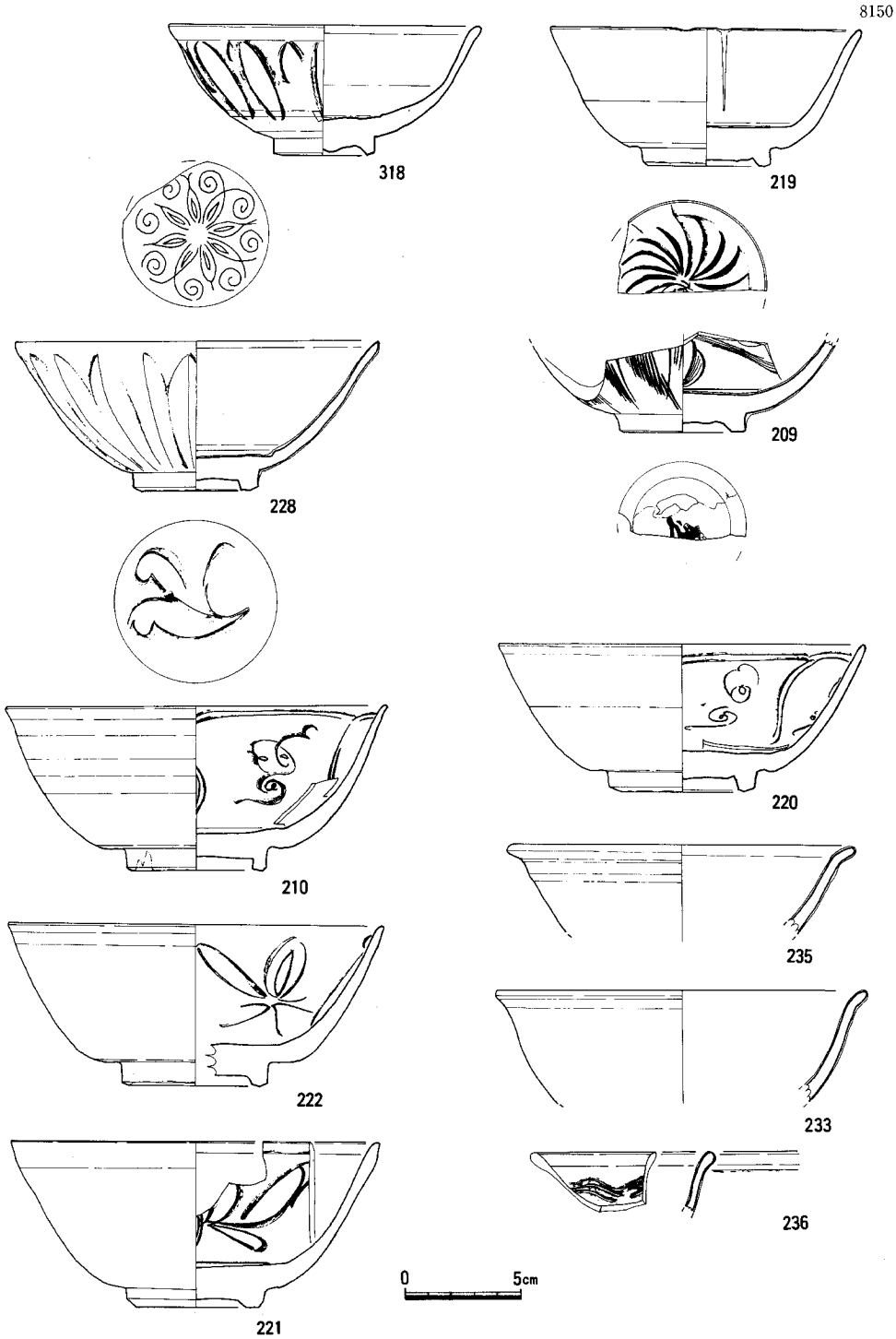


Fig.154 B出入口 遺構外(包含層)出土遺物(3)(1/3)

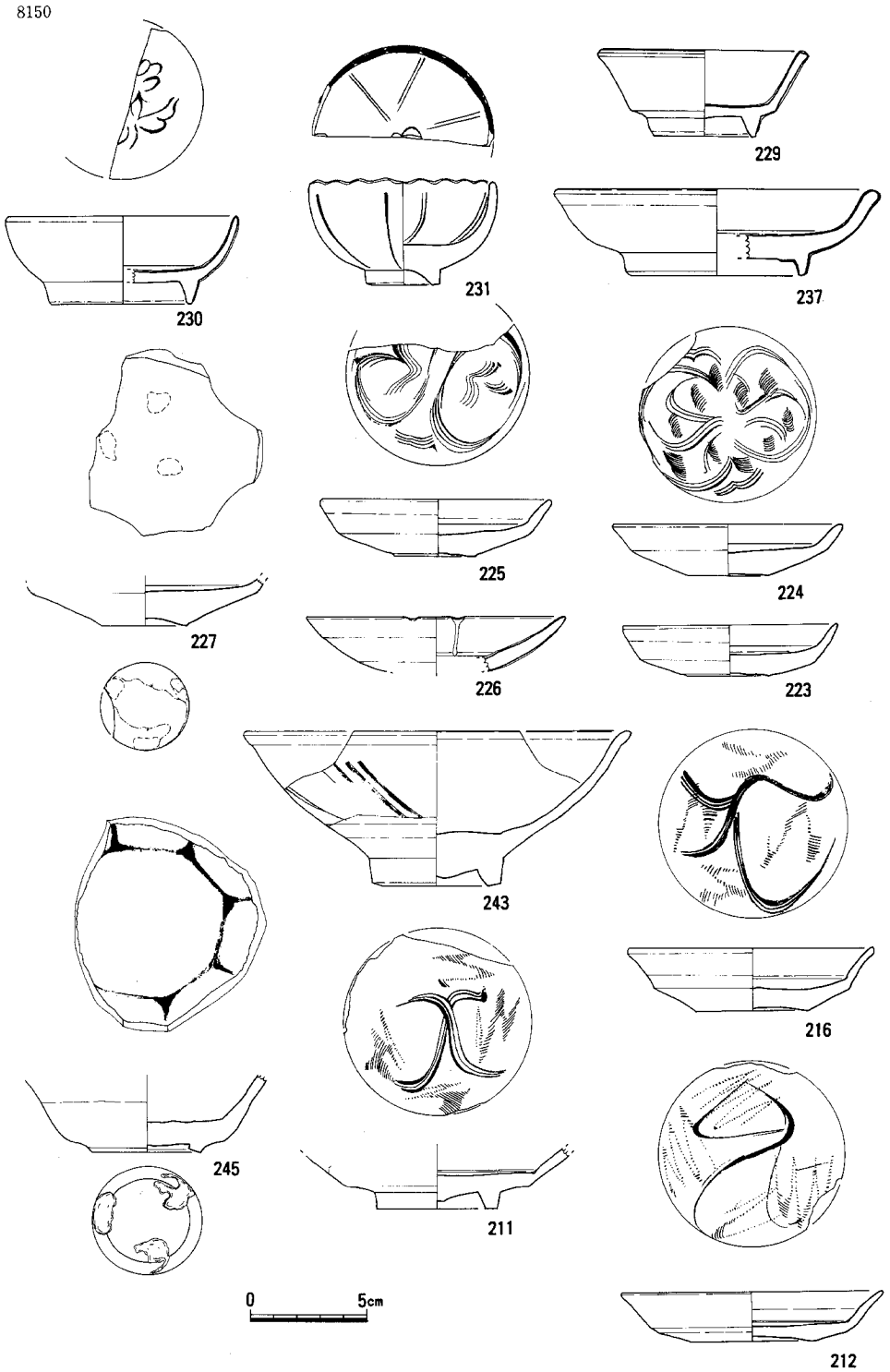


Fig.155 B出入口 遺構外(包含層)出土遺物(4)(1/3)

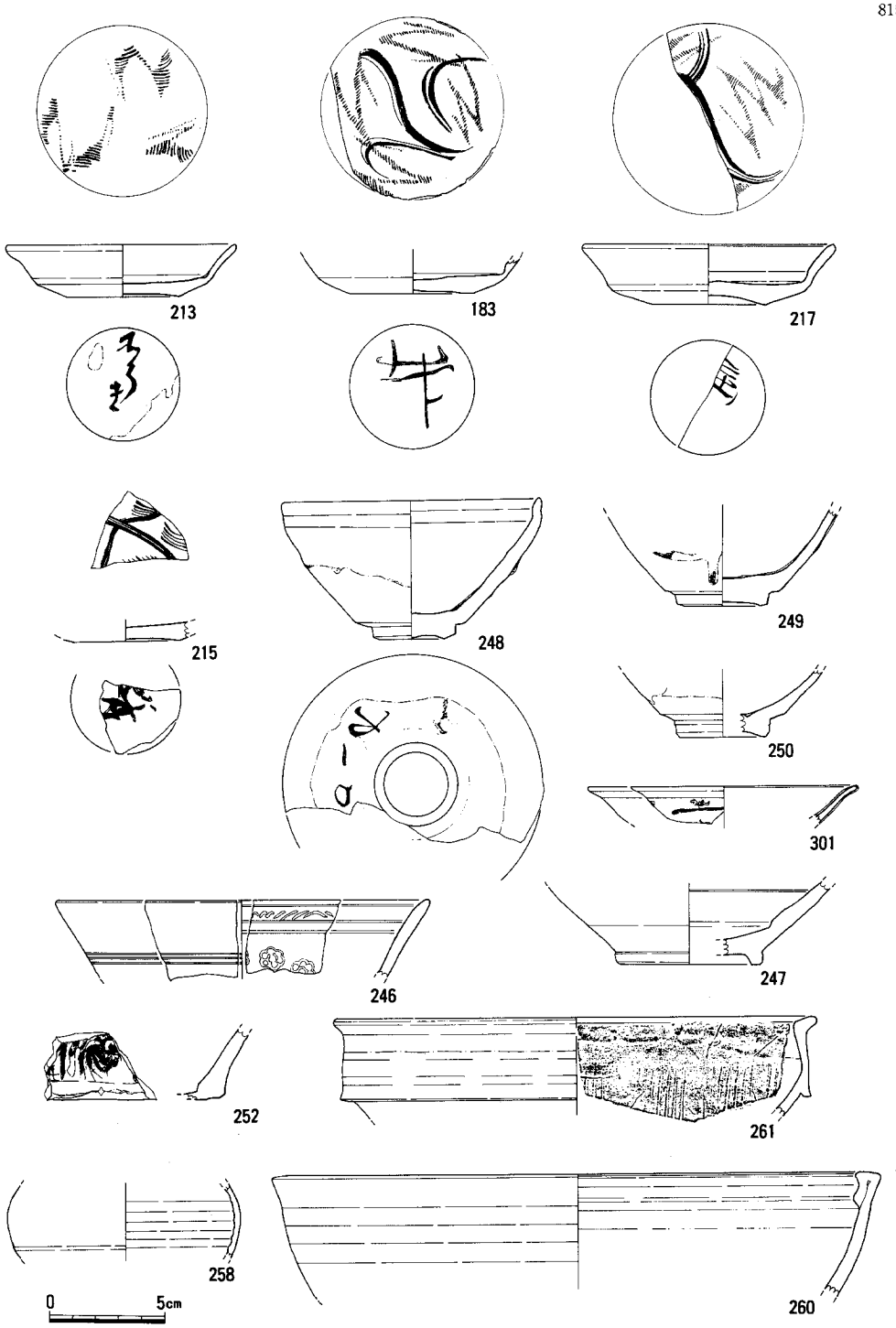


Fig.156 B出入口 遺構外(包含層)出土遺物(5)(1/3)

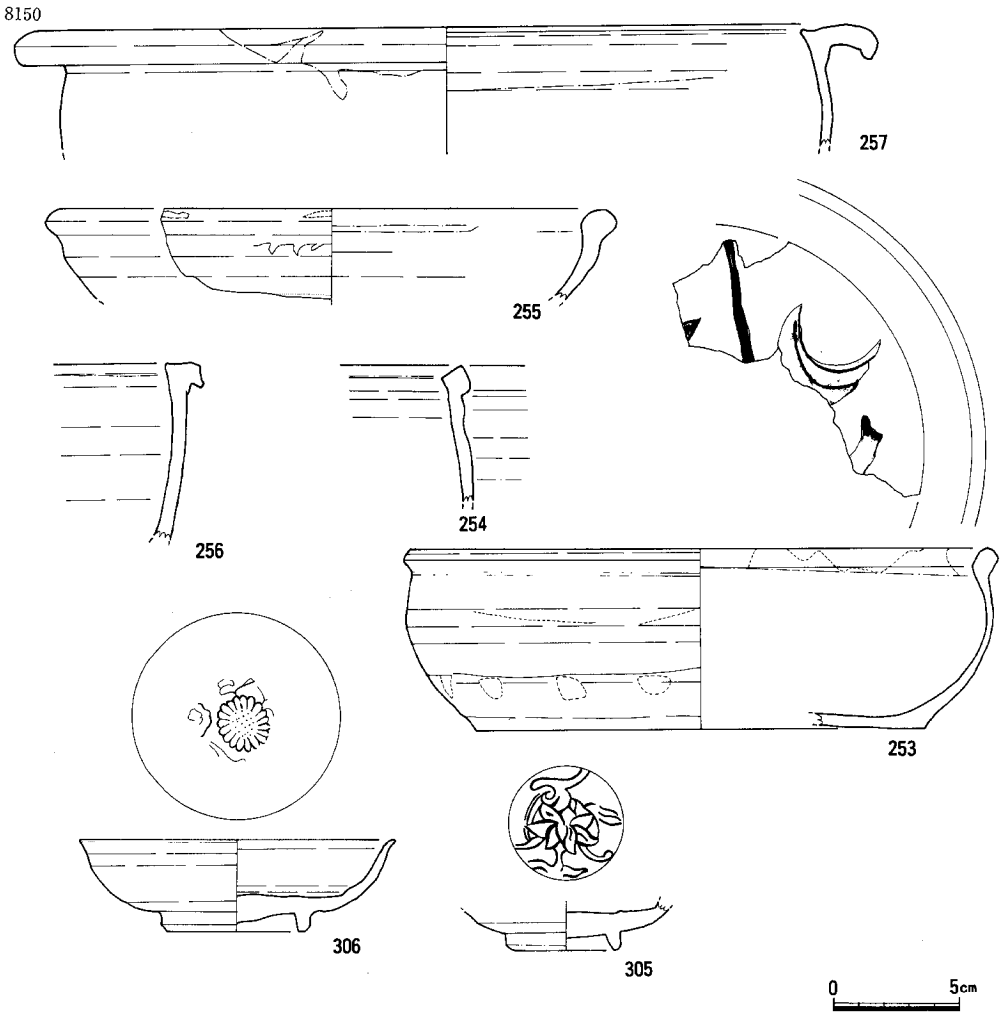
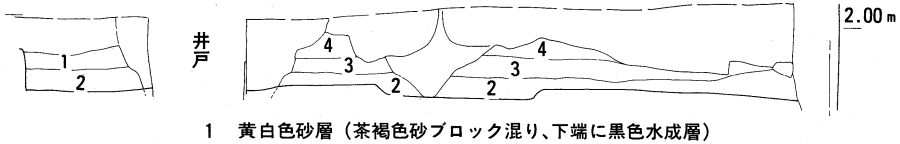


Fig.157 B出入口 遺構外(包含層)出土遺物(6)(1/3)

Fig.158 呉服町工区C出入口遺構全体図(1/100)



1 黄白色砂層（茶褐色砂ブロック混り、下端に黒色水成層）
2 灰色砂と灰褐砂との互層（水成層）
3 灰色砂と黄白色砂との互層（水成層）
4 黄白色砂とうすい灰砂、黄色砂（酸化鉄）

Fig.159 C出入口 西壁土層断面図 (1/60)

8150

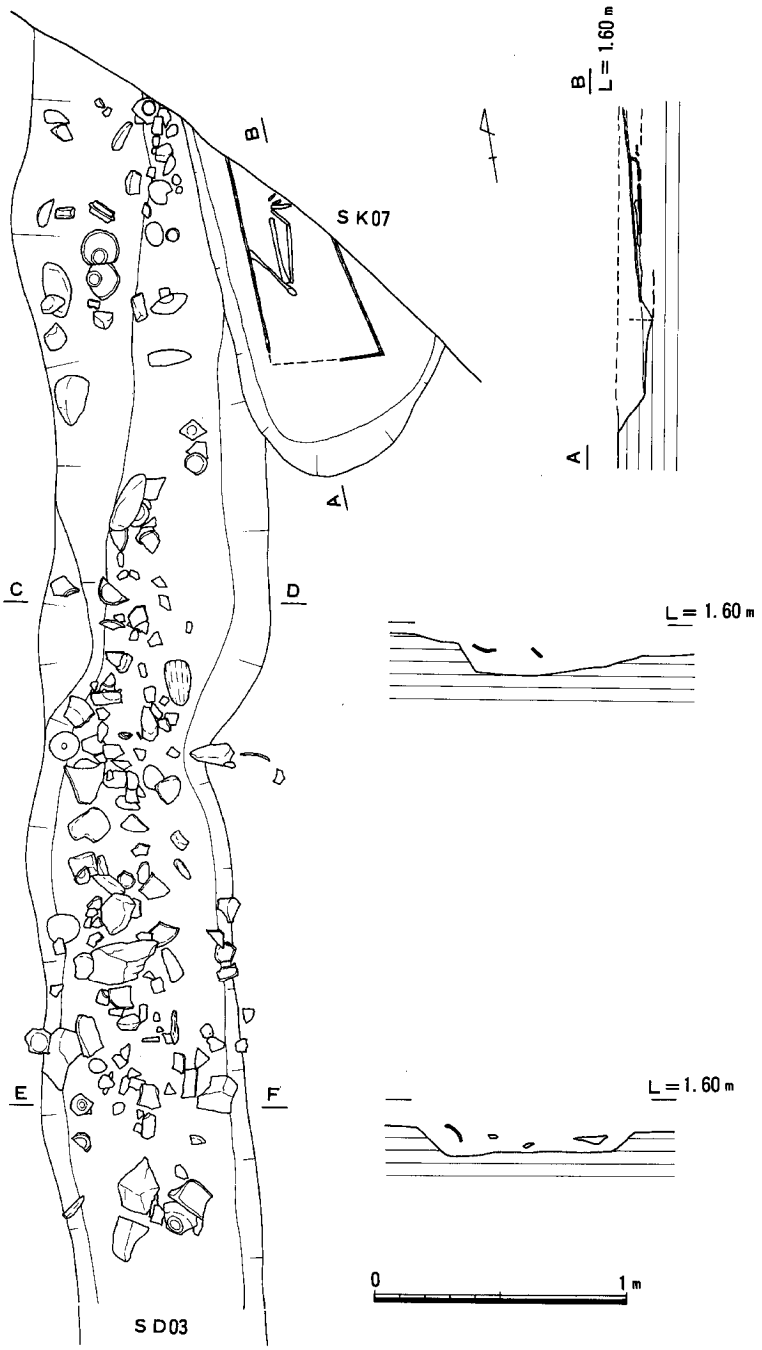


Fig.160 C出入口 SD03

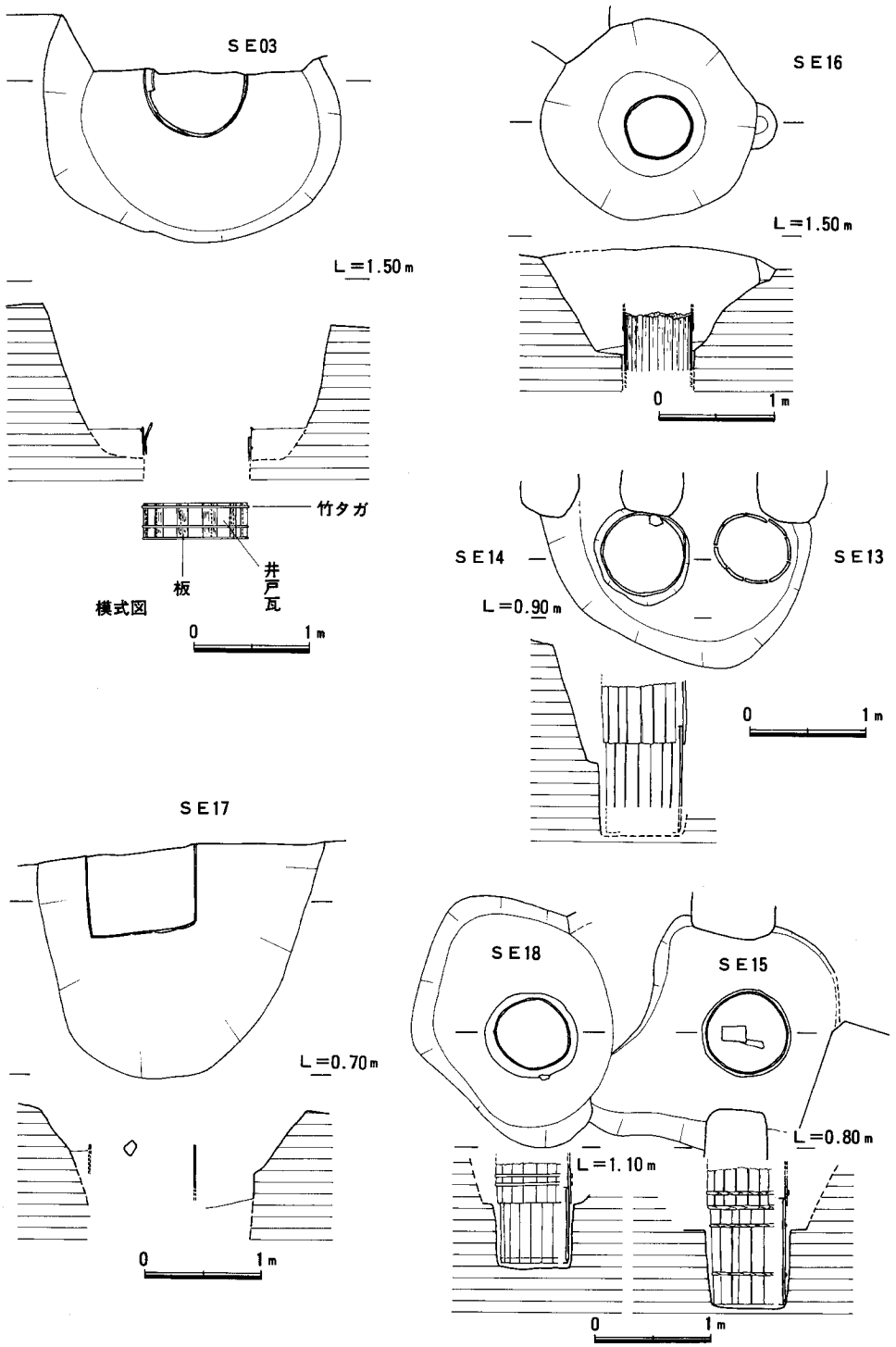


Fig.161 C出入口 SE03,SE13,SE14,SE15,SE16,SE17,SE18

8150

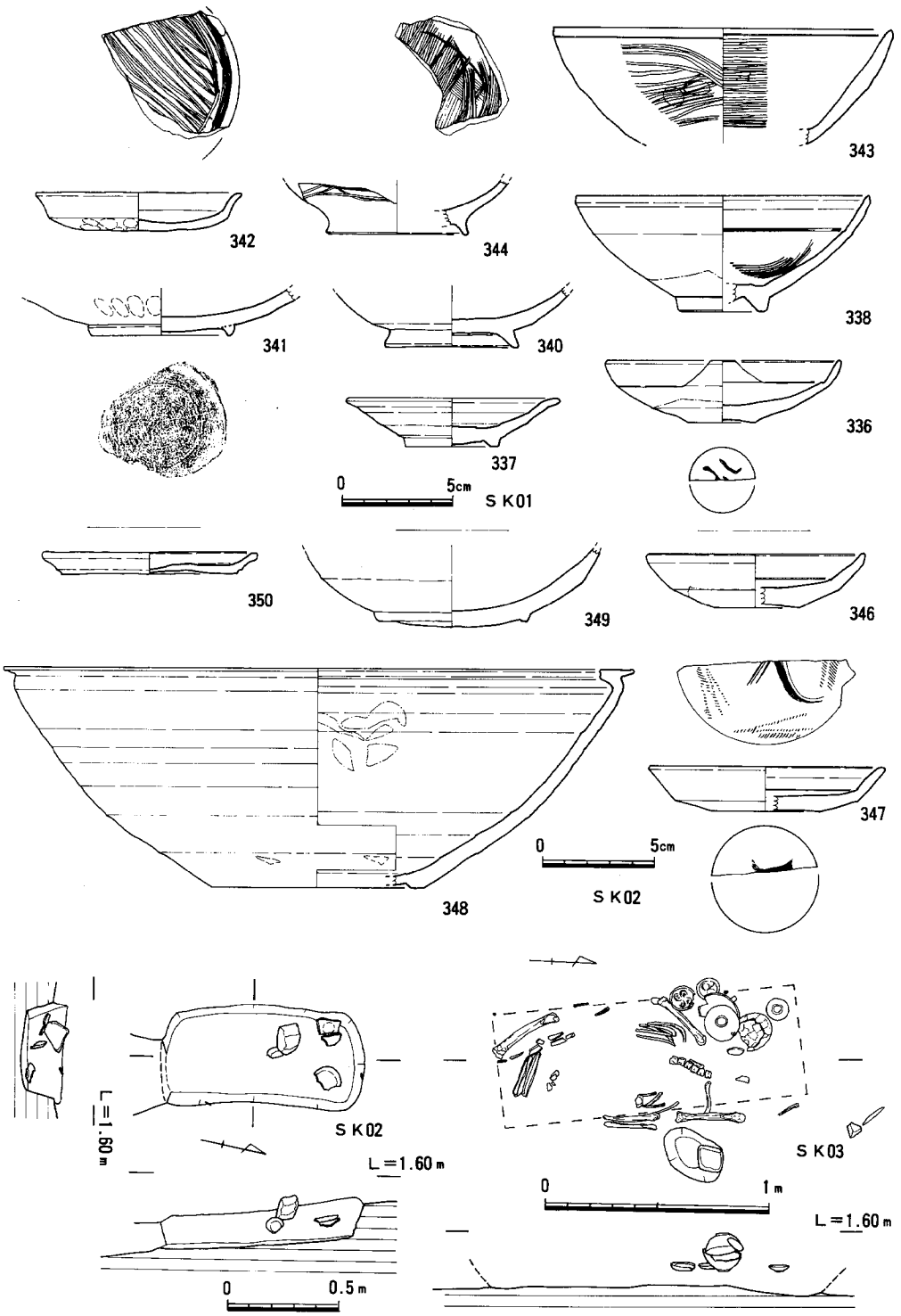


Fig.162 C出入口 SK02,SK03とSK01,SK02出土遺物(1/3)

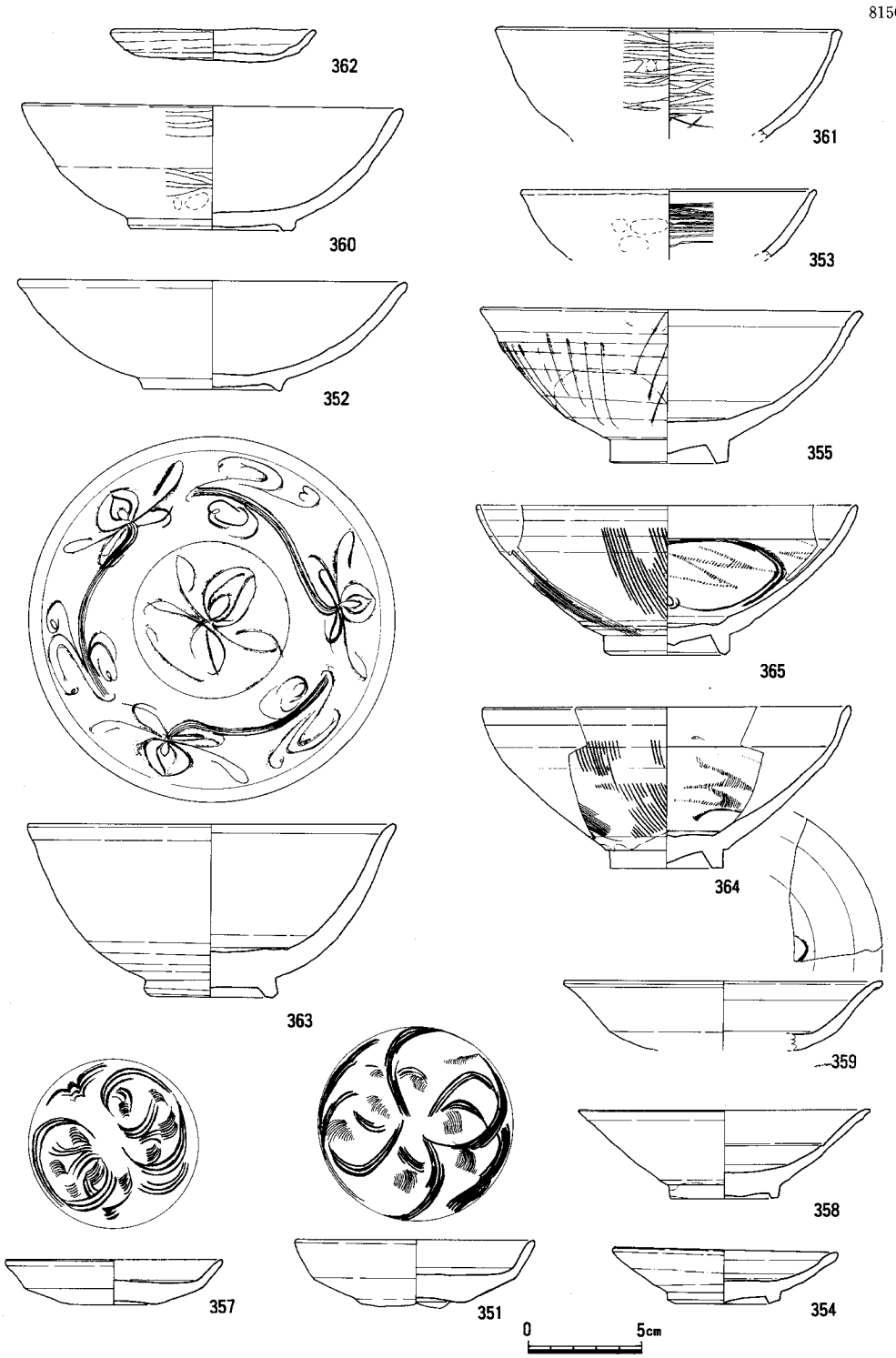


Fig.163 C出入口 SK03出土遺物(1/3)

8150

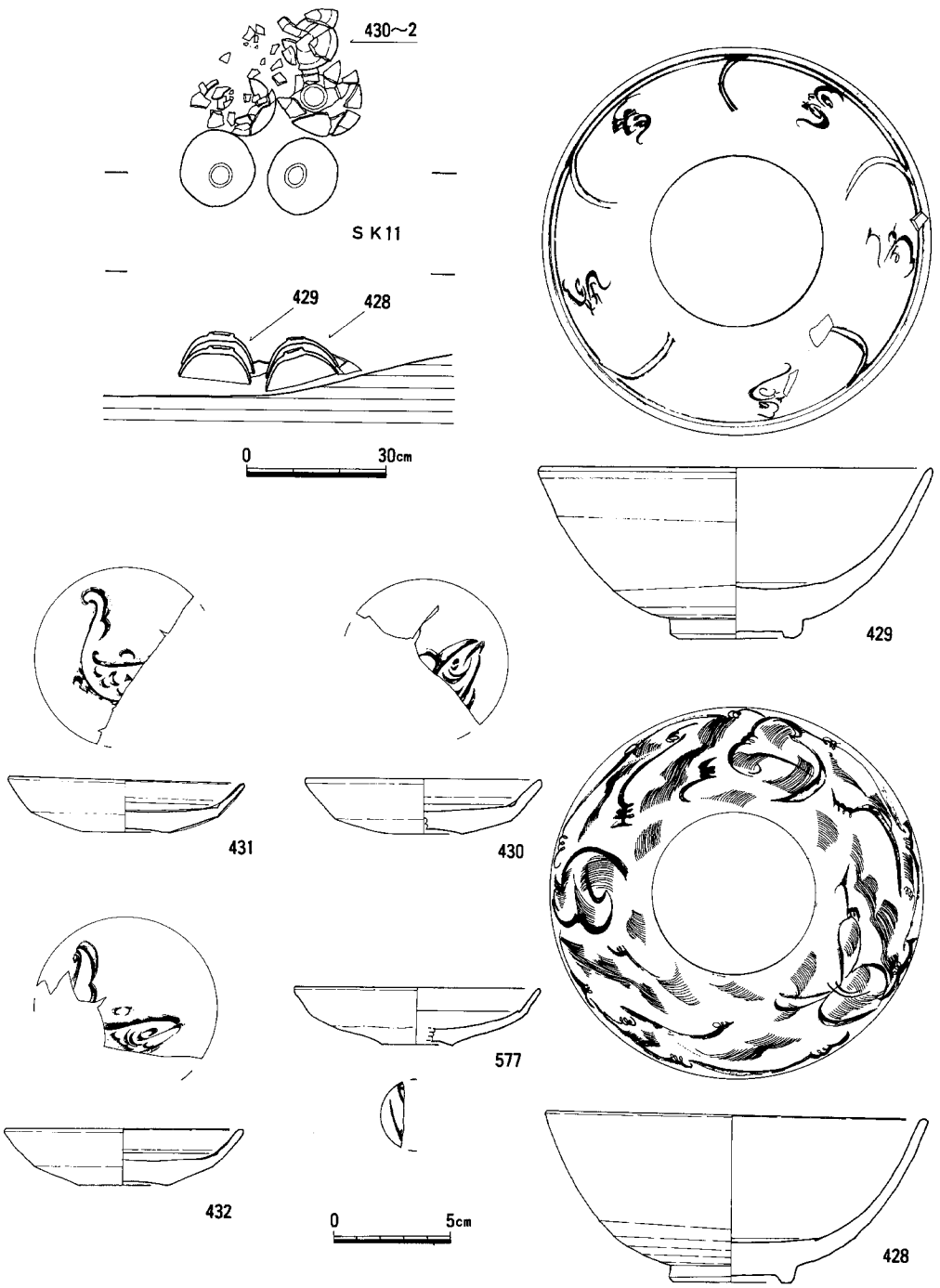


Fig.164 C出入口SK11と出土遺物(1/3)

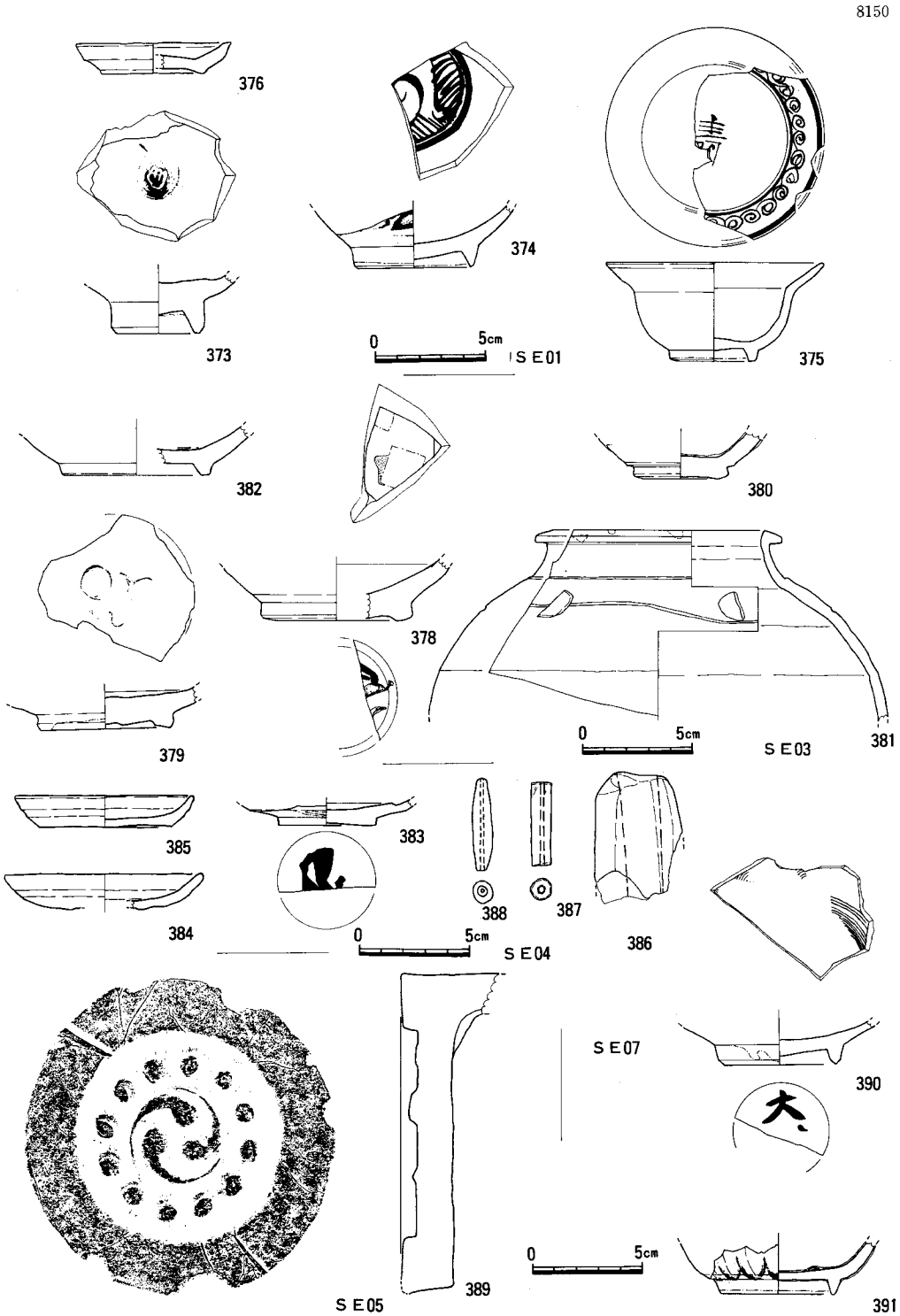


Fig.165 C出入口 SE01,SE03,SE04,SE05,SE07出土遺物(1/3)

8150

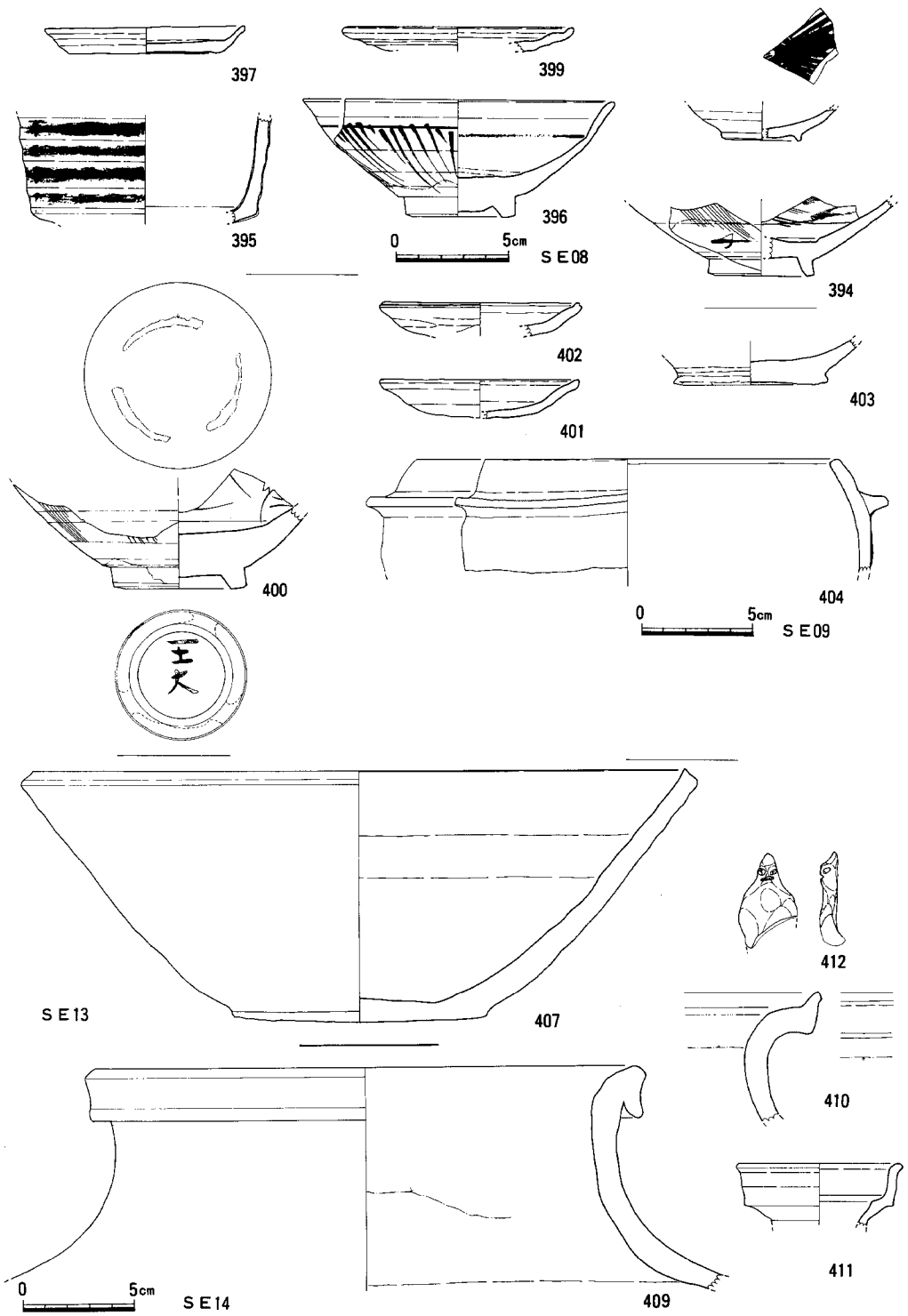


Fig.166 C出入口 SE08,SE09,SE13,SE14出土遺物(1/3)

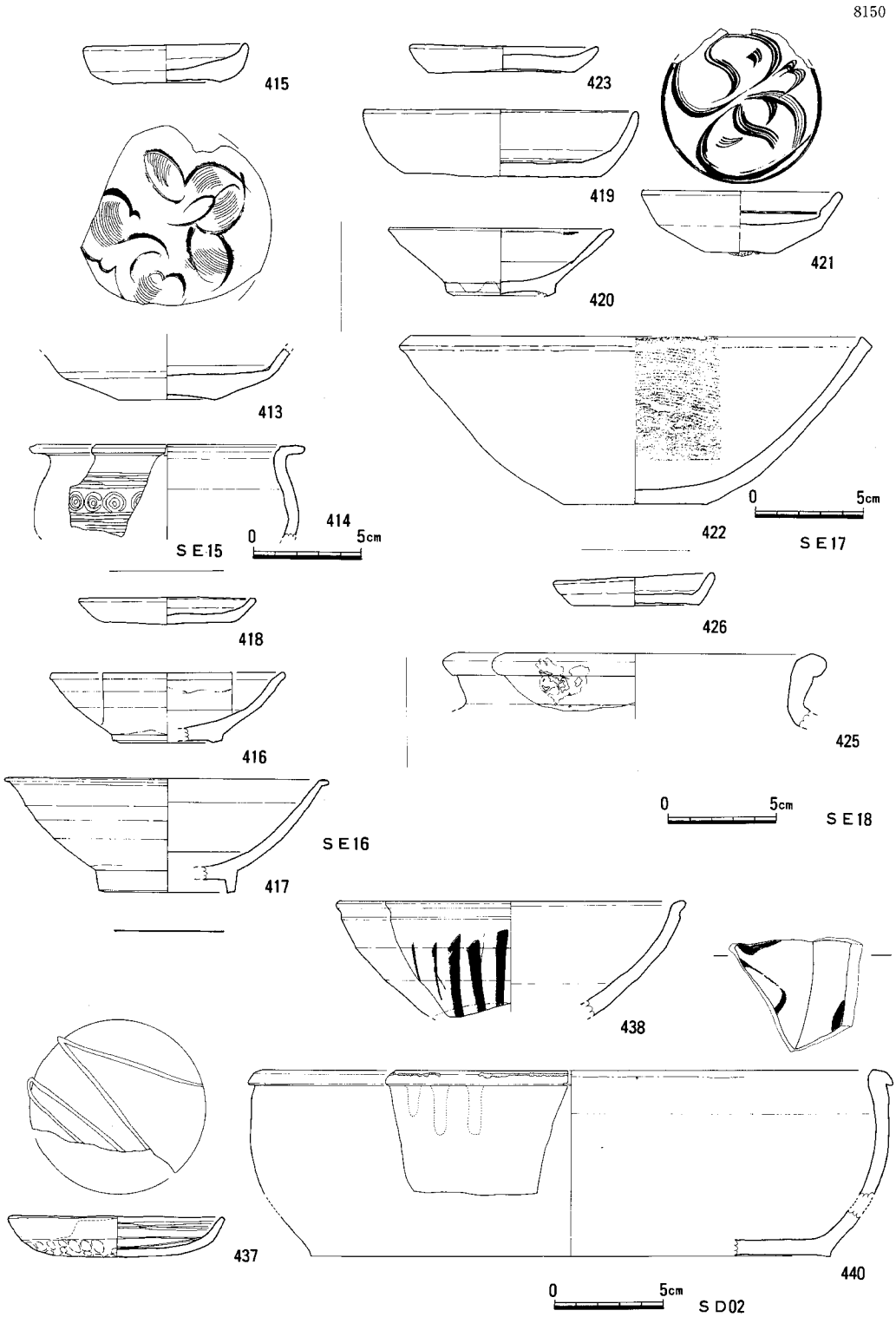


Fig.167 C出入口 SE15,SE16,SE17,SE18,SD02出土遺物(1/3)

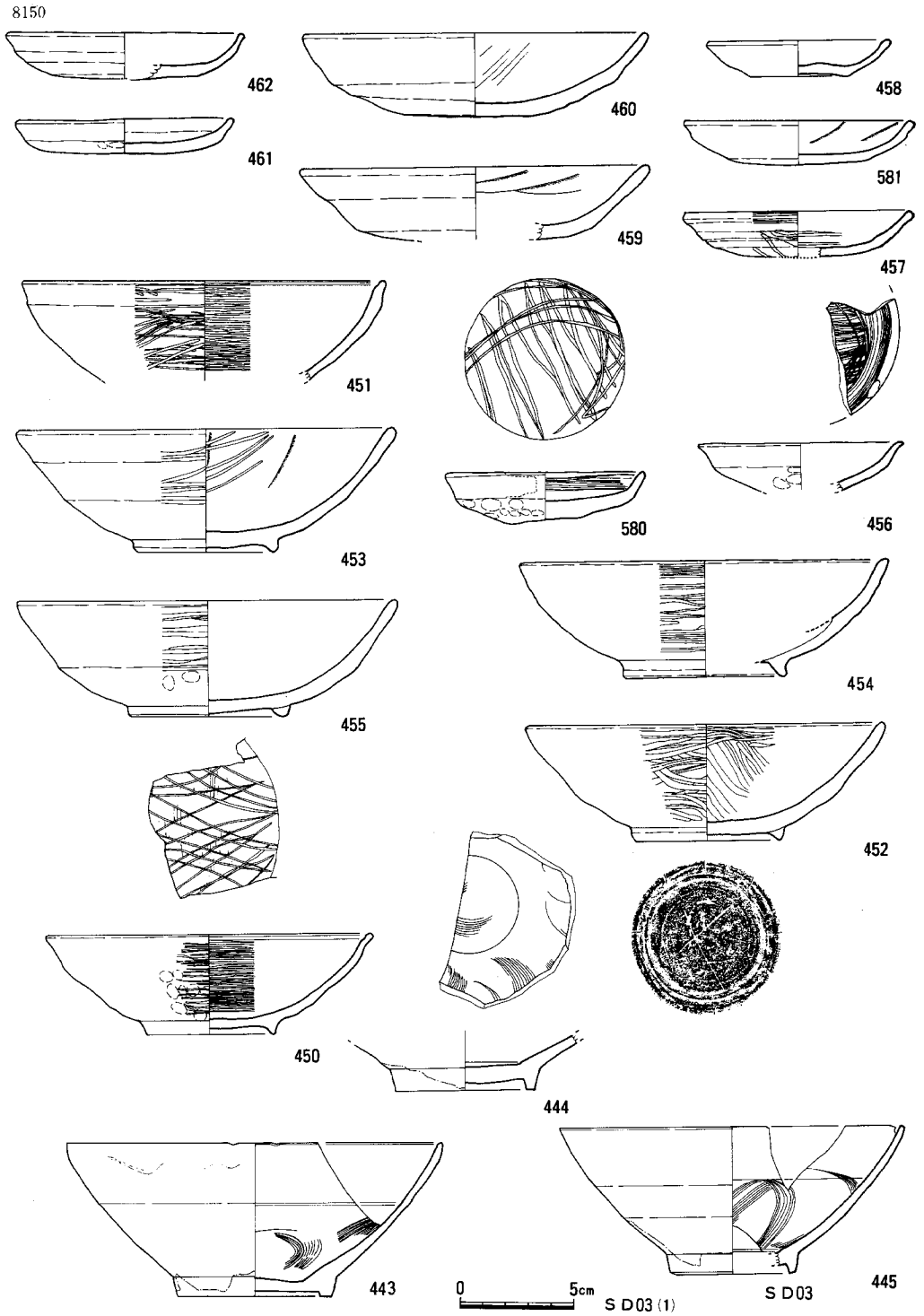


Fig.168 C出入口 SD03出土遺物(1)(1/3)

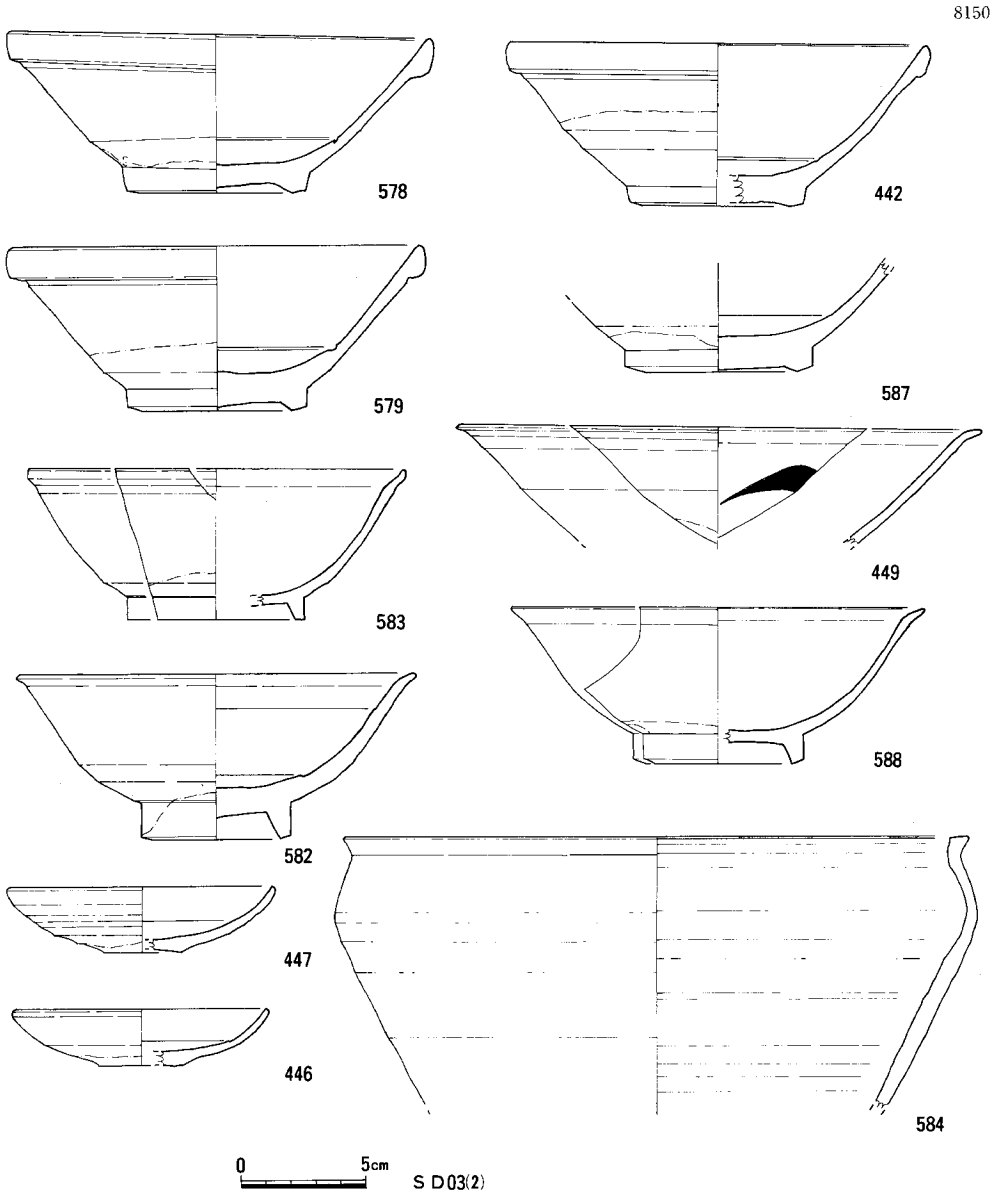


Fig.169 C出入口 SD03出土遺物(2)(1/3)

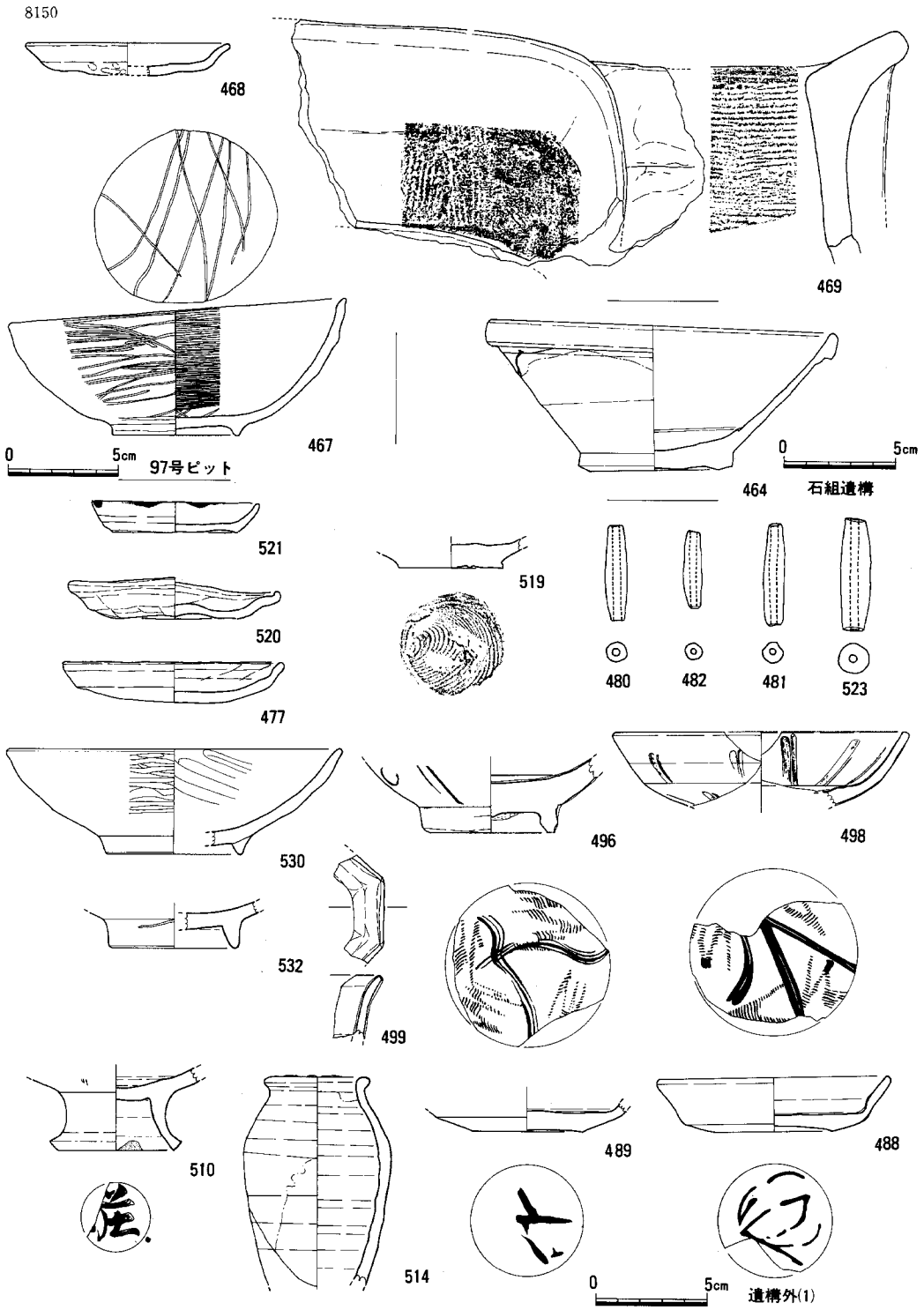


Fig.170 C出入口 97号ピット,石組遺構出土遺物と遺構外(包含層)出土遺物(1)(1/3)

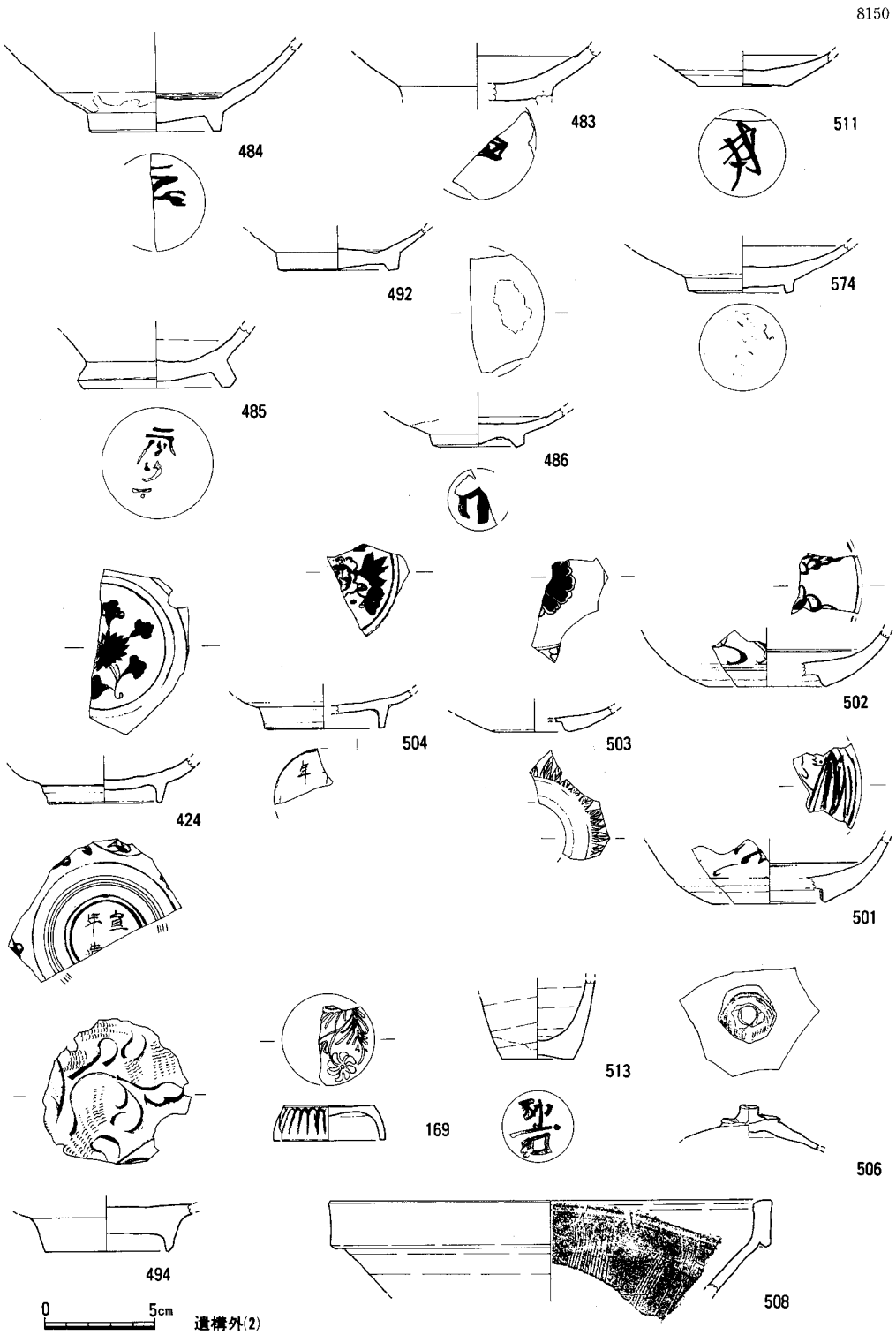


Fig.171 C出入口 遺構外(包含層)出土遺物(2)(1/3)

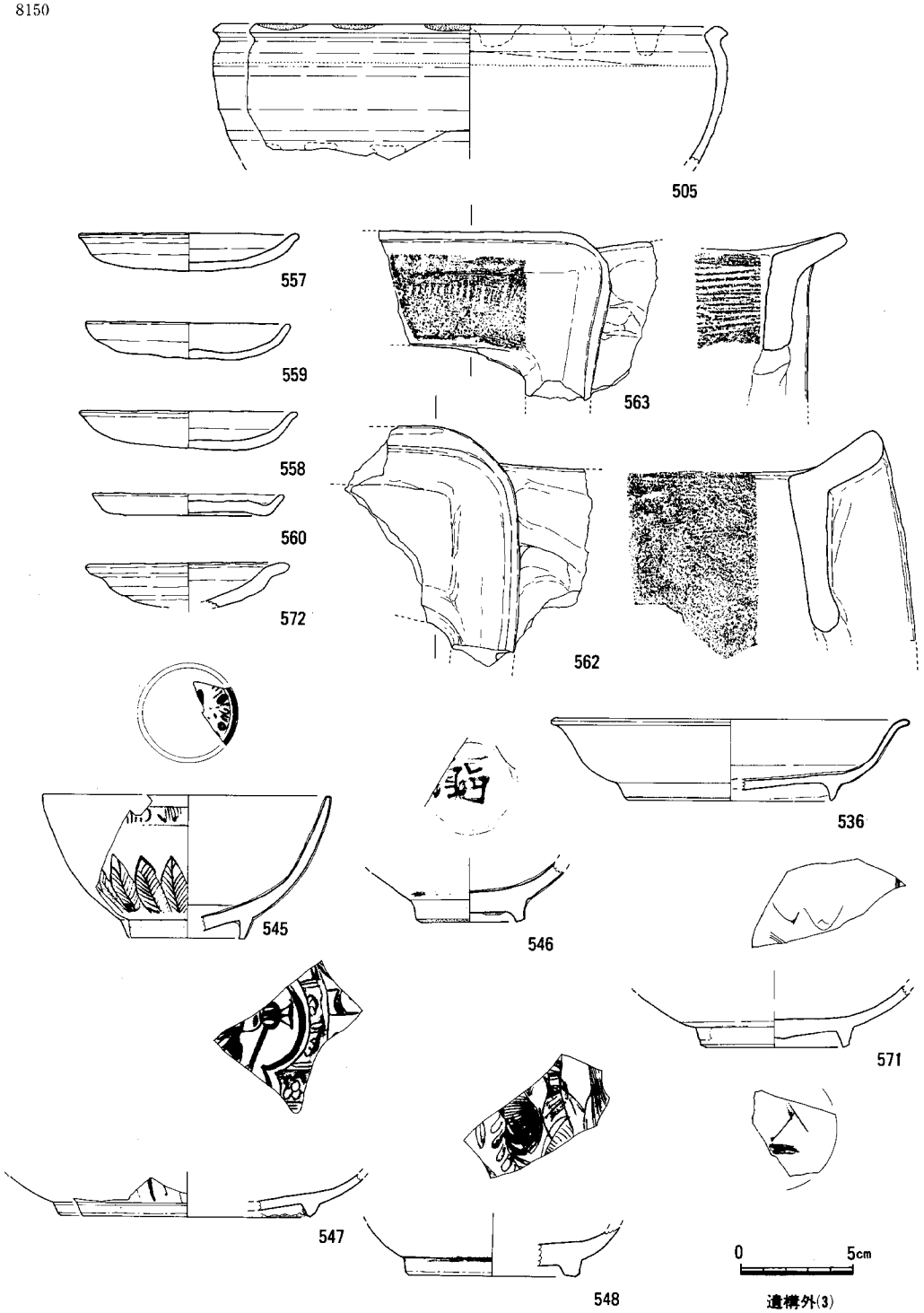


Fig.172 C出入口 遺構外(包含層,撹乱)出土遺物(3)(1/3)

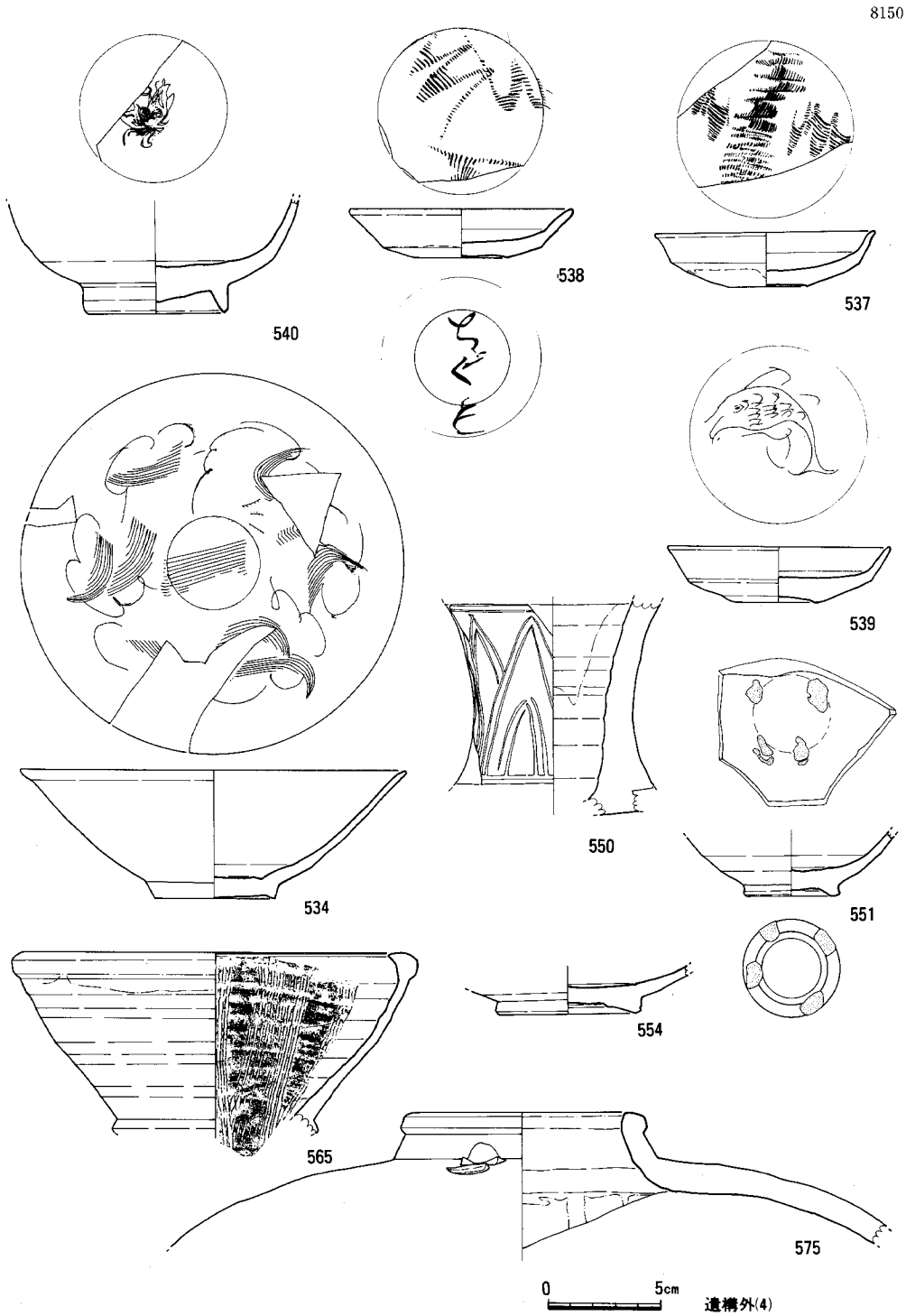


Fig.173 C出入口 遺構外(撹乱)出土遺物(4)(1/3)

呉服町工区出入口主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
00001	A区出入口 SK01	青磁	碗
2	↓	陶器	鉢
3		須恵器	鉢
4	ピット切込包含層	青磁	碗
5		↓	皿
6		青白磁	碗
7		白磁	高台付皿
8		青磁	鉢
9		瓦器	碗
10		↓	皿
11		土師器	↓
12		↓	↓
13		↓	↓
14		↓	↓
15	↓	↓	↓
16	SD01	↓	↓
17	↓	白磁	碗
18	↓	↓	↓
19	↓	↓	皿
20	↓	青磁	碗
21	↓	青磁	碗
22	↓	↓	小碗
23	↓	↓	碗
24	↓	↓	↓
25	↓	↓	↓
26	↓	↓	皿
27	↓	瓦器	碗
28	↓	↓	↓
29	↓	土師器	皿
30	↓	↓	↓
31	SD02	土師質	土錘
32	↓	青磁	小碗
33	↓	↓	高台付皿
34	↓	↓	小碗
35	↓	白磁	碗
36	↓	↓	↓
37	↓	↓	↓
38	↓	↓	↓
39	↓	陶器	小盤
40	↓	↓	底部
41	↓	土師器	皿
42	SD03	青白磁	碗
43	↓	白磁	↓
44	↓	↓	高台付皿
45	↓	青磁	碗
46	↓	↓	↓
47	↓	↓	↓
48	↓	↓	↓
49	SD04	白磁	↓
50	↓	青磁	小碗
51	SD05	白磁	碗
52	↓	↓	平底皿
53	↓	瓦器	碗

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
54	↓	↓	↓
55	SD07	白磁	高台付皿
56	↓	青磁	碗
57	↓	↓	↓
58	↓	↓	小碗
59	↓	↓	碗
60	↓	↓	↓
61	↓	青磁	碗
62	↓	↓	↓
63	↓	陶器	小口瓶
64	↓	↓	壺
65	↓	↓	長瓶
66	包含層	青磁	碗
67	↓	白磁	小壺
68	↓	青磁	↓
69	↓	白磁	碗
70	↓	青磁	↓
71	↓	↓	↓
72	↓	↓	↓
73	↓	↓	↓
74	↓	黒褐釉	↓
75	↓	土師器	高台付碗
76	↓	↓	皿
77	↓	白磁	碗
78	↓	↓	八角杯
79	↓	陶器	四耳付長壺
80	↓	土師質	たこ壺
81	↓	土師器	皿
82	↓	↓	↓
83	↓	↓	↓
84	↓	白磁	碗
85	↓	↓	枢府タイプ腰折皿
86	↓	青磁	小碗
87	↓	染付	碗
88	↓	青白磁	↓
89	↓	白磁	↓
90	↓	↓	皿
91	↓	↓	平底皿
92	↓	青磁	碗
93	↓	↓	小鉢
94	↓	土師器	皿
95	↓	青磁	小碗
96	↓	↓	碗
97	↓	青白磁	蓋
98	↓	白磁	平底皿
99	↓	↓	碗
100	↓	土師質	たこ壺
101	A区出入口包含層	土師質	土錘
102	↓	土師器	皿
103	↓	↓	↓
104	↓	↓	碗
105	↓	↓	皿
106	↓	陶器	小口瓶

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
107		白磁	小碗
108		青磁	鉢
109		陶器	壺
110		土師質	火鉢
111	↓	土師器	皿
112		陶器	壺
113		青磁	↓
114		白磁	碗
115		青白磁	皿
116		土師器	碗
117		↓	↓
118		白磁	平底皿
119		白磁	皿
121		白磁	碗
122			↓
123		↓	口ハゲ皿
124		青磁	平底皿
125		陶器	四耳壺
126		↓	壺
127	↓	土師器	皿
128	第一遺構面	白磁	高台付皿
129		青磁	碗
130		↓	↓
131	↓	白磁	高台付皿
132	泥炭状土層	青白磁	小壺
133		白磁	高台付皿
134		↓	平底皿
135		青白磁	小碗
136		青磁	皿
137			
138		↓	
139	↓	土師器	↓
140	泥炭状土層(上)	白磁	平底皿
141		青磁	平底皿
142			↓
143		↓	つば皿
144		陶器	四耳壺
145		↓	盤
146		土師器	皿
147			
148	↓	↓	↓
149	泥炭状土層(下)	青磁	碗
150		陶器	壺
151	↓	↓	鉢
152	包含層（上）	青白磁	碗
153		白磁	鉢
154			不明小片
155		↓	平底皿
156		青磁	↓
157			小碗
158	↓		碗
159	包含層		皿
160	包含層（上）	↓	碗
161	↓	陶器	盤
162	包含層（下）	青磁	碗
163			

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
164		↓	↓
165	↓	陶器	壺
166	包含層	青磁	碗
167	↓	↓	
168	↓	黒褐釉	↓
169	C区出入口包含層	青白磁	蓋
170	A区出入口		身
171			蓋
172			
173			↓
174			身
175		↓	蓋
176	B区出入口 SK01	青磁	碗
177	↓	陶器	皿
178	SK10	青白磁	蓋
179	SK10		身
180	↓	↓	↓
181	SK09	白磁	碗
182	↓	青磁	↓
183	SK10		皿
184	↓	↓	平底皿
185	SK11	青白磁	壺
186	↓	白磁	碗
187	SD01	青磁	↓
188	↓	↓	香炉の脚
189	包含層	白磁	碗
190			↓
191			平底皿
192			高台付皿
193			皿
194			
195			
196			
197			
198			↓
199			碗
200			小片
201			
202			↓
203			皿
204			
205			↓
206			水注
207		↓	碗
208		青白磁	
209		青磁	
210			↓
211			高台付皿
212			平底皿
213			
214			
215			
216			
217			
218			↓

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
219			碗
220		↓	↓
221		青磁	碗
222			↓
223			平底皿
224			
225			
226			
227			↓
228			碗
229			小鉢
230			↓
231			小杯
232			碗
233			
234			
235			
236			↓
237			高台付皿
238			香炉
239			
240		↓	↓
241		青磁	小片
242			香炉
243			碗
244			瓶
245		↓	八角小杯
246		粉青沙器	碗
247		↓	
248		黒褐釉	
249			
250		↓	↓
251		陶器	盤
252			型物
253			盤
254			
255			
256			
257			↓
258			茶入れ
259			↓
260			鉢
261		↓	すり鉢
262		土師器	高台付皿
263			↓
264		↓	碗
265		土師質	鍋
266			↓
267			小鉢
268			土錘
269		↓	↓
270		須恵質	鉢
271		陶器	おろし皿
272			蓋
273		↓	小片
274		土師質	瓦玉

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
275		↓	円盤
276		土師器	皿
277			
278			
279			
280			
281			
282			
283			
284			
285			
286			
287			
288			
289			
290			
291			
292			
293			
294			
295			
296			
297			
298			↓
299		↓	耳皿
300		白磁	枢府型皿
301	↓	染付	皿
302	表土層	白磁	
303			↓
304			碗
305		↓	高台付皿
306		青磁	↓
307		染付	瓶
308		↓	皿
309		土師器	
310			
311			
312			
313	↓	↓	↓
314	A区出入口包含層	青磁	碗
315			
316	↓	↓	↓
317	泥炭状土層(上)	陶器	おろし皿
318	B区出入口包含層	青磁	碗
319	A区出入口	石製品	石錘
320			
321			
322	↓		↓
323	SD01		砥石
324			石錘
325			
326	↓		↓
327	SD02		硯
328			小石鍋

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
329			滑石錘
330			
331			
332			↓
333			鎹止石鍋
334	↓		滑石製品
335	SD04	↓	石錘
336	C区出入口 SK01	白磁	平底皿
337		↓	高台付皿
338		青磁	小碗
339		陶器	壺
340		土師器	碗
341		瓦器	碗
342			皿
343			碗
344		↓	↓
345	↓	磁器	不明片
346	SK02	白磁	平底皿
347		青磁	↓
348		陶器	鉢
349		瓦器	碗
350	↓	土師器	皿
351	C区出入口SK03	青磁	平底皿
352		瓦器	碗
353		↓	↓
354		白磁	高台付皿
355		青磁	碗
356			↓
357		↓	平底皿
358		白磁	高台付皿
359		青磁	↓
360		瓦器	碗
361		↓	↓
362	↓	土師器	皿
363	SK02 墓	青磁	碗
364	SK03 墓		
365	↓	↓	
366	SK06	瓦器	↓
367	SK07 (木棺墓)	染付	壺
368	SK08	白磁	碗
369	SK09	青磁	高台付皿
370		須恵器	壺
371		瓦器	碗
372	↓	土師質	たこ壺
373	SE01	青磁	碗
374		染付	↓
375		↓	小鉢
376	↓	土師器	皿
377	SE02	染付	↓
378	SE03	白磁	碗
379	SE03	青磁	
380	↓	黒褐釉	↓
381	SE03 内	陶器	四耳壺
382	SE03 外	青磁	碗
383	SE04	白磁	皿

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
384		土師器	
385		↓	↓
386		土師質	土錘
387			
388	↓	↓	↓
389	SE05	瓦	瓦当
390	SE07 掘方	白磁	碗
391		青磁	小鉢
392	↓	陶器	不明小片
393	SE08	青白磁	皿
394		青磁	碗
395			香炉
396		↓	碗
397		土師器	皿
398		土師質	たこ壺
399	↓	土師器	皿
400	SE09	青磁	碗
401		土師器	皿
402			↓
403		↓	不明
404		土師質	羽釜
405			たこ壺
406	↓	↓	↓
407	SE13	須恵質	鉢
408	SE14	青磁	皿
409		陶器	壺
410			↓
411		↓	瓶
412	↓	土製品	玩具か
413	SE15	青磁	平底皿
414		粉青沙器か	壺か
415	↓	土師器	皿
416	SE16	白磁	高台付皿
417		↓	碗
418	↓	土師器	皿
419	SE17（内）	↓	↓
420	SE17	白磁	高台付皿
421		青磁	平底皿
422		須恵質	鉢
423	↓	土師器	皿
424	包含層	染付	碗
425	SE18	陶器	壺
426	↓	土師器	皿
427	SK11	青磁	碗
428			
429			↓
430			平底皿
431			
432			↓
433			碗
434			
435			
436	↓	↓	↓
437	SO02（上）	瓦器	皿
438	↓	青磁	碗
439	SD02（下）	陶器	盤

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
440			
441	↓	↓	↓
442	SD03	白磁	碗
443			
444			
445			↓
446			平底皿
447			↓
448			瓶
449		↓	鉢
450	↓	瓦器	碗
451	SD03	瓦器	碗
452			
453			
454			
455			↓
456			皿
457		↓	↓
458		須恵質	小皿
459		土師器	丸底杯
460		↓	↓
461		土師器	皿
462		↓	↓
463	↓	土師質	土錘
464	石組遺構土器-1	白磁	碗
465	ピット12	土師器	皿
466	ピット56	↓	↓
467	ピット97	瓦器	碗
468		土師器	皿
469	↓	土師質	かまど
470	包含層	土師器	皿
471			
472	↓		↓
473	包含層（上）	↓	丸底杯
474	包含層	土師質	三脚付土鍋
475		瓦器	皿
476		黒色土器	
477	↓	土師器	
478	包含層（上）	瓦器	↓
479	包含層	↓	碗
480		土師質	土錘
481			
483		↓	↓
483		白磁	碗
484			↓
485			瓶
486			高台付皿
487		↓	平底皿
488		青磁	
489			
490	↓	↓	↓
491	包含層（上）	白磁	碗
492	包含層		↓
493		↓	皿
494		青白磁	碗
495		磁器	不明片

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
496		青磁	碗
497			↓
498			皿
499		↓	八角の頸
500		染付	碗
501			皿
502			
503			↓
504		↓	碗
505		陶器	盤
506			蓋
507			瓶
508			すり鉢
509	↓	↓	鉢
510	包含層（下）	青磁	台付小壺か
511		白磁	平底皿
512		染付	皿
513		陶器	小瓶
514			↓
515			盤
516			
517			
518	↓	↓	↓
519	包含層	土師器	不明
520	↓	↓	皿
521	包含層（下）	土師器	皿
522		↓	丸底皿
523		土師質	土錘
524	↓		
525	包含層(最下層)	↓	↓
526	包含層（下）	瓦器	碗
527			
528			
529			
530			
531			
532			↓
533	↓	↓	皿
534	攪乱	青白磁	碗
535		↓	↓
536		白磁	皿
537		青磁	平底皿
538			
539			↓
540			碗
541			↓
542			盤
543			瓶
544		↓	小壺
545		染付	碗
546			↓
547			皿
548		↓	↓
549		三彩陶器	不明
550		象嵌粉青沙器	梅瓶
551		陶器	碗

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
552			大甕
553			四耳壺
554			碗
555		↓	↓
556		土師器	皿
557			
558			
559			
560		↓	↓
561		土師質	土錘
562			かまど
563		↓	↓
564		瓦	
565		陶器	すり鉢
566			おろし皿
567			壺
568			
569			↓
570	↓	↓	すり鉢
571	排土中	白磁	碗
572	↓	土師器	皿
573	現代攪乱	↓	↓
574	溝下包含層	白磁	高台付皿
575	排土中	陶器	四耳壺
576	↓	↓	↓
577	SK11	白磁	平底皿
578	SD03		碗
579		↓	↓
580		瓦器	皿
581		黒色土器	皿
582		白磁	碗
583		↓	↓
584	↓	陶器	鉢
585	SE05	象嵌粉青沙器	碗
586	東側セクション下層	土師器	皿
587	SD03	白磁	碗
588		↓	↓
589	↓	土師質	かまど
590	区不明	陶器	鉢
591	↓	須恵器	瓶の頸
592	A区出入口 SD07	石製品	石錘
593	不明1		砥石
594	↓		円盤
595	不明3		石錘
596	不明4		滑石擂鉢
597	不明10		石錘
598	不明22		石玉
599	泥炭状土層		温石
600	↓		小石鍋
601	A区出入口包含層（上）		砥石
602			石錘
603	↓		温石
604	ピット9		↓
605	SK01		石鍋

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
606	B区出入口包含層		碾臼
607			↓
608			砥石
609			
610			
611			
612			
613			
614			
615			
616			
617			
618			↓
619			硯
620			石玉
621			↓
622			滑石製錘
623			
624			
625			
626			↓
627			石錘
628			石鍋の再加工品
629			
630			一
631			個
632			↓ 体
633		↓	温石
634		焼けた壁土	
635		↓	
636		石製品	石錘
637	↓		↓
638	表土層		石玉
639	C区出入口 SK01		滑石製錘
640	SK02	↓	石錘
641	SE06	石製品	
642	↓		↓
643	SE09		砥石
644	↓		石錘
645	SE18		↓
646	SD03		滑石錘
647			
648			
649			
650			
651			
652			↓
653			粘板岩錘
654			石鍋
655			加工ある砂岩
656	↓		石錘
657	包含層		石玉
658			滑石錘
659			
660			

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
661			
662			
663			
664			↓
665			砥石
666			石錘
667			↓
668			滑石錘
669			
670			↓
671	↓		石鍋
672		包含層（下）	石玉

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
673			石鍋片
674			滑石錘
675			
676			↓
677	↓		滑石円盤
678	攪乱		くぼみ石
679			石鍋片
680			砥石
681			石鍋
682	↓	↓	石錘
683	SK11	青磁	碗
684	↓	↓	↓

III　高速鉄道関係箱崎・馬出遺跡群

第１章　調査に到る経過

福岡市高速鉄道（地下鉄）は、姪浜～博多駅間の１号線、中洲川端駅から分岐し、東区貝塚駅までの２号線の２本が計画された。このうち１号線関係の工事が先行し、２号線については順次南の方から工事発注が行なわれていった。昭和57年頃から千代県庁口以北の工区についても発注された。筥崎宮を中心とした一帯は、第２章で述べるように古代中世の遺跡の存在することは十分予測されていたが、一帯がすでに密集した市街地となっており、分布調査等一般調査でその実態を知ることは困難であって、福岡市教育委員会が昭和56（1981）年度に発行した「福岡市文化財分布地図（東部Ｉ）」においても、わずかに元寇防塁推定線のみが記載されているにすぎない。筥崎宮周辺の工事発注に際し、福岡市交通局と福岡市教育委員会は協議を行ない、路線内遺跡の範囲を工事発注後の側壁柱布掘の立会調査によって決定し、遺跡の存在が確認された時点で、本調査へと移行することにした。なお、千代町～九大病院間は、県庁舎新築前の福岡県教育委員会による試掘調査によって遺跡の存在が認められていないことや、筥崎宮参道以北は路線が江戸時代の汀線部を通過するため遺跡の所在が考えられないことから布掘りの立会調査は、馬出東、馬出西、筥崎宮参道の三工区約900 m について行なった。

筥崎宮参道工区の立会は昭和57（1982）年４月から９月まで断続的に行なった。この工区では元寇防塁の推定線が路線内を斜断しており、その存在も当然考えられた。しかし、路線全区に立会したにも拘らず、石塊の存在する認められなかった。この事実は元寇防塁推定線の再検討を要するのか、それとも、後世の大規模な石材抜取りによるものか見解の分れるところであろう。いずれにせよ今後の研究に期待したい。この工区では、地表下約50 cm で黄白色地山砂層に達し、また、１m 強の深さで湧水が見られるなど、遺物包含層は全く見られなかった。

馬出東・西工区は、昭和58（1983）年３月から６月にかけて立会調査を行なった。これらの工区は古砂丘上を南北に走る通称「大学通り」を境に東・西の工区に分れる。馬出西工区では、現馬出電報電話局近付に「お綱池」と呼ばれる池があって、この池の西方は東公園に連なる松原であったといわれている。ちなみに「お綱池」のほとりに、黒田藩お綱騒動で知られる明石四郎左衛門の妻お綱親子の墓所があり、また馬出の曲物屋の材料の木材をここに漬け保存したという。立会調査の結果ではこの池の東側から遺物が出土しはじめ、遺跡の西端がここに求められることが明らかになった。東工区では、西鉄バス専用路線の南側で包含層が初めて現れ、更に南側に延びることが確認された。こうして路線内遺跡の範囲は Fig. 173 のように推定できた。福岡市教育委員会ではこの遺跡を「箱崎・馬出遺跡群（遺跡略号 **HZM**）」と呼び、路線内の要調査区域とした。発掘調査は昭和58（1983）年７月４日から行なった。発掘調査に係る組織は以下のようであった（職名・氏名は当時のまま）。

調査委託　　福岡市交通局

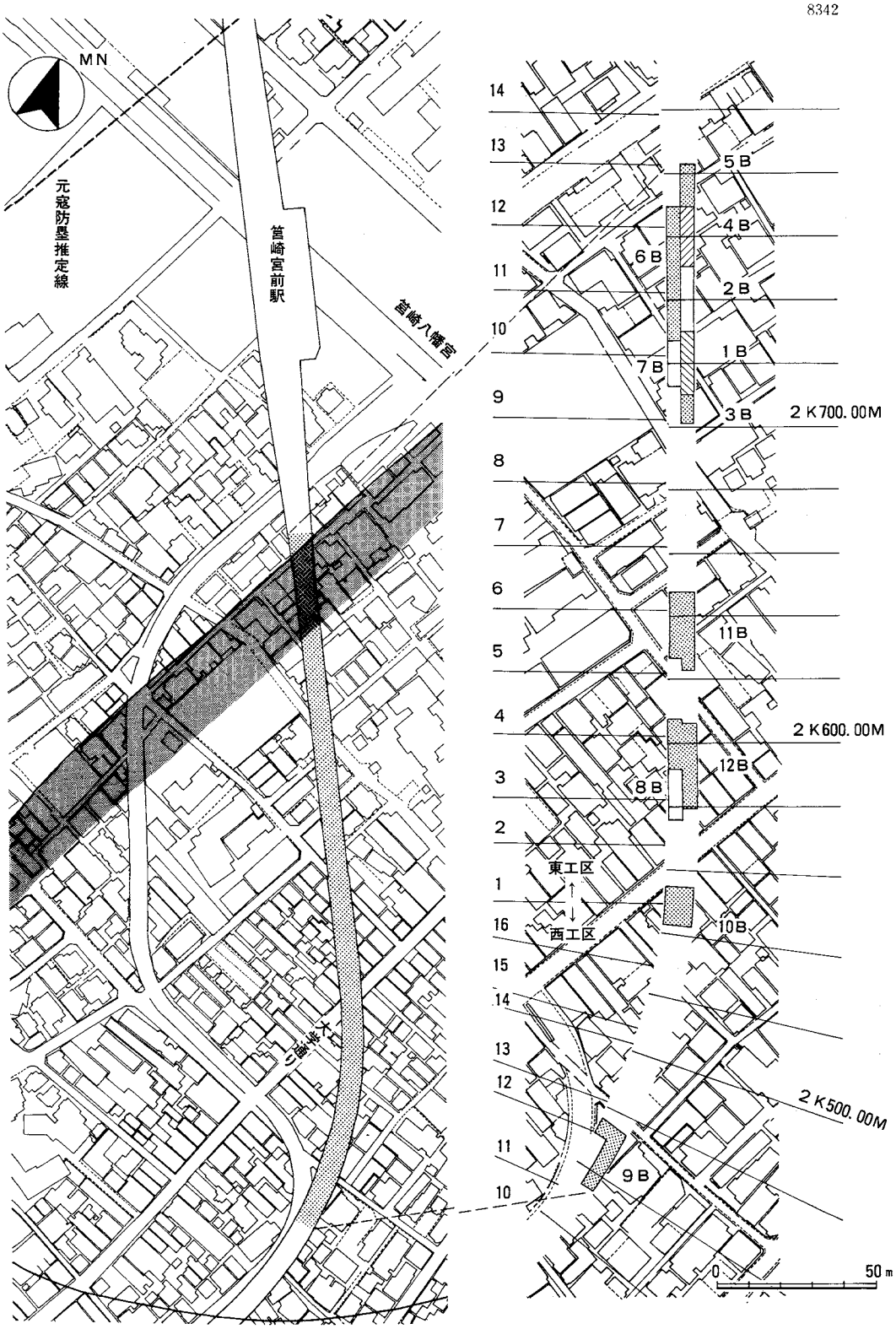


Fig.174 | 箱崎馬出遺跡群と調査区位置図(1/3000,1/2000)

交通事業管理者　大石秀雄

調査本体　**福岡市教育委員会**

教育長　西津茂美

文化部長　中田　宏　　**文化課長**　生田征生

埋蔵文化財第1係長　柳田純孝

事務担当　岡嶋洋一、古藤国生

調査担当　塩屋勝利（立会調査）、池崎譲二、小畑弘己

調査協力団体　大成・梅林共同企業体　代表　大成建設（株）九州支店（馬出西工区）

地崎工業（株）福岡支店（馬出東工区）

西松建設（株）九州支店（筥崎宮参道工区）

発掘調査協力者　**調査補助**　木村幾太郎、林田憲三、白石公高

発掘作業　中山　彰、翁永武義、鳴滝隆史、岡本照男、手島敏秀、吉野清蔵
高田勘四郎、日野光嗣、津村道喜、池見寿夫、山本二郎、渋田幸信、中村博之
今倉紀尚、村上タマエ、平山道子、松尾節子、松尾なおみ、永松ヤエ子
柴田スマ子、安部サエ子、永田恭子、安部国恵、大歯ミツ子、児玉真由美

第2章　遺跡の立地と歴史的環境

箱崎、馬出遺跡群はことさら言うまでもなく、筥崎八幡宮を中心に形成された、古代から中世にかけて繁栄した都市遺跡といっていい。福岡市東区に位置し、旧粕屋郡に属す。博多湾岸に発達した千代の松原から箱崎松原まで南北に伸びる古砂丘上に立地しているが、現在までのところ調査件数が少なく、北側範囲の確定はできない。西は博多湾に臨み、東を多々良川の支流、須恵川、宇美川が区切る。この東側の後背には、かつて「箱崎ノ津」と呼ばれる入海が深くはいり込み、筥崎八幡宮の専用する私的港としての機能を果たしていた。

筥崎八幡宮の歴史は古く、延長3（923）年にさかのぼる。延喜21（921）年、大宰府観世音寺の巫女橘滋子に八幡大菩薩の託宣があって、それにより穂波郡にあった大分宮を現在の地に遷座・創建したものとされている。その理由の一つに、八幡大菩薩の重要祭事の一つ放生会の最適地であることがあげられ、今なお筥崎宮の放生会は、博多の人々にとって秋を告げる風物詩として親しまれている。また託宣には、北方新羅の来寇を防ぐとともに、外国の賓客を受入れるために美麗な宮殿を営むべしとの指示もあったという。新羅来寇を祈攘する「異賊降伏」の一面と官人らによる対外交易との両面を併せもっていたといえる。永承6（1051）年、石清水八幡宮別当清成が筥崎大検校職に補任された。保延6（1140）年、筥崎宮、香椎宮、大山寺の大衆、神人が大宰府以下の屋舎数十家を焼き払う事件があり、仁平元（1151）年には大宰府

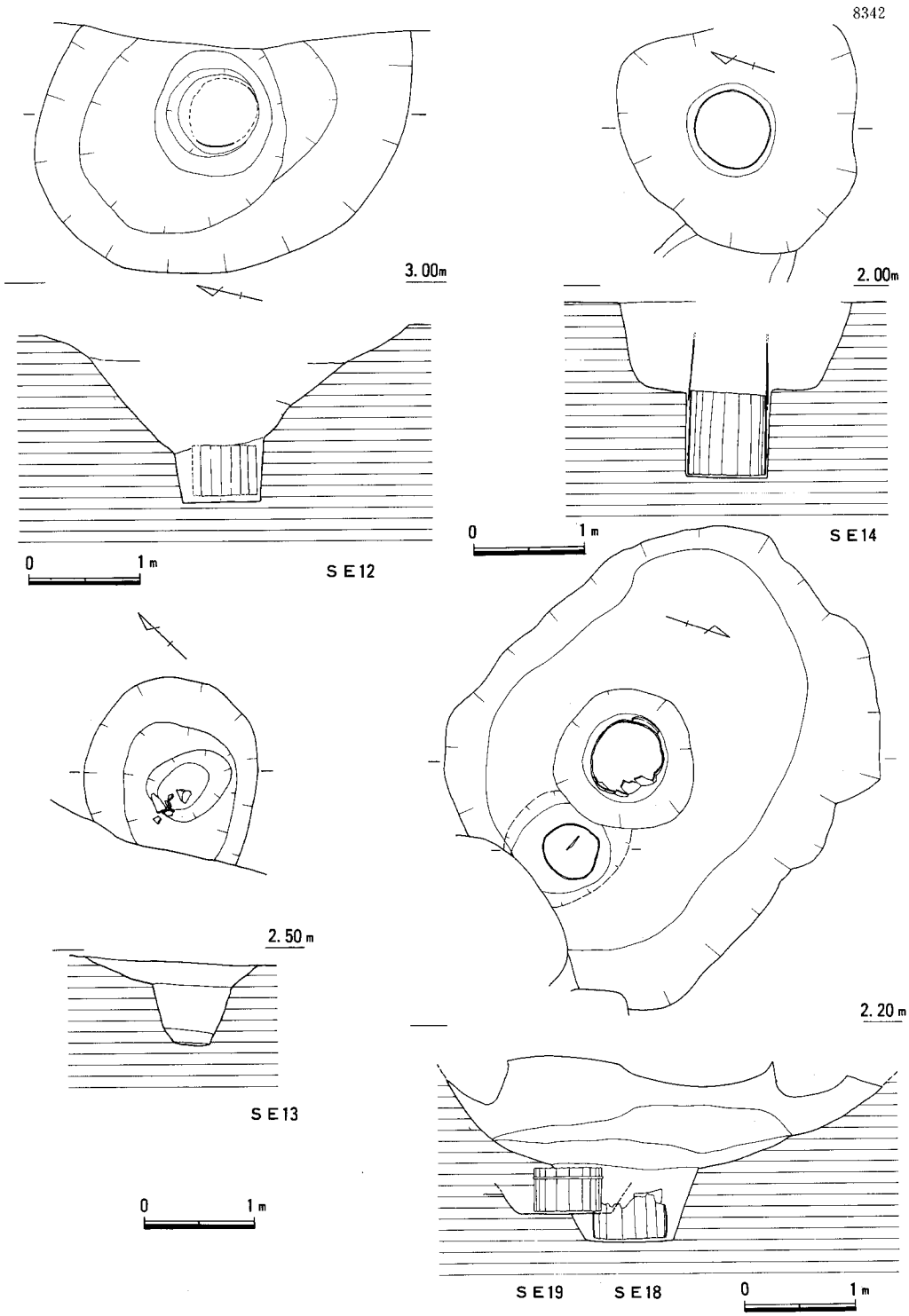


Fig.178 SE 12,13,14,18,19

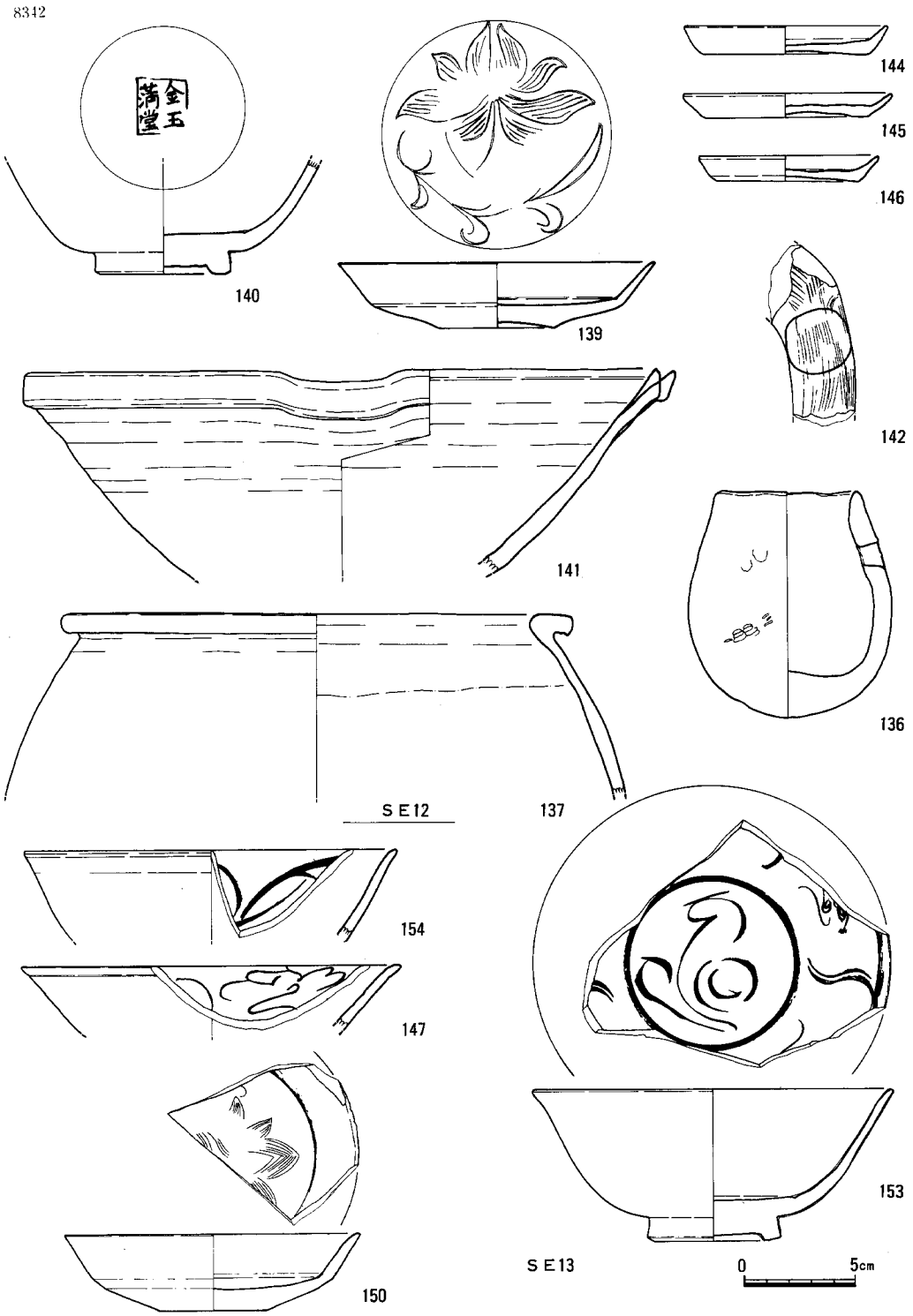


Fig.179　S E 12, 13出土遺物 (1/3)

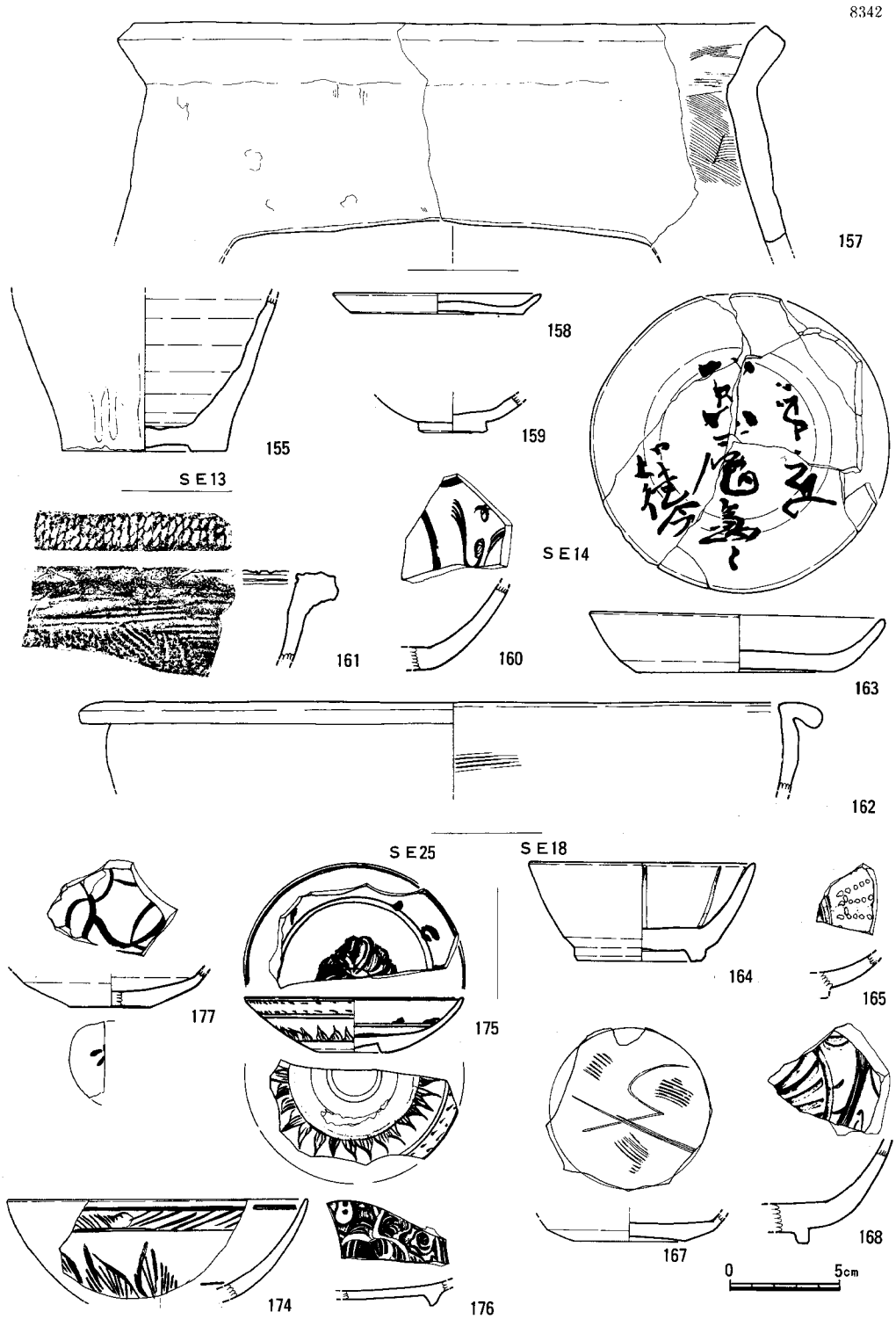


Fig.180 SE 13,14,18,25出土遺物

8342

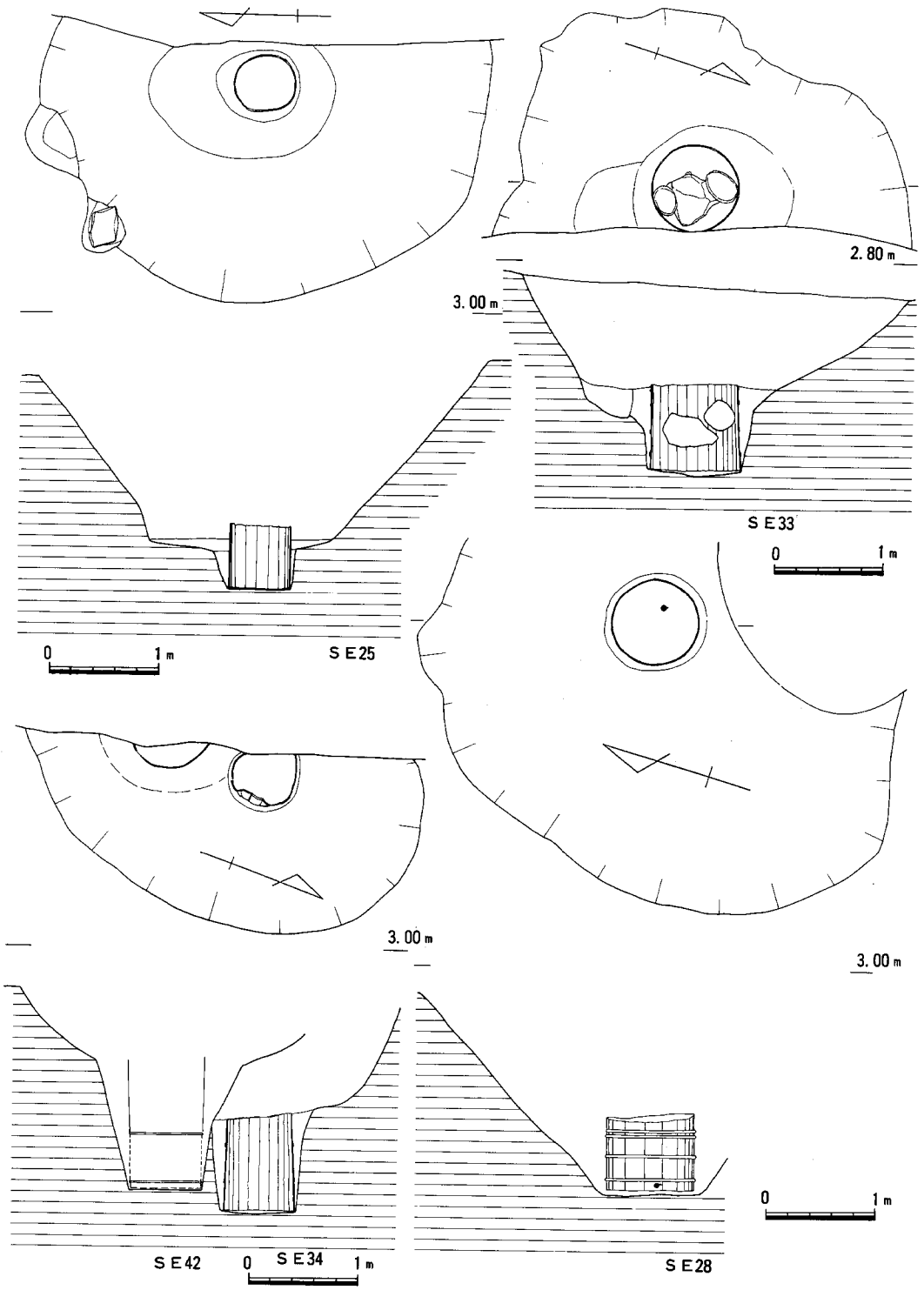


Fig.181 SE25,28,33,34,42

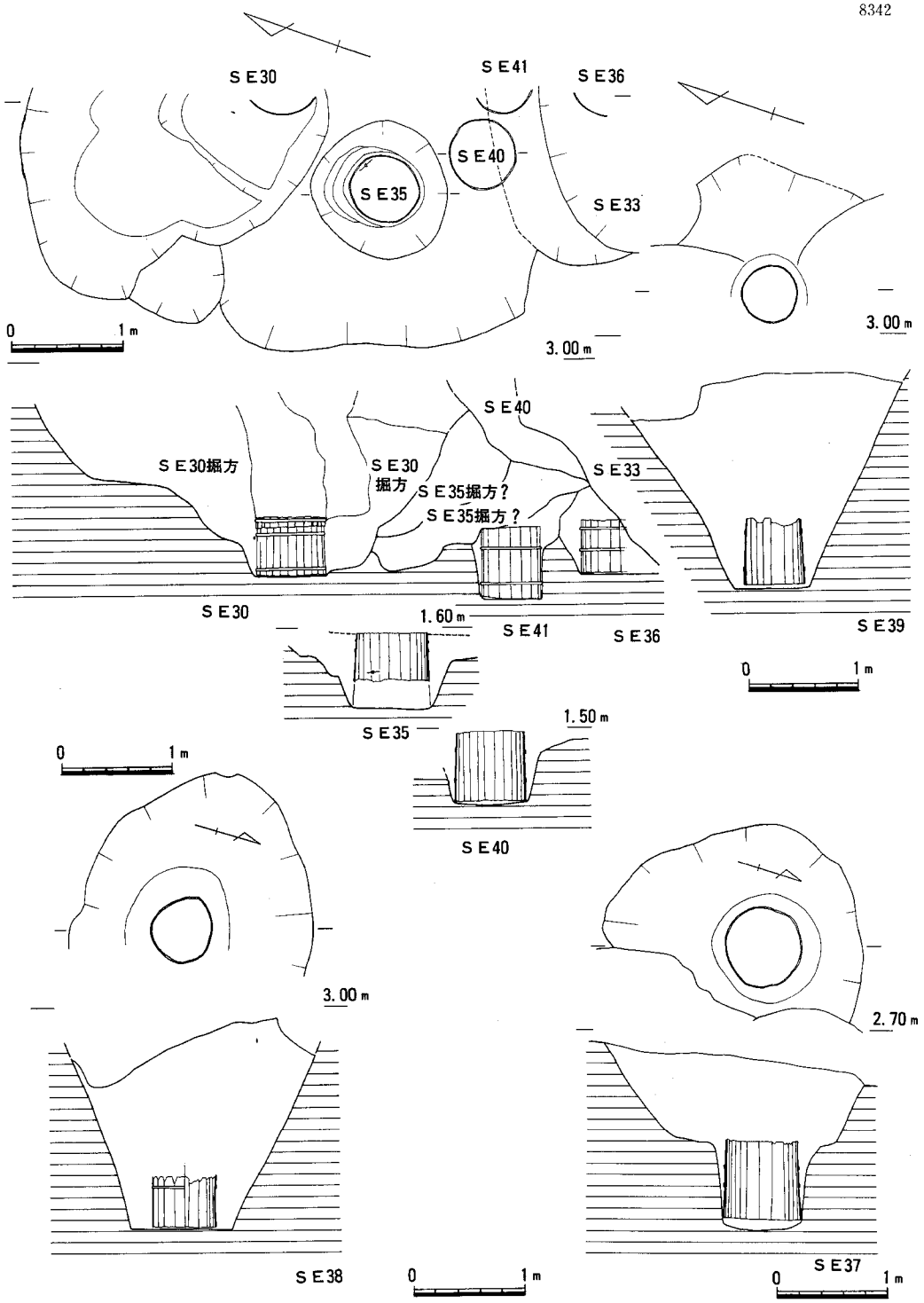


Fig.182　SE30,33,35,36,37,38,39,40,41

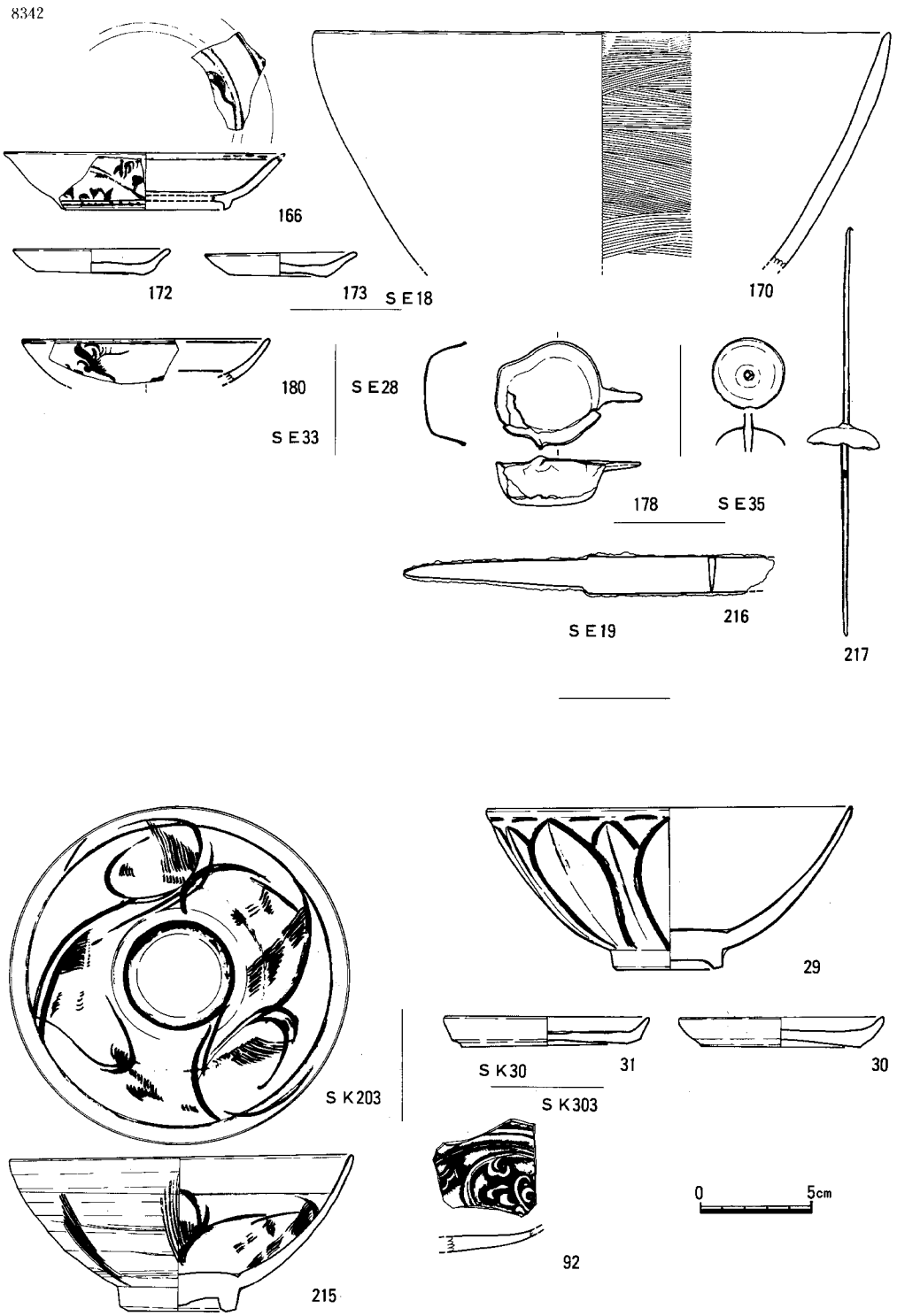


Fig.183　S E 18, 19, 28, 33, 35出土遺物と S K 30, 203, 303出土遺物 (1/3)

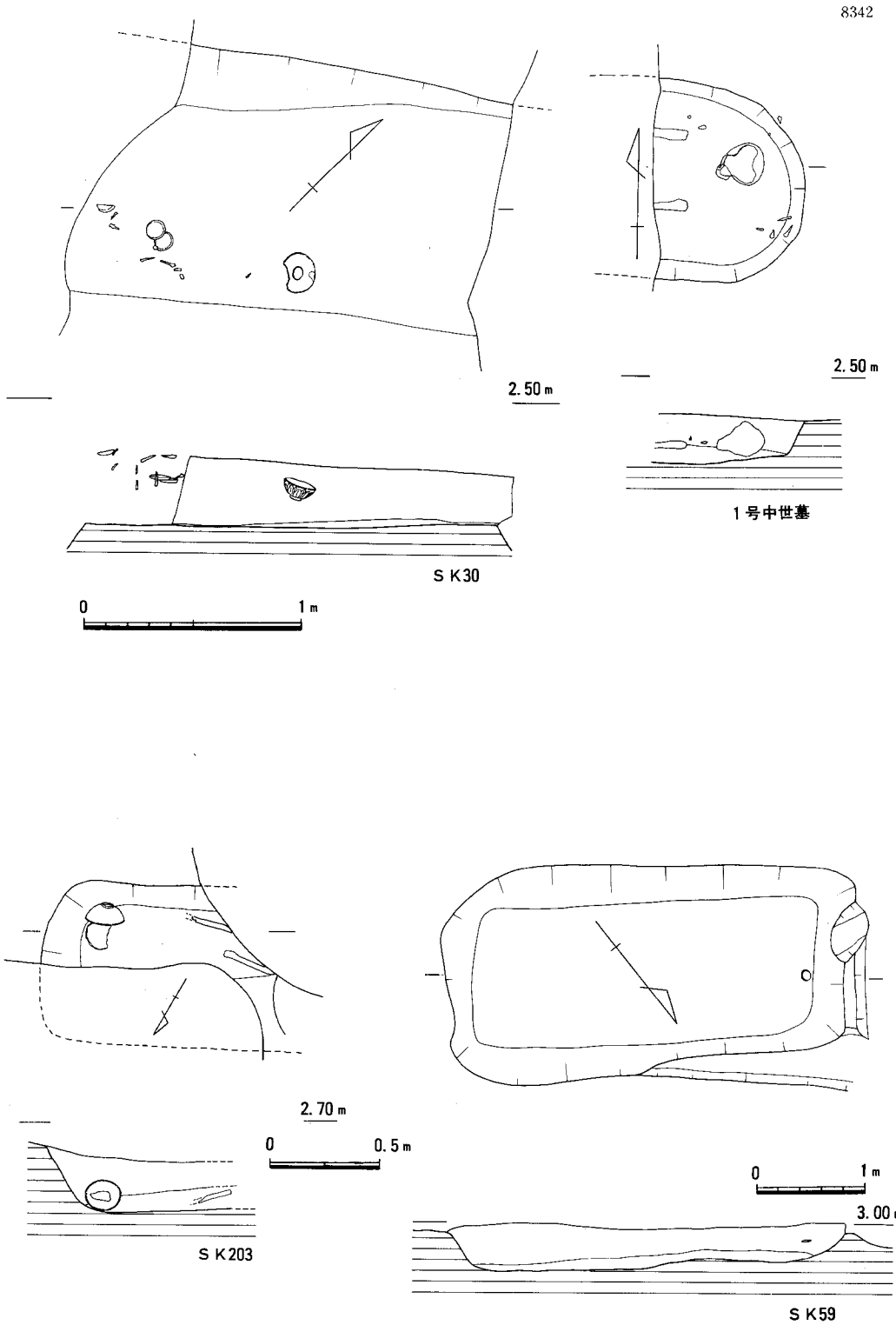


Fig.184　SK30,59,203と1号中世墓

8342

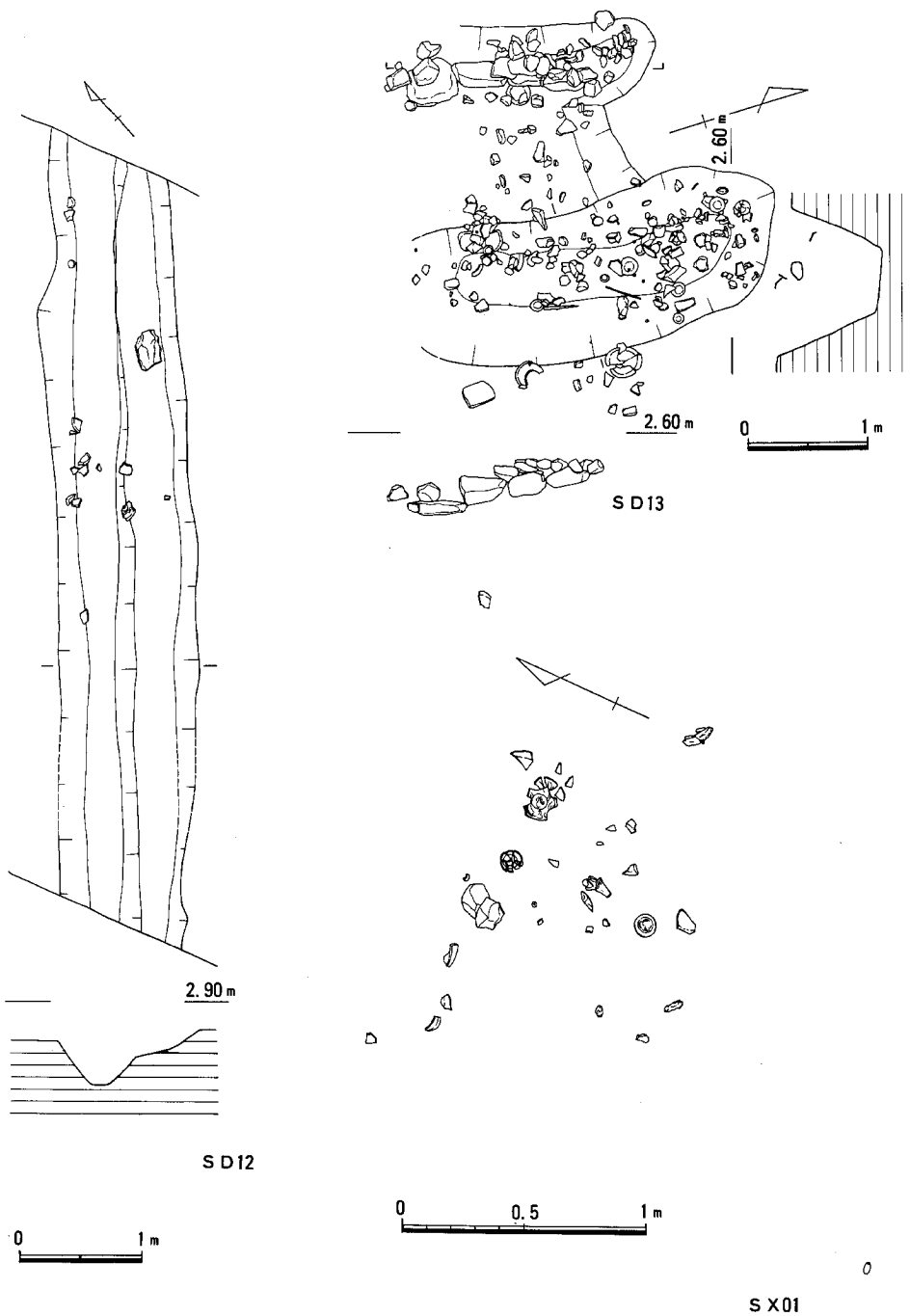


Fig.185 SD12,13と SX01

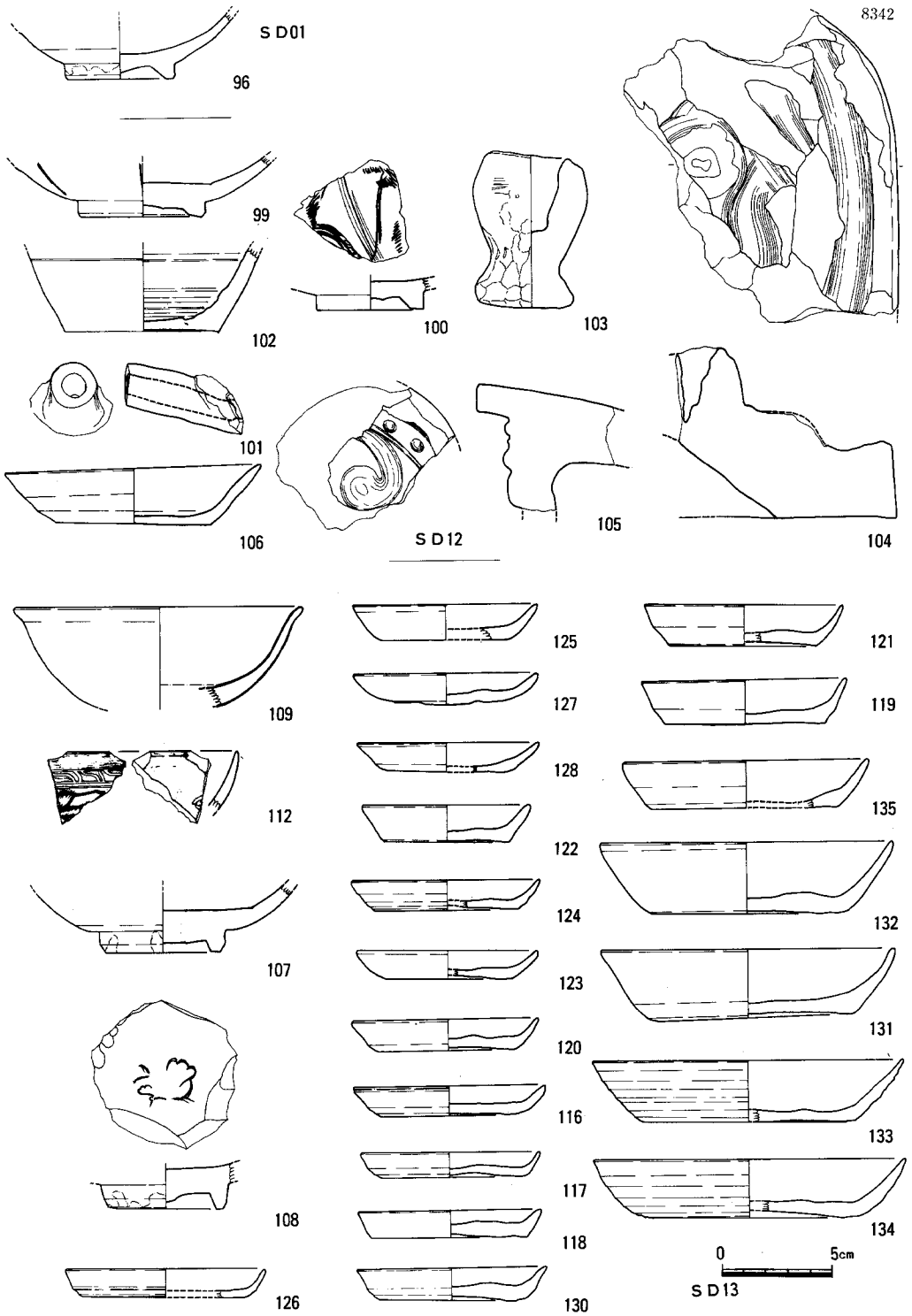


Fig.186　SD01,12,13 出土遺物(1/3)

8342

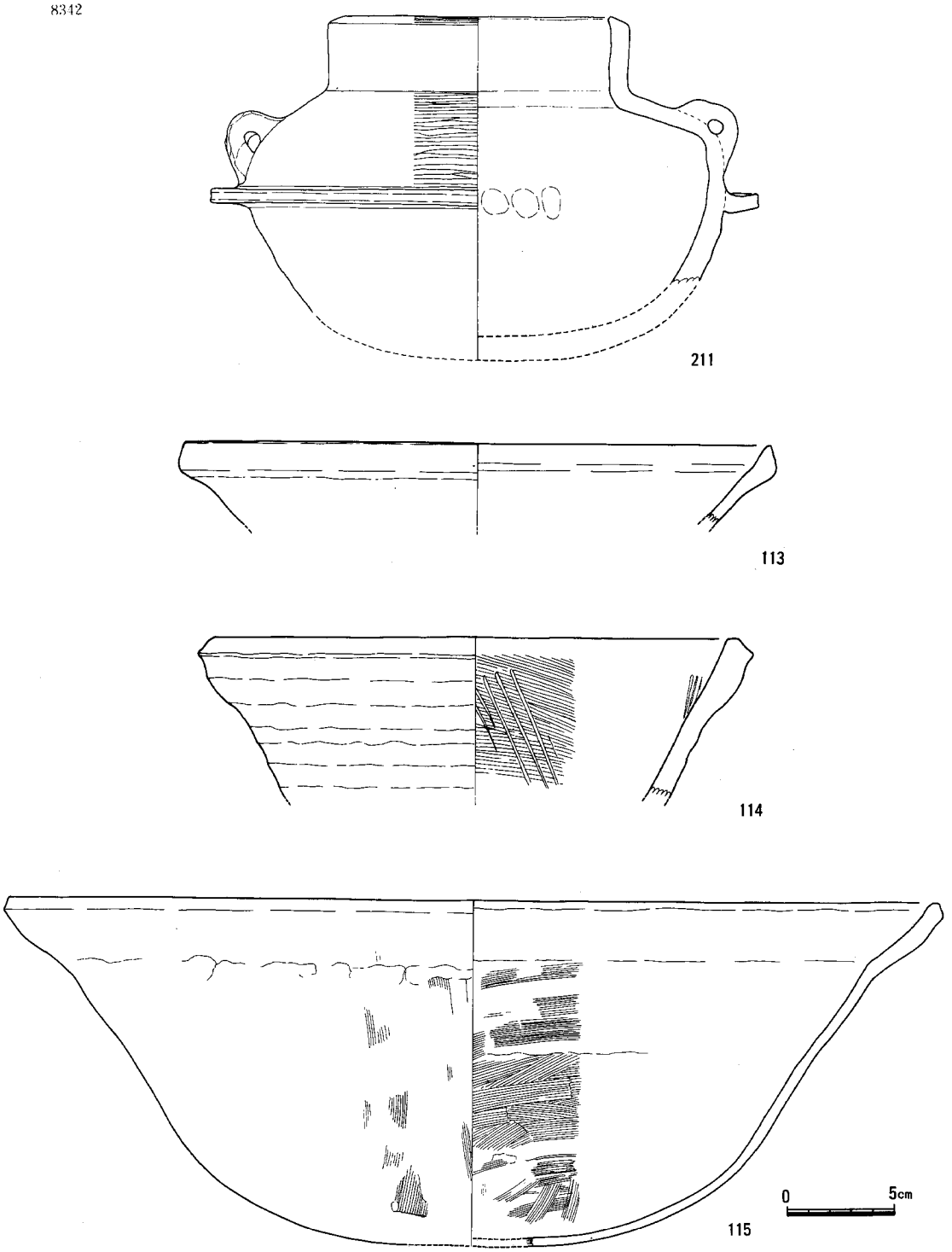


Fig.187　ＳＤ13出土遺物(1/3)

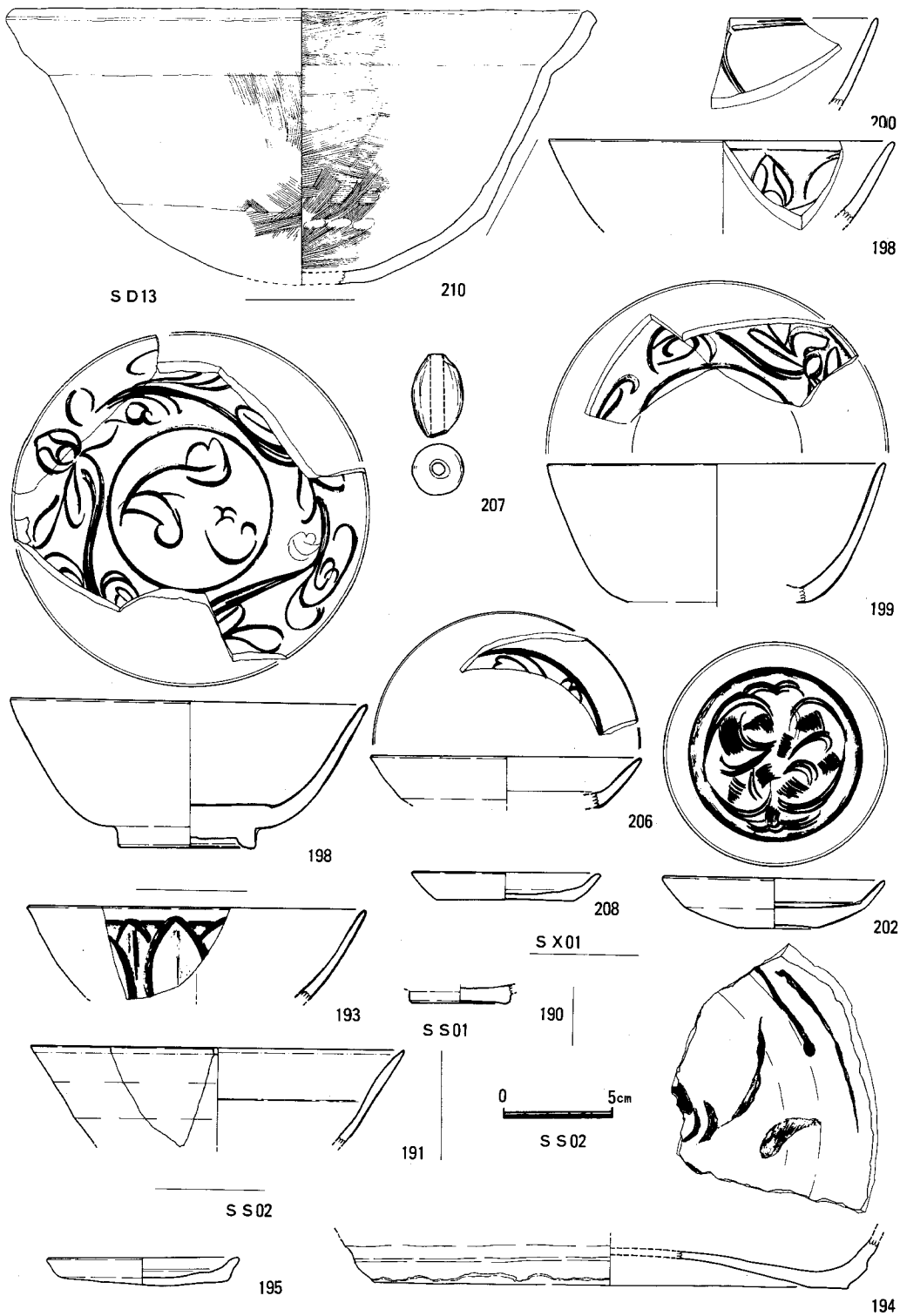


Fig.188　S D13, S X01, S S01,02出土遺物 (1/3)

Fig.189　S S 01

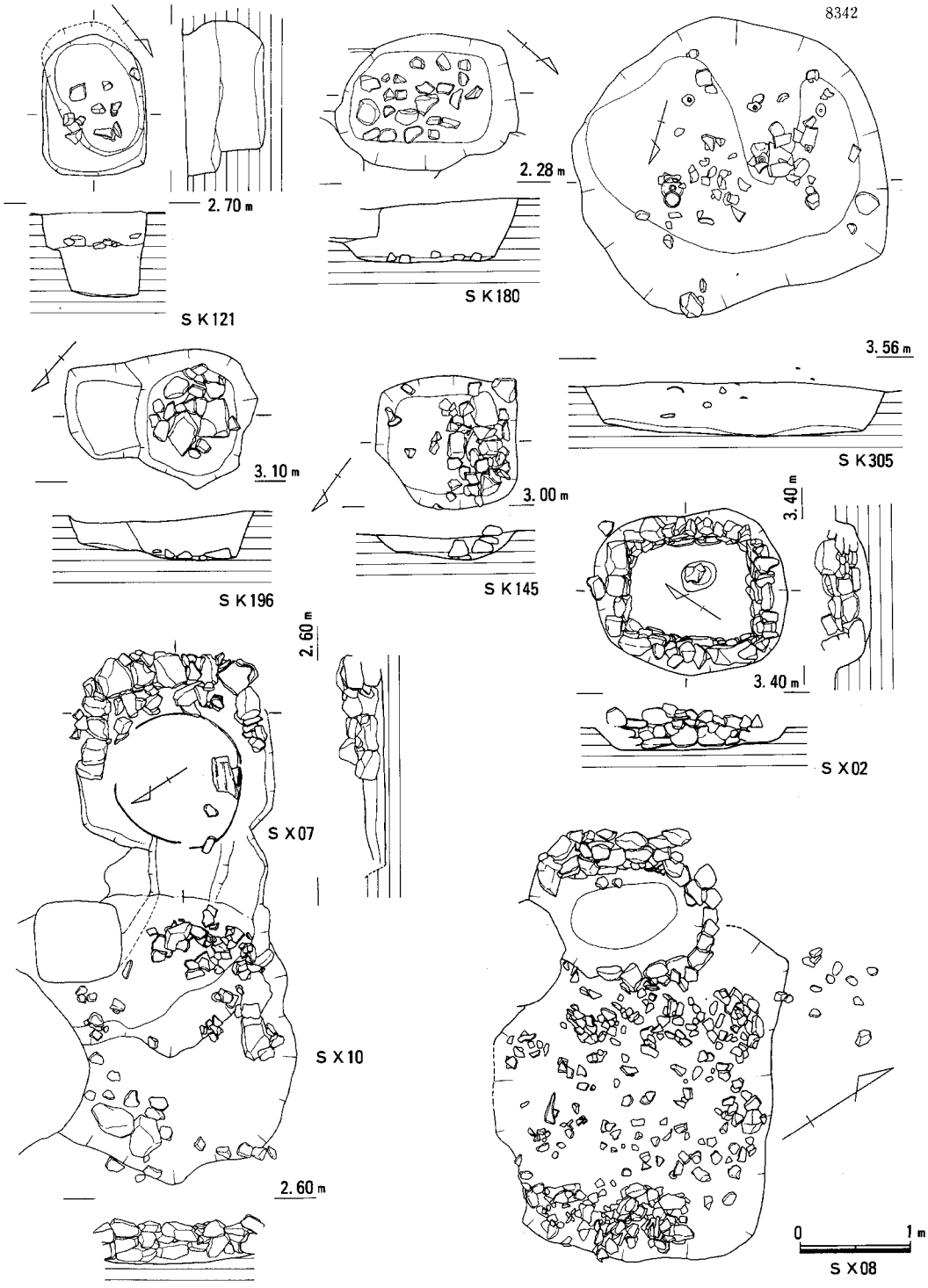


Fig.190　S K121,145,180,194,305と S X02,07,08,10

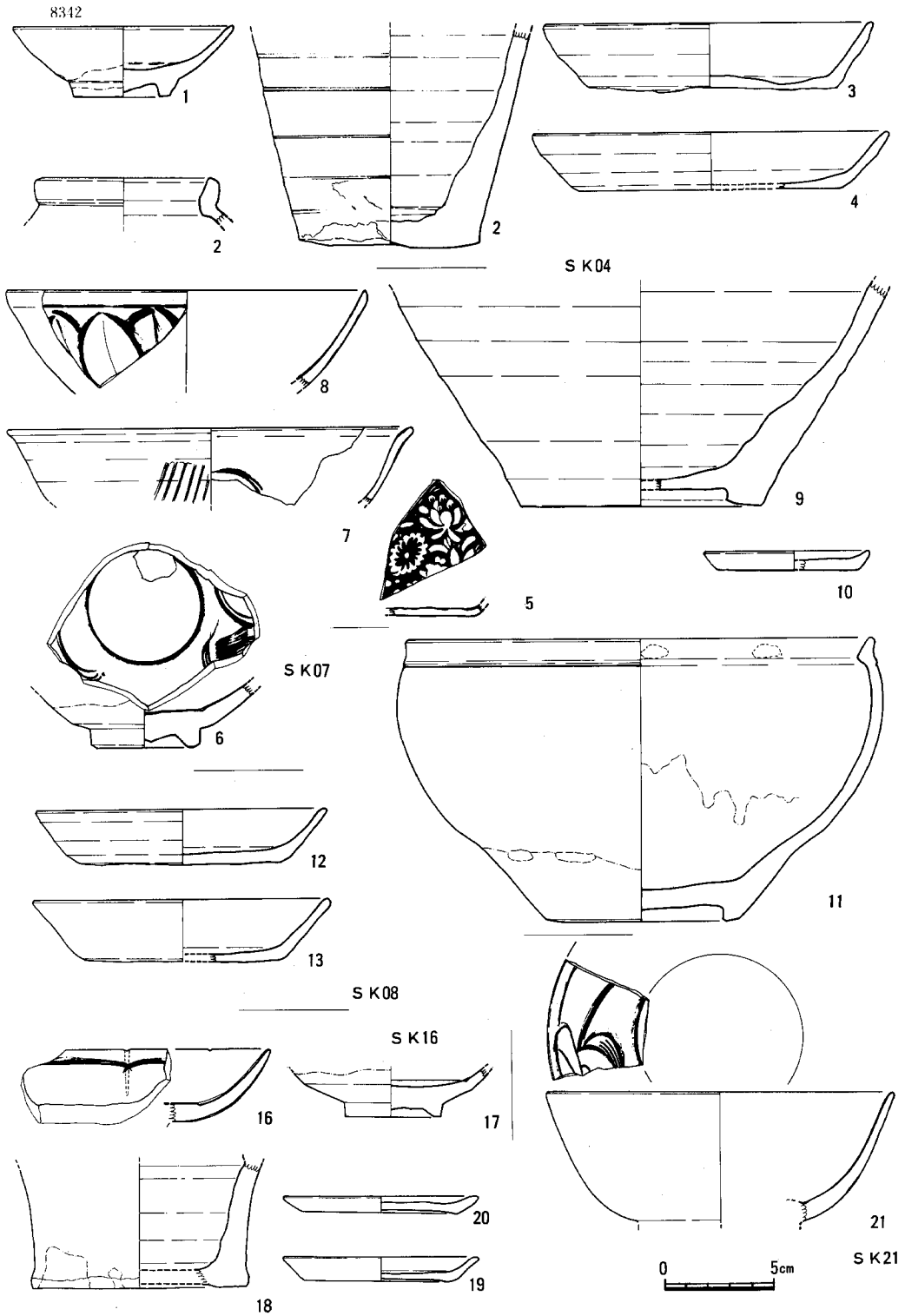


Fig.191　S K04,07,08,10,16,21,出土遺物(1/3)

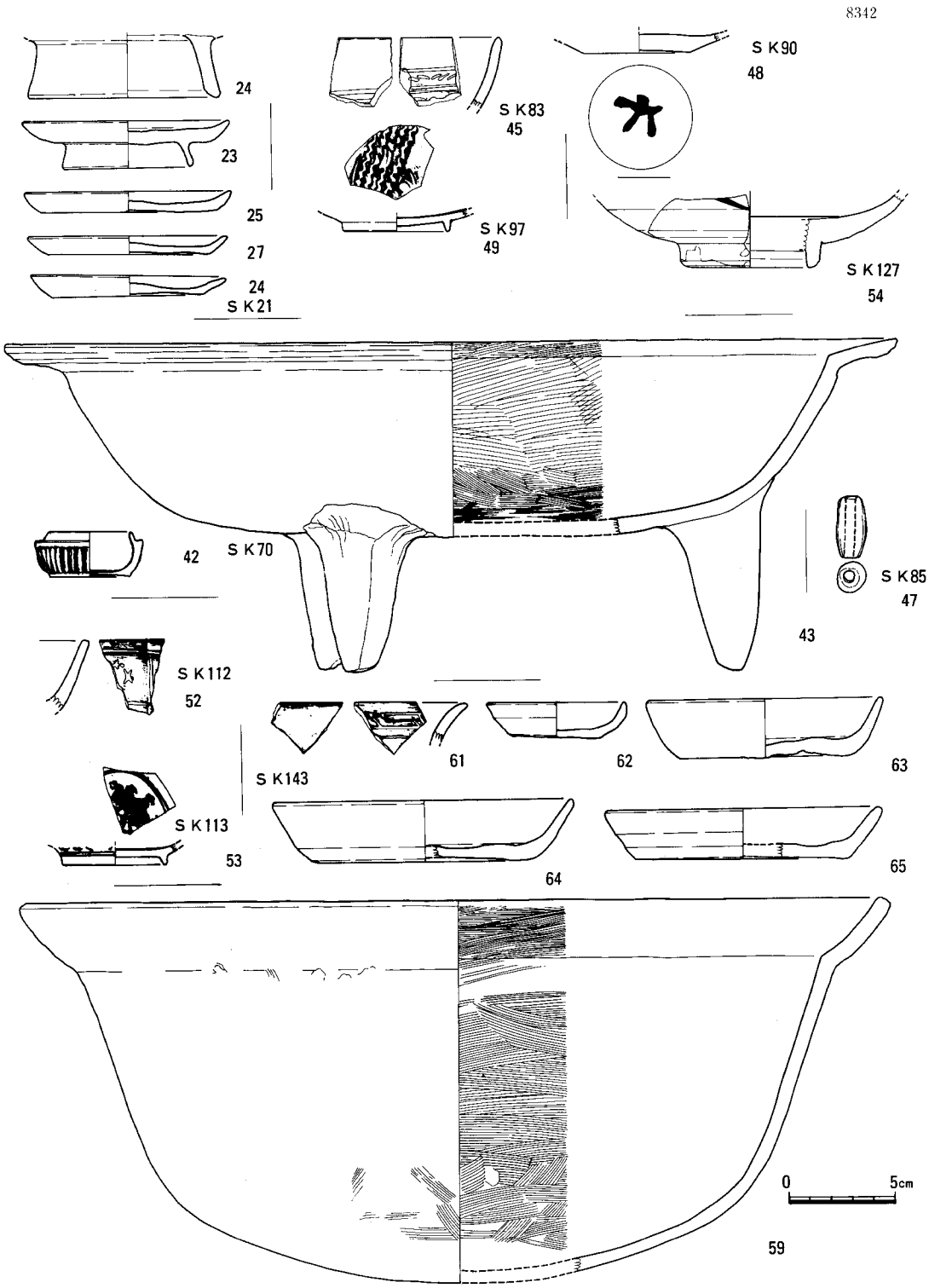


Fig.192　S K21,70,83,85,90,97,112,113,127,143出土遺物 (1/3)

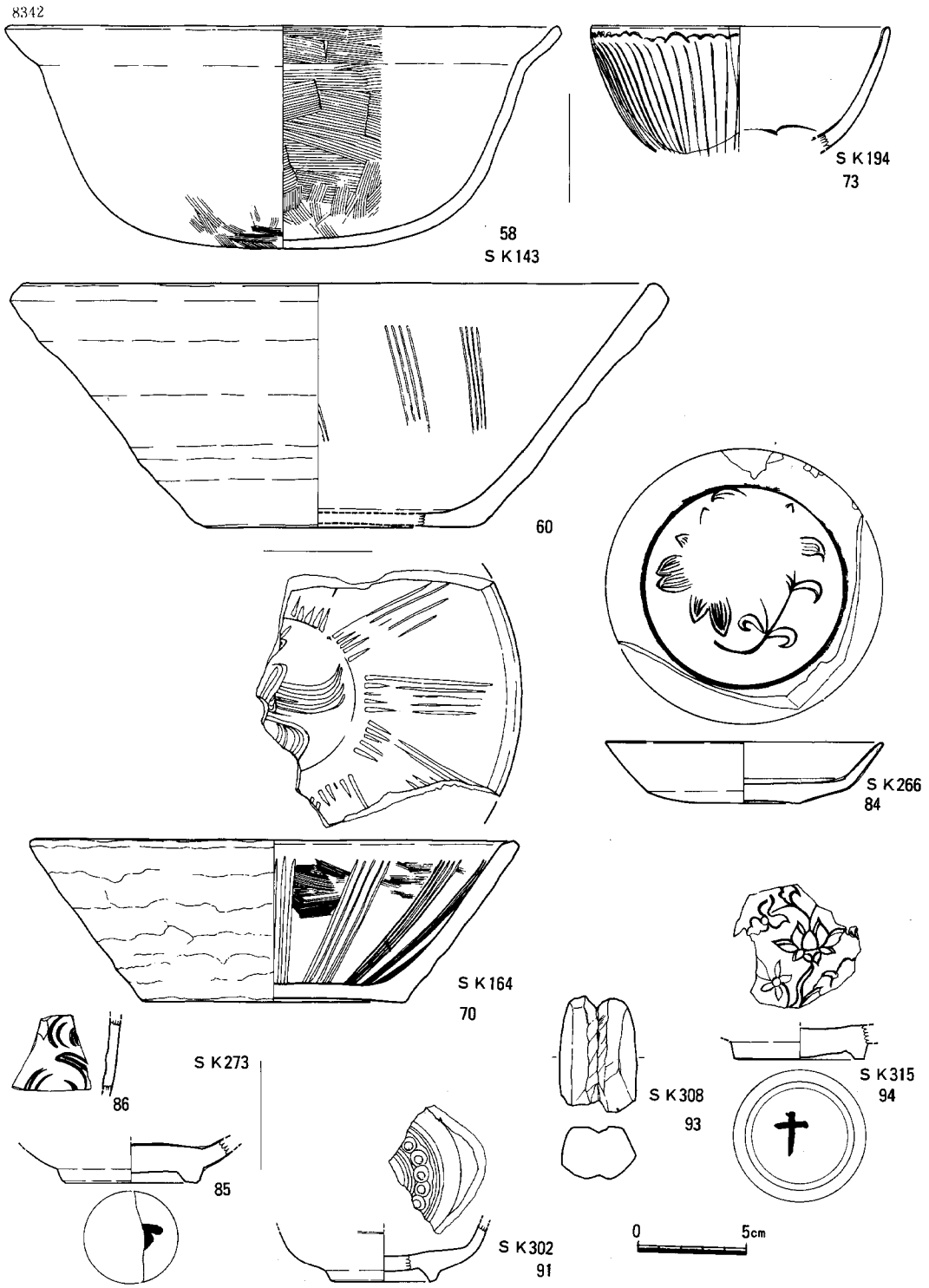


Fig.193　S K143, 164, 194, 266, 273, 302, 308, 315出土遺物(1/3)

官人五百余騎が箱崎・博多の大追捕を行ない、宋人王昇後家をはじめ千六百家の資財物を奪いとり、筥崎宮にも乱入している。文治元（1185）年、石清水八幡宮の道成が筥崎宮検校に補任され、以後中世を通じて石清水八幡宮領として存続した。これらの間、先程の大追捕や、「武備志日本考」に見られる如く、周辺に宋商らの多数居留していたことが推定される。文永11(1274)年の蒙古襲来には戦火を蒙り焼失した。

このような文献史分野からのアプローチで様々な転変が知られているが、考古学的な知見は今まで殆んど知られていなかった。筥崎宮宝物館に所蔵されている白磁茶碗程度であろうか。口径15.2 cm、器高5.8 cm のほぼ完形品で、桐箱蓋裏に墨書きがあり、「白磁碗１個、大正14年１月14日に筥崎宮境内正中線をはさんで『湧出石』に相対するところの老松の根本から発掘された物である」旨記されている。添付書には同様に「大正14年境内老松の根本から発掘したもので、高麗青磁の一種、朝鮮からの伝来品である」旨記されている。実見したところ、中国製の白磁で通常Ⅳ類と呼んでいる三角の大きな玉縁口縁をもつ碗であった。今回の発掘調査が、箱崎、馬出遺跡にはじめて加えられた本格的な考古学的調査のメスであり、これを契機として、福岡県教育委員会でも筥崎宮近辺の粕屋合同庁舎建設にともなう発掘調査が行なわれた。蒙古襲来による火災に起因する焼土層や、多くの遺構、遺物が発見されている。今後の周辺部の調査の進展によって、文献史料の裏付け等が進むであろうし、より具体的な人々の生活の様相が明らかにされるであろう。

第３章　　発掘調査の概要

箱崎、馬出遺跡群における地下鉄関係の発掘調査は昭和58（1983）年７月４日から開始した。各工事区における小工区にしたがって、馬出東工区を1～14区に、馬出西工区を1～16区に小区分した。馬出東・西両工区間の発掘調査の工程調整を交通局にお願いし、馬出東工区の北半の調査を先行し、その後馬出西工区を終了させ、再び馬出東工区南半の調査を行うことになった。調査に先行して行なった土留杭布掘り立会調査の際にかなりの近現代攪乱が認められたため、チャンネル取付け工事の際の表削土掘時に再度立会して、調査不能の部分を摘出した。また生活用道路の確保のため、道路部分については先行して覆鋼したが、地表面から遺構面まで浅いため発掘作業は不可能であり、道路についても調査は行なえなかった。また、各工区間の工程上の問題で、発掘調査は各小工区毎でなく、1～12のブロックに分けて行った。遺跡略号**HZM**、遺跡調査番号は**8342**である。調査は同年12月18日をもって完了した。以下、調査地点北側から1～7ブロック、11ブロック、8•12ブロック、10ブロック、９ブロックに分けその調査概要を記すことにしたい。

1〜7ブロック（Fig. 174）

2号線工事里程2 k 700 m 付近から2 k 783 m までの調査である。67基の土壙と13基の井戸12本の溝、2ケ所の集石遺構などが検出されている。標高3.4 m 程度の現表表面から、80 cm 程掘り下げると黄白色砂の地山となり、この中に遺構は掘り込まれている。工事による用地買収前まで集落があり、近現代の攪乱が多く、遺構、特に土壙については近世以降の廃棄物処理用土壙が多い。実測図についてはこれら近世以降のものを除き、比較的良好な遺存状態をしている遺構と、その出土遺物を中心に掲載している。以下それらについて説明する。

7・6ブロックから4ブロックにかけて5条の溝が、調査区を斜断する形で平行に走っている。この溝の主軸は磁北から40°程度東に扁しており、砂丘最高位を走る大学通りと平行している。周辺の町筋はこの大学通りを基準としたものであり、この溝も町筋の区画を示すものであろう。また、これらの溝の西側に面して**SS01**（Fig. 187、188）があり、溝と平行する。この遺構は溝状の掘方の中に小礫とやや濁った茶褐色砂が充填されているものである。道路と考えるべきであろう。これらの遺構はいずれも13世紀後半頃から14世紀前半代に位置づけられ、またここを境に西側（海側）では中世遺構は見られず、わずかに土鍋が1点完形に近い形で伏せた状態で遺構にともなわず出土した程度である。このことから、鎌倉時代の後半期には、この溝が、集落の西端を画していたのであろう。またこの事実は遺跡範囲確認調査時の結果と一致する。1・7ブロックでは、これらの溝と平行する溝（**SD12**）と直行する溝（**SD01**、**10**）とがある。SD12からは鬼瓦（104）や三色文軒丸瓦（105）が出土している。14世紀代である。SD01、10は現在まで使用されていた道路と一致し、その側溝である。

SK04（Fig. 190）　現代の攪乱によって切られ、プランは明確にしがたいが、ほぼ13世紀代の廃棄物処理土壙である。糸切り底の土師皿がややまとまって出土している。1ブロック検出遺構。

SK07（Fig. 190）　1ブロック検出の廃棄物処理土壙である。SE03に切られ全体プランは不明。同安窯系青磁碗（6、7）、鎬蓮弁文青磁碗（8）、青白磁印花文皿（5）などが出土している。13世紀後半代に位置づけられよう。

SK08（Fig. 190）　1ブロック検出遺構。明確なプランは認められないが、土師皿（12、13）や陶器B群鉢（11）が集中している。13世紀後半から14世紀前半代に位置づけられるが性格は不明。

SK16（Fig. 190）　2ブロック検出遺構。12世紀後半代の土師皿がまとまって出土し、輪花をなし、堆線を施す龍泉窯系青磁皿（16）や高麗青磁梅瓶（18）などが混じる。廃棄物処理土壙である。

SK21（Fig. 190、191）　2ブロック検出。長軸1.5 m、短軸1.1 m の長方形をなす。12世紀

後半代の廃棄物処理土壙である。口径9 cm 前後、器高1.1 cm 程度の糸切土師小皿がまとまって出土しており、高台付のものもある。21は龍泉窯系青磁碗である。

SK30 (Fig. 182、183)　3ブロック検出の木棺墓である。遺構プランは明確でない。龍泉窯系鎬蓮弁文碗（29）と糸切底土師小皿（30、31）が副葬されており、鉄釘8本も散在する。13世紀後半代に位置づけられよう。遺物は必らずしも原位置を留めているとは思えない。

SK59 (Fig. 183)　7ブロック検出遺構である。3.5 m×2 m の長方形の大きな掘り方をもつ。焼けた壁土が出土していることから火災の際の整地に関するものかもしれない。12世紀前半代からの遺物も一部混じるが、遺構年代は13世紀後半代である。土師皿や中国製陶磁が多い。硯も出土している。元寇（文永の役、12年）の際、筥崎宮と周辺は火災にあっており、あるいはこの時に営まれたものかもしれない。

SE12 (Fig. 177、178)　2〜7ブロックにかけて検出した井戸である。径3.3 m 程の擂鉢状の掘方をもち、井筒は木桶組である。13世紀後半から14世紀前半にかけての遺構で「金玉満堂」のスタンプを捺した龍泉窯系青磁碗(140)、印花文を施した白磁皿(139)、東播系片口鉢(141)や蛸壺（136）があり、焼けた壁土や鹿角も出土している。

SE13(Fig. 177、178、179)　7ブロックで検出。建物基礎の攪乱で一部を切られる。1.5 m＋α＋1.5 m の長円形の掘方をもつ。井筒等の痕跡は残っていないが、井戸であろう。13世紀後半から14世紀代に位置づけられる。147は龍泉窯系青磁碗である。157は土師質のかまどで、ひさしをもたない。

SX01 (Fig. 184、187)　7ブロック検出遺構。明確なプランをもたず、礫と陶磁器類が集中する。12世紀後半から13世紀前半に位置づけられる。内面に劃花文を施すⅠ類の龍泉窯系青磁碗皿がまとまっている。207は土師質の土錘である。

11ブロック (Fig. 175)

この調査区では妙徳寺の旧墓地に一部かかり、中世遺構の遺存状態は良好ではなかった。調査区の一部に二条の溝(SD14、15)が検出され、磁北より40°程東扁する。この溝は用地買収時まで機能を果たしていた道路と一致しており、その側溝である。またこれに平行して下水管が走っている。

近世墓　墓域は道路によって区画され、調査区の北、西側に展開する。江戸時代から明治時代にかけての墓65基が検出されている。墓域の縮小によって改葬され、棺の抜き跡のみを残すものもあったが、未改葬のまま打ち捨てられたものも多かった。陶器甕を直立させ、上に蓋石を置くのが一般的な葬法である。人骨は九州大学医学部第2解剖学教室に依頼して取上げていただき、また遺存状態の良好なものについては同教室に保管していただいている。以外の人骨

については、妙徳寺によって供養していただいた。

1号中世墓（Fig. 183）　近世墓墓域の東端で検出されている。下水管によって半分程が断ち切られている。土壙内に棺釘が残り木棺管であるが、副葬品は認められない。近世墓と葬制に明確な違いがあり、また周辺で13世紀後半頃の同様の墓があることから、ほぼ鎌倉時代後半期のものと考えたい。頭蓋骨と上腕骨が残る。

SK266（Fig. 192）　近世墓域内の小土壙である。土師皿、土鍋、近世甕棺の破片に混じり、白磁印花文平皿（84）が出土している。

SK273（Fig. 192）　近世墓域外、東側が検出された径3 m 程の大きな廃棄物処理土壙である。器高の高い土師小皿等とともに青白磁梅瓶（86）や高台内露胎部に墨書のある龍泉窯系青磁碗（85）などが出土している。14世紀前半代の遺構である。

この他、図示していないが **SK255** からは中国製緑釉陶器が、**SK277** では焼けた壁土が出土している。いずれも13〜14世紀代の廃棄物処理土壙である。

8・12ブロック（Fig. 175）

大学通りの北西側に面する調査区である。ここでは10ブロックと同様に、中世末の町屋の構造を知る上で興味深い事実が指摘できる。まず、大学通り寄りのところに柱穴群があり、建物があったことを示し、大学通りから見てその裏手に井戸群がベルト状に並び、更にその奥に石囲いの遺構が集中するという点である。

まず柱穴群から見てみよう。柱穴群は工事里程2 k 580 m を中心に集中しているが、南側の大学通り側は道路覆鋼の関係で調査は不可能であった。多くの柱穴が集中しており、各建物の柱穴の組織的な把握は困難であるが、桁行主軸は大学通りと直行する方向をもっている。径30〜40 cm 程の掘立柱で、中には扁平礫の礎板を置くものも見られる。この建物群は何回もの建て替えを行っており、かなりの切合いを見せている。この柱穴群の分布範囲からは、土壙も出土しているが、いずれも14世紀以前または、近現代の時期のものがほとんどである。

井戸群はほぼ大学通りに平行しベルト状に分布する。23基程が集中している。以下主なものについて簡単に見てみよう。

SE14（Fig. 177、179）　8 ブロック検出。木桶組井戸で、下から 2 段目までが残る。この井筒内から「[illegible] 八月八日(カ) 魔　唵々如律令」と墨書した土師器杯が出土している。水にかかわる物忌札として用いられたものであろう。13世紀中〜末頃と考えられる。

SE18、19（Fig. 177、179、182）　いずれも木桶組である。SE18 が19を切る。SE18 は15世紀後半頃、SE19 は刀子（216）が出土する程度であるが15世紀前半代か。SE18 では李朝青磁角碗（164）、三島手碗（165）、明代染付皿（166）が出土している。

SE28 (Fig. 189、182)　木桶組井戸である。底に把手付鍋形青銅器（178）があった。他には土師皿小破片が1点みられるのみである。SE29（石組井戸）に切られるが、時期は明確にしがたい。中世末から江戸時代にかけてのものか。

SE34、42 (Fig. 180)　ともに木桶組井戸でSE34が新しい出土遺物はほとんど見られず時期は明確にしがたいが、中世末から江戸時代にかけてのものであろう。

SE33 (Fig. 180、182)　12ブロック北東部の井戸集中部にある。木桶組で井筒内に大礫3個が投げ込まれていた。時代染付皿（180）が出土しているのみ。16世紀代以降である。

SE30、35、36、40、41 (Fig. 181、182)　12ブロック北東部で複雑に切合って検出された。それぞれの前後関係は、SE33→30→35→36→40・41の順に古い。いずれも木桶組で、遺物の量は少なく、土師皿小破片、輸入陶磁小破片が小量みられるにすぎないが、江戸時代以降の遺物は含まれておらず、おそらく、14世紀後半もしくは15世紀頃から16世紀代にかけて営まれたものであろう。同一家屋に付属する井戸であろう。SE35の井筒底から銅製紡錘車（217）が出土している。

これら井戸の西側には、石垣に組んだ長方形の遺構とそれに付属すると思われる集石遺構とが出土している（**SX07＋10、SX08**）。これらの遺構はほぼ江戸時代の遺構であるが、井戸、柱穴にも当該期のものがあり、三者の配置的な関係は14世紀後半もしくは15世紀以降ほぼ近代頃まで続いていたものと考えられる。このような石積施設は、博多遺跡群や一乗谷遺跡などで検出されており、貯蔵施設もしくは便槽と考えられている。中世から近世にかけての都市における宅地のあり方からすると、道路に直交する方向で間口がせまく奥行の深い建物があり、井戸があり、畑地と便所があるという例が多い。ここで検出された石積遺構についても便所施設であろう。

廃棄物処理土壙を主とした土壙も多い。**SK70**（Fig. 191）では、三脚付の土鍋（43）や青白磁合子（42）が出土している。**SK302**（Fig. 192）では李朝の象嵌青磁碗（91）があり、**SK308**では滑石製の石錘（93）がある。これらの土壙には15世紀代～近世のものも見られるが、13、14世紀代、および近現代のもある。

各遺構の時間的な変遷と空間的な占地を見てみると、次のような事が言えそうである。13、14世紀の遺構は井戸、土壙等があるが密度は薄く、集落の中心からははずれた地域である。14世紀末もしくは15世紀代から、現大学通りに向って間口のせまい商家風の建物が形成され、その裏手に井戸と畑地または庭をもっていた。江戸時代にはいると石積みの便所施設を設け、畑地での肥料等に屎尿を用いた。このような状況は以後は近代頃まで続いていたのではないか。

10ブロック（Fig. 176）

馬出西区である。大学通りの南側にあたる。路線はこの付近よりカーブを描く。14 m×11 m程の狭い調査区であったが、上・下2面に分けて調査できた。SE22～27の6基の井戸と、SK144～203の60基の土壙および数回の建替があるものの2～3棟の掘立柱建物の柱穴が検出されている。

調査面積がせまいため、建物の全容は把握できないが、1棟分については、ほぼ把えうる。この建物は大学通りに面し、直交する方向で建っており、柱筋が直線に並ぶ。1間1.8 mで、間口2間もしくは3間、最大奥行が5間＋αの細長い建物である。柱穴には扁平礫の礎板を置く例も多い。建替回数は明らかにしがたいが、5回以上は繰り返されていよう。しかし、道路側柱の密度の濃さに比べ、奥側は薄く、ある時期に奥が増築されているように見える。15世紀から近代まで継続した町家のあり方であろう。

井戸群も11ブロックとほぼ同様の分布をしめし、家屋の裏手に集中する傾向を見せている。**SE22**、**23**は近代のポンプ井戸である。**SE24**は調査区外に半分があり、井戸かどうか明確でない。**SE26**、**27**は近世井戸である。**SE27**は瓦組の構造をもつ。

SE25（Fig. 179、180）　大きな掘方をもつ木桶組井戸で、多量の遺物が出土している。明代の染付(174～176)、白磁を中心に、鎌倉、室町時代の遺物が混在する。判読できないが底部に墨書をもつ白磁平底皿（177）もある。16世紀代に位置づけられよう。

土壙には廃棄物処理用と考えられるものが多いが、土壙墓や、長方形の掘方をもつもの、またさらに石積みを行うものなどが見られる。

SE203（Fig. 182、183）　近世掘方に切られ全容は不明であるが、ほぼ長方形の土壙墓である。頭蓋骨と大腿骨が遺存するが状態は不良。頭部に同安窯系青磁碗（215）を副葬する。頭位をほぼ北東に向けている。13世紀代。当該期の墓は他になく、単独で営まれている。

SX02(Fig. 189)　1.25×1.0 mの長方形のプランをもち、外壁を石垣状に石積みする。近世の遺構で、中から近世陶磁類が多数出土し、最終的には廃棄物処理に用いられているが、11ブロックでも述べたように、本来的には便槽として用いたものであろう。

SK145（Fig. 189）　SX02に近接する。本来は同様の石積をもつものと思われる。近世遺構である。

SK180(Fig. 189)　1.5×1.2 mの長方形の掘方である。床面に礫が置かれている。遺物は見られない。

SK194(Fig. 192)　径0.75 m程の不整円形の掘方である。16世紀代の廃棄物処理土壙で線描き細蓮弁文青磁碗（73）や明代染付などが出土している。

SK196（Fig. 189）　1.7×1.25 m程の不整長方形の掘方で、片側に礫が集中して置かれる。土鍋、瓦質鉢などの遺物が小量出土している。

これらの土壙は鎌倉時代から現代に到るまでの時期のものが含まれる。

9 ブロック (Fig. 176)

馬出西工区で、2 k 254 m から470 m を中心とした地点の調査を行った。箱崎馬出遺跡群のほぼ西端に位置するが、一部西鉄路線バス専用道路にかかり、L 字状の範囲のみの調査となった。ここでは上下二面に分けて調査できたが、必ずしも明確な時期差を示すものではない。SK83～143 の61基の土壙と、1 基の近代井戸、1 条の溝状遺構、ピット群が検出できた。ピット群は範囲がせまいこともあって建物の配置等は明確にできない。

SD13 (Fig. 184～187)　調査区南端にあり、一部調査区外にはずれているため全容は不明である。西側には石垣状の石積みがあり、浅いテラス状の段の東側に深い溝状の落ち込みがあり、多量の遺物が廃棄されている。あるいは池であったかもしれない。土師皿類が小破片も含め500余点出土しているが、いずれも糸切で実測可能なものについては図示している(116～135)。109は見込掻取の龍泉窯系青磁碗、112は白と黒の象嵌をした李朝青磁碗である。このほか瓦質の鍔付湯釜（211)、東播系の須恵質鉢（113)、口縁部を鍔状に外反させ内外面をハケ目調整する土師質土鍋（115、210）などがある。15世紀代の遺構である。

SK121 (Fig. 189)　1.2 m×1.0 m のほぼ長方形のプランをもつ。覆土中央部に礫が置かれている。遺物は少ないが土鍋等が見られる。石積をもつ同形の遺構とはやや性格を異にし廃棄物処理専用と考える。15世紀代であろう。

このほか多くの土壙が見られるが13世紀代から近現代まで時期は様々であるが、出土する遺物は各時期のものに混って11世紀後半代のものも出土している。

第4章　ま　と　め

地下鉄 2 号線の工事にともなう箱崎馬出遺跡群の調査は、古代から中世を通じて栄えた筥崎八幡宮の周辺の初めての調査で、遺跡が広い範囲に存在することを明らかにした。県教育委員会でも粕屋総合庁舎新築にともなって発掘調査が行なわれるなど、今後も調査が行なわれていくものと思われ、それらの資料の集積によって、筥崎周辺遺跡、すなわち箱崎馬出遺跡群の具体的な様相も次第に明らかになってゆくだろう。今回の調査では、遺跡群の西南端をかすめるような調査区であったため、「大唐街」など筥崎宮と関りあいのある中国商人の居留地などは明確にできなかったが、遺物としては11世紀代のものから見られ、平安時代末期から室町期まで集落が形成されていたものと思われる。ここで指摘しておかねばならないのは、砂丘最高位を走る大学通りを中心としてその両側に、14世紀末もしくは15世紀代に定形化した集落が形成されはじめることである。それ以前の遺構の散漫な分布に対し、明確な占用区分が見られ、それ

が近現代まで継続されているといえる。この頃、筥崎宮の門前町あるいは、街道沿いの商家街が形成されてゆくのであろうか。出土遺物については博多遺跡群にこそ比較のしようがないが、遺跡群端部に位置することを考えても、多量の中国、朝鮮など貿易陶磁の出土することは、筥崎宮の対外交渉の拠点としての性格を明らかにするに充分である。

箱崎馬出遺跡群出土主要遺物一覧

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
00001	SK-4	白磁	高台付皿
2	↓	陶器	長瓶
3	↓	土師皿	↓
4	↓	↓	↓
5	SK-7	青白磁	皿
6	↓	青磁	碗
7	↓	↓	↓
8	↓	↓	↓
9	↓	陶器	四耳壺又は水注
10	↓	土師皿	↓
11	SK-8	陶器	鉢
12	↓	土師皿	↓
13	↓	↓	↓
14	SK-9	青白磁	皿
15	SK-10	石製品	↓
16	SK-16	青磁	高台付皿
17	↓	白磁か朝鮮	碗
18	↓	高麗青磁	梅瓶か
19	↓	土師皿	↓
20	↓	↓	↓
21	SK-21	青磁	碗
22	↓	陶器	↓
23	↓	土師皿	↓
24	↓	↓	↓
25	↓	↓	↓
26	↓	↓	↓
27	↓	↓	↓
28	SK-24	鞴	羽口
29	SK-30	青磁	碗
30	↓	土師皿	↓
31	↓	↓	↓
32	SK-56	↓	↓
33	↓	↓	↓
34	SK-59	陶器	盤
35	↓	滑石製品	↓
36	↓	↓	把手
37	↓	↓	↓
38	↓	石製品	硯
39	↓	土師皿	↓
40	↓	↓	↓
41	SK-59	土師皿	↓
42	SK-70	青白磁	合子の身
43	↓	土師質	脚付土鍋
44	SK-80	天目	碗（国産）
45	SK-83	象嵌	↓
46	SK-84	朝鮮	碗
47	SK-85	土錘	↓
48	SK-90	青磁	皿
49	SK-97	青白磁	高台付皿
50	SK-101	土師質	擂鉢
51	↓	石製品	硯
52	SK-112	朝鮮	象嵌
53	SK-113	染付	↓
54	SK-127	青磁	碗
55	SK-137	石製品	砥石
56	↓	土師質	土鍋
57	↓	↓	↓
58	SK-143	↓	↓

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　　形
59	↓	↓	↓
60	↓	瓦質	擂鉢
61	SK-143	象嵌	↓
62	↓	土師皿	↓
63	↓	↓	↓
64	↓	↓	↓
65	↓	↓	↓
66	SK-162	石製品	砥石
67	↓	↓	↓
68	SK-164	石器	↓
69	↓	滑石	石鍋
70	↓	瓦質	擂鉢
71	↓	土師皿	↓
72	↓	↓	↓
73	SK-194	青磁	碗
74	SK-199	土師皿	↓
75	↓	↓	↓
76	↓	↓	↓
77	↓	↓	↓
78	↓	↓	↓
79	SK-255	青磁	盤か鉢
80	↓	白磁	壺口縁
81	↓	陶器	捏鉢
82	↓	↓	壺
83	↓	緑釉	↓
84	SK-266	白磁	平底皿
85	SK-273	青磁	碗
86	↓	白磁	梅瓶
87	SK-297	土師質	土鍋
88	↓	土師皿	↓
89	↓	↓	↓
90	↓	↓	↓
91	SK-302	象嵌青磁	↓
92	SK-303	白磁	枢府タイプ
93	SK-308	滑石	石錘
94	SK-315	白磁	印花文
95	SK-318	土師皿	↓
96	SD-01	白磁	碗
97	SD-11	針師皿	↓
98	↓	↓	↓
99	SD-12	青磁	碗
100	↓	↓	高台付皿
101	SD-12	陶器	水注の注口
102	↓	↓	瓶
103	↓	須恵質	杯
104	↓	鬼瓦	↓
105	↓	軒丸瓦	↓
106	↓	土師皿	↓
107	SD-13	青磁	碗
108	↓	↓	↓
109	↓	↓	↓
110	↓	↓	↓
111	↓	黒褐釉	↓
112	↓	朝鮮	象嵌
113	↓	須恵質	鉢（東播系）
114	↓	↓	擂鉢（〃）
115	↓	土師質	土鍋

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
116		土師皿	
117			
118			
119			
120	↓	↓	
121	SD-13	土師皿	
122			
123			
124			
125			
126			
127			
128			
129			
130			
131			
132			
133			
134			
135	↓	↓	
136	SE-12	土師質	たこ壺
137		陶器	壺か甕
138	↓	土師質土器	釜
139	SE-12本体	白磁	平底皿
140	↓	青磁	碗
141	SE-12本体	東播系	鉢
142		土師質	土鍋の把手
143		鹿の角	
144		土師皿	
145			
146	↓	↓	
147	SE-13	白磁	碗
148			↓
149			高台付皿
150			平底皿
151		↓	袋物
152		青磁	皿
153			碗
154		↓	↓
155		陶器	四耳壺
156		↓	↓
157		土師質土器	かまど
158	↓	土師皿	
159	SE-14本体	黒褐釉	碗
160	↓	青磁	↓
161	SE-14本体	土師質	土鍋
162		↓	↓
163	↓	土師皿	
164	SE-18掘方	朝鮮青磁	八角碗
165		↓	象嵌碗
166		染付	皿
167		青磁	↓
168			碗
169		↓	盤
170			土鍋

遺物番号	地区・層位・遺構	遺物の種類	器　形
171		土師質	たこ壺
172		土師皿	
173	↓	↓	
174	SE-25	染付	碗
175			皿
176		↓	↓
177	↓	白磁	平底皿
178	SE-28	銅製品	鍋型仏具
179	SE-30堀方	石玉	
180	SE-33	染付	皿
181	SE-36掘り方	滑石製	石鍋
182	SE-38（本体）	↓	↓
183		焼塊土	
184		土師皿	
185			
186			
187			
188	↓		
189	SE-38堀方	↓	
190	SS-01	白磁	高台付皿
191			口ハゲ碗
192		↓	↓
193	↓	青磁	碗
194	SS-02	陶器	盤
195	↓	土師皿	
196	SS-不明	青磁	碗
197	↓	土師皿	
198	SX-01	青磁	碗
199			
200	↓	↓	↓
201	SX-01	青磁	碗
202			平底皿
203		↓	碗
204		白磁	壺
205			碗
206		↓	平底皿
207		土製品	土錘
208	↓	土師器	皿
209	SX-07	陶磁器（朝鮮）	象嵌碗
210	SD-13	土師質土器	土鍋
211		瓦質土器	湯釜
212	↓	土師器	皿
213	SE-34		
214	↓	↓	↓
215	SK-203	青磁	碗
216	SE-19	鉄製品	刀子
217	SE-35		紡錘車
218	SK-88	↓	
219	SK-109	滑石製品	
220	SK-113	鉄製品	釘
221			かすがい
222			
223	↓		釘
224	SK-117		鈎
225	SK-169	↓	

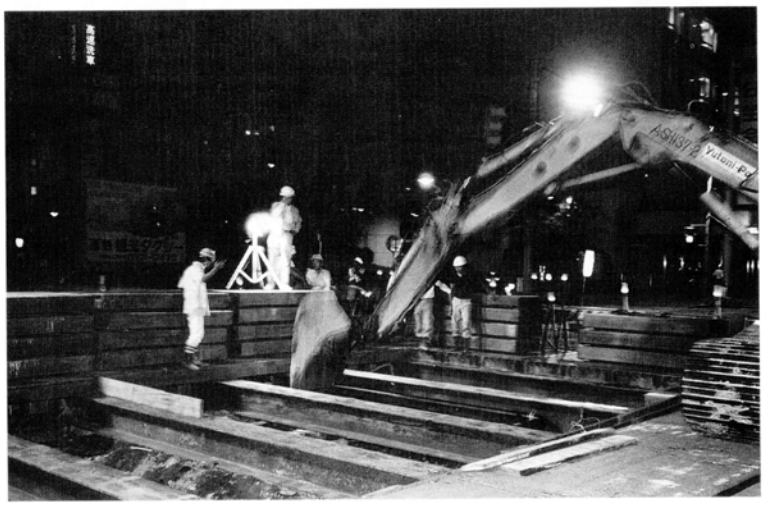
写真図版
PLATES

※縮尺不同
遺物番号は挿図と一致する。

博多遺跡群遠景（博多駅上空から）

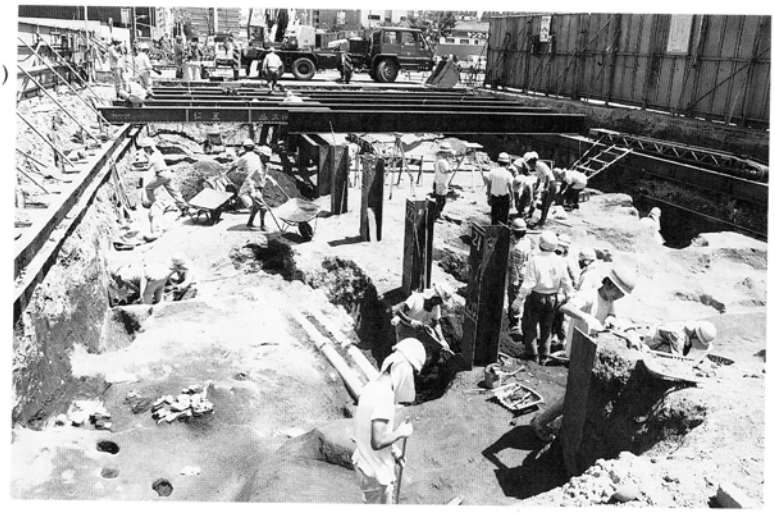
1.　I区調査風景（北から）

2.　I区調査風景（西から）



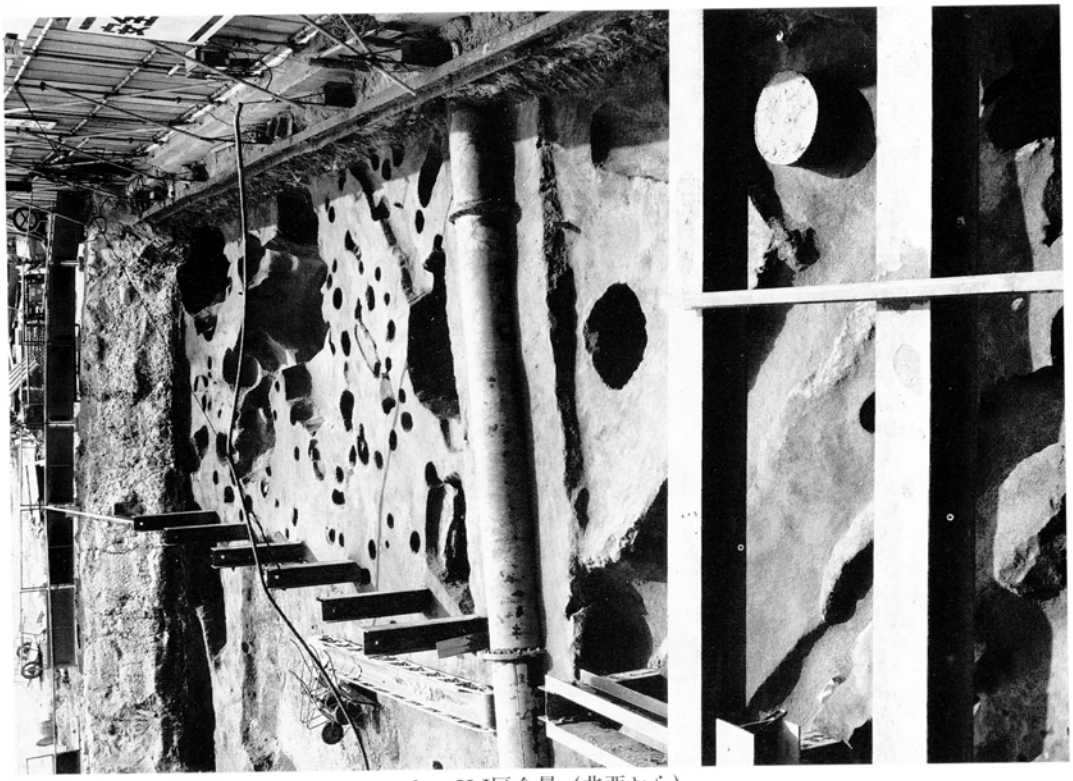
3.　夜間調査区表土剝ぎ風景

1. N区調査風景（北から）

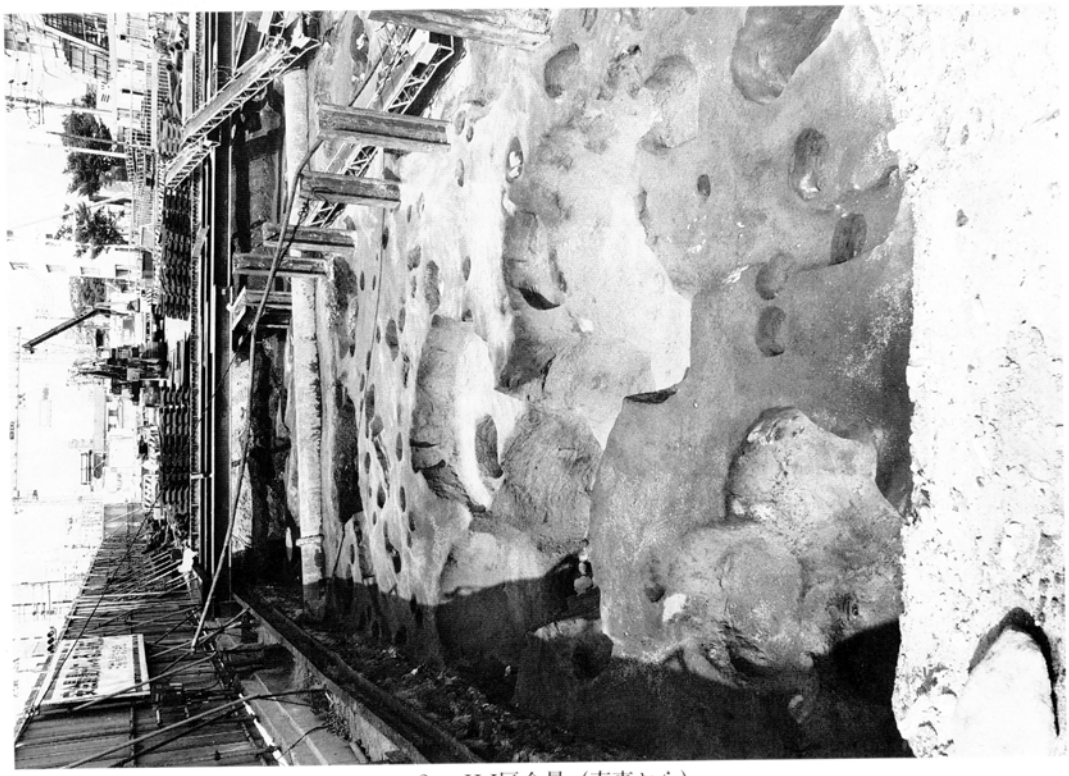


2 L区調査風景（東から）

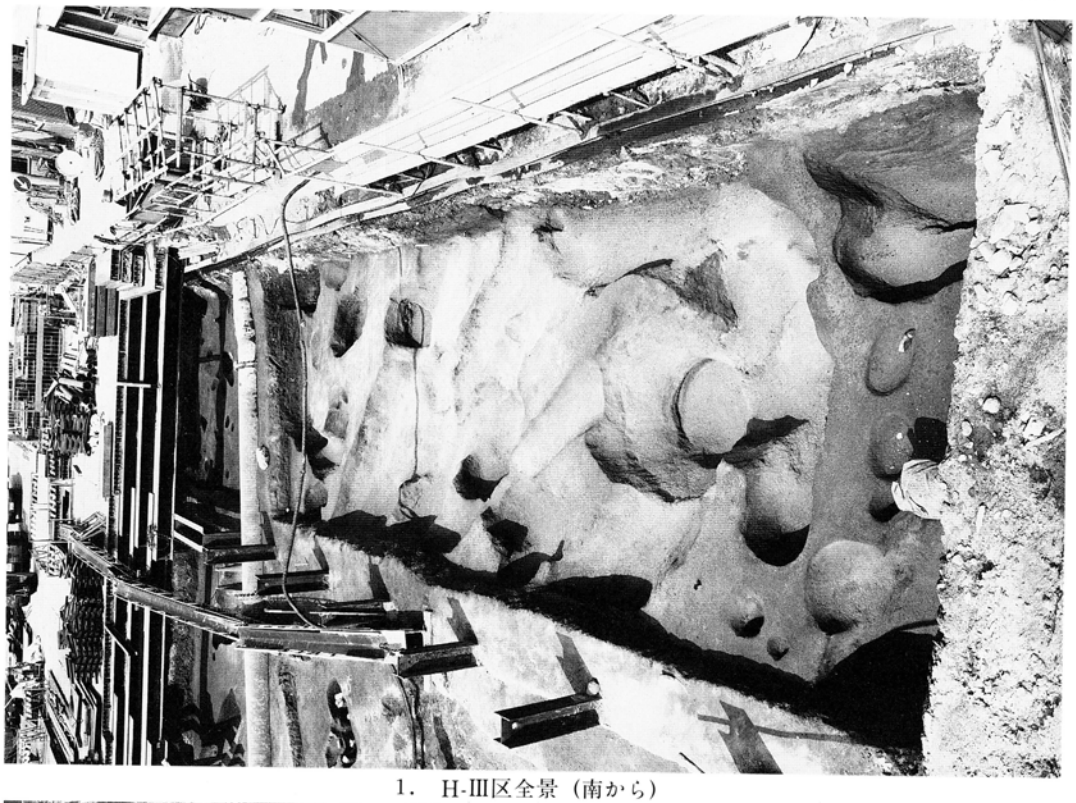
3. Q区調査風景（南から）



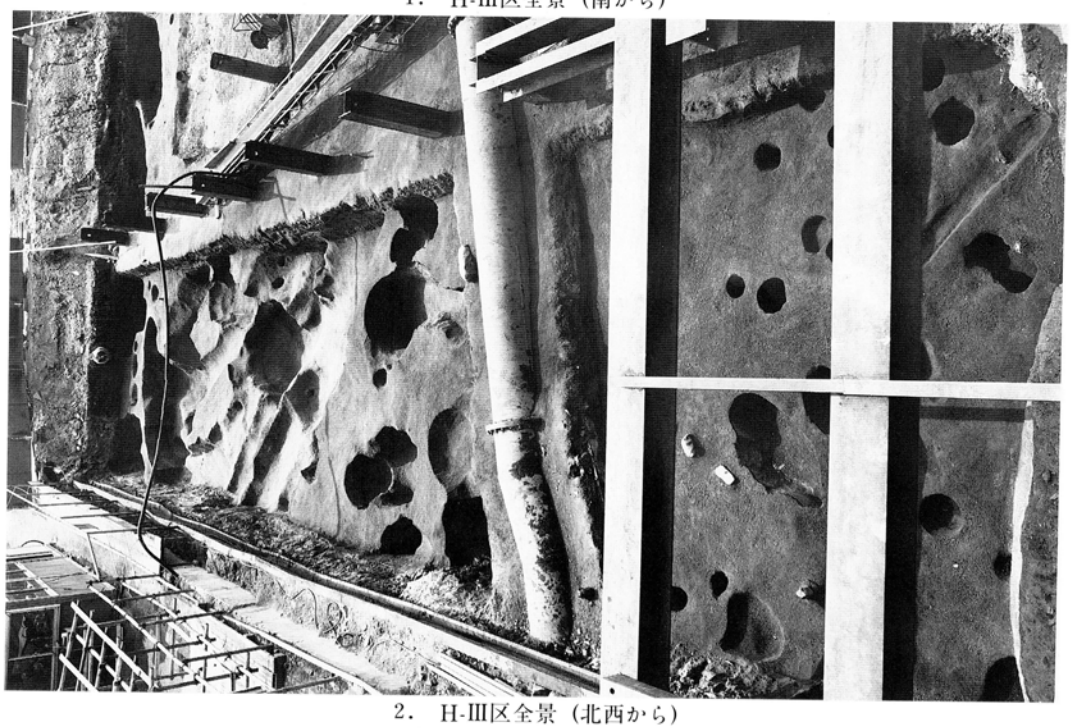
1. H-I区全景（北西から）



2. H-I区全景（南東から）

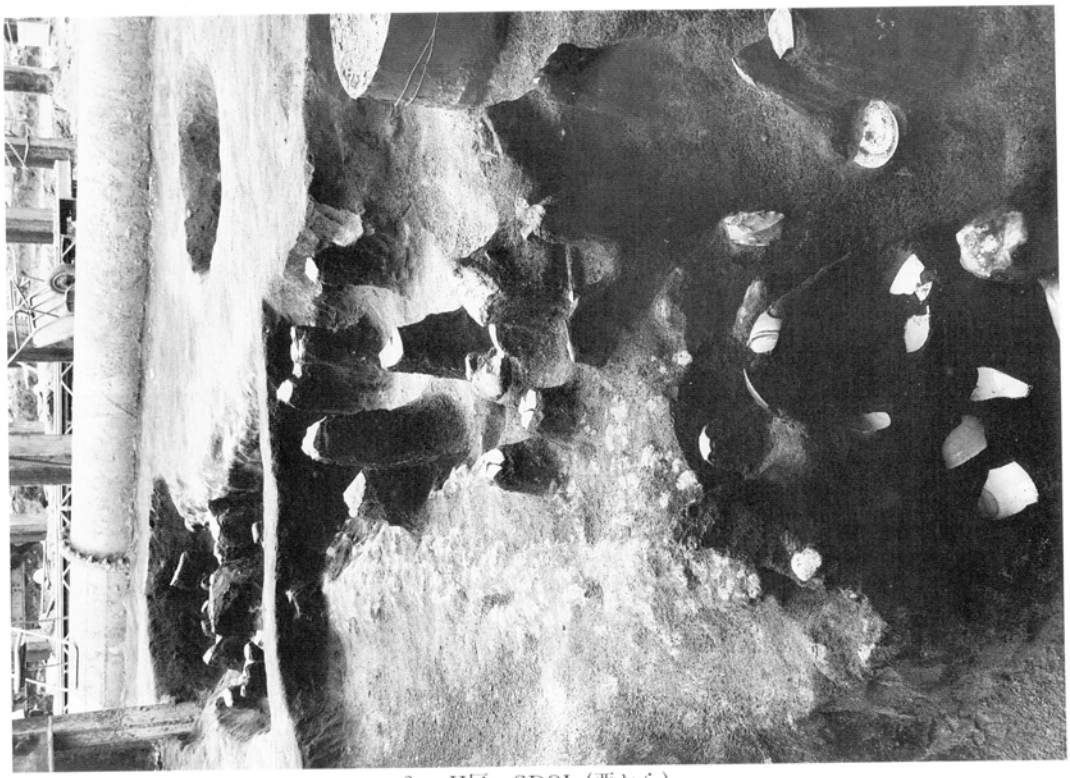


1. H-Ⅲ区全景（南から）



2. H-Ⅲ区全景（北西から）

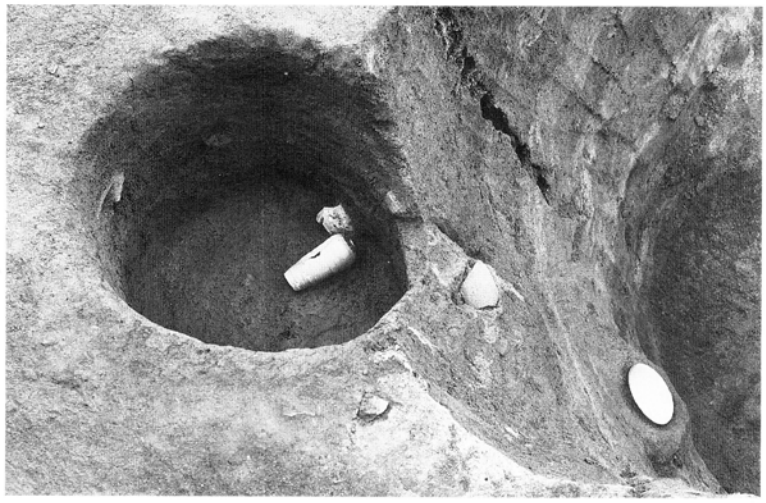
1. H区 SDOI（東から）



2. H区 SDOI（西から）

1. H区 SK17（上）

2. H区 SK17（中）



3. H区 SK17（下）

1. I—I区下面（南東から）

2. I—I区上面（南東から）

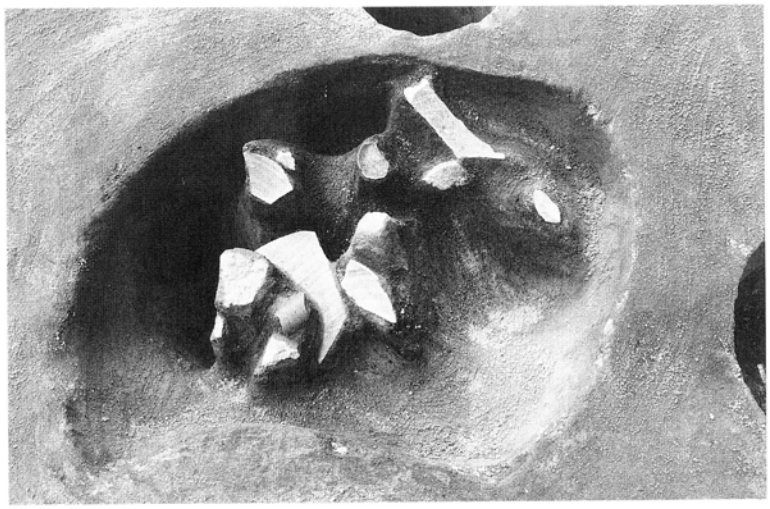
1. I-II区下面全景
(北西から)

2. I区 SDOI (西から)

1. I区 1号墓（西から）

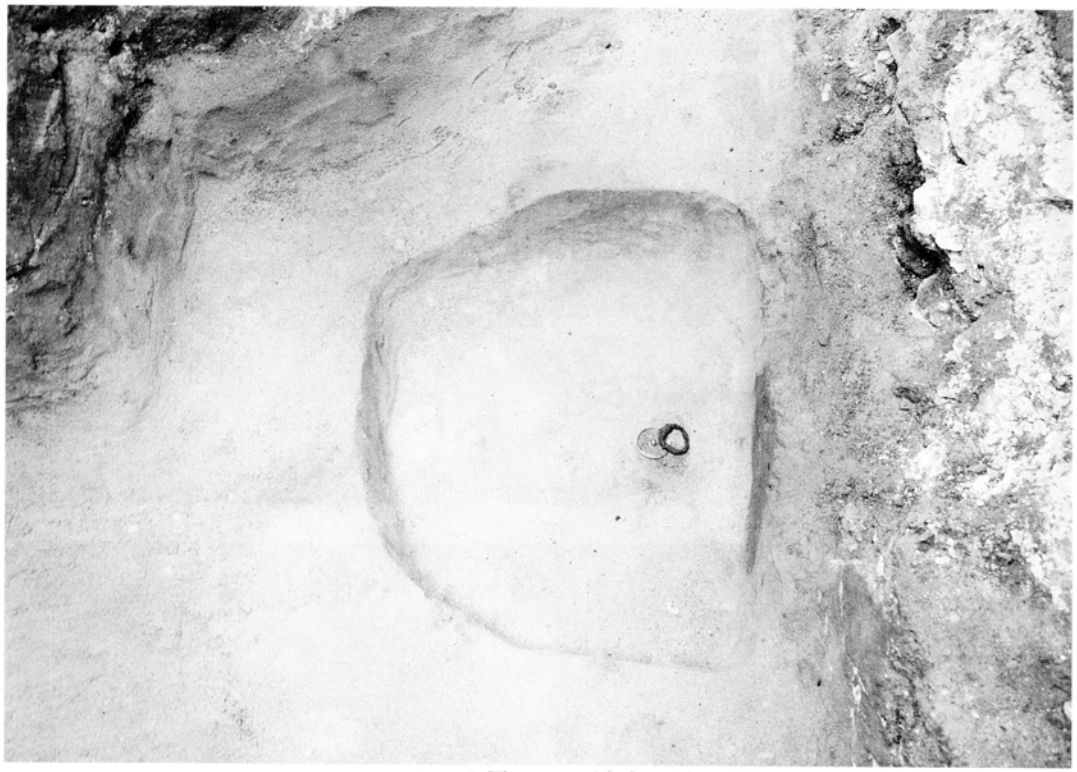
2. I区 2号墓（西から）

1. I区 SK25（北東から）

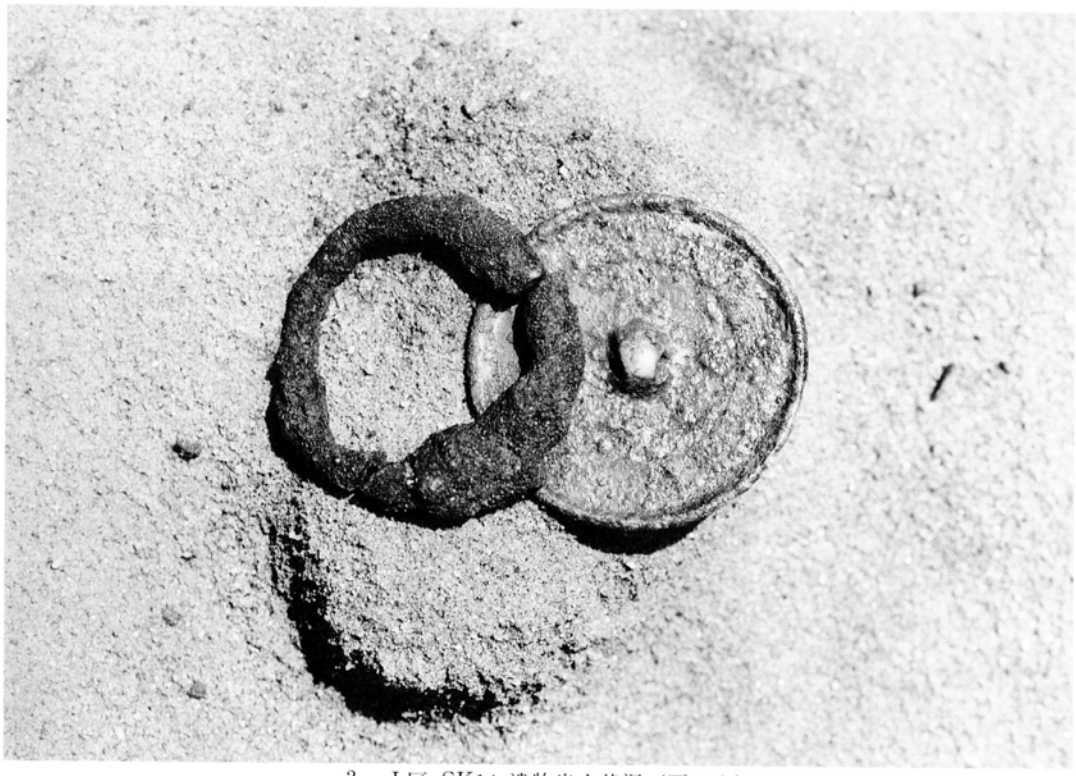


2. I区 SK28、29、30（西から）

3. I区 SK29
遺物出土状況（西から）



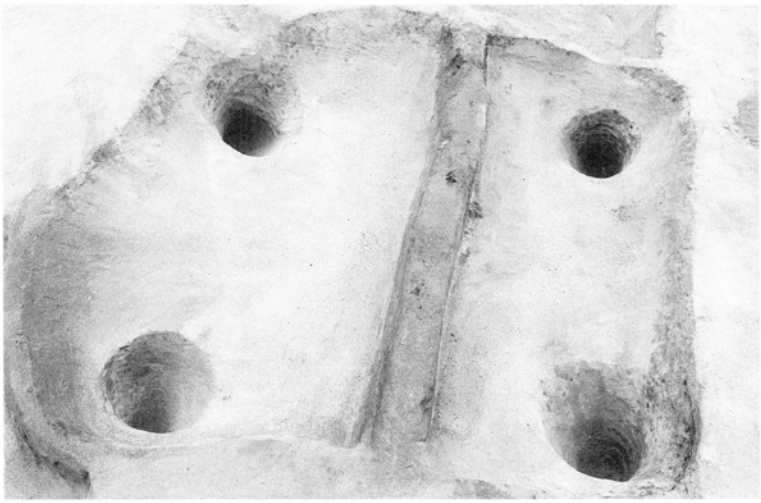
1.　L区 SK14（南東から）



2.　L区 SK14 遺物出土状況（西から）

1. M-II区全景（南東から）

2. M区 SCOI（北東から）

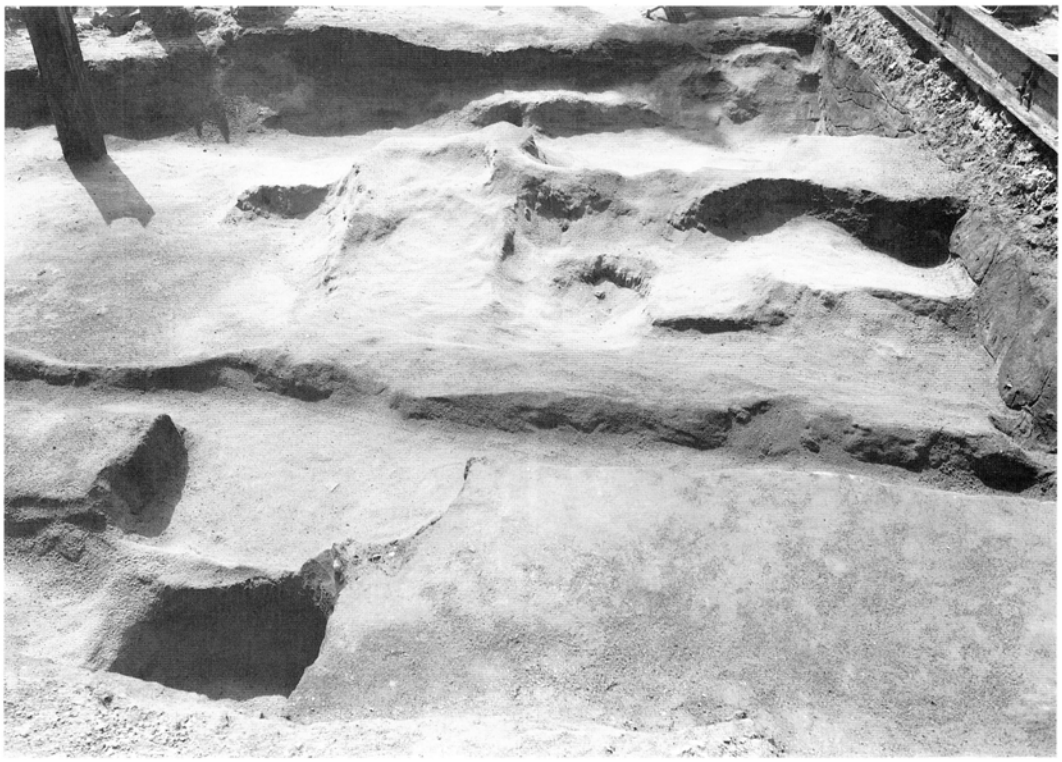


1. N区
SCO 1 （東から）

2. N区
SCO 3 （東から）

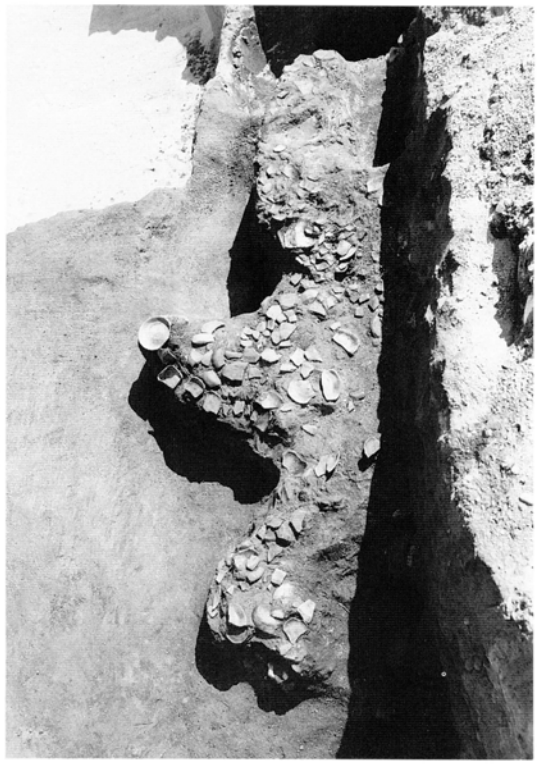
3. N区
SCO 3 （南東から）

1. N区 SD 02. 03 SK01（南西から）



2. N区 SD 02. 03（北西から）

1. N区 SD03 遺物出土状況
(東から)



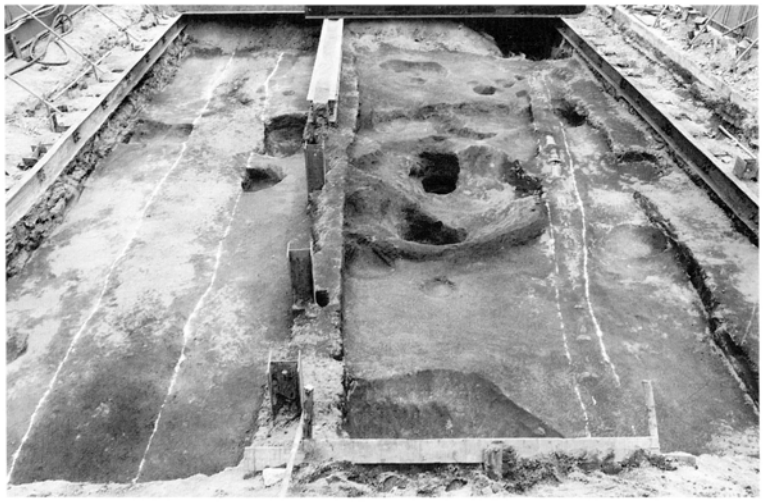
2. N区 SK01 (北東から)

3. N区 SK02 (北東から)

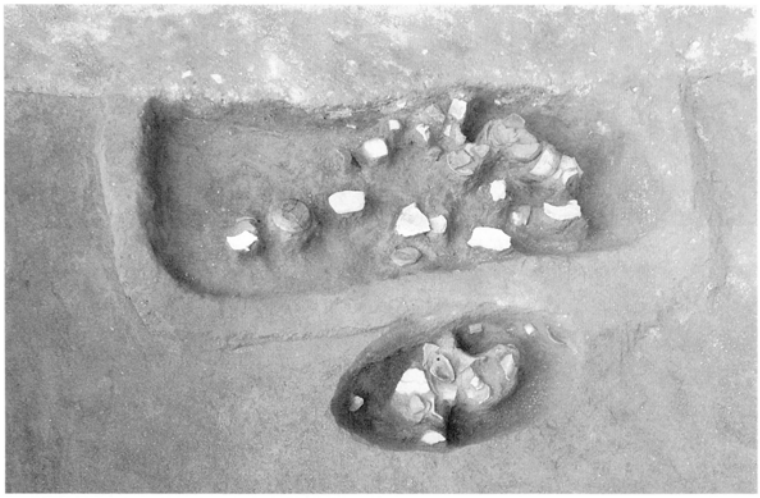
4. N区 SK05 (南西から)

1. O区 SK11（北西から）

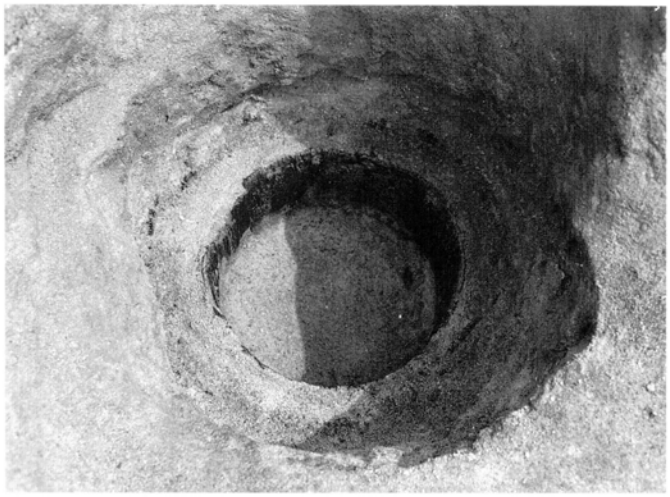
2. O区 SK15（南西から）



1. Q区
遺構全景
（北西から）

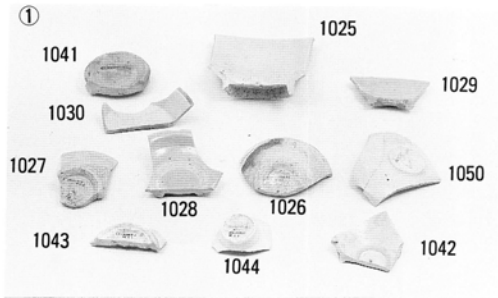


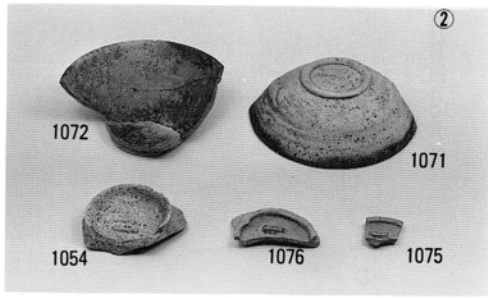
2. Q区
SK01
（南西から）

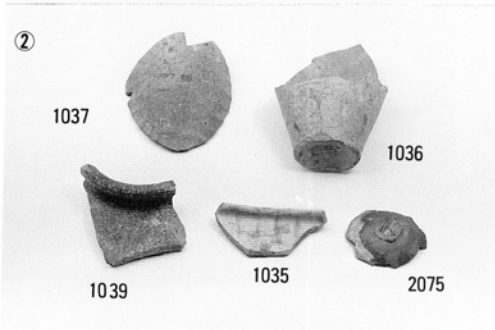


3. Q区
SK07
（北から）

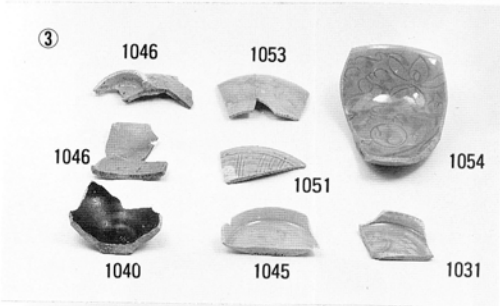
1) H区 SK07

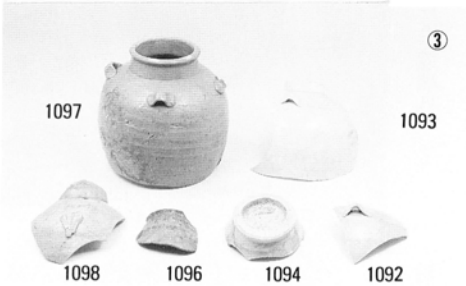




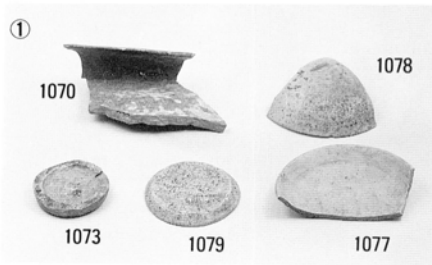


3) H区 SK7

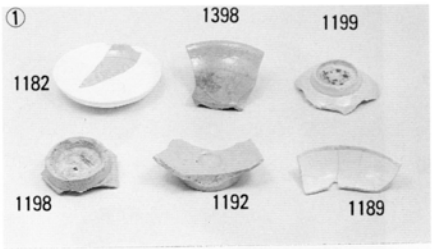


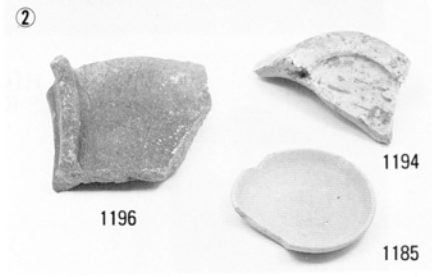


2) H区 SK14



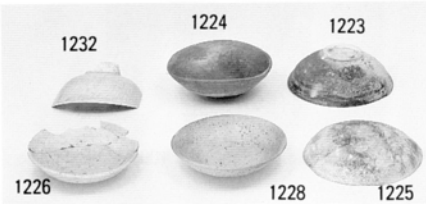
1) H区 SK49





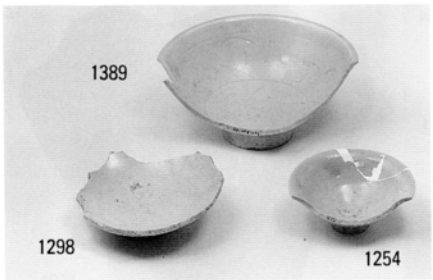
6) H区 遺構外

2) H区 SD03

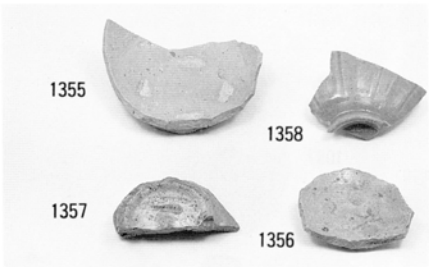


7) I区 1号墓

3) H区遺構外



4) H区 遺構外

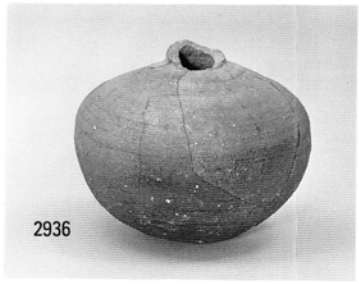


8) I区 SK29

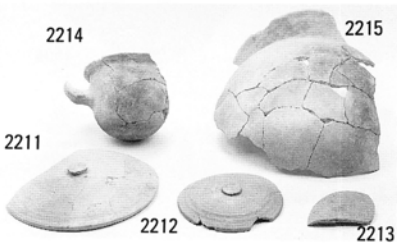
5) H区 遺構外

1) 夜 SK 67

2) 夜 SK 65



3) L区 SC01

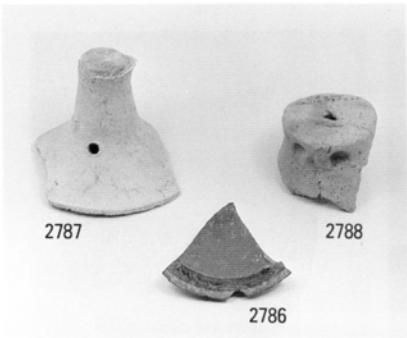


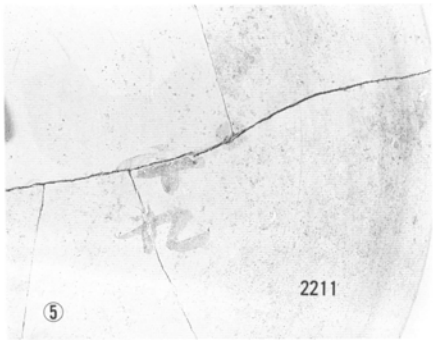
5) N区 SC04

6) N区 SK 11

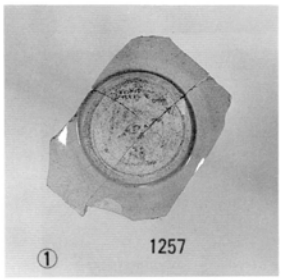
4) L区 SK 14

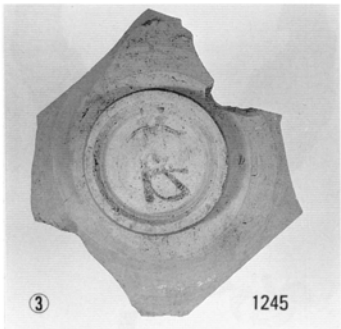
1) Q区SK04

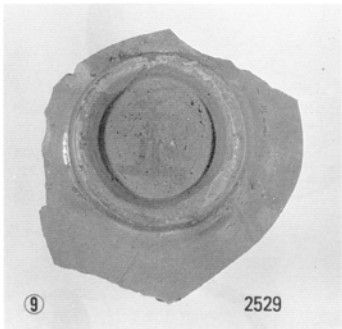


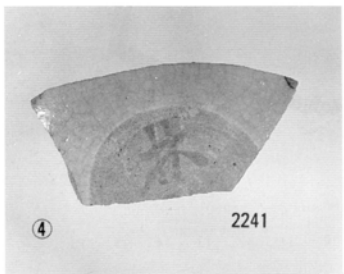


2) H～Q区墨書陶磁

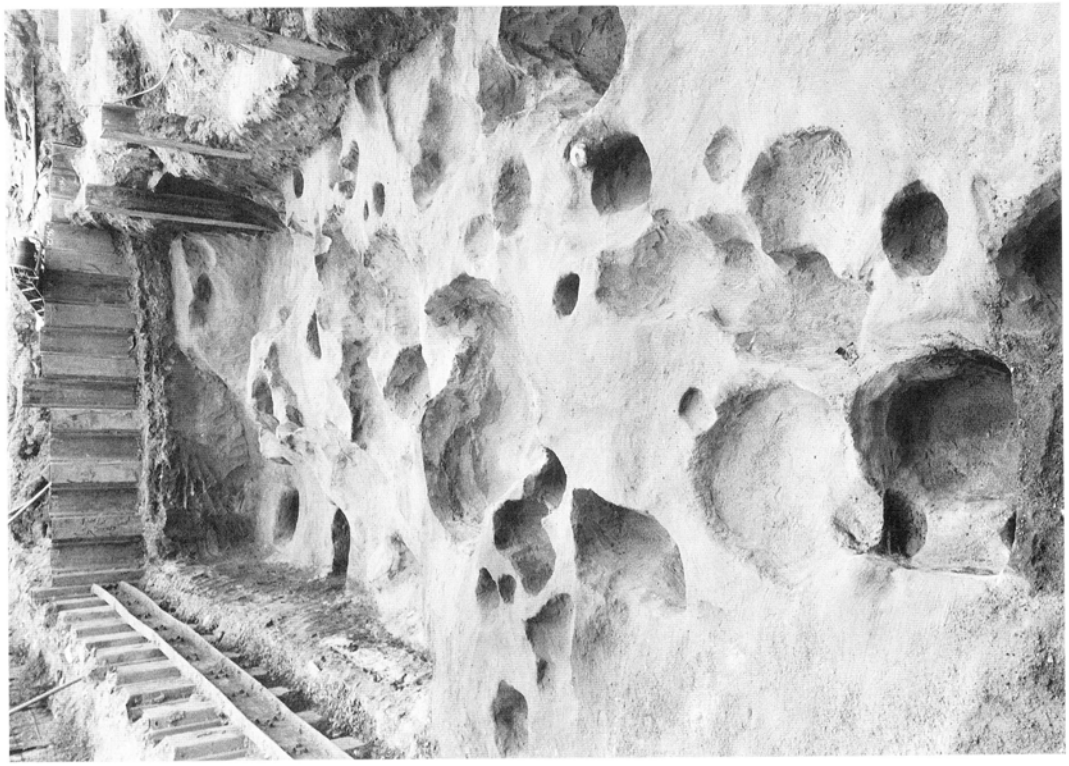






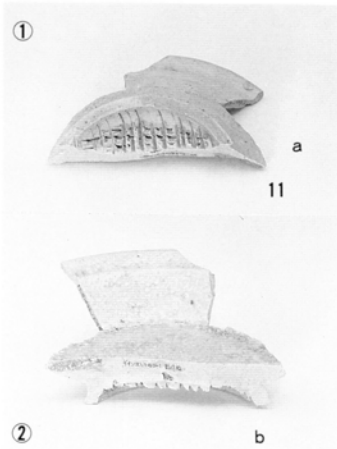


1.　4号出入口遺構全景（南東から）

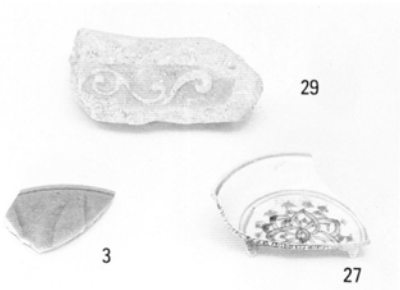


2.　4号出入口遺構全景（北西から）

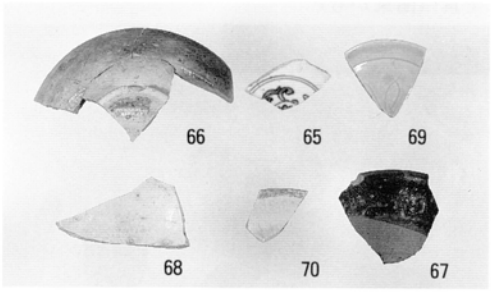
1) SK01



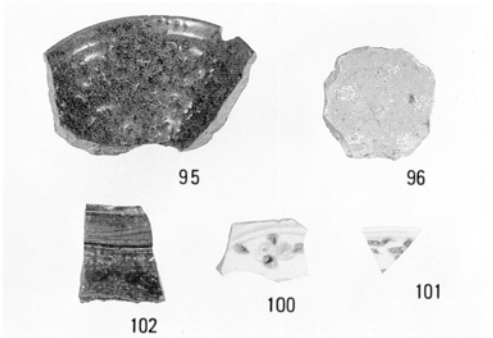
2) SK03



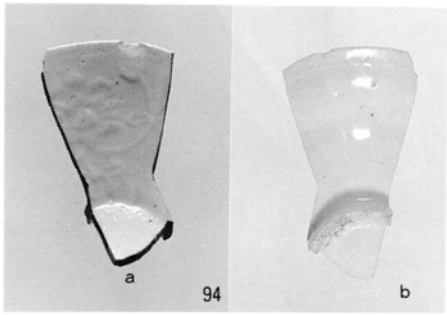
3) SK10



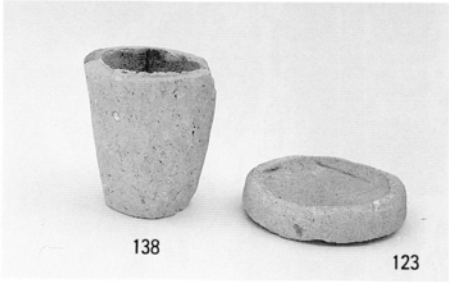
4) 遺構外



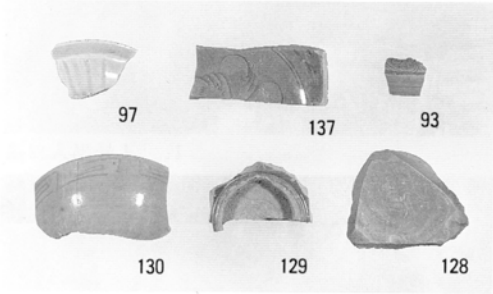
5) 遺構外



6) 遺構外



7) 遺構外



8) 遺構外

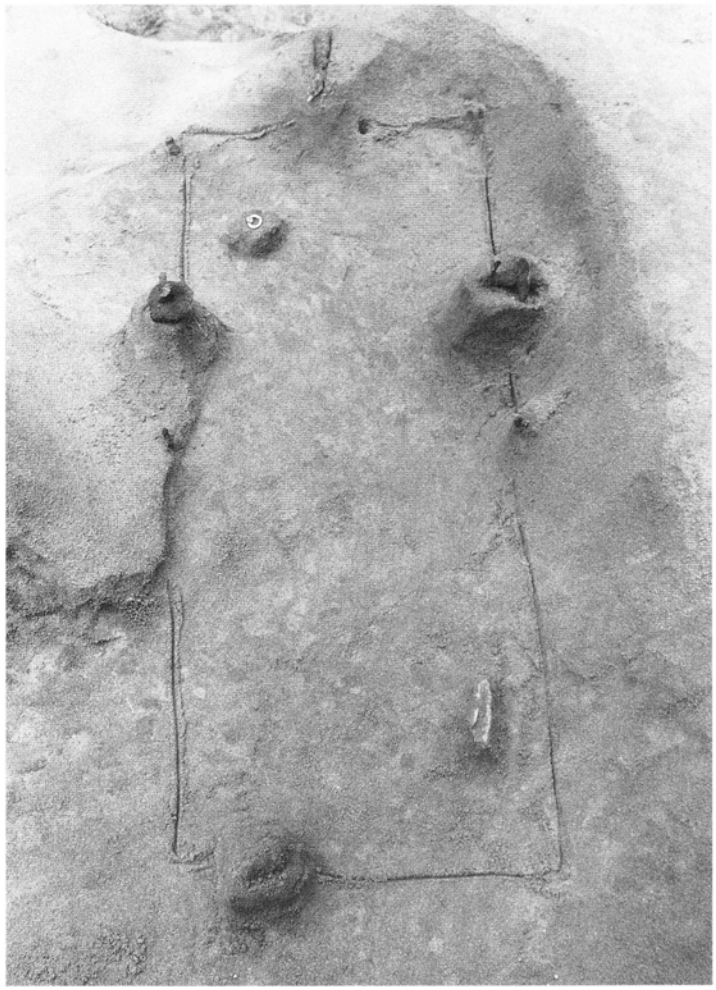
1.　5号出入口 調査風景（北西から）

2.　5号出入口 SC01（北西から）

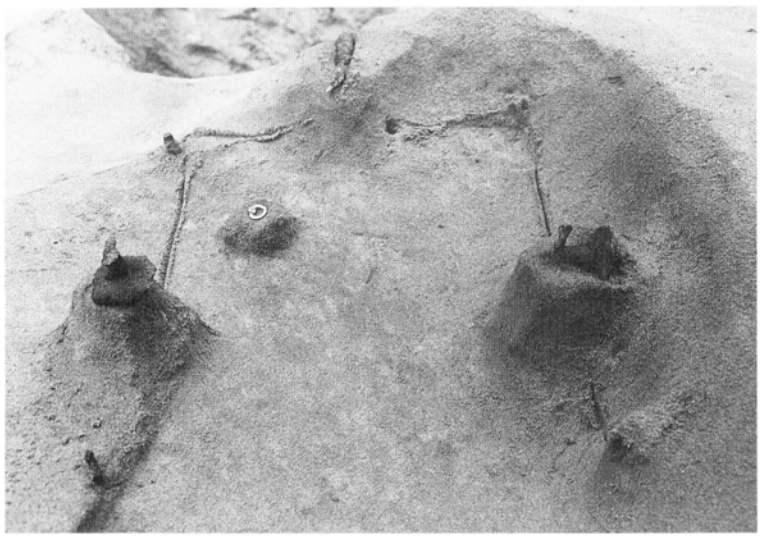
1.　5号出入口　1号墓（西から）

2.　5号出入口　2号墓（南から）

1.　5号出入口
　　3号墓（東から）



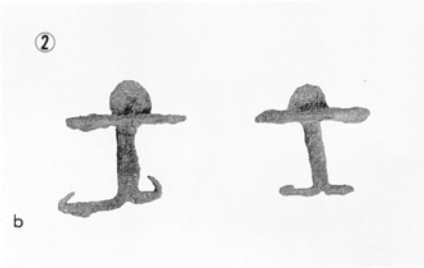
2.　5号出入口
　　3号墓遺物出土状況
　　（東から）



1) 3号墓

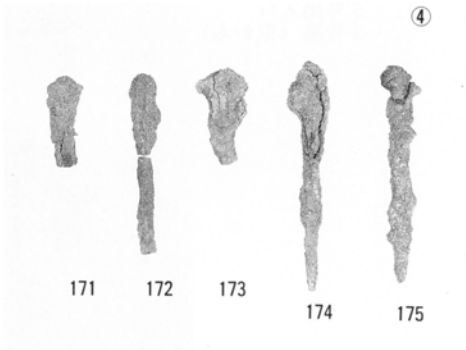
①

②

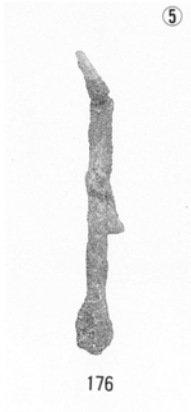


③

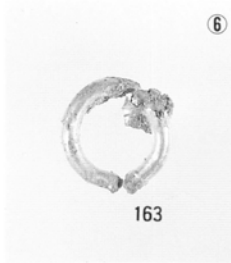
④



⑤

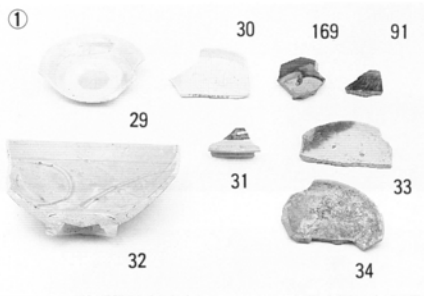


⑥



2) SK09

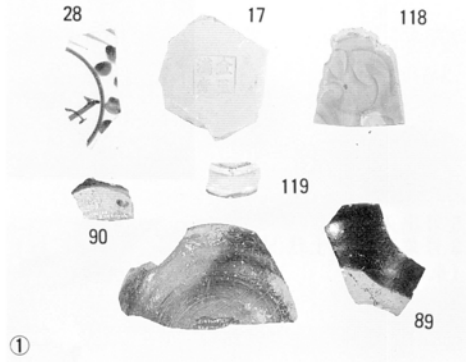
①



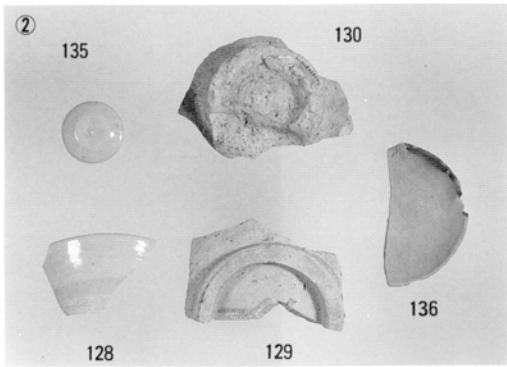
②

3) SK06・08

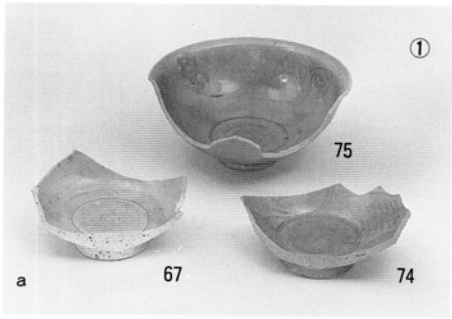
①

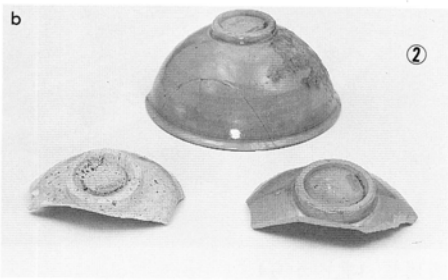


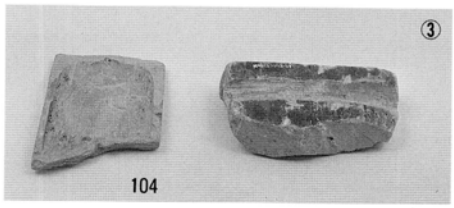
②

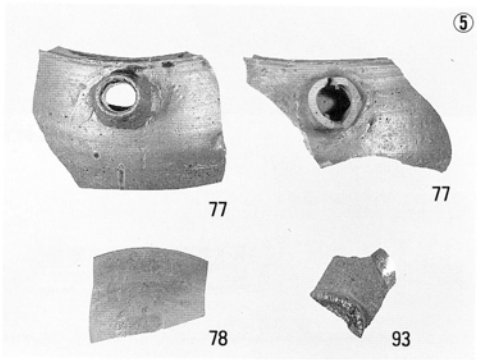


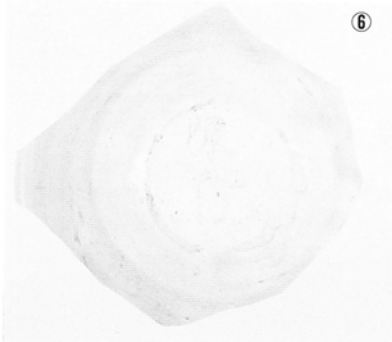
1) 遺構外

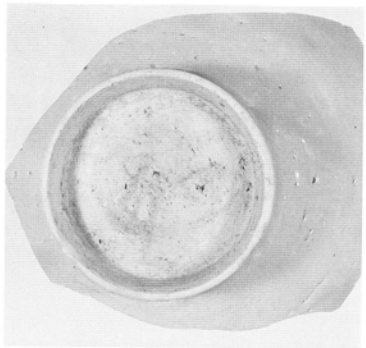


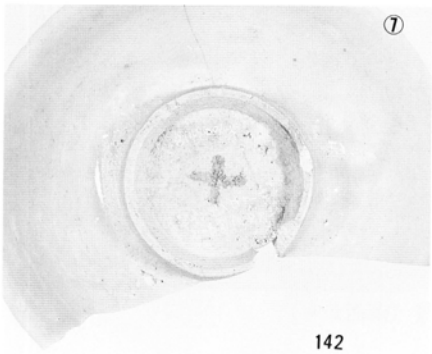


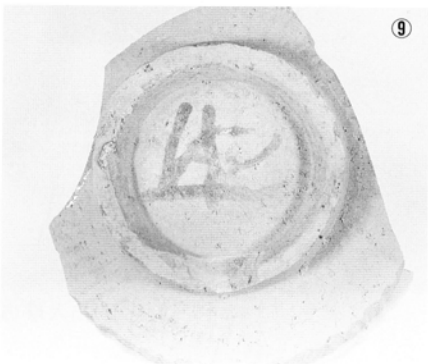










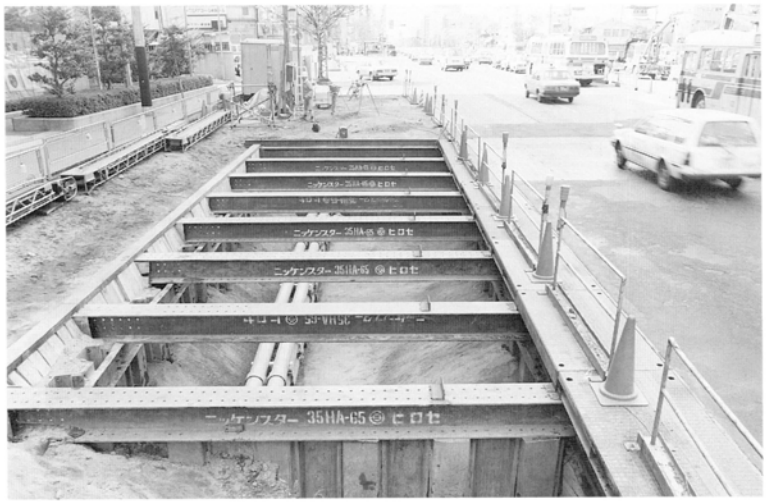


1.　P_2出入口　A区調査風景（北西から）

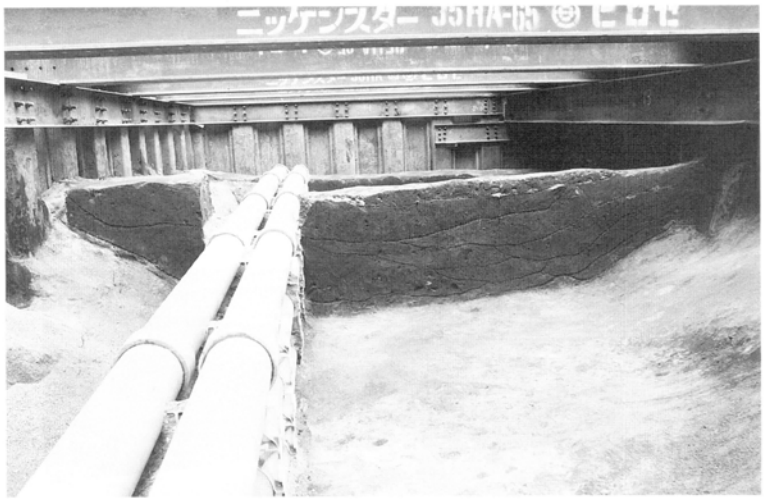
2.　P_2出入口　全景（南西から）

1.　P_2出入口 SD03（南東から）

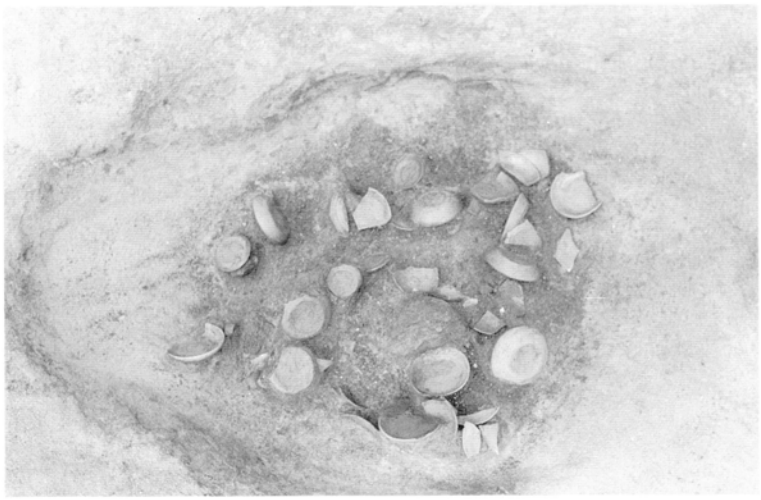
2.　P_2出入口 SD03（北西から）



1.　P_2出入口
C区全景（南東から）

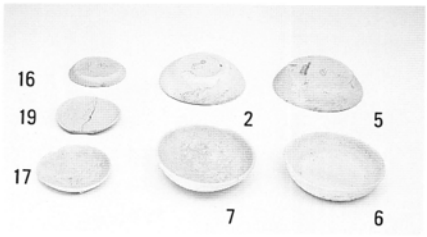


2.　P_2出入口
SD03 土層断面
（南東から）

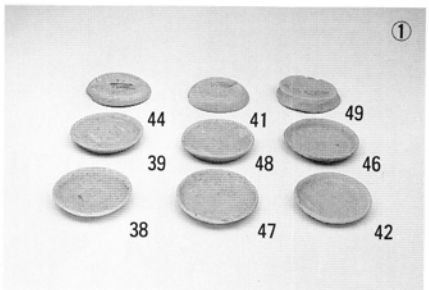


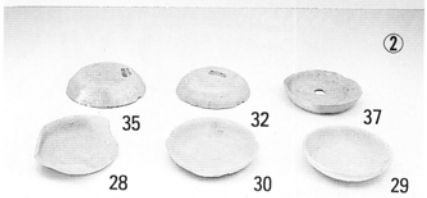
3.　P_2出入口
SK04（南西から）

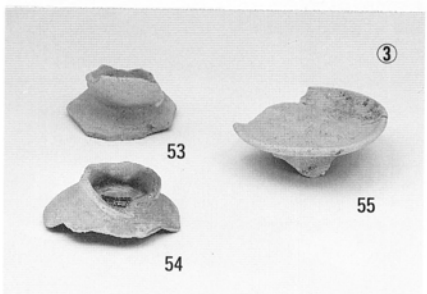
1) SK04

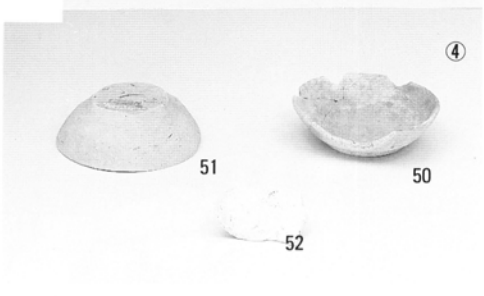


2) SK17



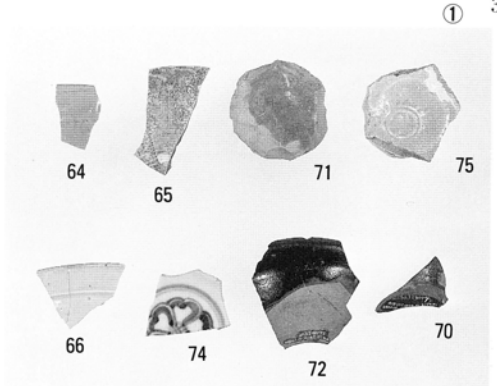


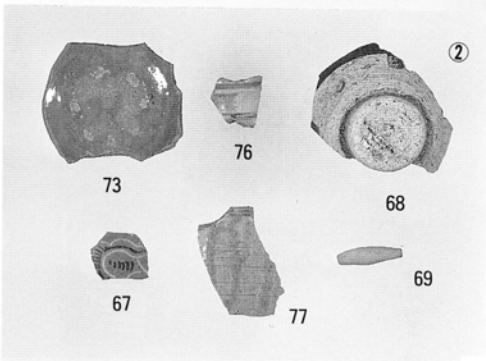


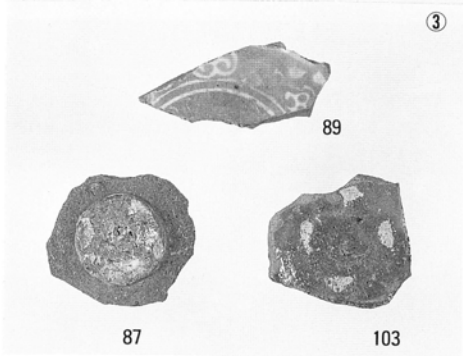


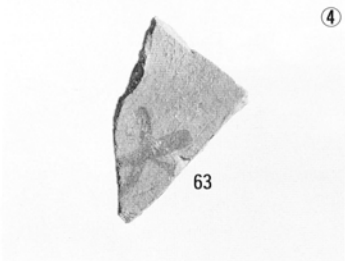
8435

3) 遺構外

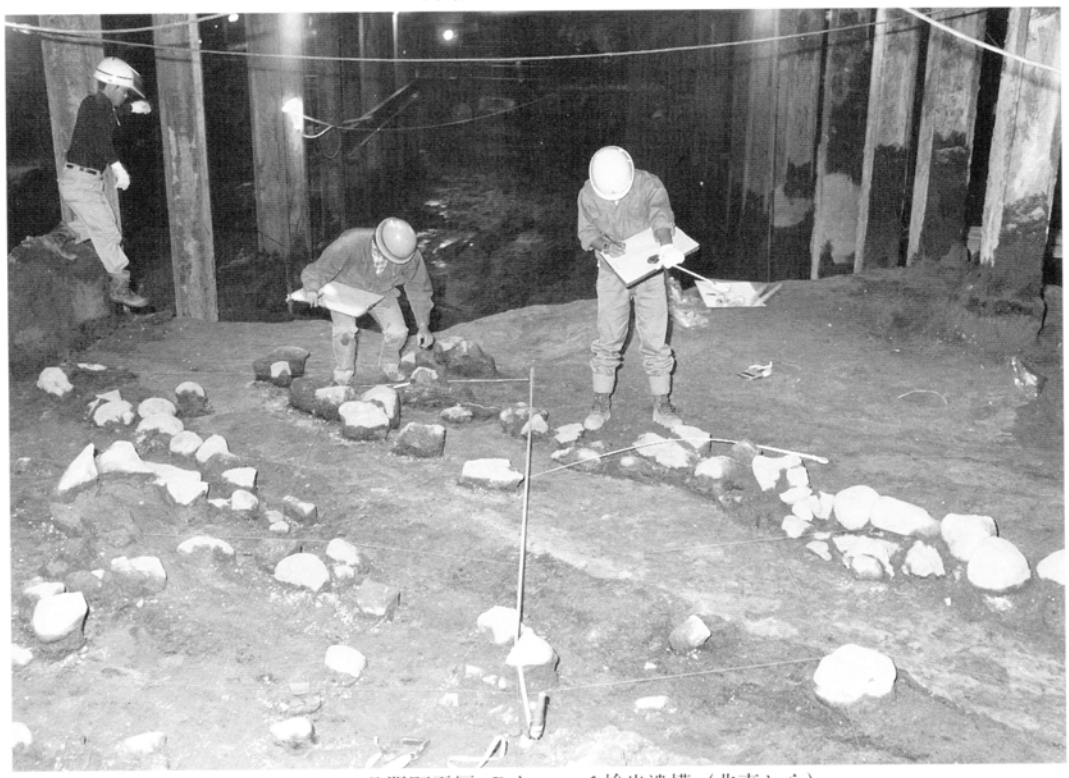




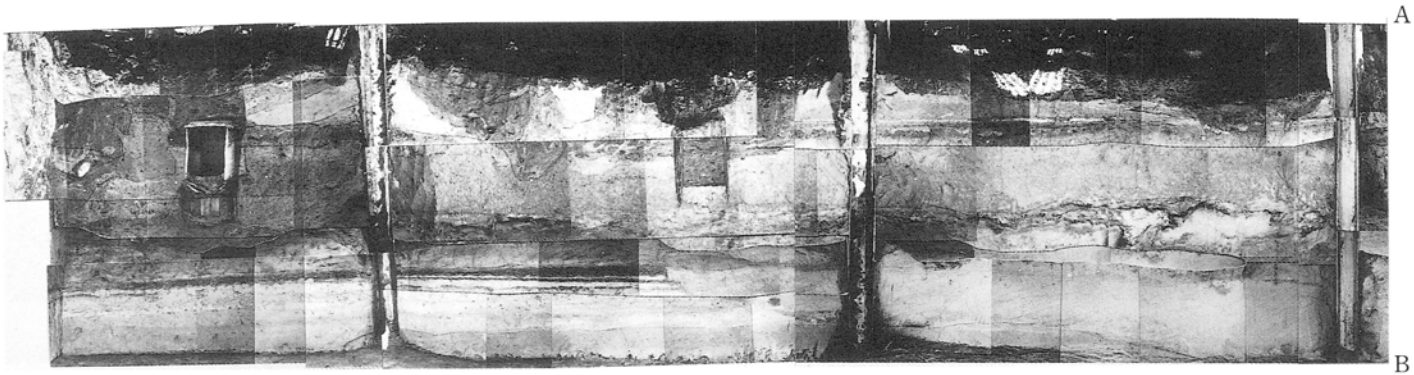


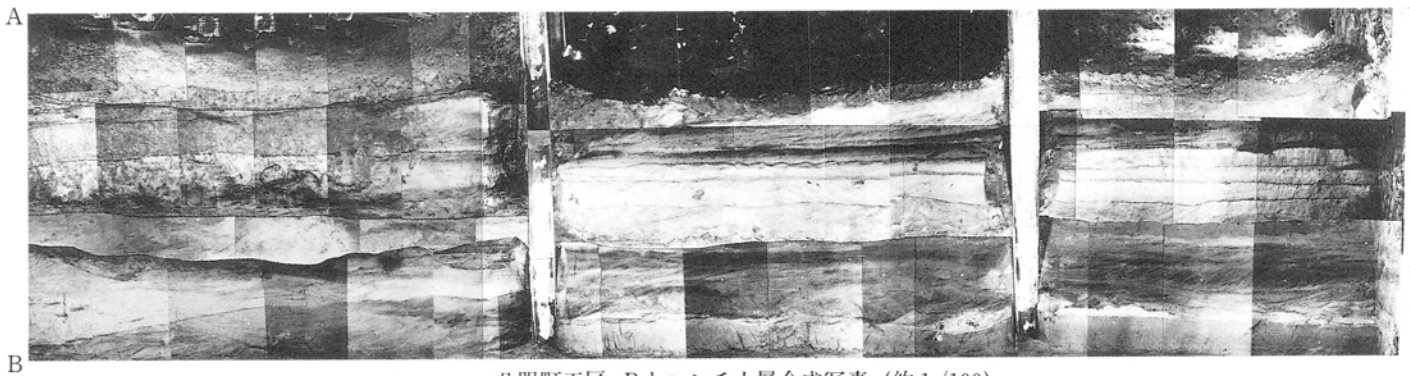


1.　呉服町交差点遠景（南から）

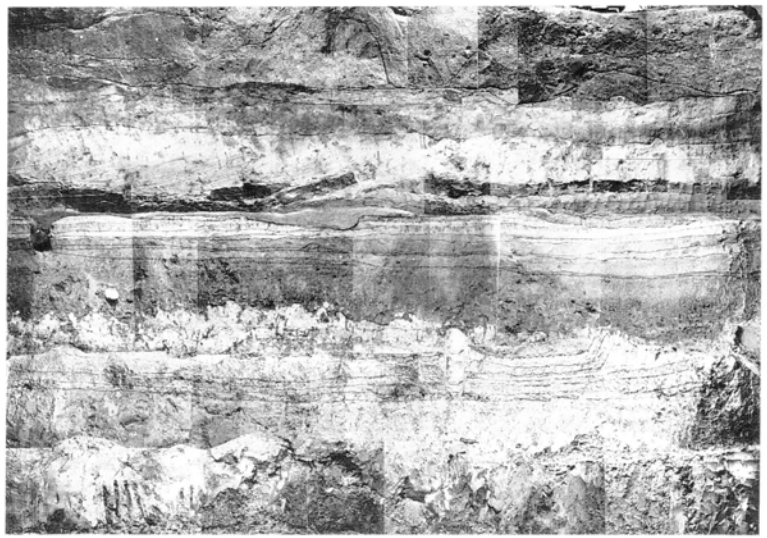


2.　呉服町工区 Bトレンチ検出遺構（北東から）

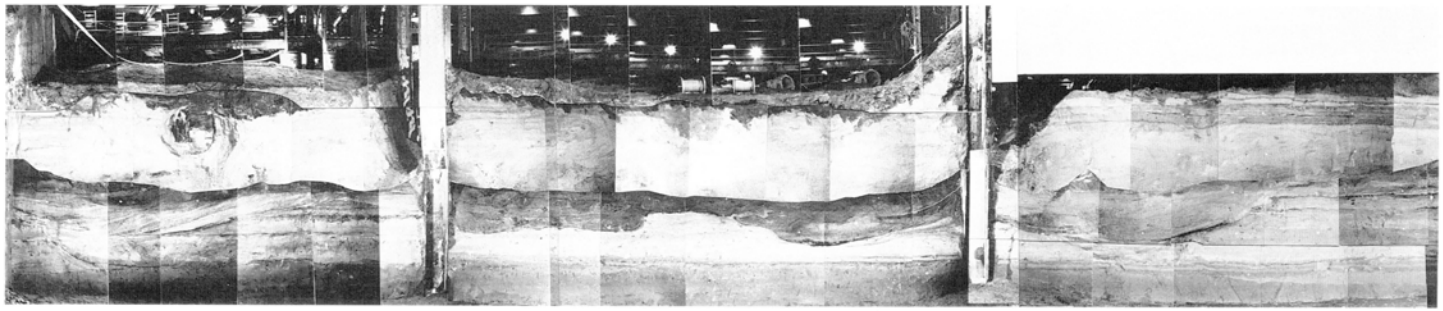




呉服町工区　Bトレンチ土層合成写真（約1/100）

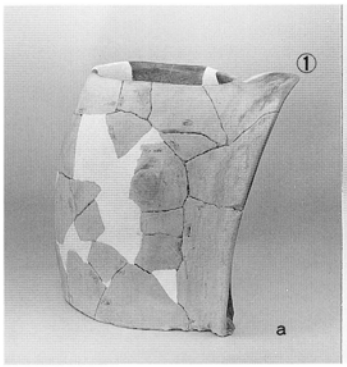


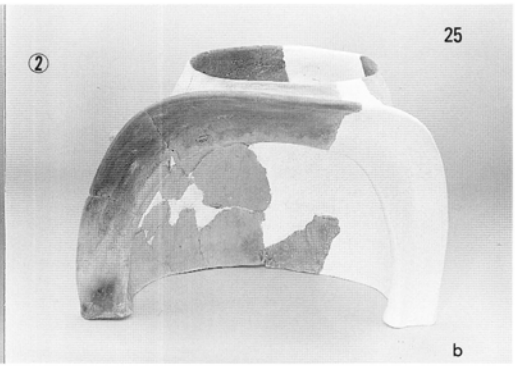
1. 呉服町工区 Aトレンチ土層合成写真（約1/100）

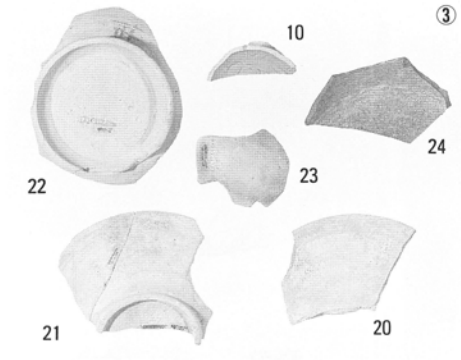


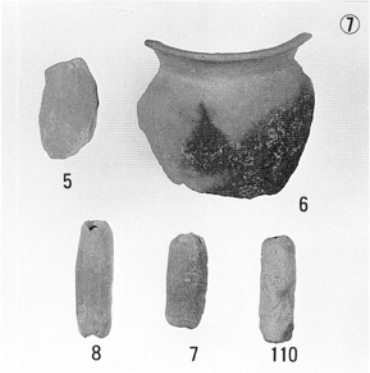
2. 呉服町工区 Cトレンチ土層合成写真（約1/100）

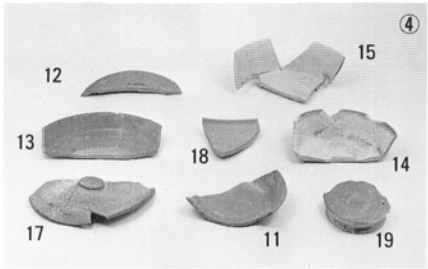
Aトレンチ出土遺物

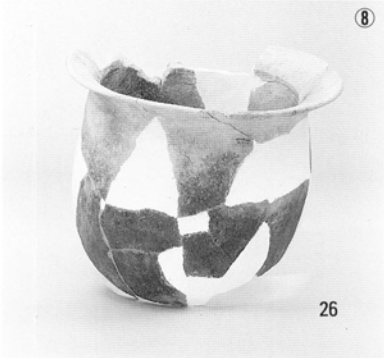

①
a

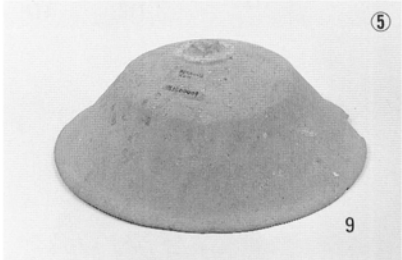

②
25
b

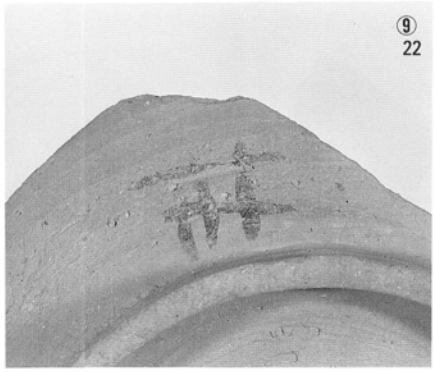

③
10
24
22
23
21
20

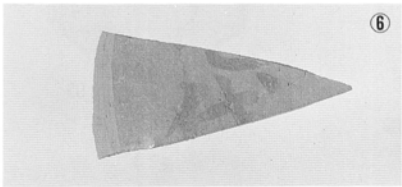

⑦
5
6
8
7
110


④
15
12
13
18
14
17
11
19

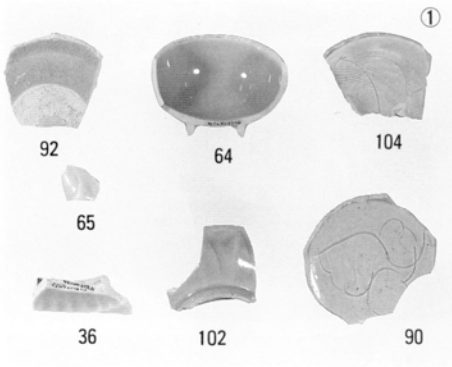

⑧
26


⑤
9


⑨
22

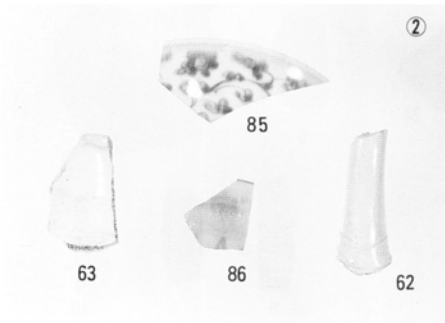

⑥

Bトレンチ出土遺物


①
92
64
104
65
36
102
90

③
94
a

b
④


②
85
63
86
62

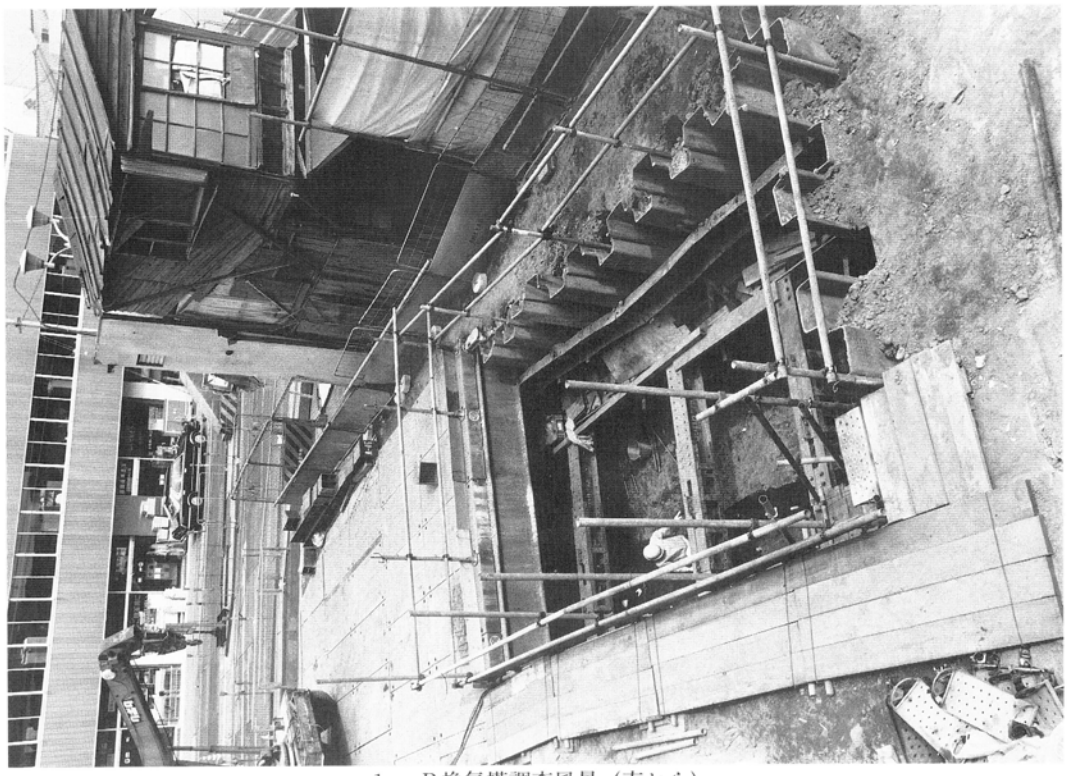
⑤
114
115
119
116
117
118
113
112
111

⑥
54

⑦
31

⑧
89

⑨
93



1.　B換気塔調査風景（南から）

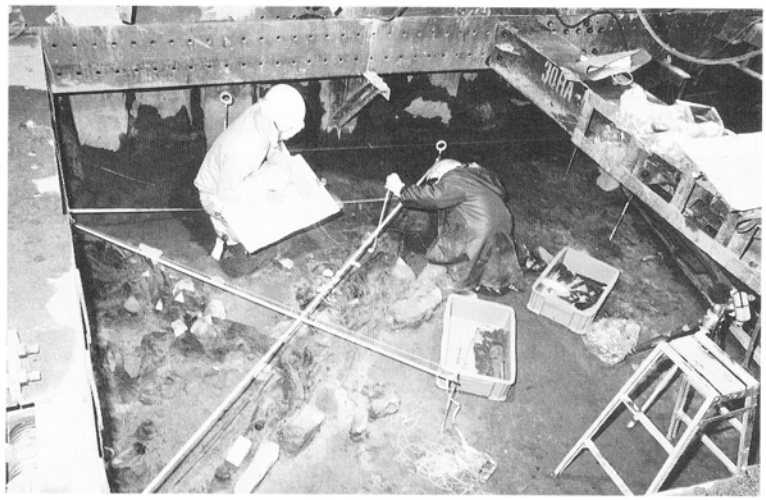
2.　朝日生命換気塔調査区（北西から）

1.　朝日生命換気塔 土層断面（東から）

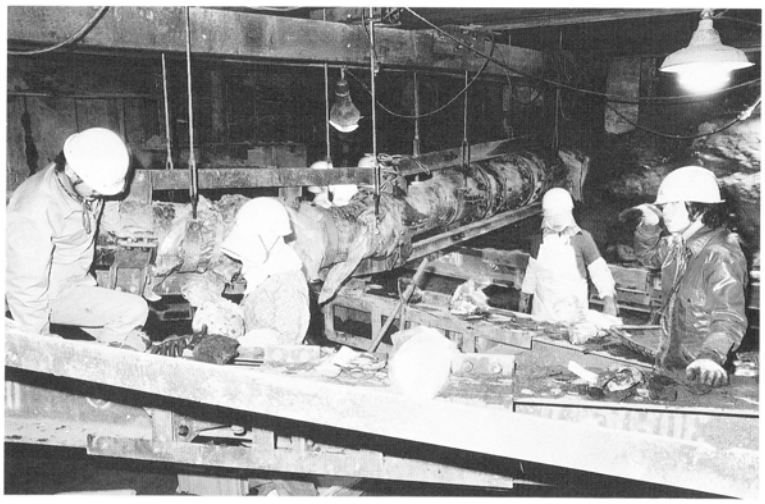
2.　朝日生命換気塔 土層断面（北東から）

1. A出入口
調査風景

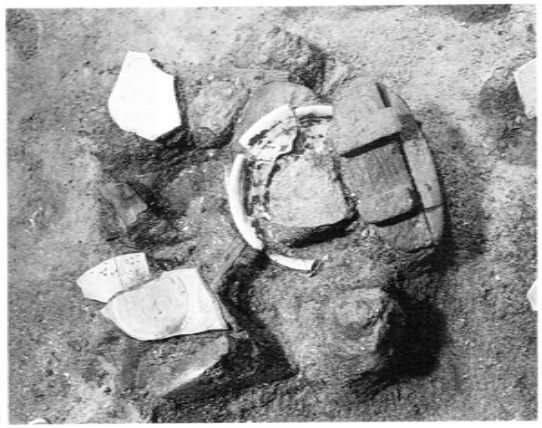
2. A出入口
調査風景



3. C出入口
調査風景

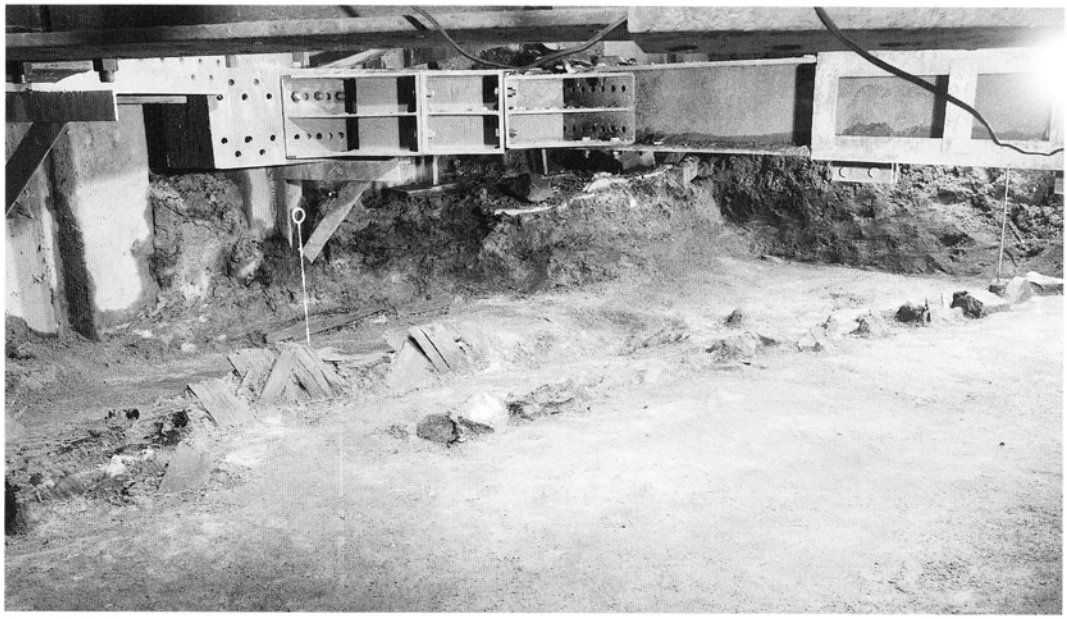


2. A出入口
SD02（東から）



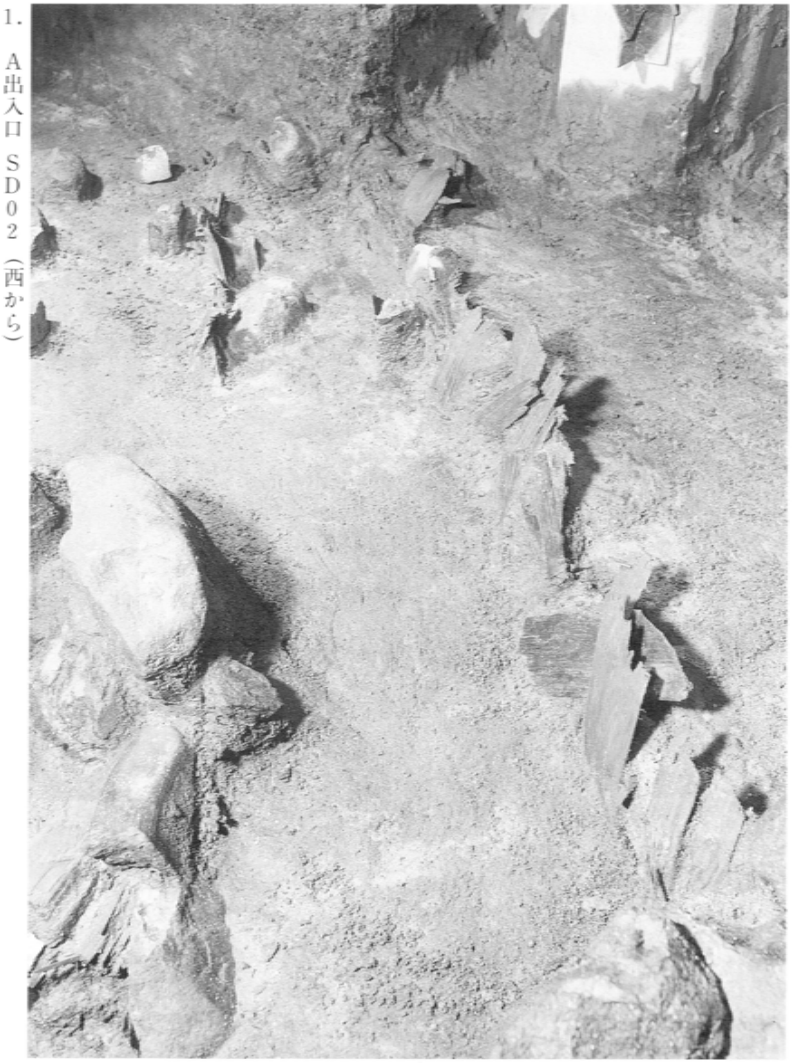
3. A出入口 SD01
遺物出土状況（東から）

1. A出入口 SD02（西から）



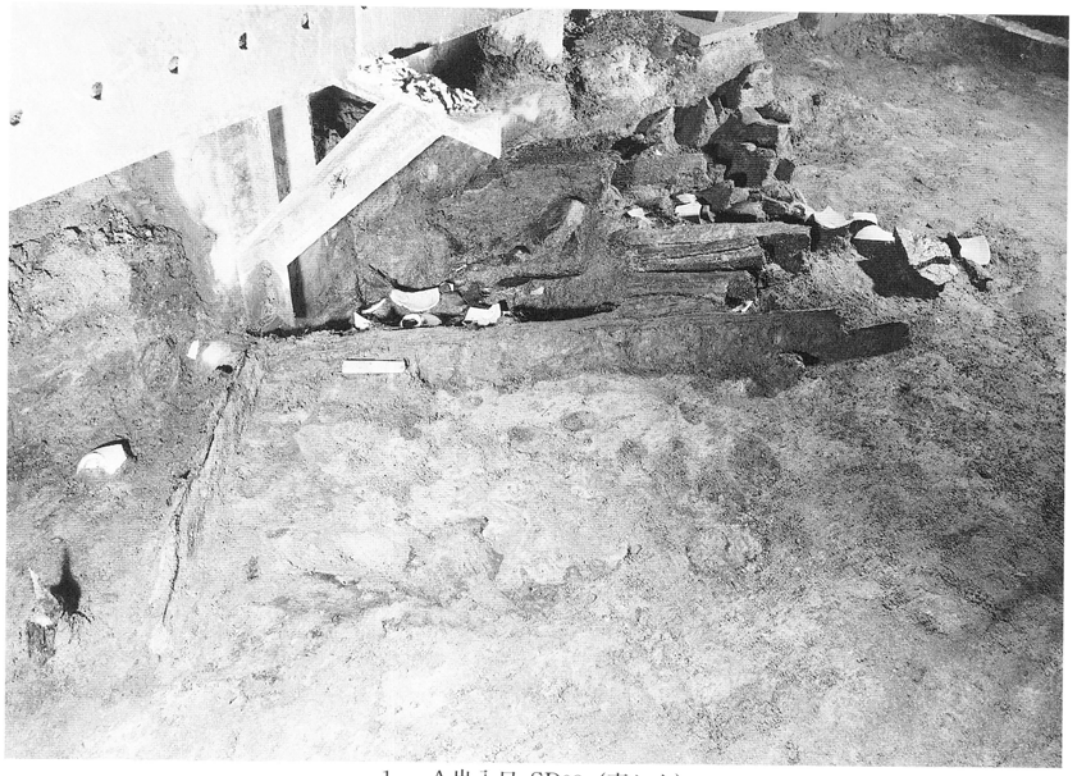
1.　A出入口
　　SD02（西から）

2.　A出入口
　　SD02（南東から）



1. A出入口 SD02（西から）

2. A出入口 SD02部分（南東から）



1.　A出入口 SD03（東から）

2.　A出入口 SD03（北から）

1.　A出入口 SD03 遺物出土状況（北から）

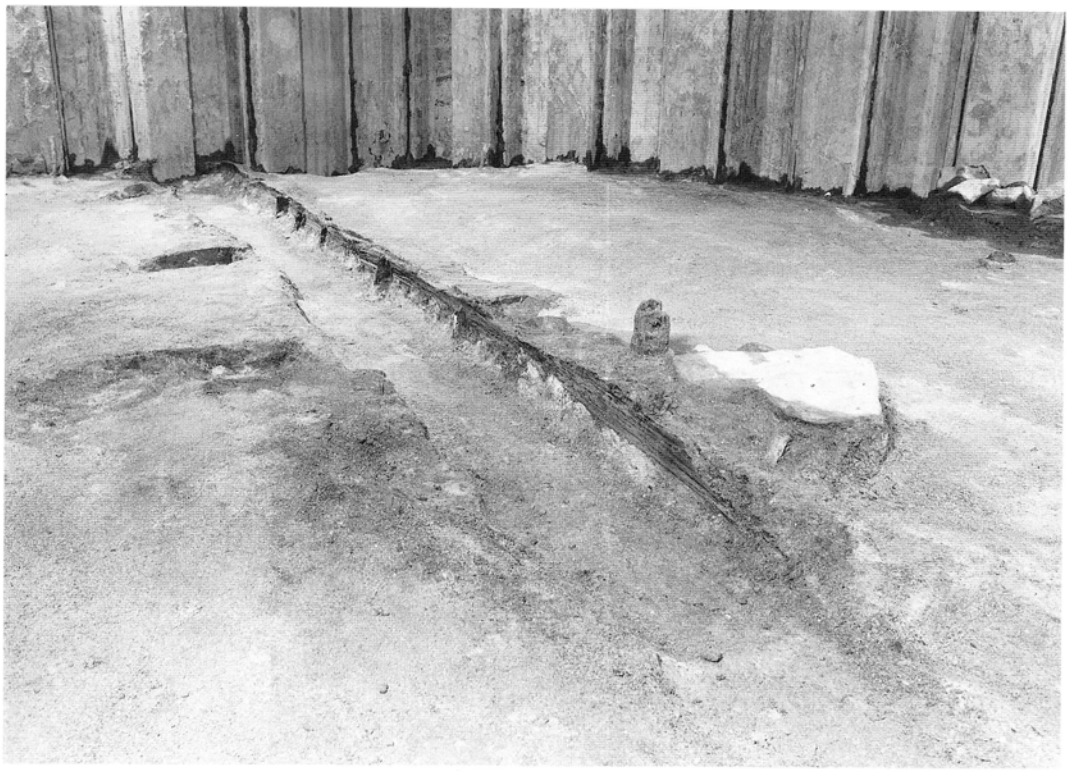
2.　A出入口　SD04、05（西から）

1. A出入口
SD04，05
（北東から）

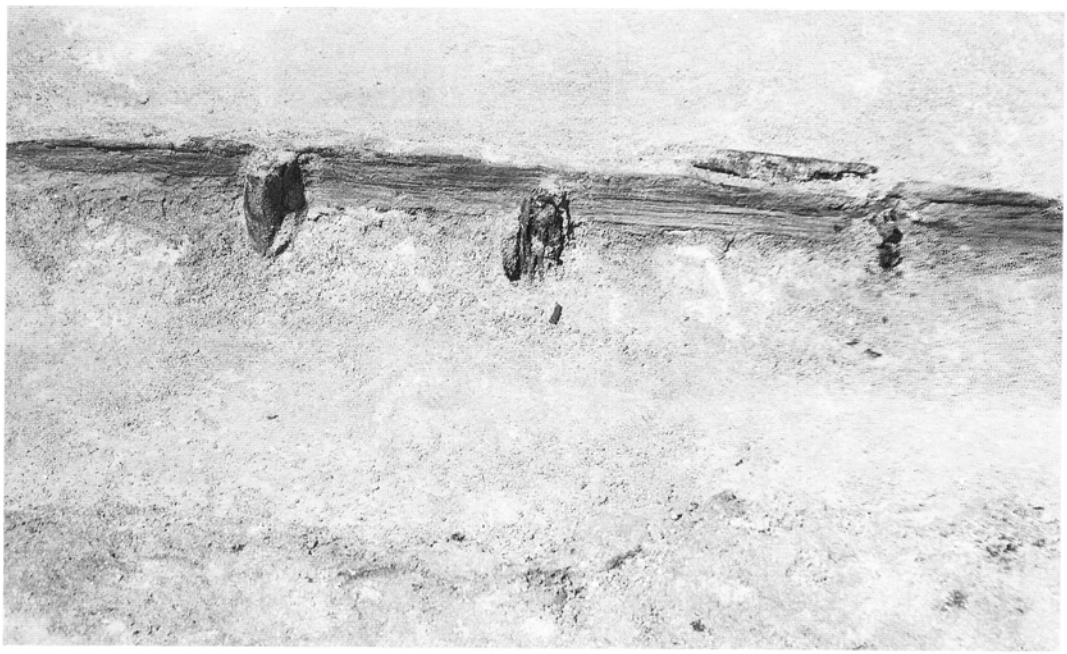
2. A出入口
SK01
（北西から）

1.　B出入口 I区全景（南東から）

2.　B出入口 II区全景（南東から）



1.　B出入口 SD01（南から）

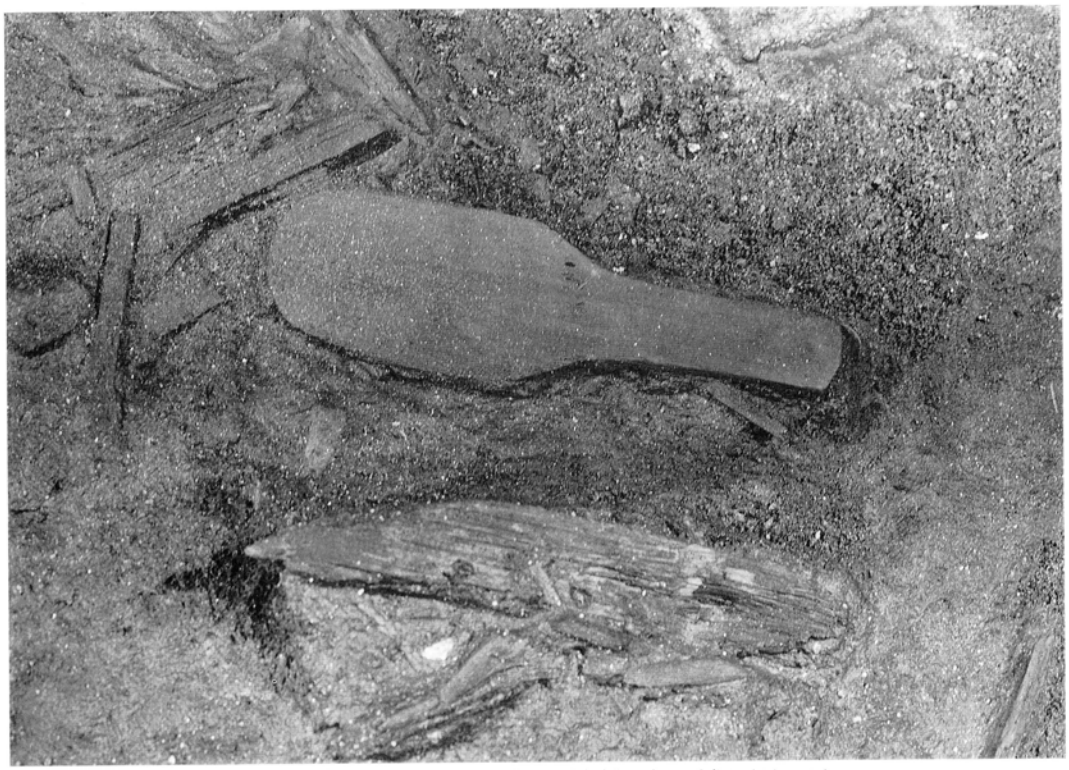


2.　B出入口 SD01土留状況（南西から）

1.　B出入口
SD02と杭列
（北から）

2.　B出入口
SK09（西から）

1.　B出入口 SK09 遺物出土状況（西から）

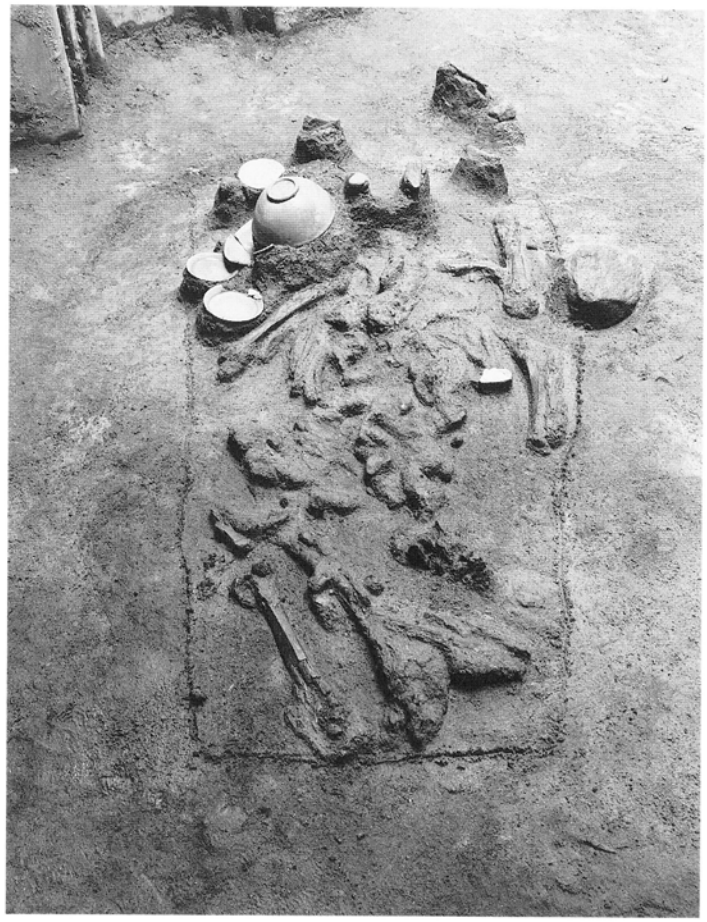


2.　B出入口 SK09 しゃもじ形木製品出土状況（西から）

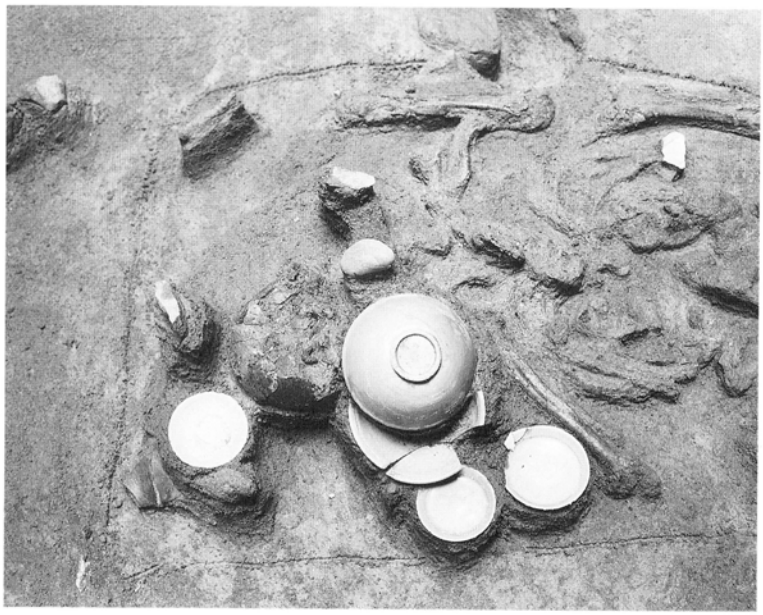
1.　C出入口 SK03 調査風景

2.　C出入口 SK03（西から）

1.　C出入口
SK03（南から）



2.　C出入口
SK03
副葬品出土状況
（西から）



1.　C出入口 SD02とSK11（南から）

2.　C出入口 SK11遺物出土状況（北から）

1.　C出入口
SD03（南から）

2.　C出入口
SD03
遺物出土状況
（南西から）

1. C出入口
SK07（南から）

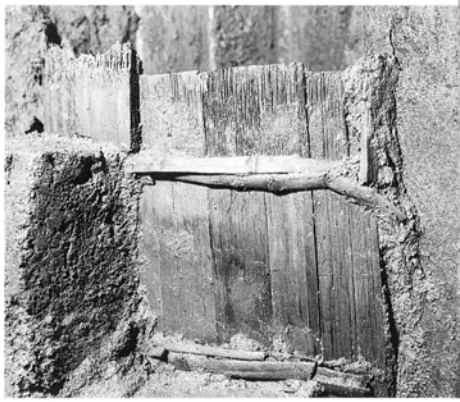
2. C出入口
SK02（北から）

3. C出入口
ピット群（東から）

1.　C出入口 SE03（南から）

2.　C出入口 SE07（東から）

3.　C出入口 SE07部分



1.　C出入口
SE04（東から）

2.　C出入口
SE13．14（南西から）

3.　C出入口
SE15．18（東から）

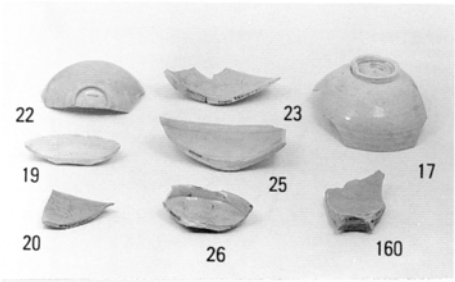
1.　C出入口
SE15（東から）

2.　C出入口
SE16（西から）

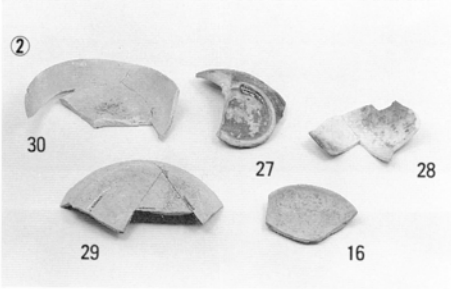
3.　C出入口
SE17（西から）

1) A出入口 SD01

①

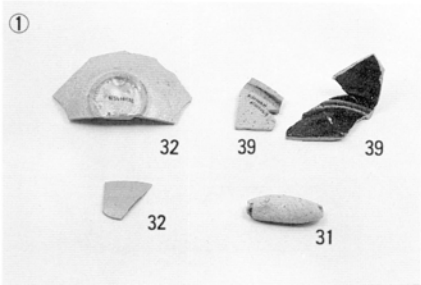


②

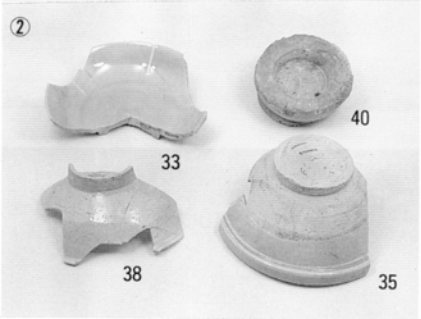


2) A出入口 SD02

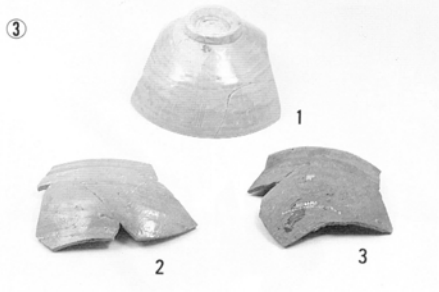
①



②



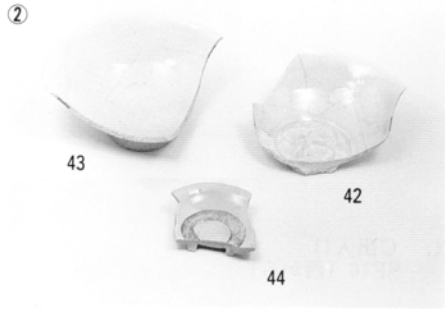
③



3) A出入口 SD03

①

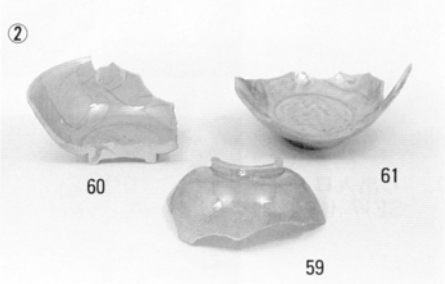
②



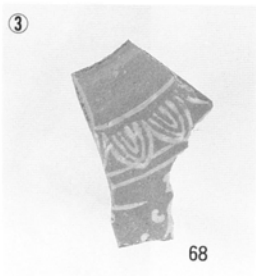
4) A出入口 SD07

①

②

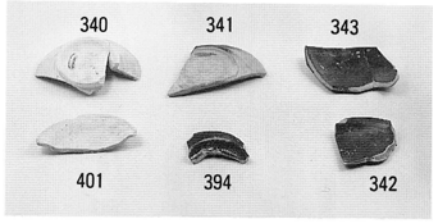


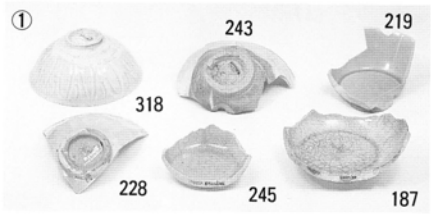
③

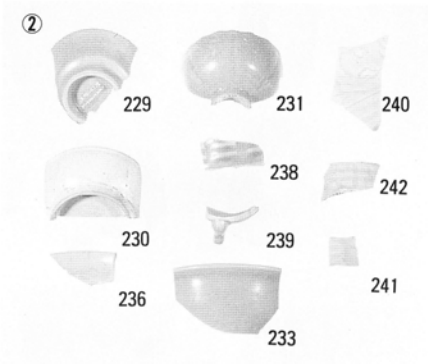


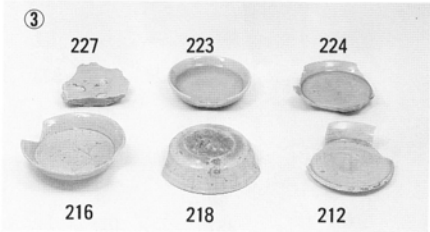
1) C出入口 SK01

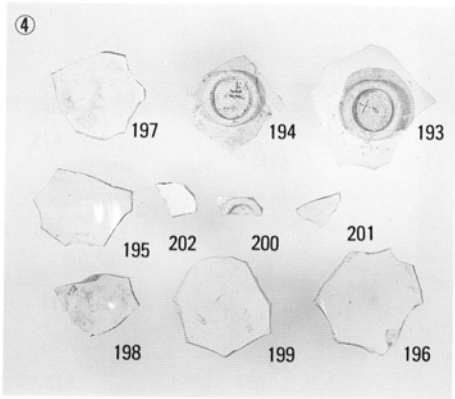
2) B出入口 遺構外

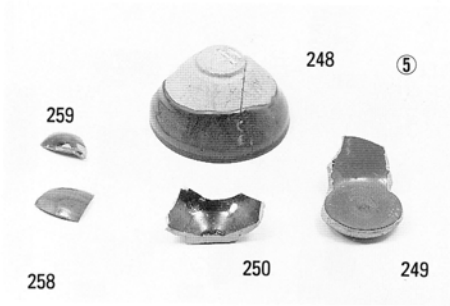


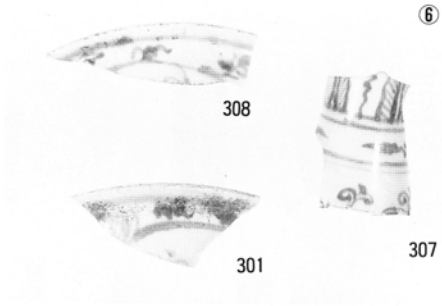


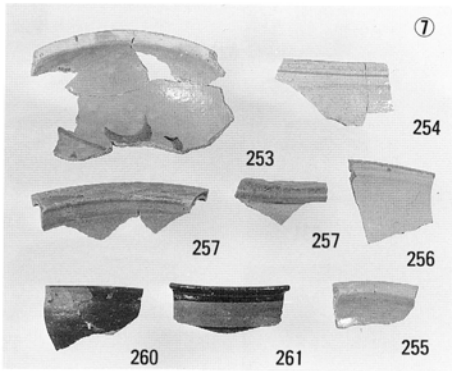


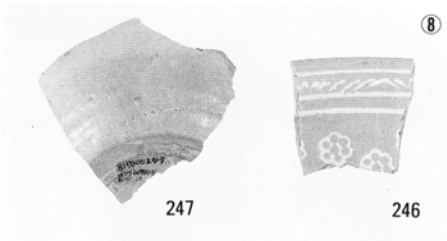


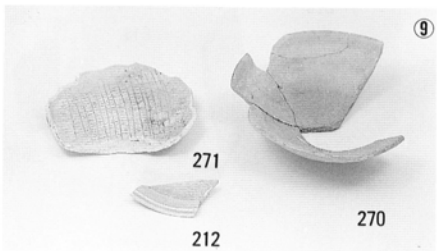






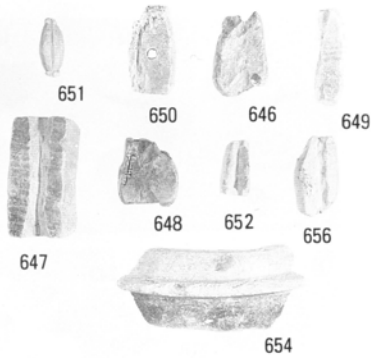




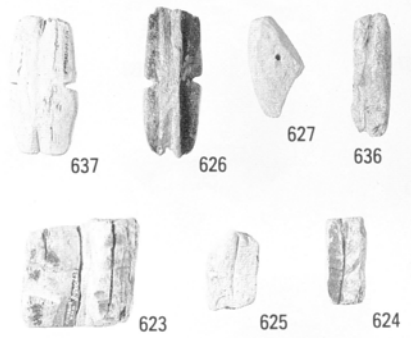


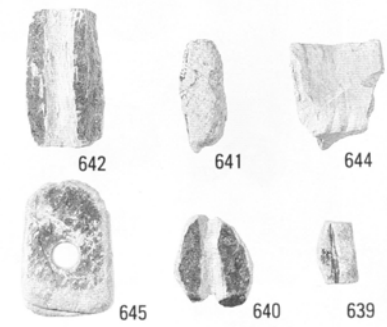
1) A出入口

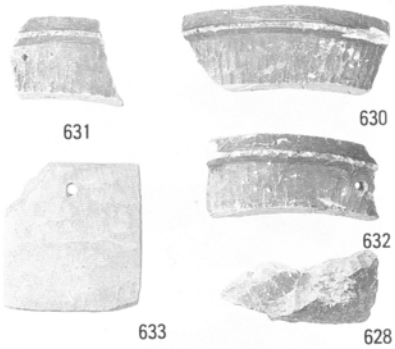
3) C出入口

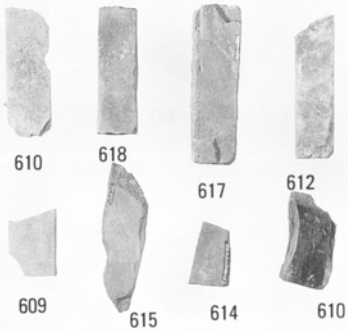


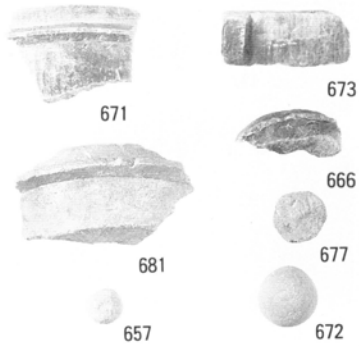
2) B出入口





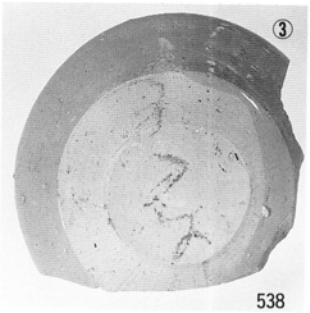


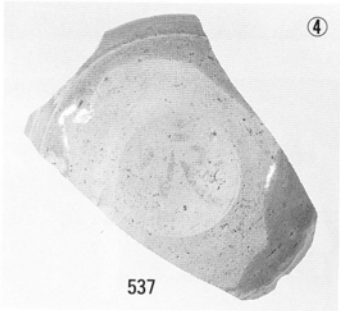


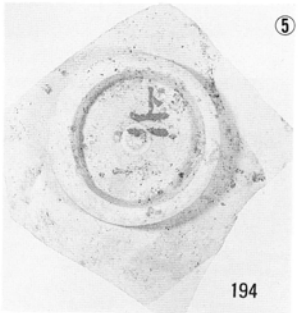


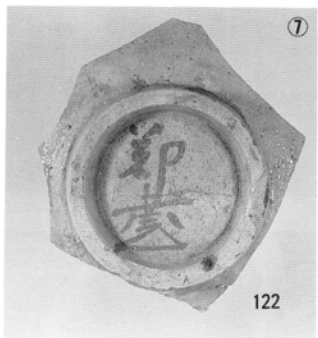
8150

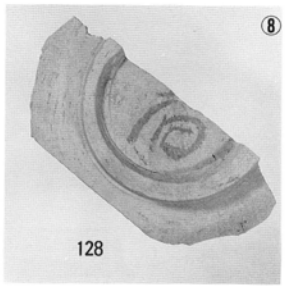
黒書陶磁

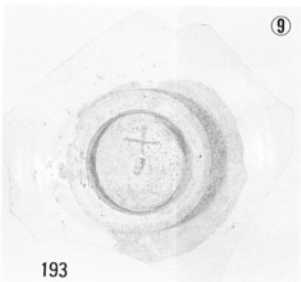


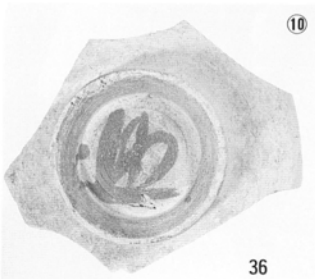


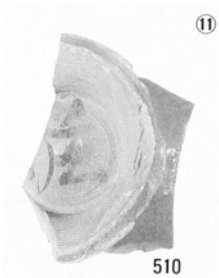












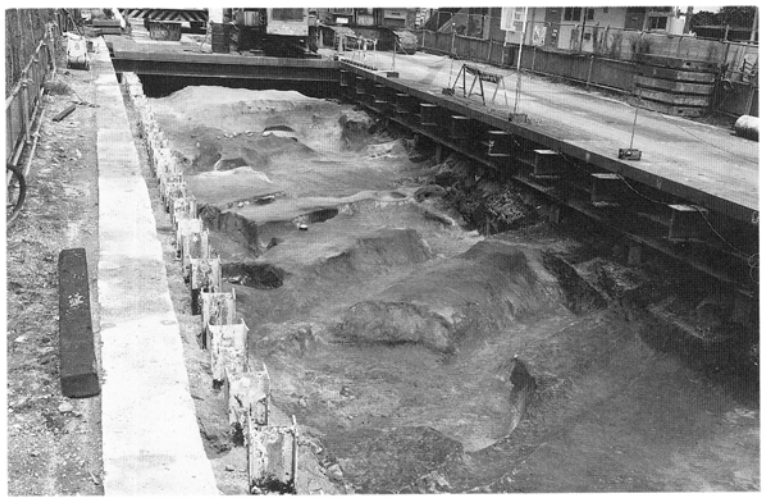
1.　9ブロック
調査風景
（北から）

2.　10ブロック
調査風景
（南から）

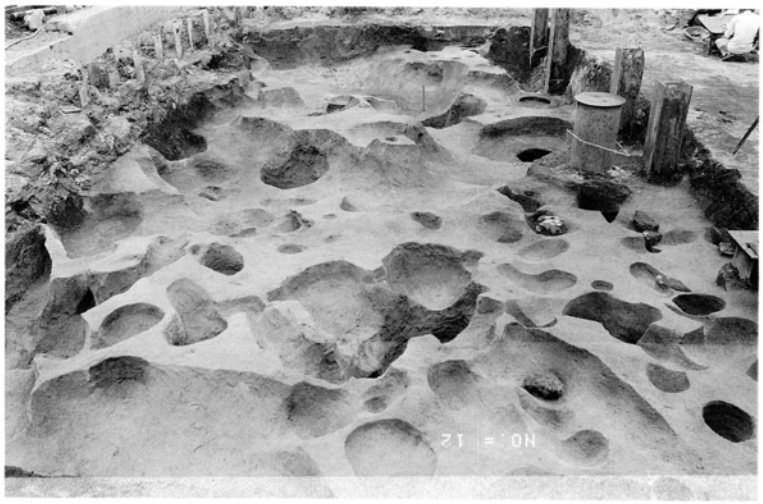
3.　11ブロック
近世墓調査風景

1.　2ブロック
調査区全景
（北から）

2.　6ブロック
調査区全景
（南から）

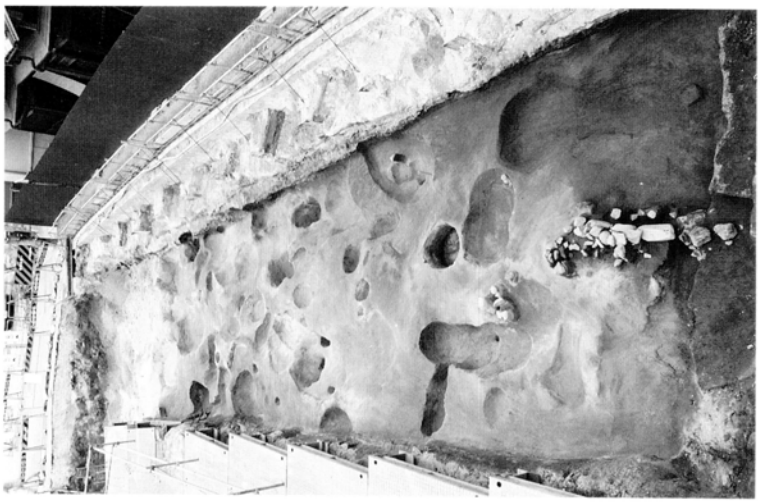


3.　6ブロック
調査区全景
（南から）



1.　8ブロック
調査区全景
（南西から）

2.　8ブロック
調査区全景
（南から）



3.　9ブロック
調査区全景
（南西から）

1. 10ブロック
上部遺構全景
(南から)

2. 10ブロック
上部遺構
(西から)

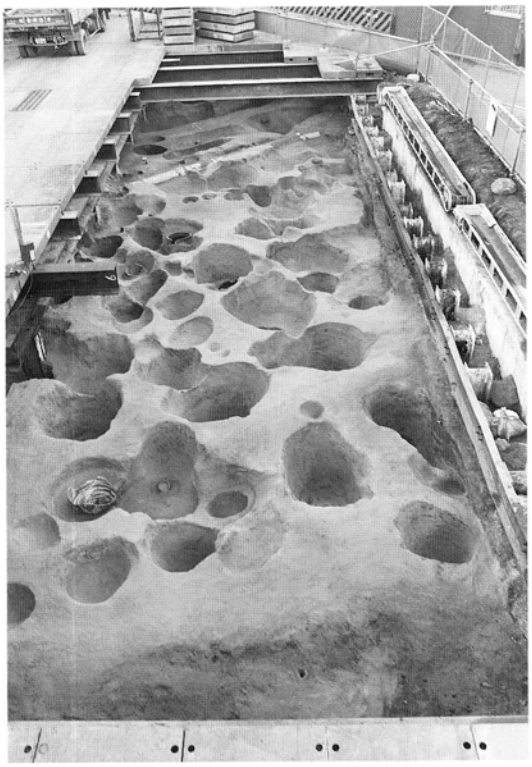
3. 10ブロック
上部遺構
(北から)

1. 10ブロック
下部遺構全景
(北から)

2. 10ブロック
下部遺構
(南から)

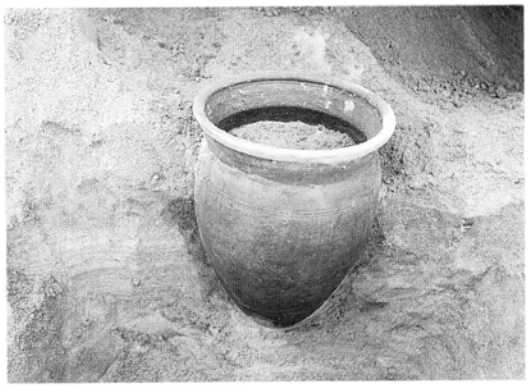
3. 10ブロック
下部遺構
(南から)

1. 11ブロック全景（南から）

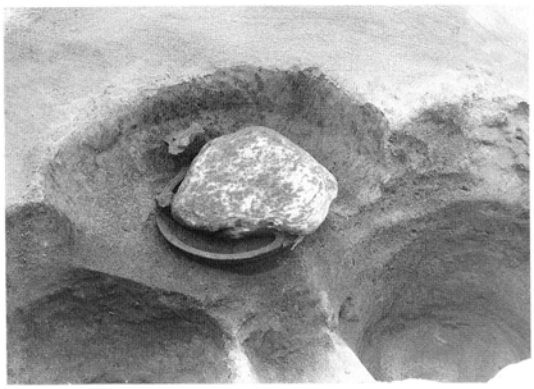


2. 11ブロック全景（南から）

3



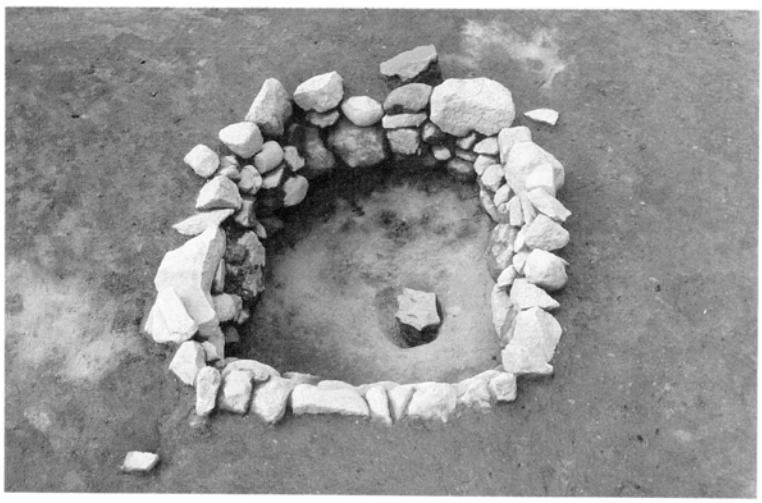
4



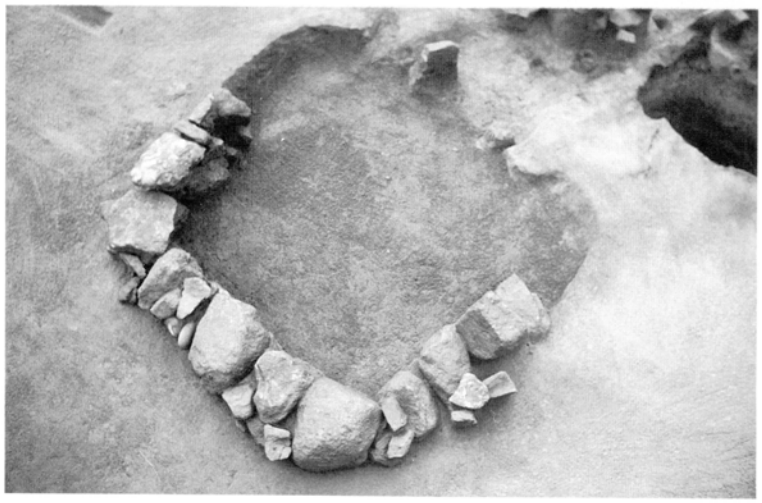
5

6

1. 10ブロック
SX02遺物出土状況
（南から）



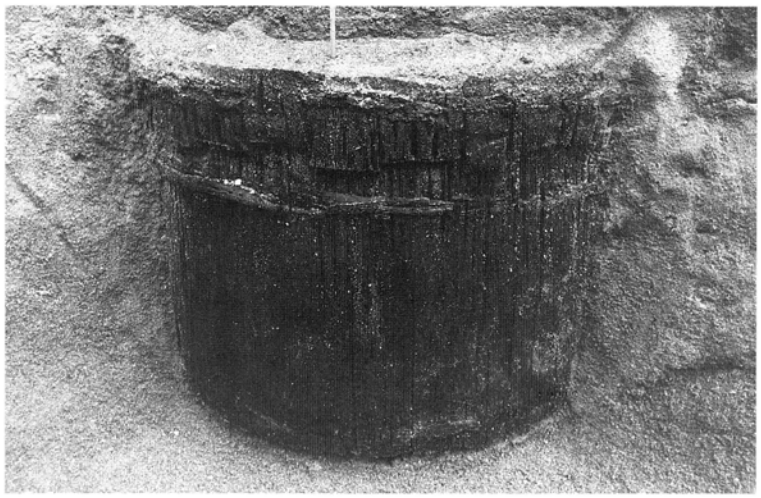
2. 10ブロック
SX02完掘後
（東から）



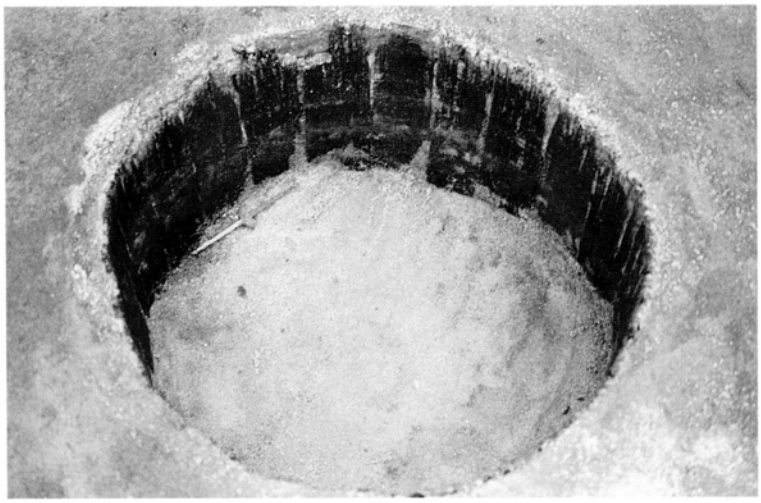
3. 12ブロック
SX07
（北から）

1. 11ブロック
井戸群
（西から）

2. 11ブロック
SE30
（西から）



3. 11ブロック
SE33
（西から）



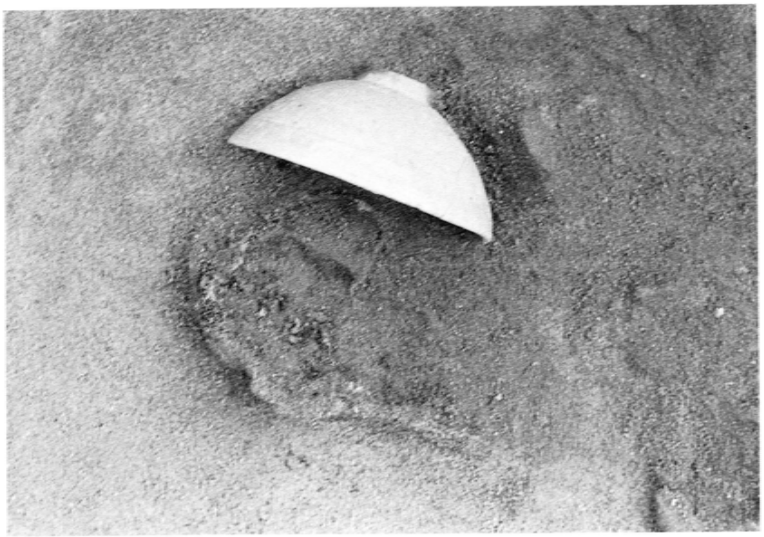
1. 11ブロック
SE3
(西から)

2. 11ブロック
SE37
(西から)

3. 11ブロック
SE39
(東から)

1. 9ブロック SD13（東から）

2. 9ブロック SD13 遺物出土状況（東から）

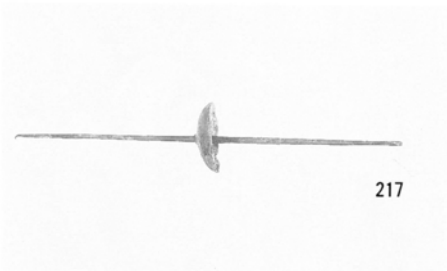


3. 10ブロック SK203（北から）

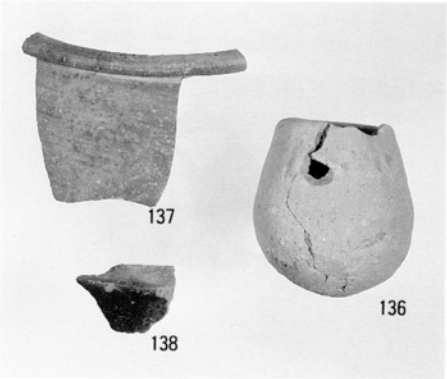
4. 12ブロック SK305（西から）

8342

1) SE 04

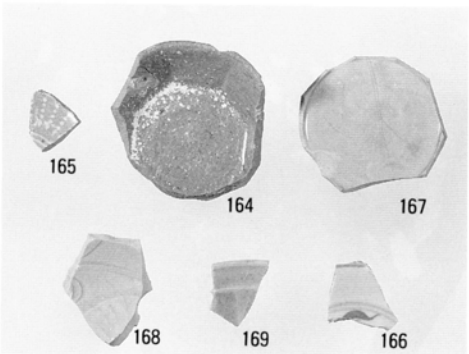


2) SE 12

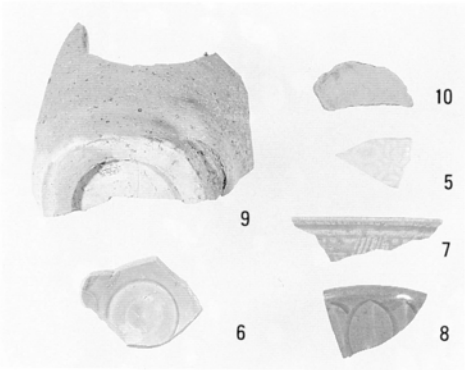


3) SE 14

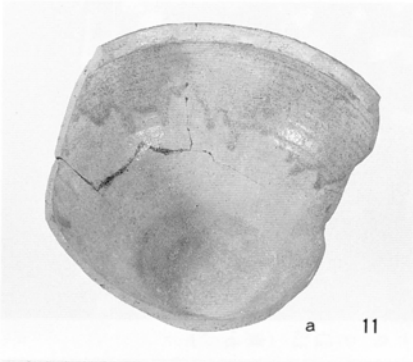
4) SE 18



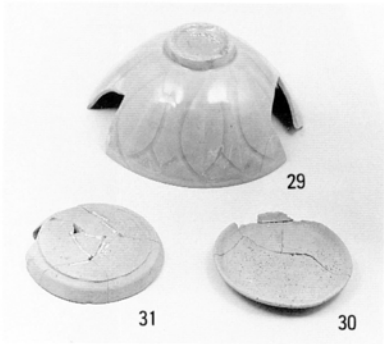
5) SK 07



6) SK 08



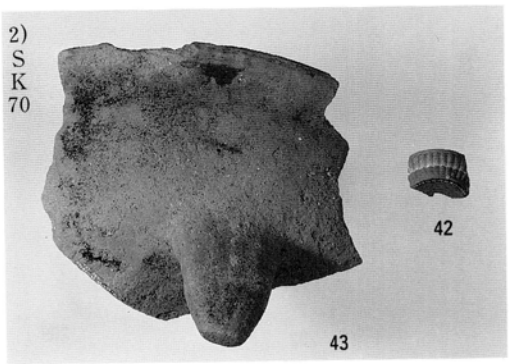
7) SK 30



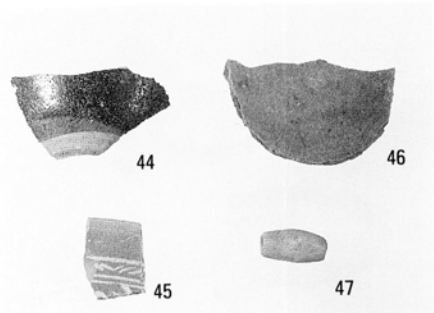
8342

1) SK 203

2) SK 70

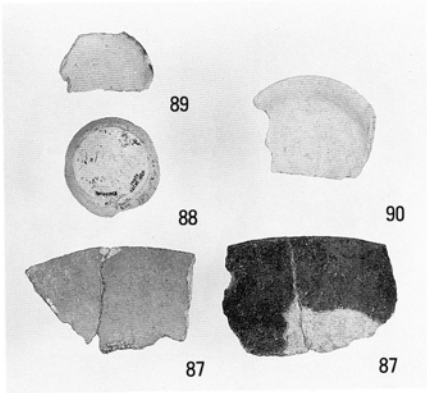


3) SK 80・83・84・85

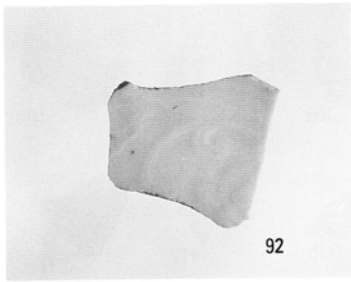


4) SK 266

5) SK 297

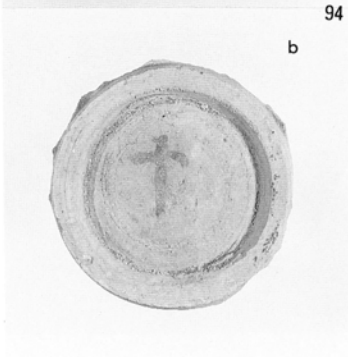


6) SK 303



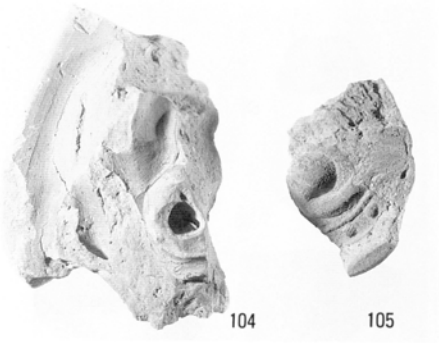
7) SK 315

94

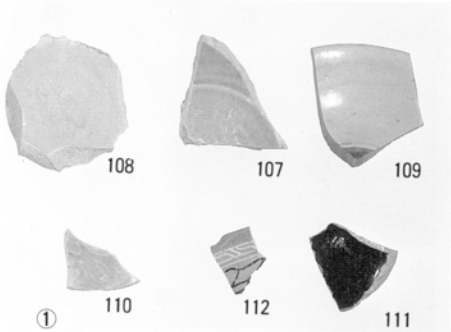


8342

1) SD 12



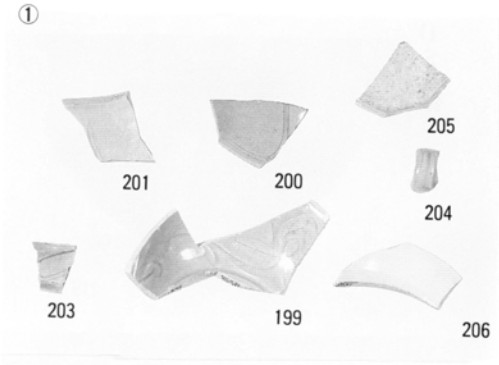
2) SD 13



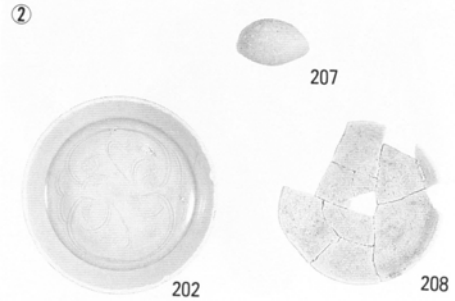
①

①

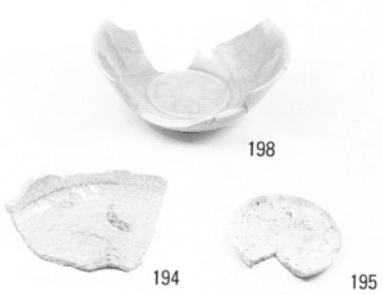
3) SX 01



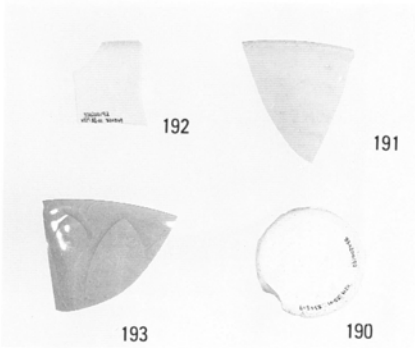
②



4) SS 02



5) SS 01

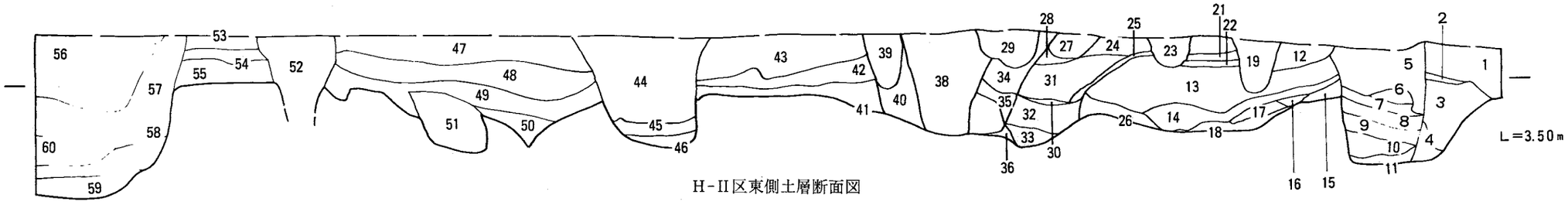


高速鉄道関係埋蔵文化財報告Ⅶ
博　　多

昭和63年３月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10-29

印　刷　秀巧社印刷株式会社
〒815 福岡市南区向野2丁目13-29



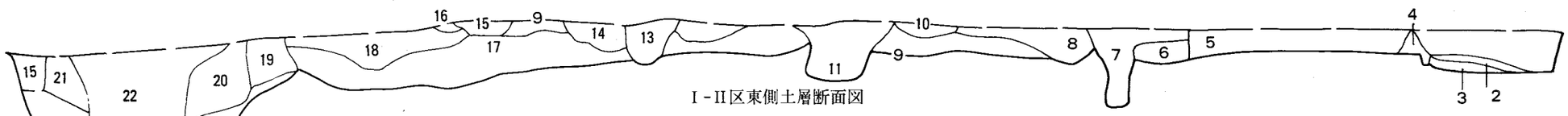
H-II区東側土層断面図

46 黄褐色砂層 砂層 粘なし
47 茶褐色 粘有 砂層 土器片 カーボン層有
48 茶褐色 粘なし 粒細 砂層
49 褐色 粒細 粘なし 砂層
50 褐色 粒細 粘なし 砂層
51 黒褐色砂層 粒細 粘なし
52 灰白色砂層 粘有 粒細 土器片有
53 茶褐色 粘有 粒細 砂層
54 茶褐色 粘有 粒細 砂層 土器片有
55 茶褐色砂層 粘有 砂細
56 褐色砂層 粒細 粘有
57 茶褐色砂層 粘多少有 砂細 カーボン多少有
58 茶褐色 粘多少有 粒細 砂層 カーボン層有
59 褐色砂層 粒細 粘なし
60 褐色砂層 粒細 粘多少有

31 茶褐色砂層 粒細 粘なし
32 茶褐色砂層 粒細 粘なし
33 黒褐色砂層 粒細 粘有 カーボン有
34 茶褐色砂層 粒細 粘なし
35 茶褐色砂層 粒細 粘なし
36 褐色砂層 粒細 粘なし
37 茶褐色砂層 粒細 粘なし カーボン有
38 黒褐色砂層 粒細 粘なし カーボン有
39 黒褐色砂層 粒細 粘なし
40 茶褐色砂層 粒細 粘なし
41 黄褐色砂層 粒細 粘なし
42 茶褐色 砂細 粘なし 砂層
43 黒褐色砂層 粒細 粘なし カーボン有
44 黒褐色 粒細 粘有 砂層 カーボン層有
45 黄褐色土層 砂層 粘なし 砂細

16 灰褐色 粒細 粘有
17 茶褐色砂層 粘なし 粒細
18 褐色砂層 粒粗 粘なし
19 茶褐色 粒細 粘なし
20 黄褐色砂層 粒細 粘なし
21 茶褐色砂層 粒細 粘なし
22 茶褐色砂層 粘なし 粒細
23 褐色砂層 粘なし 粒細
24 褐色砂層 粒細 粘なし
25 褐色砂層 粒細 粘なし
26 褐色砂層 粒細 粘なし
27 黒褐色砂層 粒細 粘有
28 茶褐色砂層 砂細 粘なし
29 褐色砂層 粒細 粘有 土器片有
30 黒褐色砂層 粒細 粘有

1 茶褐色砂層 粒細 粘なし
2 黄褐色 砂粗 粘なし
3 茶褐色砂層 砂細 粘なし 砂層粗
4 褐色砂層 粒細 粘なし
5 茶褐色砂層 粘有 粒細 カーボン、 礫片有
6 黒褐色 粘有 砂層
7 黒褐色 粘有 砂層 カーボン層
8 灰白色砂層 粘有 粒細
9 黒褐色 粘有 砂層 カーボン有
10 茶褐色 粒細 粘土質
11 茶褐色
12 茶褐色 粒細 粘なし
13 褐色砂層 粒細 粘なし カーボン、礫片 土器片有
14 黒褐色砂層 粘土層 粒細 粘土層
15 褐色 粒細 粘有



I-II区東側土層断面図

17 黄色っぽい 茶褐色細砂層
18 うす茶褐色細砂層
19 白っぽい黄灰色砂層 粘土粒多い
20 黄色っぽい 黄灰色砂層 粘土粒含む
21 黄灰色砂層
22 黒っぽい黄灰色砂層 黒色粘土 土器片カーボンを含む
23 黄灰色砂層 小さな粘土粒を含む

9 茶褐色細砂層
10 黒褐色細砂層 カーボン含む
11 黒褐色細砂層 粘性少しあり 黒色土を含む
12 明茶褐色細砂層
13 暗褐色細砂層 粘土粒含む
14 暗褐色細砂層 土器片 カーボン多し
15 撹乱(工事)
16 暗茶褐色細砂層

1 暗褐色土層 粘性有 粒子細 多くカーボン粒を含む
2 褐色細砂層 粒子細 粘性なし
3 灰褐色細砂層 縞あり
4 茶褐色細砂層 土器片含む
5 暗い灰褐色土層 粘性あり 土器、カーボン等を含む
6 やや暗い茶褐色細砂層 鉄分を含む
7 暗茶褐色細砂層 粘性少し カーボン多い
8 黒っぽい茶褐色細砂層 カーボン粒 土器片を含む

Fig.7 祇園町工区 H・I区土層断面図 (1/80)